

中 哇 遺 跡 諏 訪 西 遺 跡

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第9集 —

1986

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

中哇遺跡・諏訪西遺跡 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

頁	行	誤	正
13P	下から3行目	いるものであ。	いるものであり、
37P	下から3行目	推定口径は	推定口径は
38P	上から2行目	かなり薄い	かなり薄い
40P	下から2行目	やや白っぽい	やや白っぽい
55P	下から6行目	146は 147は	147は 148は
	下から5行目	148・149・150・	(148)削除
87P	上から11行目	7本	2本
	下から1行目	133はL.R	133はR.L
88P	上から13行目	174・175・177・178・179・181・182	174~180
	上から13行目	174・181・182	174・175・178
	上から14行目	175・177・178・179	(175)削除
	上から14行目	178は 180は	181は 182は
102P	上から6行目	入箱木ノ葉	入組木ノ葉
318P	下から10行目	特に他の	特に他の
318P	上から9行目	小な	小さな
320P	下から3行目	複数	複数

資料	群馬県埋蔵文化財 調査事業団保管	01-320
		22
NO. 61-1025	昭和61年10月16日	(5)

中 睦 遺 跡

諏 訪 西 遺 跡

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第9集 —

1986

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

関越自動車道新潟線は、昭和60年11月、全線開通の運びとなり、本県を縦断し、首都圏と新潟を結ぶ交通の動脈として多いに活用が図られることになりました。この関越自動車道新潟線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、昭和48年以来、県南の藤岡市より県北の水上町まで11年間の歳月にわたって行なわれ、地中に残された古代から現代に及ぶ人々の歴史を記録として残してまいりました。

ここに報告します中畦・諏訪西遺跡も関越自動車道にかかわる発掘調査として昭和57年度に行なわれ、中畦遺跡では先土器時代の石器、縄文時代前期、平安時代の住居跡、諏訪西遺跡では先土器時代の石器、縄文時代前期の住居跡、古墳時代井戸跡などの発見がありました。

勢多郡赤城村三原田の利根川左岸に隣接する両遺跡は、東側背後に赤城、西方には榛名の諸峰、渋川市街が一望し得る、すぐれた景勝の地にあり、また周辺地域には、滝沢石器時代住居跡、三原田住宅団地遺跡など多くの遺跡が所在することが知られています。両遺跡の発掘調査によって得られた考古資料はこの地方の歴史を理解する上で貴重なものとなりましょう。

これらの貴重な資料の活用を図るために、中畦・諏訪西遺跡の整理事業を昭和60年度から進め、ここに関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書第9集として刊行する運びとなりました。報告書の刊行に至るまでは、日本道路公団東京第二建設局高崎工事事務所、地元赤城村教育委員会、発掘調査に直接携わった方々、そして整理作業を進めていただいた方々等、多方面にわたる関係者の御協力をいただきました。ここに厚く感謝の意を表すとともに、本報告の成果が学界、教育現場、一般の人々に広く活用されることを念じ、序文といたします。

昭和61年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 清水一郎

例 言




1. 本書は関越自動車道建設工事に伴い事前調査された、勢多郡赤城村大字三原田字中畦、^{254.353-1.2.358} および大字三原田字諏訪上^{173.174.181-186}_{188.192.234-237}の甲^{359.366の乙、丙、丁}に所在する中畦遺跡・諏訪西遺跡の調査報告書である。
2. 事業主体 日本道路公団東京第二建設局
3. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
4. 調査期間
中畦遺跡 試掘調査 昭和56年8月13日～8月19日
本調査 昭和57年7月1日～9月30日
諏訪西遺跡 試掘調査 昭和56年7月20日～7月29日
本調査 昭和57年9月2日～昭和58年2月16日
(工事用道路) 試掘調査 昭和57年1月11日～昭和57年2月6日
5. 調査組織
事務担当 小林起久治、沢井良之助、井上唯雄、近藤平志、平野進一、国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のふ江、吉田恵子、並木綾子、今井もと子（群馬県埋蔵文化財調査事業団）
調査担当 真下高幸、小野和之、谷藤保彦（調査研究員）
調査参加者 荒井文枝、新井登志子、荒井貞子、荒井敬子、荒井幸子、荒井永子、飯塚クニヨ、飯塚みつ子、飯野あや子、石田弘子、井上ナミ子、岩田せつ子、岩崎尚樹、岩崎 吉、岩淵トシ、金子ひろ子、金子巳代子、金子フサ子、金子とり江、加藤政子、狩野ヒロ、狩野君江、狩野トキ枝、狩野みどり、狩野洋子、狩野吉野、木暮夏子、桑原恵美子、斉藤千香子、島原喜久枝、須田富子、佐子明子、竹之内チカ、角田はま、角田はつ江、津久井末子、津久井吉衛、都丸 草、鳥山りん子、鳥山千恵子、鳥山タケ子、永井ツル、永井希内、永井 勇、永井みつ子、永井初美、永井福治郎、永井ミサヲ、永井幸子、永井歌子、永井カホル、永井カネ、中島初江、中島修吾、南雲やすえ、長岡 泉、長岡キヨノ、長田紀美子、原田篤子、萩原富子、萩原イネ子、福島澄子、星野敏江、星野ユキノ、星野康子、星野富美子、茂木テル、宮崎時子、南沢順子、八木沢みや子、山崎光子、米山一男
6. 発掘調査後の遺物、図面の整理は昭和59年度に行ない、昭和60年度に編集した。
7. 本書作成の組織は以下の通りである。
事務担当 白石保三郎、梅沢重昭、松本浩一、上原啓己、大沢秋良、平野進一、定方隆史、国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のふ江、吉田恵子、並木綾子、今井もと子、石田智子
編 集 小野和之、谷藤保彦
本文執筆 真下高幸、小野和之、谷藤保彦、山口逸弘、小菅将史（明治大学）
なお、文責は各文章末尾に明記した。
8. 本書の作成および資料整理の担当は以下の通りである。
長沼久美子、高橋美津子、桑原恵美子、高橋とし子、高橋裕美、申渕すみ江、茂木範子、鷺見恭子、霜田恵子、関 清美、狩野君江、主代千代子、矢島三枝子、須田幸子、高橋節子

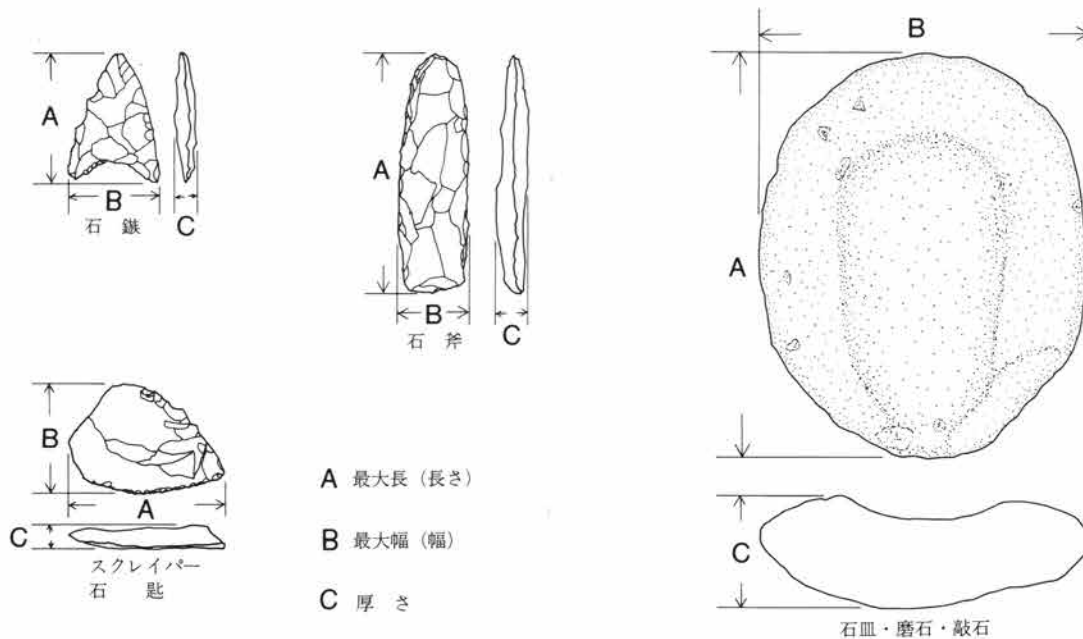
遺物写真撮影 佐藤元彦（技師）

遺物保存処理 関 邦一（技師）、宮沢健二

9. 土器の胎土分析は花岡紘一氏（群馬県工業試験場）、石材鑑定は飯島静男氏（群馬地質学協会員）をお願いした。
10. 調査、整理に当っては次の方々に御協力、御教示を頂いた。記して感謝いたします。（敬称略）
茂木允視、都丸 肇、山田八重子、田子和夫（赤城村教育委員会）、須田武雄、鳥山庸一（赤城村歴史資料館）、新井和之、新井房夫、麻生 優、安西正人、安蒜政雄、大江正行、岡村道雄、小田静夫、加藤 稔、小島純一、坂爪久純、渋谷昌彦、鈴木忠司、戸田哲也、中東耕志、西川 孝、前原 豊、山田昌久
11. 出土遺物は現在群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

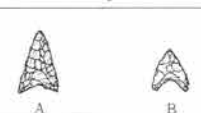





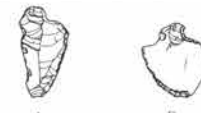



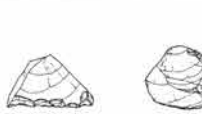


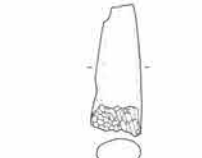

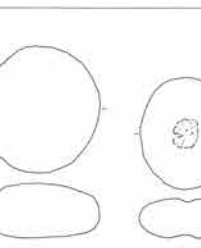


凡 例

1. 遺跡実測図の縮尺は住居址1/60、土壌1/40とした。先土器時代の遺構図については図中に明記した。
土器の実測図は1/2、1/3とした。
石器の実測図は1/1、1/3、1/4とした。その他のものは図中に示した。
2. 挿図中の方位は、座標北を示す。
3. 挿図中のスクリーントーンは次のことを表わす。なお、図中に表示したものはこの限りではない。
遺構図  は地山を、 は灰、焼土を表わす。
土 器  は繊維土器を表わす。
4. 写真図版の縮尺は土器1/3、石器1/1、1/3、1/4である。遺構については、任意である。
5. 本書の記述は、調査時に付した遺構番号を使用した。なお中哇遺跡52号土壌、諏訪西遺跡6号住居址は欠番とした。
6. 先土器時代の石器計測表の中で「整理番号」とは、遺物実測図中に使用した個々の遺物番号を意味している。
7. 住居址遺物出土状態の図中●印は土器、○印は石器を表わす。
8. 石器の計測については下図のような基準で行なった。



石器計測部位

9. 縄文時代の石器については次図のような分類基準で表中に記した。
石 鏃 I、袂を持つもの。Aは袂が三角形となる。Bは袂がやや丸みを持つ。
II、袂がほとんど三角形となる。Aは平基となるもの。Bは凹基となるもの。
III、有茎のもの。

	I	II	III
石 鏃			
打製石斧			
石 匙			
スクレイパー			
磨製石斧			
磨石・凹石・敲石			

打製石斧

- I 短円形を呈すもの。
Aは細身で側縁がほぼ平行となる
Bは刃部がやや広がる
- II 揆形を呈すもの。
Aは刃が直線に近くなる
Bは刃が丸く凸刃となる
- III 分銅形を呈すもの。

石 匙

- I 縦形を呈すもの。
Aは身が縦長でつまみ部が片寄って付く
Bは刃部が幅広で丸みを持つ
- II 横形を呈すもの。
Aは三角形を呈しつまみ部が片寄って付く
Bはつまみ部がほぼ中央に付く
- III 不定形を呈し、刃部、つまみ部の位置も一定でない。

スクレイパー

- I 縦長で、刃部を二辺以上に持つ。
II 横長で、刃部を下辺に持つ。
A刃部が直線的となる
B刃部が丸みを持つ



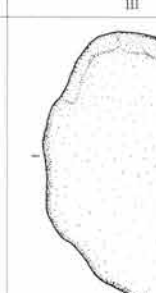



- III 不定形のもの、刃部が凹みを持つものが多い。

磨製石斧

- I 幅広で蛤刃を呈すもの。
II 乳棒状を呈すもの。
III 定角式となるもの。

磨石、凹石、敲石

- I 丸く偏平な石を用いたもの。
Aは表面に凹みを持たない
Bは凹みを両面ないし片面に持つ
- II 長円形の石を用いたもの。

	I	II	III
石 皿			
			

石器分類模式図

Aは凹み、磨痕を持つ。Bは凹みは少なく端部、側縁に打痕を持つ。III 端部に打撃による使用痕が顕著。

石 皿

- I 使用面が深く凹むもの。 II 使用面が僅かに凹むもの。 III 使用面がほぼ平坦なもの。

目 次

序
例 言
凡 例

第 I 章	発掘調査の経過	1
第 1 節	調査に至る経過	1
第 2 節	本調査の経過	2
第 II 章	立地と周辺の遺跡	6
第 III 章	調査の方法	11
第 IV 章	基本土層	13
第 V 章	中畦遺跡	17
第 1 節	遺跡の概要	17
第 2 節	先土器時代	18
第 3 節	縄文時代	29
第 4 節	平安時代以降	118
第 VI 章	諏訪西遺跡	127
第 1 節	遺跡の概要	127
第 2 節	先土器時代	128
第 3 節	縄文時代	177
第 4 節	弥生・古墳時代以降	286
第 5 節	諏訪西工事中用道路の調査	289
第 6 節	古墳時代の遺構と遺物	308
第 VII 章	ま と め	311
第 1 節	先土器時代	311
第 2 節	縄文時代	314
結 び		326

挿図目次

第 1 図	中畦遺跡地形図 (1/2000) ……………	2	第 56 図	土壌分類模式図 ……………	70
第 2 図	諏訪西遺跡 (工事用道路) 地形図 (1/2000) ……………	4	第 57 図	土 壤 (1) (1/40) ……………	72
第 3 図	周辺の遺跡 (1) (1/50000) ……………	6	第 58 図	土 壤 (2) (1/40) ……………	73
第 4 図	周辺の遺跡 (2) (1/15000) ……………	9	第 59 図	土 壤 (3) (1/40) ……………	74
第 5 図	中畦遺跡グリッド図 (1/2000) ……………	11	第 60 図	土 壤 (4) (1/40) ……………	75
第 6 図	諏訪西遺跡 (工事用道路) グリッド図 (1/2000) ……………	12	第 61 図	土 壤 (5) (1/40) ……………	76
第 7 図	中畦・諏訪西遺跡土層基本柱状模式図 ……………	13	第 62 図	土 壤 (6) (1/40) ……………	77
中 畦 遺 跡			第 63 図	土 壤 (7) (1/40) ……………	78
第 8 図	中畦遺跡全体図 (1/1000) ……………	17	第 64 図	中畦遺跡土壌時期別分類図 (1/400) ……………	81
第 9 図	先土器時代調査全体図 (1/600) ……………	19	第 65 図	1・3・4・12・13・14・15・16・17号土壌出土土器 (1/3) ……………	84
第 10 図	試堀トレンチ土層断面図 (1/60) ……………	20	第 66 図	19・20・21・22号土壌出土土器 (1/3) ……………	85
第 11 図	遺物平面垂直分布図及び断面図 (1/60) ……………	折込み	第 67 図	23・24・26・27・28・29号土壌出土土器 (1/3) ……………	86
第 12 図	ナイフ形石器、2次加工を有する石器・剥片・敲石 台石 (1/2・1/3) ……………	21	第 68 図	29・30・31・32号土壌出土土器 (1/3) ……………	89
第 13 図	接合資料 (石核) (1/2) ……………	23	第 69 図	33・34号土壌出土土器 (1/3) ……………	90
第 14 図	接合資料 (剥片) (1/2) ……………	24	第 70 図	34・35・36・40号土壌出土土器 (1/3) ……………	91
第 15 図	接合資料 (剥片) (1/2) ……………	25	第 71 図	44・46・47・49・51号土壌出土土器 (1/3) ……………	92
第 16 図	接合資料 (1/2) ……………	折込み	第 72 図	52・53・56・57号土壌出土土器 (1/3) ……………	94
第 17 図	石器組成及び石器接合図 (1/60) ……………	27	第 73 図	58・59・61号土壌出土土器 (1/3) ……………	95
第 18 図	中畦遺跡全体図 (1/800) ……………	29	第 74 図	遺構外出土土器(1) (1/3) ……………	97
第 19 図	3号住居址 (1/60) ……………	30	第 75 図	遺構外出土土器(2) (1/3) ……………	98
第 20 図	3号住居埋燬炉 (1/30) ……………	31	第 76 図	遺構外出土土器(3) (1/3) ……………	99
第 21 図	3号住居址遺物出土状態 (1/60) ……………	32	第 77 図	遺構外出土土器(4) (1/3) ……………	100
第 22 図	3号住居址出土土器 (1) (1/3) ……………	33	第 78 図	遺構外出土土器(5) (1/3) ……………	101
第 23 図	3号住居址出土土器 (2) (1/3) ……………	34	第 79 図	遺構外出土土器(6) (1/3) ……………	103
第 24 図	3号住居址出土土器 (3) (1/3) ……………	35	第 80 図	遺構外出土土器(7) (1/3) ……………	104
第 25 図	3号住居址出土土器 (4) (1/3) ……………	36	第 81 図	3号住居址出土石器 (1) (1/3) ……………	107
第 26 図	3号住居址出土土器 (5) (1/3) ……………	37	第 82 図	3号住居址出土石器 (2) (1/3) ……………	108
第 27 図	4号住居址 (1/60) ……………	39	第 83 図	4号住居址出土石器 (1/1・1/3) ……………	109
第 28 図	4号住居址遺物出土状態 (1/60) ……………	40	第 84 図	5号住居址出土石器 (1/3・1/4) ……………	110
第 29 図	4号住居埋燬炉 (1/30) ……………	40	第 85 図	6号住居址出土石器 (1/3) ……………	111
第 30 図	4号住居址出土土器 (1) (1/3) ……………	41	第 86 図	7号住居址出土石器 (1) (1/1・1/3) ……………	112
第 31 図	4号住居址出土土器 (2) (1/3) ……………	43	第 87 図	7号住居址出土石器 (2) (1/3) ……………	113
第 32 図	5号住居址 (1/60) ……………	44	第 88 図	4・14・15・17・27・29・30・32・34号土壌出土 石器 (1/3) ……………	114
第 33 図	5号住居址遺物出土状態 (1/60) ……………	45	第 89 図	34・51・53号土壌出土石器 (1/1・1/3・1/4) ……………	115
第 34 図	5号住居址出土土器 (1) (1/3) ……………	46	第 90 図	遺構外出土石器(1) (1/1・1/3) ……………	116
第 35 図	5号住居址出土土器 (2) (1/3) ……………	47	第 91 図	遺構外出土石器(2) (1/3) ……………	117
第 36 図	5号住居址出土土器 (3) (1/3) ……………	48	第 92 図	1号住居址 (1/60) ……………	119
第 37 図	5号住居址出土土器 (4) (1/3) ……………	49	第 93 図	1号住居カマド (1/30) ……………	119
第 38 図	6号住居址 (1/60) ……………	51	第 94 図	1号住居址出土土器・銭貨 (1/1・1/3) ……………	120
第 39 図	6号住居址遺物出土状態 (1/60) ……………	52	第 95 図	2号住居址 (1/60) ……………	122
第 40 図	6号住居埋燬炉 (1/30) ……………	52	第 96 図	2号住居址出土土器 (1/3) ……………	122
第 41 図	6号住居址出土土器 (1) (1/3) ……………	53	第 97 図	1号溝 (1/400・1/40) ……………	123
第 42 図	6号住居址出土土器 (2) (1/3) ……………	54	第 98 図	遺構外出土青磁 (1/2) ……………	124
第 43 図	6号住居址出土土器 (3) (1/3) ……………	56	諏訪西遺跡		
第 44 図	6号住居址出土土器 (4) (1/3) ……………	57	第 99 図	試堀トレンチ土層断面図 (1/120) ……………	129
第 45 図	7号住居址 (1/60) ……………	58	第100図	先土器時代調査区全体図 (1/600) ……………	130
第 46 図	7号住居址遺物出土状態 (1/60) ……………	59	第101図	ナイフ形石器・彫器・錐器 (1/1) ……………	133
第 47 図	7号住居址出土土器 (1) (1/3) ……………	61	第102図	スクレイパー (1/1) ……………	134
第 48 図	7号住居址出土土器 (2) (1/3) ……………	62	第103図	スクレイパー、2次加工痕を有する剥片 (1/1) ……………	135
第 49 図	7号住居址出土土器 (3) (1/3) ……………	64	第104図	スクレイパー、2次加工痕、使用痕を有する剥片 (1/1) ……………	136
第 50 図	7号住居址出土土器 (4) (1/3) ……………	65	第105図	2次加工痕・使用痕を有する剥片 (1/1) ……………	137
第 51 図	7号住居址出土土器 (5) (1/3) ……………	66	第106図	使用痕を有する剥片 (1/1) ……………	138
第 52 図	8号住居址 (1/60) ……………	67	第107図	石 核 (1/1) ……………	折込み
第 53 図	8号住居址遺物出土状態 (1/60) ……………	68	第108図	石 核 (1/1) ……………	折込み
第 54 図	8号住居址出土土器 (1/3) ……………	68	第109図	石 核 (1/1) ……………	折込み
第 55 図	中畦遺跡土壌全体図 (1/400) ……………	69			

第110図	石核 (1/1).....折込み	
第111図	剥片 (1/2).....139	
第112図	剥片 (1/2).....140	
第113図	接合資料 (1/2).....141	
第114図	接合資料 (1/2).....142	
第115図	接合資料 (1/2).....143	
第116図	接合資料 (1/2).....144	
第117図	接合資料 (1/2).....145	
第118図	接合資料 (1/2).....146	
第119図	接合資料 (1/2).....折込み	
第120図	接合資料 (1/2).....147	
第121図	接合資料 (1/2).....148	
第122図	接合資料 (1/2).....149	
第123図	接合資料 (1/2).....150	
第124図	接合資料 (1/2).....折込み	
第125図	敲石・磨石 (1/3).....151	
第126図	敲石 (1/3).....152	
第127図	敲石 (1/3).....153	
第128図	敲石 (1/3).....154	
第129図	ブロック(石器集中箇所)範囲図 (1/300).....156	
第130図	第1ブロック石器組成及び垂直分布図 (1/40).....158	
第131図	第2ブロック石器組成及び垂直分布図 (1/40).....159	
第132図	第3・4ブロック石器組成及び垂直分布図 (1/40).....162	
第133図	第5・6ブロック石器組成及び垂直分布図 (1/40).....163	
第134図	第7ブロック石器組成及び垂直分布図 (1/40).....165	
第135図	風倒木痕 (1/60).....167	
第136図	石材別石器割合図.....169	
第137図	石材別割合図.....169	
第138図	諏訪西遺跡全体図 (1/800).....177	
第139図	1号住居址 (1/60).....179	
第140図	1号住居址遺物出土状態 (1/60).....180	
第141図	1号住居址 (1/30).....180	
第142図	1号住居址出土石器 (1) (1/3).....181	
第143図	1号住居址出土石器 (2) (1/3).....182	
第144図	2号住居址 (1/60).....183	
第145図	2号住居址遺物出土状態 (1/60).....184	
第146図	2号住居址出土石器 (1/3).....185	
第147図	3号住居址 (1/60).....186	
第148図	3号住居址 (1/30).....187	
第149図	3号住居址遺物出土状態 (1/60).....187	
第150図	3号住居址出土石器 (1/3).....188	
第151図	4号住居址 (1/60).....189	
第152図	4号住居址 (1/30).....189	
第153図	4号住居址遺物出土状態 (1/60).....190	
第154図	4号住居址出土石器 (1/3).....191	
第155図	5号住居址 (1/60).....192	
第156図	5号住居址 (1/30).....193	
第157図	5号住居址遺物出土状態 (1/60).....193	
第158図	5号住居址出土石器 (1/3).....194	
第159図	7号住居址 (1/60).....195	
第160図	7号住居址遺物出土状態 (1/60).....196	
第161図	7号住居址 (1/30).....196	
第162図	7号住居址出土石器 (1/3).....197	
第163図	8号住居址 (1/60).....198	
第164図	8号住居址遺物出土状態 (1/60).....199	
第165図	8号住居址 (1/30).....199	
第166図	8号住居址出土石器 (1) (1/3).....200	
第167図	8号住居址出土石器 (2) (1/3).....201	
第168図	9号住居址 (1/60).....202	
第169図	9号住居址遺物出土状態 (1/60).....203	
第170図	9号住居址出土石器 (1/3).....204	
第171図	10号住居址 (1/60).....205	

第172図	10号住居址遺物出土状態 (1/60).....206	
第173図	10号住居址 (1/30).....206	
第174図	10号住居址出土石器 (1) (1/3).....207	
第175図	10号住居址出土石器 (2) (1/3).....208	
第176図	11号住居址 (1/60).....209	
第177図	11号住居址 (1/30).....210	
第178図	11号住居址遺物出土状態 (1/60).....211	
第179図	11号住居址出土石器 (1) (1/3).....212	
第180図	11号住居址出土石器 (2) (1/3).....213	
第181図	12号住居址 (1/60).....214	
第182図	12号住居址 (1/30).....215	
第183図	12号住居址遺物出土状態 (1/60).....215	
第184図	12号住居址出土石器 (1/3).....216	
第185図	13号住居址 (1/60).....216	
第186図	13号住居址 (1/30).....217	
第187図	13号住居址遺物出土状態 (1/60).....217	
第188図	13号住居址出土石器 (1) (1/3).....218	
第189図	13号住居址出土石器 (2) (1/3).....219	
第190図	土壌分類図 (1/600).....220	
第191図	土壌 (1) (1/40).....221	
第192図	土壌 (2) (1/40).....222	
第193図	土壌 (3) (1/40).....224	
第194図	土壌 (4) (1/40).....225	
第195図	土壌 (5) (1/40).....227	
第196図	土壌 (6) (1/40).....228	
第197図	土壌 (7) (1/40).....230	
第198図	土壌 (8) (1/40).....231	
第199図	土壌 (9) (1/40).....232	
第200図	土壌 (10) (1/40).....233	
第201図	土壌 (11) (1/40).....234	
第202図	1・2・3号土壌出土石器 (1/3).....237	
第203図	3・5・6号土壌出土石器 (1/3).....238	
第204図	7・8・9・12・14号土壌出土石器 (1/3).....239	
第205図	15・16・17・18号土壌出土石器 (1/3).....241	
第206図	18・19・24・27・29・30・31号土壌出土石器 (1/3).....243	
第207図	33・34・37・39・41・43・46・48・49号土壌出土 石器 (1/3).....244	
第208図	50号土壌出土石器 (1/3).....246	
第209図	50・51・53・56・60・61号土壌出土石器 (1/3).....247	
第210図	61・62・68・69・70・71・72号土壌出土石器 (1/3).....249	
第211図	73・75・76・77号土壌出土石器 (1/3).....250	
第212図	遺構外出土石器(1) (1/2).....252	
第213図	遺構外出土石器(2) (1/2).....253	
第214図	遺構外出土石器(3) (1/2).....254	
第215図	遺構外出土石器(4) (1/3).....256	
第216図	遺構外出土石器(5) (1/3).....257	
第217図	遺構外出土石器(6) (1/3).....258	
第218図	1号住居址出土石器 (1/1・1/3・1/4).....260	
第219図	2号住居址出土石器 (1) (1/1・1/3).....261	
第220図	2号住居址出土石器 (2) (1/3・1/4).....262	
第221図	3号住居址出土石器 (1/3・1/4).....263	
第222図	4号住居址出土石器 (1/1・1/3).....264	
第223図	5号住居址出土石器 (1) (1/3).....265	
第224図	5号住居址出土石器 (2) (1/3・1/4).....266	
第225図	7号住居址出土石器 (1/3・1/4).....267	
第226図	8号住居址出土石器 (1/1・1/3・1/4).....268	
第227図	9号住居址出土石器 (1/3・1/4).....269	
第228図	10号住居址出土石器 (1) (1/1・1/3).....270	
第229図	10号住居址出土石器 (2) (1/3・1/4).....271	
第230図	11号住居址出土石器 (1) (1/1・1/3).....272	
第231図	11号住居址出土石器 (2) (1/3・1/4).....273	
第232図	11・12号住居址出土石器 (3) (1/1・1/3・1/4).....274	

第233図	13号住居址出土石器 (1/1・1/3・1/4) ……………	275
第234図	1・2・3・5・7・9・15・18・27号土壙出土 石器 (1/1・1/3・1/4) ……………	276
第235図	28・30・31・40・50・51・56・61号土壙出土石器 (1/1・1/3) ……………	277
第236図	68・69・70・73・74・77・79号土壙出土石器 (1/1・1/3) ……	278
第237図	遺構外出土石器(1) (1/1・1/3) ……………	279
第238図	遺構外出土石器(2) (1/3) ……………	280
第239図	遺構外出土石器(3) (1/3・1/4) ……………	281
第240図	井戸 (1) (1/40) ……………	286
第241図	井戸 (2) (1/40) ……………	287
第242図	古墳時代の遺物 (1/3) ……………	288

諏訪西 工事用道路

第243図	工事用道路全体図 (1/1500) ……………	289
第244図	土壙 (1) (1/40) ……………	290
第245図	土壙 (2) (1/40) ……………	291
第246図	1・2・4・5・6・7・8号土壙出土石器 (1/3) ……	293
第247図	B区出土石器(1) (1/3) ……………	294

第248図	B区出土石器(2) (1/3) ……………	295
第249図	B区出土石器(3) (1/3) ……………	297
第250図	B区出土石器(4) (1/3) ……………	298
第251図	B区出土石器(5) (1/3) ……………	300
第252図	B区出土石器(6) (1/3) ……………	301
第253図	B区出土石器(7) (1/3) ……………	302
第254図	B区出土石器(8) (1/3) ……………	303
第255図	1・6・8号土壙出土石器 (1/3) ……………	304
第256図	B区出土石器(1) (1/1・1/3) ……………	305
第257図	B区出土石器(2) (1/3・1/4) ……………	306
第258図	1号住居址 (1/60) ……………	308
第259図	1号住居址出土石器・石器 (1/3) ……………	309

ま と め

第260図	胎土分析資料 (1/3) ……………	314
第261図	胎土分析相関図 ……………	316
第262図	住居址面積・主軸方位 ……………	317
第263図	住居址変遷図 ……………	319
第264図	分類模式図・文様変遷及び編年案 ……………	325

表 目 次

中 畦 遺 跡

表 1	周辺の遺跡一覧表 (1) ……………	7
表 2	周辺の遺跡一覧表 (2) ……………	10
表 3	石器計測表 ……………	26
表 4	土壙一覧表 ……………	70
表 5	3号住居址出土石器観察表 ……………	108
表 6	4号住居址出土石器観察表 ……………	108
表 7	5号住居址出土石器観察表 ……………	110
表 8	6号住居址出土石器観察表 ……………	110
表 9	7号住居址出土石器観察表 ……………	113
表 10	土壙出土石器観察表 ……………	114
表 11	遺構外出土石器観察表 ……………	118
表 12	1号住居址出土石器観察表 ……………	121
表 13	2号住居址出土石器観察表 ……………	123
表 14	遺構外出土青磁観察表 ……………	124

諏訪西遺跡 (工事用道路)

表 15	第1ブロック出土遺物の石材別表 ……………	157
表 16	第2ブロック出土遺物の石材別表 ……………	160
表 17	第3ブロック出土遺物の石材別表 ……………	161
表 18	第4ブロック出土遺物の石材別表 ……………	161
表 19	第5ブロック出土遺物の石材別表 ……………	164
表 20	第7ブロック出土遺物の石材別表 ……………	164
表 21	各ブロック石器組成表 ……………	166
表 22	出土遺物の石材別表 ……………	169
表 23	石器計測表 ……………	170
表 24	土壙一覧表 ……………	223
表 25	石器観察表 ……………	282
表 26	土壙一覧表 ……………	291
表 27	土壙出土石器観察表 ……………	304
表 28	B区出土石器観察表 ……………	306
表 29	1号住居址出土遺物観察表 ……………	309

ま と め

表 30	胎土分析資料観察表 ……………	315
表 31	黒坂禎二氏による各説比較表 ……………	324

写真図版目次

中畦遺跡

- 図版 1 中畦遺跡遠景
- 図版 2 先土器時代調査区全景
- 図版 3 先土器時代調査区セクション・遺物出土状態
- 図版 4 先土器時代遺物出土状態全景
- 図版 5 先土器時代遺物出土状態
- 図版 6 先土器時代出土遺物
- 図版 7 先土器時代接合資料
- 図版 8 先土器時代出土遺物
- 図版 9 先土器時代接合資料
- 図版 10 先土器時代接合資料
- 図版 11 3号住居址
- 図版 12 4号住居址
- 図版 13 5号住居址
- 図版 14 6号住居址
- 図版 15 7号住居址
- 図版 16 8号住居址
- 図版 17 1～10号土壙
- 図版 18 11～17号土壙
- 図版 19 18～25号土壙
- 図版 20 25～33号土壙
- 図版 21 34～42号土壙
- 図版 22 43～52号土壙
- 図版 23 54～61号土壙
- 図版 24 3号住居址出土土器
- 図版 25 3号住居址出土土器
- 図版 26 3・4号住居址出土土器
- 図版 27 4・5号住居址出土土器
- 図版 28 5号住居址出土土器
- 図版 29 5・6号住居址出土土器
- 図版 30 6号住居址出土土器
- 図版 31 6・7号住居址出土土器
- 図版 32 7号住居址出土土器
- 図版 33 7号住居址出土土器
- 図版 34 7・8号住居址出土土器
- 図版 35 1～22号土壙出土土器
- 図版 36 21・23～29号土壙出土土器
- 図版 37 30～34号土壙出土土器
- 図版 38 34～47号土壙出土土器
- 図版 39 49～61号土壙出土土器
- 図版 40 遺構外出土土器
- 図版 41 遺構外出土土器
- 図版 42 遺構外出土土器
- 図版 43 遺構外出土土器・青磁
- 図版 44 3・4号住居址出土土器
- 図版 45 4・5・6号住居址出土土器
- 図版 46 6・7号住居址出土土器
- 図版 47 7号住居址・4～32号土壙出土土器
- 図版 48 遺構外出土土器
- 図版 49 1・2号住居址全景・出土土器・銭貨

諏訪西遺跡

- 図版 50 諏訪西遺跡全景（航空写真）
- 図版 51 先土器時代試掘Jトレンチ遺物出土状態・調査区全景
- 図版 52 先土器時代調査区全景
- 図版 53 先土器時代調査区北・東・西壁セクション

- 図版 54 先土器時代第1ブロック遺物出土状態
- 図版 55 先土器時代第2ブロック遺物出土状態
- 図版 56 先土器時代第2・3ブロック遺物出土状態
- 図版 57 先土器時代第3ブロック石核・ナイフ形石器出土状態
- 図版 58 先土器時代第4・5ブロック遺物出土状態
- 図版 59 先土器時代第6・7ブロック遺物出土状態
- 図版 60 先土器時代出土遺物
- 図版 61 先土器時代出土遺物
- 図版 62 先土器時代出土遺物
- 図版 63 先土器時代接合資料No.1
- 図版 64 先土器時代接合No.2・3・4
- 図版 65 先土器時代接合No.5・6・7
- 図版 66 先土器時代接合No.8・9・10
- 図版 67 先土器時代接合No.11・12・13
- 図版 68 先土器時代接合No.14・15・16
- 図版 69 先土器時代接合No.17(1)
- 図版 70 先土器時代接合No.17(2)
- 図版 71 先土器時代接合No.18
- 図版 72 先土器時代接合No.20
- 図版 73 先土器時代接合No.21(1)
- 図版 74 先土器時代接合No.21(2)
- 図版 75 先土器時代接合No.21(3)
- 図版 76 先土器時代出土遺物
- 図版 77 先土器時代出土遺物
- 図版 78 先土器時代出土遺物
- 図版 79 1号住居址
- 図版 80 2号住居址
- 図版 81 3号住居址
- 図版 82 4号住居址
- 図版 83 5号住居址
- 図版 84 7号住居址
- 図版 85 8号住居址
- 図版 86 9号住居址
- 図版 87 10号住居址
- 図版 88 11号住居址
- 図版 89 12号住居址
- 図版 90 13号住居址
- 図版 91 1～8号土壙
- 図版 92 9～16号土壙
- 図版 93 17～23号土壙
- 図版 94 24～33号土壙
- 図版 95 34～43号土壙
- 図版 96 44～54号土壙
- 図版 97 55～62号土壙
- 図版 98 63～70号土壙
- 図版 99 71～77号土壙
- 図版100 78～82号土壙・1～3号井戸
- 図版101 1号住居址出土土器
- 図版102 2・3・4号住居址出土土器
- 図版103 4・5号住居址出土土器
- 図版104 7・8号住居址出土土器
- 図版105 8・9・10号住居址出土土器
- 図版106 10・11号住居址出土土器
- 図版107 11号住居址出土土器
- 図版108 12・13号住居址出土土器
- 図版109 1～3号土壙出土土器
- 図版110 3～15号土壙出土土器
- 図版111 16～27号土壙出土土器
- 図版112 29～50号土壙出土土器

図版113 50～62号土壙出土石器
図版114 68～77号土壙・遺構外出土石器
図版115 遺構外出土石器
図版116 遺構外出土石器
図版117 遺構外出土石器・工事用道路1～6号土壙出土石器
図版118 工事用道路7・8号土壙・B区出土石器
図版119 工事用道路B区出土石器
図版120 工事用道路B区出土石器
図版121 工事用道路B区出土石器
図版122 1・2号住居址出土石器
図版123 3・4・5号住居址出土石器
図版124 5・7号住居址出土石器

図版125 8・9・10号住居址出土石器
図版126 10・11号住居址出土石器
図版127 11・12・13号住居址出土石器
図版128 1～69号土壙出土石器
図版129 70～79号土壙・遺構外出土石器
図版130 遺構外・工事用道路土壙・B区出土石器
図版131 工事用道路B区出土石器
図版132 工事用道路A区全景・1号住居址・1号土壙
図版133 工事用道路B区土壙・土層断面・土器出土状態・5号土壙
図版134 工事用道路1号住居址出土石器・石器
図版135 中畦遺跡・諏訪西遺跡近況

付 図

付図1 諏訪西遺跡 先土器時代出土遺物分布図・土層断面図
付図2 諏訪西遺跡 先土器時代石材別接合図
付図3 中畦・諏訪西遺跡調査区全体図

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 調査に至る経過

本遺跡を含む赤城山西麓一帯は榛名山二ツ岳による火山灰(F A)、軽石(F P)により厚く覆われている。このため分布調査を実施しても遺構遺物の確認はむずかしく、遺跡の有無については付近の地形を含む環境等で判断する方法がとられた。そこで関越自動車道の供用開始時期が近づくにつれ、遺跡の有無、範囲、規模、性格等を確実に把握し、調査計画を立てるため試掘調査を行なった。

試掘の対象範囲は、利根川左岸の勢多郡北橋村から片品川左岸の利根郡昭和村地区の範囲である。しかし用地買収の関係上、勢多郡赤城村勝保沢から利根郡昭和村中棚の間は試掘の対象からはずされた。また、片品川以北の沼田、月夜野地区についてはすでに試掘調査済みであった。(註1)

今回実施した試掘対象地域は12遺跡(註2)で昭和56年5月14日、勢多郡北橋村分郷八崎(註3)から開始し、昭和56年10月27日、利根郡昭和村糸井宮前遺跡(註4)で終了した。

試掘は調査の目的をより早く、的確につかむためと試掘により破損する遺構を最少限に押えるために次の方法をとった。

すでに周知されている遺跡の全体に一辺20mの方眼を組み、1方眼に1ヶ所の割合いで幅1.5m、長さ7.5~8.5m、時には11.5mで表土を剥ぎ調査した。調査は榛名山二ツ岳の軽石上面、軽石下面、ローム面、さらにハードローム面と4段階にわたった。遺構の有無、性格をつかむことは当然なことながら、軽石降下により旧地形を一変させたため原地形の復元にも努めた。

先土器時代の確認については遺跡存在も想定されたが、試掘の段階では遺構破損の防止と期間、予算等の面から一旦中止とし、本調査の実施段階で、その成果を委ねることにした。

遺跡名	所在地	分布面積(m ²)	検出した遺構・遺物等	試掘調査期間
分郷八崎	勢多郡北橋村分郷八崎	13,000	弥生、古墳時代の住居址 縄文~古墳時代の遺物	昭和56年5月14日~5月25日
竹野原 A	勢多郡北橋村竹野原	—	遺構、遺物 なし	" 5月25日~5月29日
竹野原 B	勢多郡北橋村竹野原	—	遺構、遺物 なし	" 5月29日~6月1日
房谷戸	勢多郡北橋村房谷戸	16,000	縄文、古墳時代の住居址、中世の城址(濠)	" 6月1日~6月5日
三原田城	勢多郡赤城村三原田	6,400	縄文、古墳時代の住居址、中世の城址(濠)	" 7月16日~7月18日
三原田団地	勢多郡赤城村三原田	—	遺構、遺物 なし	" 7月13日~7月15日
三原田中畦	勢多郡赤城村三原田	5,600	縄文、平安時代の住居址等	" 8月14日~8月18日
三原田諏訪西	勢多郡赤城村三原田	7,170	縄文時代の住居址等	" 7月20日~7月29日
見立溜井	勢多郡赤城村見立	16,000	縄文~古墳時代の住居址、溝等	" 8月6日~8月12日
勝保沢中ノ山	勢多郡赤城村勝保沢	11,600	縄文時代の住居址等	" 7月30日~8月5日
中棚	利根郡昭和村中棚	4,800	縄文時代の住居址等	" 10月12日~10月14日
糸井宮前	利根郡昭和村大貫原	12,000	縄文~平安時代の住居址等	" 10月15日~10月27日

中畦遺跡は東西に延びる馬の背状の台地で、関越道はこれを真横の南北方向に断ち切る。この遺跡一帯は耕作土が深いのと、地形の性格上表土は南、北側の谷地水田に流出し、榛名山二ツ岳の純軽石層はとところどころに残っている程度であった。

遺構は東側路線際に軽石降下以降の平安時代住居址が、又西側部には軽石下に縄文時代の住居址を検出した。調査は遺構の存在を確認するにとどめ、後日の調査に委ねることとし埋め戻した。

諏訪西遺跡は中畦遺跡の北の比較的大きな台地である。本遺跡及び付近の工事に入るための工事用道路も試掘調査の対象となった。

工事用道路では横野1号線取り付け部分に古墳時代の住居址を、本線部分に向う途中の台地北斜面に縄文

時代の遺物包含層を確認した。

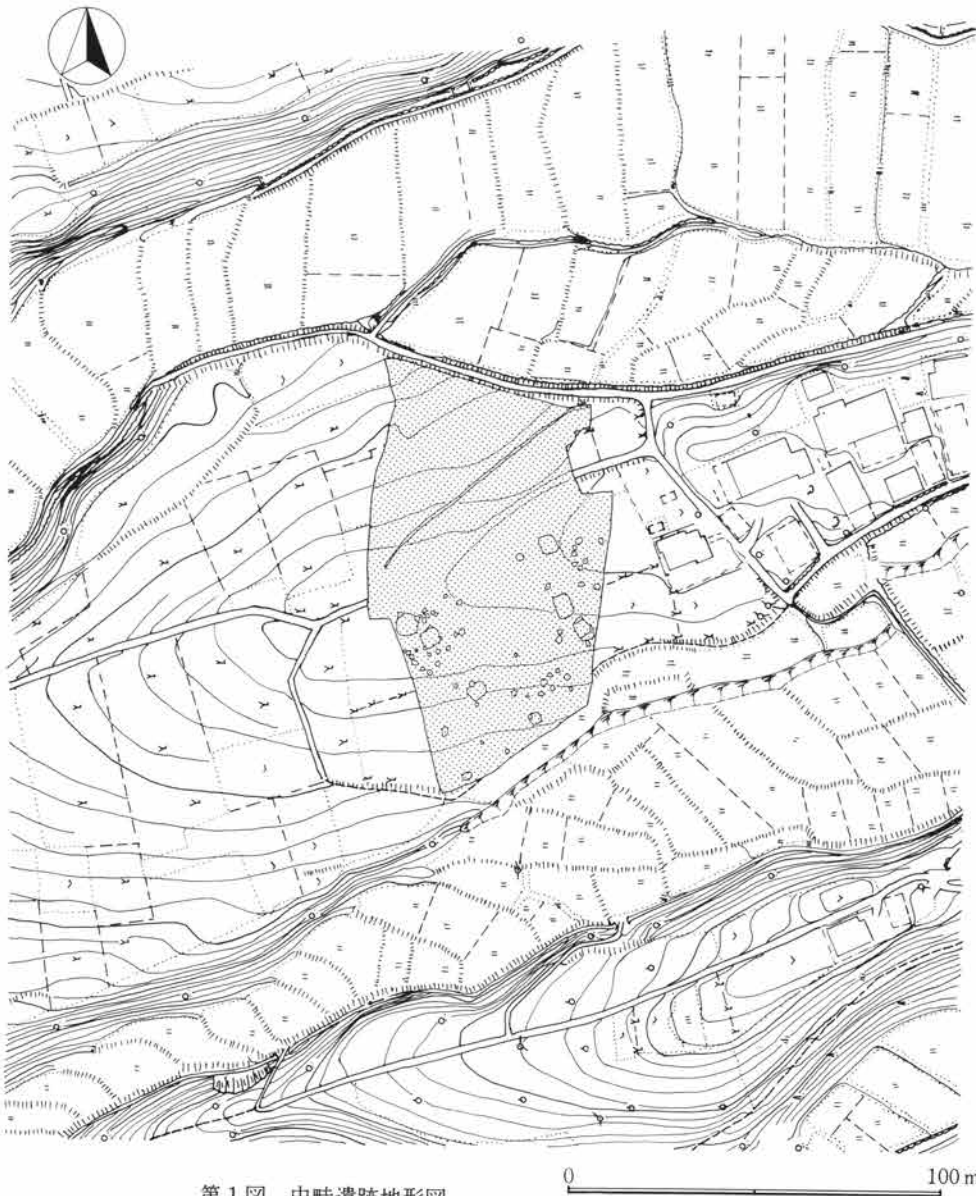
本線地域では軽石上面には遺構、遺物の確認はできなかった。しかし、軽石下面においては、台地の南斜面から台地中央部付近の平坦面までローム層を掘り込んだ縄文時代の土壌を検出した。

これら各遺跡の調査は、試掘調査全体が終了した後、工事計画との調整から昭和57年1月11日より諏訪西遺跡工事用道路から開始し、昭和57年7月1日に中畦遺跡、昭和57年9月2日に諏訪西遺跡本線部と順次全面調査に入っていた。(註5) (真下)

第2節 本調査の経過

1 中畦遺跡

調査区北側より、表土掘削を行ない、FPの残る部分についてはその上面までをめぐりに掘り下げたが、表土から浅く、純層が確認されたのは農道北側の一部にとどまった。調査区南東部で平安時代の住居址を、また北側で溝を検出した他は、FP降下後の遺構は検出されなかった。

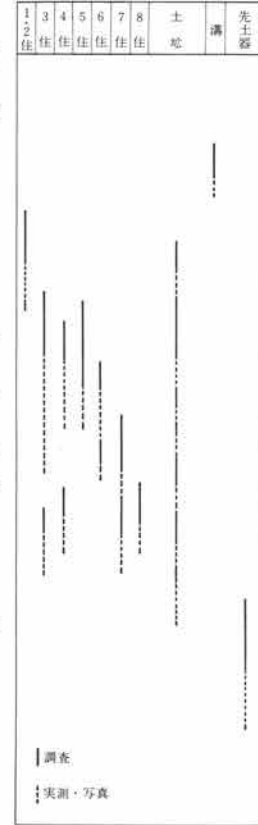


第1図 中畦遺跡地形図

縄文時代については、住居址8軒、土壇61基を検出した。何れも中央部から南側に集中して分布が見られた。先土器時代については、23号土壇より石器が出土したため、調査区南部分を中心に調査を行なった結果、石器、石片21点を検出した。

中畦遺跡調査日誌抄

- 6月8日 本日より中畦遺跡の調査開始。重機による表土除去作業を行なう。試掘結果に基づき、FP面まで下げる。
- 6月16日 遺構検出作業に入る。中央を東西に走る農道の北側より行ない、FP降下後の溝（1号溝）を検出する。並行してグリッド杭の設定を行なう。
- 6月21日 溝の平面実測、写真撮影を行なう。出土遺物はなかった。
- 7月1日 南東部にて平安時代の住居。1・2号住居址を検出、2軒の重複と確認する。表土から浅く、耕作等により遺構が荒れており、プランの検出には困難をきたした。
- 7月9日 1・2号住居址の平面実測、遺物の取り上げ、写真を終了する。第2面の確認作業に入る。
- 7月20日 住居址6軒、土壌68基を確認する。道路の南側に集中しており、北側には認められなかった。
- 7月22日 3～5号住居址の調査を開始する。
- 7月27日 3・4・5号住居址を掘り下げる。出土遺物はあまり多くはないが、3・4号住居址は埋甕炉を持つ。調査区内等高線図作成。
- 7月28日 6号住居址の調査に入る。4・5号住居址、セクション実測、写真撮影、9～14号土壌、セクション実測、21号土壌よりほぼ実形の深鉢出土。
- 8月2日 台風10号による強風のために、プレハブ倒壊。早朝より、その対応、後仕末に追われる。遺物に若干の被害があったが、幸に図面、写真類は無事であった。事業団より7名、文化財保護課より2名、見立溜井遺跡より作業員の応援を受ける。
- 8月4日 本日より作業再開始、遺構内清掃、現場内補修。調査プレハブ再建される。
- 8月17日 3～7号住居址調査続行、8号住居址調査終了。
- 8月28日 住居址調査終了。
- 8月31日 遺構全景写真、縄文時代面調査終了。先土器時代試掘調査開始、1辺2mの試掘トレンチを調査区南側を中心に設定。
- 9月3日 調査区西壁寄りにてポイント、礫、剥片等出土。
- 9月8日 先土器時代調査、遺物出土状態写真撮影、遺物取り上げ、試掘グリッドのセクション実測、写真。
- 9月13日 先土器時代調査、試掘トレンチ掘り下げを行ったが遺物確認されず。
- 9月14日 図面最終チェック、整理、器材運搬。本日をもって中畦遺跡の調査を終了する。



2 諏訪西遺跡

7月より、調査区内の桑の抜根を行ない、併行してプレハブ用地の整地を行なった。その後、調査区の北から表土の掘削を開始した。北側はFPの状況が良好であったため、この面で一旦止めて確認を行なったが降下後の掘り込みは認められなかった。

こうした中、当初建てたプレハブが大型台風の通過により、倒壊するという思いがけない被害を受け、調査進行に大きな支障をきたした。さらに排土用地の確保には苦慮した。

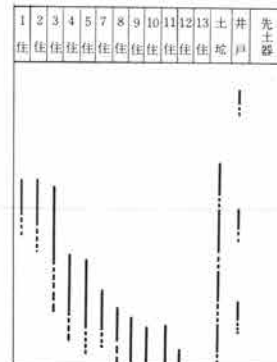
検出した遺構については、台地中央および南側にかけて分布が見られ、縄文時代前期の住居址10軒、中期が2軒、土壌が82基と井戸址が3基であった。

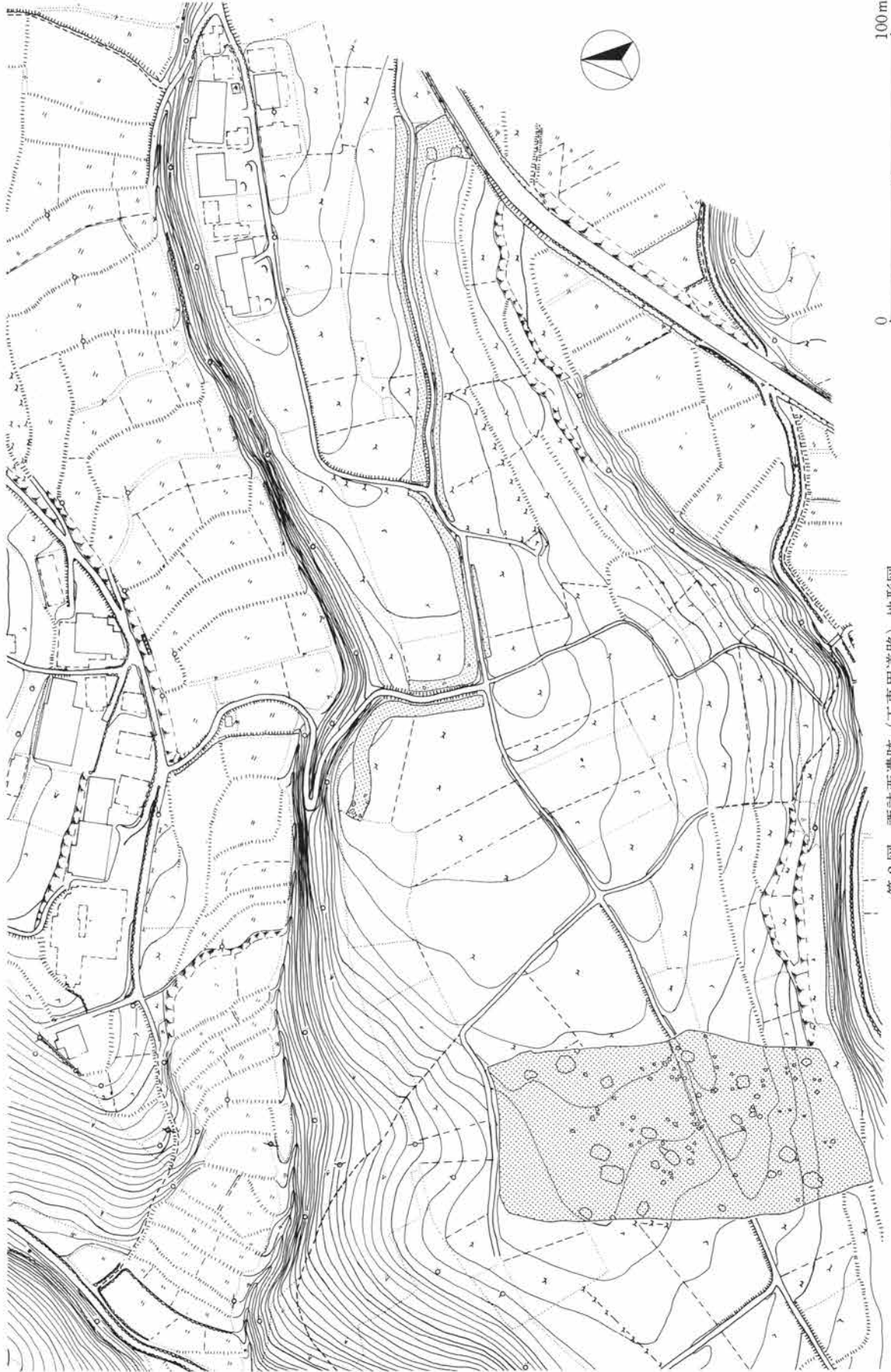
工事用道路部分については、工事との関係により先行調査を昭和56年1月から2月にかけて実施した。遺構については村道取付部で古墳時代の住居址1軒を検出した他、縄文時代の土壌10基およびB区北斜面部に土器の包含層を調査した。

(小野)

諏訪西遺跡調査日誌抄

- 9月2日 プレハブ予定地調査。1号井戸、覆土最上面にFA層確認。写真撮影。
- 9月7日 道路南側、表土掘削。
- 9月13日 プレハブ設置。
- 9月16日 遺構確認作業。住居址2軒、土壌10数基確認。住居址の調査に入る。基本杭設定。
- 9月22日 1・2・3号住居址の調査に入る。道路南側部分の等高線図作成、2号井戸の調査開始。
- 9月27日 遺跡等高線図作成。1号住居址調査、炭化材多く出土。2号住居址の調査ほぼ終了。
- 9月30日 1・2号住居址調査を終了。3・4・5号住居址の調査を行なう。
- 10月13日 3号住居址の炉址実測。5号住居址調査。50号土壌遺物（ほぼ完形品2個体）取り上げ。
- 10月17日 8・9・10・11・12号住居址調査。
- 10月28日 ラジコンによる遺跡全景写真。遺跡内清掃。先土器時代試掘トレンチを入れる。
- 11月2日 8号住居炉址エレベーション実測。11号住居平面実測。13号住居炉址セクション実測。
- 11月5日 先土器時代試掘調査。68号土壌、燃系文土器出土、69号土壌調査。68号土壌よりも新しい。
- 11月12日 先土器時代調査。68・69号土壌調査。68号土壌は、掘り方不明確であり、形状は、不定形。





第2図 諏訪西遺跡（工事用道路）地形図

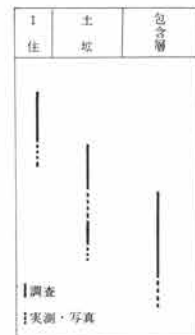
諏訪西遺跡調査日誌抄

- 11月25日 第一ユニット確認。
- 12月10日 道路下にあった4号住居址半分の調査。遺物若干出土。
- 12月21日 検出作業及び第2、3、4ユニット調査。全景写真。
- 12月25日 4号住居址写真撮影終了。縄文面終了。57年内の調査終了。
- 1月10日 58年調査開始。
- 1月13日 先土器時代調査、拡張、北西部分で出土。南壁際でも出土したために、さらに南へ拡張する。
- 1月20日 人力による排土が困難となったために、ベルコンを使用する。
- 1月25日 先土器時代調査。寒さのため朝夕の凍結で悩まされる。
- 2月1日 先土器時代調査。全体写真、セクション写真、ユニット写真を撮影。
- 2月7日 遺物平面図、取り下げ、分布図作成。
- 2月14日 先土器時代調査。風倒木痕セクション、写真、ローム上面（西壁）セクション。
- 2月16日 西壁セクション実測。本日をもち諏訪西遺跡の調査終了。



工事用道路調査日誌抄

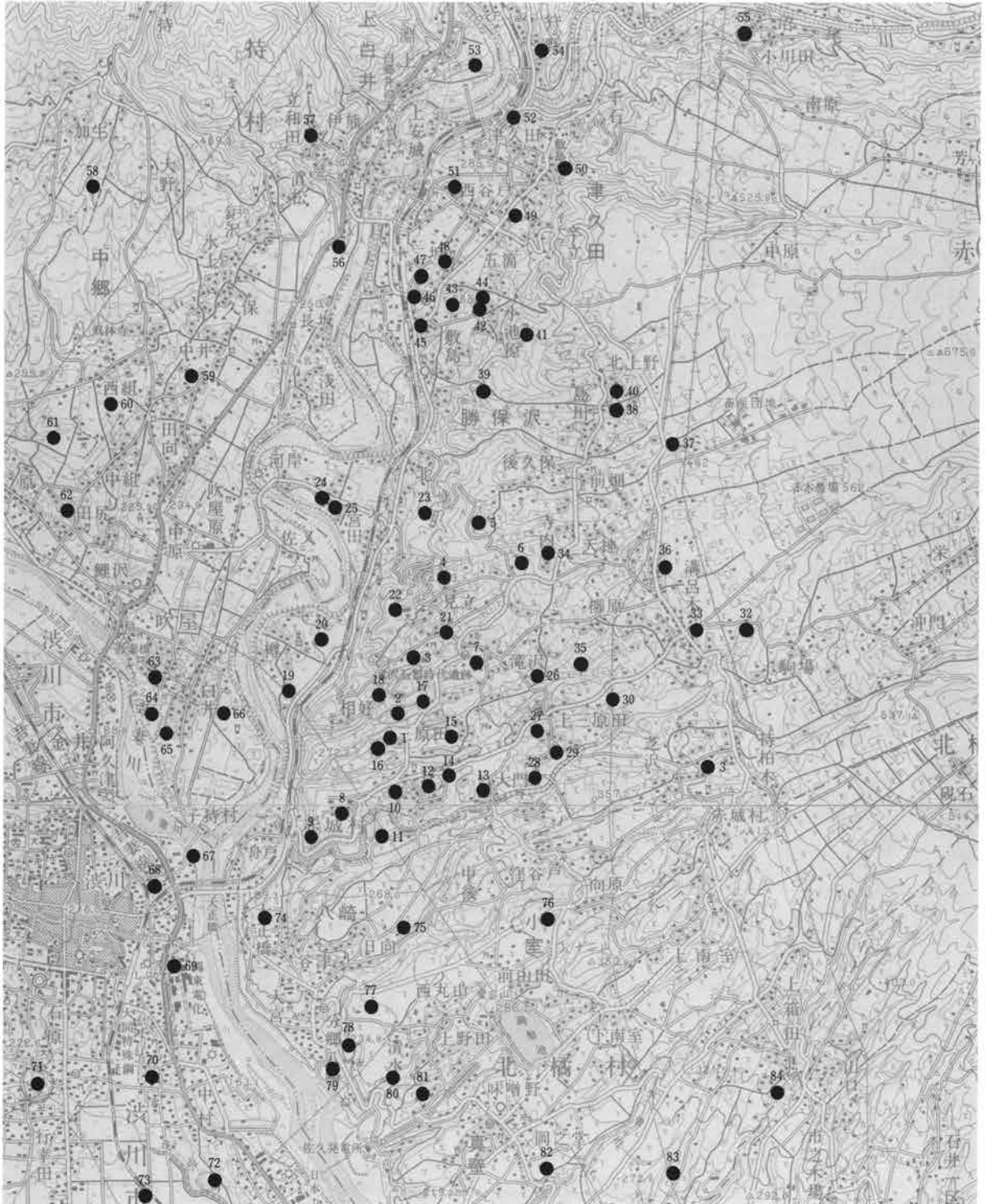
- 1月11日 調査開始。調査用テント設置、周辺の清掃。
- 1月13日 表土除去作業。A区南西部にて古墳時代の後期の住居址（1号住）を検出、覆土中にFPを多量に含んでいる。
- 1月14日 1号住調査、1号土壇検出（中央に半完形の土器を検出）。
- 1月19日 A区全景写真、1号土壇平面図実測、1区調査終了。
- 1月21日 B区の遺構検出、多くの縄文中期の土器片を検出、遺物包含層。
- 2月1日 B区グリッド設定を行ない掘り下げを行なう。
- 2月3日 グリッドセクション実測、C、D区遺構検出作業。
- 2月5日 グリッド精査、北壁セクション実測、全景写真撮影。
- 2月6日 安全ロープ、杭の設定、調査終了。



- 註1、昭和54年度に沼田、月夜野、水上地区を実施。
- 註2、群馬県埋蔵文化財調査事業団「年報I」昭和57年度。
- 註3、勢多郡北橋村教育委員会にて昭和57年度に全面調査を実施。
- 註4、群馬県埋蔵文化財調査事業団にて昭和57年度に全面調査を実施。昭和60年度に土師編刊行。
- 註5、群馬県埋蔵文化財調査事業団「年報II」昭和58年度。

第II章 立地と周辺の遺跡

中畦、諏訪西遺跡は勢多郡赤城村字三原田地内、群馬県のほぼ中央に位置する赤城山の西麓に位置している。赤城山は標高1828mで両遺跡はこの赤城山麓より利根川へ向かって延びる尾根上に在り、沢を狭んで対峙している。標高はそれぞれ280m、300m程で両遺跡とも中央部が高く南北が低く傾斜している。



第3図 周辺の遺跡(1)

1 : 50000

赤城山山頂付近に降った雨や雪は、土中に浸み込んで伏流水となり、山麓のあちら、こちらで湧玉と呼ばれる水源池（泉）となって地上に湧き出している。村内では、60ヶ所もの湧玉が知られており、その大小はあるが、形状も湿地状になっているもの、岩の割れ目や崖などから流れ落ちているものなどがある。

村内では、この清泉から湧きでる水を飲料水として広く利用しており、古代の人々がこうした場所に居住地を選んだのも当然のことと考えられる。

現にこうした湧玉が湧き出す所の周辺では丘陵上に必ずと言って良い程、土器や石器の散布が見られ、両遺跡もこうした条件下に営まれた遺跡と考えられる。

両遺跡の所在する赤城村は、古くから耕作、工事によって遺物の出土する所は知られており、学史的にも重要な遺跡があるが、本格的な発掘調査が行なわれたのは比較的最近になってからである。

以下、村内および周辺地域における遺跡について、各時代毎にその概観を述べてみたい。

先土器時代 群馬県内では、余りにも有名な岩宿遺跡の発見以来、発見者の相沢忠洋氏らによって、精

表1 周辺の遺跡一覧表(1)

番号	遺跡名	所在地	主な時期	番号	遺跡名	所在地	主な時期
1	中畦遺跡	赤城村三原田中畦	縄・先	44	五箇塚3号墳	赤城村津久田五箇	古
2	諏訪西遺跡	赤城村三原田諏訪西	縄・先	45	新屋遺跡	赤城村敷島新屋	古・弥・縄
3	見立溜井遺跡	赤城村見立溜井	古・縄・先	46	猫寄居跡	赤城村敷島寄居	戦
4	見立大久保遺跡	赤城村見立下大久保	縄	47	羽黒塚	赤城村津久田華蔵寺	古
5	勝保沢中ノ山遺跡	赤城村勝保沢中ノ山	古・縄・先	48	六兵衛屋敷跡	赤城村津久田華蔵寺	江
6	寺内遺跡	赤城村寺内	古	49	六万遺跡	赤城村津久田東田・下宿	古・弥・縄
7	滝沢遺跡	赤城村滝沢	弥・縄	50	三間入遺跡	赤城村津久田三間入	縄
8	三原田遺跡	赤城村三原田西原	縄	51	庚申塚	赤城村津久田西原	古
9	樽遺跡	赤城村樽山田	弥	52	津久田城址	赤城村津久田寄居	古
10	三原田城遺跡	赤城村三原田観音前	戦・古・縄	53	悪戸遺跡	子持村上白井悪戸	縄
11	房谷戸遺跡	北橋村房谷戸	室・古・縄	54	南雲沢遺跡	赤城村津久田小谷戸	縄
12	三原田城址	赤城村三原田観音前	戦	55	小川田遺跡	赤城村長井小川田	弥・縄
13	大門塚古墳	赤城村上三原田大門	古	56	白郷井小学校遺跡	子持村上白井梅木	古
14	旧横野村10号墳	赤城村三原田堂久保	古	57	立和田遺跡	子持村中郷立和田	古
15	若宮八幡塚	赤城村上三原田日向	古	58	加生遺跡	子持村中郷加生甲	縄
16	十二塚古墳	赤城村三原田中畦・十二塚	古	59	中井遺跡	子持村中郷中井	古
17	諏訪上遺跡	赤城村三原田諏訪上	平・縄	60	館野遺跡	子持村中郷	古
18	浅間塚古墳	赤城村見立相好	古	61	黒井峯遺跡	子持村黒井峯	古
19	イナリ塚古墳	赤城村樽野本・南原	古	62	田尻遺跡	子持村中郷田尻	古
20	弁天塚古墳	赤城村樽清水・新井	古	63	不動塚古墳	子持村白井北廊	古
21	庚申塚古墳	赤城村見立八幡	古	64	白井城址	子持村白井	戦
22	見立城址	赤城村見立二城	戦	65	白井城北廊中世墓	子持村白井北廊	戦
23	久保地古墳群	赤城村宮田熊野・久保地	古	66	カトウ塚古墳	子持村白井玉椿	古
24	宮田畦畔遺跡	赤城村宮田中島	古	67	坂下町古墳群	渋川市坂下町	古
25	宮田寄居跡	赤城村宮田中島	戦	68	東町古墳	渋川市東町	古
26	滝沢御所跡	赤城村滝沢御所谷戸	江	69	大崎古墳	渋川市大崎	古
27	地蔵塚古墳	赤城村上三原田蟹谷戸	古	70	十二山古墳	渋川市中村	古
28	稲荷塚古墳	赤城村上三原田東田	古	71	空沢遺跡	渋川市行幸田	古・縄
29	十二塚	赤城村上三原田蟹谷戸	古	72	中村遺跡	渋川市中村	江・古・弥
30	庚塚	赤城村上三原田庚塚	古	73	有馬条里遺跡	渋川市沖田	古・弥
31	出雲遺跡	赤城村持柏木出雲	縄	74	北ノ寺古墳群	北橋村八崎北ノ寺	古
32	大師堂遺跡	赤城村溝呂木辻替戸	弥・縄	75	中竹原古墳群	北橋村八崎中竹原	古
33	行人塚古墳	赤城村溝呂木天神上	古	76	小室遺跡	北橋村大字小室	縄
34	勝保沢城址	赤城村勝保沢寺内	室	77	分郷八崎遺跡	北橋村分郷八崎	古・弥・先
35	見立十三塚	赤城村見立蟹沢・十三塚	古	78	分郷八崎古墳	北橋村分郷八崎	古
36	大塚古墳	赤城村溝呂木大塚	古	79	八崎城址	北橋村分郷八崎	戦
37	六本木の十三塚	赤城村勝保沢六本木・上原西	古	80	塚原古墳群	北橋村分郷八崎塚原	古
38	水上北井戸遺跡	赤城村北上野水上・北井戸	縄	81	真壁古墳群	北橋村真壁上遠原	古
39	猫城址	赤城村敷島城山	戦	82	下山田原古墳群	北橋村八崎越後坂	古
40	北井戸の寺屋敷跡	赤城村北上野井戸	不明	83	箱田古墳群	北橋村箱田八幡山	古
41	甲子塚古墳	赤城村津久田前小池原	古	84	米野古墳群	富士見村山口中組	古
42	五箇塚1号墳	赤城村津久田五箇	古	江(江戸) 戦(戦国) 室(室町) 平(平安) 奈(奈良)			
43	小池原遺跡	赤城村津久田栗木沢後小池原	古	古(古墳) 弥(弥生) 縄(縄文) 先(先土器) 時代を表わす			

力的に調査が行われてきた。この結果赤城山東南麓における、不二山、権現山などの調査で、多くの成果を上げている。こうした反面、西麓の赤城村、北橋村内ではこれまで本格的な調査が行われていなかったこともあり、この時代の遺跡は知られていなかった。

今回の関越自動車道通過に伴う一連の調査によって、本書で報告を行なう中畦・諏訪西遺跡の他に赤城村では、見立溜井遺跡(3)・勝保沢中ノ山遺跡(5)、において、1～6面もの文化層面が確認され、北橋村内でも房谷戸遺跡(11)・分郷八崎遺跡(7)で検出され、にわかに注目されることとなった。

これらの遺跡は、地形的に似かよった場所であり、何れも丘陵の先端部付近に集中して遺物の出土が見られた。当時の生活域が広汎であったことが改めて認識されたのである。

縄文時代 諏訪西遺跡の北に所在する見立溜井遺跡では前期を中心に、早期・中期初頭が、見立大久保遺跡(4)では、中期の住居址、土壌が検出されている。またその東方600m程の所にある滝沢遺跡(7)は古くから知られており、大正末年に発見、調査され昭和2年には国の指定史跡となり、現在に至っている。

当時の詳細な報告は無いが、中期・後期の土器、石器を数多く出土しており、炉址も4カ所が発見されている。土器に関しては、前期・晩期および弥生時代のものも含まれ、濃密な複合遺跡と考えられる。

さらに、著名な遺跡として、昭和47年に発掘され、内陸部における縄文時代中期の環状大集落として話題を呼んだ三原田遺跡(8)は、中畦遺跡の南西500m程離れた台地上に在り、現在は住宅団地となっている。

この三原田遺跡の南、北橋村との境界を流れる天竜川を隔てた対岸には、中期前半の住居址、土壌が検出された房谷戸遺跡が、同じく関越道の調査によって、県内では発見例の少ない花積下層式期の住居址、土壌が検出された三原田城遺跡(10)は、対岸に在り、三原田遺跡と同じ丘陵上に位置する。

勝保沢中ノ山遺跡でも、前期の住居址、土壌が検出されている。

弥生時代 三原田遺跡の南西段丘下に弥生時代における北関東西部の土器形式名となっている樽式土器を出土したことで知られる樽遺跡(9)、がある。その他にも、滝沢遺跡、大師堂遺跡、大門塚遺跡、さらには諏訪西遺跡の在る丘陵上においても若干採集されているが、その実体は余り明らかではない。

また見立溜井遺跡において出土した土器は、弥生時代と古墳時代をつなぐ時期のものとして注目される。

古墳時代 この時期の集落址としては、昭和47年に調査された寺内遺跡(6)がF Pに埋没した後期の住居址を検出したことで知られる。また勝保沢中ノ山遺跡でも同様にF Pで埋没した住居址が検出されているが、時期はやや先行するものである。古墳については、一段下の樽、宮田地区にいなり塚古墳(19)を中心に弁天塚古墳(20)等が知られている。

中畦遺跡の西に隣接して、十二塚古墳(16)と呼ばれる小円墳が在る。また諏訪西遺跡の調査区内にも塚があったということで確認を行なったが痕跡などは見られなかった。

その他、付近の古墳としては、大門塚古墳(13)、旧横野村10号墳(14)、若宮八幡塚(15)、浅間塚古墳(18)、庚申塚古墳(21)、久保地古墳群(23)、地藏塚古墳(27)、稻荷塚古墳(28)等が知られるが、ほとんどが10m内外の小円墳である。また、生産遺構としては、宮田の中島畦畔遺構(24)がF Pによる埋没水田遺構として県内では最も古く報告されている。

奈良・平安時代 この時代の遺構については調査例もほとんど無く、その分布等も明らかでないが、中畦遺跡、房谷戸遺跡で平安時代の住居址が検出されている。また諏訪上遺跡(17)では瓦塔片が出土しており瓦の散布も見られる。

中世・近世 三原田城址(12)は天竜川と黒沢川に挟まれた台地に在り、^{とうせん}刀川小学校の西、標高340m程の利根川を西に臨む急崖上に見立城址(22)が、さらに寺内遺跡の東に、現在は快中山宗玄寺と呼ばれる寺が建っている



第4図 周辺の遺跡(2)

- | | | | | |
|----------|--------------|-----------|-------------|------------|
| 1 中畦遺跡 | 2 諏訪西遺跡 | 3 見立溜井遺跡 | 4 見立大久保遺跡 | 5 勝保沢中ノ山遺跡 |
| 6 寺内遺跡 | 7 滝沢遺跡 | 8 三原田遺跡 | 9 樽遺跡 | 10 三原田城遺跡 |
| 11 房谷戸遺跡 | 12 三原田城址 | 13 大門塚古墳 | 14 旧横野村10号墳 | 15 若宮八幡塚 |
| 16 十二塚古墳 | 17 諏訪上遺跡 | 18 浅間塚古墳 | 19 イナリ塚古墳 | 20 弁天塚古墳 |
| 21 庚申塚古墳 | 22 見立城址(二城跡) | 23 久保地古墳群 | 24 宮田畦畔遺跡 | 25 宮田寄居跡 |
| 26 滝沢御所跡 | 27 地藏塚古墳 | 28 稻荷塚古墳 | | |

表2 周辺の遺跡一覧表(2)

番号	遺跡名	所在地	主な遺構	時期	備考	文献
1	中畦遺跡	赤城村大字三原田字中畦	住居址・土壙	先土器・縄文(前)・平安時代	今回報告	
2	諏訪西遺跡	赤城村大字三原田字諏訪上	住居址・土壙	先土器・縄文(前)時代	今回報告	
3	見立溜井遺跡	赤城村大字見立字溜井	礫群・住居址・土壙・溝	先土器・縄文(前)時代・古墳時代	昭和57年度村教委調査	
4	見立大久保遺跡	赤城村大字見立字大久保	住居址・土壙	縄文(中)時代	同上	
5	勝保沢中ノ山遺跡	赤城村大字勝保沢字中ノ山	住居址・土壙	先土器・縄文(前)・古墳・平安時代	昭和57年度埋文事業団調査	
6	寺内遺跡	赤城村大字勝保沢字寺内	住居址	古墳時代	昭和47年村教委調査	4
7	滝沢遺跡	赤城村大字見立字滝沢	炉址	縄文(中)・弥生・古墳時代	昭和2年国指定史跡	
8	三原田遺跡	赤城村大字三原田字西原	住居址・土壙	縄文(中)時代	昭和48年県企業局調査	5
9	樽遺跡	赤城村大字樽字山田717-1他7筆	住居址	弥生(前)時代		1
10	三原田城遺跡	赤城村大字三原田字観音前	外濠・住居址・土壙・古墳周溝	縄文(前)・古墳・室町時代	昭和57年度埋文事業団調査	
11	房谷戸遺跡	北橋村大字八崎字房谷戸	住居址・土壙	先土器・縄文(中)・平安・戦国時代	昭和58年度埋文事業団調査	
12	三原田城址	赤城村大字三原田字観音前826	城郭址	室町時代	西端外濠一部を調査	3
13	大門塚古墳	赤城村大字三原田字大門	古墳	古墳時代		
14	旧横野村10号墳	赤城村大字三原田字堂久保910-1	古墳 (円墳)	古墳時代	(塔の峯)	
15	若宮八幡塚	赤城村大字上三原田字日向137-1	古墳	古墳時代	ほとんど平夷されている	
16	十二塚古墳	赤城村大字三原田字中畦340・字十二塚349	古墳	古墳時代	直刀出土	
17	諏訪上遺跡	赤城村大字三原田字諏訪上	住居址・墳墓・寺院址	縄文(前・中)・弥生・古墳・平安時代	瓦塔片出土	
18	浅間塚古墳	赤城村大字見立字相好488・490	古墳	古墳時代		
19	イナリ塚古墳	赤城村大字樽字野本507	古墳 (円墳) (野本古墳群)	横穴式古墳	村指定史跡 横穴式袖無	
20	弁天塚古墳	赤城村大字樽字清水154・135・字新井70	古墳 (円墳)	古墳時代		
21	庚申塚古墳	赤城村大字見立字八幡	古墳	古墳時代		
22	見立城址(二城跡)	赤城村大字見立字二城304	城郭址	室町時代		3
23	久保地古墳群	赤城村大字宮田字久保地1249	古墳群	古墳時代		
24	宮田畦畔遺跡	赤城村大字宮田字中島308	水田址	古墳時代	昭和4年群大により調査	2
25	宮田寄居跡	赤城村大字宮田字中島323	城郭址	室町時代		3
26	滝沢御所跡	赤城村大字滝沢字御所谷戸399-9-1他12筆	城郭址	室町時代		3
27	地藏塚古墳	赤城村大字上三原田字蟹谷戸563の1	古墳 (円墳)	古墳時代		
28	稲荷塚古墳	赤城村大字上三原田字東田425	古墳	古墳時代		

るが、付近には土塁、堀が残り、勝保沢城址(34)として知られる。

(小野)

文献	著者	書名	発行	発行元	発行年	備考
1	杉原 莊 介	「上野樽遺跡調査概要」	考古学10-10		1939	(昭和14)
2	山本 良 知	「宮田畦畔遺構調査概要」	時報第25号	群馬大学史学会	1961	(昭和36)
3	山崎 一	「群馬県古城壘址の研究」	上巻	群馬県文化事業振興会	1971	(昭和46)
4	井上 唯 雄	「寺内遺跡」		赤城村教育委員会	1975	(昭和50)
5	赤山 谷 三	「三原田遺跡」(住居篇)		群馬県企業局	1980	(昭和55)

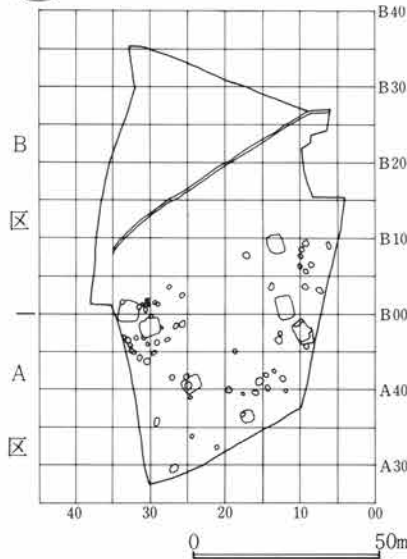
第 III 章 調査の方法

中畦、諏訪西遺跡は、試掘調査によって遺構の種類や、基本的な層位は判明していたため、二ツ岳降下軽石（FP）を目安として部分的に二面調査を行なったが、FP降下後の遺構は中畦遺跡において、溝と2軒の平安時代の住居址を検出したのみであった。また諏訪西遺跡においては降下後の遺構は検出されなかった。

両遺跡は、隣接した丘陵上にあり、遺構の数もそれ程濃密とは考えられなかったため、事務所を諏訪西遺跡に設置し、そこを拠点に両遺跡の発掘を進めた。時期的には中畦遺跡を先行して調査に入った。

調査は2mを単位とするグリッドを基本とし、遺構の平面図、断面図は20分の1、または10分の1を原則とした。諏訪西遺跡の調査にあたっては、調査行程上、表土の掘削を先行させ、事務所を路線内に設置するために、一部先行調査を行なった。

諏訪西工事用道路部分の調査は前年度末の、1月～2月にかけて調査を終了しており、その際のグリッド設定は、諏訪西本線部分のグリッドを東へ延長して使用した。調査方法に関しては、本線部分と同様であったが、一部包含層に関してはグリッド調査で行ない、遺物も各グリッド別に取り上げを行なった。



第5図 中畦遺跡グリッド図

グリッドの呼称について

1 中畦遺跡（第5図）

調査にあたってのグリッドの設定は、試掘時の方法を踏襲し、対象地内に打たれている工事用センター杭の内、100mごとの基本杭を選定し、これを結んで基本ラインとした。

中畦遺跡についてはSTA36+00およびSTA37+00を基本とし、このラインを中心に両側へラインを振り分けた。またSTA36+00の杭を中心に100mごとに進行方向をB区、手前をA区とした。この結果センターラインは、進行方向に向かって、右側が20、10、00となり、左側が40・50となる。グリッドの1単位は2mとし、その呼称については各グリッドの右下を読んでそのグリッドを指すこととした。

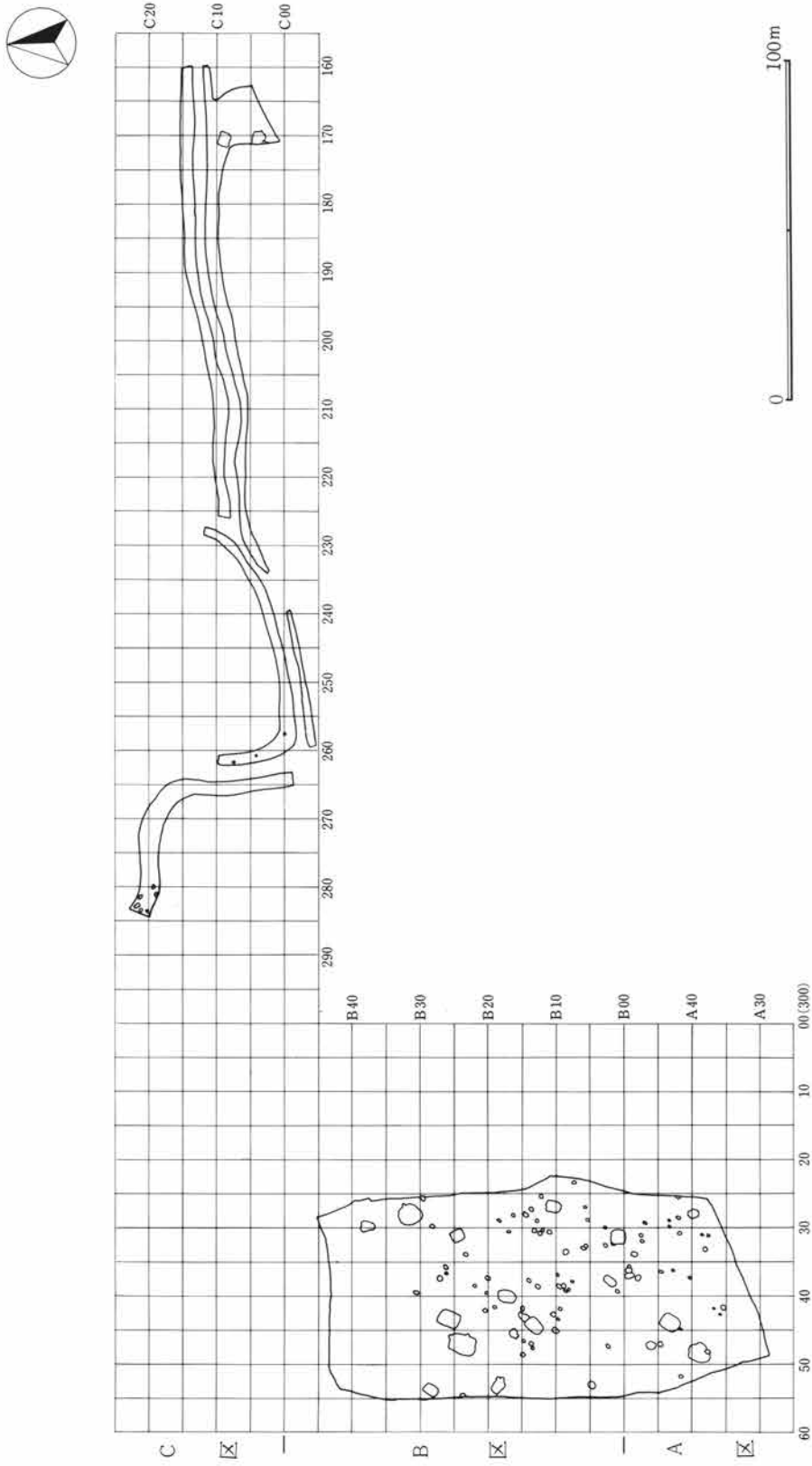
調査は、試掘の結果から決定した本調査部分について全面発掘を行なったが、一部分事情により、後日調査となった部分もある。

2 諏訪西遺跡（含工事用道路）（第6図）

中畦遺跡と同様に道路センター杭、STA38+00とSTA39+00を結んだラインを基準にグリッドを組んだ。基準ラインを40ラインとし、これと直交する方向で横軸ラインを引き手前をA区、先をB区とした。グリッドの呼称は同様に右下を読んで、そのグリッドを指すこととした。

工事用道路については、諏訪西本線部分のグリッド方眼をそのまま東に延長して設定したが、距離があるために、縦軸については00を300として、東へ10m行く毎に5グリッドずつ減となるようにした。

また調査区が、道路によってとびとびとなり、調査時の混乱を避けるために、便宜上、グリッドのA・B区と関係なく、各調査区をA～Eを付して呼ぶこととした。（小野）



第6図 諏訪西遺跡(工事用道路)グリッド図

第IV章 基本土層

中畦及び諏訪西の両遺跡は、前項でも述べられているように赤城山西麓の隣接する尾根状の台地に位置している。調査の結果では、この両遺跡の台地を形成する土層は、同じ堆積の様相を示している。また同地域での近接する他遺跡の調査の結果を比較してみても、各遺跡での土層の堆積はほぼ同一の状況を呈している。さらに数ヶ所の露頭観察からも、その状況は同一であった。

このことから赤城山西麓部における土層堆積は、特に発掘調査が行なわれた地域内を限定したとしても、その基本土層は変わらず以下の通りである。

第I層 黒色土 表土（耕作土）

第II層 二ツ岳軽石（FP） 榛名山二ツ岳を給源とする白色軽石である。

第III層 暗褐色土 第II層と第III層との間層である。堆積量は薄い、各台地を覆う。

第IV層 二ツ岳火山灰（FA） 第II層と同様に榛名山二ツ岳を給源とする紫灰色の細粒火山灰である。

第V層 黒褐色土 混入物は少なく、粘性は弱い。

第VI層 褐色土 黄色ローム粒子を含み明るい。層の下部ほどその混入量は多く、黄色ないしは白色の軽石を少量含む。

第VII層 黄褐色ローム土 やや軟質で、黄色ないしは白色の軽石を含む。層の下部ほどその量は多くなる。

第VIII層 浅間一白糸軽石（As-SP） 浅間山を給源とする白色～黄褐色軽石であり、浅間一板鼻黄色軽石（As-YP）と色調が近似する。かなりの堆積量をもつ。

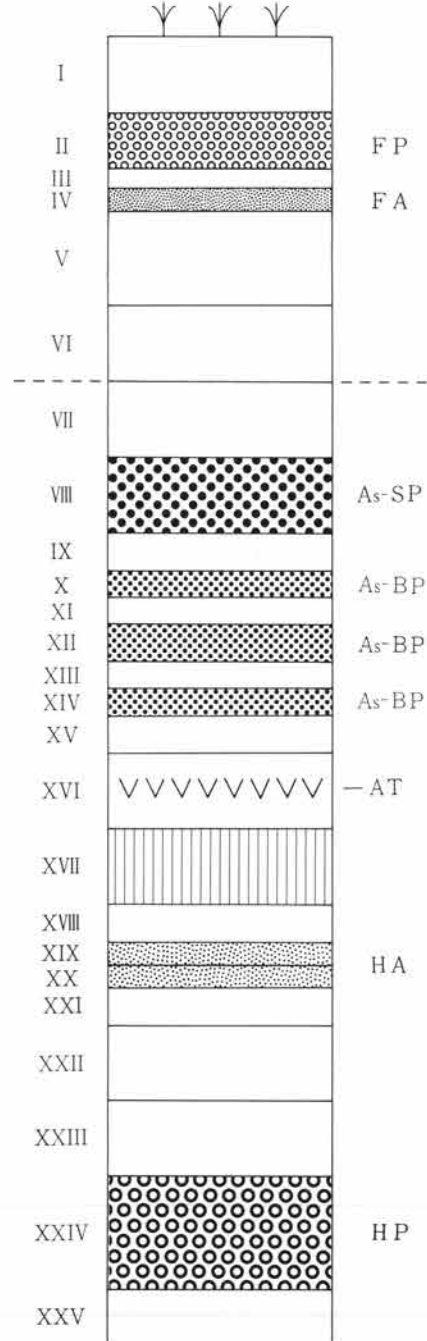
第IX層 明褐色ローム土 第VII層よりやや硬質で、粘性がある。

第X層 浅間一板鼻褐色軽石（As-BP） 浅間山を給源とする黒斑山形成期の多輪廻噴火による降下テフラ群の一つである。粒子の細かい砂状の軽石を主とする。

第XI層 明褐色ローム土 砂状軽石を少量含むが、第X層と第XII層の間層。

第XII層 浅間一板鼻褐色軽石（As-BP） 浅間山を給源とする黒斑山形成期の多輪廻噴火による降下テフラ群の一つである。As-BPグループの中で最も代表的な軽石であり、いわゆるAs-BPと一般的に呼ばれているものである。褐色軽石を主とする。

第XIII層 明褐色ローム土 混入物が少なく、粘質である。第XII層と第XIV層の間層である。



第7図
中畦・諏訪西遺跡土層基本柱状模式図

第IV章 基本土層

第XIV層 浅間一板鼻褐色軽石 (As-BP) 浅間山を給源とする黒斑山形成期の多輪廻噴火による降下テフラ群の一つである。軽石を上下2層に分離できる部分もある。上層は淡黄色系の砂粒状の軽石を主とし、下層は黒色鉱物等を多量に含んだ砂粒状の軽石を主とし、かなり硬くしまっている。しかし、分離が難しい場合が多く、大体は上下の軽石が混在していることが多い。

第XV層 明褐色ローム土 赤色の軽石粒を多く含み、粘性はあるが軟質である。また、第XIV層との境間に炭化物が多く認められる。この炭化物は、同地域一帯で確認することができ、その散布状況も一様で人為的な物とは考え難い。

第XVI層 褐色ローム土 第XV層と同様の赤色軽石粒を少量含み、粘質で硬い。さらにこの層の間には始良・丹沢 (AT) ガラスの極大値部が認められる。

第XVII層 暗褐色ローム土 いわゆる「暗色帯」である。粘質で硬くしまっている。

第XVIII層 灰暗褐色ローム土 第XVII層よりやや明るく青みがかった灰色系の土である。粘質で、第XVII層よりさらに硬くしまっている。また第XIX層の白色軽石を少量含む。

第XIX層 白色軽石 榛名山を給源とした火山灰 (第XX層) に伴う軽石である。

第XX層 八崎火山灰 (HA) 榛名山を給源とする白色なしは黄褐色の細粒火山灰である。各遺跡内での遺存度は高いものの、この火山灰に伴う白色軽石 (第XIX層) は、一様ではない。

第XXI層 褐色ローム土 赤色の細軽石を少量含み、粘性はあるが下層に比べ軟質である。

第XXII層 茶褐色ローム土 赤色の細軽石を全体的に含み、粘質でかなり硬くしまっている。

第XXIII層 明茶褐色ローム土 第XXII層に類似するが混入する赤色軽石は、さらに細かく、また土層の色調もやや明るい。

第XXIV層 八崎軽石 (HP) 榛名山を給源とする白色軽石であり、かなりの厚さをもち堆積している。また、この軽石層の観察から軽石層自体の分層も可能である。

第XXV層 明褐色ローム土 全体に3～5mm程の赤色軽石を多く含み、かなり硬質である。さらにこの層の下部には、赤色軽石の純層がブロック状に堆積していることを確認することができる。

以上が、基本土層における各層の説明である。

この基本土層に準拠するかたちで、同地域内の遺跡が語られる訳であるが、遺跡によってはさらに細分層が行なえ得る場合もある。

(谷藤)

なか うね
中 哇 遺 跡

第 V 章 なか うね 中畦遺跡

遺構・遺物

第 1 節 遺跡の概要

中畦遺跡は赤城山西麓の赤城村南西部三原田地内に位置し、子持山、榛名山をそれぞれ、北西、西の方向に臨み、赤城山麓より西方へ延びた丘陵上に営なまれた遺跡である。地元では中畦(なこおね)と呼ばれるこの丘陵は西へ向かって緩やかな傾斜を持ちながら端部が広がる形を呈す舌状台地である。南北西側は小谷となり、現在は水田となっている。遺跡はやや馬の背状を呈す台地のほぼ中央にあり、標高は約280~285m程で、調査区はこの台地を南北に横切る形となっている。

遺跡は、現状は畑となっており、かなり耕作によって上層が削平されている部分が多く、本来であるならば全面に見られるべきF Pの一次堆積層も極く一部を除いては、確認されなかった。しかしながらその下層より掘り込まれている、縄文時代の遺構については遺存状態が良く、検出した住居址等については、壁の残りは比較的良かった。

検出した遺構については、調査区南東寄りで平安時代の住居址2軒を検出した。重複していると思われるが削平がひどく、ほとんど壁高も見られない状況であった。さらにカマドについても同様であった。

住居に接して長円形の土壇が検出されたが、時期が不明である。

縄文時代の遺構については、住居址6軒、土壇61基を検出した。前期が黒浜期および諸磯期の2時期に分けられる。土壇についても両期のものが主体を占めていた。しかしながら土壇については中期初頭

五領ヶ台期のものが4基検出されていることから、付近にこの時期の住居址の存在も予想される。先土器時代については、縄文時代の土壇内より製品一点が出土したことから試掘を行なった。その結果南側斜面部において黒曜石、安山岩を主体とする石器、石片類が約21点ほど検出された。一つの群として考えられるようで、いくつかの接合が見られた。層位的には、VII層中より出土したもので比較的新しい部分に位置するものと考えられる。

以下、時期別による調査結果を述べて行くこととする。
(小野)



第8図 中畦遺跡全体図

第2節 先土器時代

1 試掘調査の結果

赤城村々内で同時に行なわれている他の遺跡発掘調査において、浅間山を給源とする浅間一板鼻褐色軽石 (As-BP) より下層で石器の出土が確認されており、同地域内での先土器時代の存在と、さらにその様相を知る上からもローム層中の調査の必要性が重視されていた。このような状況下において、本遺跡においても台地南端付近での縄文時代の土壌調査 (第25号土壌) の際、その壁面 (基本土層第VII層) より縄文時代以前の石器と考えられる黒曜石製の2次加工が施された石器 (第12図 3) の出土が確認された。このことから先土器時代の遺物出土の可能性が十分考えられ、ローム層中の調査の必要性が強まった。

まず、本遺跡における先土器時代の調査に先がけ遺物の出土と範囲確認のための試掘調査を行なうこととした。調査の範囲を石器が出土した第23号土壌を中心にその周辺、及び台地の南斜面に限定した。これは、同地域における北斜面での遺構等の検出例がほとんどなく、台地頂上部から南斜面に集中する傾向にあり、先土器時代の遺物を出土した他遺跡においても、その遺物が集中する場所として南斜面に限定される傾向がみうけられるからである。試掘にあたっては、グリッドラインを基準とするかたちで、主として3m×3mの試掘トレンチをA～Mまでの13ヶ所設定し、基本土層第VIII層の浅間一白糸軽石 (As-SP) までの間に主眼を置き、調査を行なった。

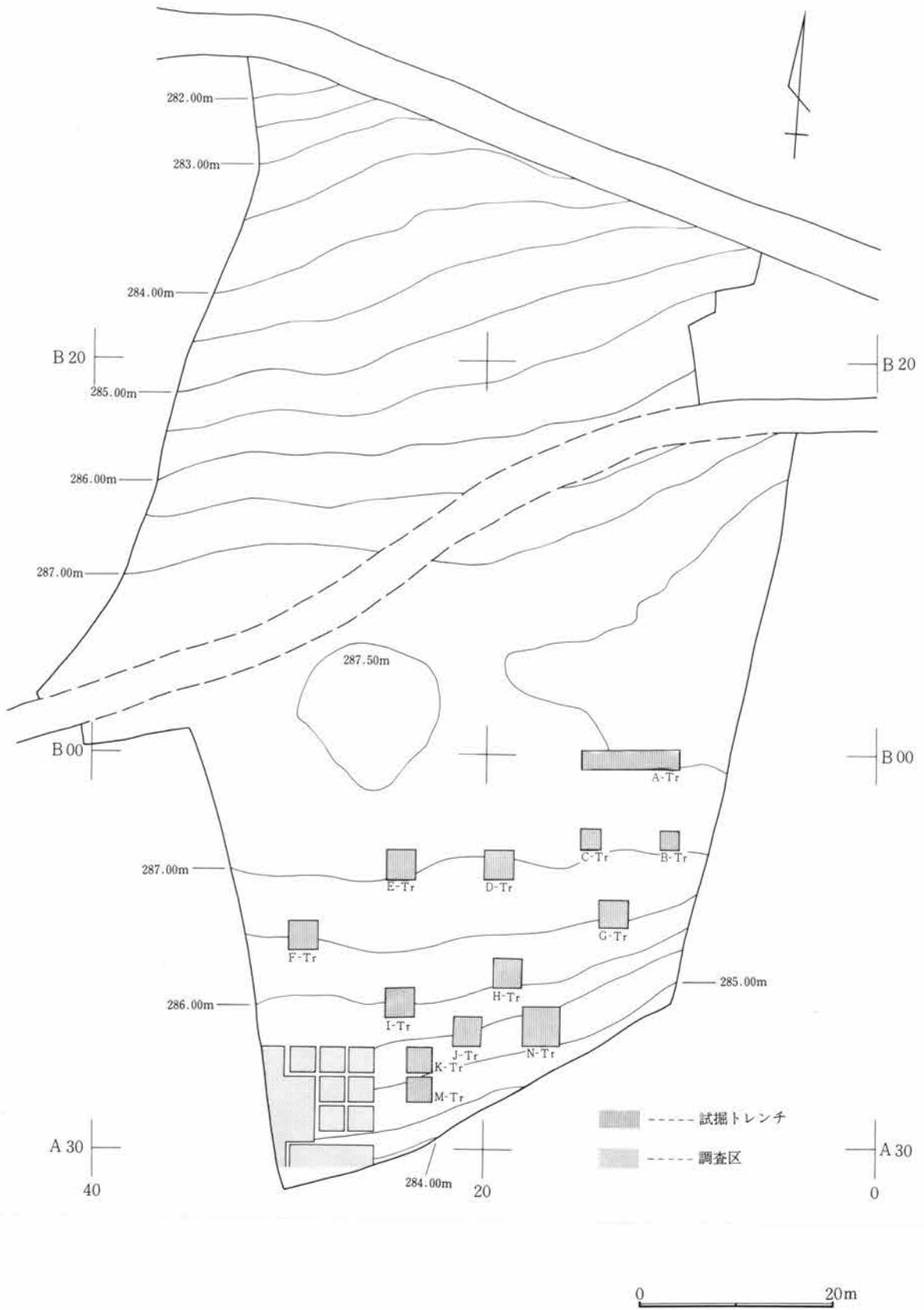
この試掘調査の結果、調査対象域の西側で台地の南端付近に位置し、第25号土壌北側にあたるLトレンチに遺物を確認することができた。遺物は、基本土層第VII層の下位から出土し、黒色安山岩による剥片であり先土器時代の調査の必要が明確となった。Lトレンチ以外の試掘トレンチについては、一部のトレンチで第VIII層以下まで調査を継続させたが遺物の出土を認めることはできなかった。この結果をもとに、本遺跡での先土器時代の調査は、遺物を出土させた23号土壌、及びLトレンチを中心として拡張することとした。

2 調査の結果

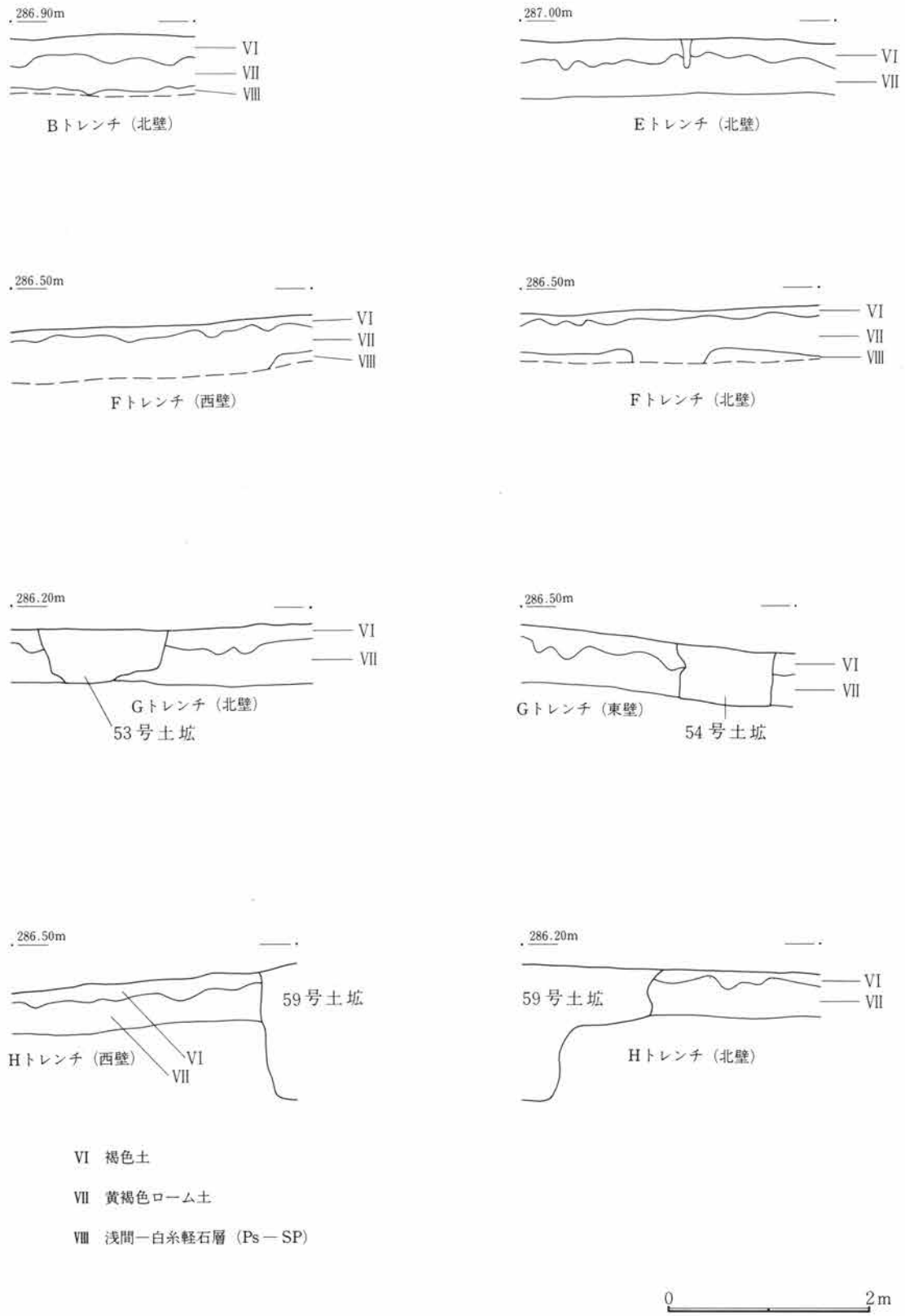
本遺跡に於ける先土器時代の遺物包含層は、基本土層第VII層の上部ローム層中にみとめられた。この第VII層は、本遺跡にあたっては上下に2分することができ、上層を第VII a層、下層を第VII b層とした。分層を行なうにあたり、含有物等の様々な要因もさることながら、主として両層の堅さの違いを重視した。その結果第VII a層は比較的柔らかく、第VII b層は堅く粘質度も高い。ブロック (石器集中部) は、試掘調査結果の如く調査対象域西側で、台地の南端部に点数的には少量であるが、一箇所確認することができた。それ以外、多くの遺跡で見られる礫群、炭化物集中部といわれるものについての確認はできなかった。

3 出土遺物

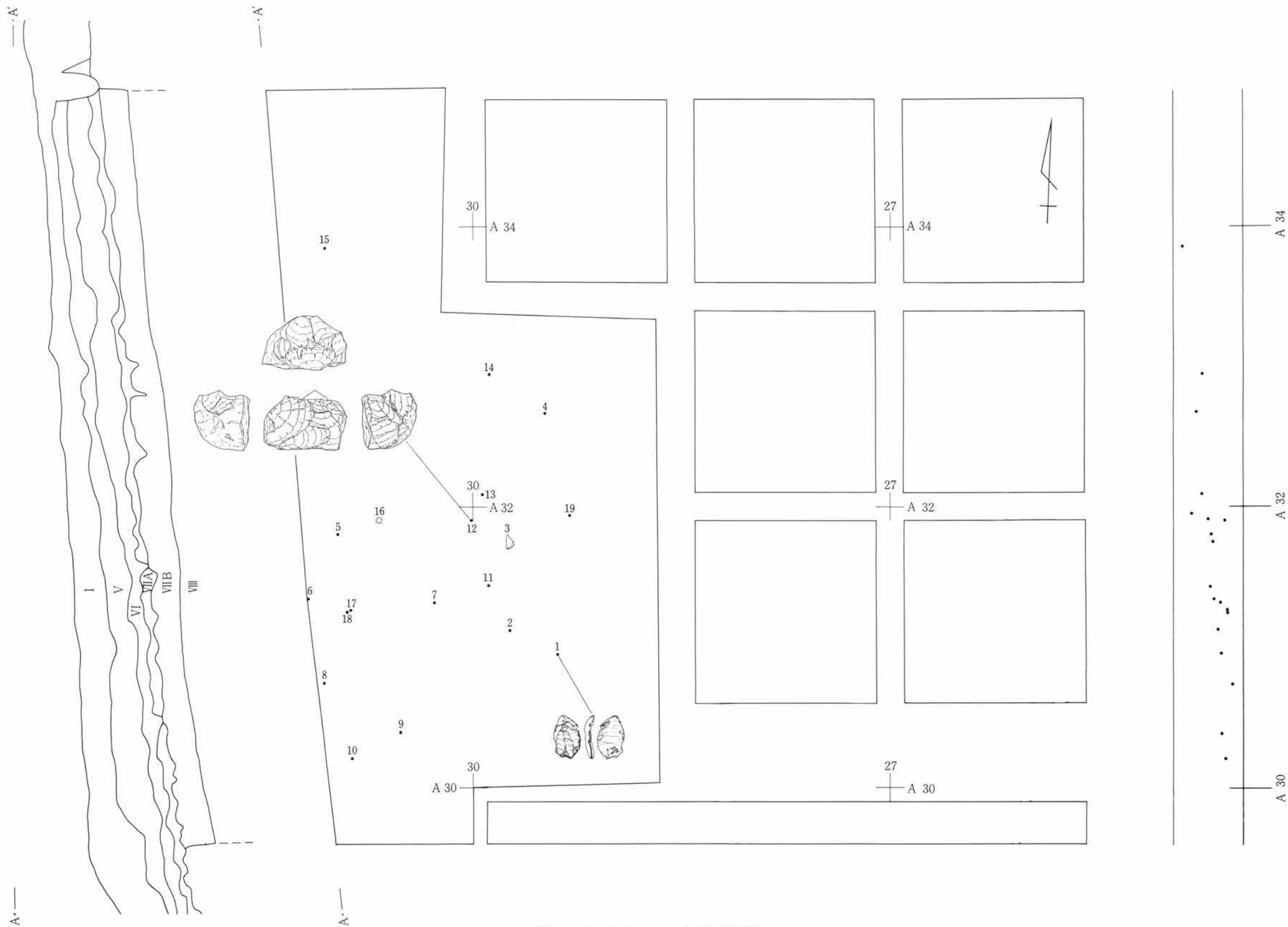
出土した遺物は、その総数21点と少量であるが、ナイフ形石器2点、2次加工の加えられているもの1点、石核1点、敲石1点、台石と思われる石器1点からの組成をなす。出土点数に比べると、比較的器種はバラエティーに富む。石核、剥片及び剥片使用の石器については、その石材に黒色安山岩と黒曜石を使用するもので占められており、それ以外の敲石等にみられる石材としては、輝石安山岩など安山岩系統の石材を使用している。



第9図 先土器時代調査全体図

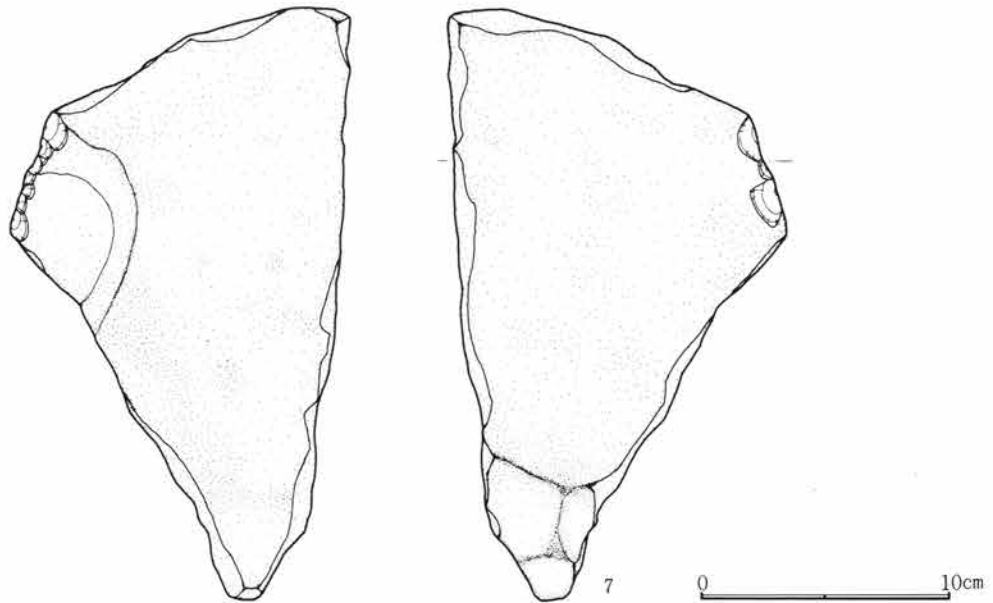
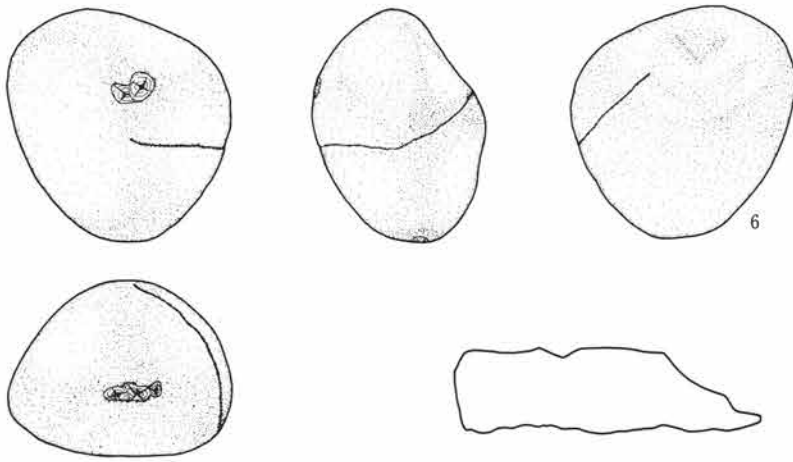
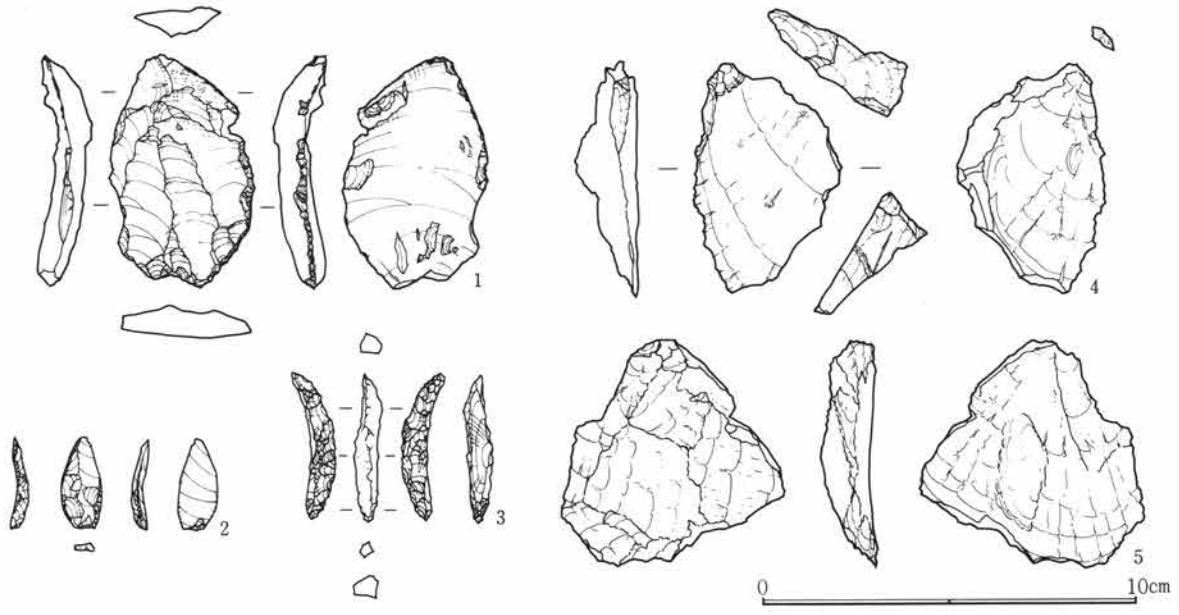


第10図 試堀トレンチ土層断面図



第11図 遺物平面垂直分布図及び断面図

0 2m



第12図 ナイフ形石器、2次加工を有する石器・剥片・敲石・台石

ナイフ形石器 (第12図 1・2)

ナイフ形石器とされるものは、Lトレンチ拡張区に位置するブロックより出土した(1)以外に、縄文時代前期の第6号住居址内埋甕附近から出土したもの(2)の2点がある。

(1) 気泡が多く含まれる黒曜石を石材とし、素材はやや不定形ではあるが幅広の縦長剥片である。基部が若干欠損しているが、打面を基部とし、バルブの除去はなされていない。基部を中心として両側辺に刃潰し加工を施しているが、主に右側辺に加工を施す。また先端部の右側にも微細な刃潰しがなされ、左側を刃部としている。刃部には刃こぼれ及び擦痕が認められる。

(2) 黒曜石を石材に、小さな薄身の縦長剥片を素材としている。打面側を先端とし、打面及びバルブを除去した後に刃潰し加工を施す。刃潰し加工は、基部を中心にして主として左側辺に施し、先端右側を刃部としている。刃部には擦痕が観察される。

2次加工の加えられた石器 (第12図 3)

縄文時代前期第23号土壙壁中より出土した石器である。黒曜石を石材としたもので、素形は両面加工の槍先形尖頭器と思われる。折れ面の観察では、打面が素形の表面にあることから、彫器等の製作による削片とは考え難く、むしろ偶発的な要因によるものとして理解したい。折れ面を打面とし、両端及び中央部に再度調整加工を施しているが、器種については不明である。

石核 (第13図 8)

出土した石核は1点だけである。黒色安山岩を素材とした大型のもので、打面を転位しながら大型の剥片を剥離しているものである。背部及び下面に自然面を残し、最終剥離面はその自然面を打面としている。尚、この石核には、数点の剥片が接合する。接合については、接合資料の項で詳しく述べることにする。

敲石 (第12図 6)

出土した敲石は1点だけである。石材は輝石安山岩で、円礫を素材としている。敲打による破損が2ヶ所の稜に認められる。

台石 (第12図 7)

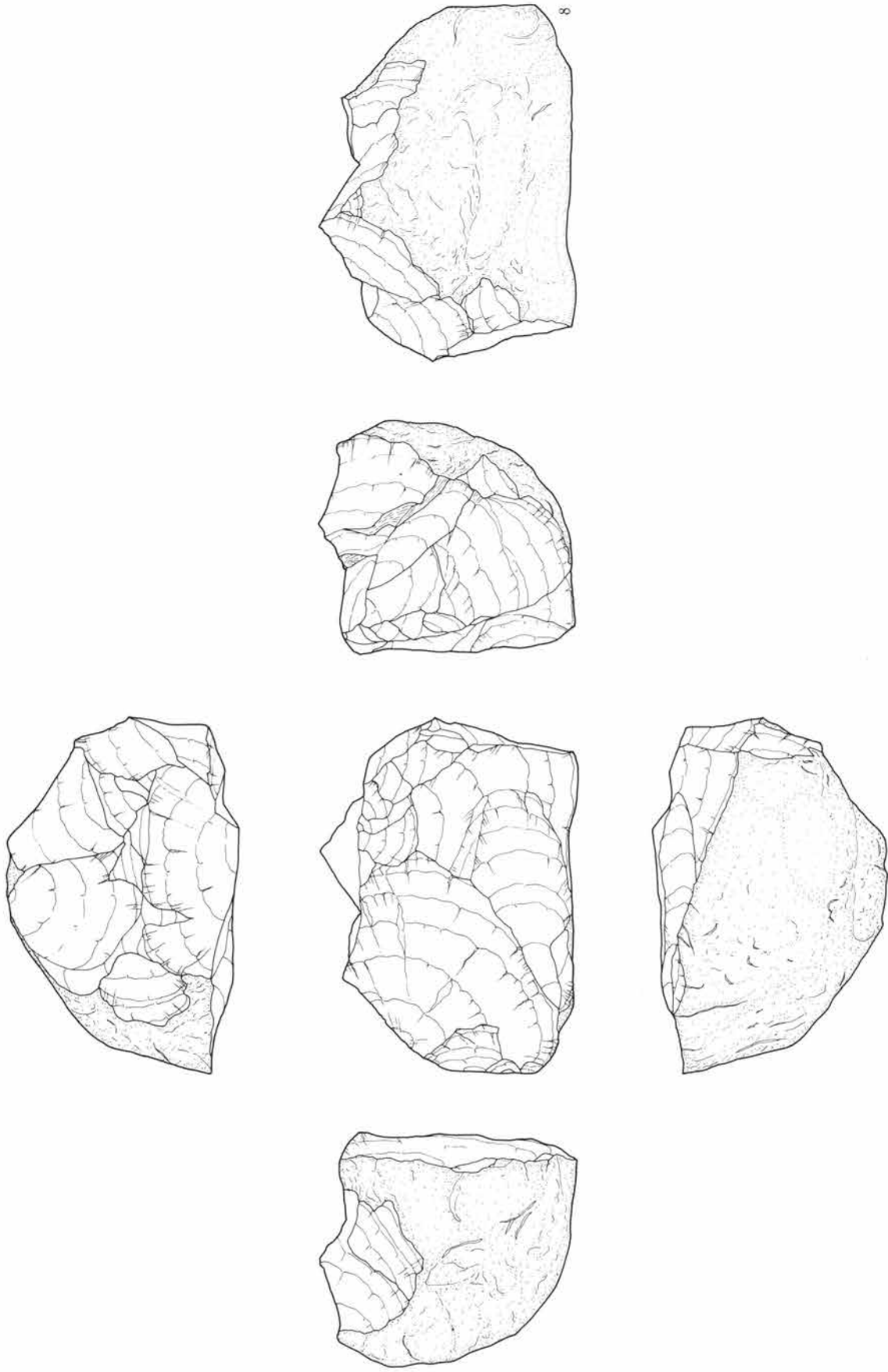
石材は輝石安山岩で、面に荒く凹凸のある大きな扁平礫を素材としている。一面は凹凸部の凸が磨滅し表面がやや平坦となっている。礫の一縁には敲打によって鈍い稜が作出されている。

その他の剥片 (第12図 4・5)

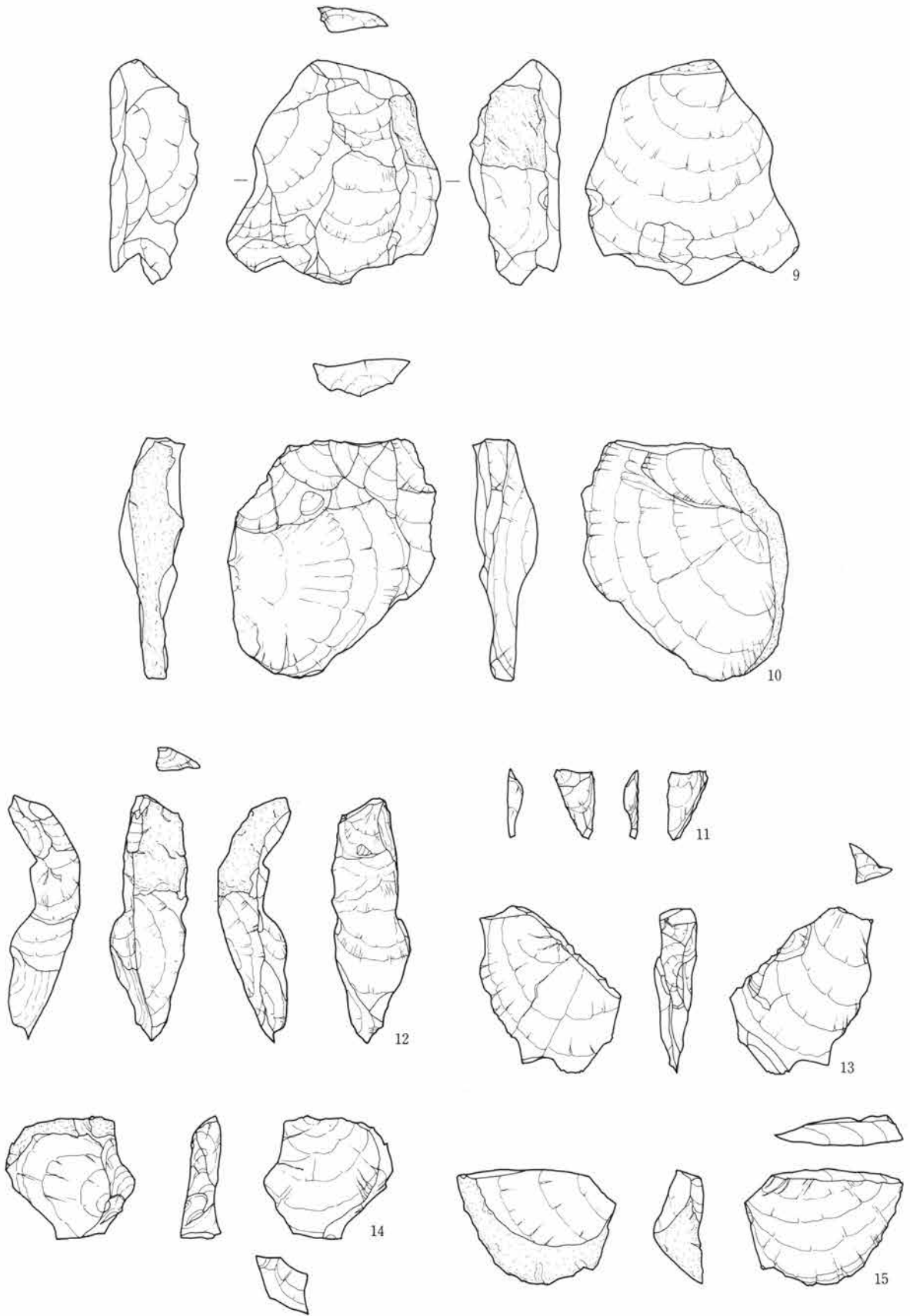
石材は主に黒色安山岩である。(4)は石核の打面再生を目的として作出された剥片である。

接合 (第14・15・16図)

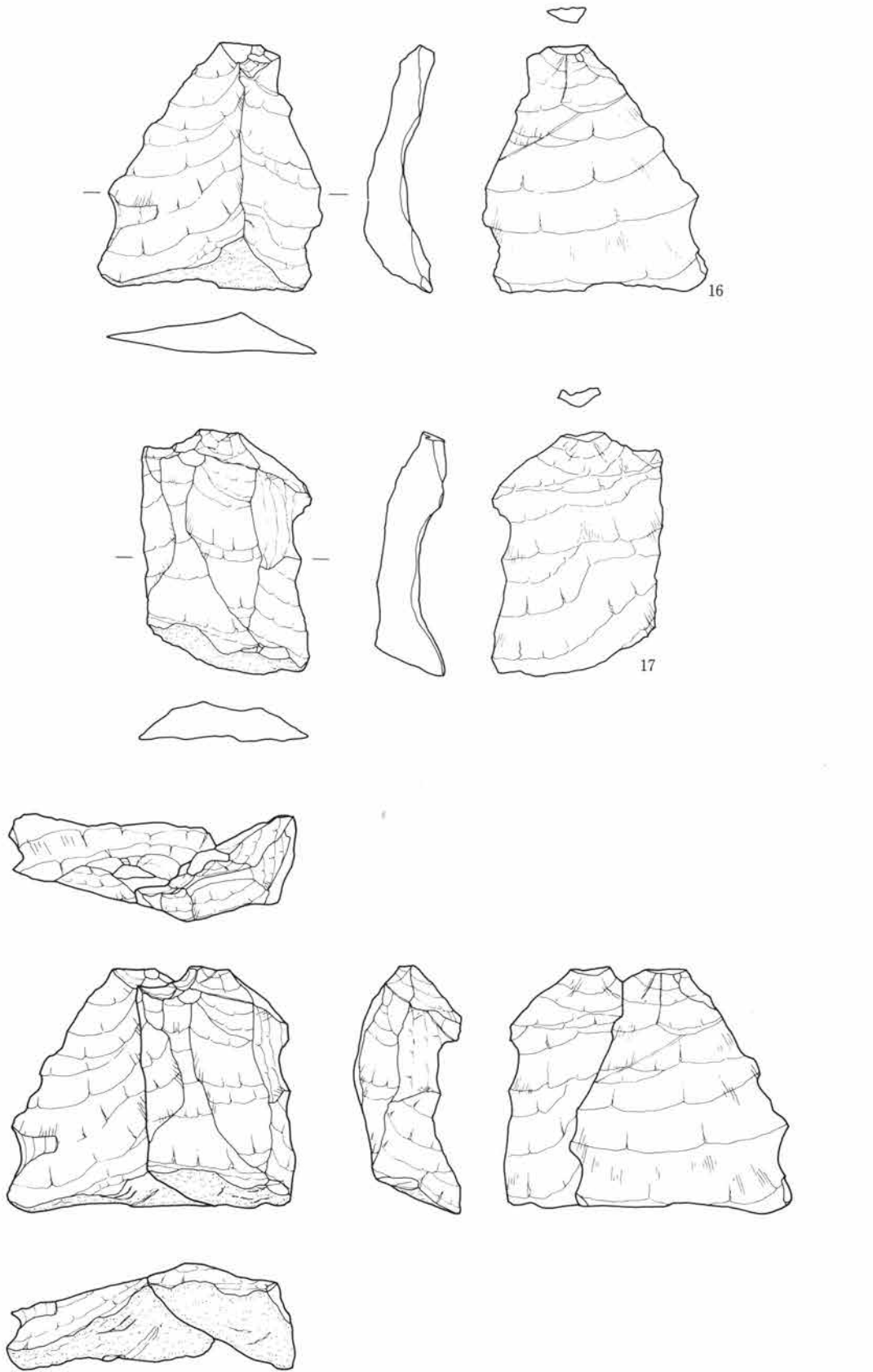
出土した資料が接合した例は、1組のみである。素材は径約15cm程の黒色安山岩の礫を用いていると考えられる。まず、原礫をいくつかの方向から加撃し、表皮を剥ぎ取りの為の剥離を行っている。その後、その剥離面を打面とし、剥片剥離作業が進行して行くが、その途上で剥離された剥片の末端が15である。打撃方向を多少変えて13が剥離されて、石核上の稜を剥ぐ様にして、断面三角形の12が剥離され、続いて、同方向より大型の剥片(9・14の接合したもの)が剥離される。さらに、ほぼ同様な過程でその剥離面を打面として連続的に比較的縦長の大型剥片が剥離される(16・17)。最後に、同じ作業面を用い、ほぼ打撃方向を90°転位して、数度剥片剥離がなされている(10)。この接合例にみられる剥片剥離行程は、石核に打面再生、頭部調整等が行なわれず、打面転移あるいは打撃方向の変えることにより、大型の剥片を剥離する行程を示すと考える。



第13圖 接合資料(石核)



第14図 接合資料(剥片)



第15図 接合資料(剥片)

0 10cm

遺物出土状況

遺物は、第VII a層から第VII b層下面の間約50cmの幅をもって出土しているが、その多くは第VII b層中の約20～30cmの間に集中する。ブロックとしては単一のものとして考えられるが、その範囲は調査対象地外にも延びることが十分予測されるため、ブロック全体としては明確に把握しきれない面がある。出土した遺物の垂直分布状況からしても1枚の文化層としてとらえることができよう。

ブロック範囲となる遺物の分布は、明確ではないがおよそ径6m程の円形の中に包括されると思われる。ブロックは、ナイフ形石器1点、石核1点、敲石1点、台石と考えられるもの1点、剥片等15点の総数19点から成る。

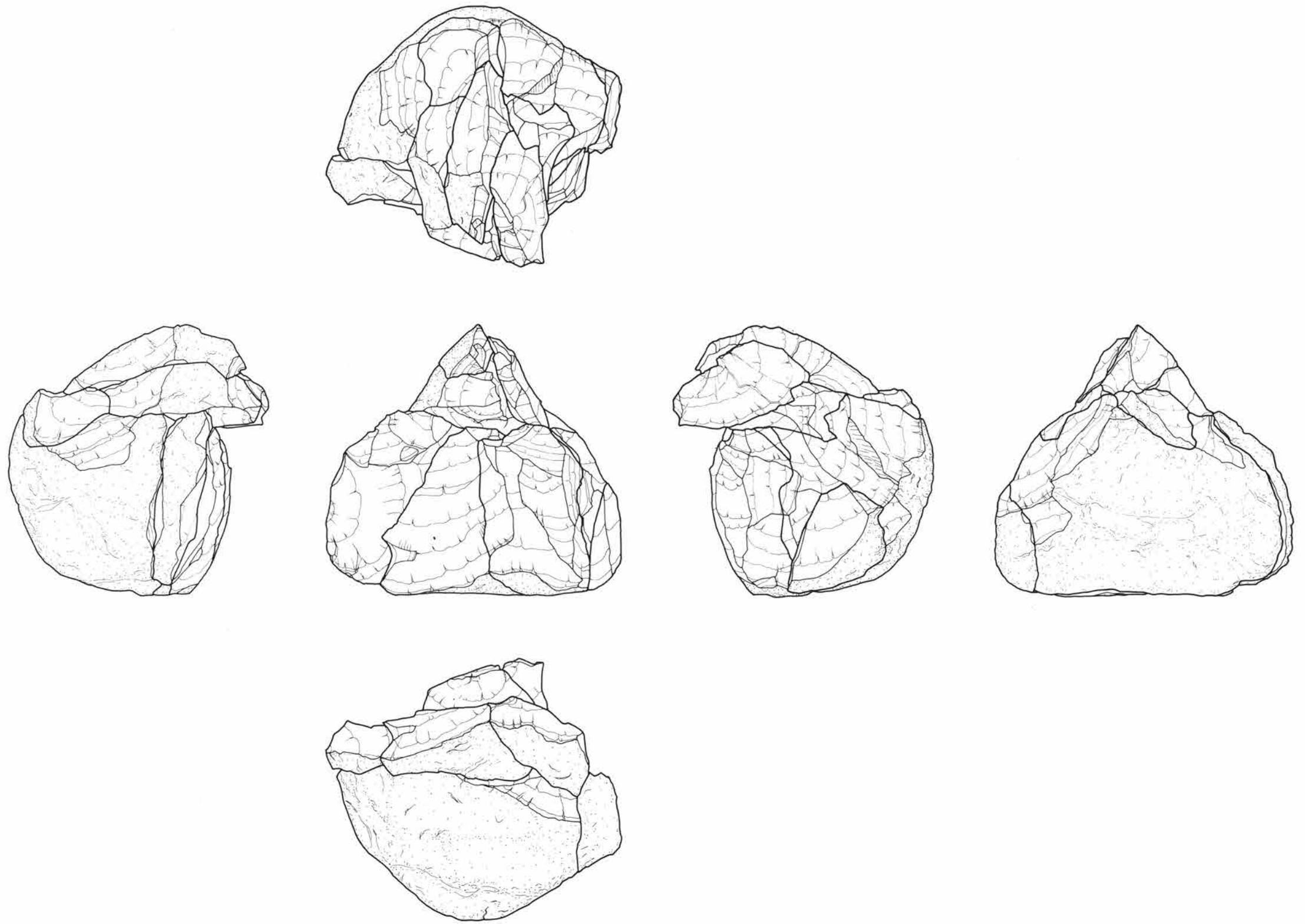
遺物の分布状況は、台石と考えられるものを中心とした場合、約50cm程西方に石核が、更らにその西方約120cm離れ敲石がみられ、周辺に剥片等が散布する。出土した石核及び剥片等の石材については、前記した如く黒色安山岩を素材としたものであるが、接合資料等の状況及び遺物の観察から2種類の母岩によるものと考えられよう。接合資料は、幅広の縦長剥片（第15図16・17）を除き石核を中心とした場合、剥片の多くは半径約2mの円の中に納まってくる。ナイフ形石器は、ブロック内において、剥片等の集中するやや外側に単独で出土している。石材についても黒曜石が用いられるのは、このナイフ形石器のみである。同様に縄文時代の第23号土壌より出土した黒曜石製の2次加工を施した石器については、このブロックに含めて考えるよりも、単一のものとして理解したい。

(谷藤)

表3 石器計測表

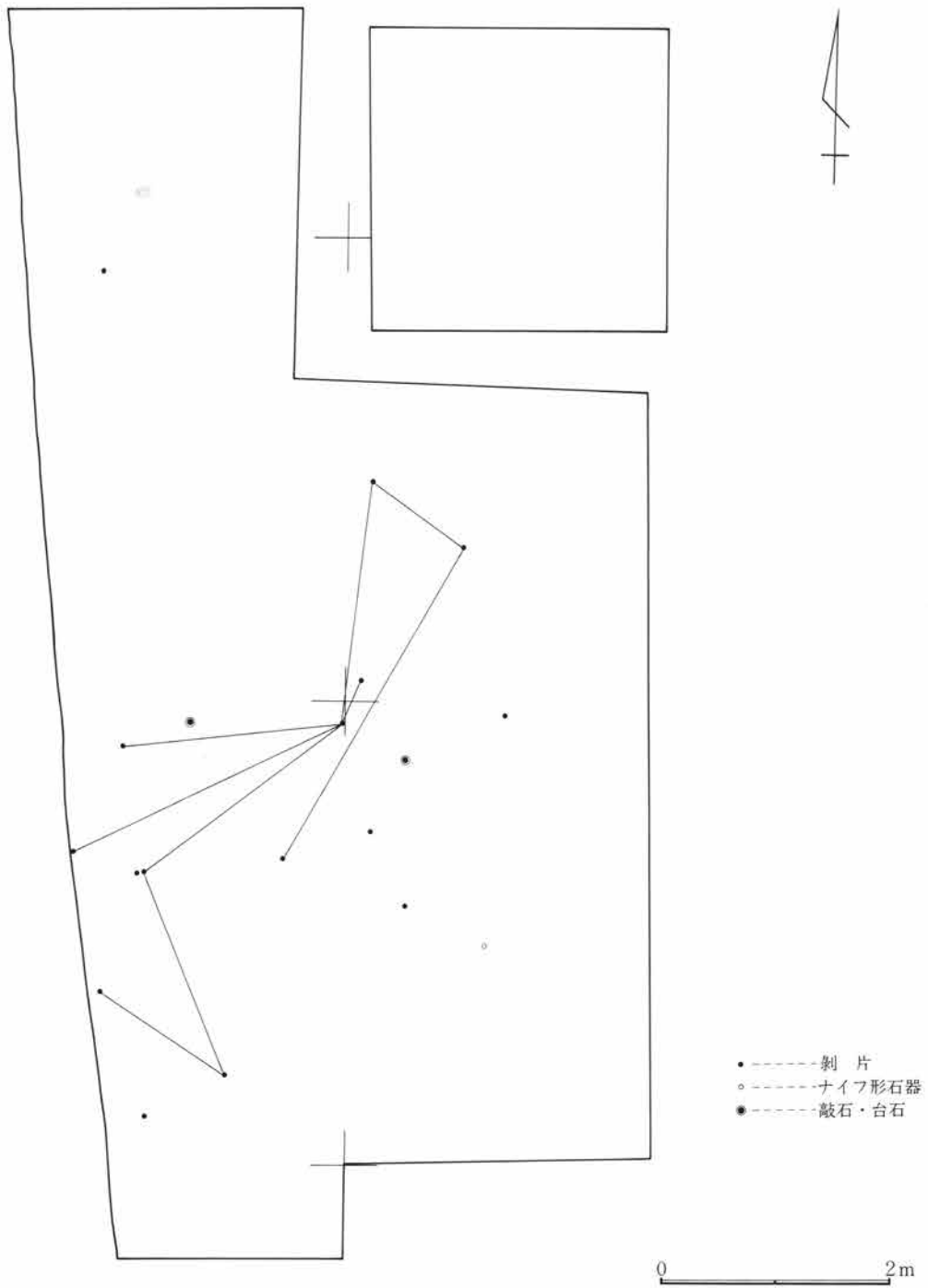
単位：長さ・幅・厚さcm、重量g、標高値m

遺物 番号	整理 番号	出土位置 (ブロック)	器 種	石 材	計 測 値				標高値	備 考
					長さ	幅	厚さ	重 量		
1	1	I	ナイフ形石器	黒曜石	6.24	3.78	0.65	19.60	284.34	
2	5	I	剥 片	黒色安山岩	5.82	5.62	1.22	40.40	284.39	
3	7	I	台 石	輝石安山岩	23.00	13.20	3.70	1420.00	284.44	
4	12	I	剥 片	黒色安山岩	(8.40)	(2.45)	(1.40)	37.94	284.68	
5	11	I	剥 片	黒色安山岩	(2.62)	(1.30)	(0.40)	1.14	284.49	
6	14	I	剥 片	黒色安山岩	4.20	4.50	0.88	26.51	284.43	
7	13	I	剥 片	黒色安山岩	3.62	6.20	0.75	28.00	284.35	
8	17	I	剥 片	黒色安山岩	7.70	5.15	1.80	94.27	284.19	
9	16	I	剥 片	黒色安山岩	7.95	6.90	1.45	88.29	284.34	
10		I	剥 片	黒色安山岩	(2.25)	(1.80)	(0.30)	1.16	284.30	
11	4	I	剥 片	黒色安山岩	6.10	3.90	0.85	26.10	284.49	
12	8	I	石 核	黒色安山岩	11.67	11.40	8.30	1040.00	284.52	
13	15	I	剥 片	黒色安山岩	3.80	4.90	1.25	37.31	284.60	
14	9	I	剥 片	黒色安山岩	7.70	6.40	3.15	178.24	284.60	
15		I	剥 片	黒色安山岩	2.40	4.35	0.55	7.04	284.86	
16	6	I	敲 石	輝石安山岩	7.75	9.50	6.95	670.00	284.28	
17	10	I	剥 片	黒色安山岩	5.75	9.30	2.10	126.60	284.25	
18		I	剥 片	黒色安山岩	(1.80)	(3.30)	(1.05)	3.51	284.25	
19		I	剥 片	黒色安山岩					284.75	遺物不明
	3	23土壌	2次加工石器	黒曜石	3.90	0.70	0.64	1.80		
	2	6号住	ナイフ形石器	黒曜石	2.40	1.05	0.35	0.80		



第16図 接合資料

0 10cm



第17図 石器組成及び石器接合図

第3節 縄文時代

1 住居址

本遺跡において検出した住居址は8軒であったが、縄文時代のものは6軒で総て前期のものであった。調査区は東西に延びた緩やかな馬の背状の台地を南北にわたって調査を行なった。住居址は中央部の高い部分より南側の傾斜部分にかけて分布している。(第18図) 各住居址はV層下面より掘り込まれており、VIIIないしはIX層あたりまで達している。形状は3・4・8号住居址がほぼ方形に近く、5・7号住居址は隅丸長方形である。6号住居址は不定形であった。炉は3・4・6号住居址は埋甕炉、5・7号住居址は地床炉であ

た。8号住居址に関し

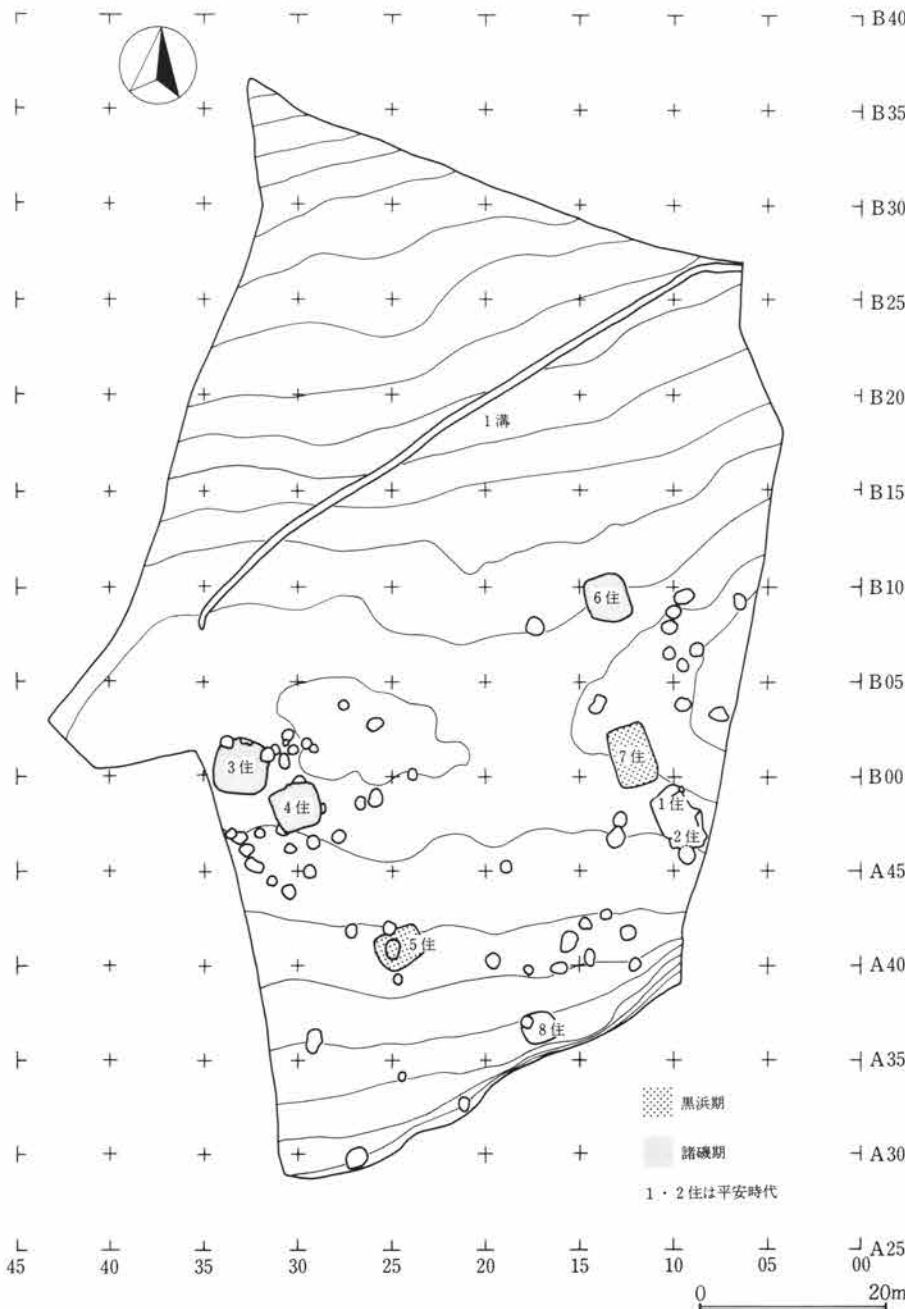
ては認められない。

時期的には、5・7号住居址が前期中葉、3・4・6号住居址が前期後半に比定されるが、その中でも若干の先後関係が認められるようである。

8号住居址については積極的に住居址として判断する所見は得られていないが、規模、ピットの存在等によりここでは住居址として記載する。

出土遺物はそれ程多くはなかったが、埋甕等はその器形を窺い知ることができる。また7号住居址より出土した注口土器は興味深い。

中期初頭、五領ヶ台期の土壌が検出されているが住居址は見られなかった。



第18図 中畦遺跡全体図

3号住居址 (第19図)

調査区の中央西寄り、31~34-A49~B01グリッドに位置する。平面の形状は、隅丸方形を呈しており、四辺がやや外側へ膨らむ。北東コーナーには40号土壌、北西コーナーには38号土壌が重複するが、先後関係は不明である。

規模は、5.75m×5.60mで、長軸方向はN-3°-Eである。各壁は、かなり直に立ち上がっているが、床面と接する付近は、なだらかな丸みを持つ。壁高は、平均50cmである。

本住居址は、床面が二面確認され、炉体土器のレベル差等からも拡張されたものと思われる。ただし上面の床は若干の焼土を認めたものの、非常に軟弱で、不明瞭であった。また明確な柱穴等も検出されなかった。

図中、一段高まった、周囲にテラス状に廻る部分が拡張部分と思われるが、南側に関しては明確には見られなかった。

二面の床面差は、中央部分で、約15cm程あり、埋土はローム中に若干炭化物を混じえたふかふかの土であった。拡張後の使用は極めて短期間であったと考えられる。

古い住居址の規模は約4.3m×4.3mでほぼ方形を呈していたと思われる。掘り上げ後の床面の状態は、中央部がやや凹んでおり、余り踏み固められた様子は見られなかった。

炉址 (第20図)

検出した二面の床からは若干の焼土は認められたが、地床炉等の施設は無く、埋甕炉が3箇所に設けられていた。その中の1つは、拡張前の住居に伴うものと考えられる。他2個体のものは、ほぼ同レベルに埋め込まれており前者との差は約15cmである。いずれも深鉢形土器の胴部を利用しており、全周している。

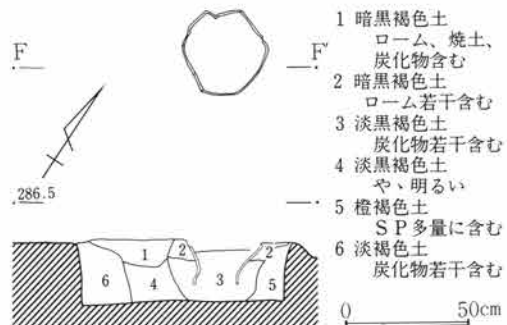
位置は、古いものは中央、やや南西寄りに設けられており、他の2個体は南東寄りと南西寄りに置かれていた。それぞれの周辺より若干の焼土が見られたが、量的には少なく、比較的顕著に見られたのは、南東部に設けられた土器の周囲で、炭化物を混じえて検出されている。

断面の観察によると、土器の周囲を若干掘り込んで埋設しており、やや焼土を含んだ土で埋められている。

遺物出土状態 (第21図)

本址より出土した遺物は、土器および石器片である。土器は総数140点で、覆土、および床面より出土している。

2・3・8は埋甕炉である。この内2は拡張前の住居址に付随するもので、14号土壌出土の土器片が接合している。1は床面より出土しており、散在していた破片が接合したものであるが、4号住居址および13号土壌より出土した破片が口縁部に接合した。6は本址出土の土器と38号土壌覆土中のものが接合したものである。遺物の多くは拡張後の住居址床面付近から出土したものが多く、覆土中の破片も若干ながら接合したのもあった。また、遺物の分布を見ると、住居址東半分にやや集中して見られ、住居埋没途中に投げ込まれた様子を示している。

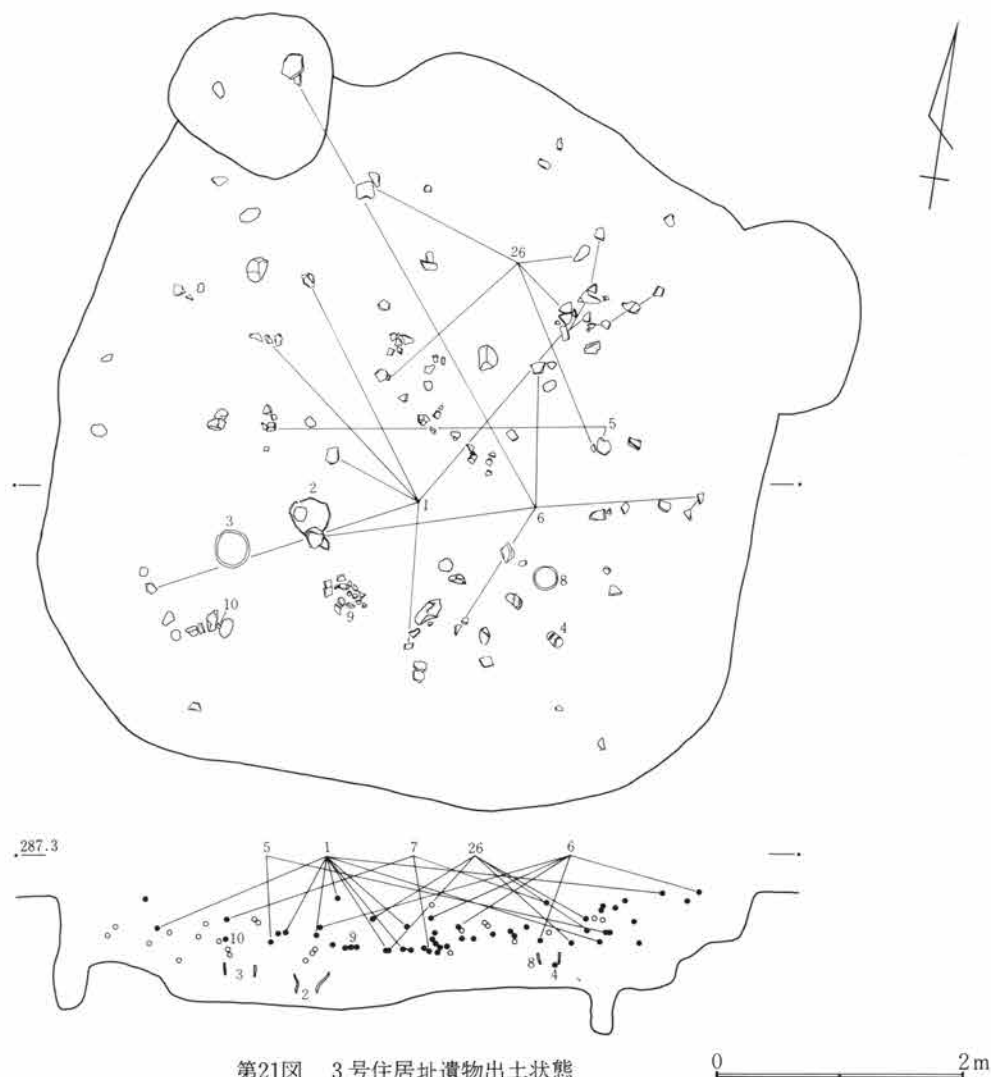


第20図 3号住居埋甕炉

石器類は、打製石斧、スクレイパー類および磨石が出土しており、特に磨石は7個と量も多く、特徴ある組成を示すものとして注目される。

3号住居址出土土器 (第22・23・24・25・26図)

1は深鉢形土器である。四単位の波状口縁を持ち、波頂部は、さらに3つの山を持つ。胴部中位で、若干締まる。口縁部はやや外反しながら立ち上がり、波頂部はゆるく内彎する。



第21図 3号住居址遺物出土状態

地文にRLの縄文を施し、胴部には半截竹管による平行沈線を4～6本単位で横に3段廻らし、口縁直下にも4本単位で施文、その下には、やはり半截竹管による4～6本単位の平行沈線で菱形を形づくり、その中に渦巻文を描く、口径42.5cmでやや大型の土器である。

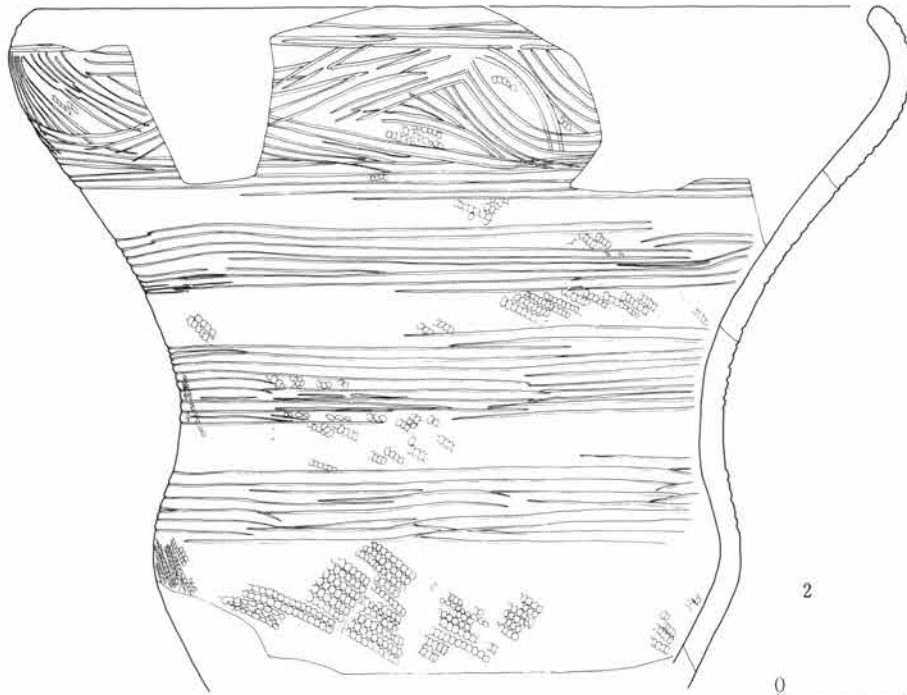
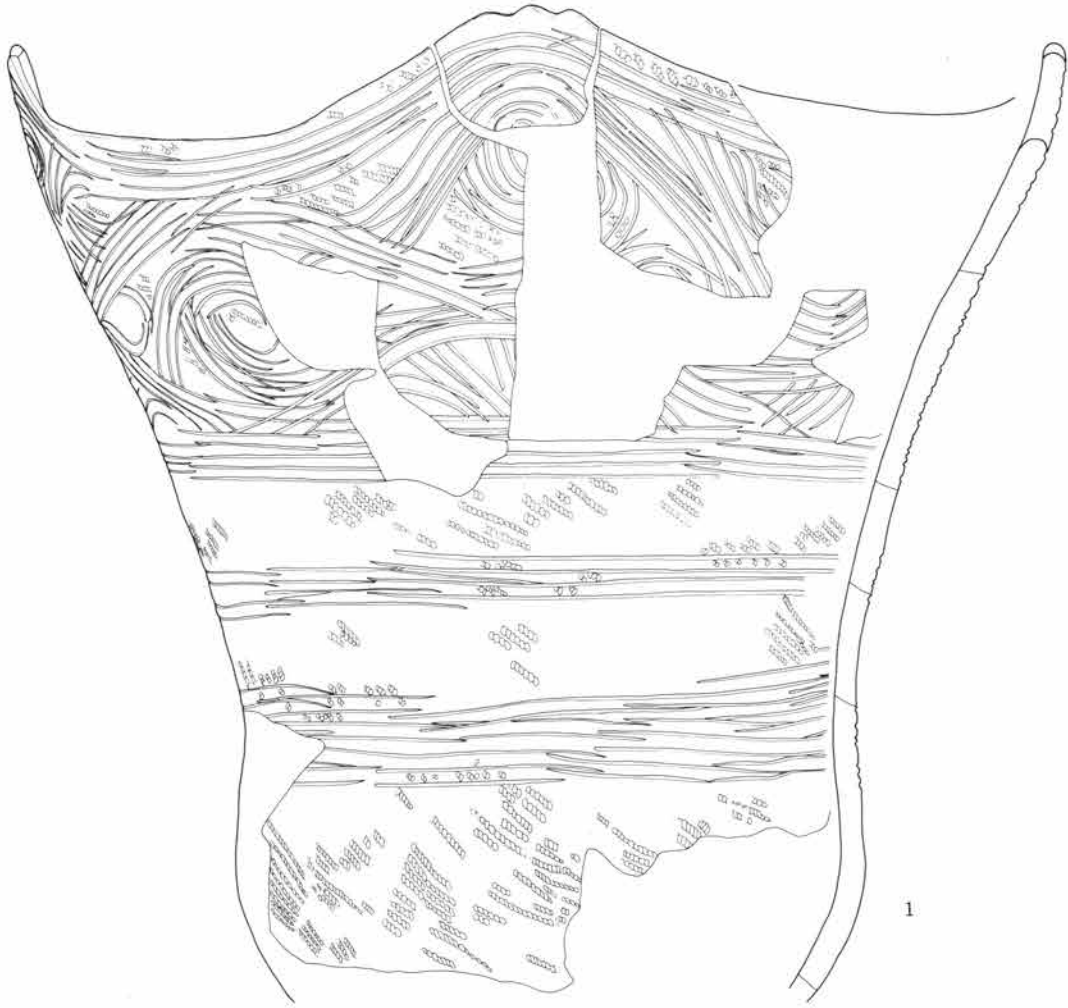
2は胴部中位でやや締まったキャリパー形を呈す。地文にRLの縄文を施し、竹管による平行沈線を8本単位で3段廻らし、さらに口縁部には、4～6本単位の沈線を廻らす。その間に、鋸歯状、弧状のモチーフが描かれる。口縁は平縁と思われる。内外面ともにざらざらした、砂っぽい土器である。

3は口縁部が外側へ開き、ゆるく4単位の波状口縁を持つ。その波頂部分は肥厚し、指で押したように凹んでいる。地文には、結節を持つRLの斜縄文を施し、口唇直下に4本、頸部横位に4本単位で矢羽根状刻みを持った浮線文を付す。また口縁部には弧状のモチーフを、やはり浮線文で描いている。

4は深鉢形土器の胴下半部である。地文にLの縄文を施し、半截竹管による平行沈線を4本単位で3段横に廻らす。焼成はしっかりしており、外面は比較的平滑である。

5は深鉢形土器の胴部である。筒形で上部がやや外反しながら立ち上がる。幅4mm程の浮線を3～2本単位で横に廻らし、その上にRLの縄文を施す。かなり剥落、磨滅がひどい。

6は深鉢形土器。胴部はゆるく膨らみながら立ち上がり、口縁部でややしまり、外へ開く。胴部にはRL

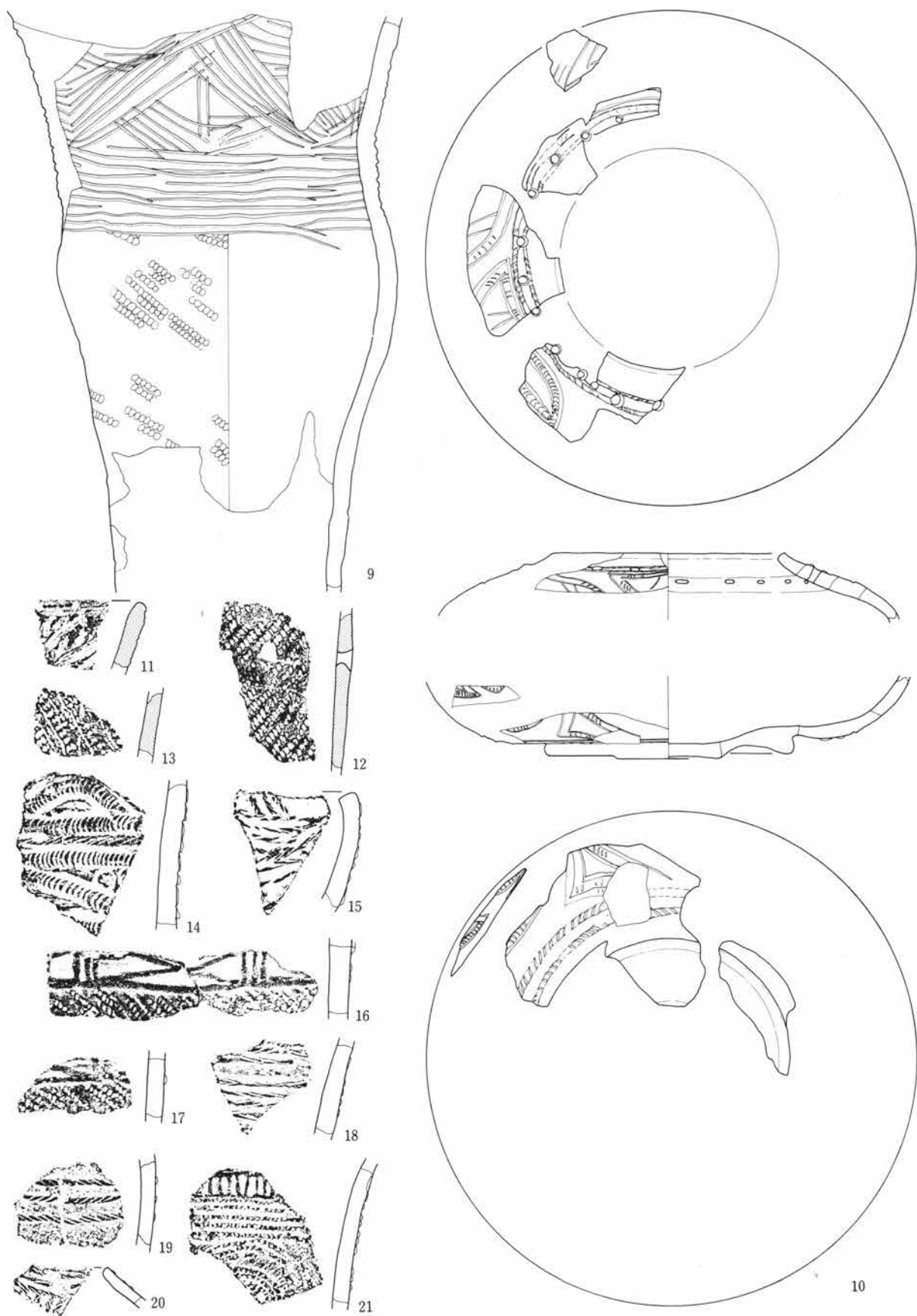


0 10cm

第22図 3号住居址出土土器(1)

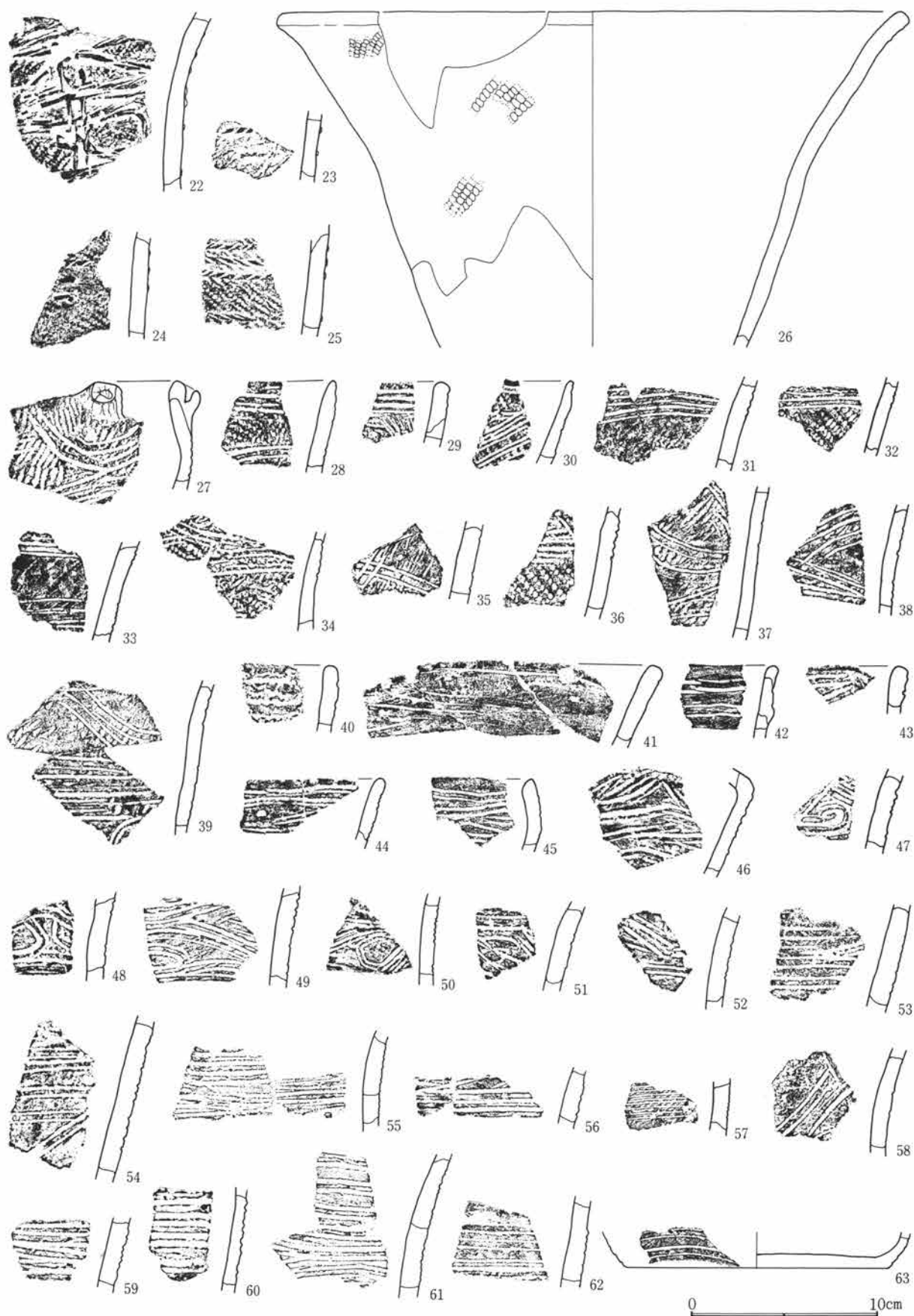


第23図 3号住居址出土土器(2)

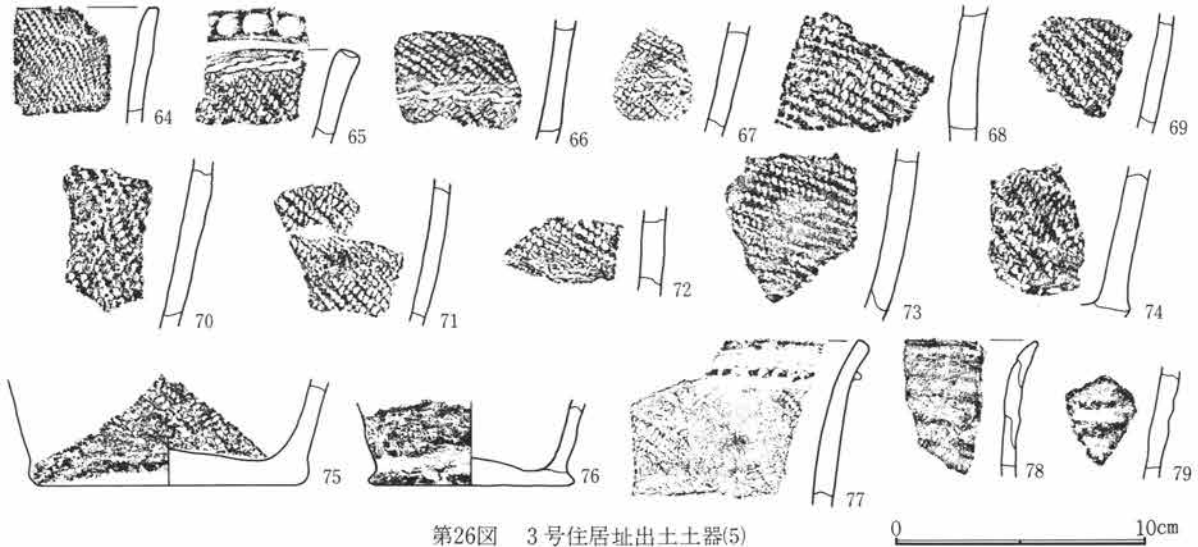


第24图 3号住居址出土土器(3)

0 10cm



第25图 3号住居址出土土器(4)



第26図 3号住居址出土土器(5)

の縄文を施し、竹管刺穴を持った隆帯で口縁部文様帯を2段画す。文様は、竹管による平行沈線を綾杉状に横位に施文する。焼きの良い、堅緻な土器である。

7は筒状で胴部上半が外へ開く深鉢形土器の胴部である。半截竹管による平行沈線を横に廻らし、幅広にあげた部分に、山形のモチーフを描く。外面は丁寧に研磨された、赤褐色を呈する土器である。

8は深鉢形土器の胴部である。RLの縄文を横位に施文する。内面に摩き痕が明瞭に観察される。

9は深鉢形土器である。胴部上半で膨らみ、口縁部は外反する。口縁上部を欠損しているが、波状口縁を持つと思われる。胴部にはRLの縄文を施し、半截竹管による平行沈線を10本廻らして上に文様を画す。文様は、竹管による沈線6~8本単位で、山形、菱形のモチーフを描く。

10は特殊浅鉢形土器である。胴上半および下半部が出土しているが接合しない。胴部は著るしくくの字に屈曲し偏平な底部を持つ。胴部文様は木ノ葉状入組文を持ち、口縁部には矢羽根状の刻みを持つ浮線を2条廻らし、その間に径5mm程の小孔を配し、そこから口唇部までは無文としている。

11は深鉢の口縁部片である。先の整わない半截竹管による沈線を不定方向に走らす。地文に無節Lを施文。12はLRの縄文を持つ、両面からの穿孔による補修孔を有す。13は正反の合である。14は竹管による連続瓜形文で菱形、弧状の文様を描くものと思われる。瓜形文間の盛り上がった所には篋状工具による刻みを付し、竹管刺突による円形文を持つ、15はキャリパー形を呈すと思われる深鉢形土器の口縁部片である。刻みを持つ浮線文で斜位、横位の文様を描く。16・17はRLの縄文を施し、その上位に浮線文による梯子状文、その間にX字状の文様を描いている。18は刻みを矢羽根状に付した浮線文を平行に廻らす。19は平行に施された浮線文上に矢羽根状の刻みを持つ土器で、胎土中に石英粒が目立つ。20はキャリパー形土器の口縁と思われる。口縁に沿って3条の浮線文を廻らし、さらに下へ垂下させる。21は地文にLRの縄文を施し、浮線による梯子状文を付し、その下に、竹管刺突を持った浮線文で平行線、渦巻文を描く。22は地文にLRの縄文を施し、粗い刻みを持つ浮線文で幾何学文様を描く。胎土に砂利が目立つ。23・24・25は地文にRLの縄文を施し、横位に刻みを持った浮線文を貼り付けている。26は朝顔状に口縁が開く深鉢形土器である。LRの縄文を施文すると思われるが、ほとんど観察できず、一見無文に見える。口唇部外側に陵を持ち、推定口径は33.9cmである。27は口唇に円形の突起を持つ深鉢形土器の口縁部である。地文に無節Lの縄文を施文し、平行沈線による、弧状のモチーフを描く。内外面ともにややざらついた感じのする土器である。28・29・30は

口縁部片である。何れも地文にRLの縄文を施文し、口縁に沿って1～3単位の平行沈線を廻らし、その下に斜位、弧状のモチーフを描く。30の口唇部はかなり薄くなっている。31は無節Lの縄文を施文し、その上に平行沈線を多段に廻らす。焼きの良い土器である。32は地文とRLの縄文、33は地文に無節Lの縄文を施し、その上に横に半截竹管による平行沈線を廻らす。34・35・36・37・38・39は半截竹管による平行沈線で斜状、弧状のモチーフを描く。34・36はRLの縄文を地文とし、35は無節L、37・38・39は同一個体で撚り返し、 $L < \frac{1}{2}$ の縄文を地文としている。40は口縁部片で、口縁に沿って半截竹管によるコンパス文を3段横に廻らす。砂粒が目立つ土器である。41・42・43・44は口縁に沿って平行沈線を廻らす。地文は見られない。45は波状口縁の波頂部近くと思われ、竹管による平行沈線の末端が見られる。46はキャリパー形土器の口縁部近くであると思われ、屈曲が見られる。半截竹管による波状、弧状のモチーフが描かれる。内面に炭化物の付着が見られる。47・48・49・50・51・52は口縁部文様帯の破片である。半截竹管による弧状、渦巻文を描く。53・54・55・56・59・61・62は、平行沈線文を基調とした文様をとる、同一個体である。59はやや細めの竹管を多段旋文する。60は、太めの半截竹管を深めに施文している。63は深鉢形土器の底部である。地文にLRの縄文を施文し、底部近くに2段の半截竹管による平行沈線文を廻らしている。64・65はRLの縄文を横位施文する深鉢形土器の口縁部である。65は末端に結節を持つ。口唇部は指頭圧痕が見られる。66・67は同一個体片である。結節を持ったRLの縄文を横位に施文している。68・69・70・71・72・73・74はRLの縄文を横位施文する。74は底部近くの破片である。75は、深鉢形土器の底部片である。底部外側がやや外に張り、胴部は外反しながら立ち上がる。底は中央部でやや厚くなっている。RLの縄文を施す。76は無文の底部片である。底面端部が外に張り出し、底部の中央は厚くなっている。胎土中に雲母が目立つ。77は口縁部が外反する深鉢形土器の口縁部片である。口縁に沿って一条の結節浮線文を廻らす。78・79は無文。

4号住居址 (第27図)

調査区中央の西寄り、28～31-A47～49グリット、3号住居址の南東側に近接して位置している。形状はほぼ方形を呈し、各コーナーは、やや丸みを持つ。規模は、4.9m×4.7mであるが、北辺がやや長い。

主軸方向は、N-23°-Wである。41・42・43号、および50号土壌が重複するが、いずれも同時期かまたは古くなると思われる。

各壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、高さは平均で80cm程あり比較的良好な状態であった。床面は、中央部がやや高まり、堅くなっていたが周辺部は軟弱な状態で、壁周溝は見られなかった。

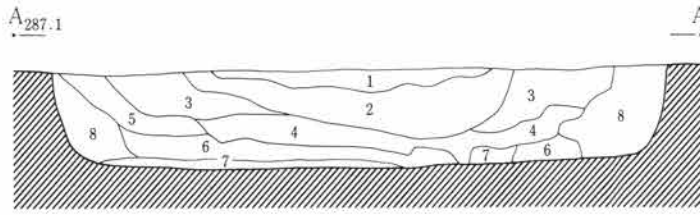
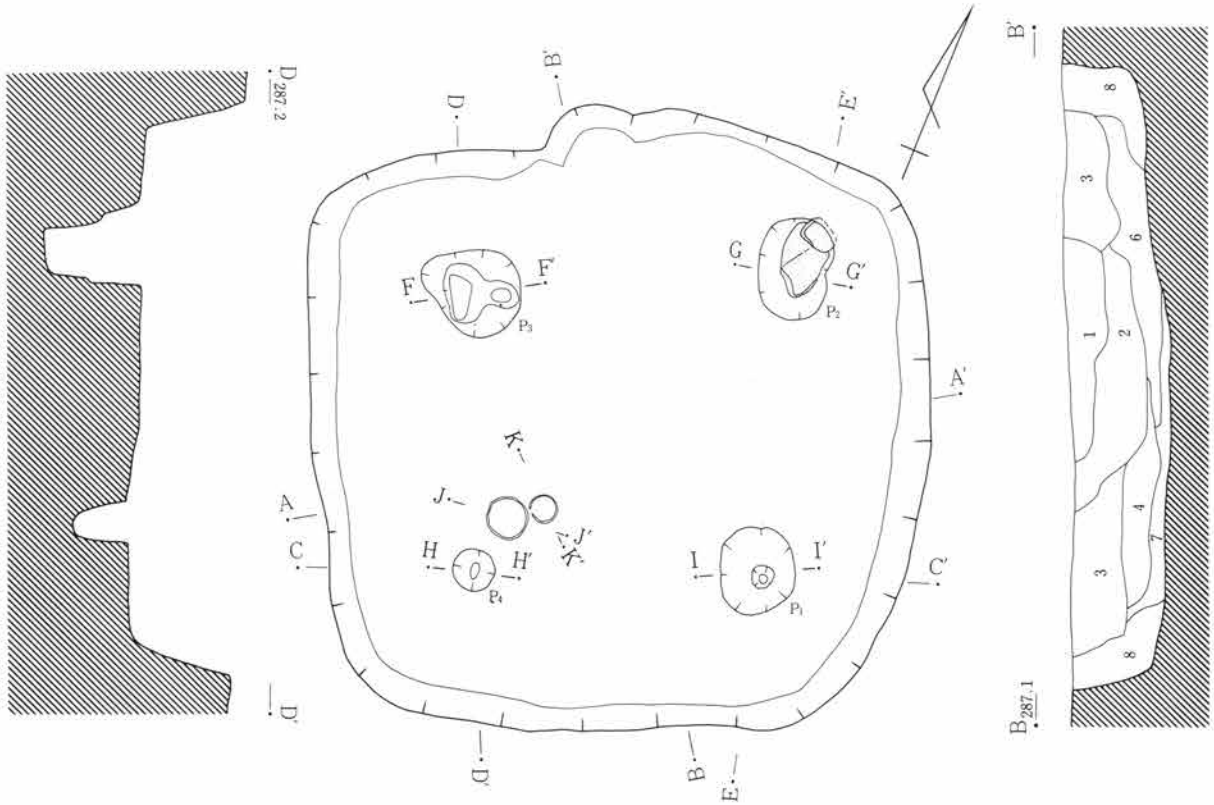
柱穴は、ほぼ対角線上に乗るように、4本検出された。それぞれの規模は、ピット1が70×60cm、深さ60cm。ピット2は80×50cm、深さ42cm。ピット3は80×70cm、深さ75cm。ピット4は30×30cm、深さ57cmである。ピット2は底に長さ70cm程のやや偏平な川原石が埋め込まれたような状態で検出された。ピット4を除いて各ピットは底がかなりすぼまり、掘り込みが2段になっている。

炉址 (第29図)

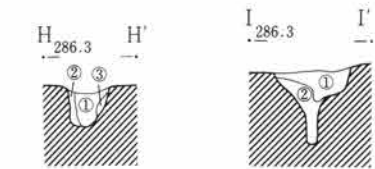
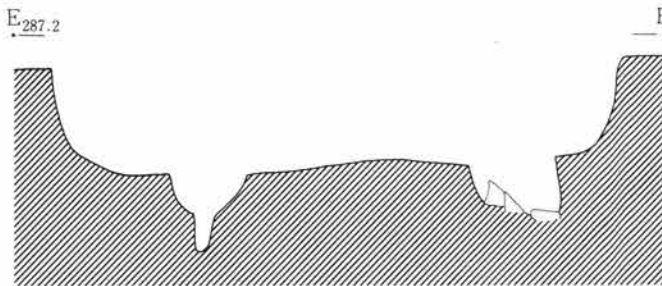
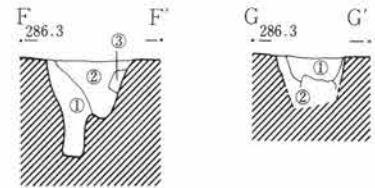
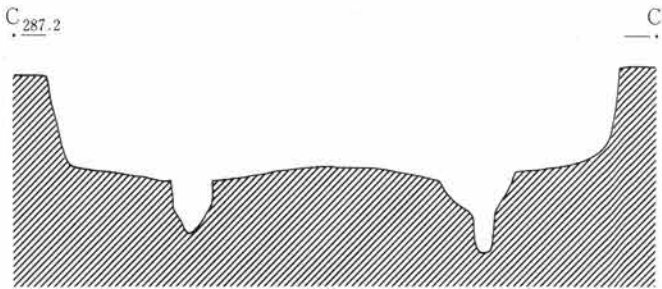
住居址の中央やや南西寄り、ピット4の北東に大小の埋甕炉が並んで検出された。共に深鉢の胴部を利用しており、口縁部、底部を欠損する。小さい方の南側に胴部 $\frac{1}{2}$ 程の土器片が添えるように埋め込まれていた。

炉の内側、および周辺部には、若干の炭化物を含む焼土が見られた。また埋甕のある部分は周辺よりもわずかに凹んでおり、ふかふかした感じであった。

使用されている土器は、口縁の部分が欠損しており、使用により、欠け口はかなり摩滅していた。



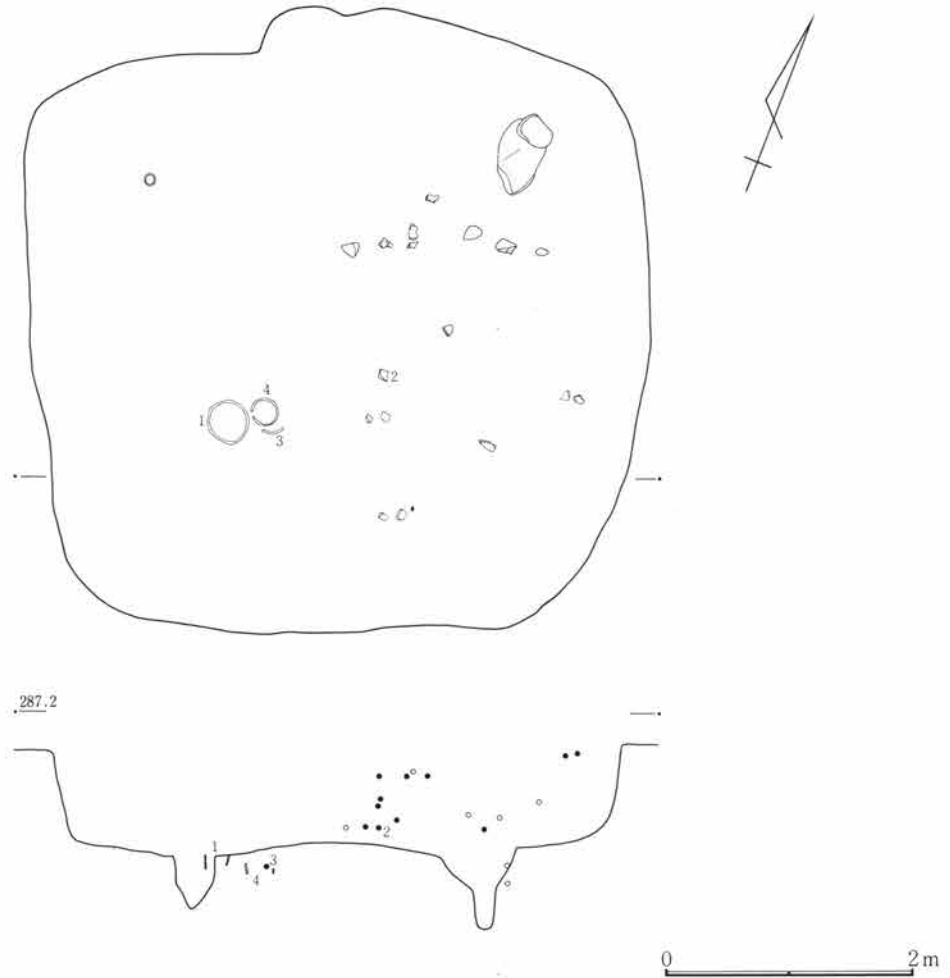
- | | |
|---------|-------------|
| 1 暗褐色土 | SP含む |
| 2 黒褐色土 | SP含む |
| 3 茶褐色土 | SP、炭化物若干含む |
| 4 茶褐色土 | 3層よりも炭化物目立つ |
| 5 明茶褐色土 | SPもほとんど含まない |
| 6 明茶褐色土 | や、粘性を持つ |
| 7 明茶褐色土 | 6層と似るがや、明るい |
| 8 地山 | |



- | | |
|--------|--------|
| ① 暗褐色土 | ローム粒含む |
| ② 明褐色土 | |
| ③ 橙褐色土 | ローム粒含む |

0 2m

第27図 4号住居址



第28図 4号住居址遺物出土状態

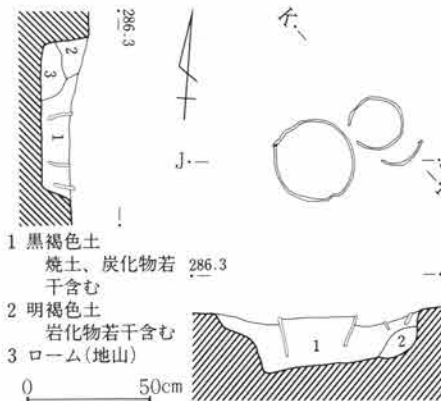
遺物出土状態 (第28図)

本址より出土した土器片は総数102点、石器および石片は108点であり、比較的少なかった。

出土した土器中、完形品は無く、器形を推定し得るものも4個体程であった。1・3・4は埋甕である。2は床面上より出土している。その他は覆土中から出土しているものが多く、また東側部分に集中する傾向が見られた。遺物の出土状況等から3号住居址より古くなると考えられる。

出土土器 (第30・31図)

1は、深鉢形土器である。胴上半部がやや外反しながら立ち上がる。胴部下半にLRの縄文を施し、その上の文様帯部分には、半截竹管による平行沈線を横位に描き継ぐように多段施文している。表面ざらついた砂ぼい土器である。口縁部および胴部下半を欠損している。埋甕炉として使用されていた土器である。2は底部がやや外へ張り出す小型の深鉢形土器の胴下半部である。半截竹管による集合沈線で、縦にX状に5単位の文様。下半には横位に帯状に多段施文する。胎土に黒雲母目立ちやや白ぼい土器である。焼成は良い。3は浮線文土器である。胴部にやや膨らみを持つ

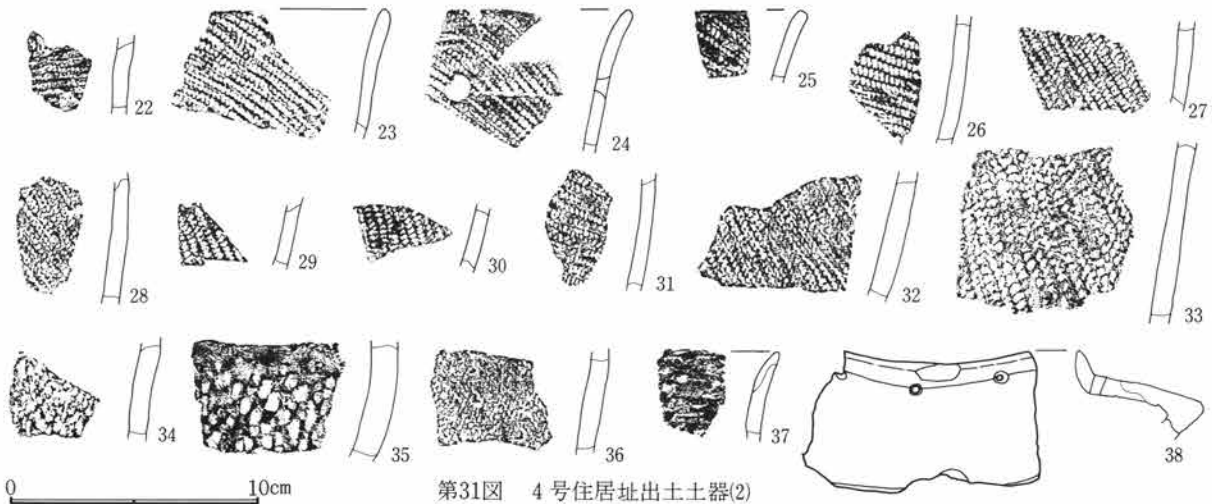


第29図 4号住居埋甕炉



第30图 4号住居址出土土器(1)

て立ち上がり、口縁部は外へ開く。地文にRLの縄文を横位に施文し、胴部に3本1単位に粘土紐を貼り付け、その上より矢羽根状方向に刻みを付す。また頸部は4本単位である。胎土中には0.5mm前後の砂粒が目立つ。この土器は4の埋甕炉にほぼ接して立てかけられた状態で検出されており、かなりの火熱を受けている。接合した破片の一部は3号住居址より出土している。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好で堅緻な感じのする土器である。4は、埋甕炉として使用されていたもので、1に隣接して据えられていた。深鉢形土器の胴部で全周する。RLの縄文を全面に横位施文している。焼成良く、内面に研磨痕が見られる。5はLRの縄文を施文する。胎土中に径1～3mm程の石粒が見られる。表面にはやや凹凸が目立つ。6は口縁部片である。口縁に沿って半截竹管による平行沈線を横位に施す。口唇部はやや薄く円頭状となる。7はLRの縄文を持つが、節が不明瞭である。内面は丁寧に磨かれている。8は深鉢形土器の頸部部分片である。半截竹管により、幅1.5cm程の無文帯を作り、その上に半截竹管による平行沈線で綾形文を描く。砂粒若干含み、表面に剥落が見られるが、焼成は比較的良好な土器である。9は地文に無節Lの縄文を持つ浮線文土器である。浮線文上の刻みは同方向に付けられている。焼成は良い。10は地文にLRの縄文を持つ浮線文土器である。浮線文は篋状工具による刻みを持ち、ややカーブが見られることから、弧状ないしは渦巻状のモチーフを描くものと思われる。薄手で焼成良く、内面は丁寧に磨かれている。11はキャリパー型深鉢形土器の口縁部である。RLの縄文を施し、口縁に沿って2条の平行沈線を付し、口縁部に獣面を模したと思われる把手が付く。全体的に砂粒の混入が目立つ土器である。内面に剥落が見られる。12・13・14は同一個体である。波状口縁を持ち、口縁端部が内側へ屈曲するキャリパー形の深鉢形土器と思われる。地文にLの無節縄文を横位施文し、胴部と口縁部文様帯を多段の半截竹管による平行沈線で画く。その上部に弧状のモチーフを竹管による集合沈線で描く。また口縁端部には3本単位で沈線が施される。砂粒が目立つ土器である。15は波状口縁土器の波頂部分である。口縁に沿って2条の平行沈線が走り、下に波状の平行沈線を描く。16は口縁部片である。地文にRLの縄文を施し、平行沈線で口縁に2条、下に幾何学文様を描いている。17は地文にRLの縄文、平行沈線が付される。胎土、焼き等から8と同一個体と考えられる。18・19は同一個体。半截竹管により幾何学文様を描く。やや幅広の半截竹管により施文している。焼成は良い。20は地文にLの無節縄文を施し、やはり半截竹管により幾何学文様を描く。12・13・14と同一個体か。21は地文にLの無節縄文、上部に平行沈線文を横位に施す。20の胴体部片かと思われる。22はLRの縄文を持ち、径1.2cmの円形竹管文が付されている。節の細い縄文が施文されている。23・24・25・26・27・28・29・30・31は同一個体、RLの縄文を全面に施文する深鉢形土器であろう。やや薄手の作りで、焼成も良い。24は径10mmの補修孔が、表面より穿孔されている。淡い褐色を呈する。32はRLの縄文が施される、非常に焼成の良い土器である。細い原体が使用されている。33はRLの縄文が施される。節の中の繊維方向が明瞭に観察される。内面は丁寧に磨かれている。34はRLの縄文を施す。35はRLの縄文を施す。かなり太い原体を用いており、施文も浅い。やや厚手の土器である。36はRLの縄文を施すが、押圧が弱く施文が不明瞭である。焼成の良好な土器である。37は無文土器の口縁部片である。口唇部は薄く仕上げられており、やや尖り気味である。表面には指頭圧痕がわずかに観察される。38は特殊浅鉢形土器の口縁部片である。胴部で鋭くくの字に屈曲し、口縁部は短く立ち上がって、口唇部は尖り気味となる。また口縁に沿って径5mm程の円孔が、約3cm間隔で穿けられている。外面、口唇部内側は丁寧に磨かれている。



第31図 4号住居址出土土器(2)

5号住居址 (第32図)

調査区中央やや南寄り、23～25-A39～41グリッドに位置する。南傾斜地にあたり主軸方向は、N-54°-Eである。形状は、南西側がやや広がる台形を呈す。各壁長は、北西および南東壁が4.8m、北東壁3.3m、南西壁4.0mである。現存の壁高は最大57cmで、平均40cm程であった。

中央部やや西寄りに45号土壌、北西壁中央に46号土壌の重複がある。共に本住居址よりも新しいと思われる。それぞれの壁はやや斜めに立ち上がっているが、壁の上部は、地山が軽石層であることも手伝って、かなり崩落しており、部分的にはかなり外側へ開くような所も見られた。

幅20～25cm、深さ10cmの壁周溝が南西コーナーおよび南東の一部を除き、ほぼ全周する。周溝内には50cm程の間隔を置いてピット状に20～30cm程掘り込まれた部分があり、壁柱穴と思われる。

床面は、平坦で比較的良く踏み固められており、ローム粒と黒色土を混ぜた土で張り床としている。

炉址

明確なものは検出されなかったが、中央部に長さ25cm程の川原石が据えられてあり、その前面、および周辺に若干の焼土が検出されている。

遺物出土状態 (第33図)

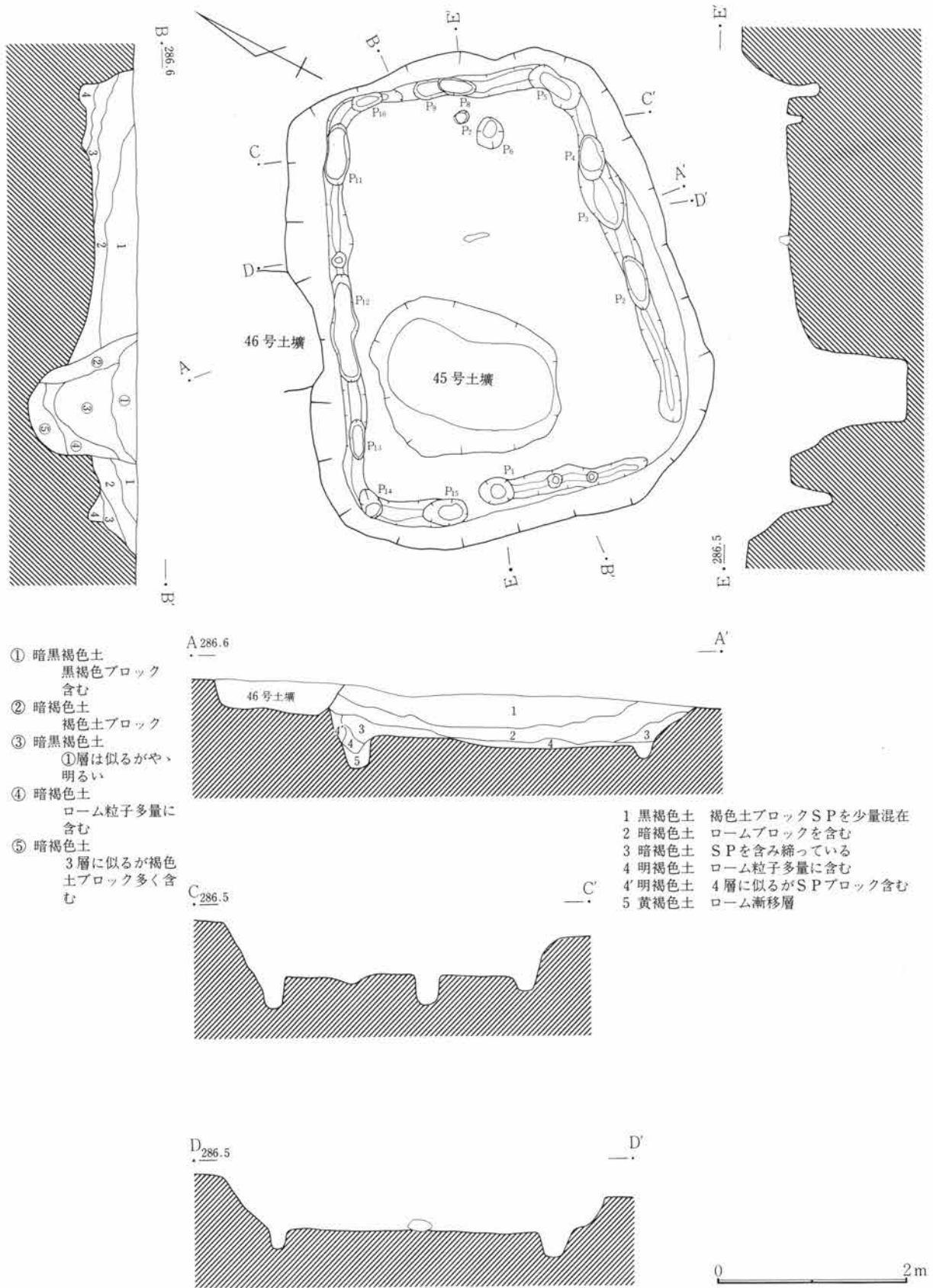
遺物は土器が368点、石器、石片が70点出土している。覆土上面より出土したものが多く、器形を推定できるようなものは最上面よりの出土である。住居の埋没がほぼ終了した時点で廃棄されたものと思われる。

逆に床面からの出土遺物は少なく、むしろ石器類が主であることが注目される。

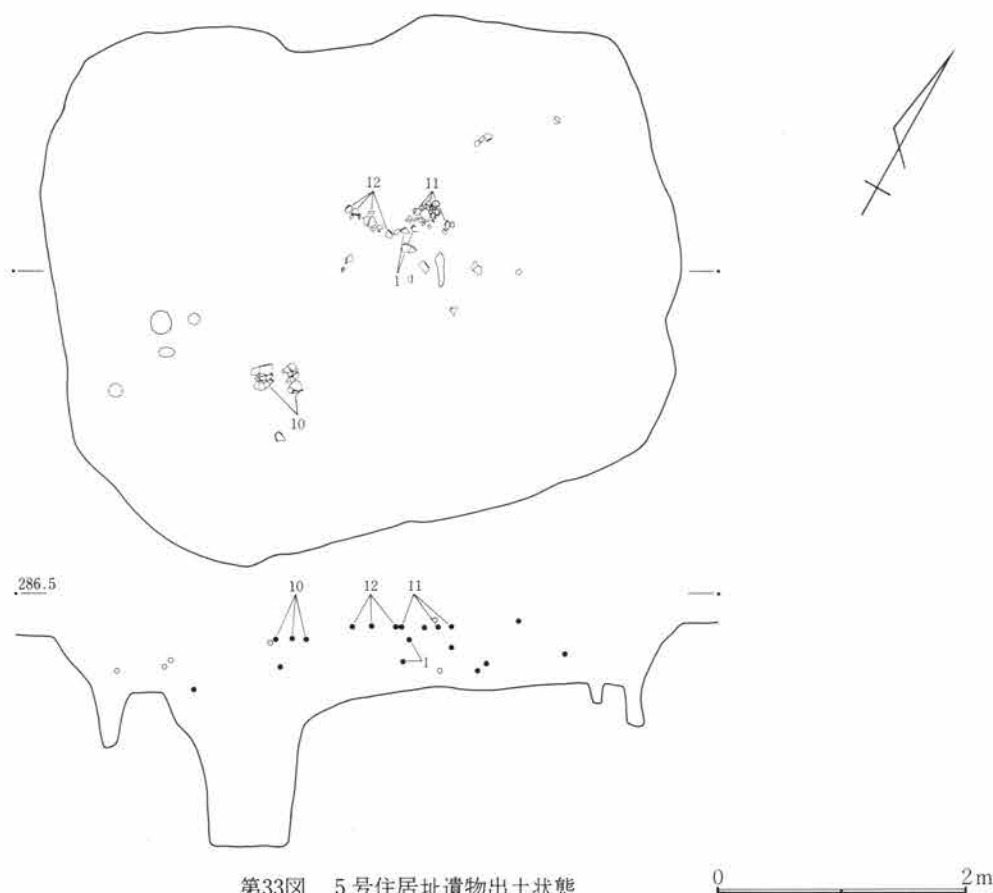
45号土壌の掘り込みによって、失われた遺物もあると考えられるが、おそらく廃棄時には、土器類はほとんど持ち去られたと考えられる。

出土土器 (第34・35・36・37図)

1は推定口径45.0cmの深鉢形土器である。やや口縁部で開き、6単位のゆるい波状口縁を呈すと思われる。その中の1ないし2箇所の外側に耳状の貼付文が付されることが考えられる。さらにその波頂部より口縁に沿って左右へ2本ずつ連続爪形文が施され、爪形文の両側は盛り上がっている。その爪形文上には約10cm程の間隔を置いて、平たく中央の凹む径2cm程の円形貼付文が付されている。さらに、その下位には半截竹管による、2本1単位の連続爪形文で菱形を作り、その中に十字またはX状に文様を描く。口縁直下にも、縦に4本単位の半截竹管による刺突列が見られる。胴部にはRLを用いて菱形を意匠した羽状縄文が施されている。

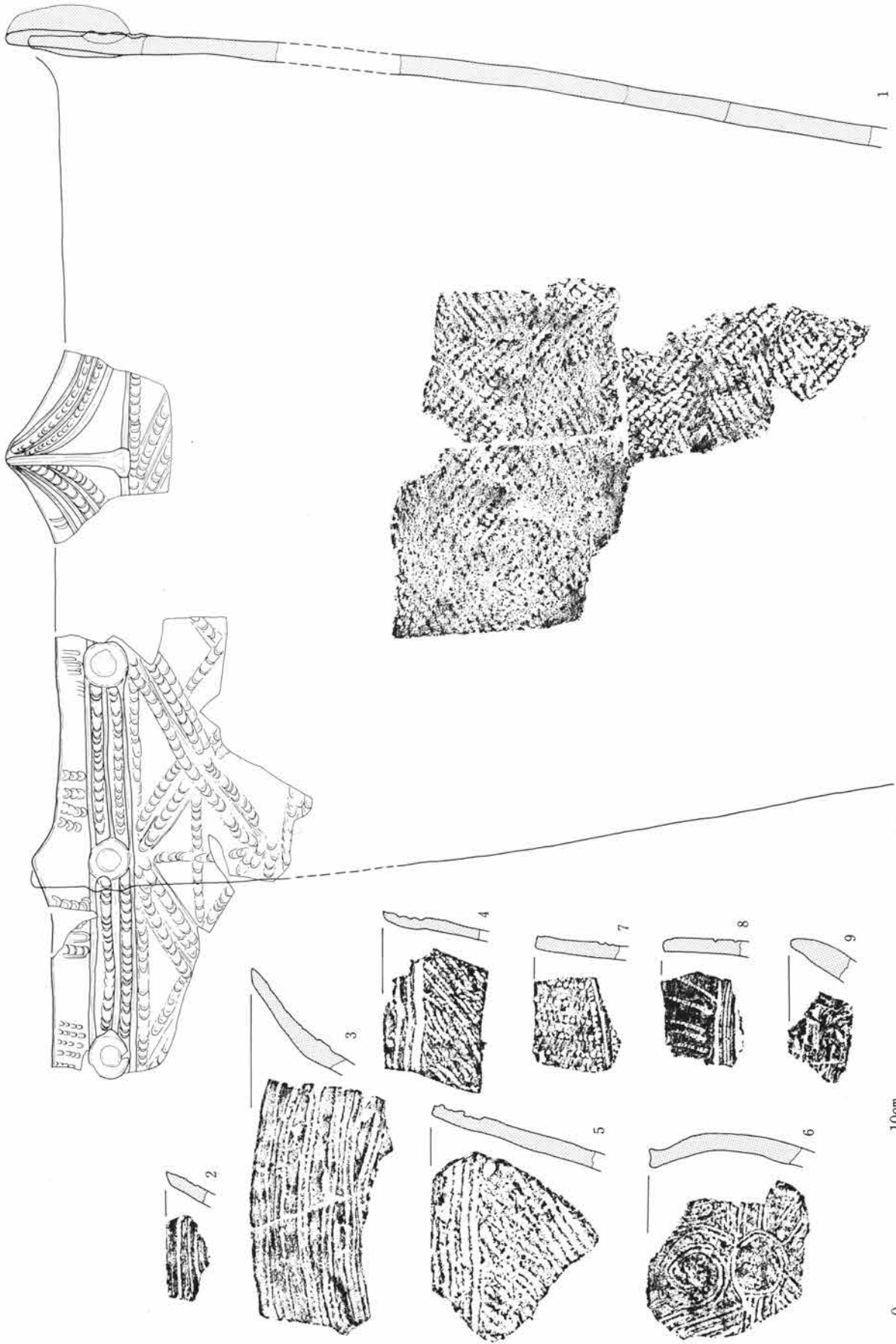


第32図 5号住居址



第33図 5号住居址遺物出土状態

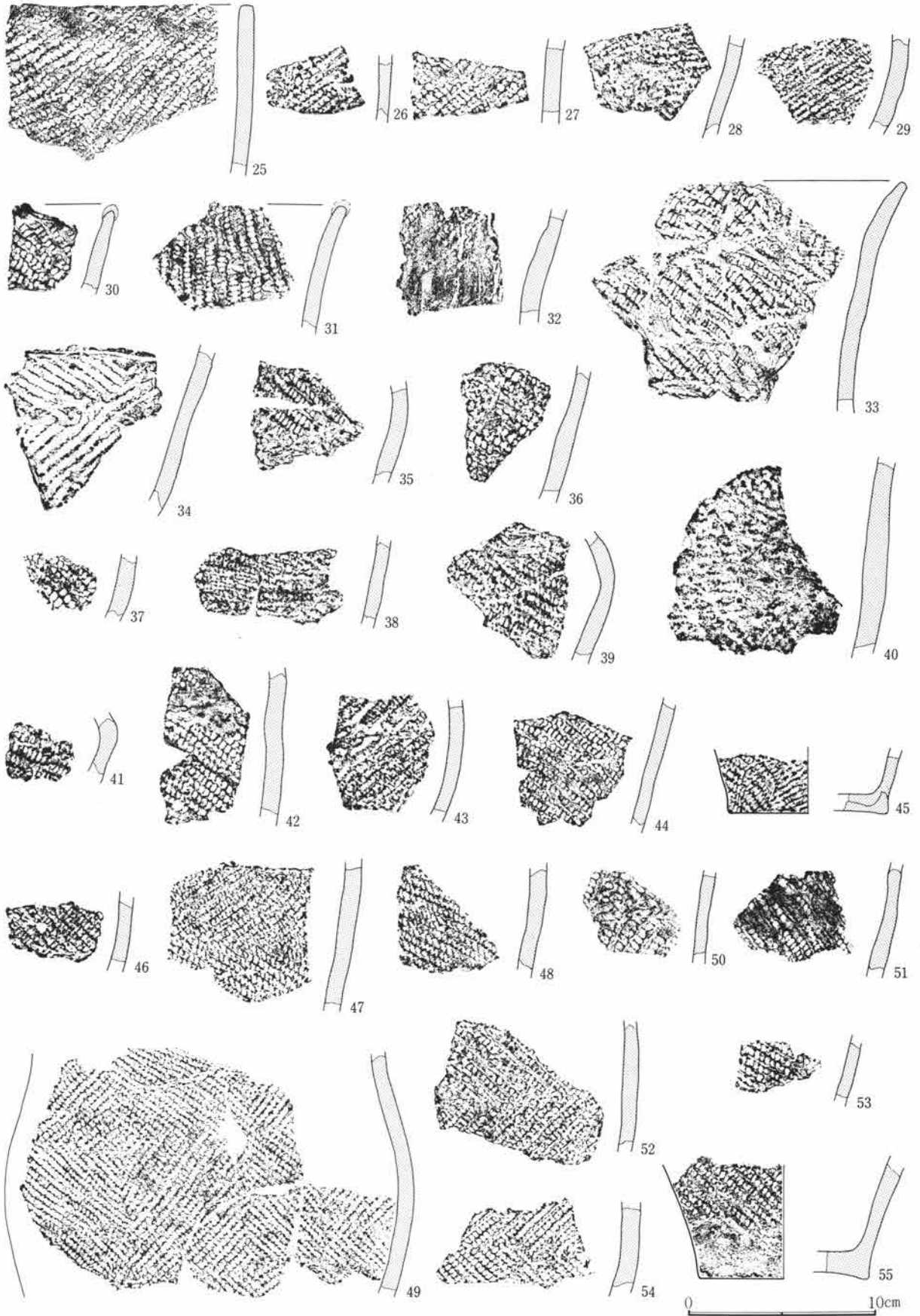
胎土中には多くの石英粒が目立ち、かなり二次的な火熱を受けた部分もあり脆弱であった。内面は丁寧に研磨されている。2・3は口縁部片である。肉薄の竹管により平行沈線文を横位に施文する。幅広の沈線状に見える。内面にはかなりの剥落が見られる。口唇部は内そぎ状を呈す。4は口縁部片である。地文にLの無節縄文を施し、口唇下に2本の平行沈線を深く横位に廻らす。5も4と同じ文様構成であるが、地文に無節のLを施文。6は波状口縁部片である。内彎する波頂部は篋で押したように潰れている。地文にLの無節縄文を施し、波頂下に半截竹管による平行沈線で渦巻、円形文を描き、そこより回りに2～3本単位の平行沈線を放射状に描く。内面は平滑に磨かれている。7は口縁部に6本櫛歯により縦位に刺突を配し、さらにその下に横位に刺突、平行沈線を施す。口唇部は平らである。8は7と同種の文様構成を取るが、櫛歯は8本と思われ、施文具が若干カーブを持っている。かなり脆い土器である。9は波状口縁部片と思われる厚手の土器で、波頂部は薄くなる。文様は半截竹管による引きずり痕のようなものが見られるが、極めて不明瞭である。10はくの字に曲がった頸部から大きく開く口縁部を持った深鉢形土器である。ゆるやかな4単位の波状口縁を呈す。胴部文様はLRの縄文を横位に施文する。口縁部文様は、口縁に沿って4本の連続爪形文を廻らし、波頂下には菱形を描きその間にも小さな菱形を描く。胴部とは2本の連続爪形文で区分している。爪形文の押圧は浅く、工具をかなり寝かせて施文しており、胴部の縄文も節が不鮮明である。また口唇部は若干凹んだようになっている。推定口径は44.5cmである。淡褐色を呈している。11はほぼ器形を復元し得る土器である。底部からゆるく膨らみながら立ち上がり、頸部でくびれ口縁部が外へ開く。無節Lの縄文が粗く全面に見られるが、器面はかなり荒れており、作りも雑な土器である。12は、胴部から口縁にかけてゆるく開きながら立ち上がり、口縁部がやや外へ開く。全面に縄文を横位施文するが、胴上半部は節が不明瞭で



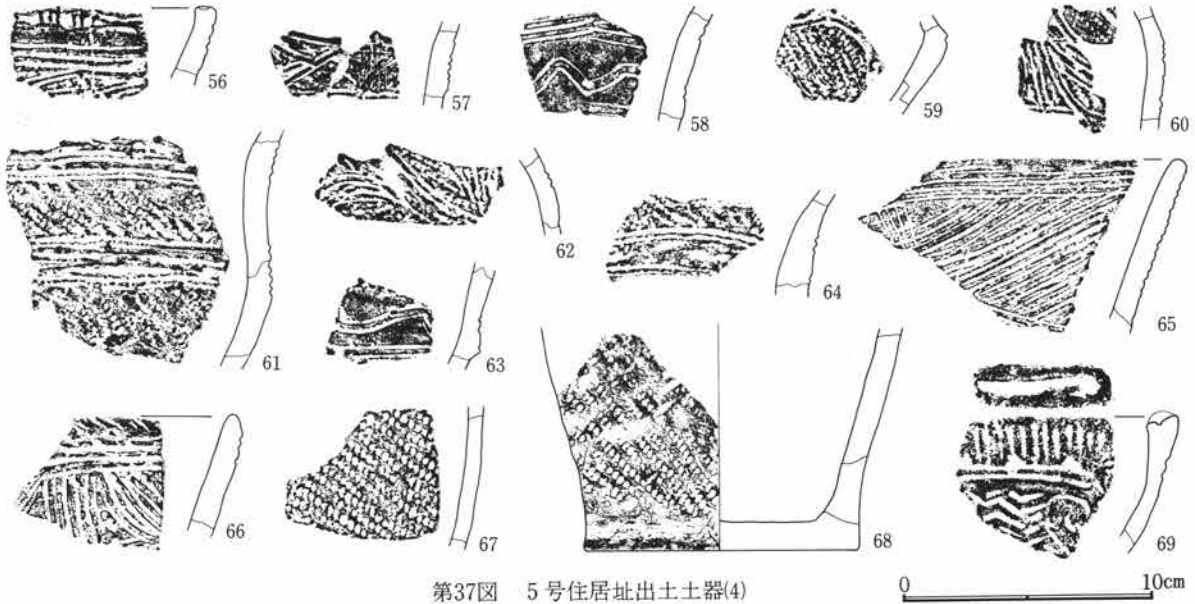
第34图 5号住居址出土土器(1)



第35图 5号住居址出土土器(2)



第36图 5号住居址出土土器(3)



第37図 5号住居址出土土器(4)

ある。2本の原体を用いたのかも知れない。13は波状口縁で、ループ文が見られる原体はRLである。口縁に沿ってループを2段廻らし、さらに下にループで菱形を描く。波頂部にはわずかに無文部が見られる。内面は良く磨かれている。14はRLのループ文が多段施文される。内面は良く磨かれている。15・16・17・18・19・20・21・22・23・24は無節の土器を一括した。15はLを横に施文している。16はLの反捲りである。17はLを縦位に施文している。18もLを縦位に施文する。原体はやや太めのものを使用。19はLである、条中の繊維方向が明瞭に看取できる。18と同一個体の可能性もある。20もLを施文する。21はLを縦位に施す。22は0段rを軸繩にS巻きしたものを回転押捺している。23は0段3本燃のRLで羽状縄文を表出している。原体を2本以上用いている可能性がある。24は底部である。22と同一個体と思われる、rを用いた縄巻縄文と思われる。表面はかなり荒れており、施文も雑である。胴部に向かって大きく開く器形を示す。25は深鉢形土器の口縁部である。LRの縄文が横位施文される。口唇部は平らに仕上げられている。26・27・28・29はLRの縄文を施文する。27は25と同一個体と思われる。30・31は同一個体である、RLの縄文を横位施文する。口唇部に、小豆大の貼付文を持つ。32は一見無文に見えるが、RLの縄文を横位に施文する。33は外反する深鉢形土器の口縁部片である。波状口縁を呈し、前々段多条のRLを横位に施文する。34はRLの縄文を横位施文する。35はRLの縄文を持つ。内面は丁寧に磨かれている。36は上端に半截竹管による平行沈線を持ち、下にはRLを用いて菱形の羽状縄文を表出すると思われる。37・38・39はRLの縄文を横位施文する。40はRL、LRの縄文を用いて菱形を表出する。火を受けてかなり脆弱である。1の胴部片の可能性もある。41は前々段多条のRLを施文する。42はLRを、43・44はRLを横位施文する。45は深鉢形土器の底部片である。無節Lと単節RLを交互に施文し、縦の羽状文を作る。底面は平滑に磨かれる。46・47・48は同一個体、口縁部文様帯を持つ深鉢形土器の胴部と思われる。 $R < \overset{R}{L}R$ と $L < \overset{L}{R}L$ を横位施文し、羽状縄文を作る。内面は丁寧に磨き上げられており、かなり焼成の良好な土器である。49は胴部がやや張る深鉢形土器である。推定最大径22cmで、RLとLRの原体を用いて菱形を表出している。50・51・52・53・54・55は付加条を持つものである。51はLR+R、52はLR+RRとRL+LLで羽状を表出する。53はRL+Rで付加したRは細い。54は2種類の原体RLと付加条LR+RRで横羽状を施している。55は底部片である。RLにRを付加している。56は深鉢形土器の口縁部片である。半截竹管による平行沈線を横位に2本、さら

に斜位に施す。口唇部に、細い粘土紐により交差波状の中に縦の浮線を付している。地文にRLの縄文が微かに認められる。57・58は半截竹管による平行沈線で、横位、波状文を描く、同一個体と思われる。59・60・61・62・63・64は同一個体である。62・63は胴部上半である。RLの縄文を地文にし、半截竹管により4条の平行沈線を横走させている。60・61・64は口縁部文様帯で、RLの地文縄文の上に、竹管による平行沈線で、渦巻弧状のモチーフを描く。焼成は余り良好ではない。65・66は口縁部片である。65は半截竹管による平行沈線を口縁に沿って2条を廻らし、下位に斜めの平行沈線を走らす。66は地文にRLの縄文を持ち、口縁に沿って2条、下位に直または、弧状の平行沈線を描いており、口唇部にはやはり竹管による斜めの刻みを付す。共に焼成は良く、堅緻な感じのする土器である。67・68はRLの縄文を横位施文する。67は胎土中に雲母粒子が目立ち焼成は良い。68は底部片である。69はやや内彎する口縁部片である。半截竹管により、口縁に沿って縦に平行沈線を廻らし、さらに三角形の刺突、平行沈線を配し、その下位に山形波状文、蕨状文を描く。口唇部には1本沈線を走らせ、小突起が付される。胎土中には砂粒が目立ち、表面がややざらついた感じのする土器である。

6号住居址 (第38図)

調査区の中央やや東寄り、12～14-A47～49、B00グリッドに位置する。今回調査した住居址の中では最も地形的に高い所に検出した。

検出当初より、その形状は不明瞭であり、覆土中にも多量の地山ロームブロックを含み、完掘後に判明したのであるが、径80cm程の時的にやや新しい土壌が2基並んで住居址内に掘り込まれていた。

住居の形状は、南東コーナー部分がやや突出した不正方形を呈し、各壁は地山との境がはっきりせず、確かな立ち上がりラインは一部しか確認し得なかった。

壁高は、平均25cmであったが北壁を除いた各壁は、なだらかな立ち上がりであった。

規模は、5.1×4.5m程で、主軸方向はN-20°-Wである。床面は、掘り込んだローム面をそのまま地床とし、やや踏み固めたものの、かなり凹凸が見られたが、周辺部分については、床面としての識別が困難であった。

柱穴は、検出されなかった。ピット1は90×75cm、深さ80cm。ピット2は90×80cm、深さ40cmで、共に五領ヶ台式期の土壌である。住居址の周辺にも該期の土壌が存在しており、一つのグループとして捉え得る。

炉址 (第40図)

住居の北寄りに埋甕炉を検出した。70×60cm程の穴を掘り、底部を欠いた深鉢を口縁部まで埋め込み使用している。若干の焼土が見られたが、炭化物等はほとんど見られず、土器の埋土も同様であった。

その他には炉として認められるようなものは無かった。

遺物出土状態 (第39図)

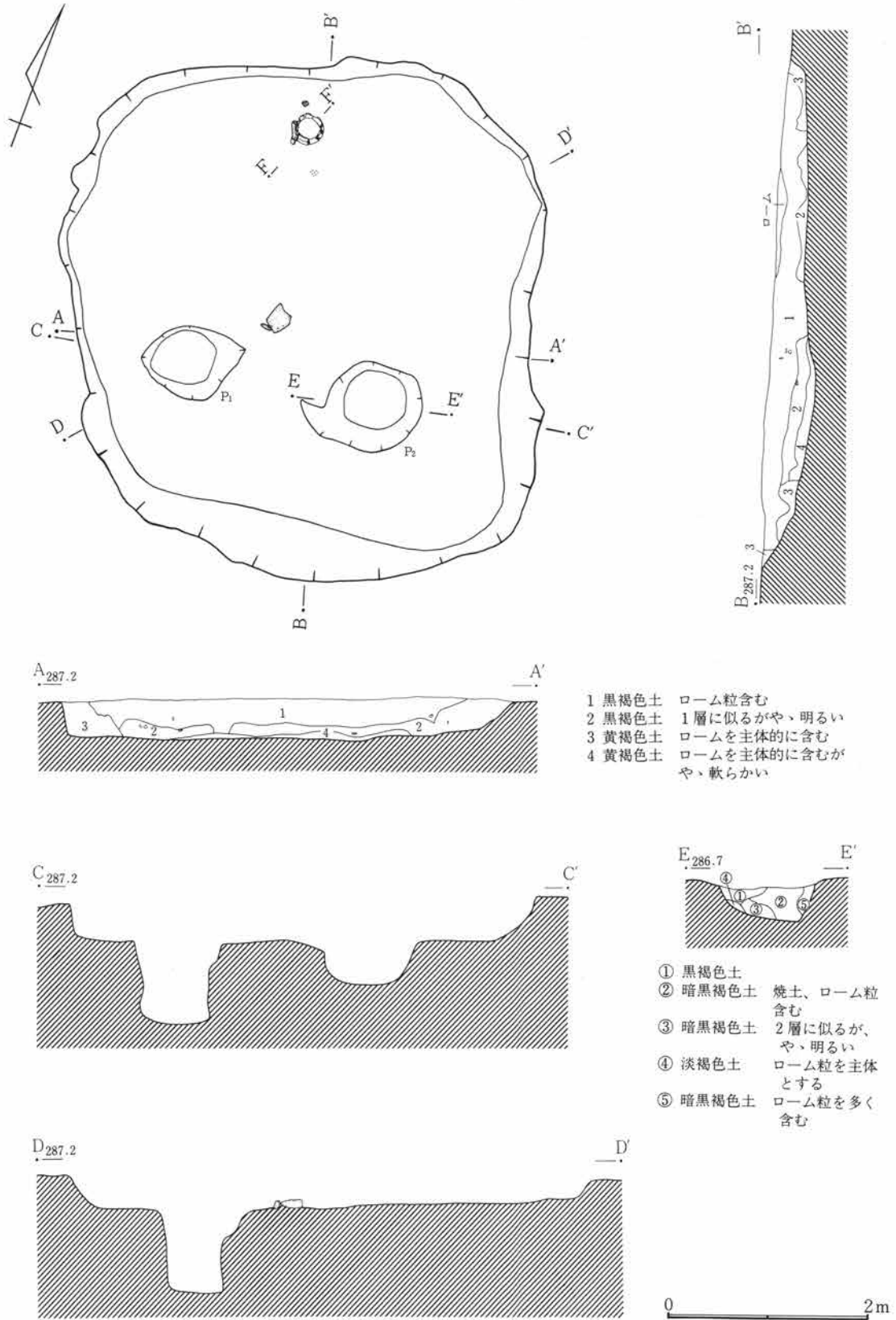
本址は、覆土上面より多くの土器片、石片が出土した。ほぼ全面より出土が見られたが、北側部分では少なかった。出土土器の総点数は361点で、石器・石片総数は154点であった。

出土遺物としては石片類が多く、また20～10cm内外の自然礫がかなりの数出土している。1は土壌に付随するものと思われ、住居址の時期よりは後出するものである。

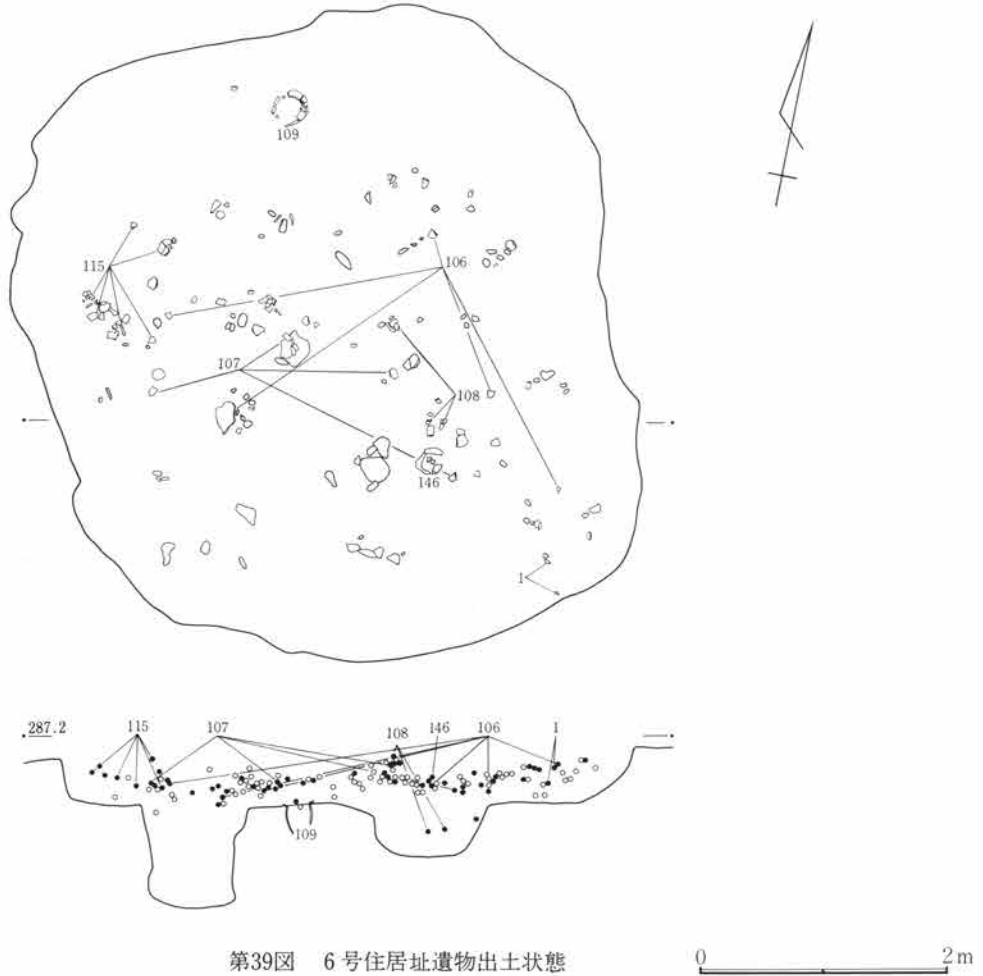
その他、埋甕に使用されていた109以外は、かなり散在する状態であった。

出土土器 (第41・42・43・44図)

1は口縁部が丸みを持って内弯する小型の深鉢形土器である。平縁で口縁に沿って2条の連続爪形文が1.5cm程の間隔をもって廻り、さらに屈曲部にも2条廻る。地文には、RLとLRの縄文を交互に横位施文し、

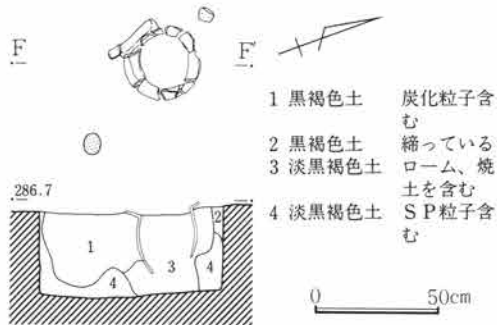


第38図 6号住居址



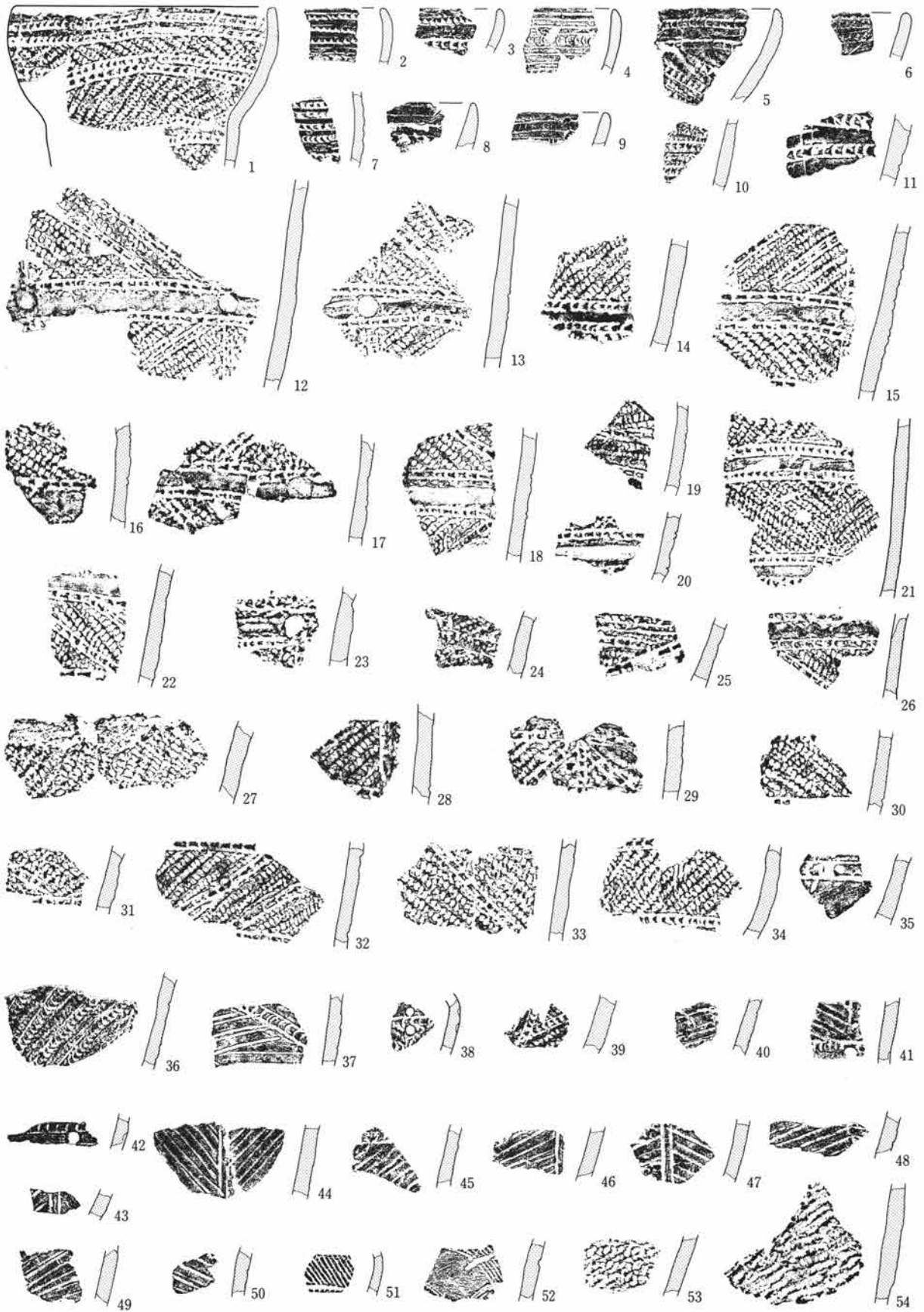
第39図 6号住居址遺物出土状態

羽状縄文を表出している。内面はかなり平滑に磨き上げられている。2・3・4・5・6・7・8・9は口縁に沿って連続爪形文を何条か廻らすものを一括した。それぞれの竹管の幅は4～5mm程である。4・5・6・7・8・9・10は半截竹管で平行線を引き、その中に爪形文を充填しており、一部平行沈線だけのものもある。5は斜め方向にも連続爪形文が走る。この一群は比較的薄く作られており、内面の磨きは丁寧である。10は連続爪形文が5段見られるが3と同一個体と思われる。11は幅8mm程の連続爪形文が見られ、さらに平行沈線が縦に1条走っている。内面は平滑である。12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31・32・33・34は地文にRL、LR2本の原体を用いて羽状縄文を施し、半截竹管による連続爪形文で文様を描く。幅1.2cm程の磨消無文帯を廻らしその両側に連続爪形文を付す。また



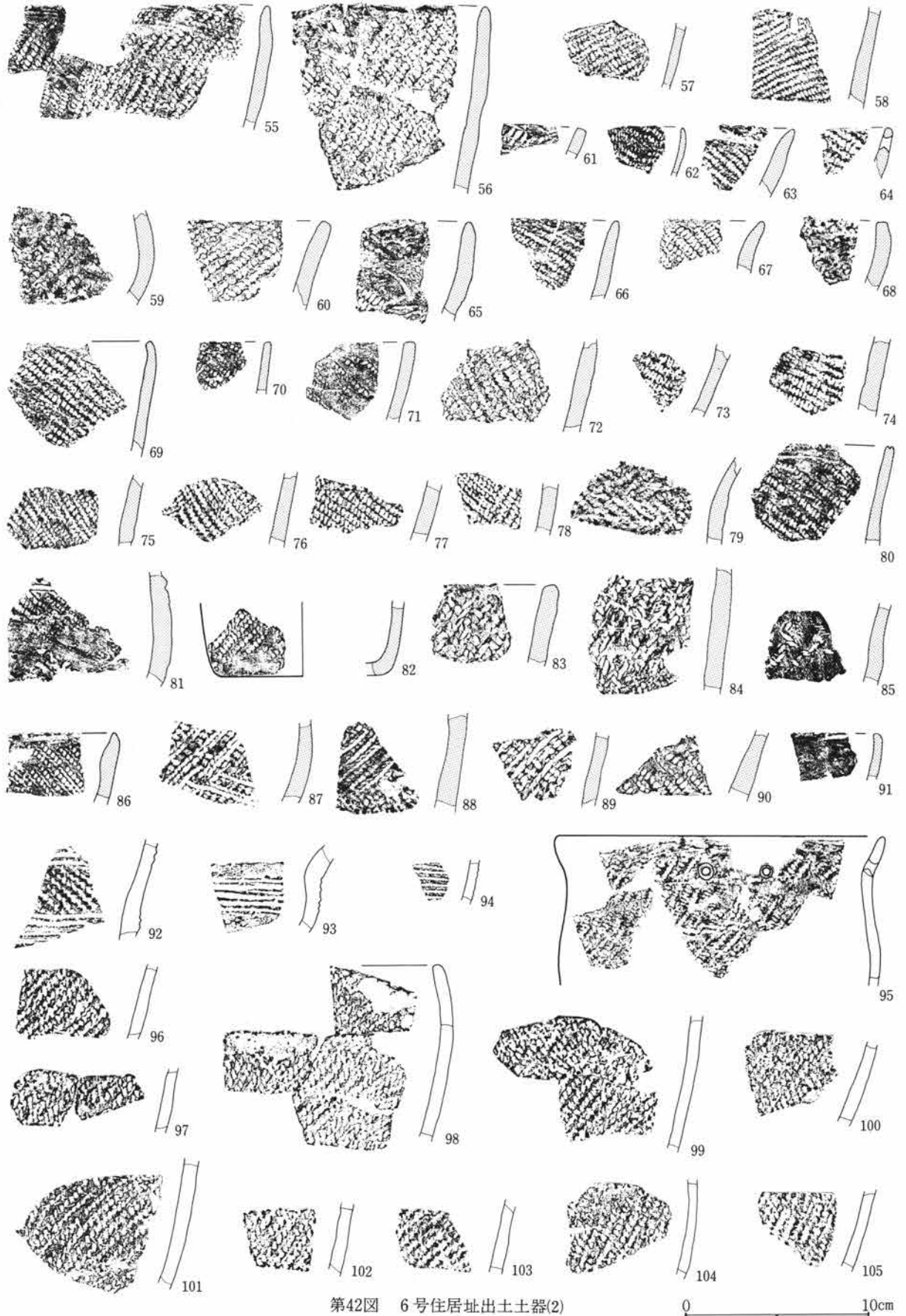
第40図 6号住居埋甕炉

無文帯には指頭押圧による凹みを付し、そこを中心として上下へ放射状に連続爪形文を付す。内面は縦方向に明瞭な研磨痕が残る。同一個体であるが、器形を復元するには至らなかった。赤茶褐色を呈す土器である。胎土中には、径2～3mmの石英粒が見立つ。35はやや幅広の連続爪形文を横位に施す。36は地文にLRの縄文を付し、その上に右下がりの連続爪形文を平行して数条施す。焼成の良い土器である。37は連続爪形文を横位に施文し、その下位に斜め方向の平行沈線が描かれる。



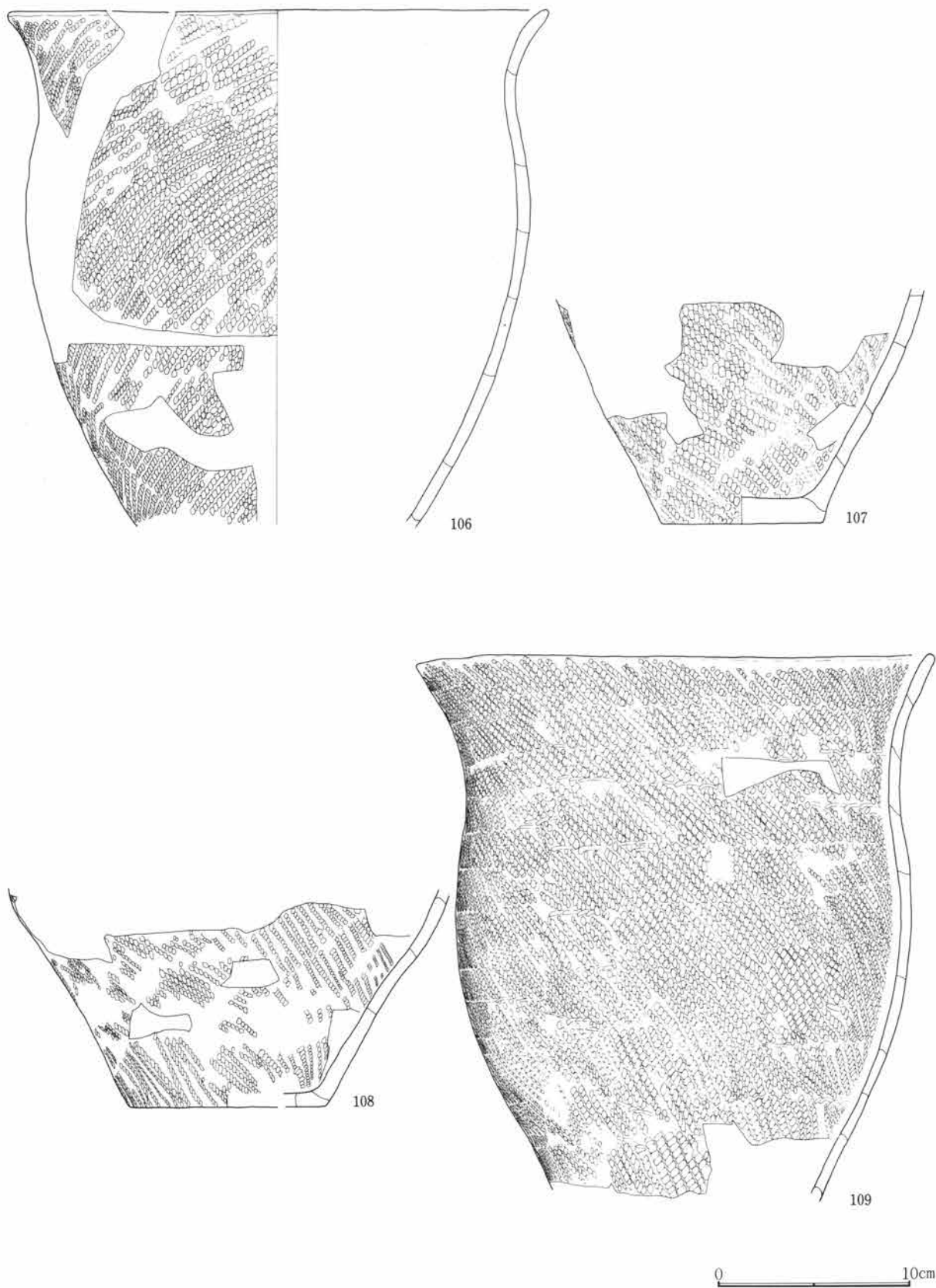
第41图 6号住居址出土土器(1)

0 10cm

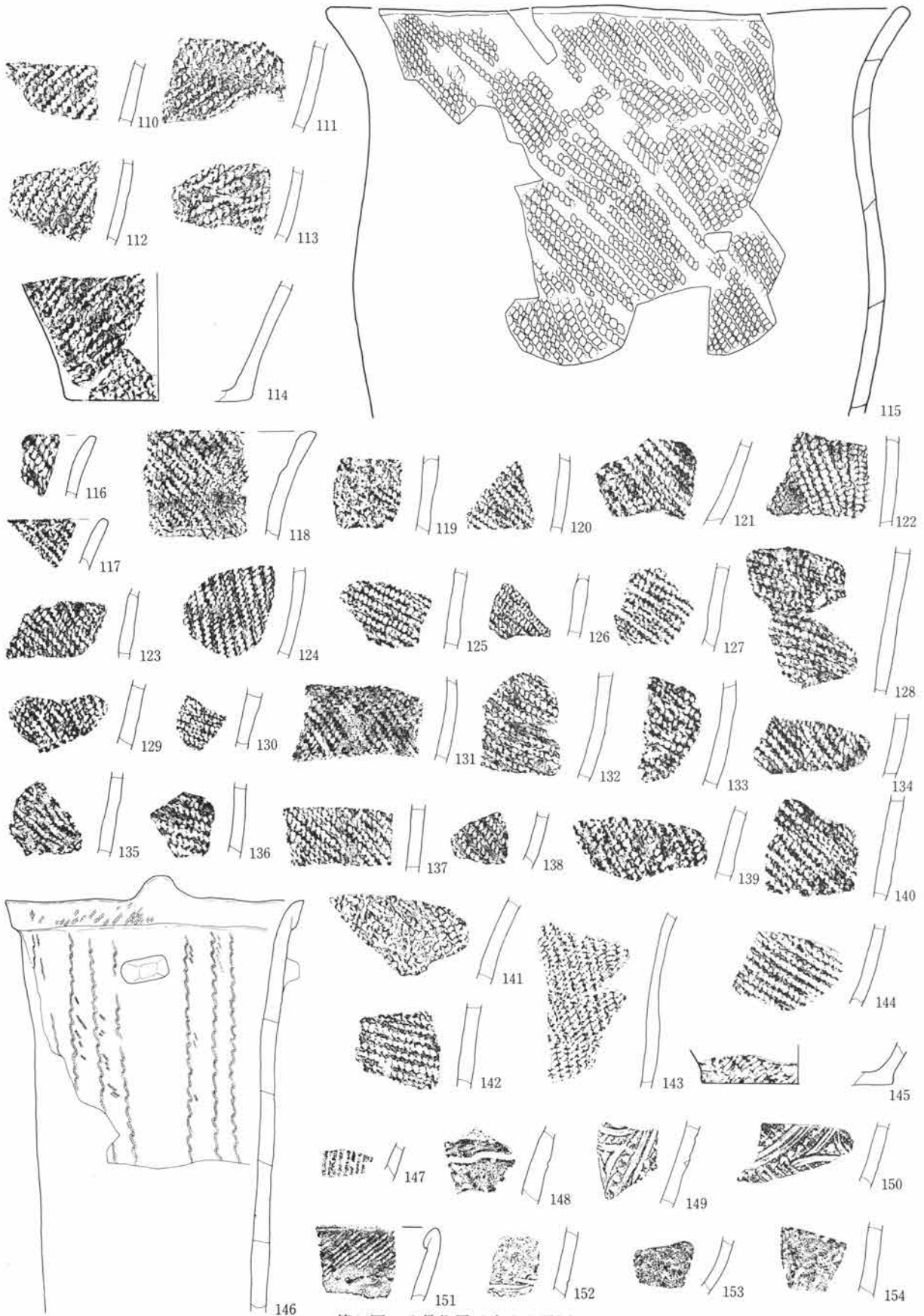


第42図 6号住居址出土土器(2)

38は口縁近くの破片である。連続爪形文を横位に施し、下位にRLの縄文、さらに爪形文を挟んで棒状工具刺突による円形の凹みを付す。39はRLの地文を持ち、その上に横位、斜位の連続爪形文を施す。40・41・42・43・44・45・46・47・48・49・50は同一個体片である。連続爪形文を横位に2段施文し、その間に径6mm程の凹みを持つ。その上位に肉薄の半截竹管による平行沈線文で、いわゆる菱形文を施す。やや薄手で、内面は縦位研磨痕が見られる。赤褐色を呈す土器である。51は連続爪形文と篋状工具による細かな集合沈線を斜めに施す。52は櫛歯による弧線が描かれる。53はLRのループ文が多段に施文されている。繊維の含有少なく焼成の良い土器である。54は無節のLを施文している。55・56・57・58・59・60は全面にLRを横位施文する。55・56は同一個体の口縁部片である。口唇部はやや尖り気味となる。61は無節Lが施される口縁部片である。62は薄くやや内弯する小型の深鉢片である。RLの縄文を持つ。63・64・65・66・67・68・69・70・71・72・73・74・75・76・77・78はRLの縄文を横位施文する。63・64・65・66・67・68・69・70・71・80は口縁部片である。64は補修孔を持つ。81はRLの縄文と横位の沈線を持つ。82はLRの縄文を持つ底部片である。83・84は同一個体で組紐である。85はRを絡めた絡縄体縄文である。86はRL+Rの付加条である。87・88はRL+RRとLR+ $\frac{L}{R}$ で付加条縄文の羽状を表出する。89はRL+Rである。90はRLにLを付加する。91は薄手の無文土器。口唇端部が内側へやや屈曲する。内外面ともに横位研磨痕が見られる。92・93・94は横位平行沈線が3～4本単位で走る。92・93は地文にRLが施される。94は薄手の土器である。95は頸部でゆるくくびれ口縁はやや内側へ弯曲して立ち上がる。口縁部に径6mm程の補修孔が一对穿けられている。焼成の良い土器群で縄文も明瞭に押捺されている。96・97・98・99・100・101・102・103・104・105はLRの縄文を持つ深鉢形土器の破片である。106は口縁部がやや外反する深鉢形土器である。LRの縄文を全面に横位施文する。原体はやや固い繊維で撚られたと思われ、各節は角ばった感じが見られる。内面はややざらついた感じがする。107・108は深鉢形土器である。RLの縄文を施文し、かなり薄く仕上げられているが、107の底は厚みがある。108はやや細い原体を用いて施文している。109は胴部で膨らみ、ややくびれた頸部に外反する口縁が付き、底部を欠損する。全面にRLの単節斜縄文を施す。所々に原体末端の結び目が観察される。原体の長さは3cm程である。胎土中には砂粒を含み、焼成は良く堅緻な土器である。内面は丁寧に研磨されている。色調は赤褐色を呈す。底部は輪積み部で欠損している。110・111・112・113・114はLRの縄文が施される。114は底部片である。何れも焼成良好な土器である。115は胴部でやや膨らみ、口縁部で外反する深鉢形土器である。RLの縄文が全面に横位施文される。116～144はRLの縄文が施文されたものを一括した。116・117・118は口縁部片、他は胴部片である。節の中の繊維方向が明瞭に観察されるものが多い。何れも器内は薄く作られており、堅緻な感じのする土器である。145は底部片である。L $\leftarrow\frac{R}{R}$ の縄文が施されている。146は中期初頭五領ヶ台式期に比定され、住居内の土壌に帰属するものと考えられる。器形は口縁に向かってやや開く筒状を呈し、折り返し口縁となる。口唇部は薄く尖り気味で、一箇所山状の高まりを持つ。折り返された口縁部分にはLRの縄文が見られる。胴部には3本1単位で結節縄文が縦位施文される。胴部上の方に断面台形状の小瘤が3箇所付けられている。底部を欠損している。146は縦の集合沈線、147は棒状工具によるゆるい波状文が付けられる。148・149・150は同一個体である。地文にRLの縄文を持ち、半截竹管による平行沈線が三角・弧状のモチーフを描き、その間を半截竹管をやや斜めに用いた刺突文を連続して施す。151は口縁部片である。内側への折り返し口縁を持ち、LRの縄文を横位に施文する。把手状のものが付いていたと思われる痕が見られた。内外面に若干の煤の付着が認められた。152は半截竹管による平行沈線が横走する。153・154は無文である。

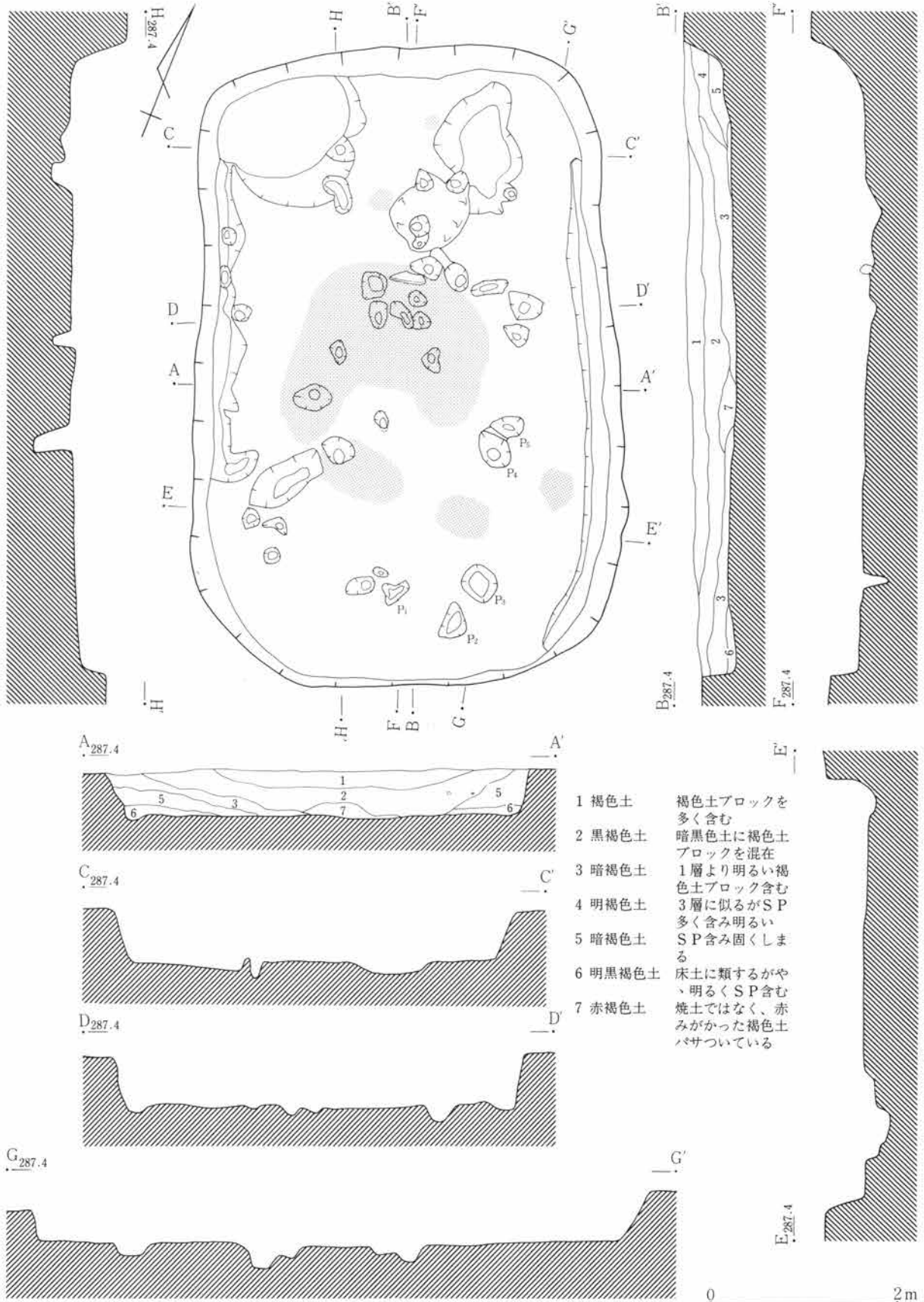


第43图 6号住居址出土土器(3)

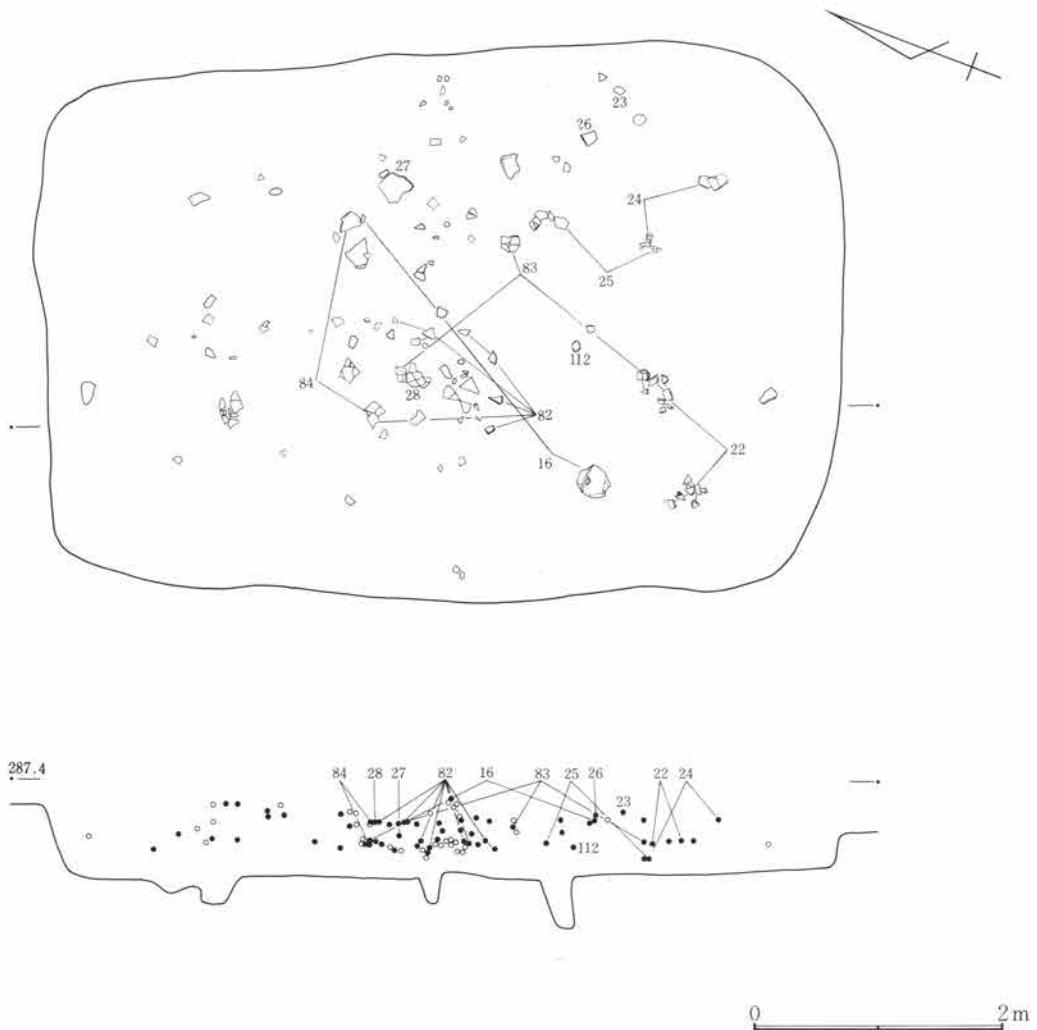


第44图 6号住居址出土土器(4)

0 10cm



第45図 7号住居址



第46図 7号住居址遺物出土状態

7号住居址 (第45図)

調査区中央、やや東寄り、10~13-A49・B00~02グリッドに位置する。今回検出した住居址の内最も遺存状態が良好であった。また検出した住居址中最大規模を持つ。

形状は隅丸長方形であるが、南壁が北壁に比してわずかに長くなる。各コーナーはやや丸みを持ち、南東南西コーナーは特にそれが顕著である。規模は、6.7m×4.5mで、壁の高さは最も高い所で60cm、平均50cm程であった。各壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方向は、N-21°-Wである。

床面は、かなり凹凸および小ピットが見られた。また中央部付近を中心に焼土、炭化物が顕著に認められ部分的には数cmの厚さで堆積が見られた。ローム地山をそのまま地床としているが、あまり堅緻ではなかった。

床面には10数箇所のピットを検出したが、何れも掘り込みが浅く、形も一定していない。また並び方にも規則性は無く、柱穴と認定できるようなものはなかった。北西コーナーに、径1.2m、深さ10cm程の掘り込み

が見られた。また壁周溝が東および西壁際に幅20cm、深さ10cm程で周っていた。

炉址

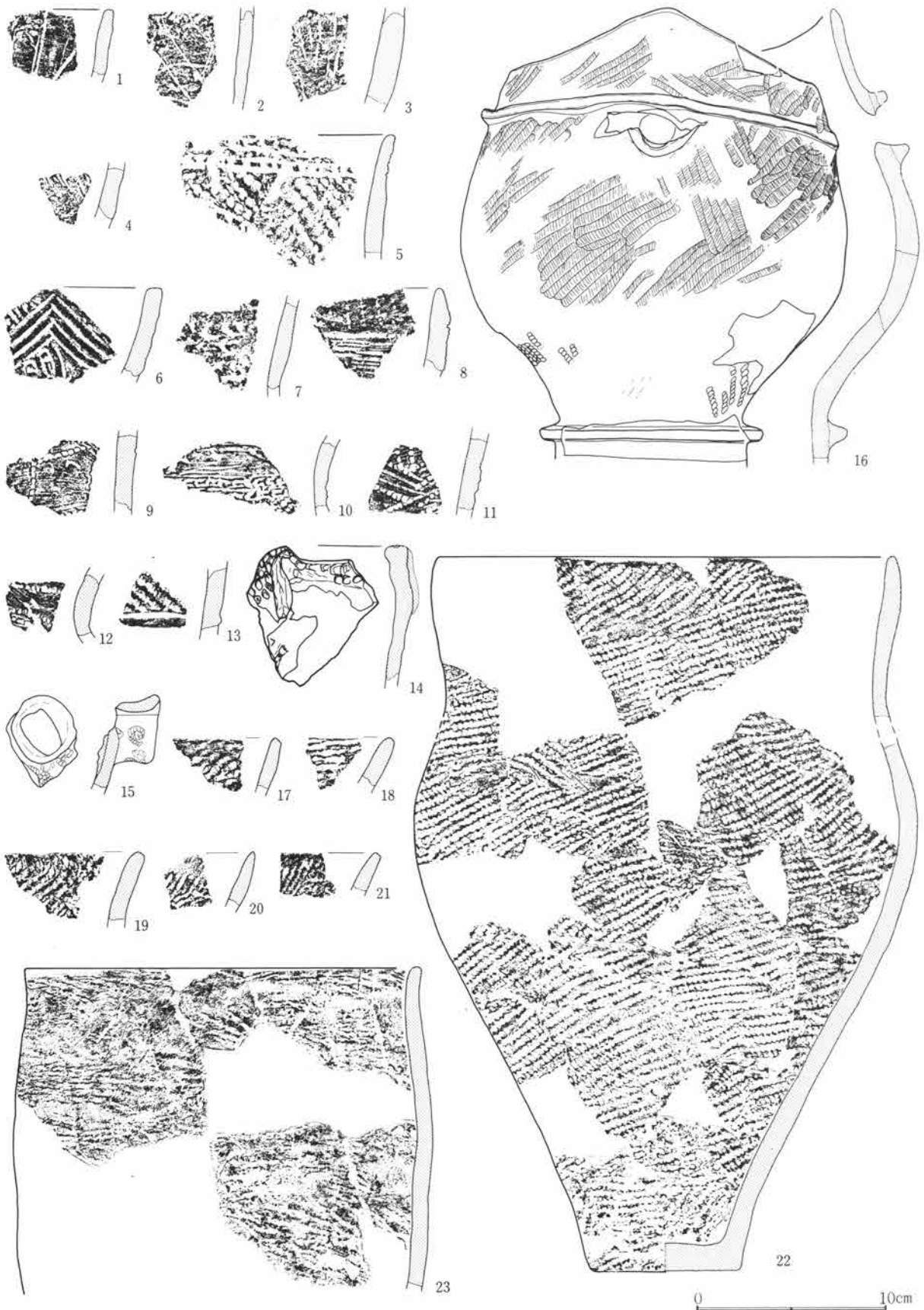
住居址中央やや北寄りに検出した。長さ35cm程の川原石を据えて、その前面を10cm程、径1mの範囲で浅く掘り窪め、地床炉としている。中に数箇所の小ピットが見られた。焼土は幅2m、長さ1.5mの広がりを見せていたが、掘り窪めた部分に最も厚く堆積し、5～10cm程であった。

遺物出土状態（第46図）

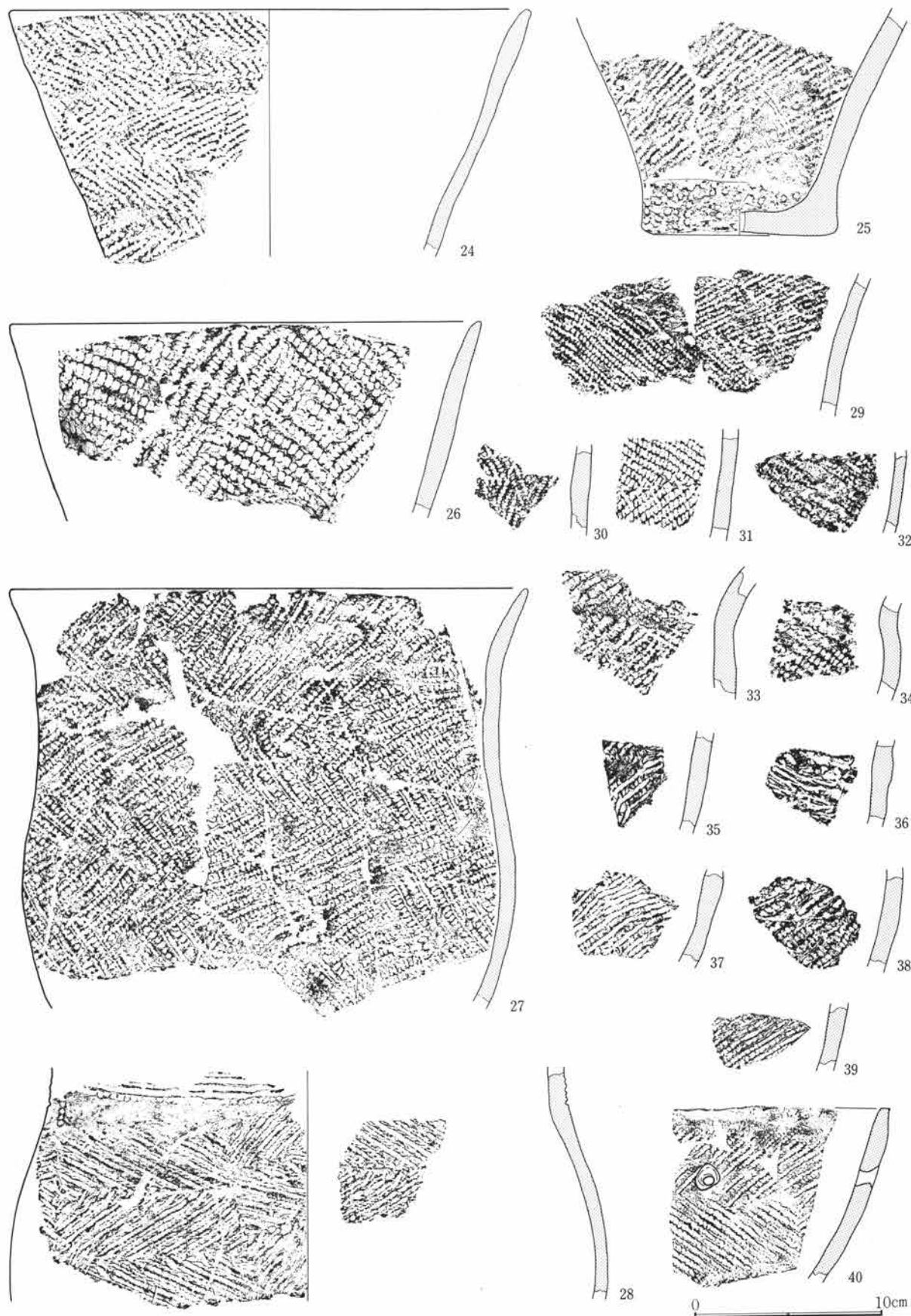
覆土上面より集中して遺物の出土が見られた。ほとんどの遺物は覆土中住居の中央部より出土している。特に器形を復元し得るようなものは上層に多く検出した。また石器、石片類も中央部に比較的多く出土する傾向が見られた。16はほぼ完形の注口土器で、住居の北東寄り、床面より40cm程上面で、注口部を上に向けて出土している。出土した土器片総数350点。石器・石片類189点であった。

出土土器（第47・48・49・50・51図）

1は細めの半截竹管により、縦位、斜位の細い平行沈線を施す。胎土中には、砂粒が目立つ。口縁部片である。2は篋状工具により右斜め下へ平行沈線、さらに縦位、横位に条痕様の沈線が走る。3は縦方向への短い刺突文が横に配される。4は地文にRLの縄文を持ち、半截竹管による縦位の平行沈線が施される。5は口縁に沿って2本、斜めに1本の連続爪形文を走らせている。地文にRLの縄文を持つ。6は波状口縁の波頭部片である。地文にRLの縄文を施す。口縁に沿って、平行沈線3本を山形に廻らし、下位に連続爪形文を持つ。炭化物の付着が見られる。7は連続爪形文を3段横走させている。2次の火熱を受けており、表面は荒れている。8・9・10・11・12は櫛歯状工具による刺突文を持つものである。8は口縁部片で、口唇直下に縦位に刺突を廻らし、その下位に横位刺突、さらにいわゆる簾状文を配す。口縁部は折り返して肥厚しており、口唇部は薄くとがる。9・11・12は刺突による菱形を基調としたモチーフを描くものと思われる。10は刺突の他に、横位の集合沈線、さらには、半截竹管による連続爪形文を2段施文している。爪形文下にはLRの縄文が施文される。13は0段多条RLの地文の上に、太めの半截竹管による、平行沈線が横走する。14は波状口縁部片で、波頂部は肥厚する。また外面には耳状の隆帯が付く。口縁に沿って、半截竹管による刺突文が2段廻り、さらに一部に斜め方向の連続爪形文が見られる。外面は剥落がひどい。内面は平滑である。15は注口部の破片である。外面に不明瞭ではあるが、ループ文が押捺により施文されている。16は注口土器である。覆土上層より出土している。底部近くに鏝状の隆帯を持つ、やや縮った底部から胴部は丸く膨らみ、上部に注口、さらに高さ6mm、幅5mm程の隆帯を廻らす。口縁の形状は、注口上の部分が山形波状に高くなっている。口縁には太めの原体Lで無節縄文を横位、一部縦位に施し、胴部にも同じLの原体を用いて横位または縦位の羽状縄文を表出している。さらに胴部下半にはRLの単節斜縄文を横位、縦位に施文している。内面は比較的良く磨かれている。色は赤褐色を呈し、胴上半部には、炭化物の付着が若干認められる。底を欠いている。17・18・19・20は口縁部片である。原体Lの無節斜縄文が施される。21は細い原体LRの単節斜縄文である。22は深鉢形土器である。小さめの底部から外へ開きながら立ち上がり、胴上部で膨らみ、頸部でやや締め口縁部はやや内彎気味に終る。全面にLRの縄文を横位に全面施文するが、一部羽状となる所が見られる。23は、ほぼ円筒状に立ち上がる胴部に短かくわずかに外反する口縁が付く。R2本をZに巻いた絡条体縄文。24は口縁がほぼまっすぐに外側へ開く深鉢形土器の上半部である。RL・LR、2本の原体を用いて横位の羽状縄文を施す。内面は平滑に仕上げられている。25は底部片である。LRの縄文を横位施文し、その下部に8本単位の櫛歯状工具によって、縦の刺突を廻らしている。赤褐色を呈し、かなり2次の火熱を受けている土器である。26は24と同様の器形を呈す。平縁の深鉢形土器である。LRと、

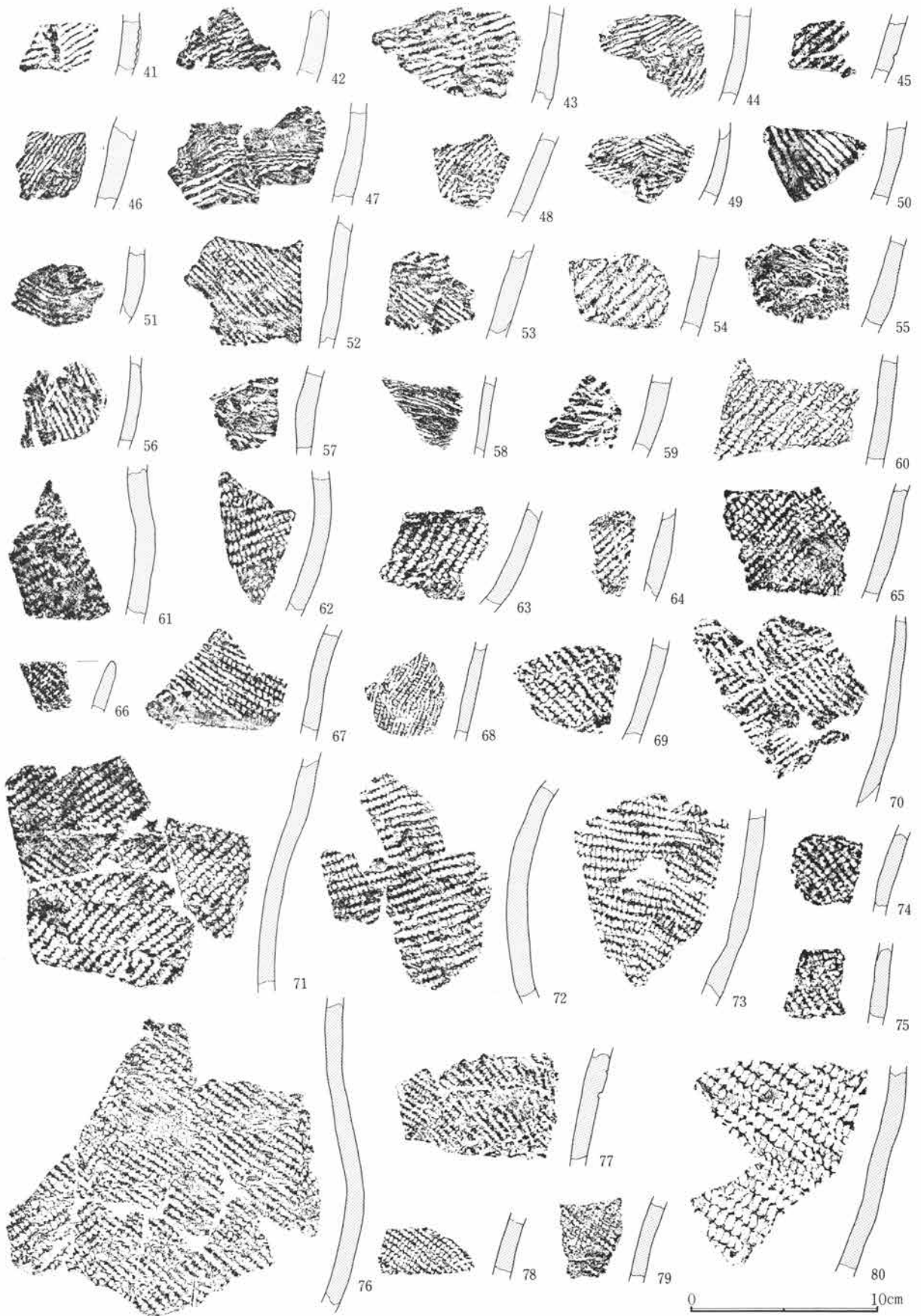


第47图 7号住居址出土土器(1)

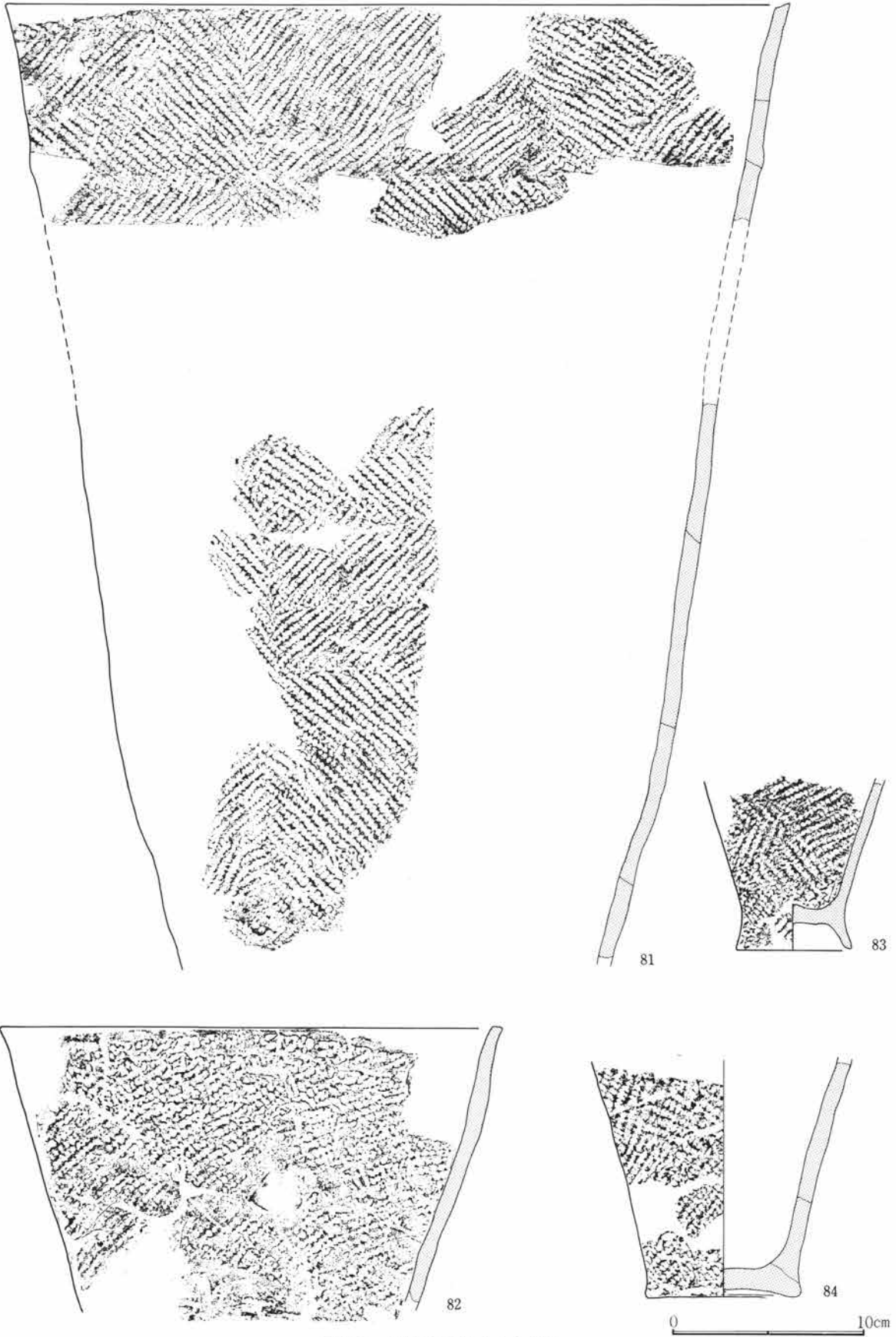


第48図 7号住居址出土土器(2)

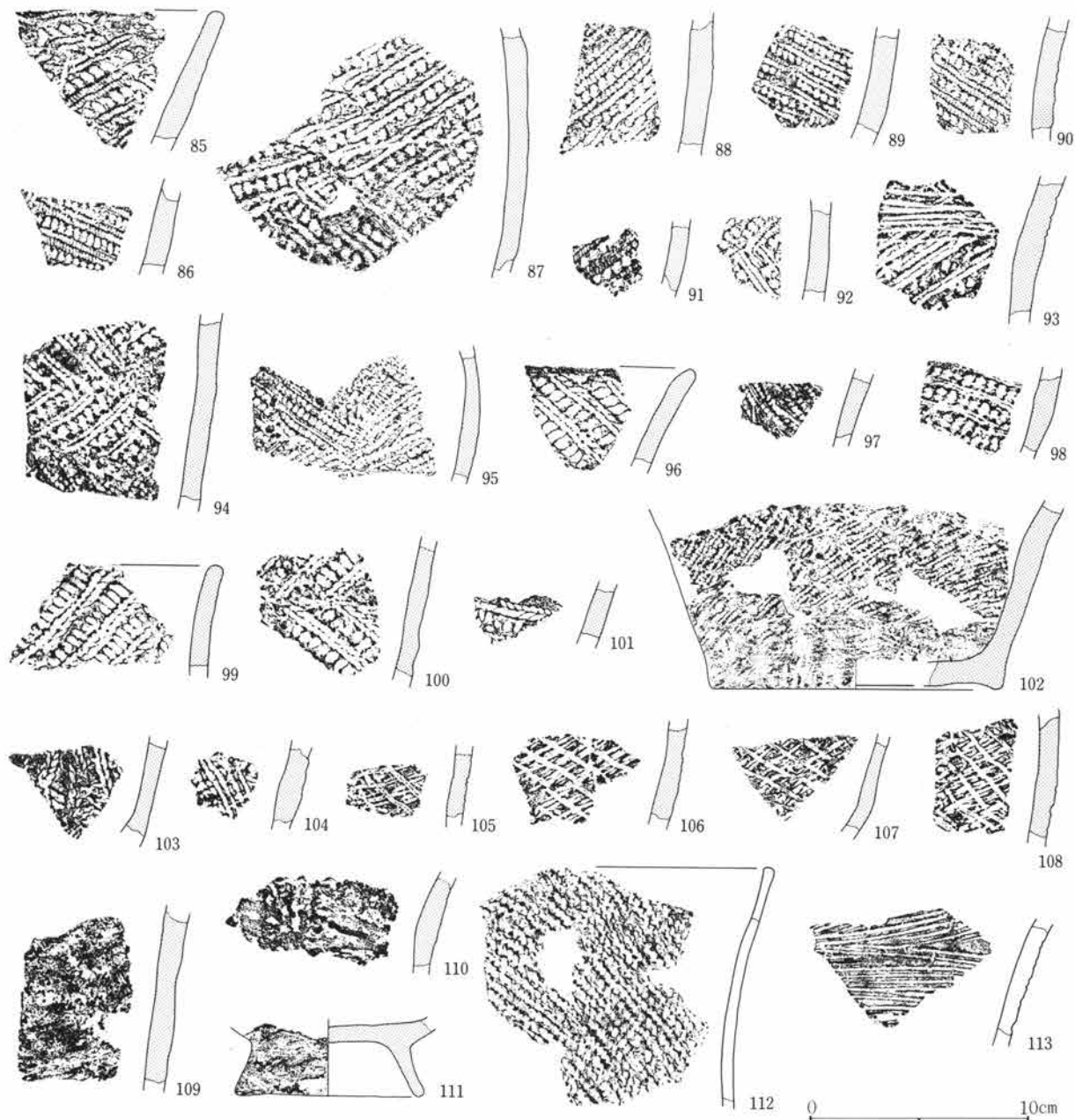
RLで菱形羽状文を表出している。27は胴部でやや膨らみ、頸部で若干縮まり、口縁部外反する深鉢形土器である。付加条LR+rとRL+lで羽状縄文を表出する。24・26・27とも口唇部は薄くやや尖り気味となる。28は上位に櫛歯状工具による平行沈線を横位施文し、その下部に刺突を横に走らせ、一部に縦刺突文を加えている。胴部は付加条L+ $\frac{L}{R}$ とR+ $\frac{R}{L}$ の原体による羽状縄文で、菱形のモチーフを表出している。内面は平滑に磨かれる。29・30・31は羽状縄文を持つ。29はLRの原体で横位。30はRLの原体で縦方向の羽状文を施文している。31はRLとLRで横羽状縄文を施す。32は0段多条のRLを横位施文しているが、節が不明瞭である。33はLRと細いRLの原体を施文する。緩く外へ屈曲している。深鉢の頸部であろう。内面は丁寧に研磨がなされている。34はRLの縄文を持つ。太さの違う原体2種類を用いて施文している。緩くS字状に屈曲している。35・36はL< $\frac{R}{L}$ の異段の縄文を施文する。37はrの縄を巻いた縄巻縄文である。表面の凹凸が目立つ。38はLR+Rの付加条である。39・40は同一個体。LRとRLの原体を用いて羽状縄文を施文する。両面から穿孔された径5mmの補修孔を持つ。41・42・43・44・45・46・47・48・49・50・51・52・53・54は無節Lを施文する。47・48・49・53は方向を変えて羽状としている。55・57・59は絡条体縄文Rを軸に巻いて回転押捺している。56は節が不明瞭だがRLかも知れない。58は細いLを軸に巻いたものを横に回転施文している。60・61・62・63・64・65は単節LRを施文する。65は羽状である。66は口縁部片である。0段多条RLを直下より横に施文している。67はRLである。68は付加条LR+R。またはL< $\frac{R}{R}$ である。69はRL。70はRLとLRの原体で菱形を描いている。71・72はLRを施文する。73・74・75・76・77・78・79・80はRLを横位に施文する。75・76は一部羽状となる。71・76は同個体かも知れない。77は施文が浅い。78・79の原体は細く、79は条間が空いている。80は太い原体を用い、押捺もはっきりとしている。作りのしっかりした土器である。81は推定口径41cm。大型の深鉢形土器である。器形はやや外傾しながら直気味に立ち上がる。口唇部はやや内削ぎ状となる。全面にLR、RL2本の原体を用いて羽状縄文を施し、さらに菱形のモチーフを作り出している。口縁下10cm程の所に成形時に出来たと思われる膨らみがあり、全周する。内面は平滑に研磨されている。82は深鉢形土器の胴上半部分である。器形は逆ハの字に開き口縁は平らである。施文はLRの単節斜縄文を全面に横位施文する。口唇直下に、原体末端部のループ文が見られる。83は深鉢形土器の底部である。やや小型の土器で、上底を呈し、高台状に外へ開く。底径は6.2cmである。LR・RLで羽状縄文を全面に施文している。薄手で焼成の良い土器である。外面赤褐色を呈す。84も深鉢形土器の底部である。底部両端部がやや外へ張り出す。わずかに上げ底となっている。施文はLR・RLの縄文で縦の羽状縄文を表出する。底部外面は丁寧に研磨されている。85・86・87・88・89・90・91・92・93・94は正反の合である。85はL< $\frac{R}{L}$ で0段多条、86はR< $\frac{L}{R}$ で0段3条、88はL< $\frac{R}{L}$ 、89・90はR< $\frac{L}{R}$ 、91はL< $\frac{R}{L}$ である。92はL< $\frac{R}{L}$ とL< $\frac{L}{R}$ の2種の原体で羽状を作っている。87は異段の縄文R< $\frac{L}{R}$ と< $\frac{R}{L}$ で羽状を作る。93は地文に正反の合L< $\frac{R}{L}$ で多条である。半截竹管による平行沈線が3条横位に施される。94は、正反の合L< $\frac{R}{L}$ で方向を変えて菱形文を作る。95・96・97・98・99・100・101・102・103は付加条である。95は、第1種RL+ $\frac{L}{R}$ である。96・98・99・100・101は第2種。96はLにLとRを2本付加している。99はRにLとRを2本付加、100はR+ $\frac{L}{R}$ とL+ $\frac{R}{L}$ を用いて羽状を表出している。97はLRにLとRを付加している。98は付加条第2種LR+ $\frac{R}{L}$ 、102はLR+Rである。103と104は軸条LRにLとRを2本巻きつけている。105・106・107・108は付加条文、無節L< $\frac{R}{R}$ を軸とし、細いR2本を巻きつけている。付加条第2種である。一見第3種風に見える。109・110・111は無文土器である。109・110の表面には整形時の撫でむらが見られる。111は底部片であるがかなりの上げ底でハの字の高台状となる。色は赤褐色である。底の外面に煤が付着している。112はゆるい波状口縁を呈す深鉢形土器である。全面にRLの縄文が施文され



第49图 7号住居址出土土器(3)



第50图 7号住居址出土土器(4)



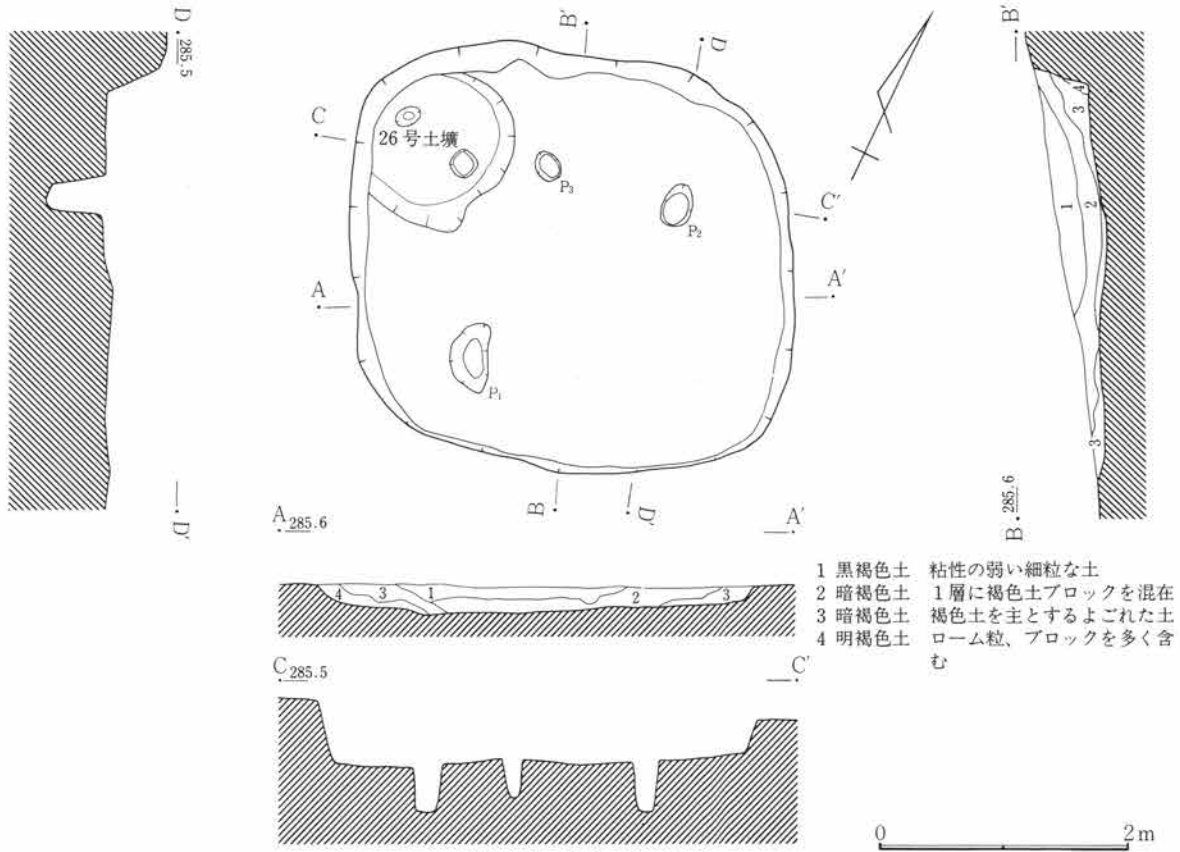
第51図 7号住居址出土土器(5)

る。非常に薄手で、内面は良く研磨されている。口唇部が内側にやや膨らみを持つ。113は深鉢形土器の口縁部文様帯の破片である。半截竹管により平行沈線を横に多段施文し、その上には三角形の文様を描くものと思われる。焼成は良く、堅緻な土器である。112・113とも時期的には本址に帰属しないものである。

8号住居址 (第52図)

調査区南東寄りの11~12-A35~37グリッドに検出した。かなりの南傾斜地に位置し、北壁は残高40cmあるが、南壁はほとんど削平されてしまっていて、その範囲を認め得るにすぎない。

形状は、やや円に近い隅丸方形を呈し、規模は、一辺が3m程でかなり小型である。主軸方向はN-22°-Wである。



第52図 8号住居址

住居址の北西隅に接して、径1m、深さ15cm程で、中に深さ30cm程の小ピットを2つ持った26号土壇が重複している。各壁は比較的直に立ち上がる。床面は掘り込み面をそのまま地床としており、平坦である。

明確に柱穴と想定されるものは無かったが、ピットが3箇所検出された。ピット1は56×30cmの長円形で深さ10cmである。ピット2は34×24cm、深さは46cm。ピット3は24×20cm、深さは約30cmであった。

炉址

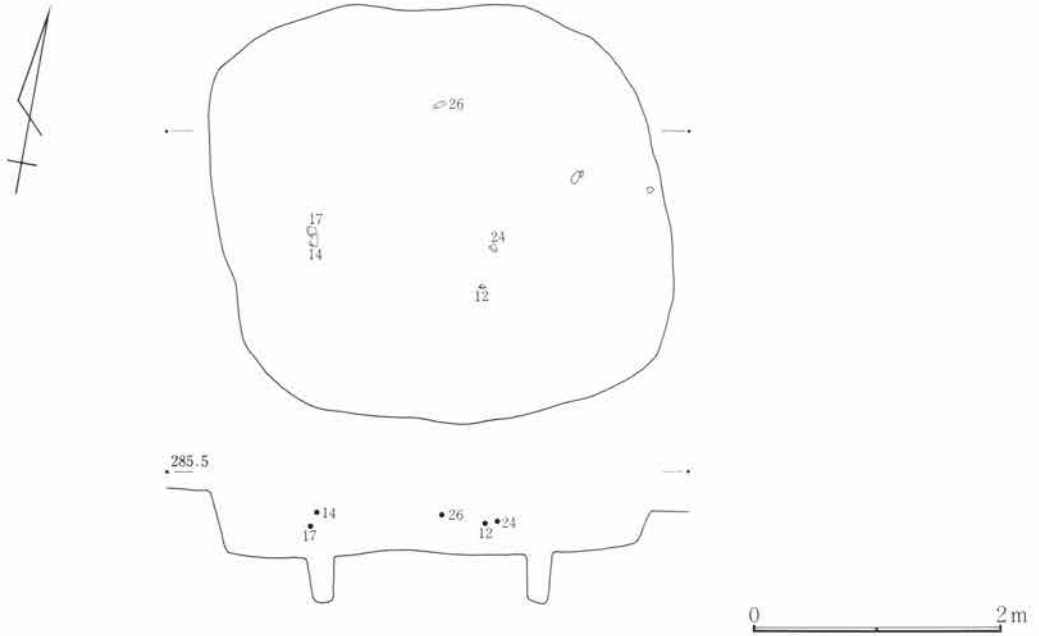
認められなかった。

遺物出土状態 (第53図)

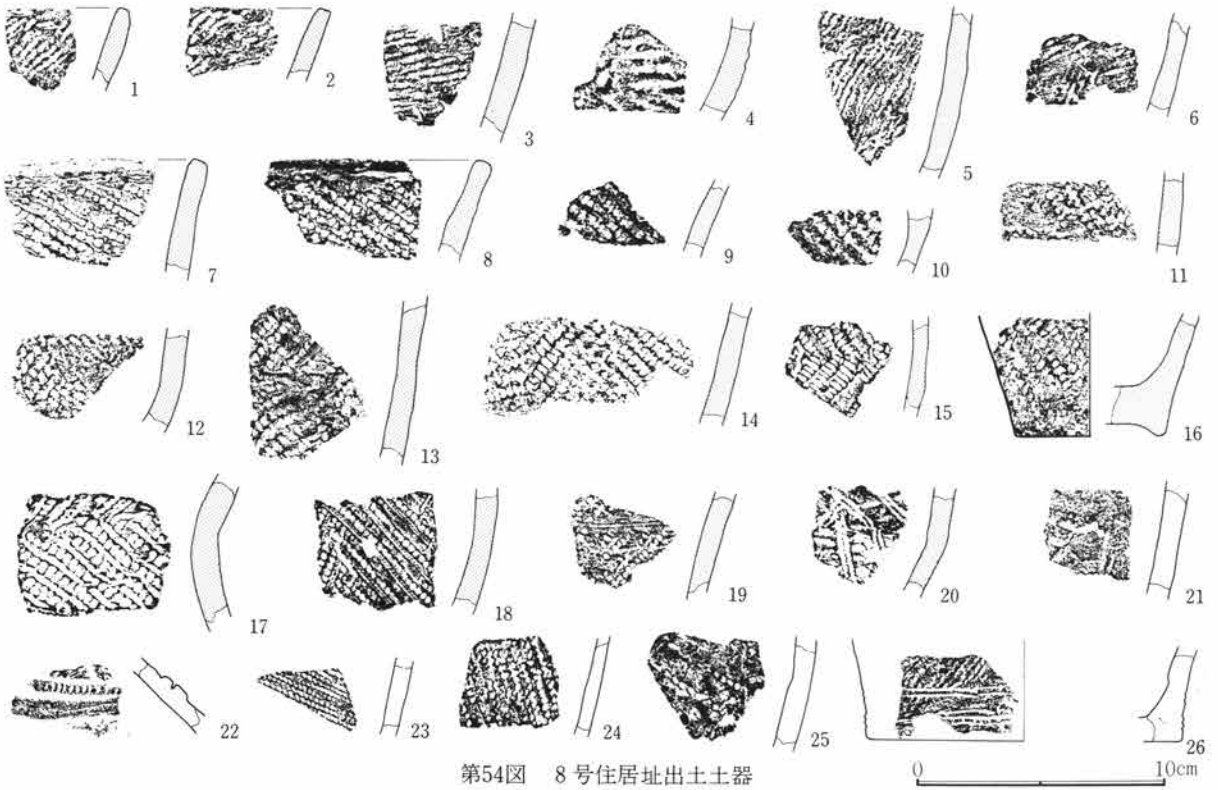
土器約20片、石片数片が覆土および床面より出土しているが、器形を推定し得るようなものは見られなかった。

出土土器 (第54図)

1～6は無節Lを施文する。1・2は深鉢の口縁部片である。3は火熱を受け脆弱な土器である。4は原体をやや不定方向に転がしている。7・8・9は同一個体である。RLの縄文を横位施文する。口縁に沿って原体末端の結び目痕が観察される。10・11はRL、12は複節のLRLである。13はLR、14は原体LRを用い、方向を変えて羽状を表出している。15は前々段多条のLRの原体を用い、方向を変えて羽状を作り出している。16は深鉢底部片でRLを原体とする。底は厚く、やや上げ底で外面は良く研磨されている。17は付加条LR+ $\frac{1}{2}$ とL+Rの2種類の原体を用いて羽状縄文を作っている。屈曲しており頸部と思われる。18はRL+ $\frac{R}{2}$ の付加条が丁寧に施文されている。内面はよく研磨されている。19は付加条LR+Rであるが、施文は極めて不明瞭である。20は軸繩にLとRの2本を巻き付けた付加条第2種である。21は無文である。表



第53図 8号住居址遺物出土状態

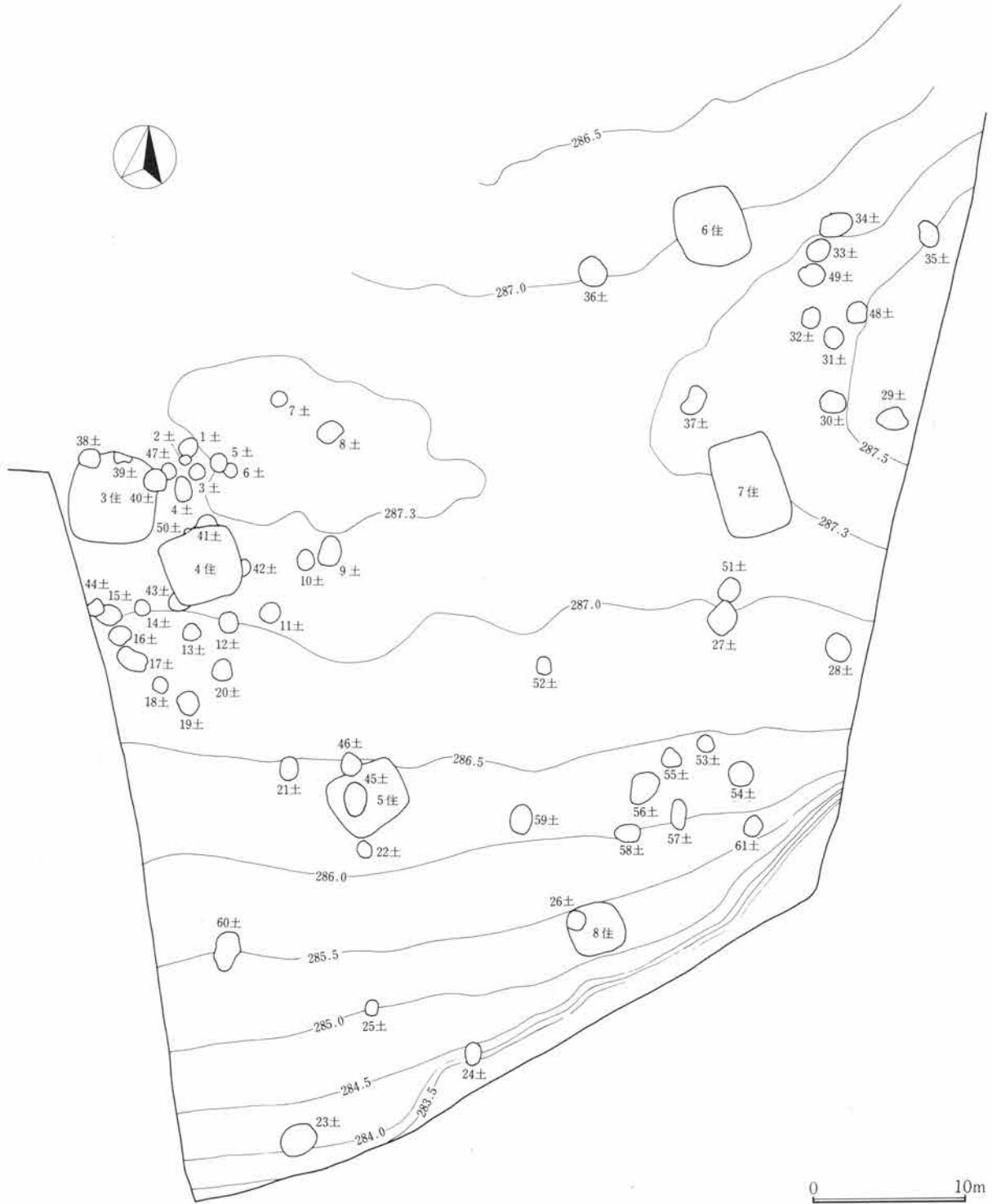


第54図 8号住居址出土土器

面に撫で痕が見られる。22は特殊浅鉢形の肩部破片である。木ノ葉状入組文を連続爪形文で区画する。23・24はRLの縄文を施す。両片共に薄手で堅緻な土器である。24は条がやや立ち気味となる。25は絡条体縄文である。Lを軸に巻いて回転させている。26は底部近くの破片である。無節Lの縄文を地文に持ち、その上から半截竹管による平行沈線を横に2段持つ。内面に炭化物の付着を痕す。(小野)

2 土壌

本遺跡で検出した総数は61基である。その分布状況（第55図）は調査区の中央より南側に集中しており、やや南傾斜地に多く掘り込まれている。3・4号住居址周辺に最も多く集中して見られ、傾斜のきつくなる南側、および東側に点在する状況を示した。その中央部分は空白地となっている。土壌の時期は出土遺物より黒浜～五領ヶ台期で、黒浜16、諸磯b19、五領ヶ台期4、不明22であった。黒浜期のものは南側から東側



第55図 中畦遺跡土壌全体図

に点在し、諸磯期のものは両側の住居址付近に集中しており、五領ヶ台期のものは数は少なく東側の最も高い場所に分布している。

検出した土壌については、その平面形状、および断面形状により以下に示すようにI～IV形態に分類可能である。(第56図)

形態I 平面形は楕円または長円形で底で狭くなる。掘り込みはやや深く、断面はUまたはV字に近い。

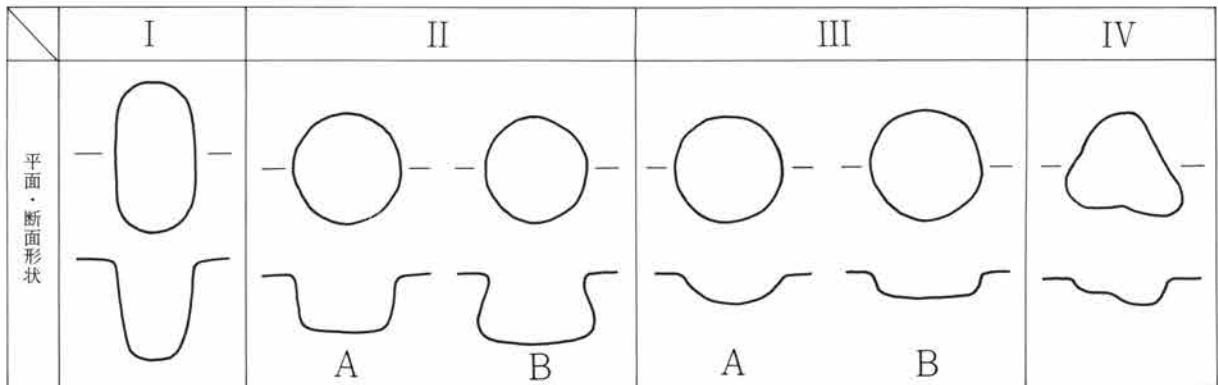
形態II A 平面形は円形、ほぼ垂直に掘り込まれる。底は平らである。

B 平面形は円形、断面形は底の部分が広がるいわゆる袋状土壌である。

形態III A 平面形は円形、掘り込みは比較的浅く、鍋底状の断面形となる。

B 平面形は円形、掘り込みは比較的浅く、フライパン状の断面形となる。

形態IV 平面形は不定形が多く、浅い掘り込みで底は凹凸が見られる。



第56図 土壌分類模式図

形態Iは出土遺物も少なく、その分布は等高線に沿って配置されている。本来ならば底面に小ピットが掘り込まれていたものと思われる。時期は総て黒浜期のものであった。

形態IIは各時期にわたって見られる。まとめて分布する傾向が見られる。出土遺物も比較的多い。断面形状によりA・Bに分けたが、Bについては明らかなものは少なく、壁の崩壊によってAとの区別ができなかったものもあると思われる。

形態IIIはその断面形状によりA・Bの2つに分けられるが、やや明確さに欠ける所があり、形態IIの上部が削平されているものが含まれている可能性もある。黒浜期のものは少ない。

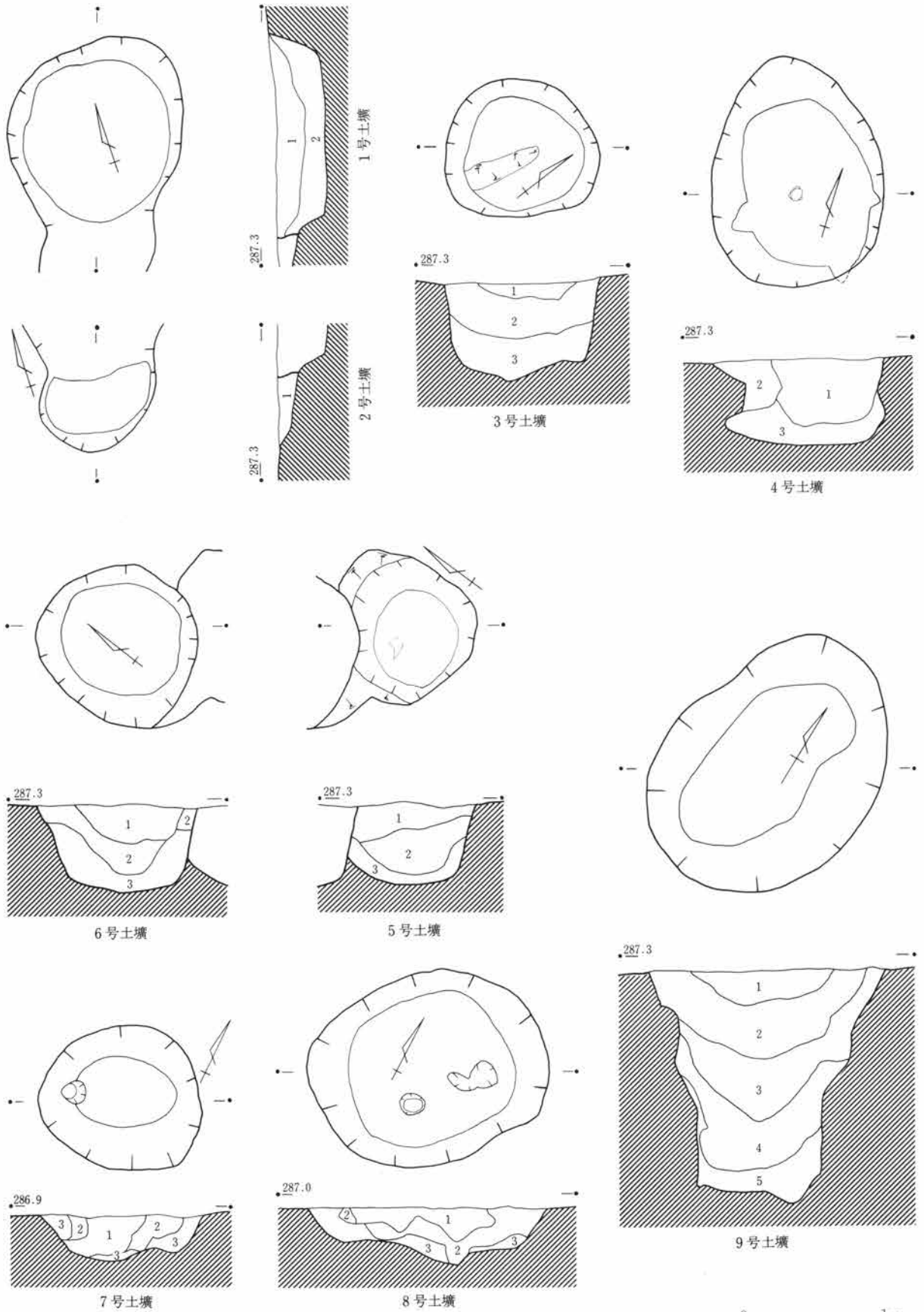
形態IVは掘り込み面がやや不明確なものも含まれている。数は少なく、人為的な掘り込みだけでなく、いわゆるしみ状の落ち込みも含まれている可能性がある。(小野)

表4 土壌一覧表

(黒)は黒浜期、(諸)は諸磯期、(五)は五領ヶ台期を示す

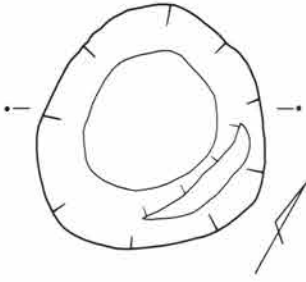
番号	位 置 (グリッド)	形状	規 模 cm	出土遺物	分類	土 層	備 考
1	30-B01~02	不正円 平底	長軸 148 短軸 120 深さ 40	土器片(諸)	III A	1 褐色土 ローム粒若干含 2 褐色土 ローム粒子を多く含む	2号土壌と重複する
2	30-B01	不正円	83 50 14		III A	1 黒褐色土 ローム粒子含む	1号土壌と重複する
3	30-B00~01	円	110 97 72	土器片(黒)	II A	1 褐色土 ローム粒子含む 2 褐色土 1層に似るが締る 3 黒褐色土 ローム粒、炭化物含む	

番号	位 置 (グリッド)	形状	規 模 cm	出土遺物	分類	土 層	備 考
4	30-B00	不正長 円	161 120 70	土器片(諸) 打製石斧	II B	1 暗褐色土 ローム粒含む 2 褐色土 3 " ロームブロック含む	
5	29-B01	円	113 102 60		II A	1 暗黒褐色土 ローム粒含む 2 " やや締っている 3 褐色土 ロームブロック含む	6号土壙と重複する
6	28-29-B01	円	102 85 60		II A	1 暗褐色土 ローム粒含む 2 " 1層よりも締る 3 褐色土 ロームブロック含む	5号土壙と重複する
7	27-B03		138 100 32		III A	1 黒褐色土 ローム粒若干含む 2 褐色土 ローム粒含む 3 " ローム粒含む締る	
8	75-26-B02		170 134 40		IV	1 黒褐色土 ローム粒含む 2 褐色土 ローム粒、炭化物含む	
9	25-26-A48- 49	長円	194 146 164		I	1 黒褐色土 ローム粒含む 2 暗褐色土 " 3 " 明るく、粘性がある 4 " ローム粒、炭化物含む 5 明褐色土 S P 粒子含む	
10	26-A48	円	124 120 47		II A	1 黒褐色土 2 暗褐色土 ローム粒含む粘性を持つ 3 明褐色土 ローム主体とする	
11	27-28-B46	円	140 130 14		III B	1 褐色土 ローム主体とする	
12	28-29-A46	円	130 114 15	土器片(諸)	III B	1 褐色土 ローム粒、炭化物含む 2 " ローム粒含む固く締る	
13	30-A45-46	円	117 110 50	土器片(諸)	II A	1 暗褐色土 ローム含む 2 褐色土 " 3 " " 粘性がある	
14	31-32-A46	円	106 102 90	深鉢2(諸) スクレイパー・ ピエスエスキ ーユ・敲石	II A	1 暗黒褐色土 ローム、炭化物含む 2 淡黒褐色土 ロームブロック主体 3 暗黒褐色土 ローム、炭化物混入 4 " 3層よりローム多い	
15	32-33-A46		160 110 18	土器片(諸) 打製石斧	IV	1 暗黒褐色土 ローム粒、炭化物含む 2 暗褐色土 炭化物含む 3 褐色土 ローム主体とする	44号土壙と重複する
16	32-A45-46		147 124 38	土器片(諸)	III A	1 暗褐色土 ローム、炭化物含む 2 " 粘性を持つ 3 褐色土 ローム多く含む	
17	32-A44-45	長円	210 118 37	土器片(諸) スクレイパー	IV	1 暗褐色土 ロームブロック含む 2 明褐色土 " 3 " ローム主体とする	
18	31-A44	円	107 103 22		III B	1 暗褐色土 ローム、炭化物含む 2 " 1層よりも締る 3 褐色土 ローム主体とする	
19	30-A43-44	不正円	160 145 48	土器片(諸)	III A	1 明褐色土 ローム、炭化物を含む 2 " 1層よりやや明るい 3 " 上層に似るがローム多い 4 " ローム主体とする	
20	29-A44-45	円	142 140 42	土器片(諸)	III A	1 黒褐色土 ローム粒若干含む 2 暗褐色土 ローム粒若干含む 3 " ローム主体とする	
21	26-27-A41	長円	143 118 47	深鉢(ほぼ完形) 土器片(諸)	II A	1 黒褐色土 ローム粒含む	
22	24-A38-39		120 94 64		II A		

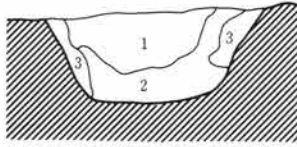


第57図 土壙 (1)

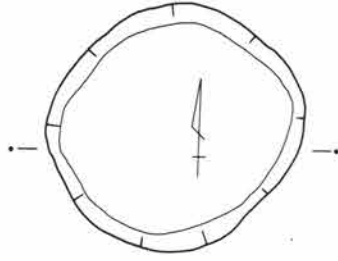
0 1m



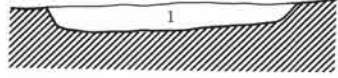
275.0



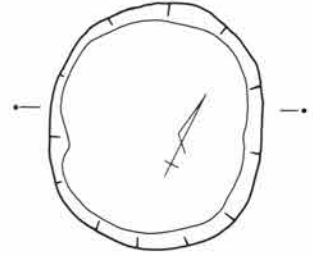
10号土壙



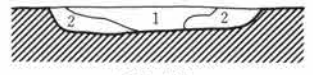
287.1



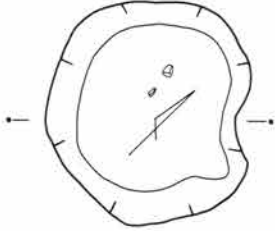
11号土壙



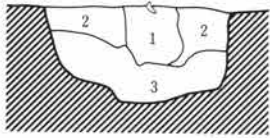
287.4



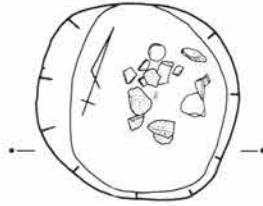
12号土壙



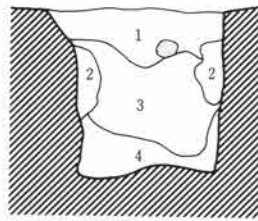
287.0



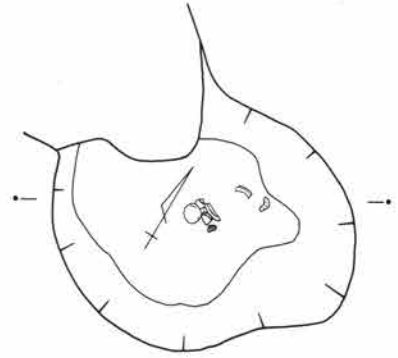
13号土壙



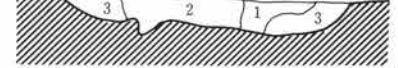
287.0



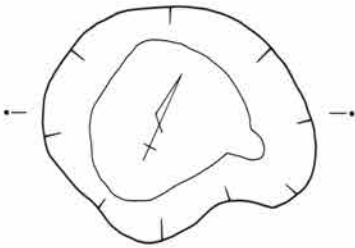
14号土壙



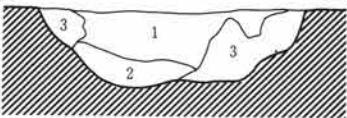
287.0



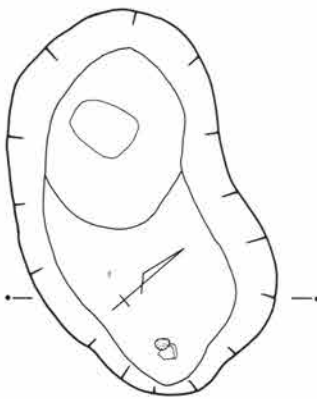
15号土壙



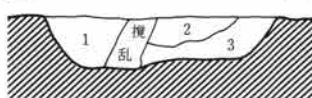
287.0



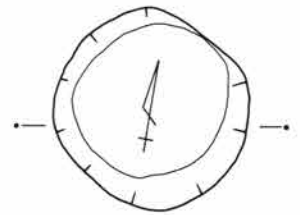
16号土壙



287.0



17号土壙



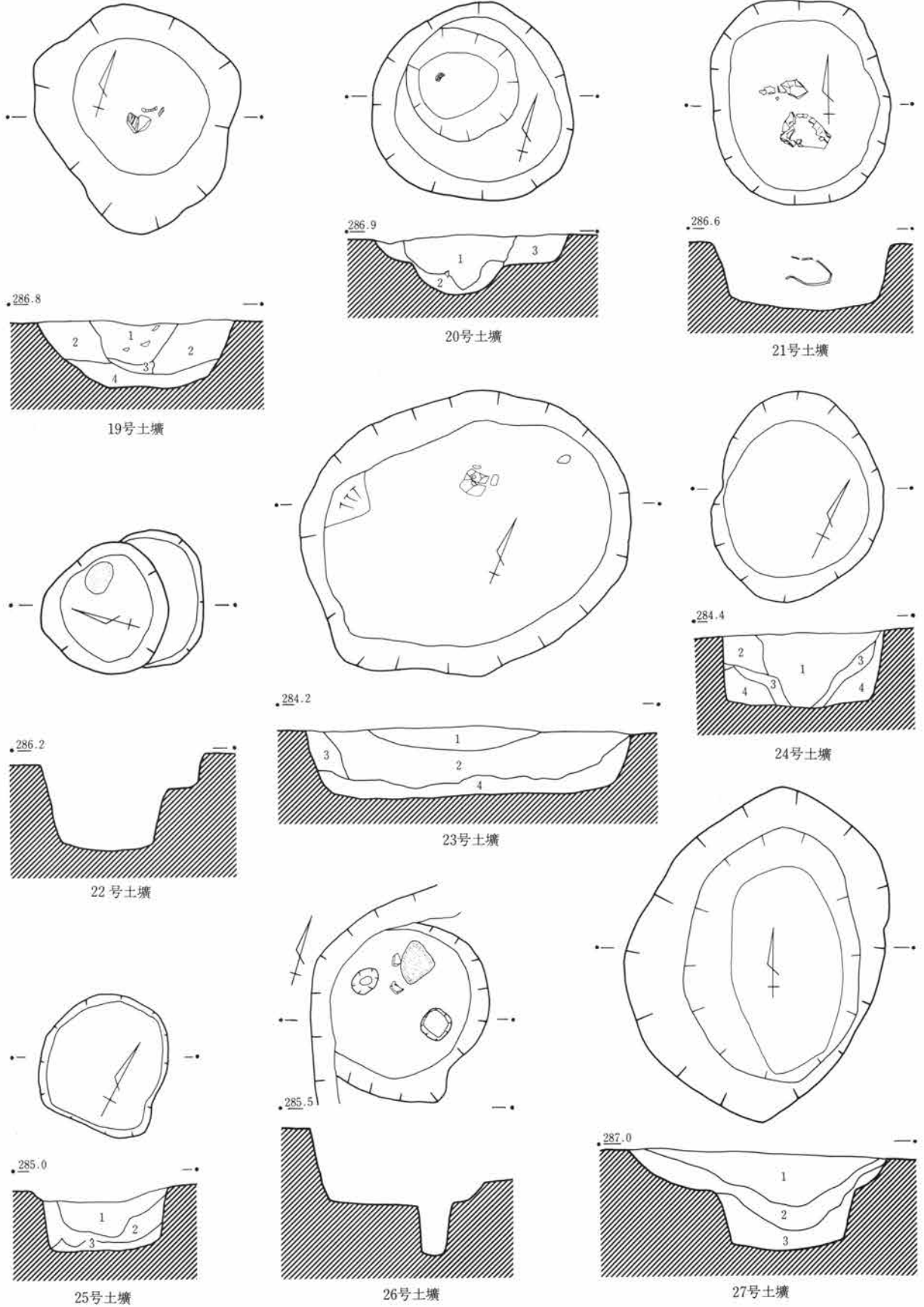
286.8



18号土壙

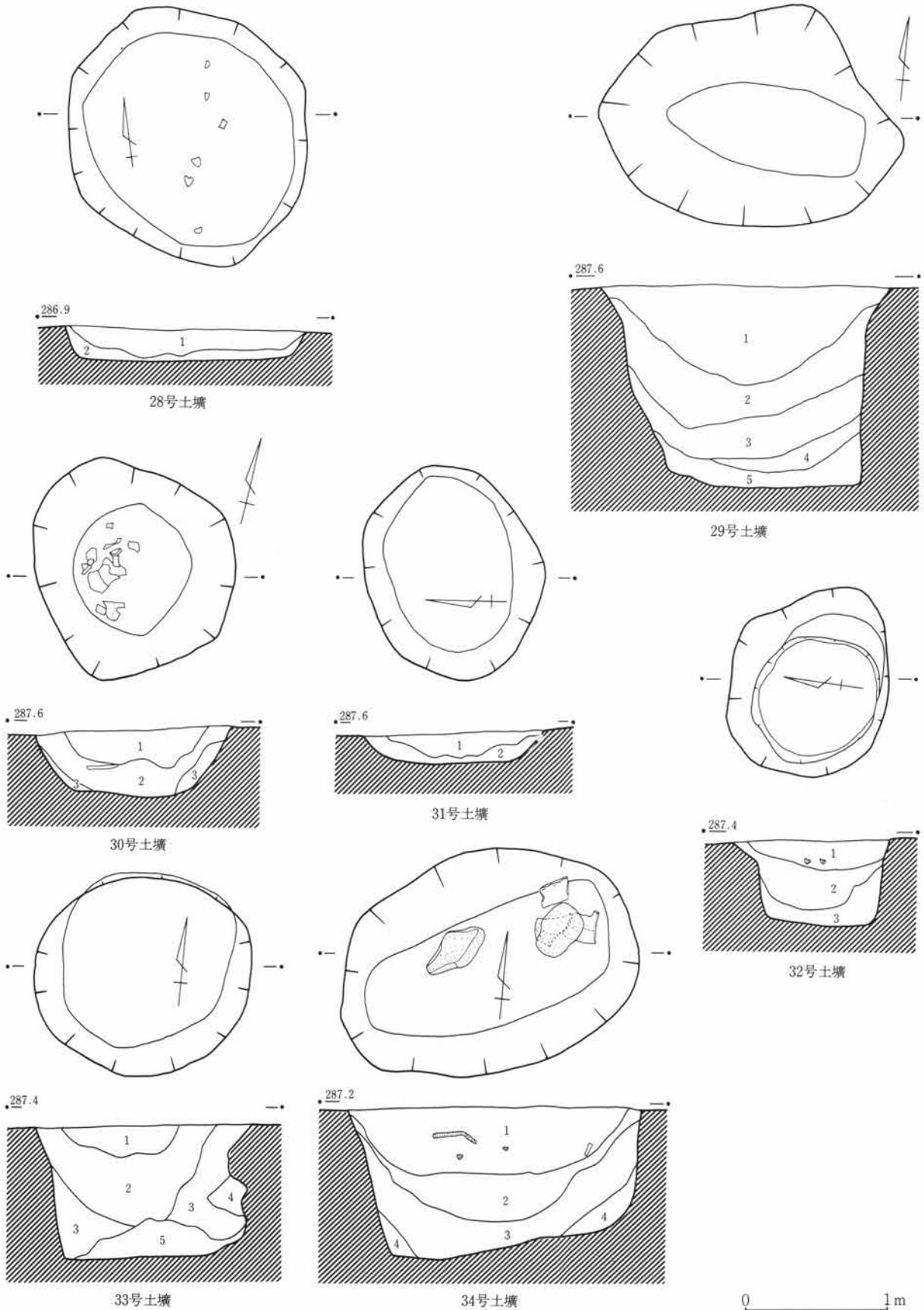
第58図 土壙 (2)





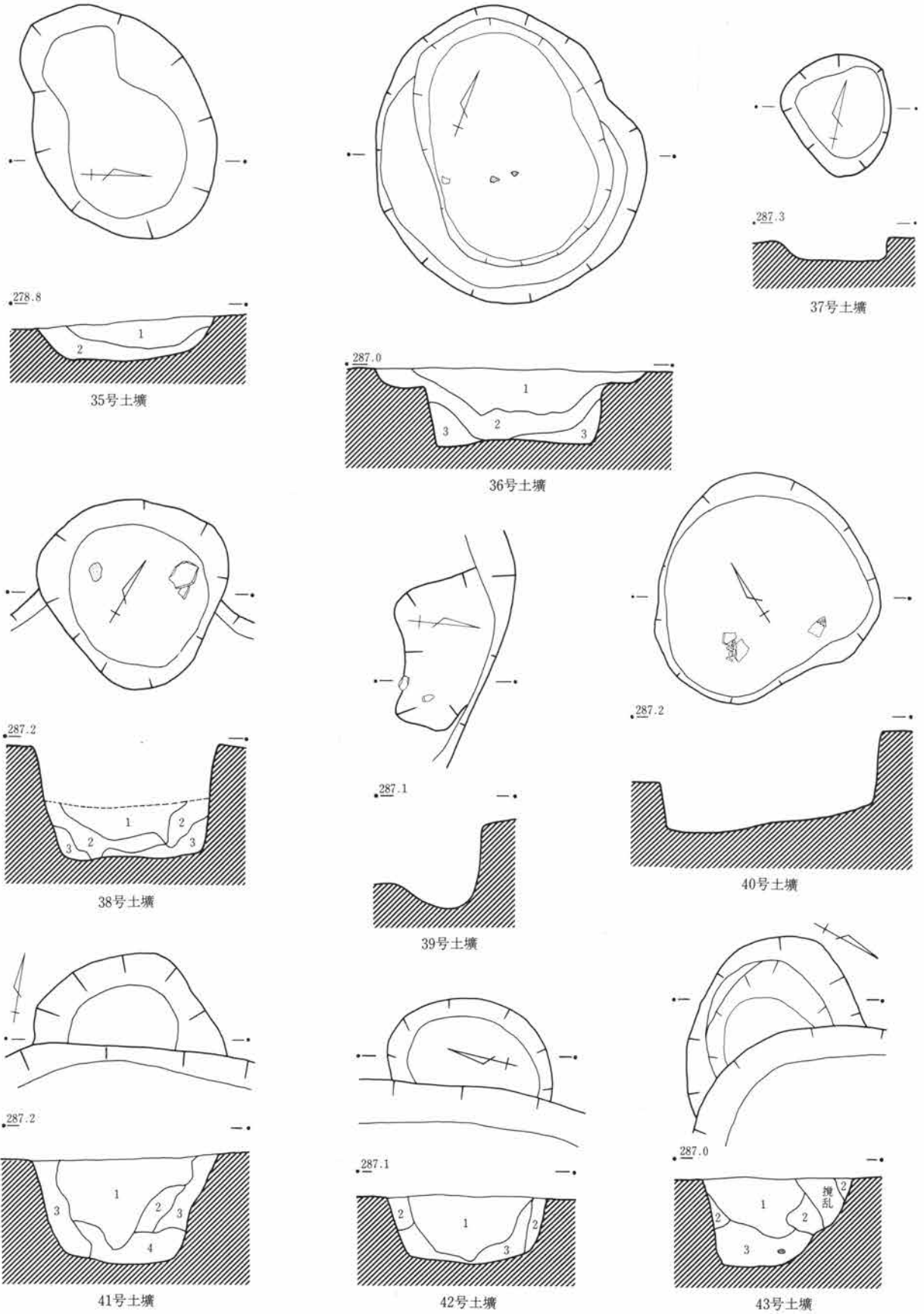
第59図 土 壙 (3)

0 1m



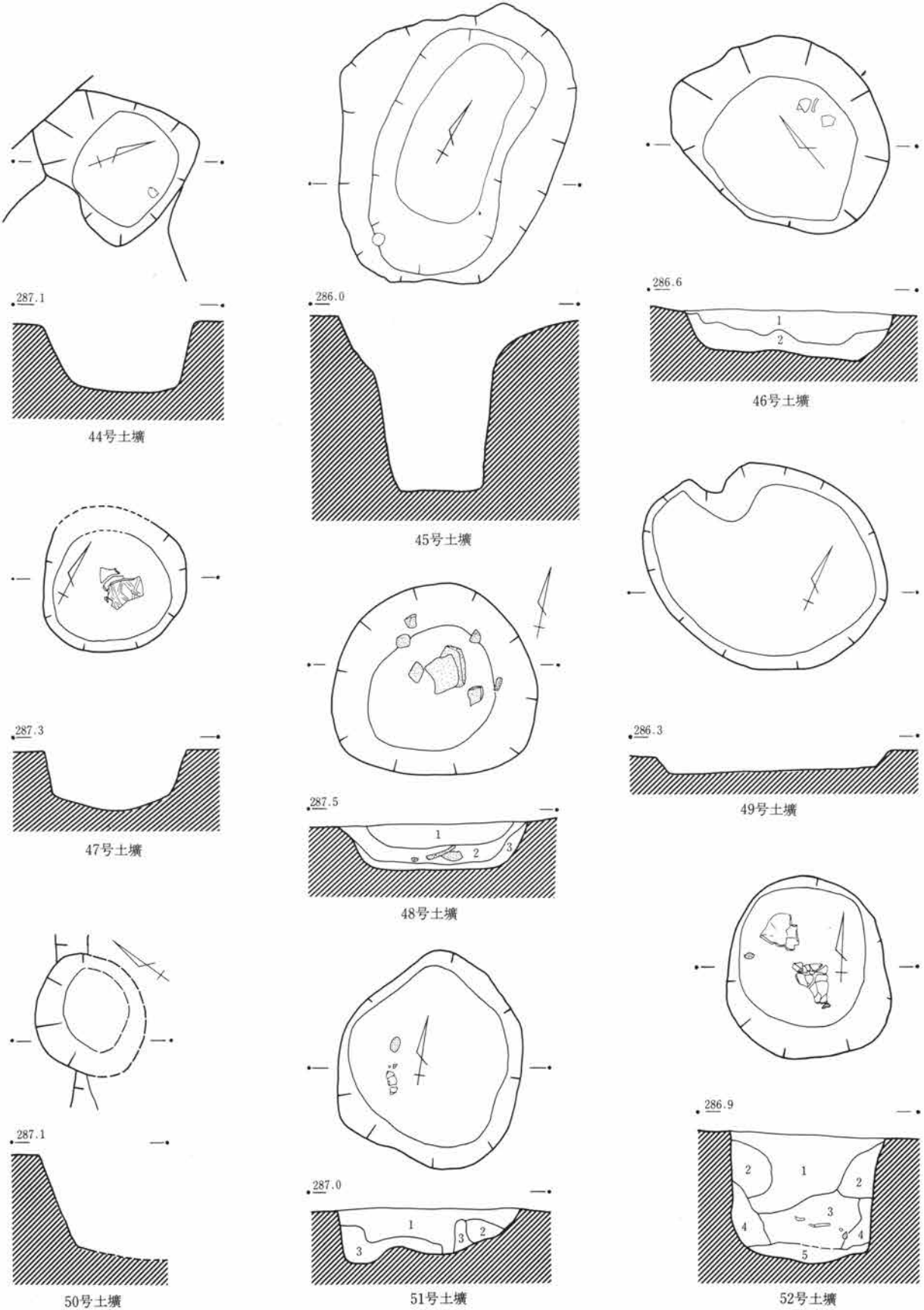
第60図 土壙 (4)

第V章 中哇遺跡



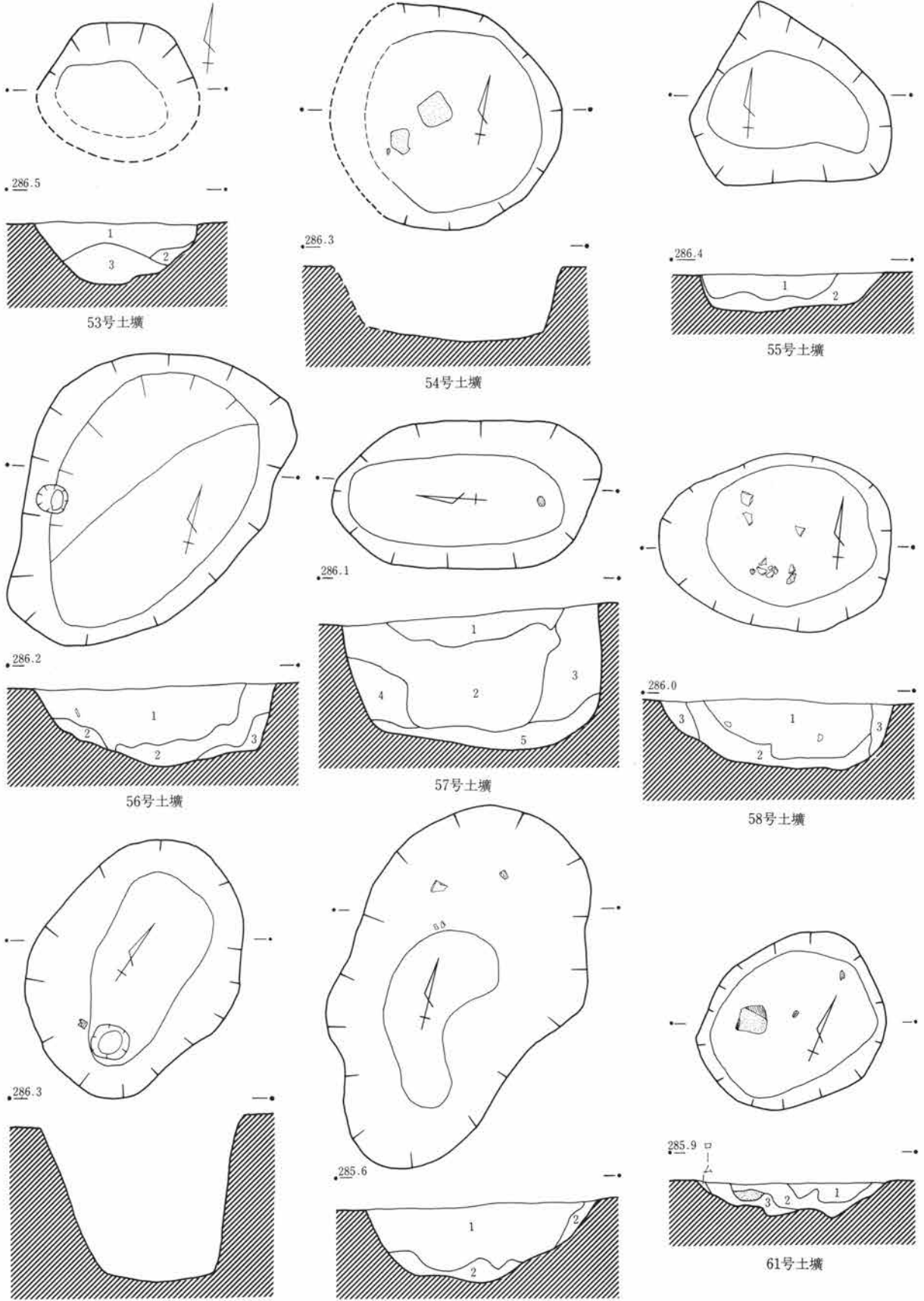
第61図 土 壙 (5)

0 1 m



第62図 土壙 (6)

0 1m



53号土坑

54号土坑

55号土坑

56号土坑

57号土坑

58号土坑

59号土坑

60号土坑

61号土坑

第63图 土坑 (7)

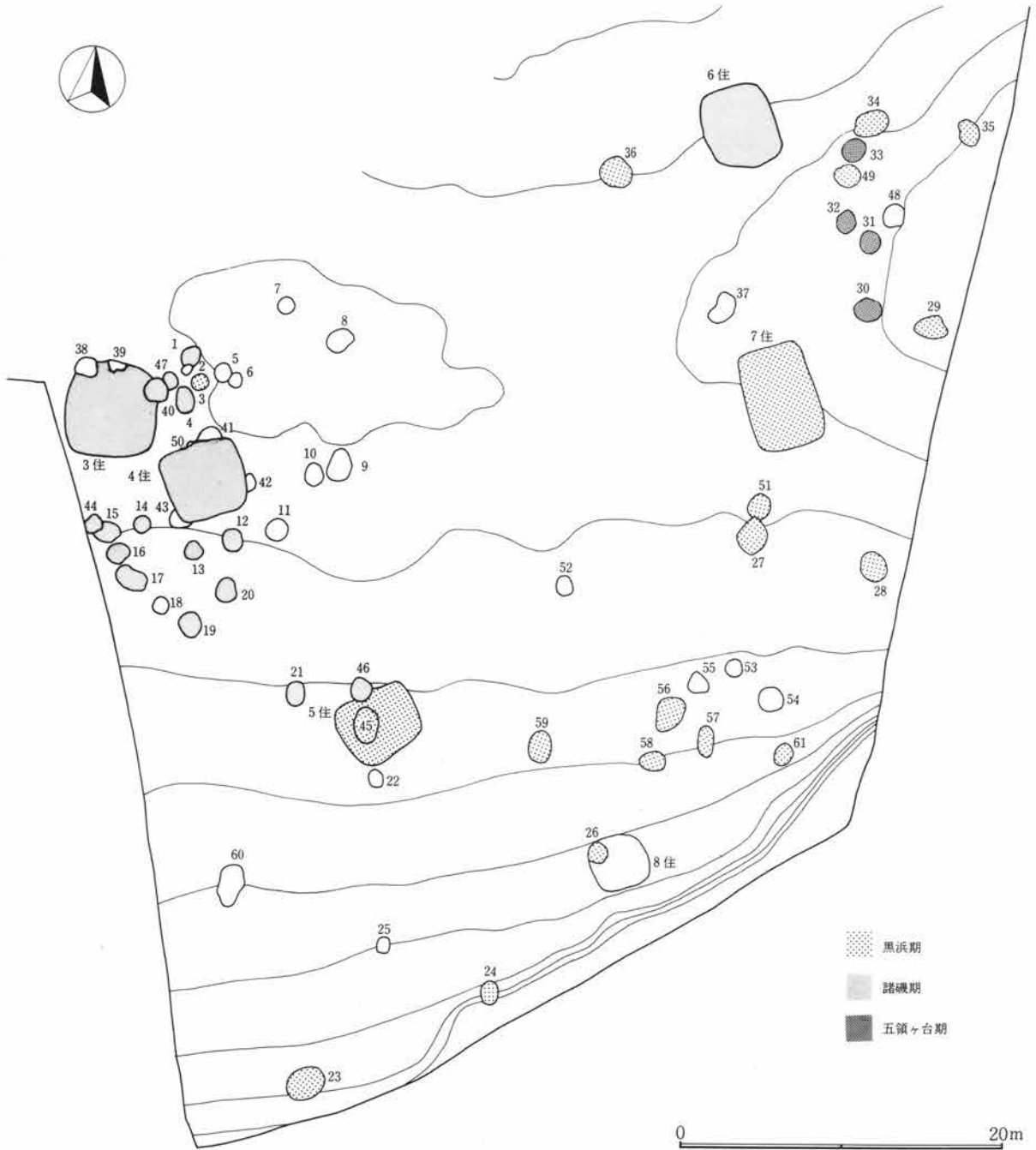
0 1m

番号	位置 (グリッド)	形状	規模 cm	出土遺物	分類	土層	備考
23	26~27-A29	長円	232 190 66	土器片(黒)	III B	1 暗褐色土 バサついている 2 " ローム含みやや明るい 3 明褐色土 ローム粒多く含む 4 " ロームバミス多く目立つ	
24	20~21-A32	円	150 120 54	土器片(黒)	II A	1 黒褐色土 バサついている 2 明褐色土 ロームブロック目立つ 3 暗褐色土 ローム含みバサつく 4 明褐色土 ローム粒多く含む	
25	24~A33~34	円	104 102 33		II A	1 暗褐色土 褐色土ブロック含む 2 " ローム粒含む 3 SPブロック	
26	17-A36		126 126 85	土器片(黒)	II A		8号住居址と重複する
27	12~13-A46	長円	233 182 68	土器片(黒) 打製石斧	I	1 暗褐色土 汚れたローム含む 2 " ローム粒若干含む 3 明褐色土 ローム含み柔らかい	
28	8~9-A45	円	192 174 22	土器片(黒)	III B	1 暗褐色土 しみ状のブロック含む 2 明褐色土 汚れたローム含む	
29	6~7-B02~03	不正長円	214 154 140	土器片(黒) 打製石斧 スクレイパー	I	1 黒褐色土 汚れたローム含む 2 " 混入物少ない 3 暗褐色土 ローム粒含む 4 " ローム、SP含む 5 暗褐色土 汚れたローム粒含む	
30	8~9-B03	円	153 140 48	土器片(五) スクレイパー	II A	1 暗褐色土 バサついている。 2 " ローム粒含む 3 明褐色土 ローム粒多く含む	
31	09-B05	長円	150 125 20	土器片(五)	III A	1 暗褐色土 ローム粒含む 2 明褐色土 ローム主体で汚れている	
32	09~10-B05~06	不正円	130 110 58	土器片(五) 打製石斧	II A	1 暗褐色土 汚れたローム含む 2 " SP ローム含む 3 明褐色土 " "	
33	09~10-B08	円	150 138 102	土器片(五)	II A	1 黒褐色土 SP褐色土ブロック含む 2 " ロームブロック少ない 3 " SP含む 4 " 3層よりSP多く含む 5 暗茶褐色土 ローム粒少し含む	
34	09~10-B08~09	長円	213 152 101	深鉢完形 土器片(黒) スクレイパー 石皿	I	1 暗褐色土 ロームブロック含む 2 " 汚れたローム含む 3 " ローム粒多く含む 4 明褐色土 ローム粒主体	
35	05~06-B08~09	長円	174 124 28	土器片(黒)	IV	1 暗褐色土 ローム粒多く含む 2 明褐色土 ロームブロック含む	
36	16~17-B07~08	長円	206 190 55	土器片(黒)	II A	1 暗褐色土 ロームブロック多く含む 2 " ローム粒含み汚れている 3 明褐色土 SP含み明るい	
37	13~14-B03	長円	200 112 18		III B		
38	33~34-B01	円	134 132 86		II A	1 暗黒褐色土 ローム粒子含む 2 " 1層よりローム多い 3 黄褐色土 SP多く含む	3号住居址と重複する
39	32~33-B01	不正	114 90 54				3号住居址と重複する
40	31-B00~01	円	158 151 50	土器片(諸)	II A		3号住居址と重複する

第V章 中畦遺跡

番号	位置 (グリッド)	形状	規模 cm	出土遺物	分類	土層	備考
41	29-30-A49		145 80 72		II A	1 黒褐色土 炭化物含む 2 " ローム粒含む 3 " 2層よりローム粒多い 4 褐色土 ローム粒、炭化物含む	4号住居址と重複する
42	28-A47~48		110 60 46		II A	1 黒褐色土 ローム粒、炭化物含む 2 " ローム主体とする 3 " ローム粒含む	4号住居址と重複する
43	30-31-A46~47	不正円	106 65 61		II A	1 淡褐色土 ローム、炭化物含む 2 " ローム主体で締っている 3 " ローム含み柔らかい	4号住居址と重複する
44				土器片(諸)	II A		
45	24-25-A40~41	長円	205 160 117		I	1 暗褐色土 汚れたローム含む 2 " 褐色土ブロック含む 3 暗黒褐色土 1層に似るが明るい 4 暗褐色土 SP多く含む 5 " 褐色土ブロック含む	5号住居址と重複する
46	24-25-A41~42	不正円	134 130 34	土器片(諸)	III B	1 暗褐色土 2 明褐色土 ロームブロック多く含む	5号住居址を切る
47	30-31-B01		100 100 83	土器片(諸)	II A		3号住居址と重複する
48	09-B06		145 130 32		III B	1 暗褐色土 ロームブロック含む 2 " 汚れたローム含む 3 明褐色土 ロームブロック多く含む	
49	09-10-B07		176 140 12	土器片(黒)	IV		
50	30-A49		72		II A		4号住居址と重複
51	12-13-A47	不正円	150 128 39	土器片(黒) 敲石	IV	1 黒褐色土 ローム粒含む 2 黄褐色土 ローム主体 3 " 2層より締っている	
52	18-19-A44~45		126 123 90	深鉢 土器片(諸)	II A	1 黒褐色土 ローム粒、炭化物含む 2 " 炭化物は1層より少ない 3 " 炭化物、遺物多く混入 4 黄褐色土 SP、炭化物含む 5 " 黒褐色土ブロック含む	
53	13-A42		114 (100) 43	土器片(諸) スクレイパー	III A	1 黒褐色土 ローム粒若干含む 2 黄褐色土 ローム主体とする 3 黒褐色土 ローム粒、炭化物含む	
54	11-12-A41	円	(160) 156 52		II A		
55	14-A41~42	不正長円	127 121 13		III B	1 黒褐色土 ローム粒含む 2 黄褐色土 ローム主体で良く締る	
56	15-A40~41	不正長円	220 170 57	土器片(黒)		1 黒褐色土 炭化物含む 2 黄褐色土 SP含む 3 " ローム主体とする	
57	14-A39~40	長円	190 103 98	土器片(黒)	I	1 暗黒褐色土 SP、炭化物含む 2 " ロームをまだらに含む 3 " 2層に似るが良く締る 4 黒褐色土 SP、炭化物含む 5 淡褐色土 SP含み柔らかい	
58	15-16-A39	楕円	162 124 46	土器片(黒)	II A	1 黒褐色土 ローム、炭化物含む 2 黒褐色土 ローム多く含む 3 黄褐色土 ローム主体とする	

番号	位置 (グリッド)	形状	規模 cm	出土遺物	分類	土層	備考
59	19-A39~40	長円	186 111 112	土器片(黒)	I		
60	28~29-A35~36	不正円	266 170 55			1 黒褐色土 ローム粒若干含む 2 黄褐色土 ロームブロック含む	
61	11~12-A39	長円	134 110 24	土器片(黒)	IV	1 黒褐色土 ローム、炭化物を含む 2 " 1層より締っている 3 淡褐色土 ローム多く含む	



第64図 中畦遺跡土壌時期別分類図

土壙出土土器 (第65図～第73図)

1号土壙 (第65図 1～4)

1は浮線文土器の口縁部破片である。口縁に沿って2本、その下位に斜めに矢羽根状の刻みを持った浮線を付す。2は横位沈線文を持つ、3・4はRLの縄文を持つ。3は口縁部片である、ともに焼成は良い。

3号土壙 (第65図 5)

5は原体LRを方向を変えて施文し、縦羽状を表出している。内面は丁寧に研磨されている。

4号土壙 (第65図 6)

6は底部近くの破片である。不明瞭ではあるがRLが施文されていると思われる。

12号土壙 (第65図 7)

7は地文にRLの縄文を施し、その上に半截竹管による平行沈線を施文、表面に砂粒が目立つ土器である。

13号土壙 (第65図 8)

8は口縁部片である。薄手で口唇部がやや尖り気味となる。無節Lの縄文が施文されている。

14号土壙 (第65図 9～18)

9は深鉢形土器である。口縁部、胴下半部を欠損している。文様部は、半截竹管による平行沈線によって描かれている。4条の平行沈線を廻らし、その上部に弧状または三角形のモチーフを描き出している。胴部は、RLの縄文を施文している。かなり焼成の良好な土器である。淡褐色を呈す。10はやや小型の深鉢形土器の胴部である。底部両端は外に張り出しており、文様部で胴部がやや屈曲して、立ち上る。地文にRLの縄文を施文し、半截竹管による平行沈線で、集合沈線を2段廻らし、その間に、2本の平行沈線で緩かな波状文を描き込んでいる。焼成の良い土器である。11は外反しながら立ち上がる。深鉢形土器の胴下半部である。全面にRLの単節縄文が横位施文されている。12はRLの縄文を施文する口縁破片である。表面がかなり荒れている。13・14は9と同一個体である。平行沈線によるモチーフを描く。15は地文にRLの縄文を持ち、さらに平行沈線による横位、斜位のモチーフを描く。16は結節を持ったRLの縄文を縦の方向に転がしている。胎土中には金雲母が目立つ、17は半截竹管による平行沈線文で区画し、さらにその中を竹管による格子目、結節を持ったLRの縄文を縦位に転がしている。焼成の良い堅緻な土器である。18は口縁部である、無文であるが整形時の横撫でによる微隆起が見られる。石粒、軽石粒が見られる。

15号土壙 (第65図 19～25)

19・20はRLを地文に付し、その上に平行沈線を横位多段施文する。焼成の良い土器である。21は地文に無節Lの縄文を付し、その上に三角形を基調とした幾可学文を竹管によって描き出している。22はRLの縄文を地文に持ち、棒状工具によって引きずった様な文様が認められる。雑な作りである。23は無文土器である。24・25は底部片である。地文にRLの縄文を持つ。

16号土壙 (第65図 26～28)

26・27は同一個体である、平行沈線による幾可学文を持つと思われる。28は底部片である。

17号土壙 (第65図 29)

29はRLの縄文を、全面に横位施文する。原体端部に結節が見られる。焼成の良い土器である。

19号土壙 (第66図 30～40)

30は口縁部片である。付加条第2種RL+Rを施文する。31・32は深鉢形土器の口縁部片である。RLの縄文を全面に横位施文する。原体は細くていねいに施文される。直前段多条、内面は平滑に研磨。33は深鉢の胴部片である。LRを全面施文しているが条はかなり立っている。非常に薄く作られている。34・35・36・

37・38は深鉢形土器である。全面にRLの縄文を施文する。34は円形竹管文を持つ、内面は非常にいいいに磨かれており、赤褐色を呈す。焼成の良い土器である。39もRLの縄文を持つが原体はやや細い。外面に炭化物の付着が見られる。焼成の良い土器である。40は底部片である。平底でやや薄手の土器である。RLの縄文を持つ。

20号土壙（第66図 41～47）

41・42は浮線文土器である。隣接する浮線上に異方向、いわゆる矢羽根状の刻みを持つ。43・44は同一個体である。半截竹管による平行沈線で横位文様を施す。45・46はRLの縄文を持つ。47は無文であるが整形時にできた凹凸が表面に残っている。

21号土壙（第66図 48・49）

48は深鉢形土器である胴部はやや膨らみを持って立ち上がり、口縁部は外反する。全面にRLの縄文を横位施文しており、口縁下に4.5cm程の間隔で一対の補修孔がみられる。49は深鉢形土器の胴部である。全面にRLの縄文を施文するが、条の流れが一定していない。

22号土壙（第66図 50・51）

50・51は同一個体片、無文土器である。焼成の良い土器である。

23号土壙（第67図 52～54）

52は口縁部が朝顔状に開く深鉢形土器である。推定口径32cm胴下部を欠損している。無節LとRの縄文を用いて羽状を表出している。ところどころに原体端部を結んだ痕が認められる。脆弱な土器である。53はLR・RLの単節2種類を使って羽状縄文を施文している。54は細い半截竹管文が横に施文されている。

24号土壙（第67図 55～58）

55はRL、56はLRを施文している。57はLRLの複節かもしれない。58は無文土器である。

26号土壙（第67図 59～61）

59は52と同一個体と思われる。無節L、Rで羽状縄文を施す。60・61は付加条である。60は $RL + \frac{L}{L}$ である。61は $L + \frac{R}{L}$ である。付加されている縄は太さに差が見られる。

27号土壙（第67図 62～67）

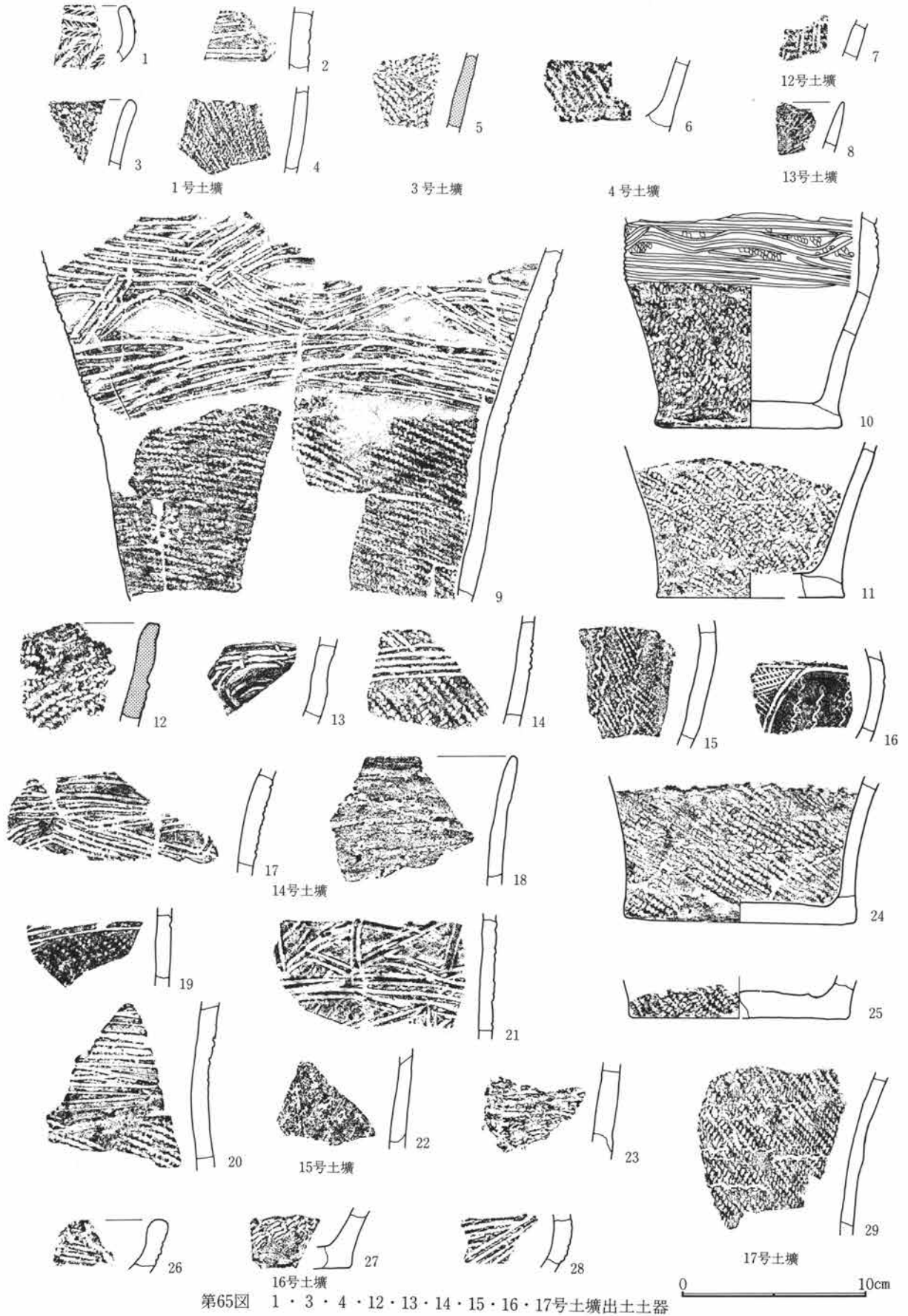
62・63・64はRLの単節縄文、65は $RL + \frac{L}{L}$ の付加条と思われる。66はRLとえられる。67はRLの縄文が施文されているものと見られるが、摩滅がひどく、極めて不明瞭である。

28号土壙（第67図 68～72）

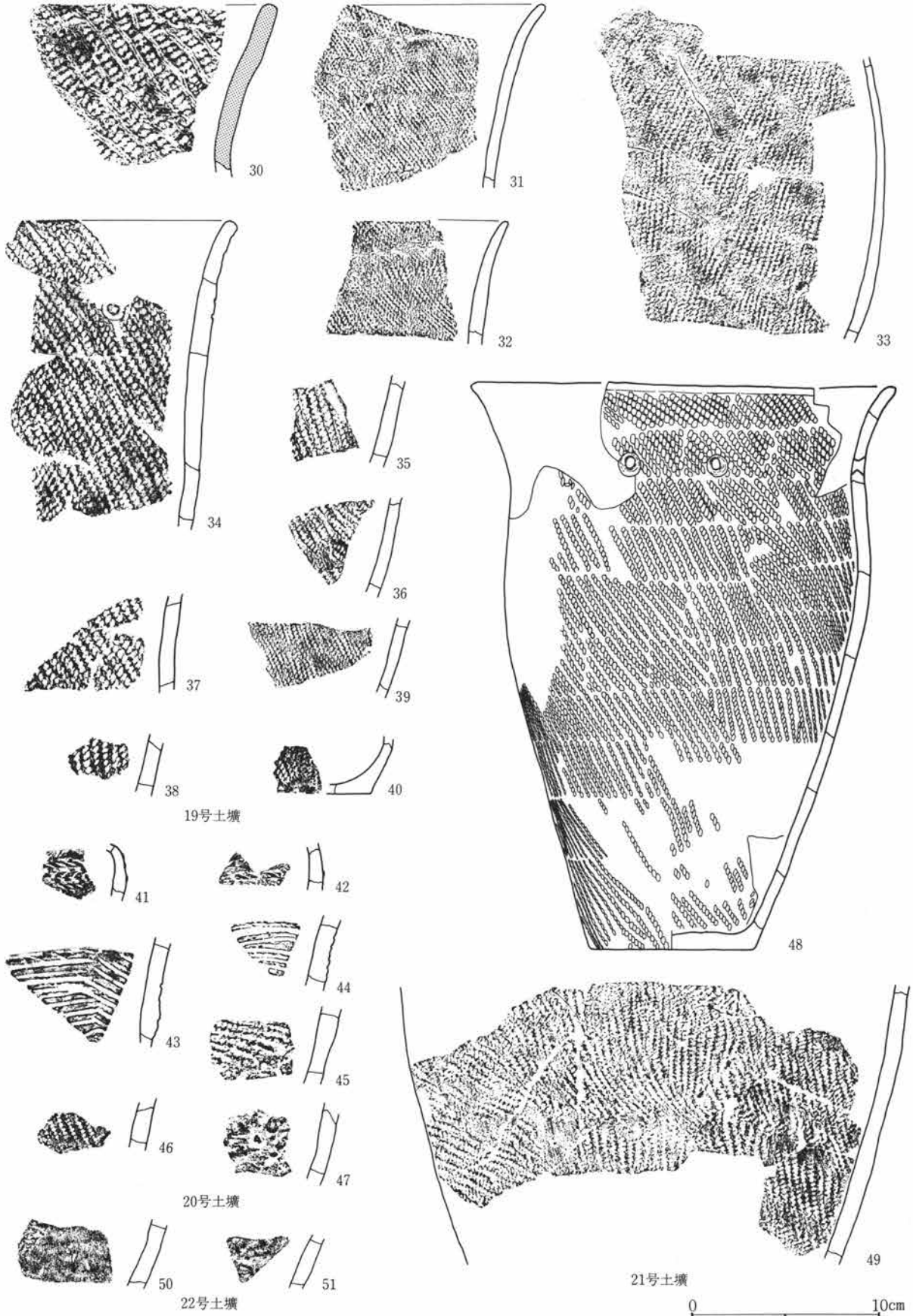
68・69・70は同一個体やや薄手の作りで、口唇部は若干内側へ入る。全面にLRの縄文が施されている。19・71はRLの縄文が施文されている。72は絡縄体縄文である。軸縄はLLと思われる。L2本を巻いている。

29号土壙（第67・68図 73～94）

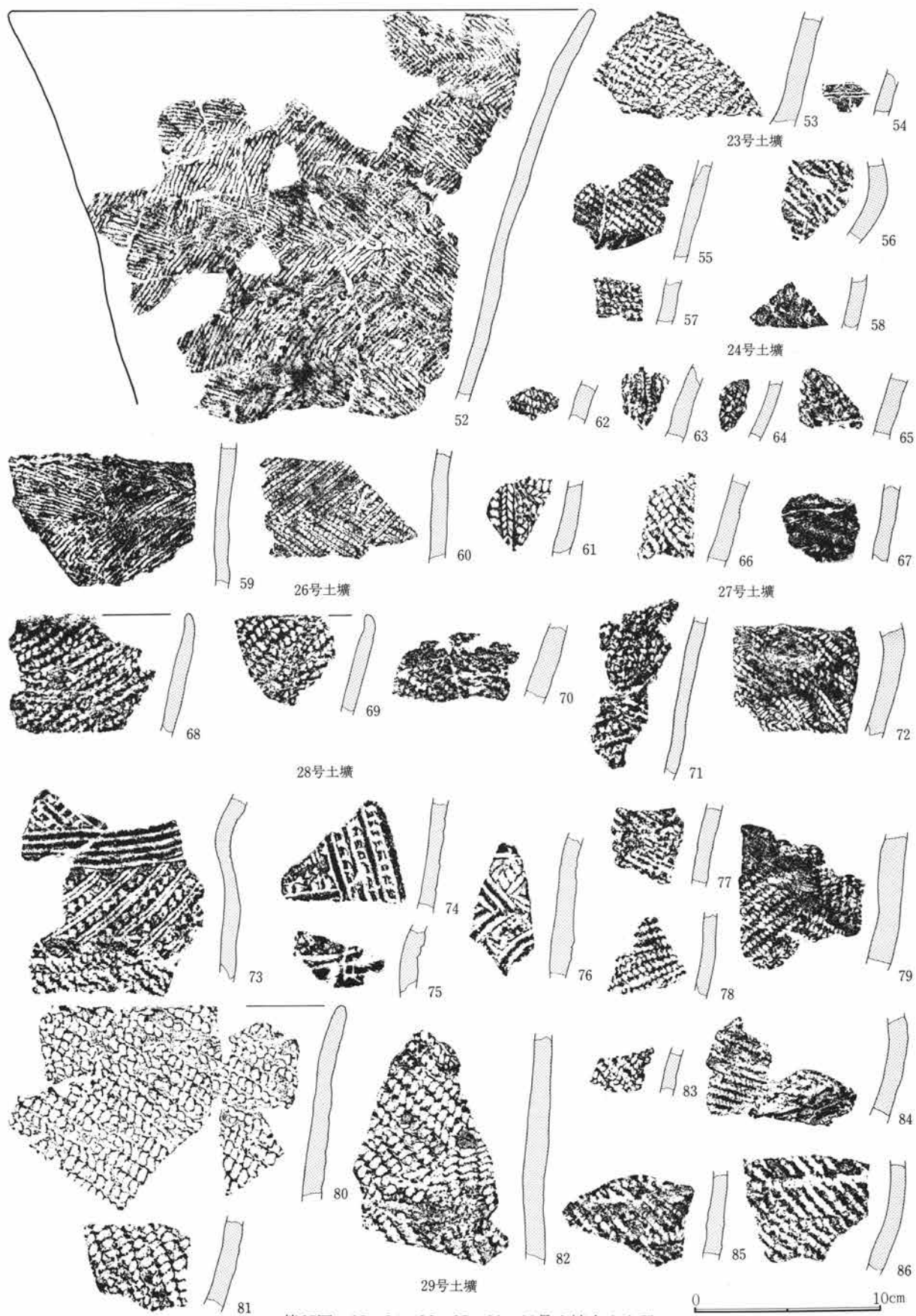
73は深鉢形土器である。胴部と口縁部文様帯の一部である。文様部は4本単位の竹管で横位に廻らし、その上位には斜めに平行沈線を付し、その間には半截竹管による爪形刺突文が付されている。胴部は $L < \frac{R}{L} < \frac{L}{R}$ の撚り戻しが行なわれており、下位にはRLのループ文が多段施文されている。74は半截竹管による平行沈線、連続の刺突爪形文で三角形を画すと考えられる。75は平行沈線を持つ、地文に縄文が見られるが原体は不明、かなり摩滅した土器である。76は地文に無節RにRを2本付加条を施文し、半截竹管による平行沈線により菱形、円形のモチーフを描く、77は無節Rの縄文を横位施文する。内面に炭化物の付着が見られる。78・79・80・81・82・83・84・85・86は単節を施文する。78はRL、79はRL、LRを用いて羽状を作る。80・81・82は同一個体である。全面にRLを横位施文する。節が大きく繊維の方向も明瞭に判る。83・84は、



第65图 1·3·4·12·13·14·15·16·17号土壙出土土器



第66图 19·20·21·22号土壤出土土器



第67图 23·24·26·27·28·29号土壙出土土器

R Lで焼成は良い。84は0段多条、85・86は同一個体、R Lを横位施文する。かなり摩滅している。87・88・89はやや丸みを持つ胴部片である。R Lの単節縄文を、横位施文する。2次火熱を受けている。90・91・92・93は、正反の合、 $L < \frac{R}{L}$ である。2次火熱を受けており、弱く、内面に炭化物が付着する。94はR Lの単節縄文を持つ。焼成の良い土器である。

30号土壙（第68図 95～102）

95は胴部中位で最大径をとり、口縁、底部でややしまる樽型を呈す。口唇部は内削ぎ状となっている。施文は口唇部直下に半截竹管による縦位の短沈線を廻らし、その下に、一周させている。さらにV字U字交互となる波状文を廻らし、その間に薄い竹管により、刺突状の文様を施す。以下胴部には2本一単位で、Rの結節文を縦位に転がしている。96は頸部で締め口縁部受け口状を呈す、深鉢形土器である。口唇端部は平らになっている。口縁部には竹管による縦位の線を廻らし、口唇部直下と頸部に横に1本廻らす。胴部は、Rの結節文を7本一単位で、縦位に施す。97は口縁部片である、地文にR Lの縄文を施し、その上に横位、斜位の平行沈線を配している。焼成良い。98はL Rの縄文を施文する。石英粒目立つ。99、100は同一個体、99は口縁部片である。間を置いて半截竹管による平行沈線を廻らしその間には、竹管による引きずり文、さらに三角形の刺突文を上下に付す。口唇部下には縦位の平行沈線を一周させている。100は、横位の平行沈線を二段廻らし、その両側三角陰刻文を配す。さらに平行短沈線を横列または、鋸歯状に付す。101は棒状工具による沈線で、横位、斜位、さらには蕨手状のモチーフを描き、所どころに篋状工具による三角形の刺突文がモチーフに接している。焼成の良い土器である。102は器面より若干高まりを持った部分を半截竹管による隆線で縦に区画し。その中には、篋状のもので、斜格子文が施される。

31号土壙（第68図 103・104）

103は口縁部片である、R Lの縄文を横位施文している。内面に調整痕が明瞭に認められる。104は口縁部折り返し口縁で、ゆるく山状の突起を持つ。口唇部下に細い竹管による縦位の沈線を廻らす。以下横に沈線を廻らし、隅々に三角状の刺突文を付している。口縁部は内削ぎ状となる。

32号土壙（第68図 105）

105は胴部である。地文にL Rの縄文を持ち、2本平行に垂下させた沈線内に沿って三角形の刺突文を施す。

33号土壙（第69図 106～122）

106・107は無節Lの縄文を施文する。108・110はR L、109・111は付加条、109は $L R + \frac{L}{L}$ 、111は、 $L + \frac{R}{L}$ である。112・113は単節R Lを縦位施文している。原体は細く、直前段多条である。114・115・116R Lを横位施文している。114は上端に沈線が見られる。共に焼成は良い。117はR Lの単節斜縄文を持つ、113～116に較べると原体は太い。胎土中に石粒が目立つ。118・119は同一個体かと思われる。118は口縁部片で、口縁部分突起が付き分割されている。地文にL Rの縄文を縦位に施文し、沈線で楕円の区画文を描き、その区画文間には低い橋状把手が付く。口縁内側には、折り返しによる段が見られる。胎土中に砂粒が目立つ。119はL Rの結節文が縦位に施されている。120は、Lの撚糸を縦に転がし、さらに結節を付している。121は棒状工具による平行沈線を横に引き、その沈線に向かって細い円形竹管で斜めに刺突を施す。122は棒状工具による沈線、円を描き、平行沈線の両側に、斜めに棒状工具による刺突を加えている。

34号土壙（第69・70図 123～167）

123・124・125は同一個体、無節Lを全面に施文する。126・127・128は無節Lを横位施文する。127・128は同一個体、129は、 $L < \frac{L}{L}$ の撚り戻し、131は底部片である。底端部が外へ張り出している。132は、波状口縁部片である。波頂部は双頭になるとと思われる。L R・R Lの2種類の原体を用いて施文する。133はL R、134

はRL、135・136はLR・RLを用いて羽状を作る底部片である。136はLRを、137はLRを施文する。0段多状である。138・139・140はRLを施文する。139は縦の平行沈線が見られる。141・142・143はLRであるが142は不明瞭である。144は直前段多条のLR・RLを用いて羽状を作る。145・146・148・149・150・151はRL。147はLRを施文する。153は極めて不明瞭、付加条か。152・154・156は正反の合 $L < \frac{R}{L} R$ である。155はLRで原体の太さの違う2本を撚り合わせたと思われる。159・160・161・162・163・164・165・166は付加条第2種で何れも軸繩に無節LまたはRを用いて、RとLを付加している。157は $L + \frac{L}{R}$ である。162は原体不明、167は僅かに縄文が見られる。

35号土壙（第70図 168～172）

168は、 $RL + \frac{L}{R}$ の付加条と思われる。169は無文、170はRLを横位施文する。171はRの結縄文を縦位に施文している。172は棒状の工具による沈線で横位、蕨手状文を描く。

36号土壙（第70図 173～183）

173は口縁部片である。櫛歯状工具による、集合沈線、および斜めに刺突列を施す。また口縁部に沿って一列に刺突文を廻らす。174・175・177・178・179・181・182は単節縄文を施文している。174・181・182はLR、175・177・178・179はRLである。178は底部片。176は貼り付け隆帯を持ち、その上に半截竹管による爪形文が付されている。地文にLR、指による凹みを持つ。180は竹管による連続爪形文で縦、横の区画を描いている。地文RLか。183は無文土器である。

40号土壙（第70図 184～187）

184は小型の深鉢形土器の上半部である。口縁部は大きく外反し、全面にRLを横位施文する。摩滅顕著。185はキャリパー形土器の口縁部付近と思われる。半截竹管による平行沈線を縦位、横位に施している。186は半截竹管による平行沈線を横に多段廻らし、上位に菱形のモチーフを描いている。焼成は良い。187は胴部片である。上端には横位の沈線を持ち、胴部は、3本一単位でRの結節文が縦位施文されている。胎土中に、長石、石英粒が目立ち、ややざらざらした土器である。

44号土壙（第71図 188）

188は半截竹管による平行沈線文で弧状のモチーフを描く。

46号土壙（第71図 189～195）

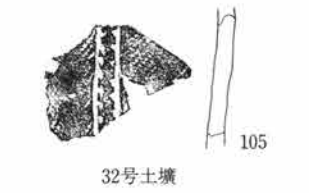
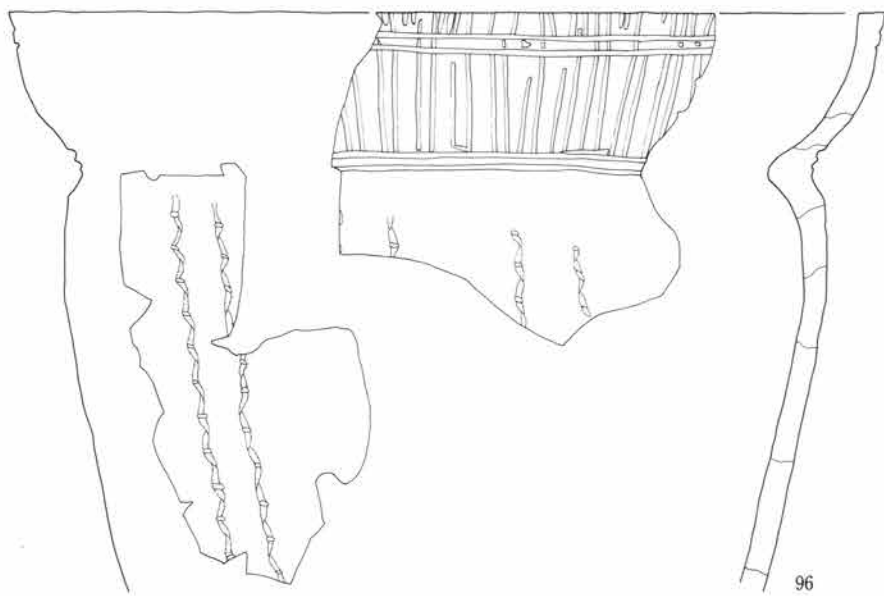
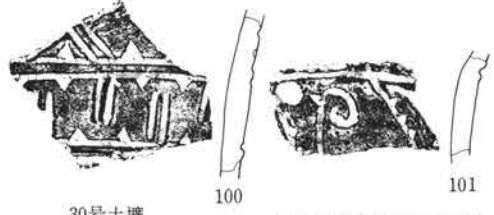
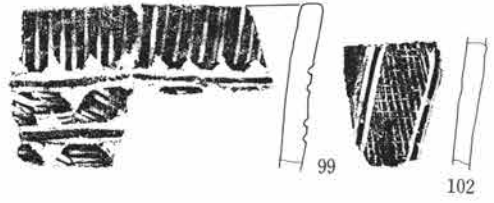
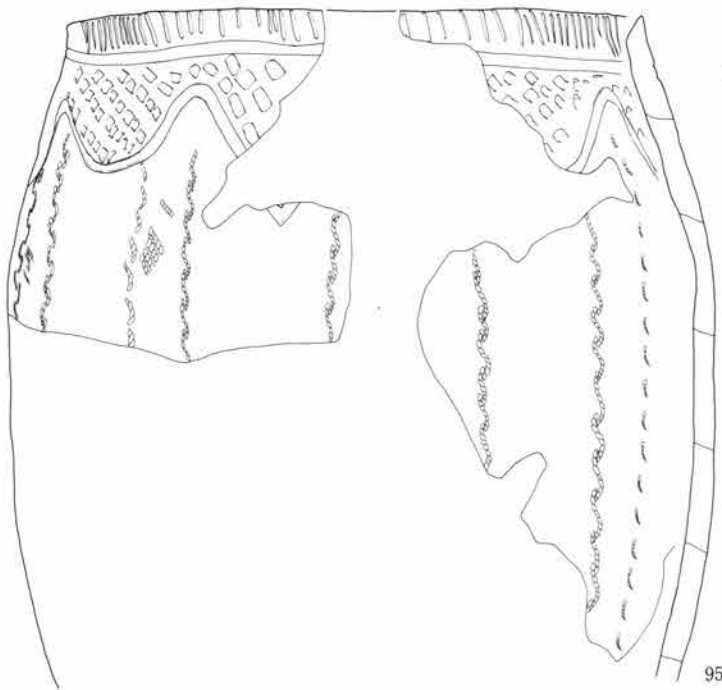
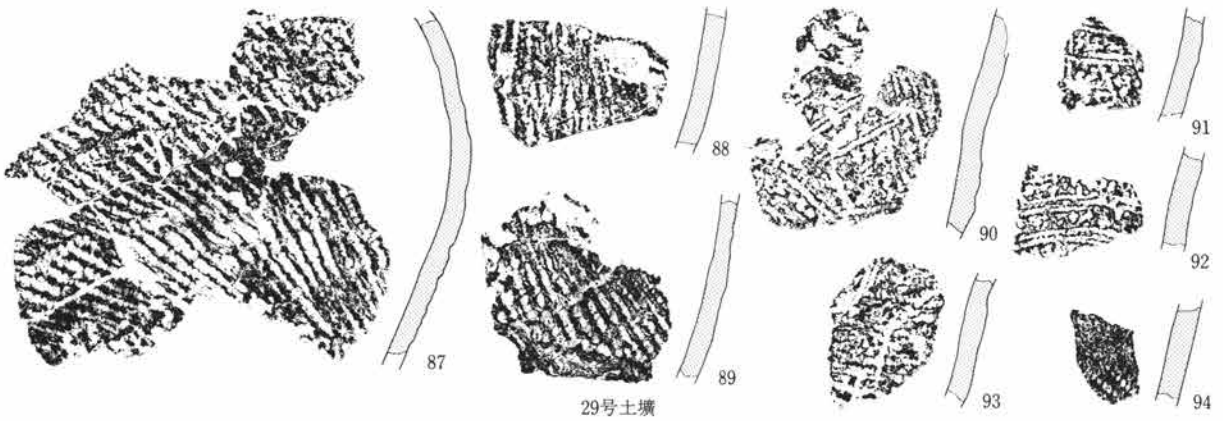
189は4単位の波状口縁を持つ深鉢形土器である。胴部上半で膨らみ、口縁部は外反する。地文に結節を持ったRLの縄文を転がし、肩部、頸部に2本、3本単位の平行沈線を廻らし、口縁部文様帯は、口縁に沿って3本単位の平行沈線、その下位に弧状のモチーフを描く。また口唇部には、半截竹管による刻みを持つ。190は口縁部片である。10本単位の櫛歯状工具により、口縁部直下に縦位に廻らし、下位に4本横位に刺突文を施文している。191はLRの縄文を横位施文する。脆弱な土器である。192・193は同一個体RLの単節縄文を横位施文している。脆弱な土器である。194は付加条RL+Rである。195は底部片である。RLの縄文を持つ上げ底である。

47号土壙（第71図 196）

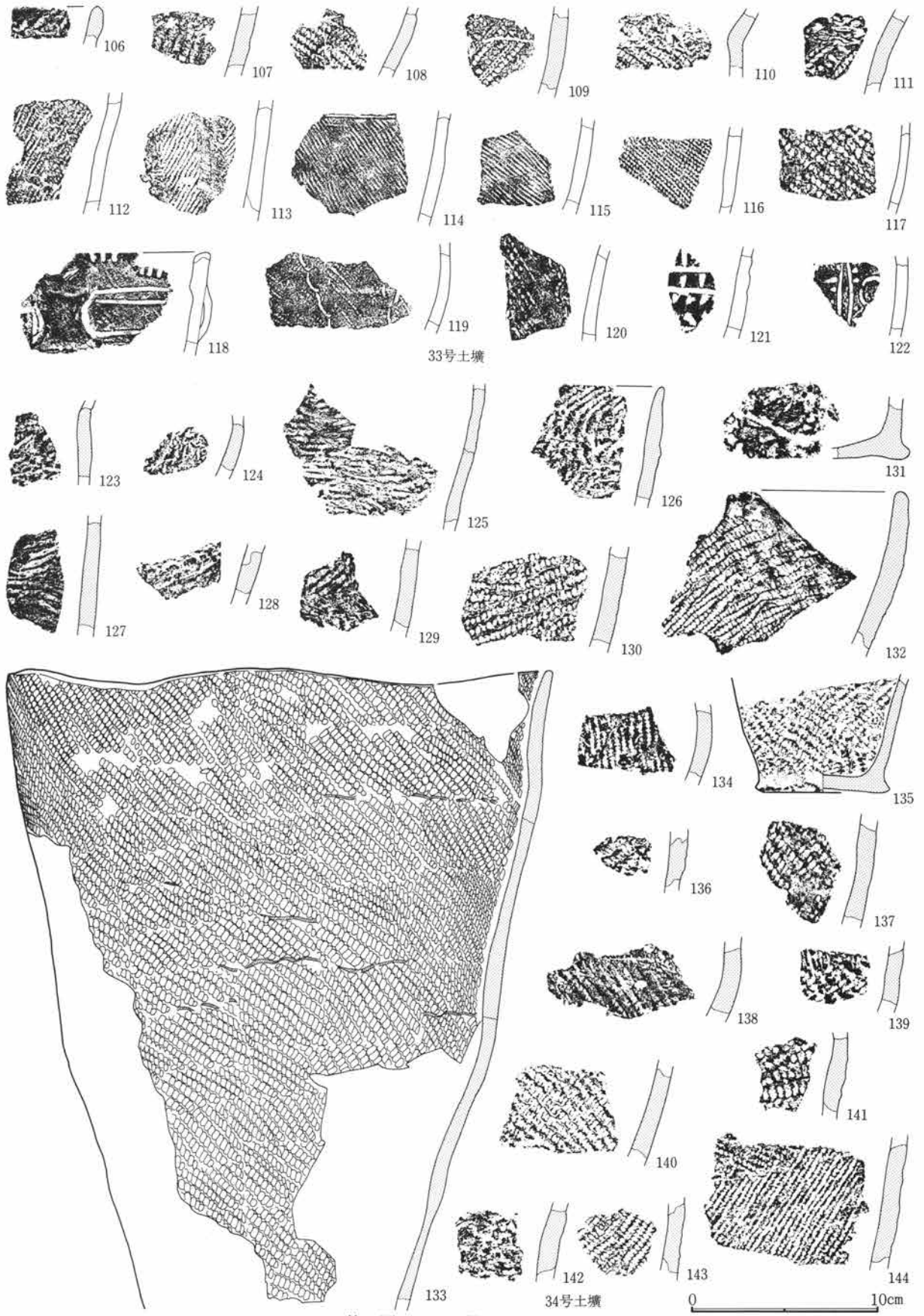
196は深鉢形土器の口縁部片である。波状口縁で、波頭部は2つに分かれている。かなり大型になると思われる。文様は半截竹管による平行沈線で、口唇部下に1条、その下に4条を廻らし、下位は、菱形、三角形を、さらには弧状のモチーフを充填している。また、口唇部には半截竹管による刺突文が施されている。

49号土壙（第71図 197～200）

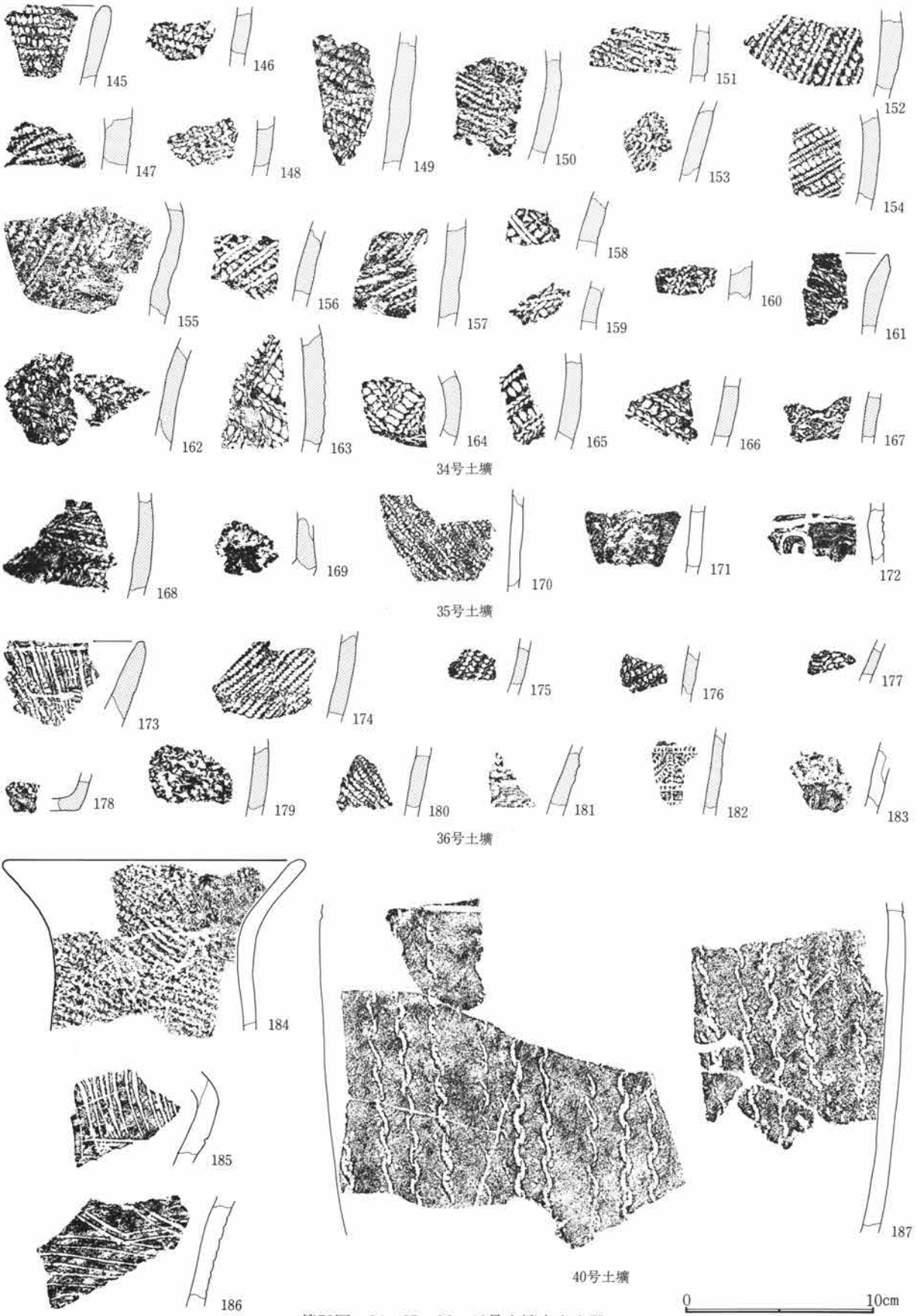
197は連続爪形文を付す。198・199は付加条。198は $LR + L$ 、199は $R + \frac{L}{R}$ である。200はLで結び目を持つ。



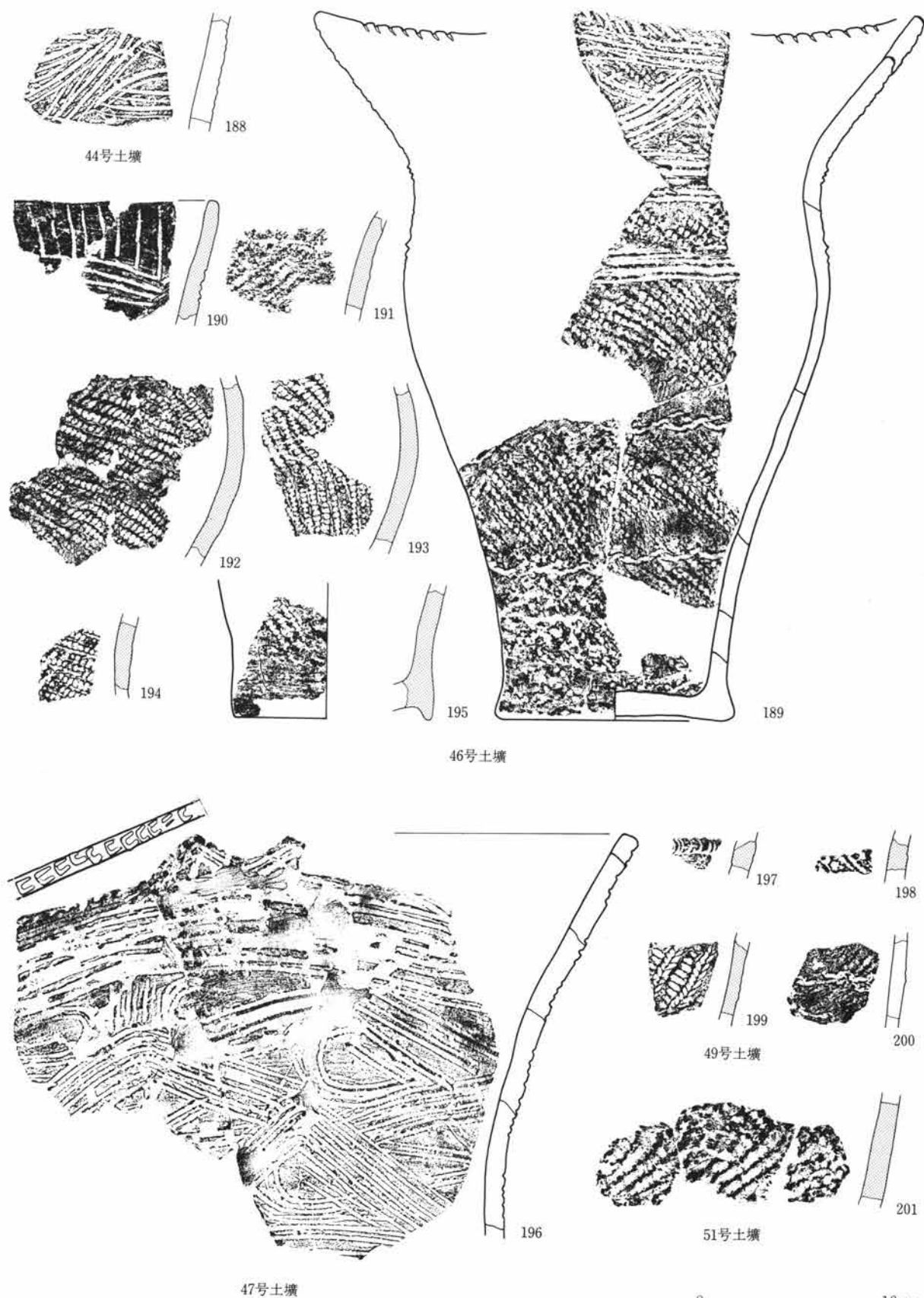
第68图 29·30·31·32号土壙出土土器



第69图 33·34号土壤出土土器



第70图 34·35·36·40号土壤出土土器



第71图 44·46·47·49·51号土壤出土土器

51号土壙 (第71図 201)

201はための原体、LRを横に施文しているが撚りがゆるく節は不明瞭である。

52号土壙 (第72図 202~217)

202・203・204は連続爪形文を持つ。202は口縁部片で、口唇下に3本の爪形文を横に廻らし、その下位に、左斜め下方向に続いている。地文にはLRが施されている。203は円形の凹みを持つ。205はLRが施文される。かなり焼成の良い土器である。206はLR・RL2種類の原体を転がし、菱形のモチーフを描いている。207はRLの縄文を横位に施文している。208はLR、209は付加条であろう。210は口径35.9cmの深鉢形土器である。胴部は膨らみ、口縁部は外反する。全面にRLの単節縄文を横位に施文する。薄手で作りのしっかりした土器である。約 $\frac{1}{2}$ 残存しているが底を欠いている。211は条痕を持つ。212は口縁部片である。口唇部は棒状工具で押し、山形を呈す。全面にLRを施文しており、指による押圧痕が2ヶ所見られる。薄く焼成の良い土器である。213は節が不明瞭で、一見無節に見えるが、LRの単節である。214・215・216・217は何れも胴部片である。RLを全面に横位施文している。217は表面に炭化物が付着する。

53号土壙 (第72図 218~220)

218・219は同一個体である。地文にLRを施文し、連続爪形文で縦横の区画を作り、その区画内に斜めの爪形文を配す。また格子交点には棒状工具による円形の刺突が付されている。220は無節Rを横位施文する。

56号土壙 (第72図 221)

221は付加条、 $R + \frac{L}{L}$ である。

57号土壙 (第72図 222~230)

222は口縁部片である。山形波状の口縁で、全面にRLの縄文が施文される。223はLRを縦位に施文していると思われる。224は無節Rを、225は無節Rが見られるが器面が荒れていて判読が難しい。棒状の工具で引いたと思われる。凹線が横方向に走る。226は無節と思われるが撚りは不明である。227・228はLRが施文されている。229はLR・RLを用いて羽状を作る。末端にループが見られる。230は $R < \begin{matrix} R \\ L \\ L \end{matrix}$ である、羽状を作る。

58号土壙 (第73図 231~241)

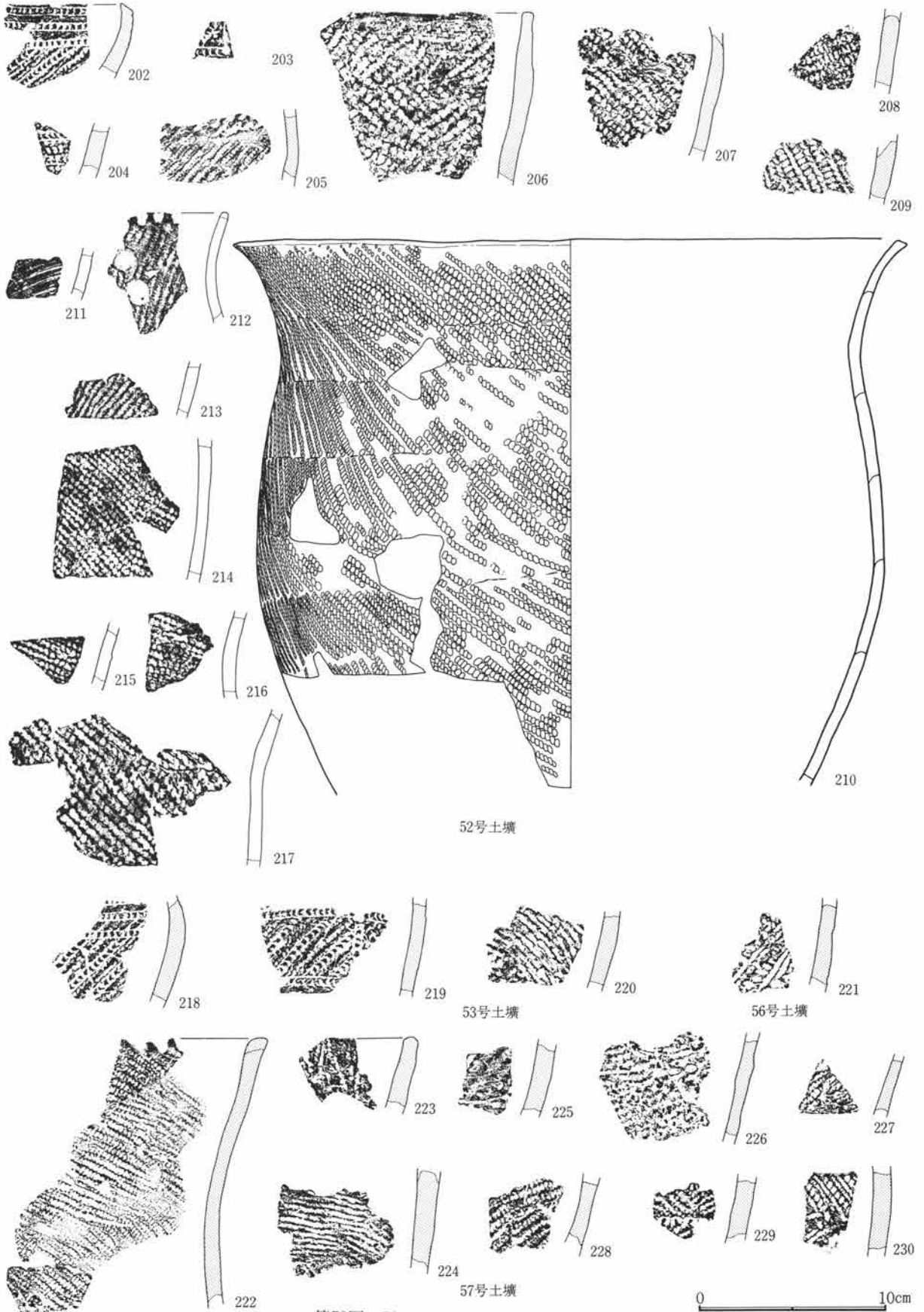
231・232は口唇部下に竹管により平行沈線を引き、さらに斜めのモチーフを加えている。地文はLRである。233・234は浅く引いた平行沈線内に櫛歯により横位刺突を加えている。刺突具は先が丸く尖っている。235・236は無節である。235はLを横位に、236はLとRで羽状を作り出している。237は口縁部片でRLを横位施文する。238・239はLR、240はLR・RLを用いて羽状文を施している。241は部分的に縄文が見られるが原体ははっきりしない。

59号土壙 (第73図 242~246)

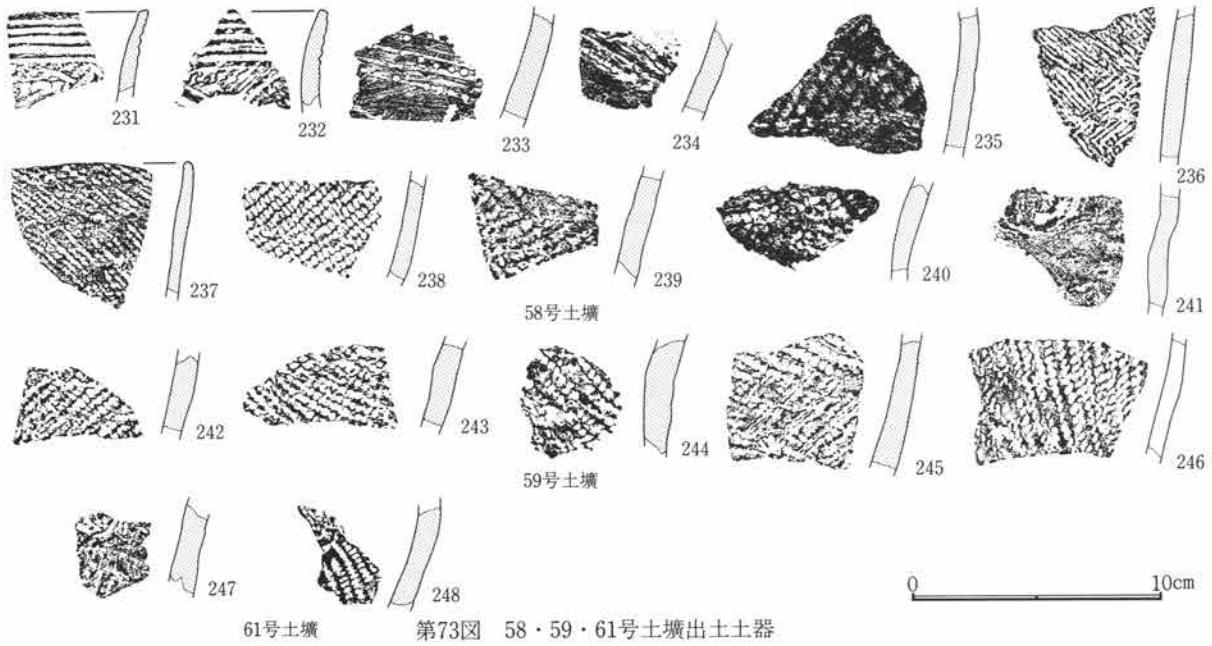
242はLR、243・244はRLが施文されている。245は脆弱な土器である。245は付加条RLと $LR + \frac{R}{R}$ で羽状を作り出している。247はRLを施文する。条がかなり立っている。

61号土壙 (第73図 247・248)

247は一部に無節のRが見られる。縄の端部かもしれない。248はRL0段多条が施文される。 (小野)



第72图 52·53·56·57号土壙出土土器



3 遺構外出土土器 (第74図～第80図)

遺構外より出土した土器は総点数300点である。その分布状況は余り濃密ではなかったが、遺構分布と同様に中央より南部分にかけて多く検出した。時期は早期後半から中期初頭までにわたっており、前期黒浜式～諸磯b式期のものが主体であった。以下大きくI～VII群に分類し、さらに文様により細分を行ない説明を加えることとする。

第I群土器 早期後半

第II群土器 前期前半 花積下層式土器

第III群土器 前期前半 関山式土器

第IV群土器 前期中葉 黒浜式土器

1類 縄文以外の文様を持つもの

a 隆帯、爪形文を持つもの

b 櫛歯状工具による刺突文を持つもの

c 篋状工具による短沈線を持つもの

2類 縄文を施文するもの a 無節 b 単節 c 正反の合

d 付加条 e その他

第V群土器 前期後半 諸磯式土器

1類 地文に縄文、爪形文、円形竹管文を持つもの

2類 浮線文 a 地文を持つもの b 地文を持たないもの

3類 平行沈線文 a 地文を持つもの b 地文を持たないもの

4類 無文土器

5類 全面に縄文を持つもの a 無節 b 単節

6類 集合沈線、貼付文を持つもの

第VI群土器 中期初頭 五領ヶ台式土器

1類 半截竹管等による平行沈線で格子、斜格子目文を描く

2類 沈線文に沿って三角様の刺突、陰刻文を付す

3類 縄節を持つもの

4類 厚手で縦位の撚糸を施文する

5類 無文土器

第VII群土器 上記分類に属さないもの 1類 沈線、棒状工具に刺突を持つもの

2類 無文土器

遺構外出土の土器について

第I群 早期後半の土器である（第74図 1） 30-B20グリッドより破片がまとまって出土している。1は口縁部、底部を欠き¼程の残存であるがほぼ器形は復元できる。胴部は、ほぼ垂直に立ち上がり口縁部は外反する。底は丸底状を呈すと思われる。幅8mm半截竹管状の工具により、よく撫でられた器面上に斜格子目、波状の文様を描いてあるが、規格性はない。

第II群 前期前半（花積下層式土器）に比定される。（第74図 2・3）

2・3は同一個体、やや厚手の土器である。撚糸Lを渦巻状にして押圧施文している。

第III群 前期前半（関山式土器）に比定される。（第74図 4～15）

4～15はループ文を持つものを一括した。5・6・7は口縁部である。7は波状口縁でやや内傾している。0段多条のループ文で多段縄文しており、2種類の原体を使い羽状を表出しているものもある。内面は平滑研磨されている。

第IV群 前期中期（黒浜式土器）に比定される。（第74・75・76図 16～93）

1類 縄文以外の文様を持つものを一括した。

a 隆帯、爪形文を持つもの（16～19）

16は口縁に沿って、細い隆帯を横に廻らし、その下に沿って半截竹管による爪形文を付し、さらに縦位、斜位に隆帯を付する。17はやや大きな爪形文を持ち、円錐状の突起が付く。18・19は口縁に沿って横に爪形文が走る。

b 櫛歯状工具による刺突文を持つものを一括した（20～27）

20・21・22は同一個体である。口縁に沿って3本の平行線を廻らし、それらの沈線に沿って8本単位の櫛歯を横に刺突している。さらに縦の刺突を加えそこから菱形状に文様を描く。23は口縁に沿って横位に2本、刺突文を廻らして下位に縦の刺突を施している。24は縦の刺突をほぼ等間隔で廻らし、下位はLRの縄文を施文している。25は波状口縁の波頭部である。口縁に沿って竹管による平行沈線を廻らし、それに沿って櫛歯による刺突列を付し、波頂部より垂下された刺突文下には、平行沈線、刺突文が山形に付される。口縁端部は外反する。26は平行沈線とやや間隔のある刺突文を持つ。27は平行沈線と刺突が横位、斜位に付されている。

c 篋状工具による短沈線を持つもの（28）

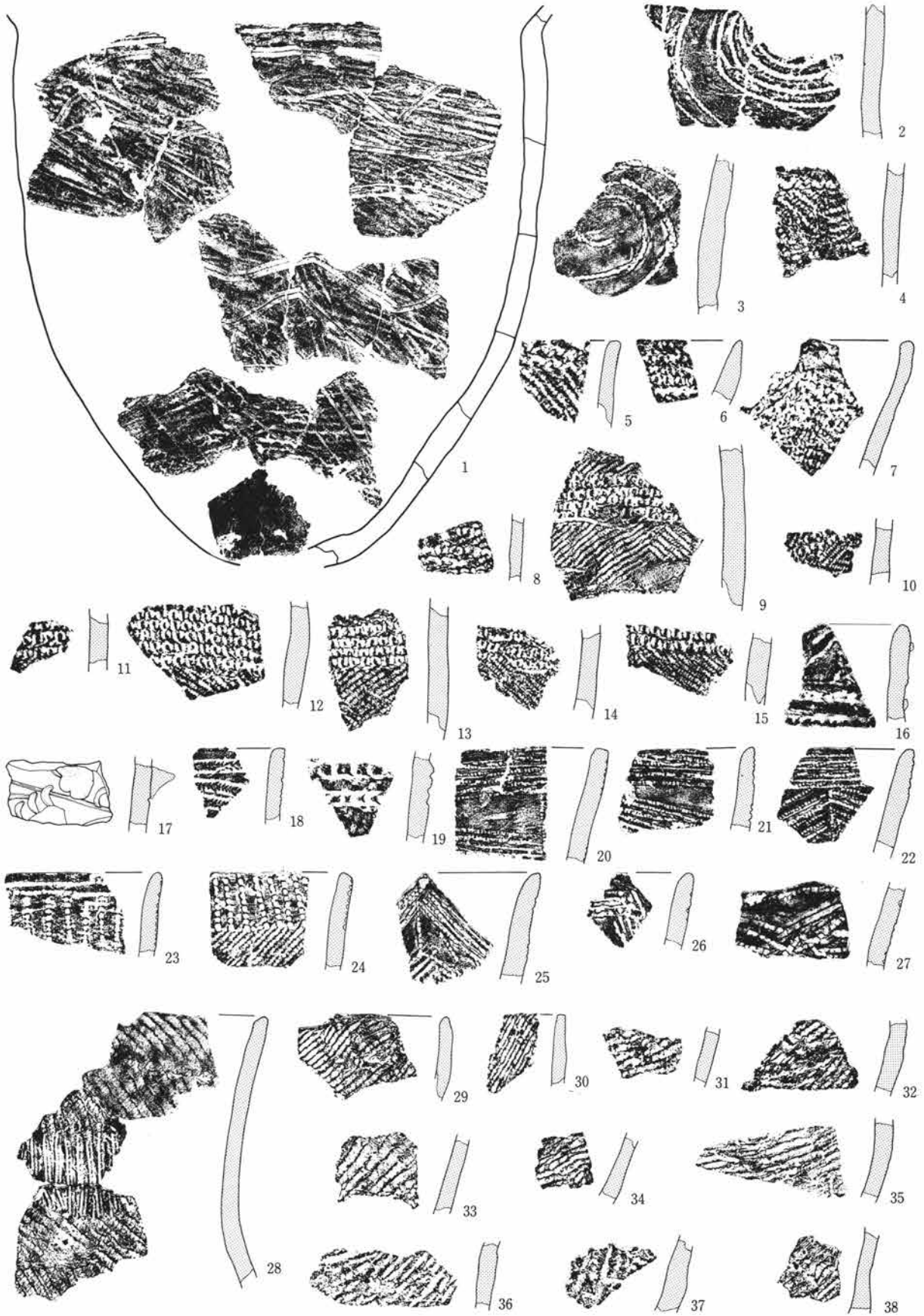
28は深鉢口縁部片、地文にRLを横位施文し、頸部に短い平行短沈線を廻らす。

2類 縄文を施文するものを一括した。

a 無節の縄文が施文されるもの（29～46・70）

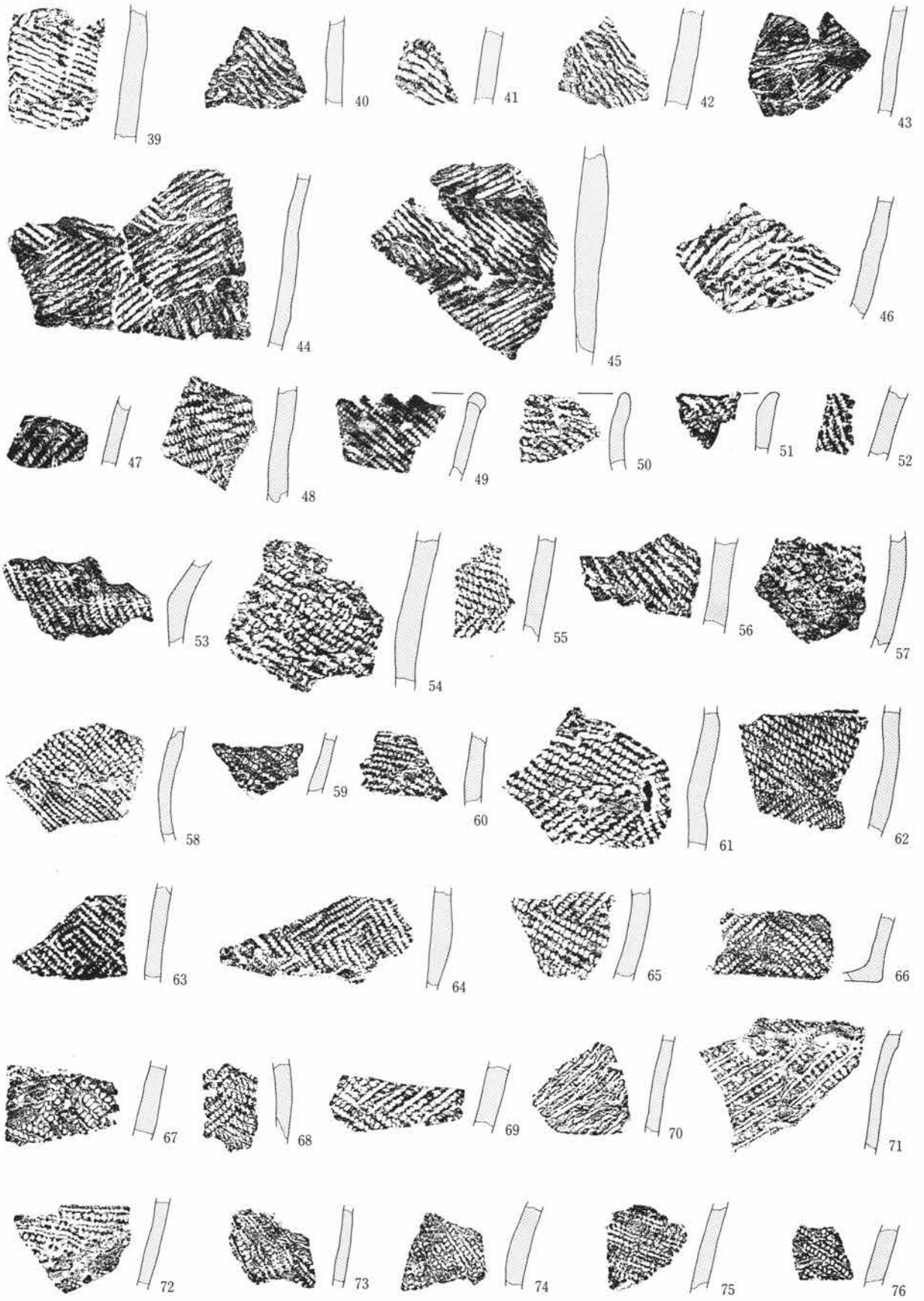
29～38は無節Lが横位に施文される。39・40・41・42は無節Rが横位に施文される。43・44・45・46はLとRを使って羽状を作る。43は方向が一定しない。44・45は同一個体である。70は反の撚L<Lである。

b 単節の縄文が施文されるもの（47～69）



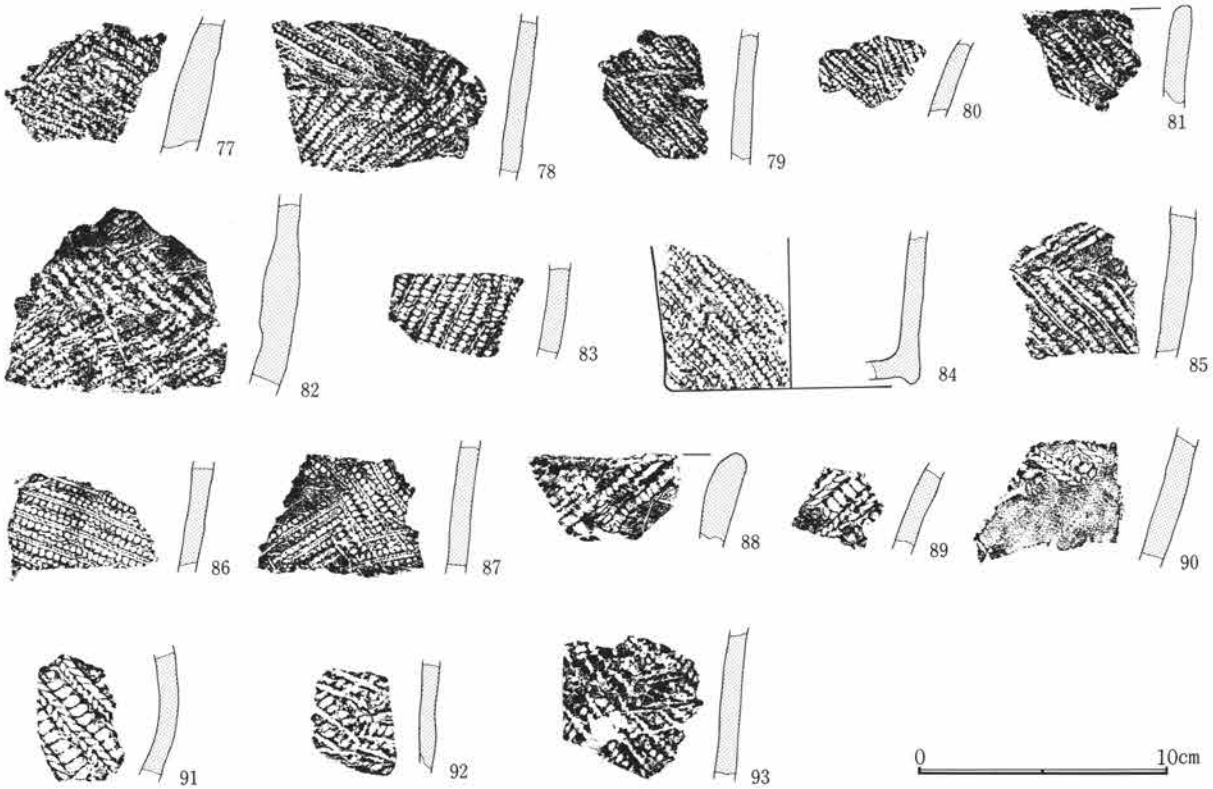
第74図 遺構外出土土器(1)

0 10cm



第75圖 遺構外出土土器(2)

0 10cm



第76図 遺構外出土器(3)

47・48はLRを施文する。47は節が不明瞭で無節のような感じを受ける。48は多条である。49・50・51は口縁部片である。49は三角形の小波状を持つ。50は口縁端部が内傾、51は外傾する。53は条の太さの違うものを撚り合わせている。54は厚く節がやや不揃いである。61・63・64・65・66・67・68は羽状または菱形を作る。

c 正反の合である (71・72・77)

71・72は $L < \begin{matrix} R \\ \bar{L} \end{matrix} R$ 、77は $L < \begin{matrix} R \\ \bar{L} \end{matrix} R$ と $R < \begin{matrix} L \\ \bar{R} \end{matrix} R$ の2種類の原体で菱形を作る。

d 付加条を一括した (73~76・78~93)

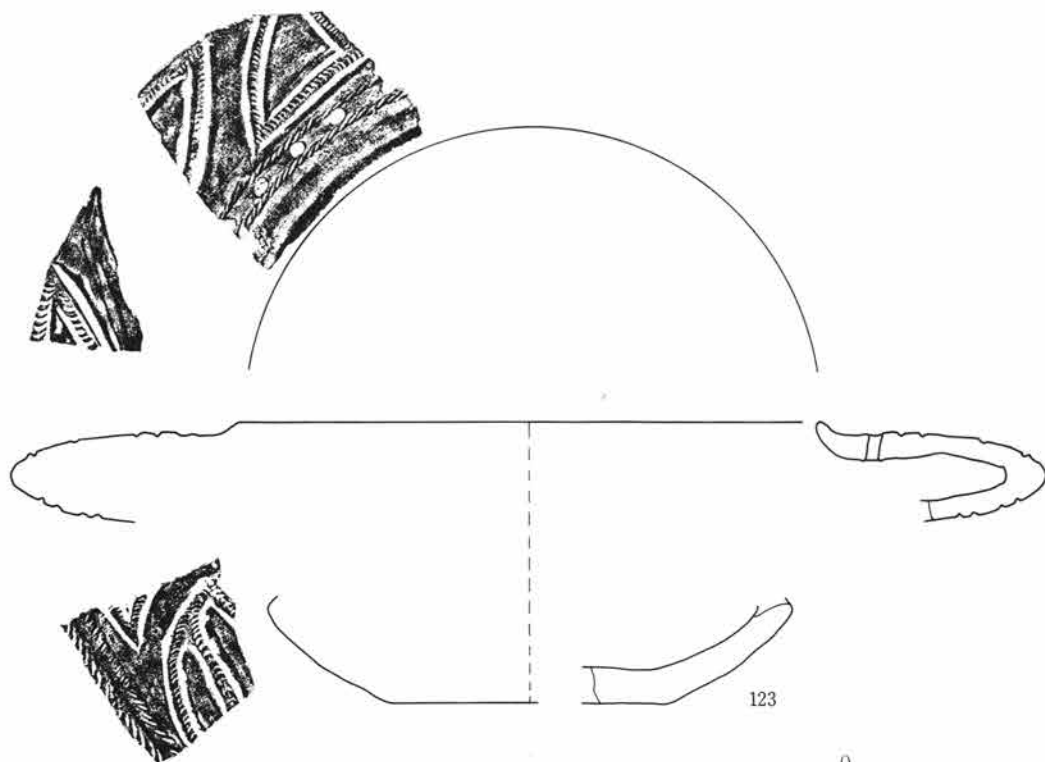
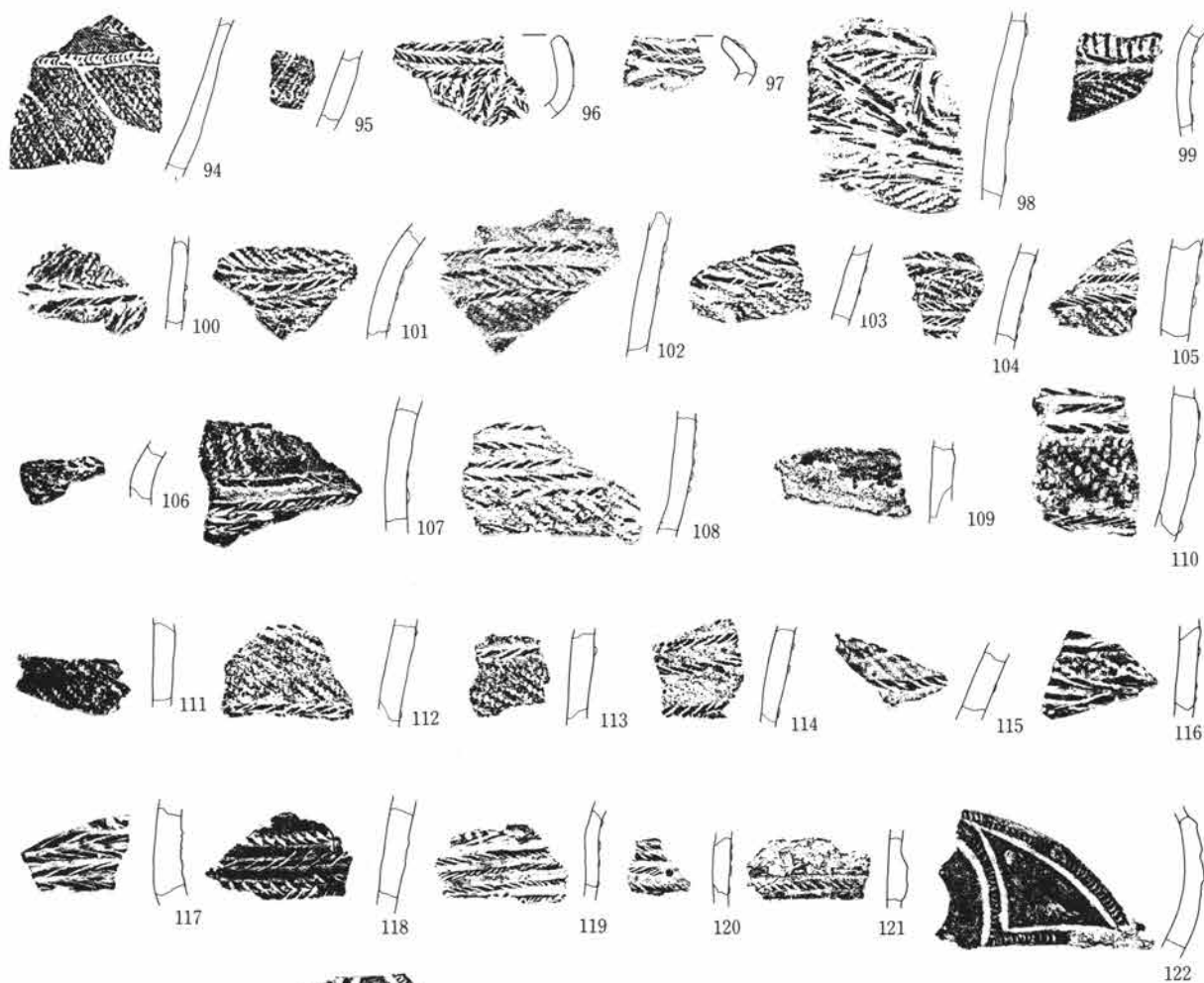
73は $RL + \begin{matrix} R \\ \bar{L} \end{matrix}$ である。74・75はRLにR2本を条に巻きつけている。76は $R + \begin{matrix} L \\ \bar{L} \end{matrix}$ か、 $R < \begin{matrix} L \\ \bar{L} \end{matrix}$ である。78は、 $LR + \begin{matrix} R \\ \bar{L} \end{matrix}$ と $RL + \begin{matrix} R \\ \bar{L} \end{matrix}$ で羽状を作る。79は $RL + R$ であるが付加された条がかなり戻っている。80・81は $RL + \begin{matrix} R \\ \bar{L} \end{matrix}$ 、81は口縁部である。82は厚みのある土器で $RL + \begin{matrix} R \\ \bar{L} \end{matrix}$ 、83は $LR + \begin{matrix} R \\ \bar{L} \end{matrix}$ で、焼成の良い土器である。84は付加条 $RL + l$ に l を付加させている。85は $RL + \begin{matrix} R \\ \bar{L} \end{matrix}$ と $LR + \begin{matrix} R \\ \bar{L} \end{matrix}$ で羽状を作る。86は $RL + \begin{matrix} R \\ \bar{L} \end{matrix}$ で、87は $RL + \begin{matrix} R \\ \bar{L} \end{matrix}$ と $LR + \begin{matrix} L \\ \bar{L} \end{matrix}$ で菱形のモチーフを作ると思われる。88は口縁部片である $LR + R$ と思われる。89はRにRとLを巻く。90・91はLにRとLを巻く。92はLにRを巻いている。93は $RL + L$ である。

第V群土器 前期後半 1類は諸磯a式土器、2~5類は諸磯b式土器、6類は諸磯c式土器に比定される。(第77・78・79図 94~202)

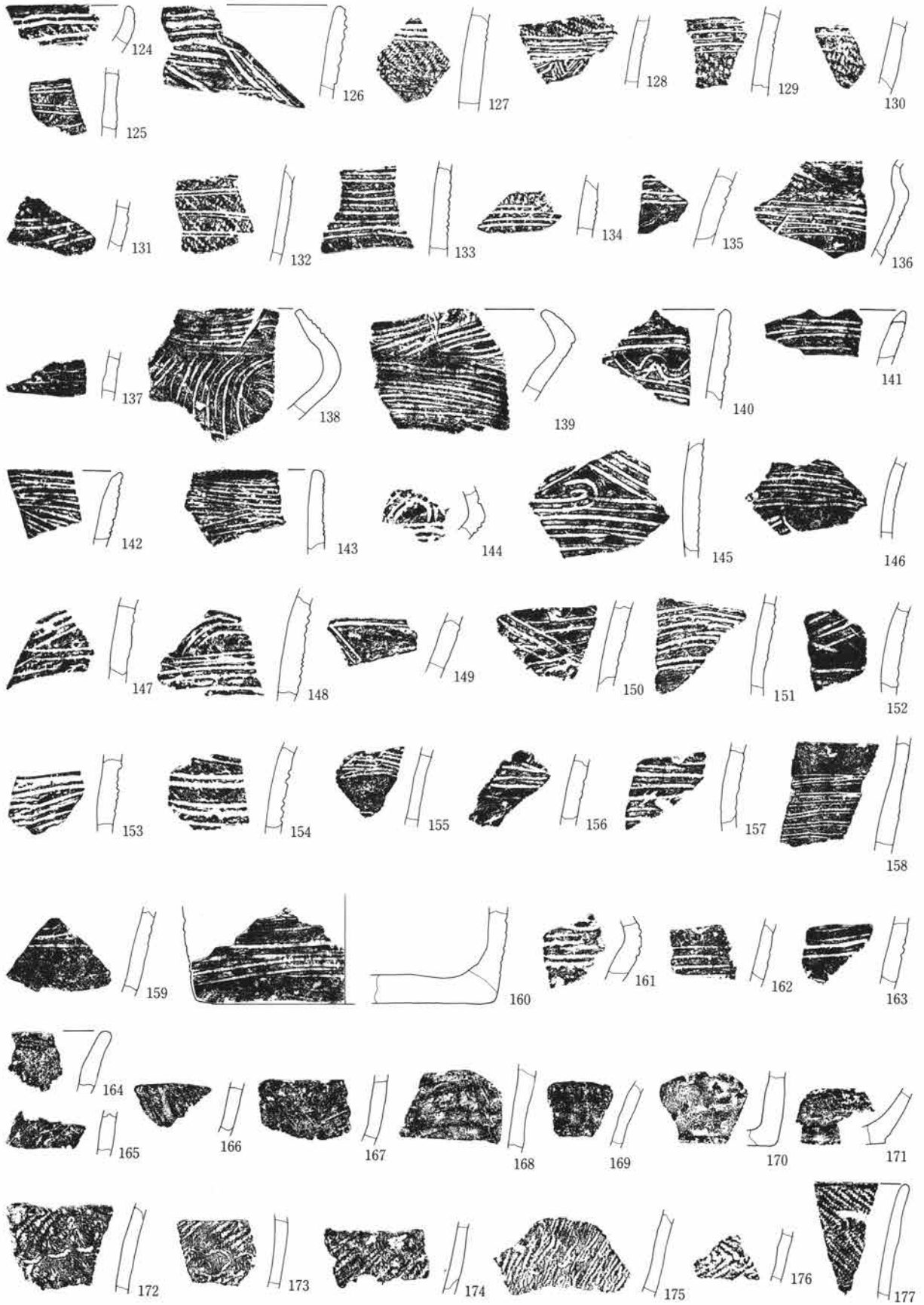
1類 地文に縄文、爪形文、円形刺突文を持つもの (94・95)

94はRLの縄文とL字の連続爪形文を横位施文し、その上に円形竹管文を持つ。95はLR地文に2個の円形竹管文を持つ。

2類 浮線文を持つ土器を一括した (96~123)



第77図 遺構外出土土器(4)



第78図 遺構外出土土器(5)

0 10cm

96~115は地文に縄文を持つ。96・97は口縁部片、口縁部は内湾する。口唇部に沿って2~3条の浮線を貼り付けそこから下へ浮線による文様を描く。浮線上には逆向する矢羽根状の刻みを持つ。98は雑な刻みを持つ。99は梯子状の浮線文を持つ。100~121は横に間隔を持った浮線を廻らしている。122は特殊浅鉢型土器の破片と思われる。三角形を平行沈線で画く、平行沈線間を連続爪形文で充填する。焼成は良い。123は有孔の特殊浅鉢型土器である。口唇部はやや直立気味に終わり、2本の刻みを持った浮線文が平行して廻りその間に円形の穴が穿たれている。肩部には入箱木ノ葉文が付される。焼成は良い。推定最大径は41.2cmである。

3類 竹管による平行沈線を持つものを一括した (124~163)

a 地文に縄文を持つもの (124~138・143・147・151)

125はLR、他はRLであろう。平行に間隔を置いて横位に施文されるもの125・127~130・132~137・151・153~163と、口縁部文様帯部分の三角モチーフや渦巻文を意識する。124・126・138・145・147~150破片に分けられる。口縁部片は124・126・142・143の平縁と140・141の小さな波状になるものに分けられる。138・139は強くくの字に内屈するキャリパー形土器の口縁である。土器は何れも焼成は良く堅緻である。160は厚手の底部片である。

4類 無文土器である (164~171)

164は口縁部片、166は浅く条痕様の擦痕が走る。他は丁寧な指撫でにより整形される。170・171は底部片。

5類 全面に縄文を横位施文するものを分類した

a 無節縄文を持つもの (172~175)

172・173・174は同一個体Lが横位施文される。172・173は原体末結束痕が~字状に見られ。175はL<┘と
思われる。

b 単節縄文を持つもの (176~201)

176はLとRで結束羽状を作る。177・179・183~201はRLを施文する。184は原体が細い。191は撚り合わせた内の一本が細かく付加条のように見える。195は軸にLを巻いたものを回転押捺している。196~201は底部片。196・197は条間が広い。200は僅かに施文が残る。201は底部端が外へ張り出しているやや径の大きな土器である。178・180・181・182はLRを施文している。178は口唇部が薄くなる。181は非常に細い原体が用いられている。

5類のものは何れも焼成良好で堅緻な土器である。押捺された縄文は深く、節はしっかりとしており、繊維の撚られた方向もはっきりとしている。胎土中には微石粒、とくに石英が目立つ。

6類 集合沈線、貼付文を持つもの (202)

202が1片のみの出土である。半截竹管による集合沈線を斜めに施文し、耳状、円形の貼付文を持つ。

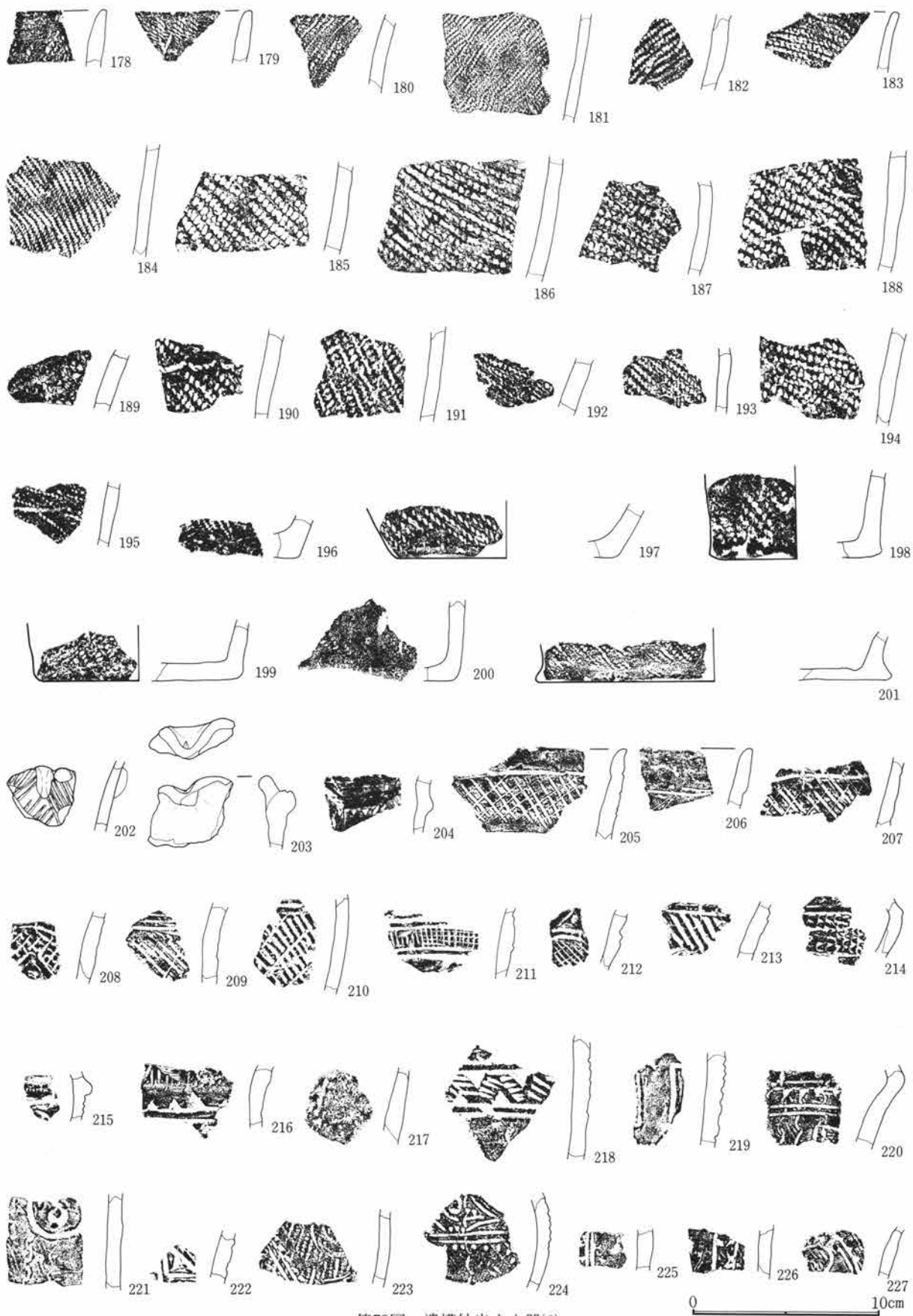
第VI群土器 後期初頭 五領ヶ台式土器に比定される一群である (第79・80図 203~252)

1類 半截竹管等による平行沈線で格子、斜格子を描く (205~213)

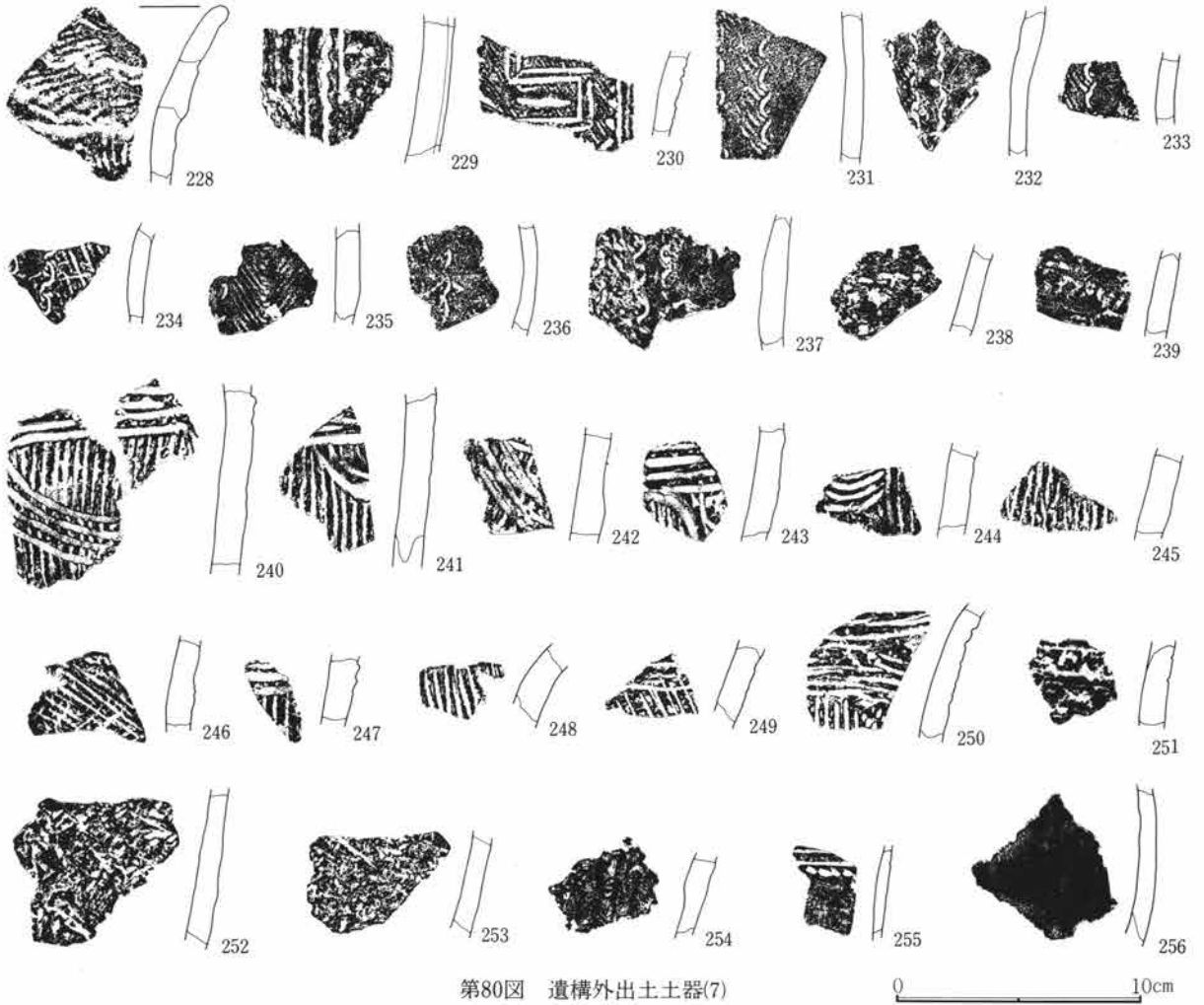
205・206は口縁部である。口縁部下に沈線を引きその下位に斜格子目文を持つ。206は口縁部がやや肥厚する。208~210は胴部片。211は平行沈線により隆起した平行線文間に細かい格子目文を付す。212も同様の文様構成をとる。213は深い斜めの平行沈線を持つ。214は半截竹管による爪形文で魚鱗状文様を付している。

2類 沈線文に沿って三角形の刺突、陰刻文を配す (204・215~229)

204は隆帯に沿って、三角状の刺突を付す。215は細い棒状の刺突を斜めに付している。216・218・219・220は太めの平行沈線に沿って内側、外側に三角陰刻文を付している。218は結縄文が見られる。222は三角形のモチーフの中に陰刻文を持つ。223・224・225・226・227は平行沈線で文様を描き、それに沿って刺突を配し



第79圖 遺構外出土器(6)



第80図 遺構外出土土器(7)

0 10cm

ている。230はコの字を基調とした文様の両側に刺突列が走る。

3類 結節縄文を施文する一群をまとめた (231~239)

231~237はLとRの結節を縦に転がしている。235は結節第1種。228・238・239は横位に施文する。2類の胴部片と考えられるものもある。

4類 やや厚手で地文に縦位の撚糸文を施文する一群をまとめた (240~250)

240~250は地文にLの撚糸を縦位に施文しさらに3~4条の平行沈線、楕円文を描く。

5類 無文土器をまとめた (252~254)

252は石粒が目立つ。

第VII群土器 上記の分類に属さないものである (第80図 255・256)

255は薄手の土器である。平行沈線の下位に棒状工具による横位刺突文を持つ。外面は平滑である。256は胎土が精製されており黒雲母目立つ。外面は平滑に磨かれている。時期的に下る可能性もある。(小野)

4 石器

中畦遺跡より出土した石器、石製品の総点数は123点で、器種別の点数は打製石斧33点、石鏃7点、石匙6点、石錐4点、スクレイパー31点、磨石12点、敲石8点、凹石3点、石皿4点、ピエスエスキュー3点、装身具1点、礫器2点、石槍1点、磨製石斧4点、丸石1点、砥石1点、台石2点であった。

遺構に伴うものは88点で、全体の約70%である。住居址別の器種を概観すると、石鏃が少なく、不定形な打製石斧、スクレイパー類が目立ち、磨石類が4号住居址を除いて（遺物の出土、接合状況等より3号住居址への住み換えが考えられる。3号住居址からは9点の磨石の出土を見た）2～9点出土しており、当時の食料生産活動の一端を示すものとして注目される。

3号住居址出土石器（第81・82図）

1～3・6・7は打製石斧である。1は基部および刃部がやや尖り気味となり、片面の一部に瘤状の高まりを持つ。2は基部、刃部を欠いている。3は両側縁で若干のくびれを持ち、刃部は厚く丸くなっている。6・7は不定形で器長が短い。6は片面に自然面を残しており、使用による為か歯崩れが見られる。7はほとんど調整痕が見られない。4は弧状の刃を持つ小型のスクレイパーである。5は木の葉状のふくらみを持ったつまみ部のある石錐であろう。8～13・15は磨石である。8・11・15はやや長円形の川原石を、他はほぼ円形の石を利用している。8・9・10は両面、側縁に使用痕が見られる。9は凹み石で両面中央に凹みが見られる。10は敲打による使用痕が顕著に見られる。15は使用によると思われる摩滅が進み、片面に陵を持つ。16は表面に凹みが数カ所見られるが、磨石としても利用されている。

4号住居址出土石器（第83図）

1は石鏃である。ほぼ三角形を呈すと思われるが、片方の脚部を欠いている。挟りはほとんど無く三角鏃に近い。2はやや小型の短冊型打製石斧である。刃部はやや凹み片面に自然面を残し刃部欠損している。3・4は、撥型の打製石斧である。刃部は直刃である。打ち取った剥片の側縁、刃部に調整を加えている。4は片面に自然面を残している。5・6は石匙である。5は、中央部に端部先ぼそりのつまみ部が付く。6は三角形の刃部につまみが付く。つまみ部の一部に自然面を持つ。7・8・9・10はスクレイパーである。7は縦長の剥離片を用いている。周囲に刃部を作り出している。8は横型の剥離片を用い、一側縁に細かな刃部を作り出す。9も7と同様の剥片を用いて、両側縁に刃部を作り出す。10はやや大型の一次剥離片を利用している。下縁に簡単な刃部を作り出している。11は小型の定角式磨製石斧である。基部を欠損している。刃部はかなり摩滅が見られる。蛇紋岩製である。12は小型の丸石である。13は変輝緑岩製の磨製石斧である。基部、刃部の一部を欠いている。刃部に使用痕が見られる。

5号住居址出土石器（第84図）

1は偏平な礫を用いた打製石斧である。片面には自然面を残し、周囲を粗く仕上げている。2は非常に薄い一次剥片を利用したスクレイパーである。一側縁に簡単な刃を作り出す。3はやや薄い刃部を持つ石錐である。つまみ部は平たく、側面に自然面を残す。刃部若干摩滅している。4・5は円く偏平な川原面を利用した磨石である。何れも周辺部、表面に摩滅痕、打痕が若干認められる。6は石皿で、やや偏平な石の一面を浅く平坦に摩り減らしている。

6号住居址出土石器 (第85図)

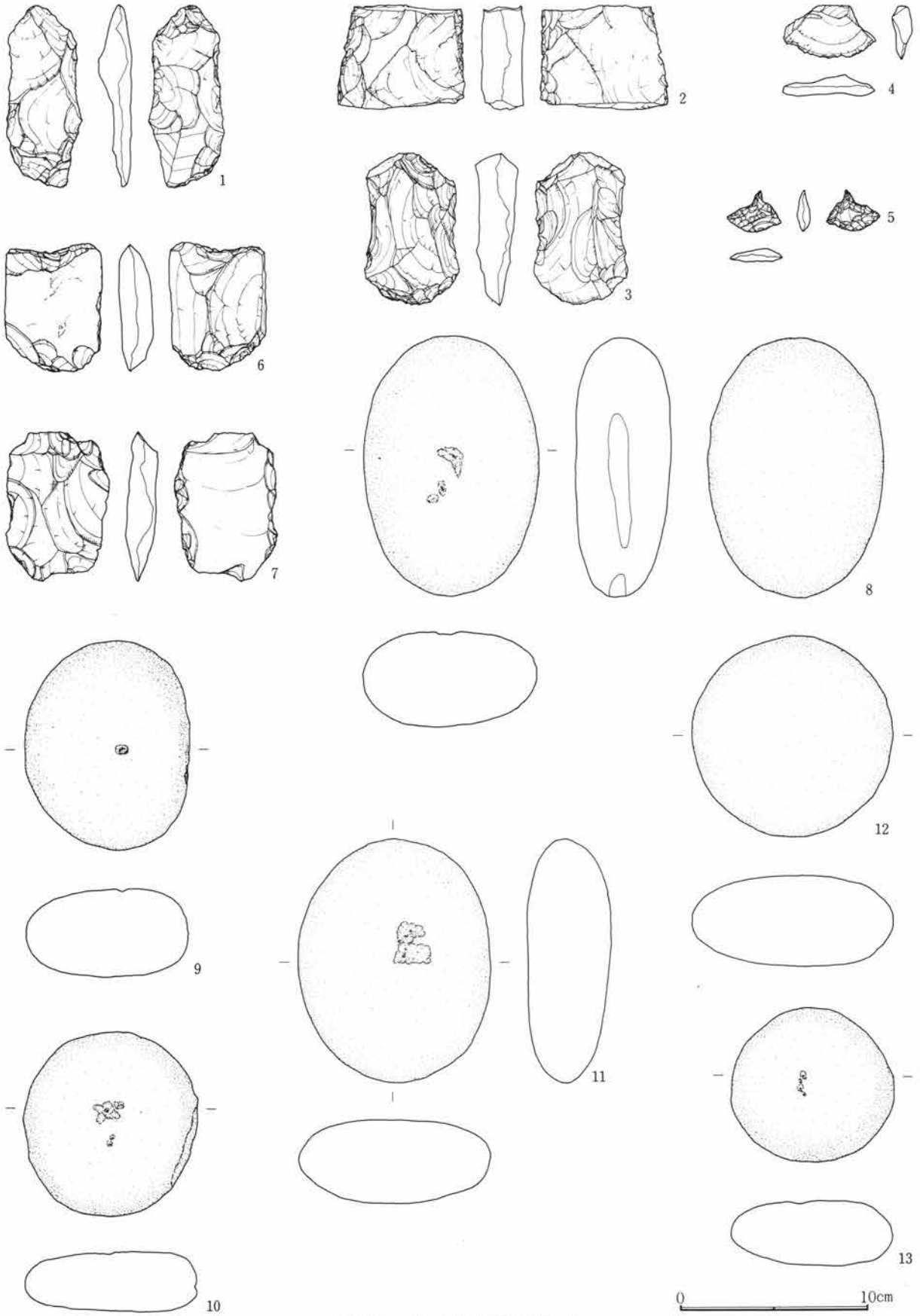
1・2は撥型打製石斧である。1は片面に自然面を残し、刃部には使用痕が見られる。両側縁に簡単な打撃による調整を加えている。2は周辺から調整を加え、側縁部は歯潰しを行なっている。3は縁辺を丸く仕上げた円形のスクレイパーである。片面はほぼ平らである。4は打製石斧であるが形はなすび状を呈す。5～8は剥片を利用したスクレイパーである。不定形な剥片の一辺に刃部を作り出す。7は凹刃である。9・10は敲石である。9は細長い礫の端部を利用している。10は一側縁を使用面として利用しており、かなり摩滅が見られる。11は砂岩である。用途は砥石であろうか。12は石皿の破片と思われる。13は装飾品である。両面より穿孔されている。滑石製である。

7号住居址出土石器 (第86・87図)

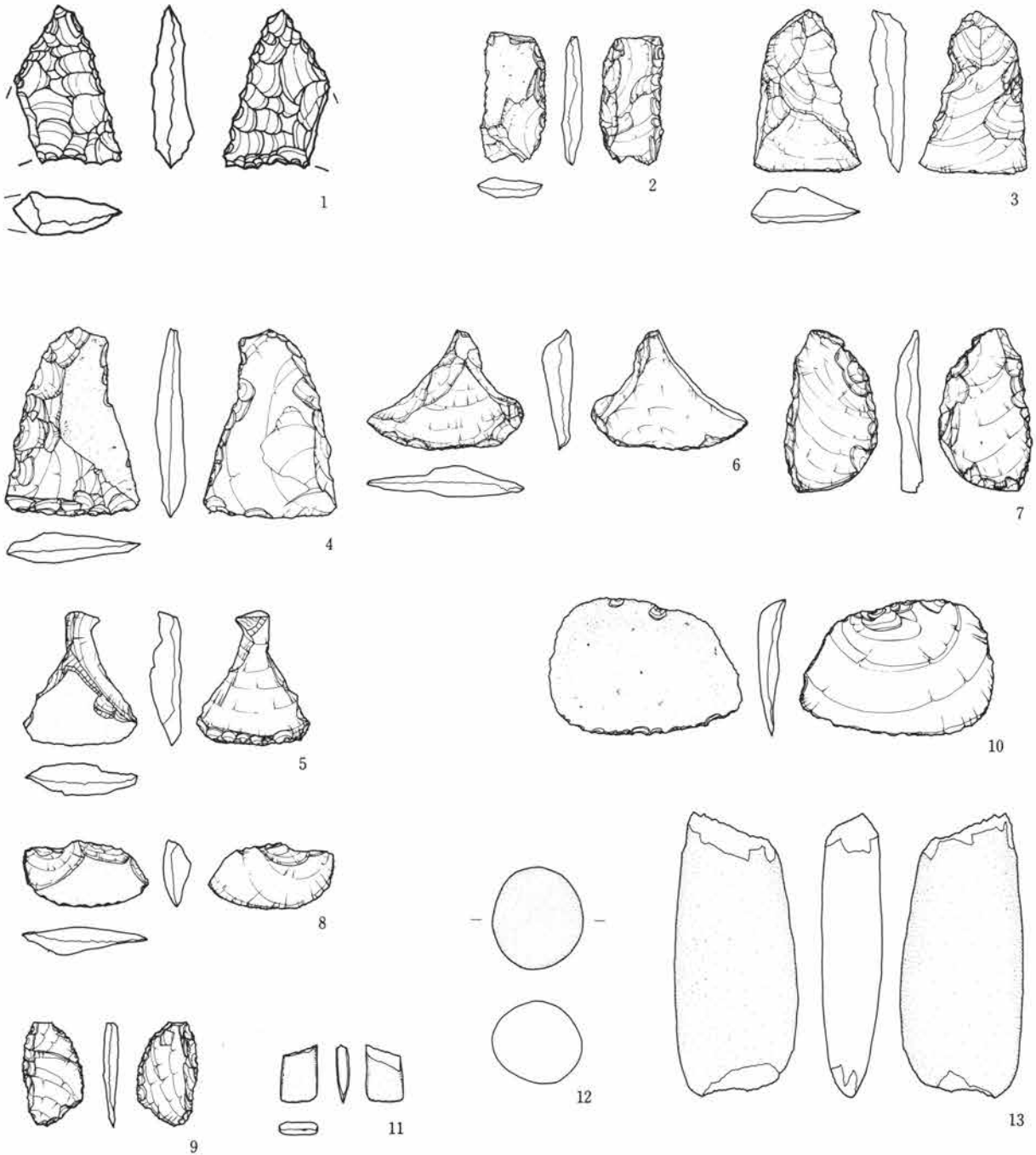
1・2は石鏃、チャート製で、1は二等辺三角形を呈し、抉りを持つ完形品である。2は抉りを持ち、両脚部を欠いている。3は頁岩製の石錐である。太めの茎を持つ。先端部は簡単な調整が施されている。やや身が反る。4・5・6は石匙である。4は縦型、6は横型であるが、やや不定形である。ともにつまみ部は雑に作られており、刃部も一側辺にのみ作られている。7は撥型の打製石斧である。ほぼ三角形を呈し、刃部は直刃となる。8・9は石錐、一端の尖った剥片を利用している。ともに錐部を欠いている。10は打製石斧であるが、一側縁に調整痕あるのみで、他は打ち割った状態のままである。11はスクレイパー、薄くなった部分を刃部として利用している。12は縦型の剥片を利用、13は横剥ぎの縁片に刃部を作る。14は横長剥片の一辺に両面からの押圧剥離による刃部を作り出す。15は薄い剥片を利用している。16は石槍かと思われる。17・18・19は剥片の一部に刃を持つ。20は磨石である。丸く偏平な石を利用している表面に若干の打痕、側面に使用痕が認められる。21は細長い礫を利用した敲石である。一部欠損している。22は敲石である。両端および表面に打撃による剥落が顕著に見られる。23は台石である。表面に使用痕が見られる。24は敲石である。中央部で半分に割れている。

土壙出土石器 (第88・89図)

1は4号土壙出土、打製石斧の基部又は刃部の欠損品であろう。2・3・4は14号土壙出土、薄く剥ぎ取った横型の剥片の縁辺に刃を作る。3はピエスエスキュー、楕円形を呈し、断面は台形である。周辺部に打撃による剥離を持つ。4は敲石、打撃によりかなり欠損している。両面に凹みが見られる。5は15号土壙出土、打製石斧の基部である、自然面を残す。かなり薄手である。6は17号土壙出土、板状の石片を利用したスクレイパーである。三角形の一辺に刃部を作る。7は27号土壙出土、撥形の打製石斧である。8・9は29号土壙出土。8はやや小型の打製石斧である。9は弧状の刃部を持つスクレイパーである。10は30号土壙より出土、やや厚手の菱形の剥片に粗い刃部を作り出している。11は打製石斧であるが、形状はくの字に屈曲した形となる。刃部はやや凸刃となる。12は34号土壙出土のスクレイパーである、縦型剥片の縁片に細かな刃部を作る。13・14は34号土壙出土。13は石皿である。偏平な石の中央を若干磨り減らし使用している。14は石皿の破片である。15は俵状の川原石を使用した敲石である。16は小型の剥片に刃部を付したナイフ様のスクレイパーである。



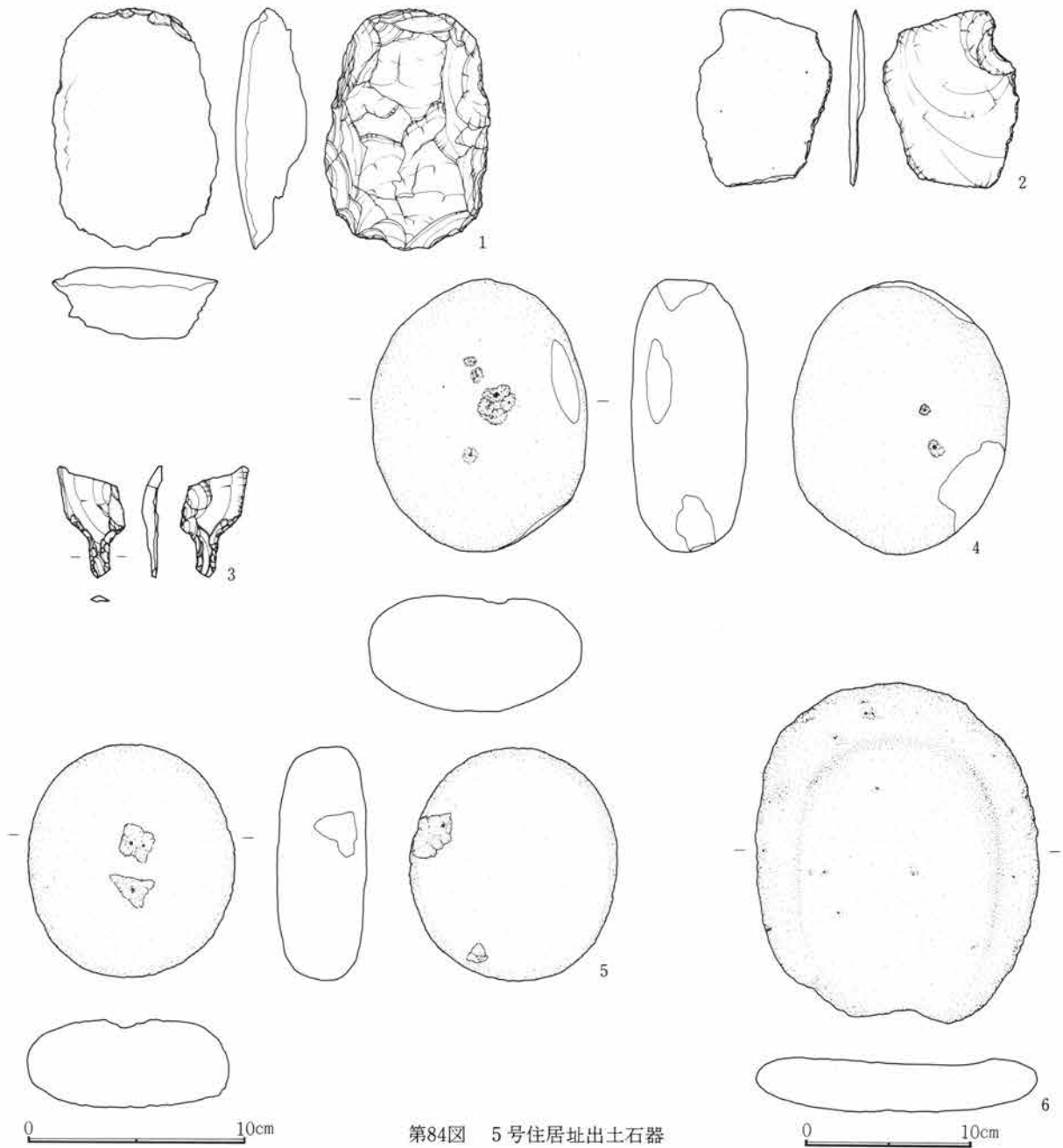
第81圖 3号住居址出土石器(1)



第83図 4号住居址出土石器

0 10cm

図番号	出土位置	種類	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
4	4 住	打製石斧	II-A	8.8	6.3	1.4	65.0	黒色頁岩	
5	4 住	石 匙	II-B	5.3	6.3	1.5	32.3	黒色頁岩	
6	4 住	石 匙	II-B	7.3	5.6	1.5	32.7	黒色頁岩	
7	4 住	スクレイパー	I	7.6	4.3	1.3	44.1	黒色頁岩	
8	4 住	スクレイパー	II-B	3.2	5.9	1.3	17.7	黒色頁岩	
9	4 住	スクレイパー	I	4.8	2.8	0.8	10.9	黒色頁岩	
10	4 住	スクレイパー	II-B	9.0	6.3	1.1	62.7	黒色頁岩	
11	4 住	小形磨製石斧	III	2.7	1.8	0.6	5.4	蛇紋岩	基部欠損
12	4 住	丸 石		4.8	4.3	3.9	114.7	輝石安山岩	
13	4 住	磨製石斧	II	13.2	5.8	2.8	350.0	変輝緑岩	基部・刃部欠損



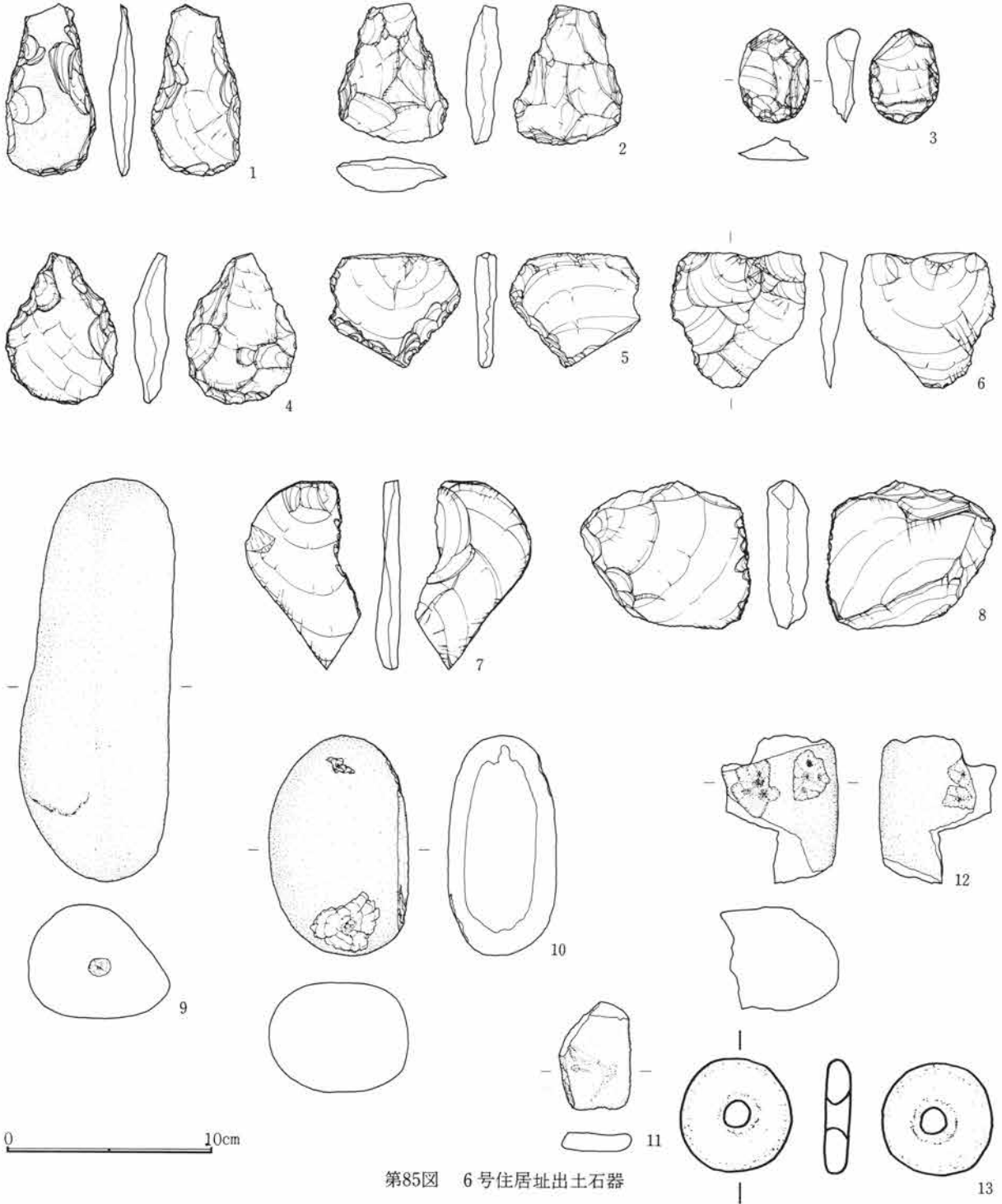
第84図 5号住居址出土石器

表7 5号住居址出土石器観察表

図番号	出土位置	種類	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	5 住	打製石斧	II-B	11.0	7.6	3.2	300.0	黒色頁岩	
2	5 住	スクレイパー	I	8.0	6.2	0.7	35.9	黒色頁岩	
3	5 住	石錐		5.1	3.1	0.7	9.0	黒色頁岩	
4	5 住	磨石	I-B	12.4	9.9	5.3	1006.0	輝石安山岩	側面に打痕あり
5	5 住	凹石	I-B	10.6	9.5	4.1	600.0	輝石安山岩	周縁部に使用痕あり
6	5 住	石皿	II	20.6	17.0	3.6	1500.0	輝石安山岩	

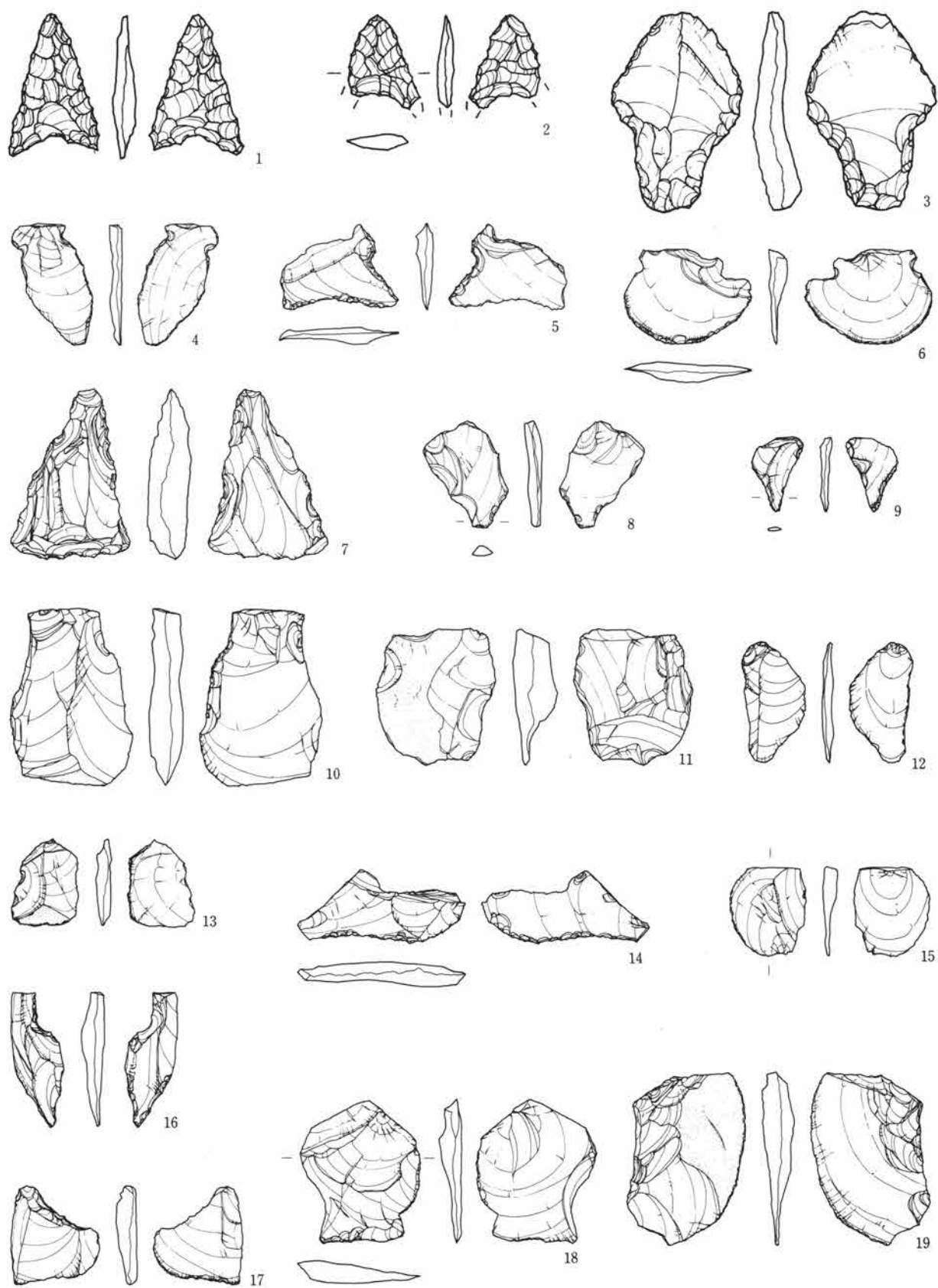
表8 6号住居址出土石器観察表

図番号	出土位置	種類	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	6 住	打製石斧	II-B	8.4	4.3	1.2	53.0	ホルンフェルス	
2	6 住	打製石斧	II-B	6.7	5.2	1.7	55.4	黒色頁岩	
3	6 住	スクレイパー		4.5	3.4	1.5	25.1	珪質頁岩	
4	6 住	打製石斧	II-B	7.2	5.3	1.6	66.6	黒色頁岩	刃部磨減

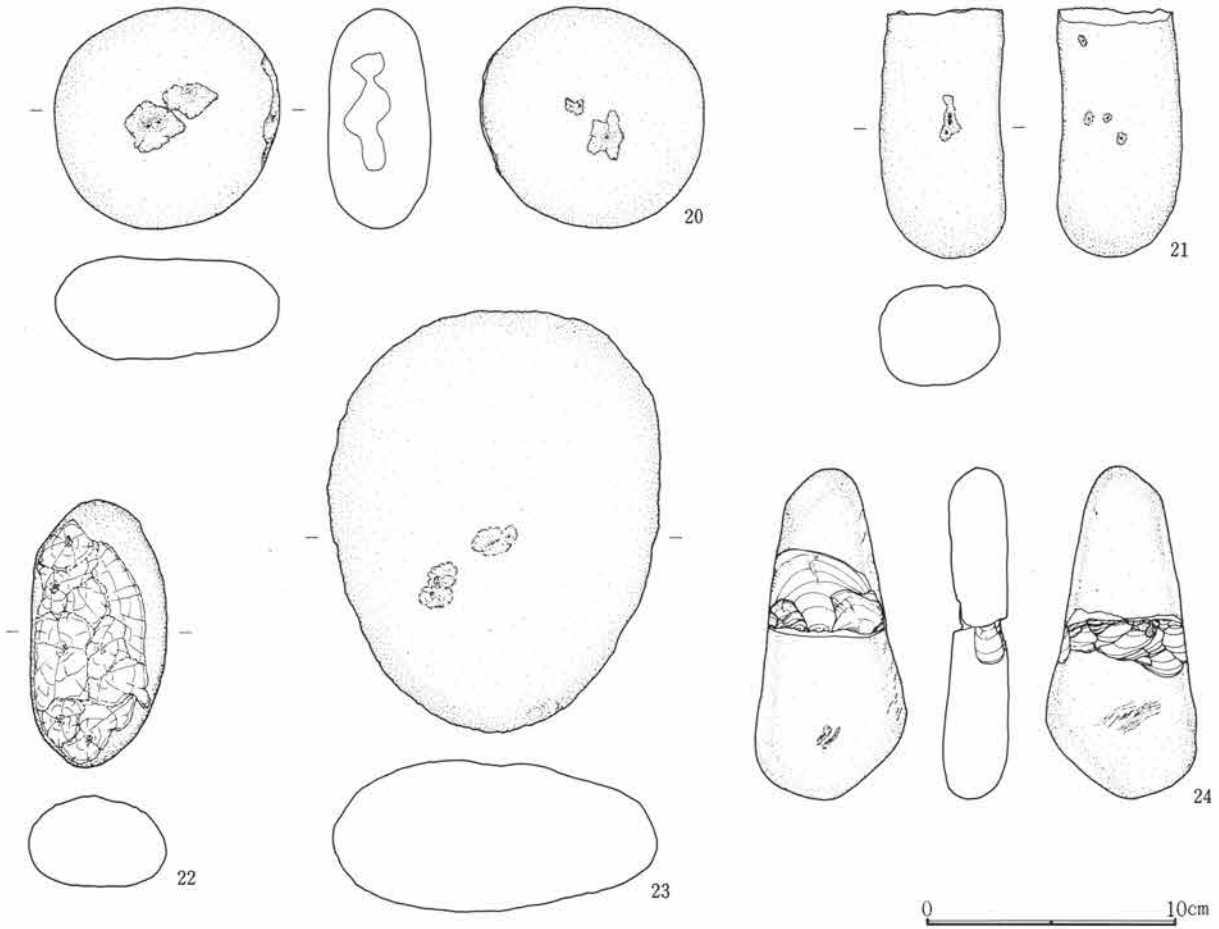


第85図 6号住居址出土石器

図番号	出土位置	種類	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
5	6 住	スクレイパー	III	5.6	6.4	1.1	37.4	黒色頁岩	
6	6 住	スクレイパー	III	7.2	8.1	1.8	126.2	黒色頁岩	
7	6 住	スクレイパー	III	9.1	5.6	1.1	41.5	黒色頁岩	
8	6 住	スクレイパー	III	6.6	6.5	1.3	46.5	黒色頁岩	
9	6 住	敲石	II-B	19.4	7.4	5.5	1150.0	輝石安山岩	端部に打痕あり
10	6 住	磨石	II-A	10.7	6.8	5.3	600.0	輝石安山岩	側面に使用痕あり
11	6 住	砥石		5.2	3.6	1.1	27.0	砂岩	砥石か
12	6 住	石皿		7.2	5.7	5.0	250.0	輝石安山岩	破損品
13	6 住	環玉		1.8	1.8	0.5	3.0	滑石	縁片に擦痕見られる



第86圖 7号住居址出土石器(1)

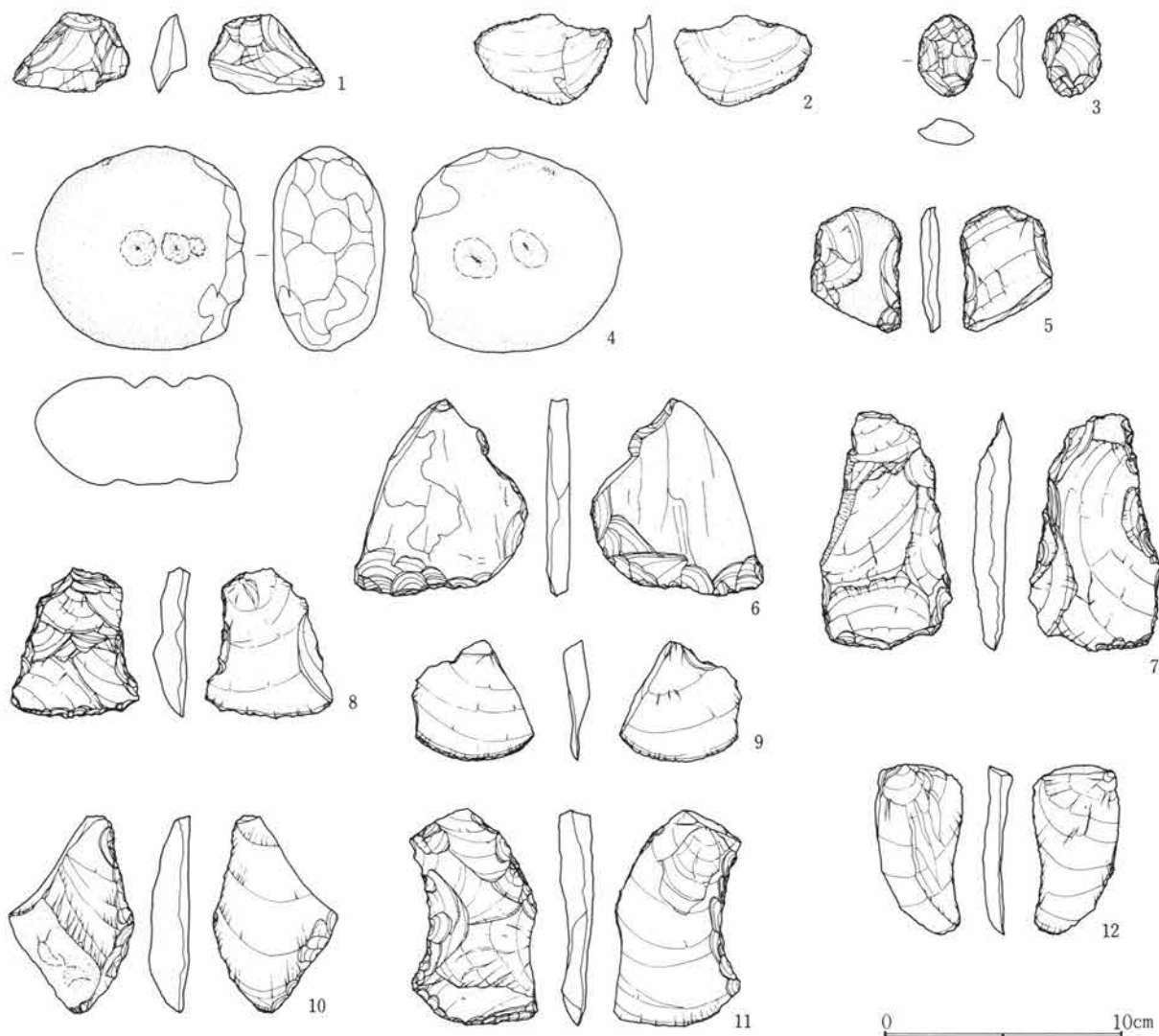


第87図 7号住居址出土石器(2)

表9 7号住居址出土石器観察表

図番号	出土位置	種類	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	7 住	石 鏃	I-A	2.4	1.5	0.4	1.0	チャート	
2	7 住	石 鏃	I-A	1.5	1.2	0.3	0.5	チャート	両脚部欠損
3	7 住	石 鏃	III	3.4	2.2	0.7	4.2	黒色頁岩	
4	7 住	石 匙	I-A	6.3	4.3	0.6	13.3	黒色頁岩	
5	7 住	石 匙	III	6.1	4.4	0.9	13.1	黒色頁岩	
6	7 住	石 匙	I-B	6.6	4.9	0.9	23.3	黒色頁岩	
7	7 住	打製石斧	II-A	8.9	6.3	2.3	100.0	黒色頁岩	錐部欠損
8	7 住	石 錐		5.6	4.4	0.8	17.2	黒色頁岩	
9	7 住	石 錐		3.9	2.7	0.6	4.0	黒色頁岩	
10	7 住	打製石斧	II-A	9.1	6.3	1.8	107.4	黒色頁岩	
11	7 住	スクレイパー	III	7.1	6.1	2.2	100.0	黒色頁岩	
12	7 住	スクレイパー	I	6.2	3.4	0.5	0.5	黒色頁岩	
13	7 住	スクレイパー	I	4.5	3.5	0.8	12.0	黒色頁岩	
14	7 住	スクレイパー	III	8.8	3.8	1.2	29.0	黒色頁岩	
15	7 住	スクレイパー	I-A	4.6	4.0	0.8	13.6	黒色頁岩	
16	7 住	石 槍	III	7.0	2.8	1.2	17.1	黒色頁岩	
17	7 住	スクレイパー	III	5.1	4.7	1.0	17.2	黒色頁岩	
18	7 住	スクレイパー	III	7.4	6.3	1.2	45.0	黒色頁岩	
19	7 住	スクレイパー	II-B	9.0	6.2	1.7	82.9	黒色頁岩	
20	7 住	磨石	I-B	8.7	9.0	4.1	500.0	石英閃緑岩	側縁部に打痕あり
21	7 住	敲石	II-B	9.9	5.0	4.2	400.0	輝石安山岩	破損品
22	7 住	敲石	II-B	10.6	5.4	3.6	300.0	輝石安山岩	焼けている
23	7 住	台石	I-A	16.7	13.3	6.0	1600.0	輝石安山岩	
24	7 住	敲石		13.2	6.0	2.0	300.0	黒色頁岩	

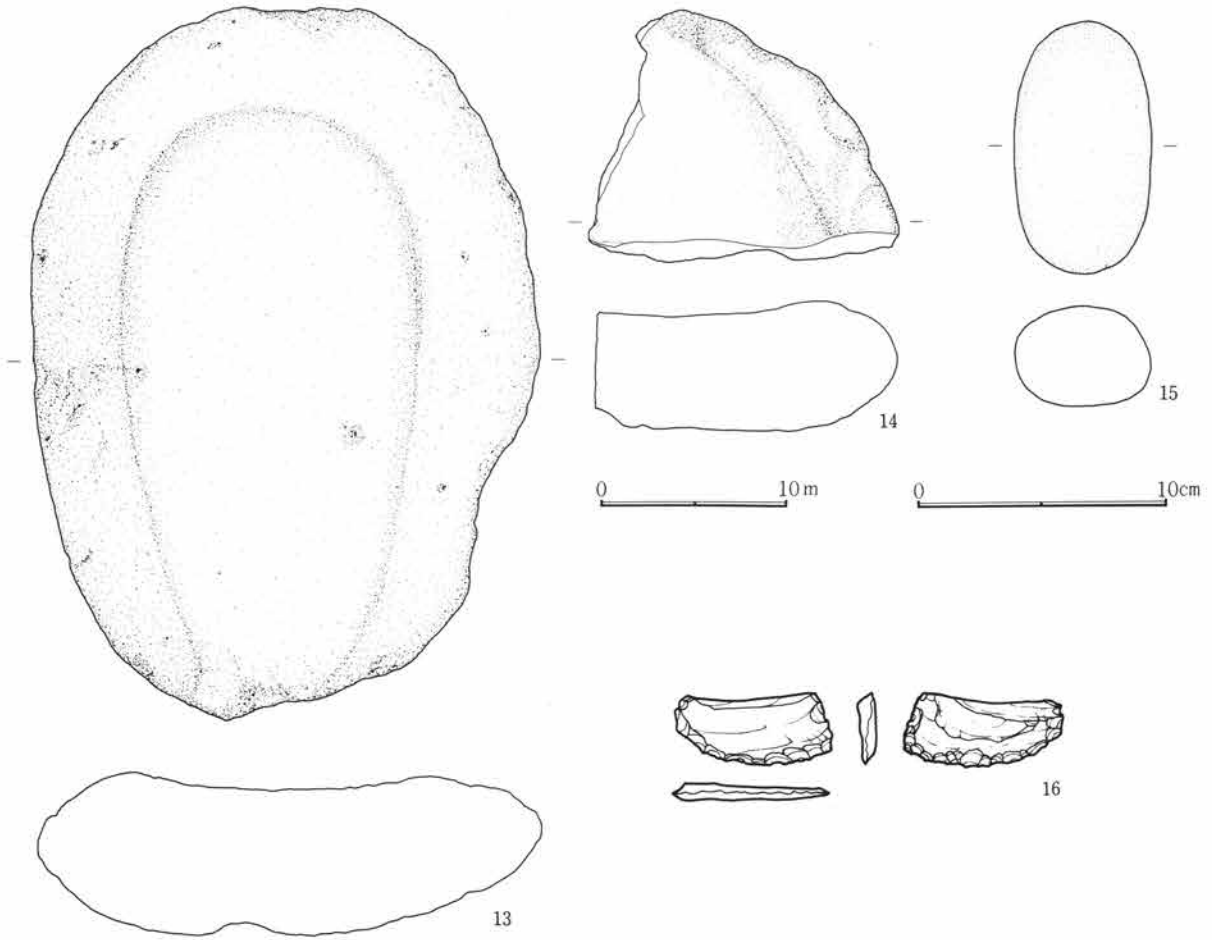
第V章 中畦遺跡



第88図 4・14・15・17・27・29・30・32・34号土壌出土石器

表10 土壌出土石器観察表

図番号	出土位置	種類	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	4号土壌	打製石斧	II-A	3.3	4.7	1.5	19.8	黒色頁岩	欠損品
2	14号土壌	スクレイパー	II-B	3.7	5.7	0.8	14.7	黒色頁岩	
3	14号土壌	ピエスエスキュー		3.4	2.4	1.1	8.1	チャート	
4	14号土壌	敲石	II-B	8.5	8.8	4.6	500.0	輝石安山岩	凹石としても利用
5	15号土壌	打製石斧	I-A	5.2	3.7	0.8	17.9	黒色頁岩	刃部欠損
6	17号土壌	スクレイパー	III	8.1	7.3	0.9	68.6	チャート	
7	27号土壌	打製石斧	II-A	9.9	5.6	1.3	74.9	黒色頁岩	
8	29号土壌	打製石斧	II-A	6.2	5.3	1.4	37.5	黒色安山岩	
9	29号土壌	スクレイパー	II-B	5.0	5.0	0.9	15.8	黒色頁岩	
10	30号土壌	スクレイパー	I	8.1	5.2	1.7	59.2	黒色頁岩	
11	32号土壌	打製石斧	III-A	9.0	5.3	1.4	74.6	黒色頁岩	
12	34号土壌	スクレイパー	I	7.0	3.6	1.0	22.1	黒色頁岩	
13	34号土壌	石皿	II	37.8	26.9	8.0	10920.0	輝石安山岩	
14	34号土壌	石皿		16.5	13.3	6.9	1750.0	輝石安山岩	破片
15	51号土壌	敲石		10.1	5.5	4.2	400.0	輝緑岩	
16	53号土壌	スクレイパー	II-B	2.1	1.0	0.25	0.5	黒色頁岩	

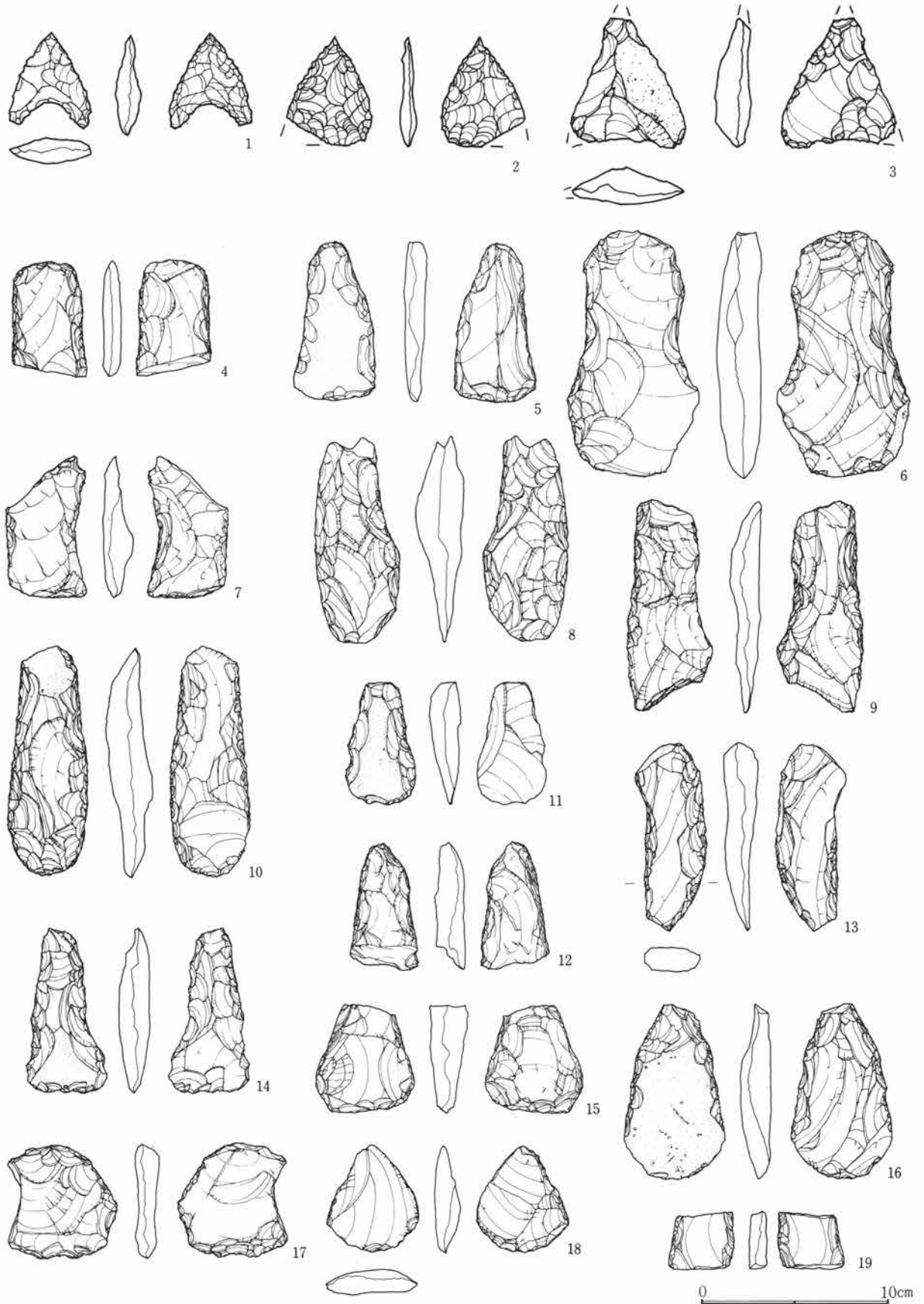


第89図 34・51・53号土壌出土石器

遺構外出土石器（第90・91図）

中畦遺跡において遺構外より出土した石器は総数35点で、その内訳は石鏃3点、打製石斧15点、スクレイパーおよび剥片利用の石器5点、ピエスエスキーユ2点、石匙1点、磨製石斧2点、敲石4点、磨石2点、台石1点であった。その分布状況は、土器と同様調査区中央より多く出土する傾向が見られた。

1・2・3は石鏃、1は正三角形で抉りを持つ、2は抉りは見られない。3は片面に自然面を残した剥片を利用している。先端部を欠いている。4～18は打製石斧である。4は短円形の打製石斧である。両側縁をていねいに歯潰しを行なっている。刃部欠損品。5は撥型打製石斧一面に自然を残す。6は両側縁に浅く抉りを持つ7・8・9は片面にややふくらみを持つ。形はやや不正形で刃部の形も一定でない。10は撥形打製石斧である。刃部先端は丸くなり、基部に自然面を残す。11はやや小型の打製石斧である。なすび状に刃部で膨らみ、片面に自然面を残す。12は撥形で刃部を欠いている。13は刃部が細くなる打面に自然面を残す。14は撥型である、やや広がる刃部の一面に自然面を残す。15・16も撥形を呈す。15は基部を欠いている。16はなすび状に刃部は先が丸くなる。自然面を大きく残す。17は基部を欠いていると思われる。刃部は粗い作りである。18は貝の形をした破片に刃部を作り出している。19はピエスエスキーユ両面は平らで側縁に打痕が見られる。20も同様で周辺から打撃による剥離を持つ。21は縦形の石匙である。つまみ部はやや傾むいて付く。チャート製。22・23・24・25・26はスクレイパーである。22は、ピエスエスキーユの可能性もある。



第90図 遺構外出土石器(1)



第91圖 遺構外出土石器(2)

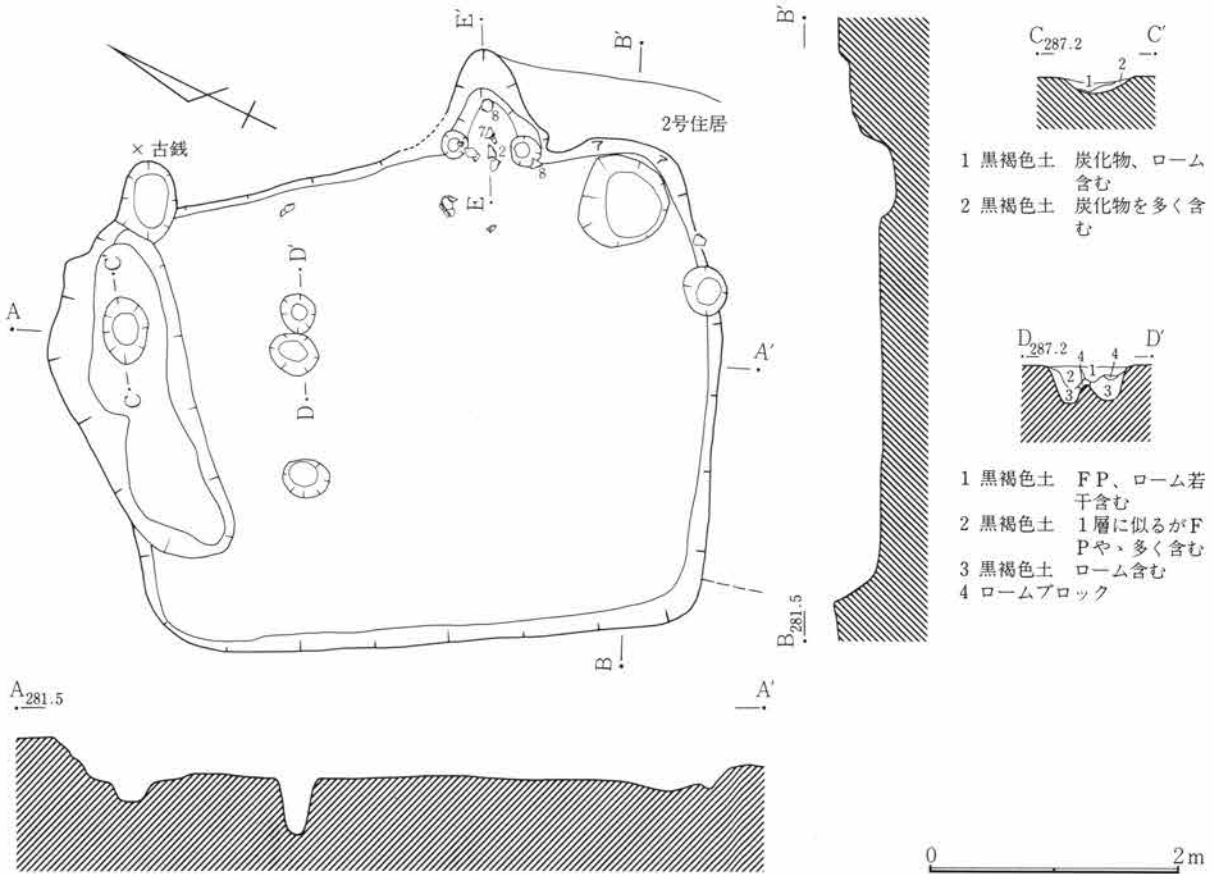
23は縦剥片の下辺に直刃を持つ。24は長方形の長辺に刃部を持つ。調製はていねい。25・26は下部にやや丸みを持った刃部を作り出している。27・28は磨製石斧、27は側縁頭部も磨って四角に仕上げている、刃部を欠損する。28は乳棒状磨製石斧である。基部、刃部を欠損している。29・30は礫器である。川原石の両端が打撃により破碎している。楔として使用したと考えられる。31は両端の頂部よりややずれて打痕が見られる。敲石と思われる。32も同様である。33・35は磨石、35は両面に打痕が観察される。34は断面四角形を呈す。台石として使用されたものであろう。(小野)

表11 遺構外出土石器観察表

図番号	出土位置	種類	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	表採	石 鎌	I-A	1.6	1.4	0.4	0.6	チャート	
2	表採	石 鎌	II-A	1.9	1.5	0.3	0.6	黒曜石	
3	表採	石 鎌	II-B	2.2	2.0	0.6	2.3	チャート	先端部欠損
4	表採	打製石斧	I-A	6.0	3.9	1.0	3.5	黒色頁岩	刃部欠損
5	表採	打製石斧	I-B	8.4	4.3	1.2	55.2	黒色頁岩	
6	表採	打製石斧	III	13.0	7.0	2.5	250.0	黒色頁岩	
7	16B16	打製石斧	I-A	7.5	4.3	1.6	44.8	黒色頁岩	
8	30A36	打製石斧	I-A	10.9	4.6	2.6	120.4	灰色安山岩	
9	表採	打製石斧	I-A	11.2	4.5	1.6	71.1	黒色頁岩	
10	12B12	打製石斧	I-A	12.1	4.2	2.1	119.5	黒色頁岩	
11	表採	打製石斧	II-B	6.4	3.7	1.7	41.0	砂 岩	
12	表採	打製石斧	II-A	6.7	3.7	1.6	42.0	黒色頁岩	刃部欠損
13	23A49	打製石斧		9.9	3.8	1.8	72.8	黒色頁岩	
14	12B10	打製石斧	II-B	8.7	4.3	1.7	48.5	黒色頁岩	
15	表採	打製石斧	II-A	5.7	5.2	2.1	65.3	黒色頁岩	
16	39B05	打製石斧	II-B	9.3	5.4	1.6	88.9	黒色頁岩	
17	21B05	打製石斧	I-B	6.0	5.8	1.3	49.2	黒色頁岩	
18	31A43	スクレイパー	II-B	5.7	4.9	1.3	31.8	黒色頁岩	
19	表採	スクレイパー		3.0	3.5	0.9	13.7	輝石安山岩	
20	表採	ピエスエスキュー		3.0	1.9	1.0	5.4	チャート	
21	表採	石 匙	I-A	6.1	2.8	0.8	11.0	チャート	
22	23A34	ピエスエスキュー		3.7	5.1	1.1	23.8	黒色頁岩	
23	31A46	スクレイパー		5.3	4.4	1.1	25.9	黒色頁岩	
24	表採	スクレイパー		5.9	2.6	0.7	9.6	黒色頁岩	
25	22B29	スクレイパー	II-B	6.5	3.9	1.2	23.3	黒色頁岩	
26	表採	スクレイパー	II-B	9.4	6.1	1.0	58.7	黒色頁岩	
27	表採	磨製石斧	I	8.2	4.5	2.5	171.6	蛇紋岩	刃部欠損
28	表採	磨製石斧	II	10.5	4.0	2.5	154.0	変輝緑岩	基部・刃部欠損
29	8B01	礫 器	III	5.9	2.8	1.6	34.1	黒色頁岩	
30	表採	礫 器	III	8.7	4.4	1.6	105.6	緑色岩類	
31	表採	敲 石	II-B	8.0	4.1	2.5	128.9	輝石安山岩	両側縁端部に打痕
32	表採	敲 石	II-B	8.7	4.7	3.1	200.0	輝緑岩	両側縁端部に打痕
33	35B02	磨 石	I-A	9.6	8.8	3.1	400.0	石英閃緑岩	
34	表採	台 石	III	13.0	7.6	6.1	1000.0	黒色頁岩	両端を欠く
35	表採	磨 石	I-B	11.5	9.8	4.7	700.0	輝石安山岩	両面に敲打痕あり

第 4 節 平安時代以降

本遺跡において検出した平安時代の遺構は住居址2軒で、重複していた。調査区南東隅で検出したが、かなりの削平、攪乱を受けていた。両住居址とも出土遺物は少なく、カマド周辺部において甕、坏類の破片が出土している。また2号住居址より墨書土器、1号住居址北東コーナー近くにおいて皇朝十二銭の一つである「富寿神宝」が出土しており注目される。また住居址に接して土壙を検出したが時期、関連等については不明である。他には既期の遺構、遺物は見られなかった。



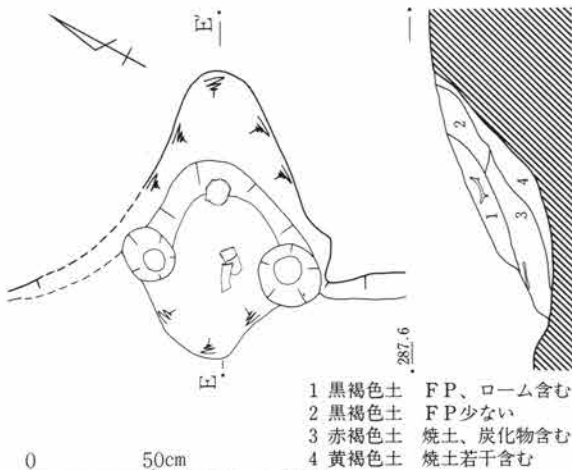
第92図 1号住居址

1号住居址 (第92図)

調査区の東端9 B47グリッドにて検出した。地表下約20cmで確認したが、試掘時にその存在を確認しており、2号住居址と重複している。形状は、若干東壁が広がる、隅丸長方形を呈す。その規模は、4.8×3.8mを測る。壁高は最大が28cmであるが、北壁は土壌の重複、南壁は、2号住居によって削平されている。

壁の立ち上がりは各壁ともゆるやかであり、周溝は見られず、床面はかなり平坦な貼床を呈す。柱穴は確実なものは見つからなかった。住居内中央やや北寄りに、3穴並んで検出したが、伴うものかは不明である。

カマドは、東壁中央やや南寄りに構築されており、上面は廃棄後の崩落、また削平によって損失している。その規模は、焚口幅70cmで、住居址外へ80cm程掘り出している。袖部にはピットが対に見られ、袖部材を抜き取った痕跡と思われる。カマド埋土は、自然崩落による堆積状況を示しており焼土、炭化物の混入も余り多くは見られなかった。遺物としては、覆土中より須恵器高台付碗の底部片(第94図-8)が出土している。

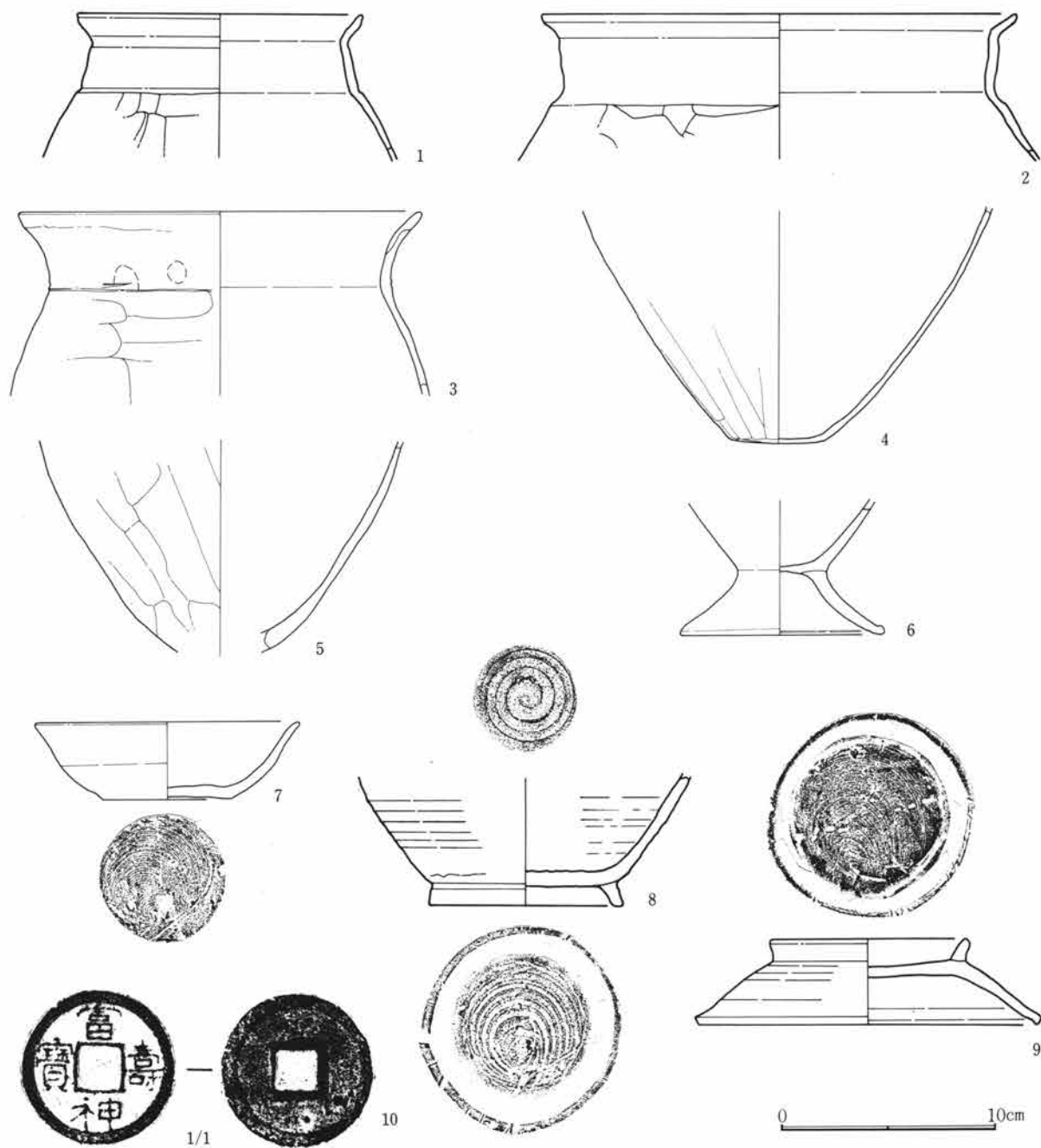


第93図 1号住居カマド

貯蔵穴は、南東コーナーに径70cm、深さ20cm程の大きさに、ほぼ円形に掘り込まれていた。床面は平坦である。中より遺物の出土は無かった。

出土遺物は、カマドおよびその前面に検出されたが量的には少なく、完形品は見られなかった。

カマド火床面より、甕(第94図-2)、坏(第94図-7)



第94図 1号住居址出土土器・銭貨

が出土している。

住居址の北壁を壊して掘り込まれている土壌は、本住居址より新しいものであるが、時期の決定は出土遺物等がないのでできない。形は不正長円形で、長さ2.7m、深さ約50cm程で、壁の立ち上がりはゆるやかである。底面に、径50cm程の浅いピットがあり、炭化物の出土が若干見られた。

また、住居の南壁寄りに検出された土壌は、やはり新しいものと思われるが、2号住居址の床下土壌の可能性もある。覆土はFP混土主体であるが、下層程FPの混入量が多くなる。

表12 1号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	甕	口径-13.3	コの字口縁、口縁端部は、やや受け口状になる	外面 口縁部横撫で、肩部横撫削り 内面 横撫撫で	微砂粒含む	良	茶褐色	口縁部1/2残存
2	甕	口径-22.0	コの字口縁、口縁端部は、やや受け口状になる	外面 口縁部横撫で、肩部横撫削り 内面 横撫撫で	微砂粒含む	良	茶褐色	口縁部1/3残存
3	甕	口径-18.7	口縁はやや外反して、立ち上がる。肩部はなだらかである	外面 口縁部横撫で、胴部横撫削り 内面 横撫撫で	微砂粒若干含む	良	茶褐色	口縁部1/3残存
4	甕	底径-4.4	小さめの底部から直線的に外へ開く胴部が付く	外面 縦篋削り、底部中央へ向かって篋削り 内面 丁寧な篋撫で	微砂粒若干含む	良	外面黒褐色 内面茶褐色	胴部下半1/2残存
5	台付甕		底部かなり締る	外面 縦篋削り 内面 横篋撫で	微砂粒含む	良	茶褐色	台付甕1/3、脚台部欠損
6	台付甕	底径-9.5	脚部は大きく外へ開く胴部は外反して立ち上がる	外面 ロクロによる指撫で 内面 ロクロによる指撫で	良く精製されている	良	茶褐色	脚台部1/2残存
7	坏	口径-12.3 底径-6.1 器高-3.6	胴部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁部若干外反する	外面 ロクロ回転による指撫で 底部右回転糸切り 内面 指撫で	黒色粒子若干含む	良	灰色	1/3残存
8	埴	底径-9.0	やや大きめの高台に外へ開きながら立ち上がる体部が付く	外面 ロクロ痕残る。底部右回転糸切り 内面 ロクロ回転残る	黒色粒子含む	良	灰色	1/3残存
9	蓋(?)	つまみ径-9.3 口径-16 器高-4	高台状のつまみ部に大きくハの字状に開いた体部が付く、口唇端部で緩く折れる	外面 ロクロ水挽き痕残る。底部右回転糸切り無調整 内面 指撫で	砂粒若干含む	良	灰色	つまみは大きく皿とも見られる

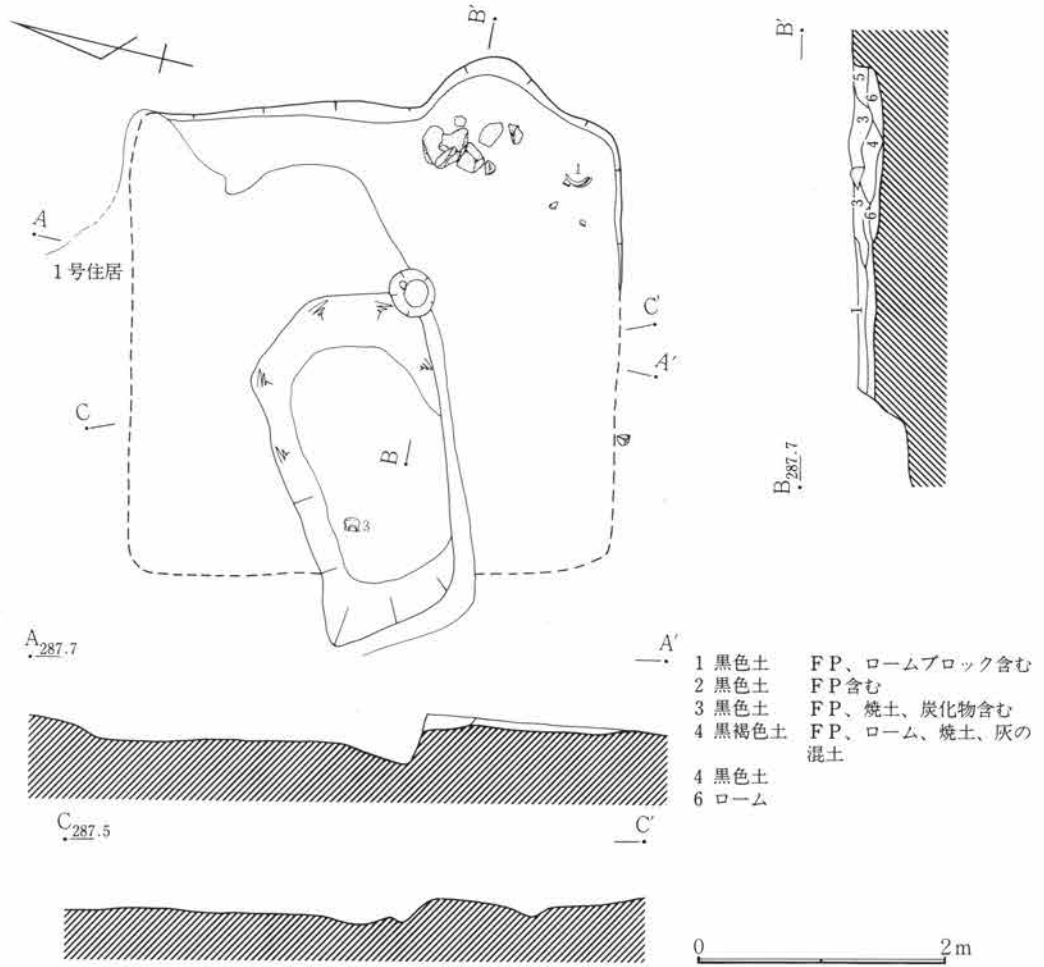
番号	種	出土位置	量目	特徴	摘要
10	古銭 (銅製)	北東コーナー 付近	直径 2.35cm 重さ 2.7g	富寿神宝。遺存度は、腐蝕はなくきわめて良好。縁・銘共に脱落なく良好である。富寿神宝の初鑄は弘仁9(818)年である。	

2号住居址(第95図)

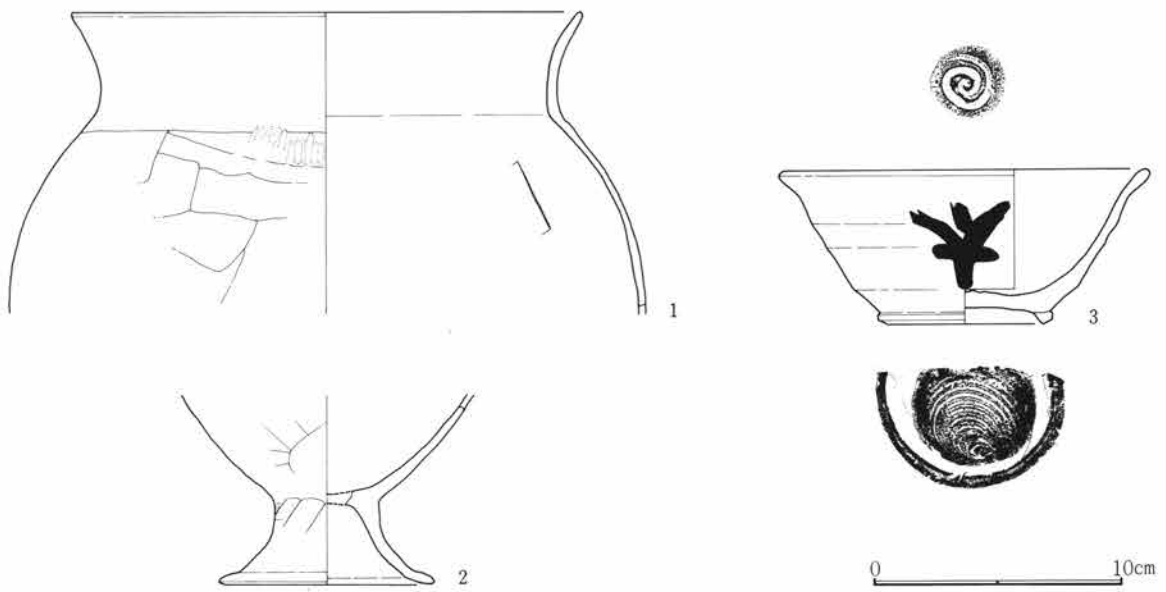
調査区の東端、9 B46グリッドで検出した。1号住居の南半分にかかって構築されていた。検出面が地表下約20cmと浅く、また掘り込みもカマド部分がわずかに認められただけで、南、西、北壁は確認できなかった。形状はほぼ正方形になると思われるが、床面の検出はできずカマド周辺でその痕跡を認めたにすぎなかった。周溝等も無かった。住居の規模は(4)m×(3.5)mである。

カマドは、東壁中央やや南寄りに構築されているが、大部分は削平されており、掘り方部分が検出されたのみであった。焼土等もほとんど見られず、カマド用材として用いられていたと思われる石が数個検出された。

貯蔵穴も認められなかった。出土遺物は、少なく完形品は無かった。甕(第96図-1)の口縁部が、南東コーナー部分、台付甕の脚台部分が覆土中より検出されている。また住居の西に検出された落ち込みの中よ



第95図 2号住居址

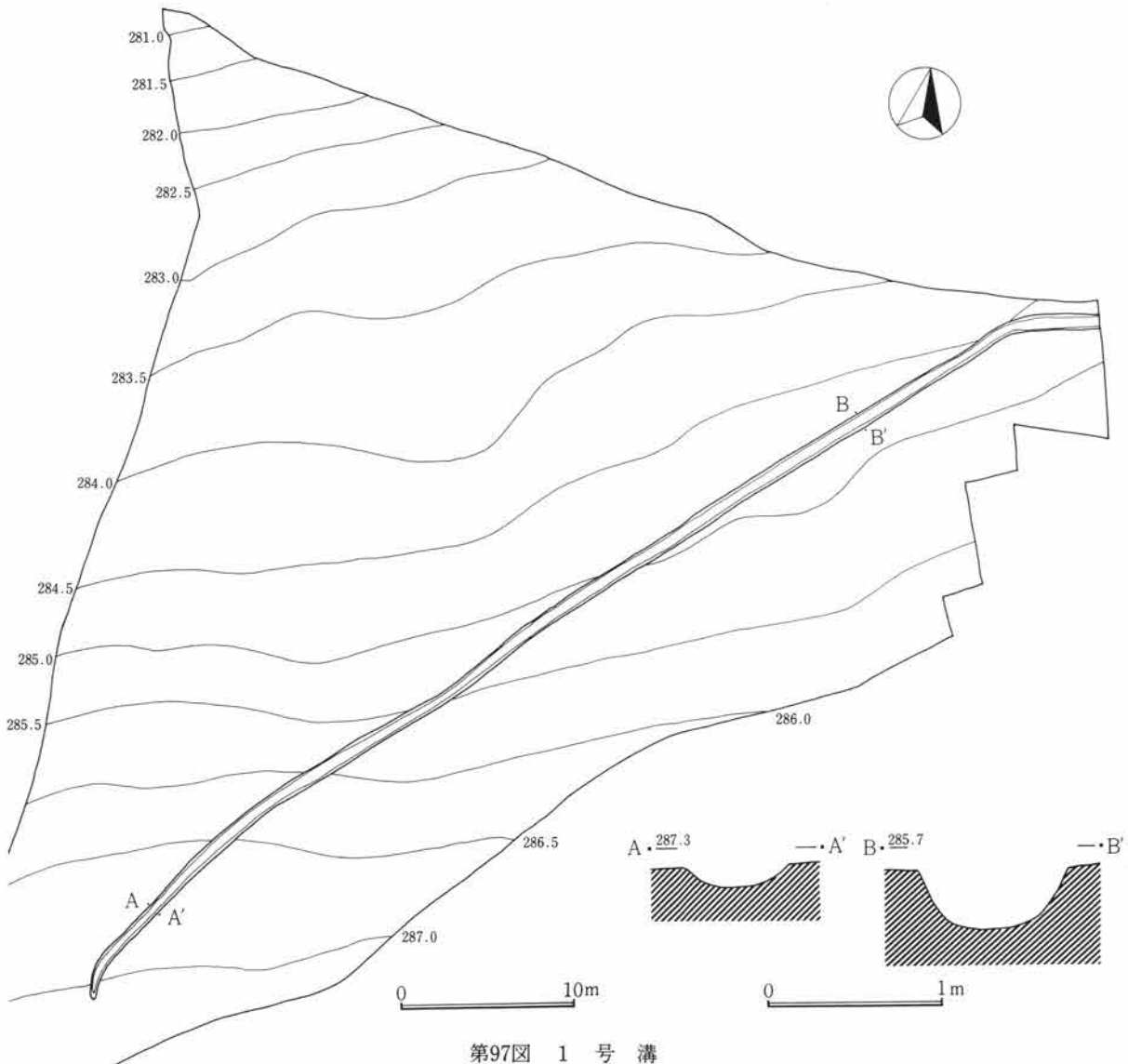


第96図 2号住居址出土土器

り高台付埴（第96図-3）が検出されたが、後世に掘り込まれた可能性がある。出土した埴には墨書が認められ「太」の文字が明瞭に見られた。

表13 2号住居址出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	甕	口径-20.5	肩部は丸みを持ち、口縁部は弱いコの字状を呈す。口縁端部はやや外反する	外面 口縁部横撫で、胴部横篋削り 内面 口縁部横撫で、胴部横篋撫で	精製されている	良	茶褐色	口縁部2/3残存
2	台付甕	底径-8.7	広くハの字状に開く脚部に外反して立ち上がる胴部が付く	外面 脚台部横撫で、胴部斜め篋削り 内面 脚台部横撫で、胴部横篋撫で	微砂粒若干含む	良	暗茶褐色	脚台部、胴下半部残存
3	埴	口径-14.9 底径-7.0 器高-6.7	やや低い高台を持ち、体部外反しながら立ち上がり、口縁端部やや外反する	外面 ロクロ水挽き痕を残す 底部 ロクロ右回転糸切り 内面 横撫で	砂粒僅かに含む	普通	暗灰色	「太」の墨書あり



第97図 1号溝

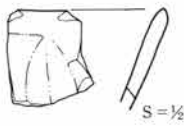
1号溝 (第97図)

調査区西側、35-B08付近で南端部を検出した。調査区を北東に向かって下り、比高差は2.5mを測る。調査区北東隅で、農道部分にかかる。幅約70cm、深さ20~30cmで、断面はかまぼこ状を呈す。FP上面よりVI層上面まで掘り込まれる。

検出した全長は約70mであり、ほぼ真直ぐであるが端部が曲がっている。覆土は、FPを混入した黒色土で、水の流れた痕は認められなかった。出土遺物は無く、古墳時代後半以降のものとは判断できなかったが、覆土などの状況から、近世以降に比定される可能性が強い、用途については不明である。

その他の出土遺物

調査区内より青磁片一片 (第98図) が採集されている。



第98図
遺構外出土青磁

表14 遺構外出土青磁観察表

土器種	釉色・胎土・焼成	特 徴	摘 要
青磁 (鎗手蓮弁文塊)	淡灰色。 淡灰色。 軟質。	釉は灰色をおび酸化ぎみで、内外に細かい貫入が入る。口縁端部はやや尖る。外面に鎗手蓮弁がみられる。作調は釉の発色が悪く出来がすぐれない。	龍泉窯系。 13世紀。 口縁部細片。

(小野)

跡遺西訪にし諏わす

第 VI 章 諏 訪 西 遺 跡

遺 構 ・ 遺 物

第 1 節 遺 跡 の 概 要

諏訪西遺跡は前述したように東西に延びた台地に営まれた遺跡であり、この台地は長さ1.5km程で西へ緩く傾斜しながら広がって行き末端部は急傾斜となりその下は河岸段丘となる。

付近の畑からは耕作等により縄文～古墳時代にかけての土器や石器が多く出土しており、調査によって多くの成果が予想されていた。調査は、台地を横断するように行なったわけであるが、試掘により北側部分には遺構の存在がないことが確認されたために、台地中央より南側が主に対象地となった。

調査区のほぼ中央に、農道が東西に走っていたが、その南側についてはかなり表土が削られていたために、遺構面まではかなり浅い部分もあった。検出した遺構、遺物については以下のようであった。

先土器時代

試掘調査によって、調査区南斜面においてB P下層でA Tを多量に含む層が確認され、ほぼ直下において遺物を確認したため、調査区を広げ調査を行なった。その結果、ナイフ形石器等を含めて約300点の石器・剥片類を検出した。遺物の集中した場所は7カ所であったが、その規模は比較的小さなものであった。

縄文時代

前期の前半関山 I 式期の住居址 8 軒、前期後半諸磯式期の住居址 1 軒、中期勝坂式期の住居址 2 軒を検出した。関山式期の住居は石組の炉を持つという特徴を示し、石皿の転用も見られた。形状はやや台形を呈した長方形を呈す。諸磯式期の住居は方形を呈し、勝坂式期は円または長円形を呈している。

これらの住居址は台地中央より、等高線に沿って南斜面部分に広がって散在していた。出土した土器は早期の撚糸文土器が南斜面部分より検出されたのが注目される。その他、花積下層式の最終段階から関山 I 式期にかけての土器群、諸磯 a・b 式、および中期前半の土器が出土している。

弥生～古墳時代

井戸址と思われる遺構が 3 基検出されている。覆土上面に F A 層がレンズ状の堆積を示していた、弥生後期～古墳時代前半のものであろう。遺構内からは時期を決定し得る遺物の出土はなかった。

工事用道路部分について

本線部分より約300m東にあり、農道の拡幅部分の調査を行なったため調査区は東西240mと細長いものであった。古墳時代後半の住居址 1 軒、縄文時代の土壙10基と検出遺構は少なかったが、一部台地の北斜面にあたる部分において縄文時代の包含層が検出された。中期の土器片、石器が主であったが、早期、前期の土器片も出土しており、中でも包含層より出土した押型文土器は、器形復元が可能であり県内の数少ない資料に加えられよう。

(小野)

第2節 先土器時代

1 試掘調査の結果

本遺跡の周辺で同時に調査が行われている他遺跡において、その多くの遺跡で先土器時代の遺物が出土しており、本遺跡の先土器時代の存在の可能性が強く想定しえる状況にあったため、先土器の遺物確認のための試掘調査を行なった。

試掘調査は、他遺跡での先土器時代の遺物分布の状況から、台地頂部から緩やかに傾斜する南斜面に主眼を置くこととし、試掘トレンチを斜面に沿うようなかたちで任意に第100図のごとくAトレンチからOトレンチまでの15トレンチを設定した。

調査は、隣接する中畦遺跡でのAs-SP上層からの出土する例等から、まずAs-SPまでの間の遺物確認を行ない、次いでAs-BPまでの間、さらにAs-BPからAT及び暗色帯を含むHAまでの間の確認、一部のトレンチにおいてはHPまでの間の遺物確認を行なった。

調査の結果は、台地の緩やかな傾斜から急斜面への変換部付近に位置するGトレンチで、第XVII層の暗色帯中から黒色頁岩を石材とする剥片が2点出土した。またGトレンチより遅れて調査したOトレンチにおいても、第XVI層より黒色頁岩及び黒色安山岩を石材とする剥片類が数点出土し、その確認がなされた。

以上の結果から、本遺跡における先土器時代の存在が明確となった。さらにその遺物は第XVI層以下の層中に包含されるものであり、それより上層の第VII層から第XV層までの間には遺物の存在が認められないことから、本遺跡では第XVI層以下に主眼を置いた調査が必要とされることがわかった。

本遺跡での土層の基本的な堆積は、先に第IV章で述べたごとくであるが、南端ほど傾斜が急になるため各層が薄くなり、また端部では混在するため明確な土層の堆積は示さない。

2 調査の結果

本遺跡における先土時代の調査は、先の試掘調査の結果をもとに遺物が確認されたGトレンチ及びOトレンチの拡張区の設定を行ない、Gトレンチの拡張区をI区、Oトレンチの拡張区をII区とし、I区から調査が進められた。特にOトレンチの拡張に際しては、頭初想定した範囲よりも広い範囲から遺物の出土が認められた。

遺物は、そのほとんどが基本土層第XVI層及び第XVII層の上部ローム層中に包含されるものであり、ブロック（石器集中部）は7ヶ所ほど検出することができた。これらのブロックは、調査対象域の西側に多くみられ、出土状況から対象域外へその範囲が延びることが十分予測される。

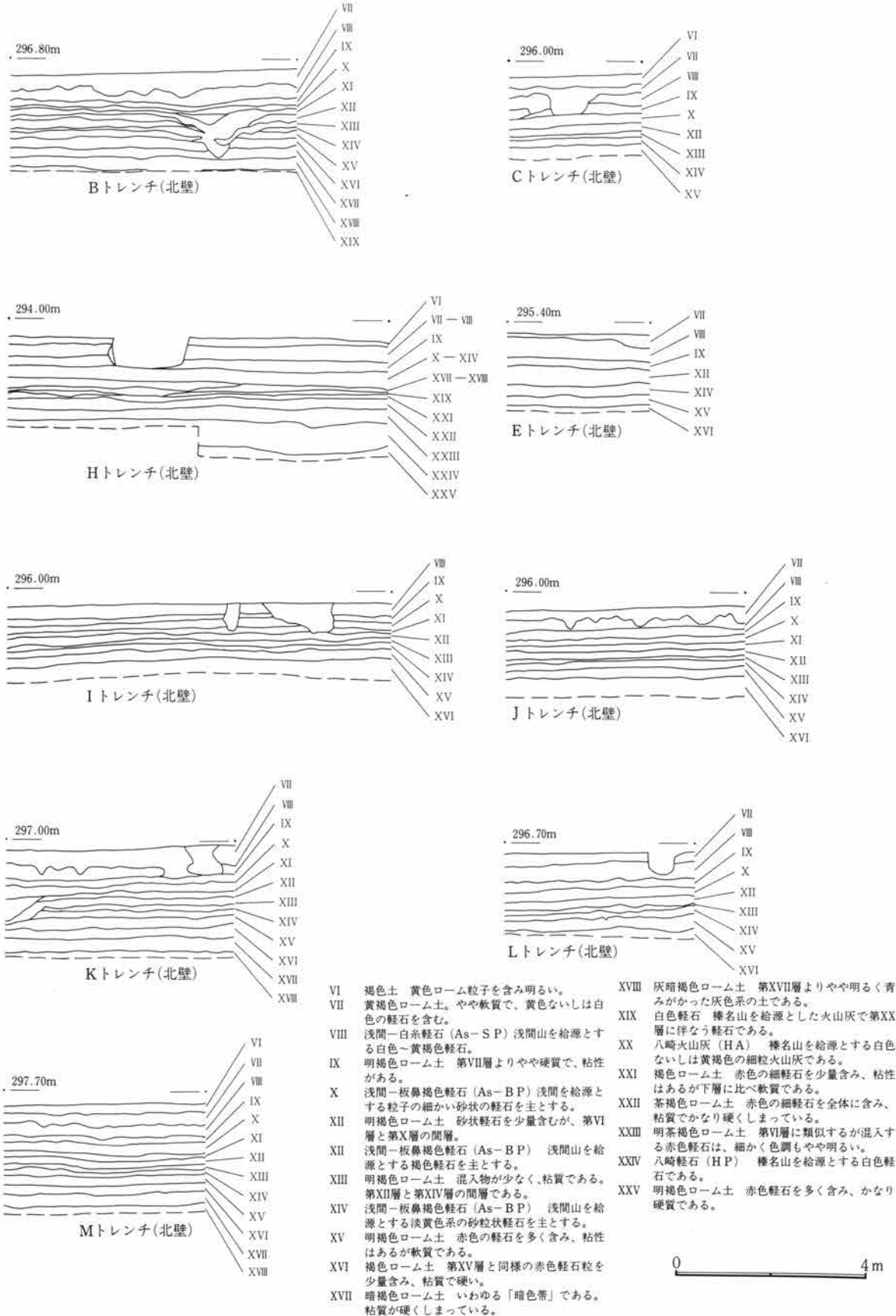
礫群、炭化物集中部等については、検出できなかった。

（谷藤）

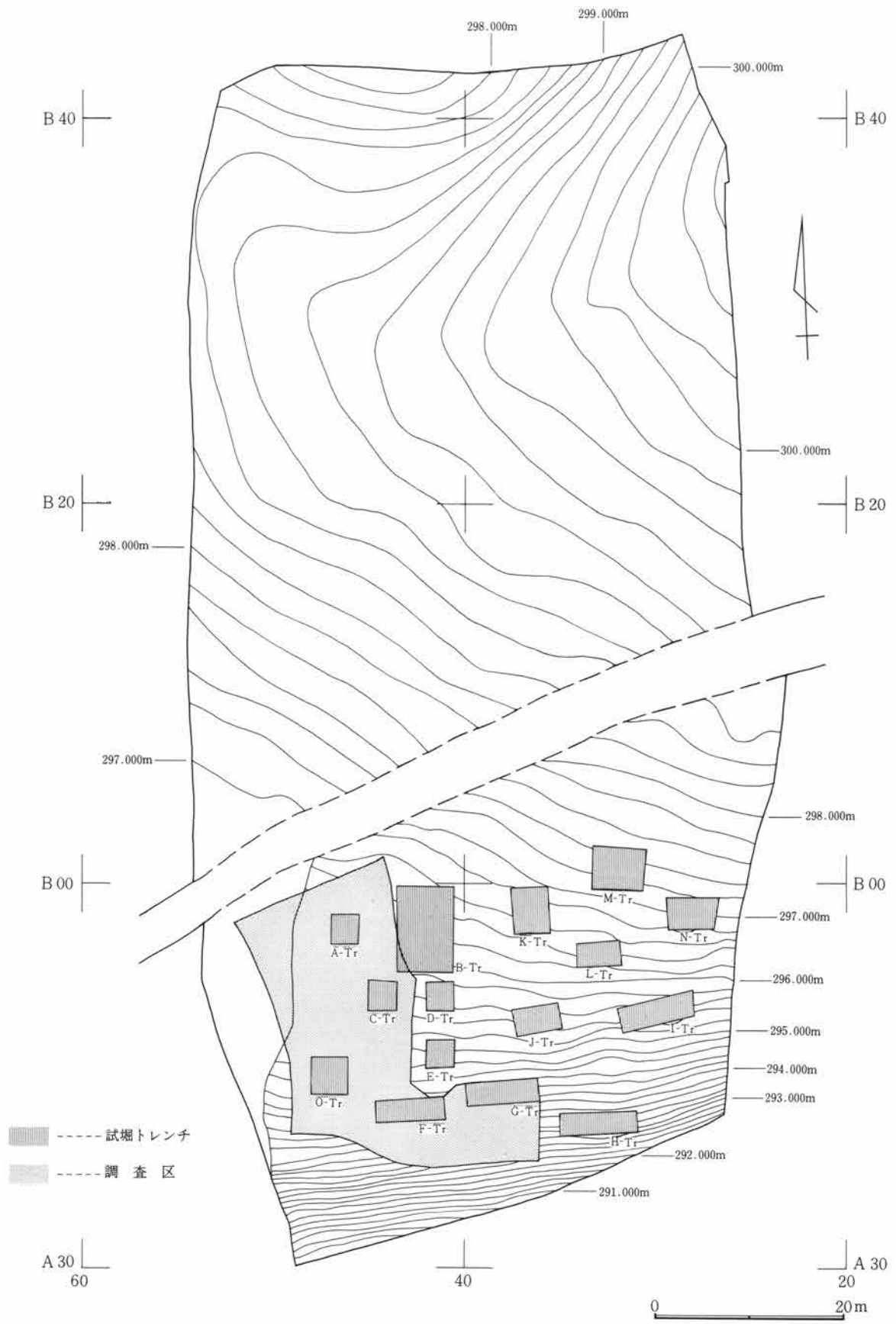
3 出土遺物（第101～112・125～128図）

出土した遺物は、7ヶ所のブロックから総数301点である。組成は、ナイフ形石器1点、彫器1点、錐器1点、2次加工の加えられているもの11点、使用痕を有するもの4点、石核5点、敲石4点から成るが、所謂定形石器と称されるものは少ない。敲石を除く石器及び剥片類の石材は、主として黒色頁岩及び黒色安山岩が用いられ、それ以外のものについては輝石安山岩、ひん岩等数種類の石材が用いられ使用頻度が低い。

出土した各器種については、以下のとおりである。



第99図 試掘トレンチ土層断面図



第100図 先土器時代調査区全体図

ナイフ形石器 (1)

1は、黒色頁岩の縦長剥片を用い、素材の打面を残した基部加工のナイフ形石器である。全体形は、ほぼ左右対称であり、先端の加工が両側縁にわたるといふ特徴を有する。

彫器 (2)

2は、素材となる黒色頁岩の剥片の打面から、縦に折り取る様に切断したのち、その打面を、彫刻刃剥離の打面として、数度加工している。

錐器 (3)

3は、黒色頁岩を素材とする剥片を用い2回の大きな調整加工の後、小さな調整加工を施している。さらに両側辺にも調整加工を施している。下半部は、素材の節理から欠損している。

スクレイパー (4・6・7・9・13)

4・6・7は急角度の分厚い刃部を有する搔器ともいえるものである。4は、黒色頁岩の横長剥片を素材とし、剥片の表側から丸味をもつ裏面にむけて荒い刃部を作り出している。6は、素材となる黒色安山岩の剥片の末端に大きく調整加工したのち、小さな調整加工で刃部をととのえているスクレイパーの欠損品である。7は、黒色安山岩を素材とする剥片の両側縁に丸味を有するものである。右側縁は剥片の表である礫面から急角度の分厚い刃部を作り出し、また左側縁は裏側から連続的に調整加工を施している。5・9・13は、連続的に小さな調整加工により刃部を作り出すスクレイパーである。5は黒色安山岩を素材とする剥片の右側縁の下半部に刃部を有するものである。9は、黒色頁岩を素材とする剥片に連続的な小剥離を施すことによって、鋸歯状の刃部を作り出したもので、上半を欠損している。13は、黒色頁岩を素材とする剥片の側辺に連続的に調整加工を施したもので、刃部の欠損したものである。

剥片 (8・10・11～19・24～35)

長幅比が大きく、比較的両側縁の平行しているA類 (8・13・17～19・24・25) と、長幅比が1に近いB類 (10・26・28～31・34)、長幅比が1よりも小さいC類 (15・16・27・32・33・35) に分類される。

A類は、そのほとんどが単設あるいは両設打面の石核から剥離した縦長剥片である。特に17・18は、長幅比が2:1を超え、A類の剥片中でもその代表例と言えよう。

B類は、A類と似た剥片剥離作業の中に位置づけられるもの (26・30)。C類の剥片剥離作業の中に位置づけられるものは (29) があるが、B類はA、C両類の剥片剥離作業を含む幅広い剥片剥離作業に対応するものと考えられる。

C類は、横長剥片であるが、剥片の表面と裏面の剥離方向は一致せず、そのなす角度もまばらであり、一定した打面をもつ石核から剥離されていないと考える。また、原材の礫の表皮剥ぎ取り例 (35) なども存在する。

これらの剥片の中には、二次加工を有するもの (12・14・15) と、使用痕を有するもの (8・10・11・16～19) がある。14は、比較的大きな二次加工を、裏面を中心として表裏に施し、石礫の未製品とも考えられる。15は、横長剥片の一端に数点の二次加工を施している。使用痕を有する剥片は、剥片の一辺に比較的連続的に微細な小剥離痕の観察されるもの (16～18) と、剥片の縁辺に刃こぼれ状に観察されるもの (8・10・11・19) があるが、その他の剥片を含め、石質の関係上、風化が激しく使用痕としての判別は難しいものが多い。

石核 (20～23)

単設または両設打面の石核 (20～21) と、一つの作業面を持ち、その周辺を打面とする石核 (22・23) が

ある。

20は、最終的に素材となる黒色頁岩の自然面を単設打面としたもので、一作業面から縦長剥片を連続的に剥離し舟底状の形状を呈するものであるが、両側面の剥離痕等の観察により、必ずしも当初より単打面から縦長剥片を剥ぎ取られたものではないと考えられる。なお、これに接合する剥片類は発見されなかった。

21は、黒色頁岩を用い両設打面の石核であるが、接合部No21から考えれば当初より、上下打面を設定し、縦長剥片を剥離したものではない。

22は、黒色安山岩を素材とし、正面の一作業面の周辺を打面とし、剥片剥離を行うものであるが、接合例No20より考えれば、剥離途中で母岩を半割し、剥片剥離作業を開始したばかりの段階と考えられる。23も黒色安山岩を素材したもので、22同様正面の作業面中心に剥離を行うものである。

敲石 (100・102~105)

102以外は、大型で重量のあるのが特徴である。100は、円礫を素材としており、ほぼ全周にわたり、敲打痕を有する。102は、小型で他の例と対照的であり、敲打痕が明確でなく敲石ではないとも考えられる。103は、扁平な礫を素材としている。一端に敲打痕を有し、その使用过程中で二分してしまったものらしい。104は、比較的長い礫を用い、その上下両端に敲打痕を有するもの。105は、大型の棒状礫を素材とし、上部の左右側縁と、下端に敲打痕を有するものである。3440gと、敲石としては類のない重量であるが、敲打痕の位置を考えると、台石としてよりは敲石として用いられたと考えられる。

磨石 (101)

玉子形の礫を用いており、使用痕としては一部にキズ状の痕跡が観察されるのみであるが、形状・表面の状態等から磨石である可能性が強いと考えられる。

3 接合資料 (113~125図)

剥片の分割あるいは、破損例 (No.9・10・14・15)、石器の二次加工を表す例 (No.19) と、剥片剥離行程を表す例 (No.1~8・11~13・16~18・20・21) の接合例に分けられる。

接合例 No.1

縦長剥片17と同様にして剥かれた剥片の末端部36の接合例であり、一定の打面から連続的に剥片剥離が行われたことをうかがわせる。尚、17の裏面下端は加工によるものではなく、節理による割れである。

接合例 No.2

自然面を打面とする小型の剥片を取る作業行程を表すもので、接合したこれらの剥離面を観察すると上・下に打面を設定して剥離作業を行っている様である。

接合例 No.3

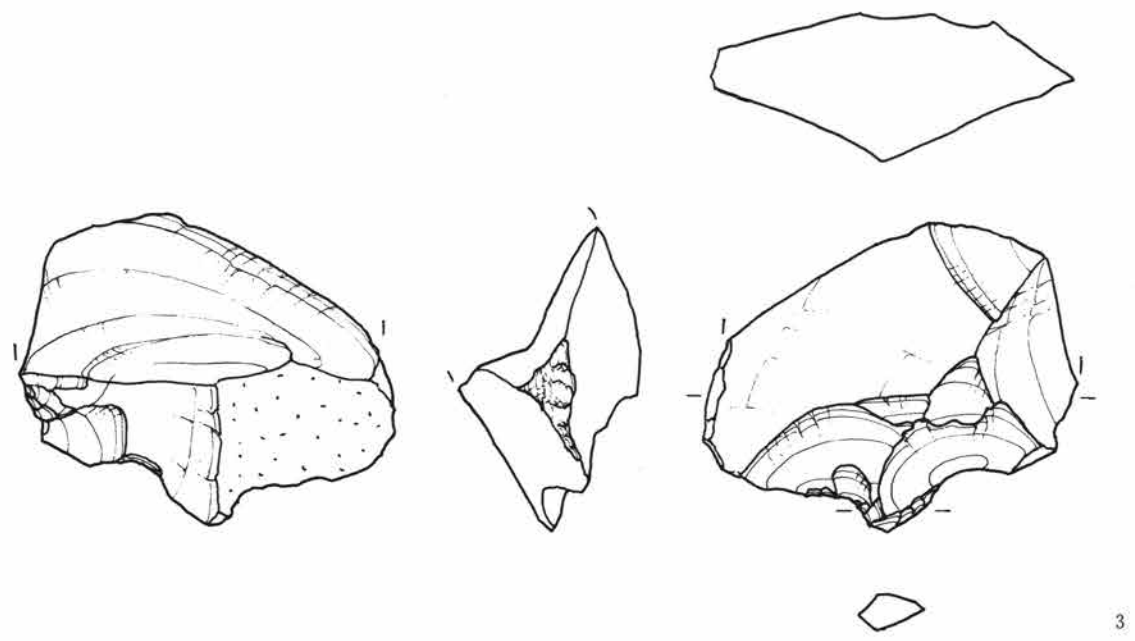
横長剥片38と剥片39の接合例である。大型の剥片を素材とし、それを用いて剥片剥離する工程を示すもので、剥片39は、38との接合状態から、石核の部類に属するものとも考えられるものである。

接合例 No.4

一定の打撃方向からの連続的な剥片剥離行程の接合例である。また、これらの剥片の表面に残された剥離面も同方向であり、単設打面の石核が予想され、また、41・42などの剥離から考えると、縦長剥離の剥片剥離行程との関連が予想される。

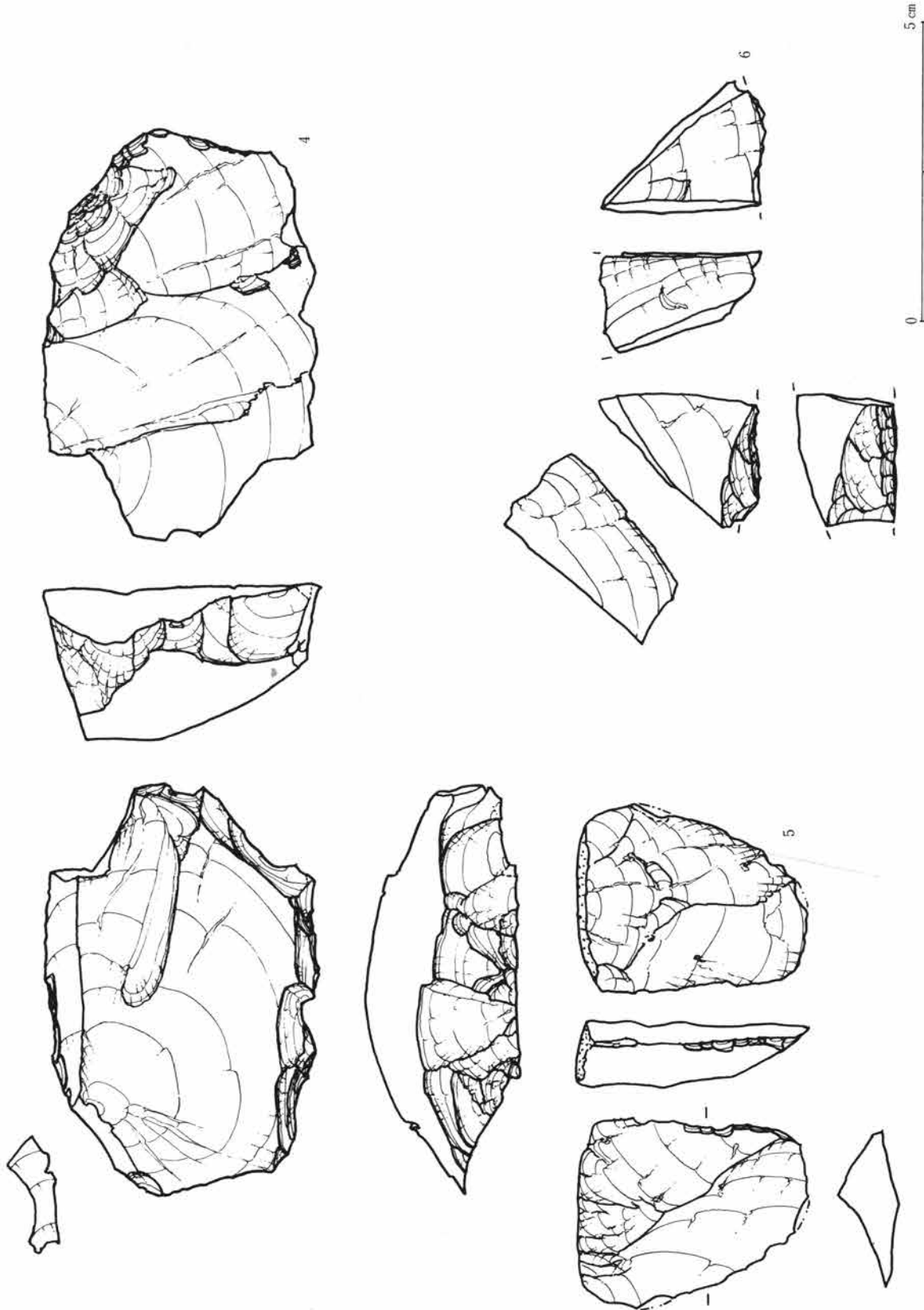
接合例 No.5

節理により破損された剥片44と、剥片45の接合例であり、45の表面に残る剥離痕を含めほぼ同方向から連

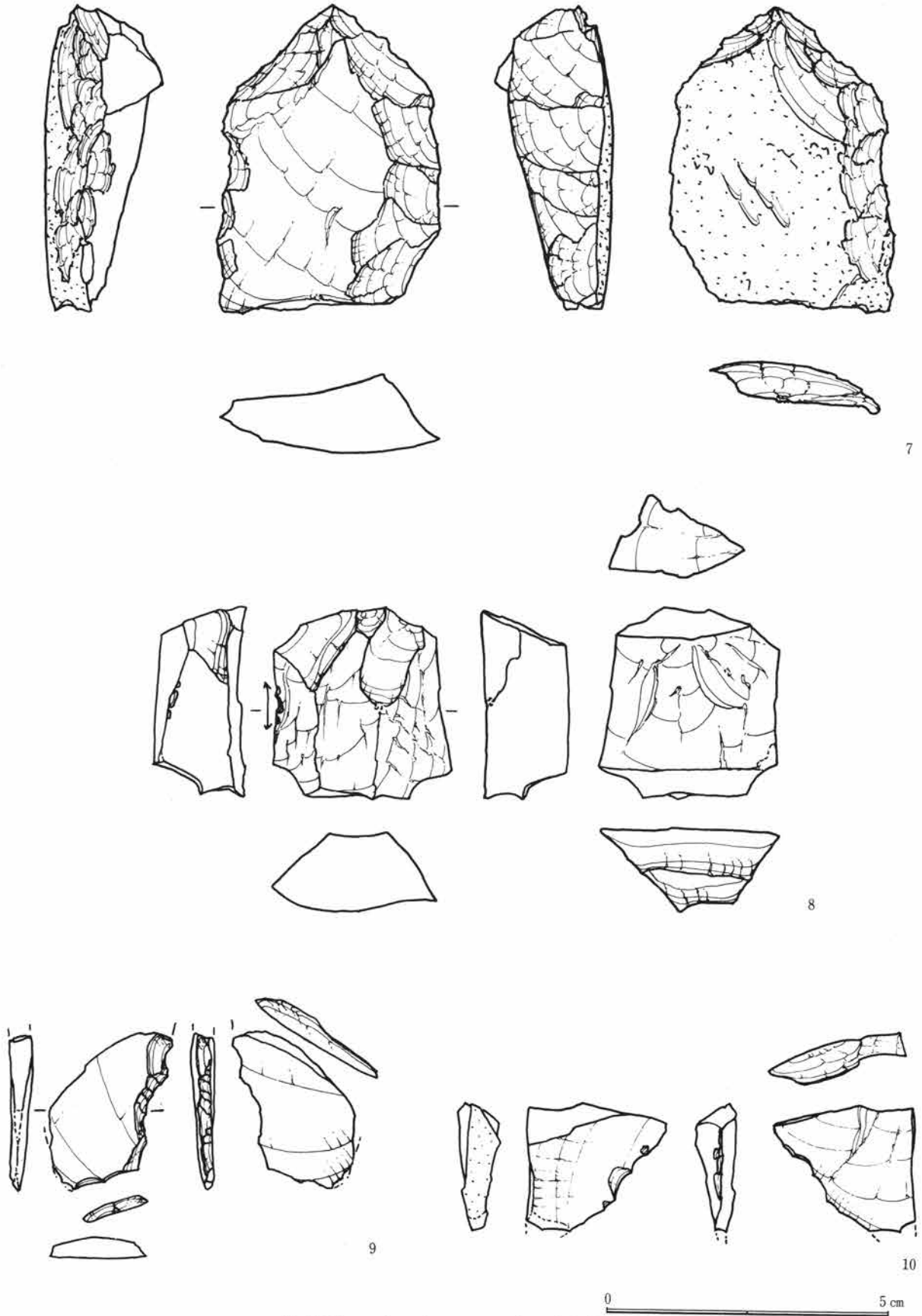


0 5 cm

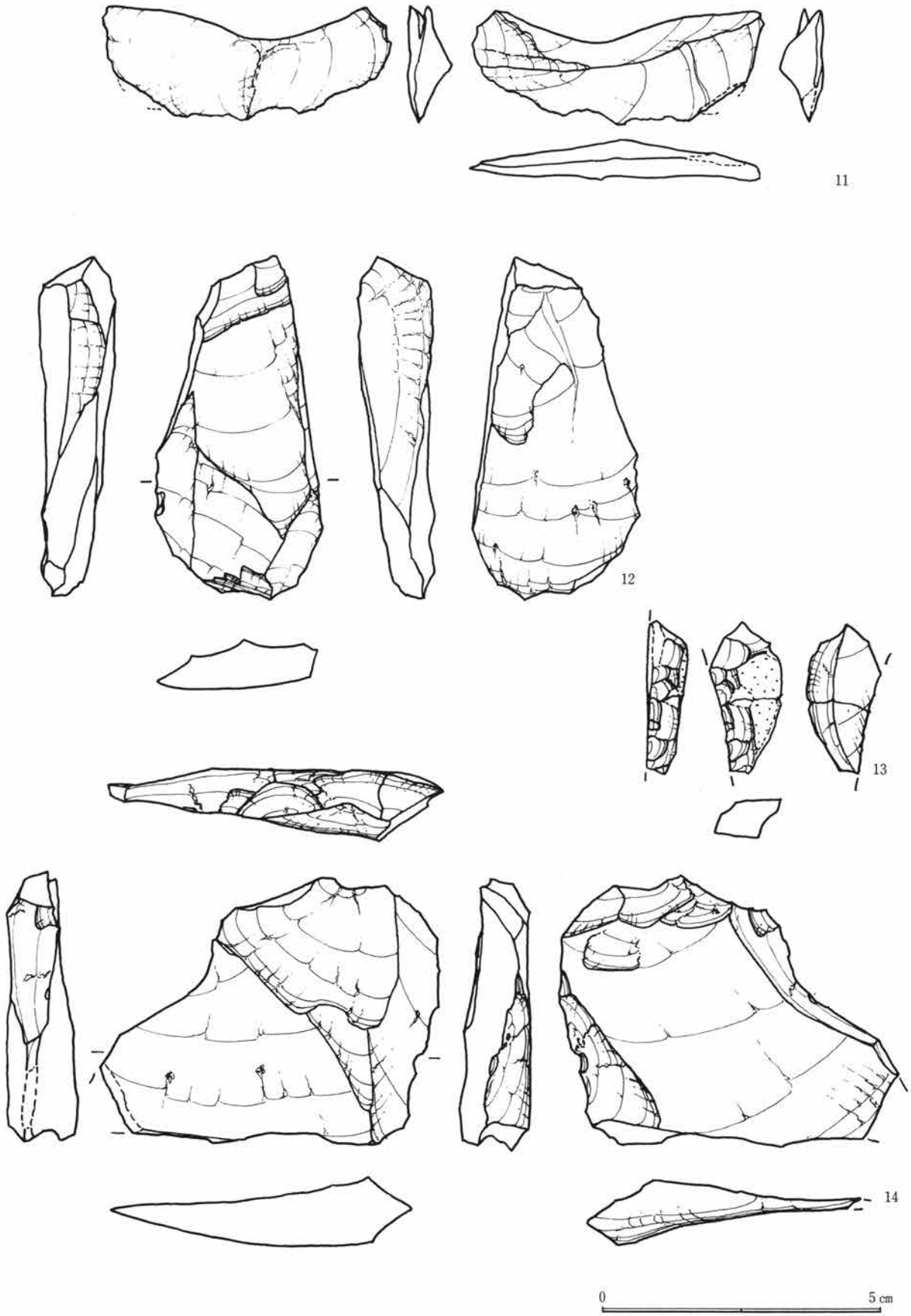
第101図 ナイフ型石器・彫器・錐器



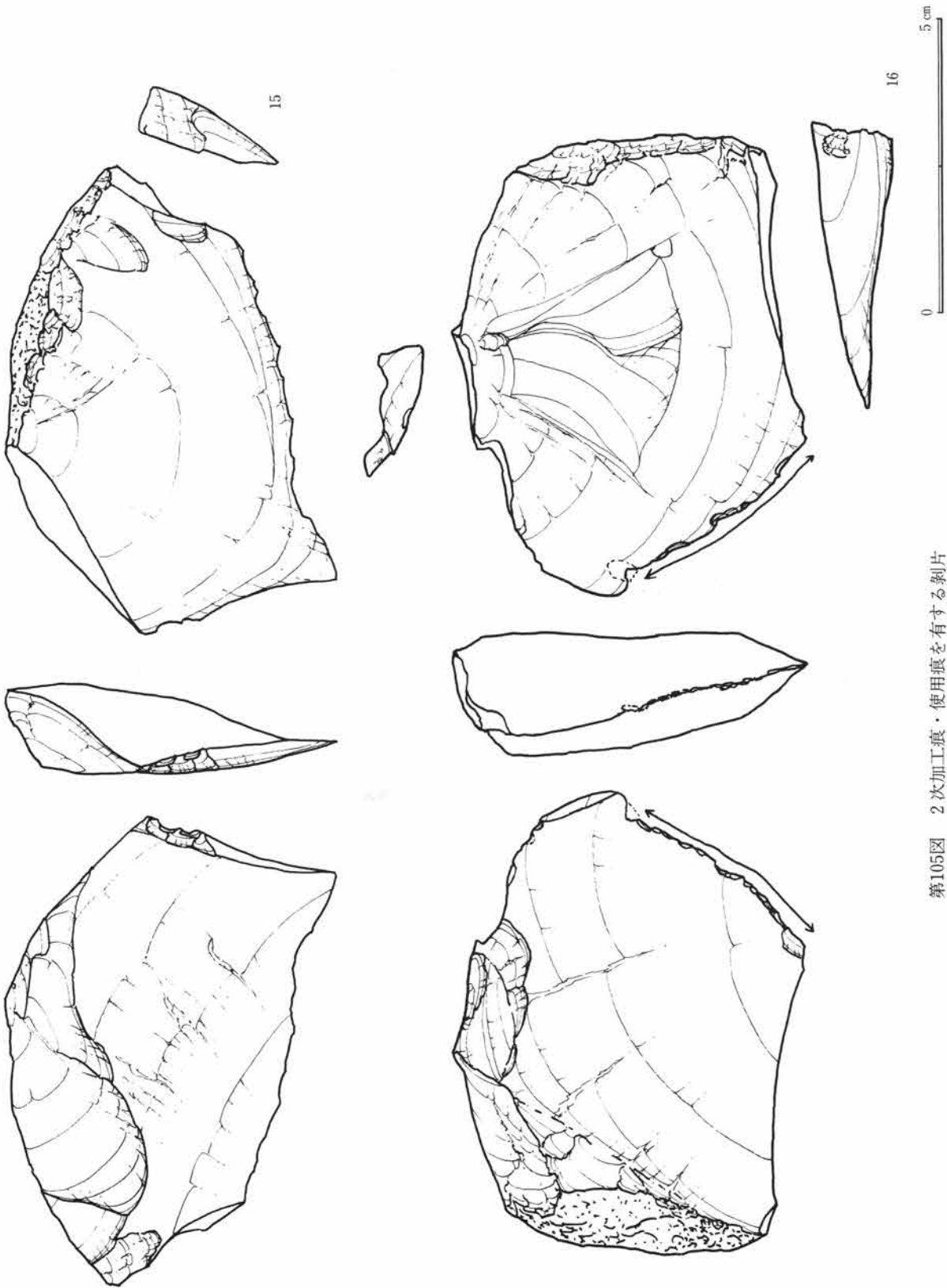
第102図 スクレイパー



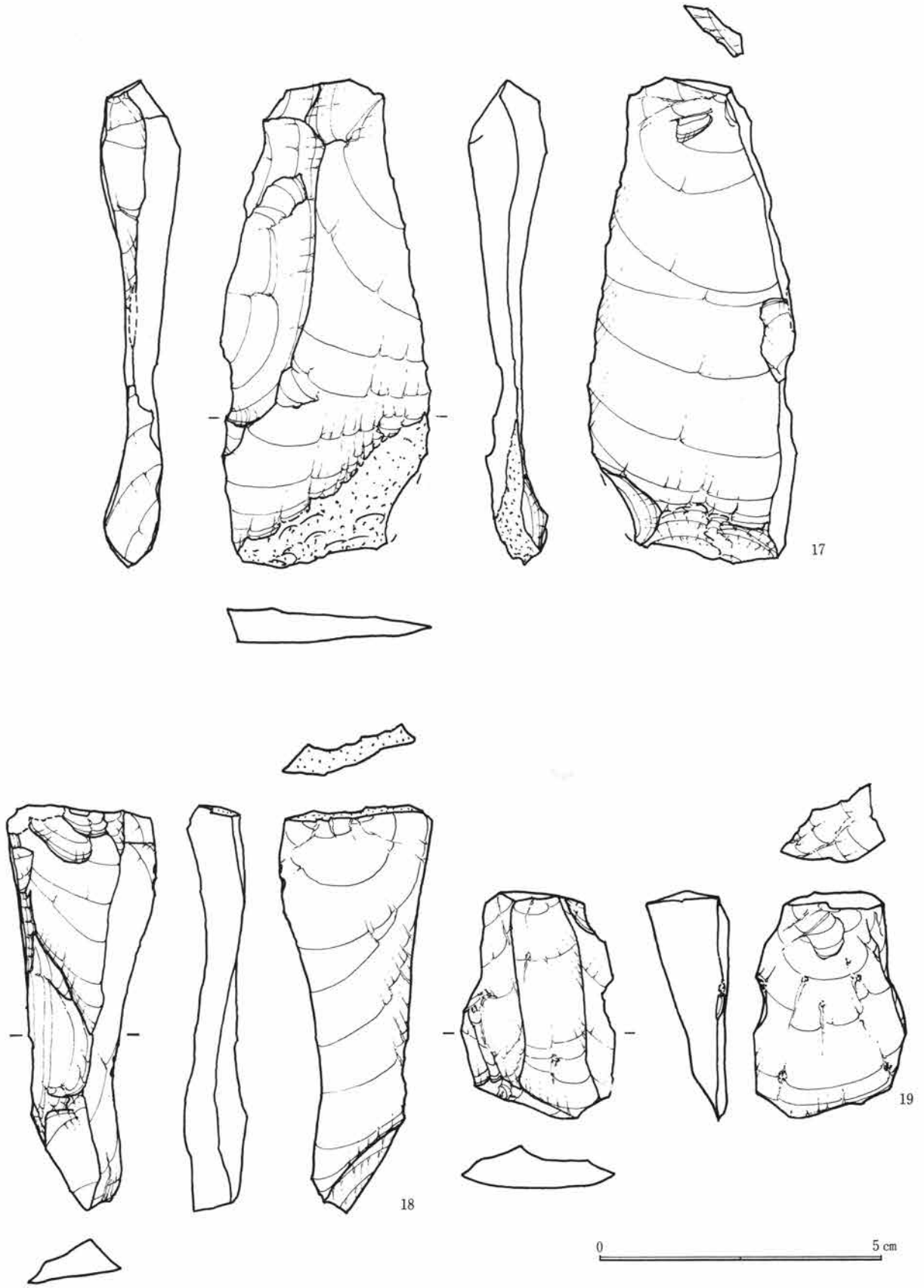
第103図 スクレイパー・2次加工痕を有する剥片



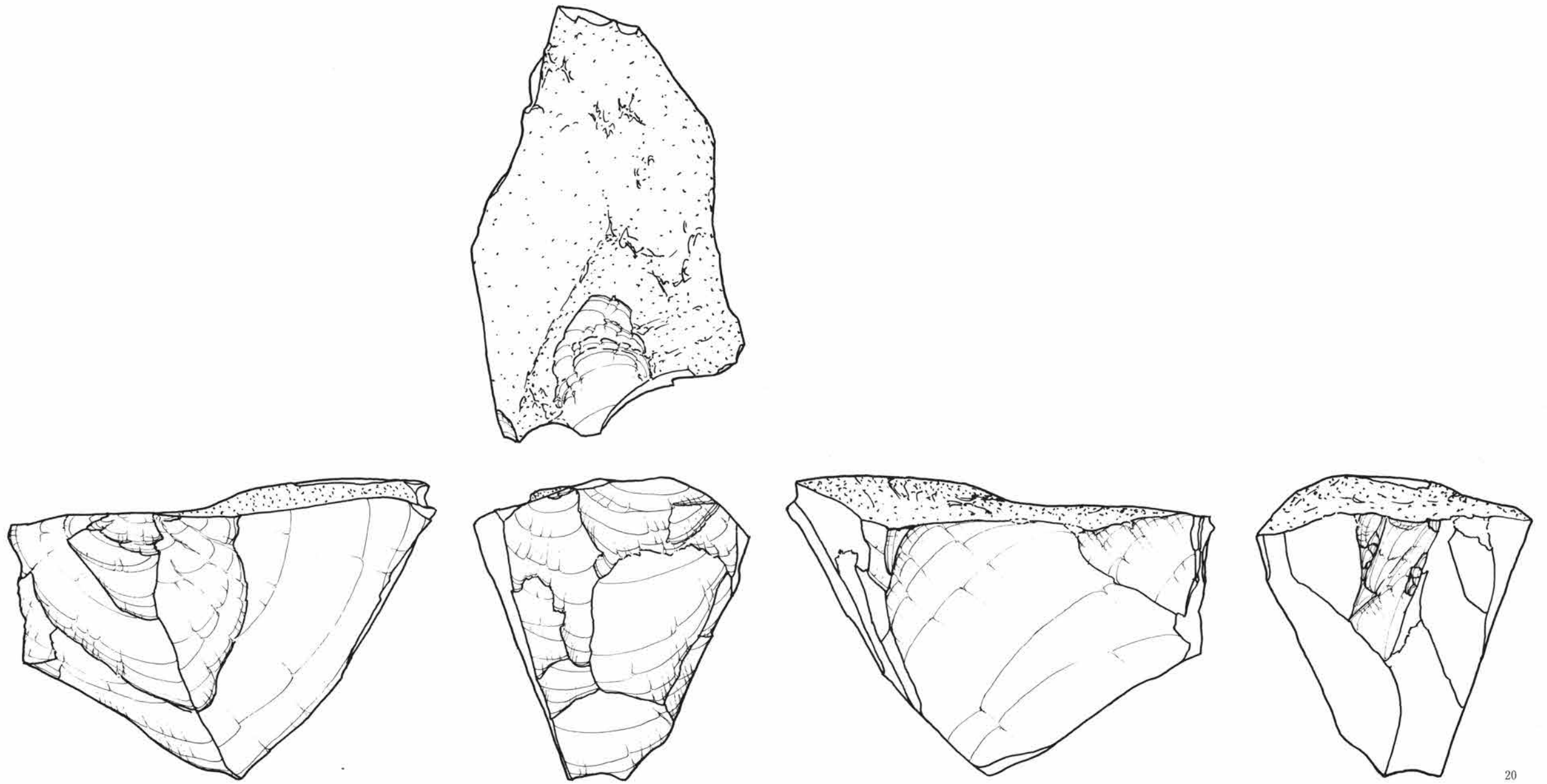
第104図 スクレイパー、2次加工痕・使用痕を有する剥片



第105図 2次加工痕・使用痕を有する剥片



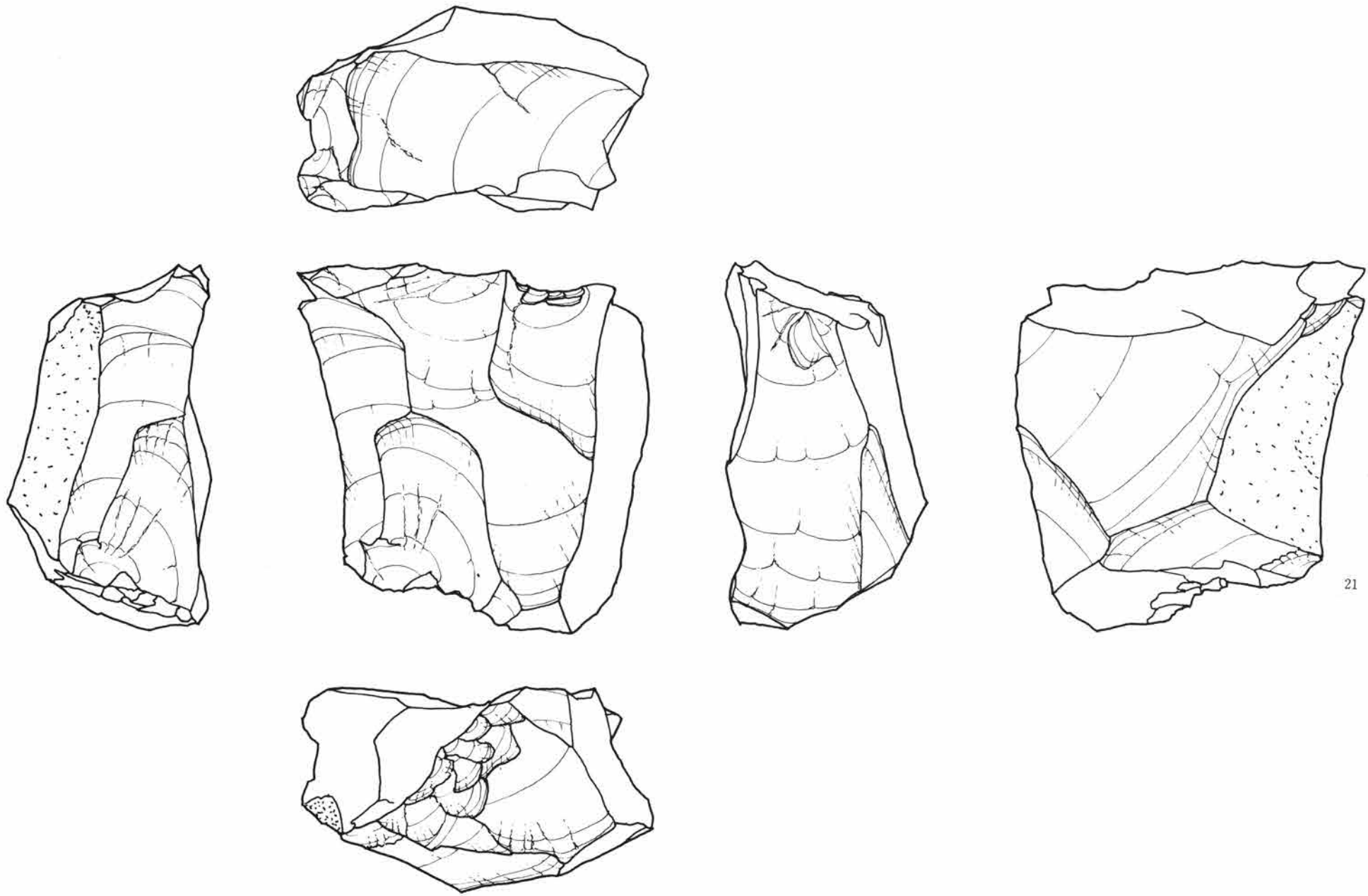
第106図 使用痕を有する剥片



20



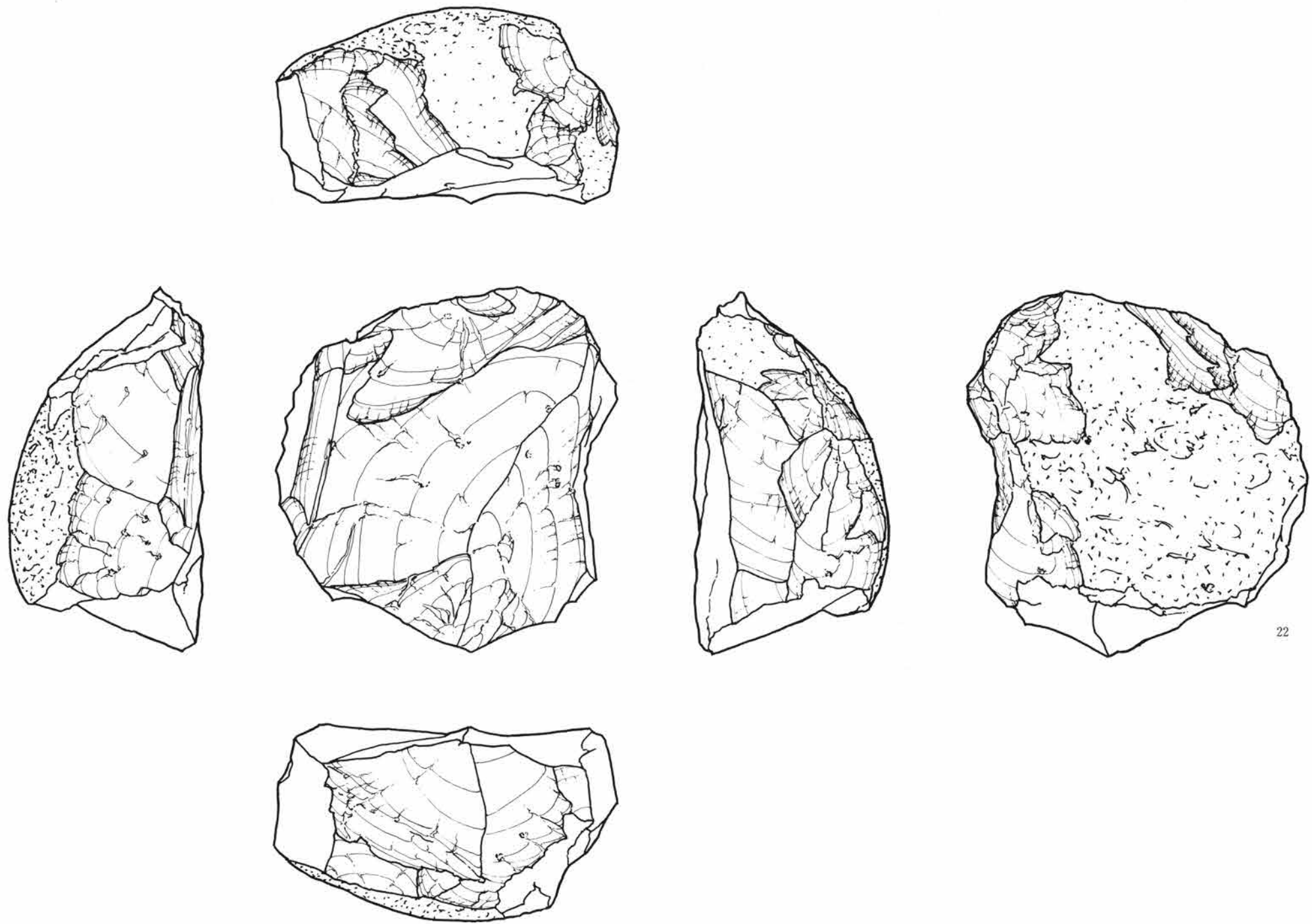
第107图 石 核



21

0 5 cm

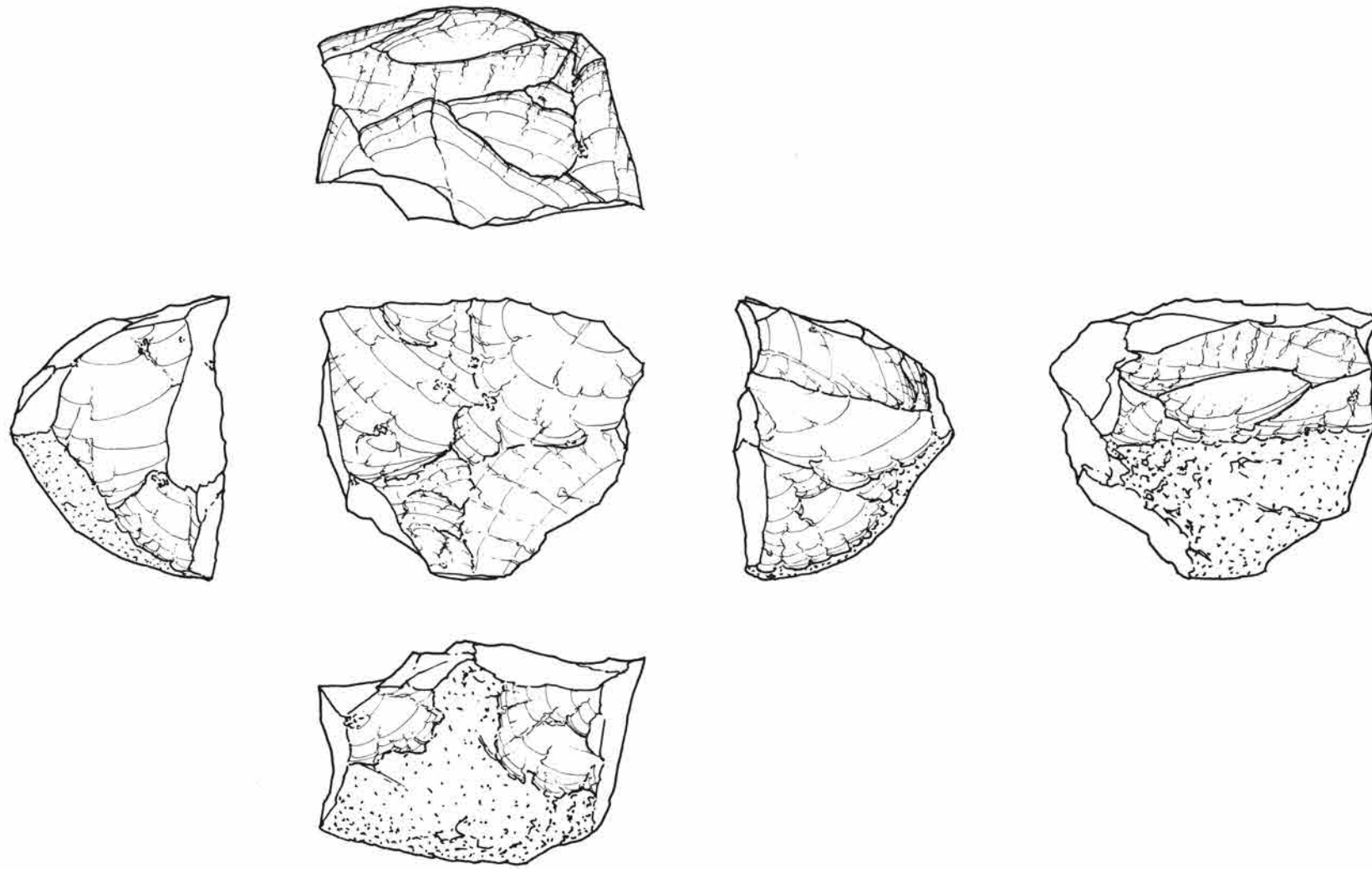
第108图 石 核



22



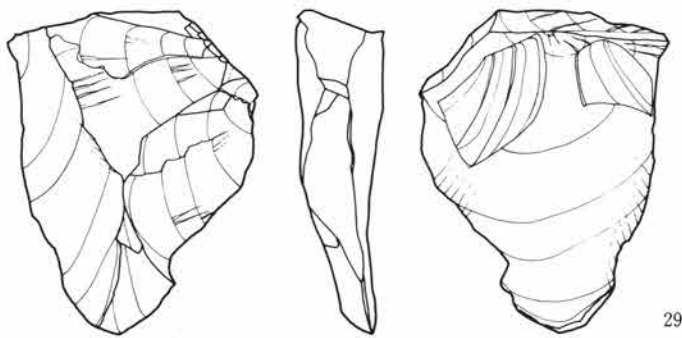
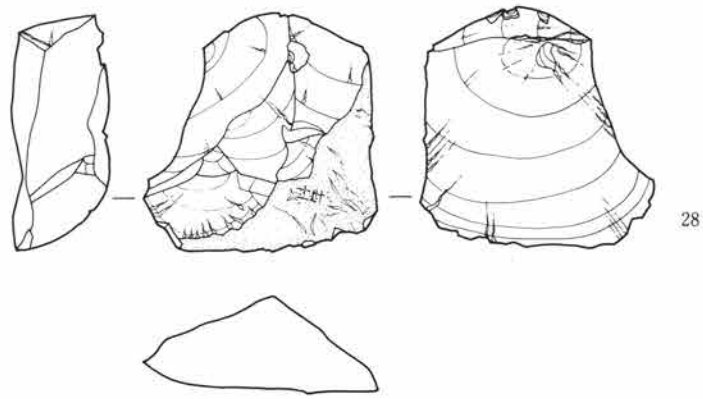
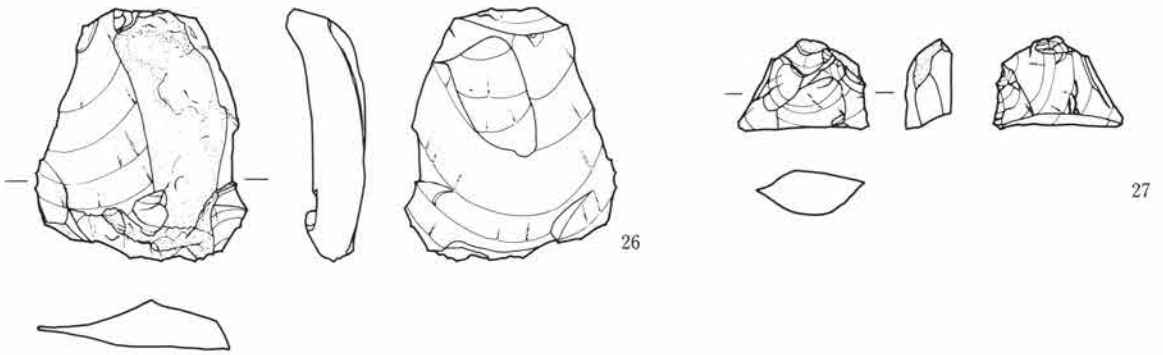
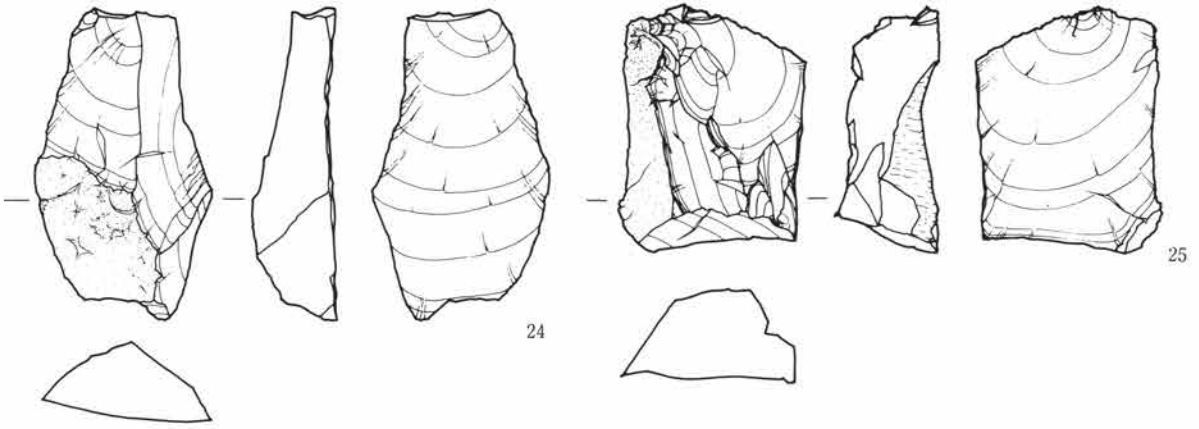
第109图 石 核



23

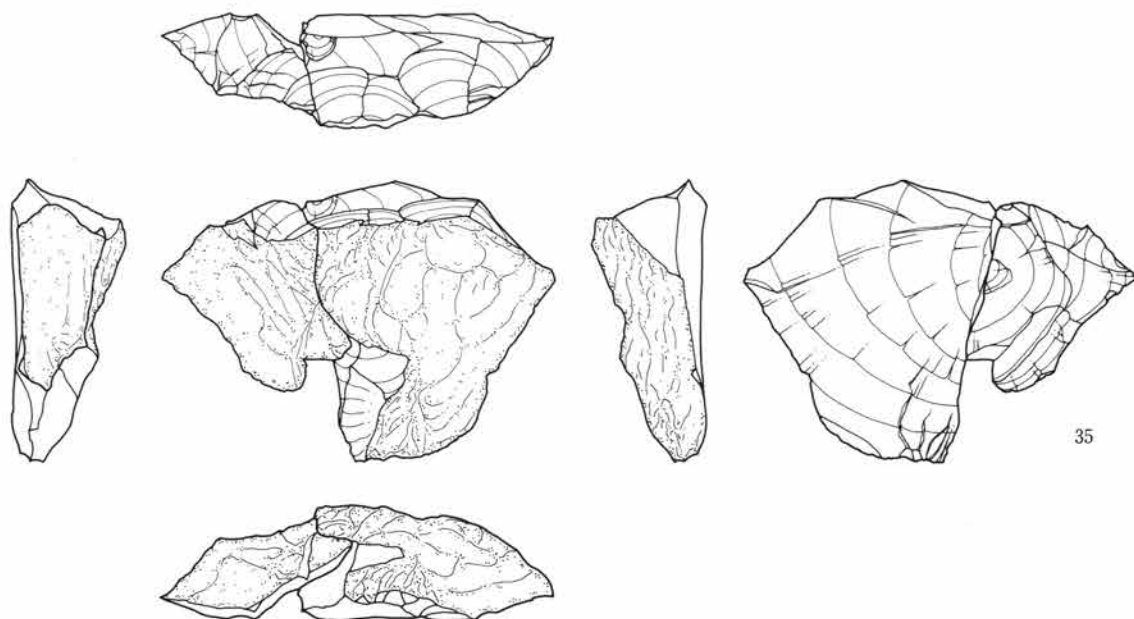
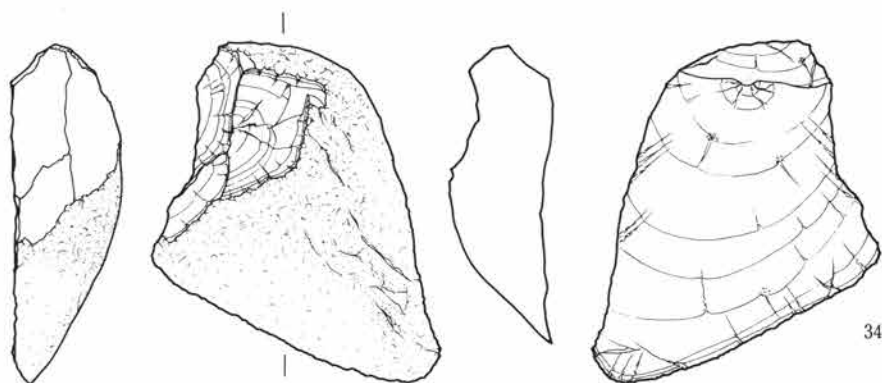
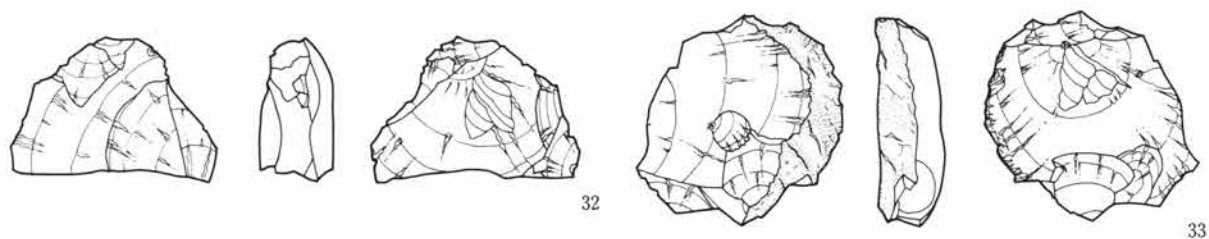
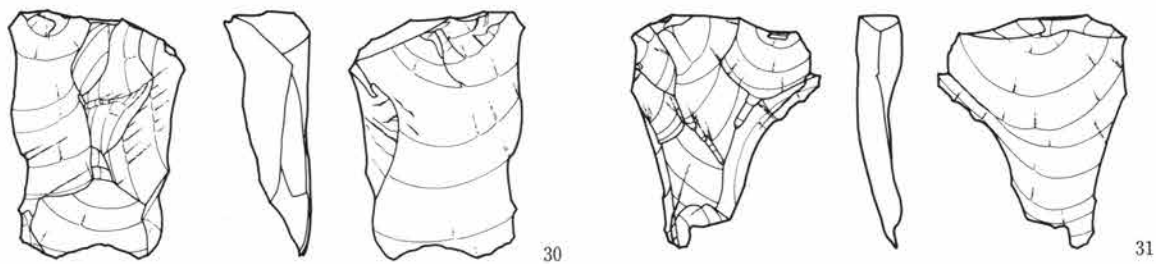


第110图 石 核



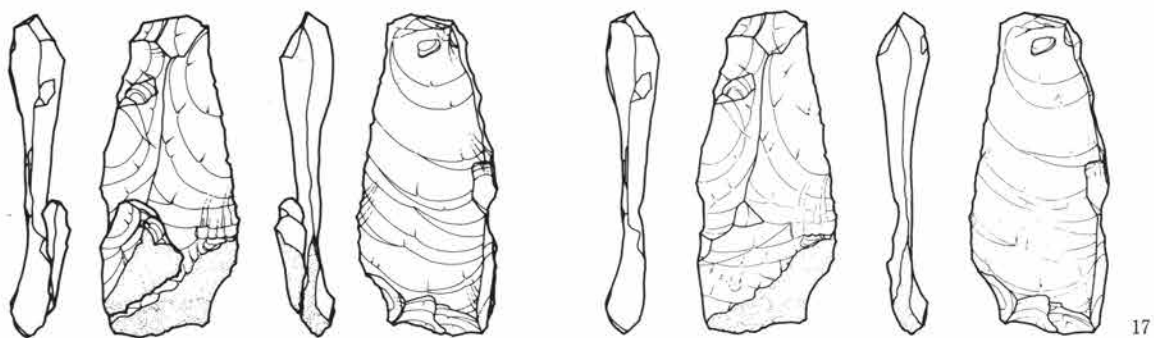
第111図 剥片

0 10cm

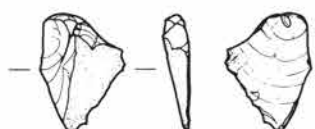


第112図 剥片

0 10cm

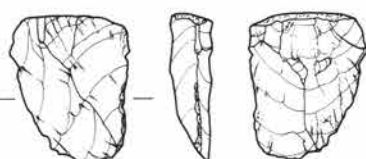


17

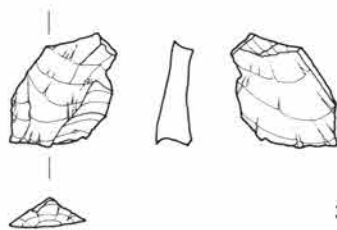
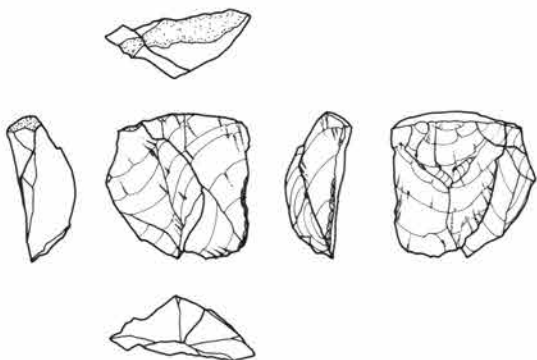


36

接合No. 1

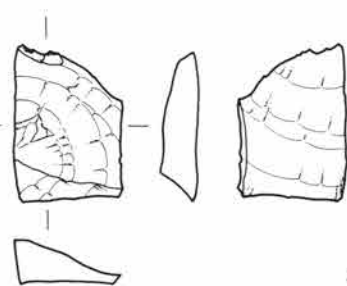
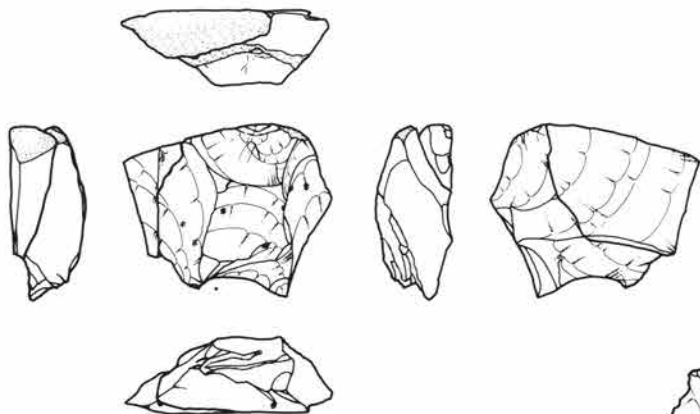


5



37

接合No. 2



38

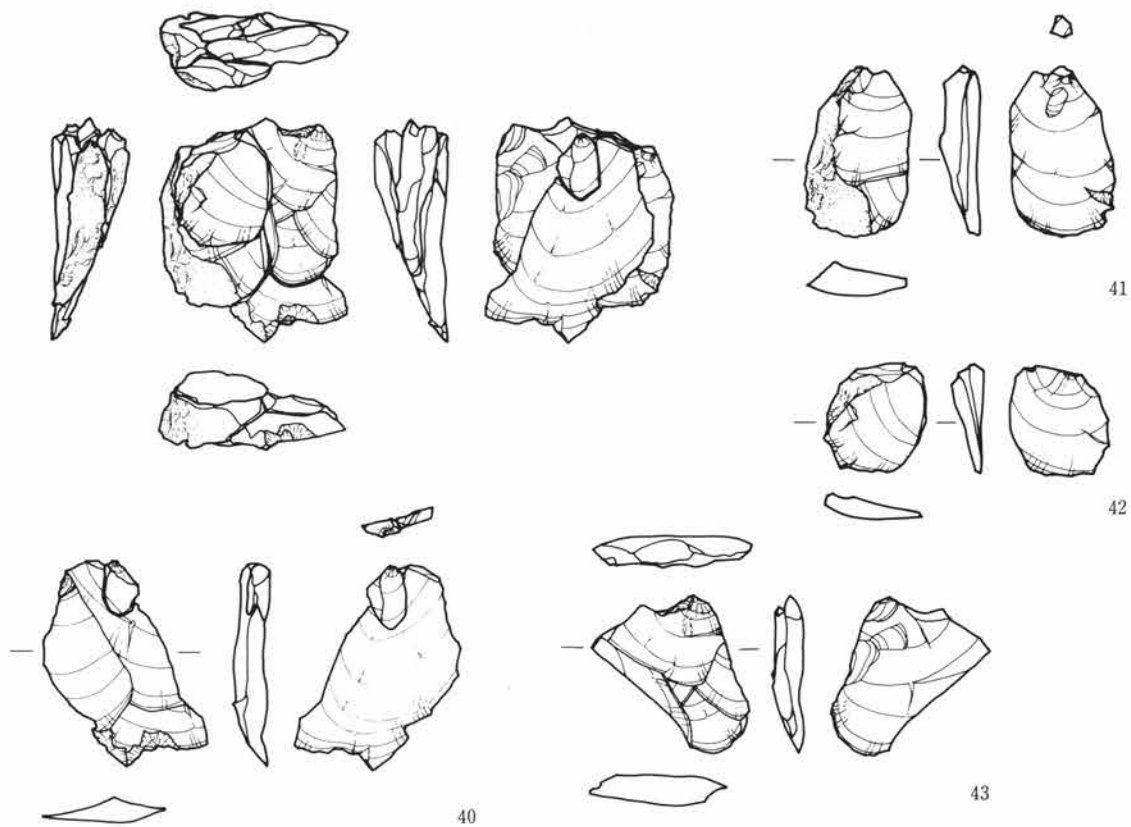


39

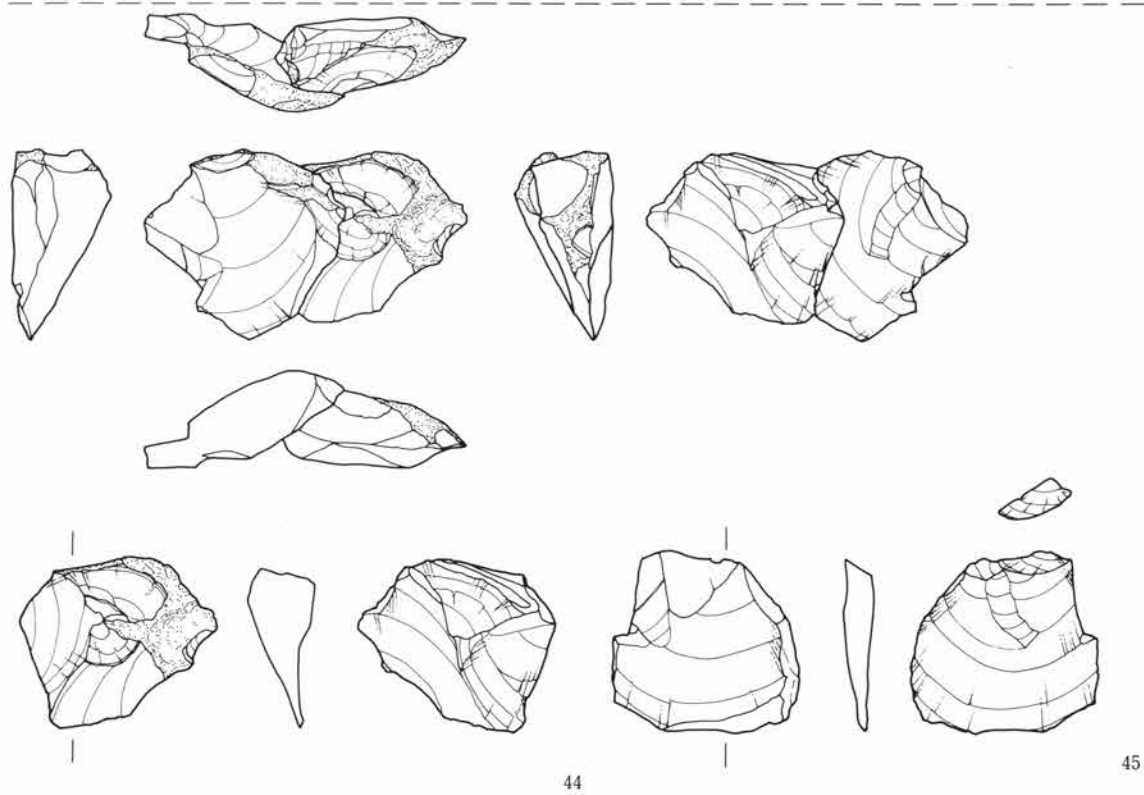
接合No. 3

第113図 接合資料





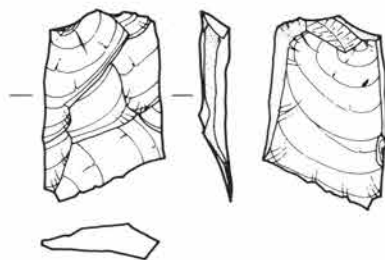
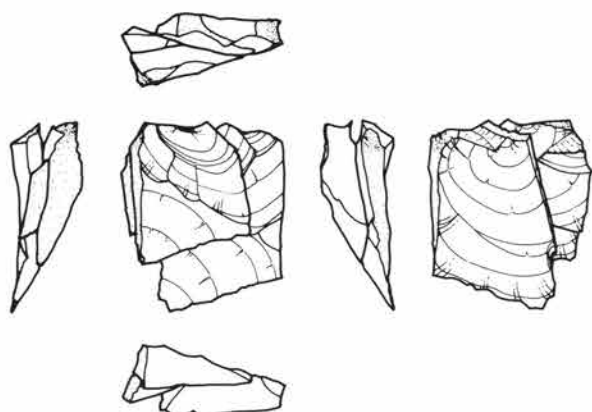
接合No.4



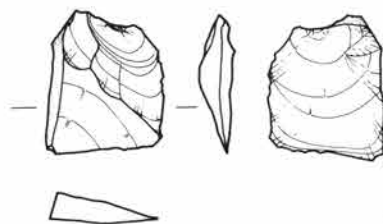
接合No.5

第114図 接合資料



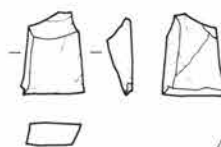
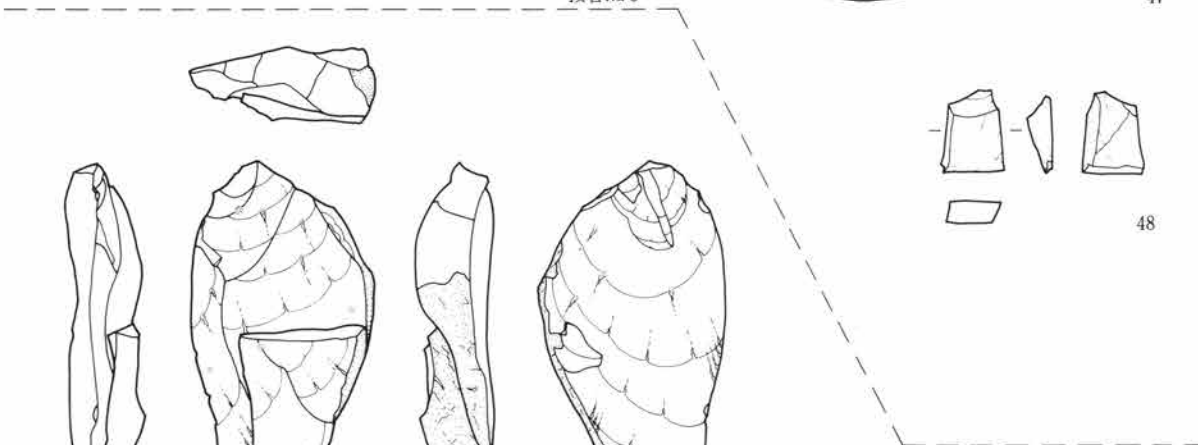


46

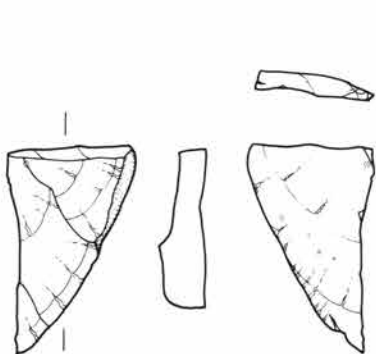


47

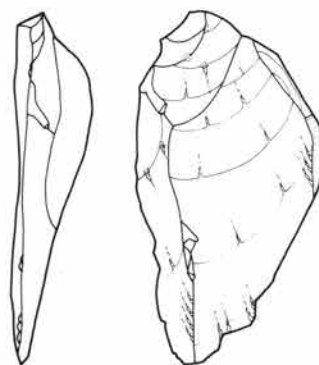
接合No.6



48



50

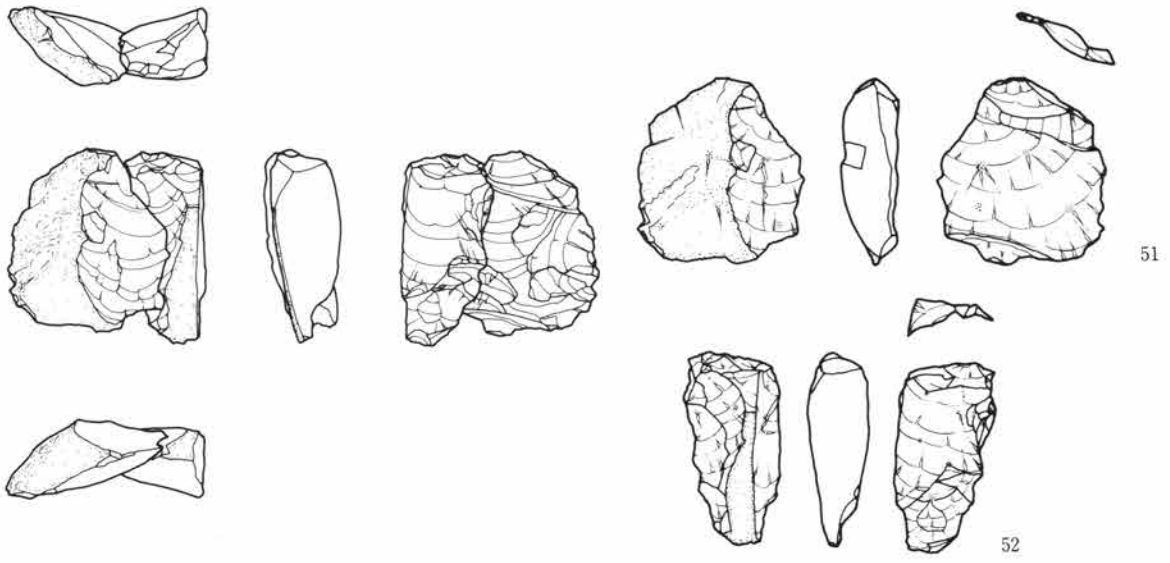


49

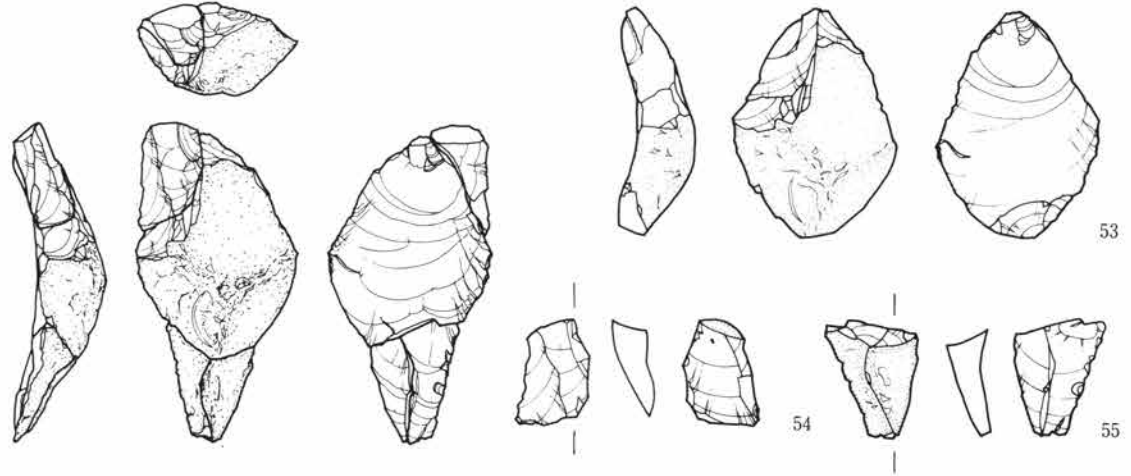
接合No.7

第115図 接合資料

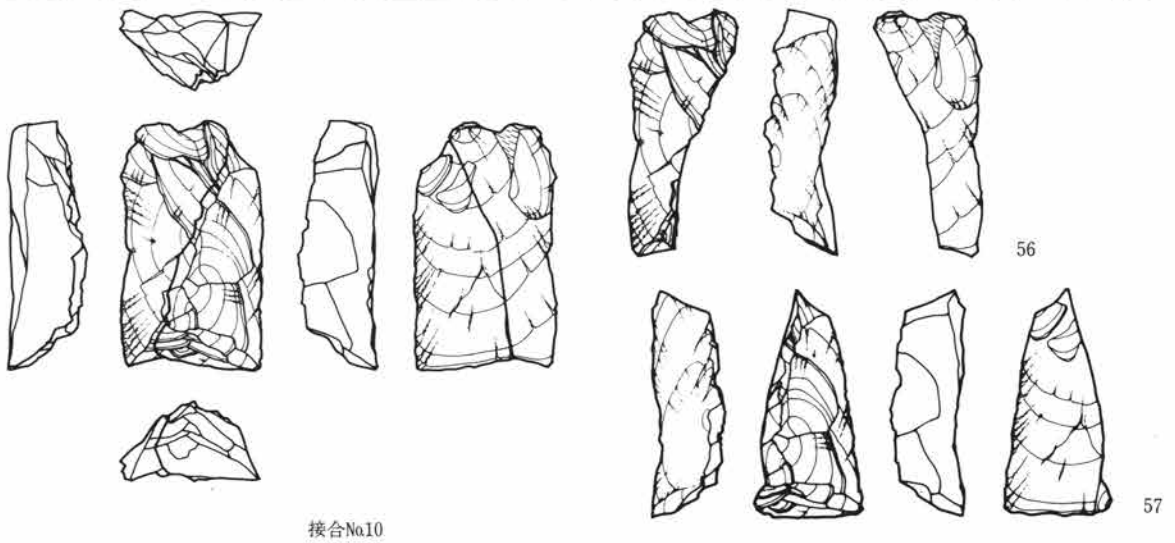
0 10cm



接合No.8



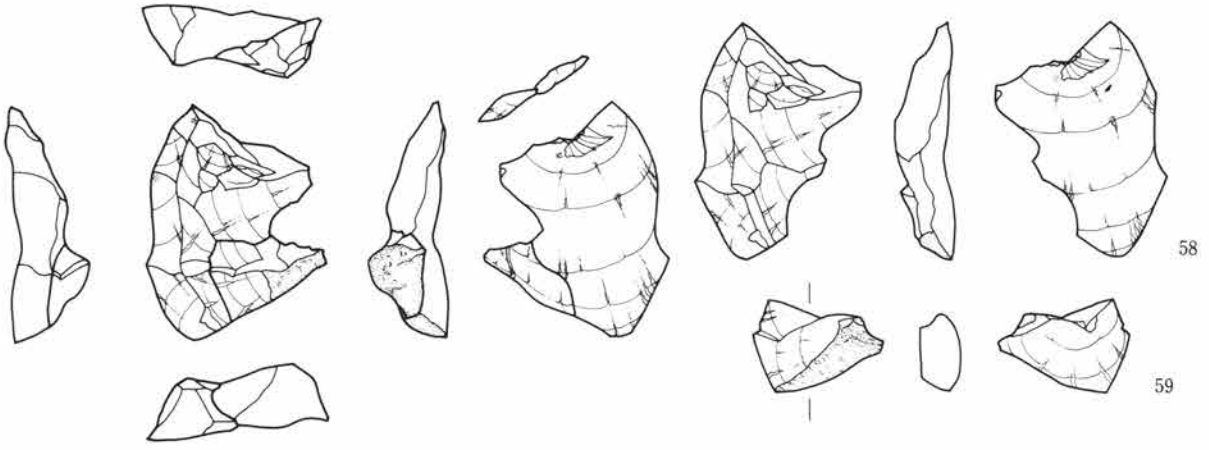
接合No.9



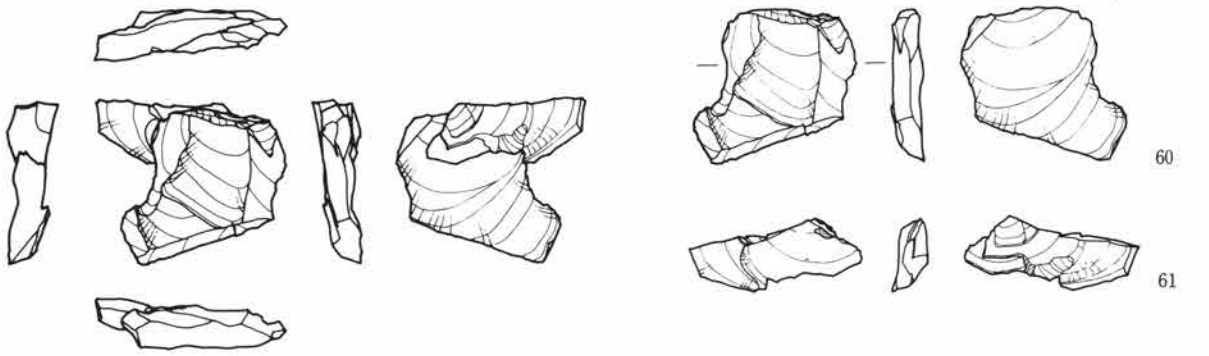
接合No.10

第116図 接合資料

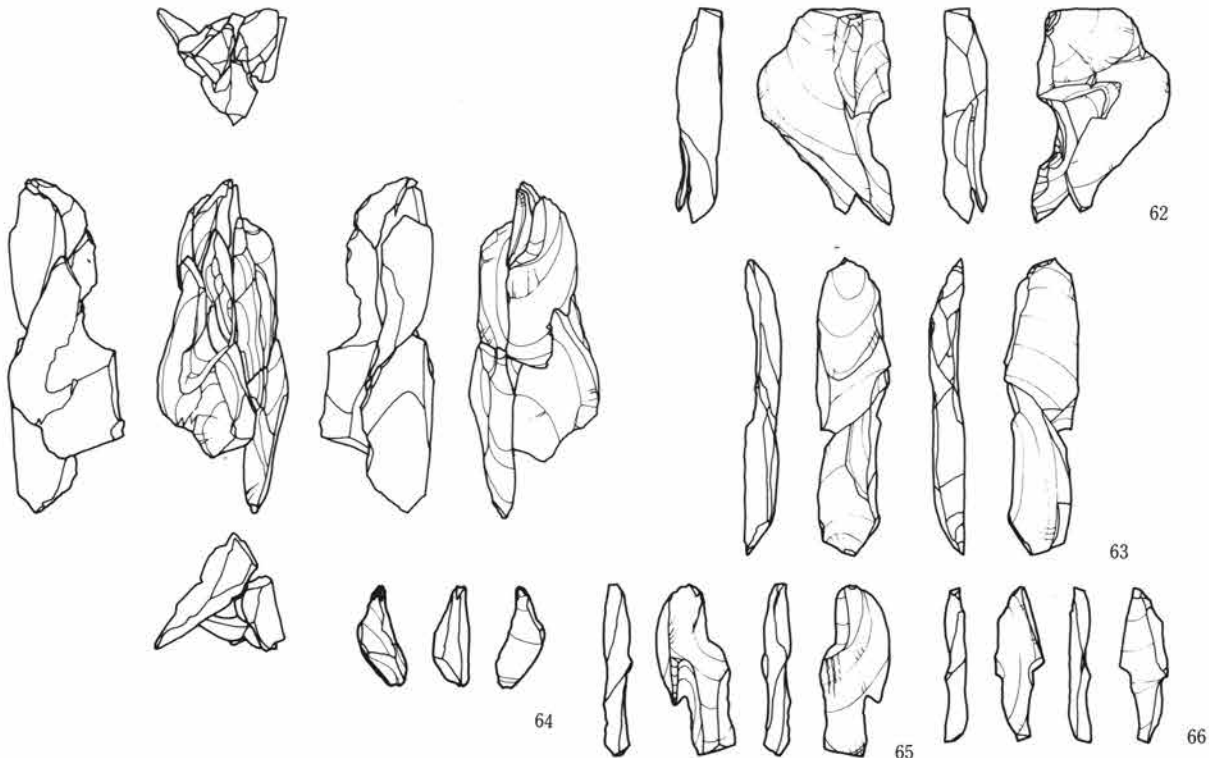
0 10cm



接合No.11



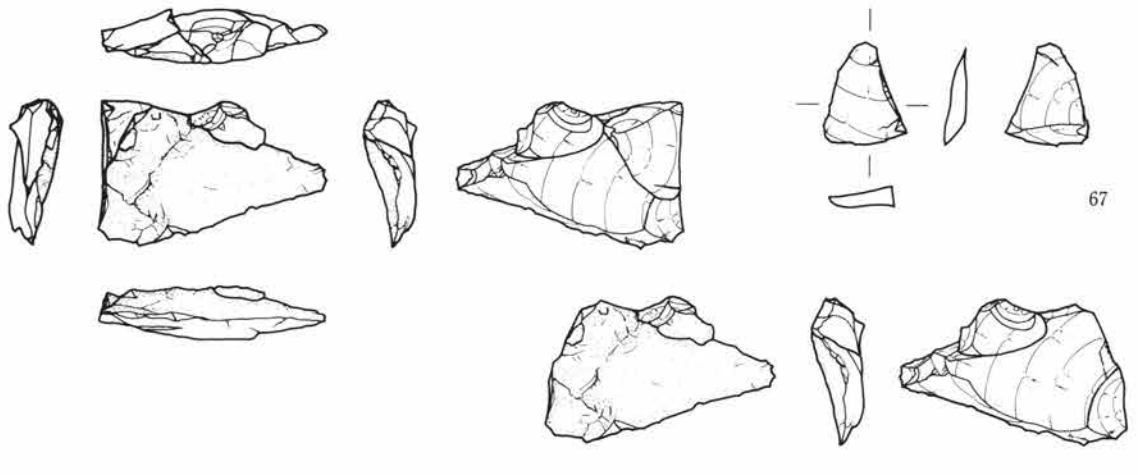
接合No.12



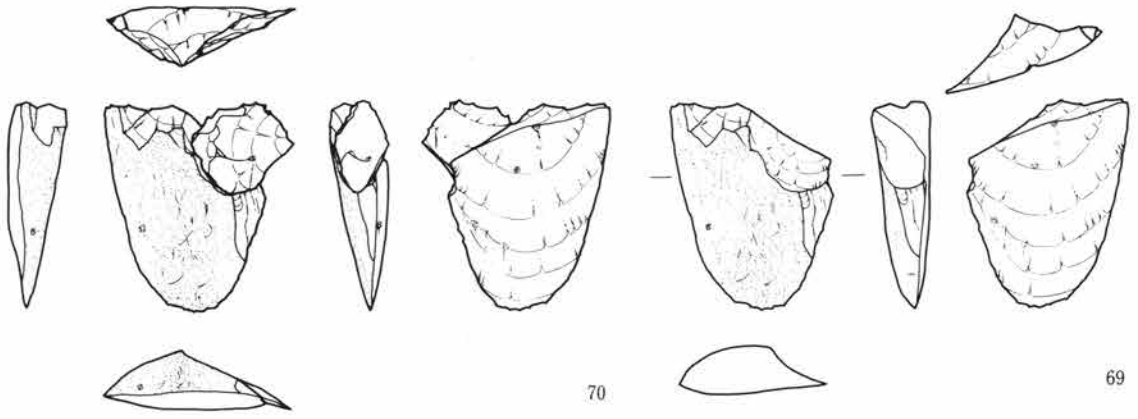
接合No.13

第117図 接合資料

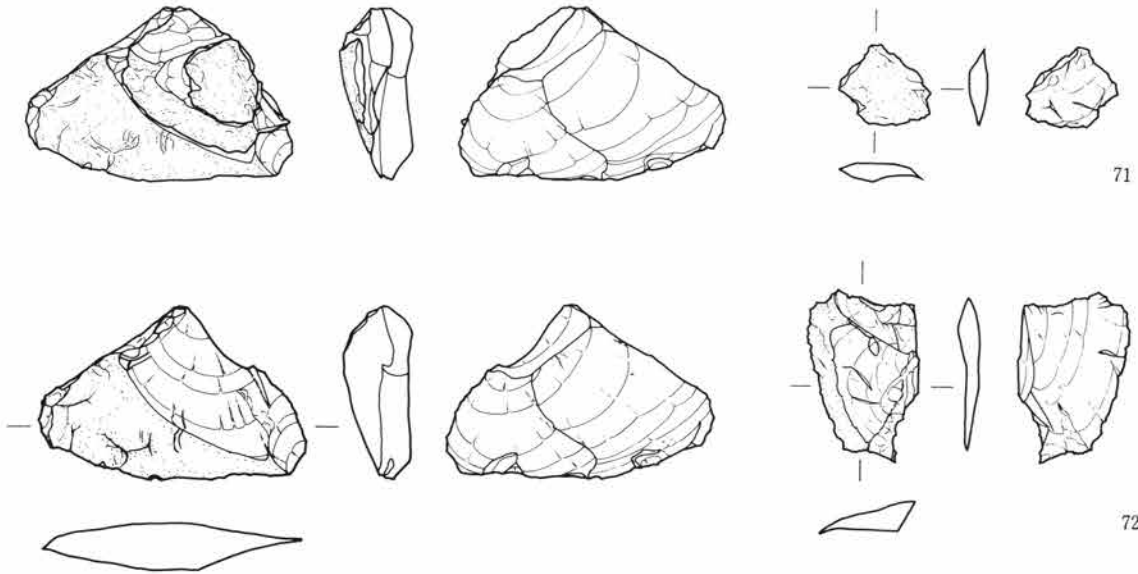




接合No.14



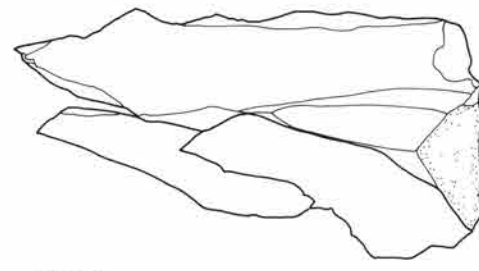
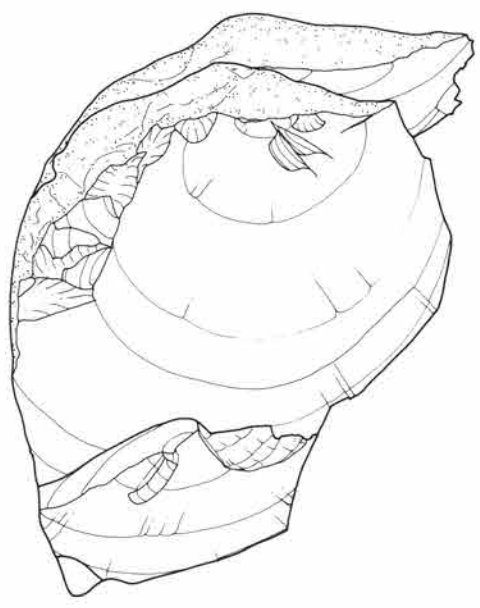
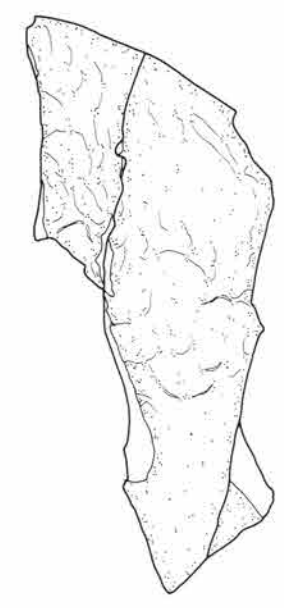
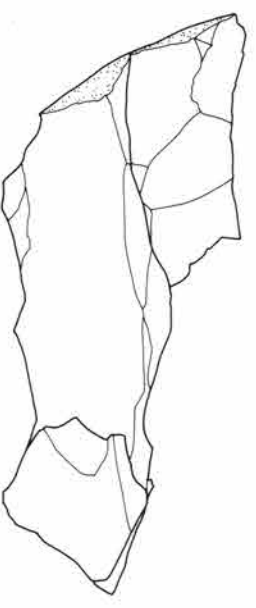
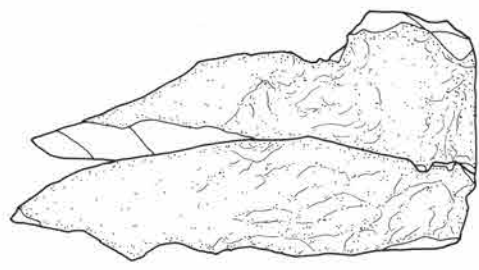
接合No.15



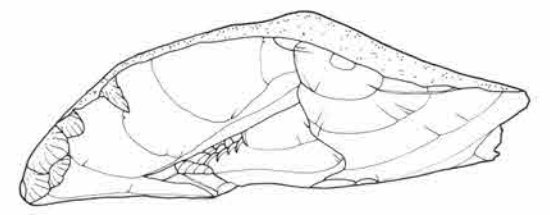
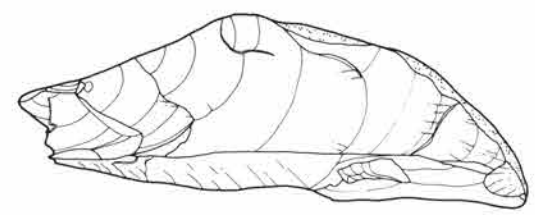
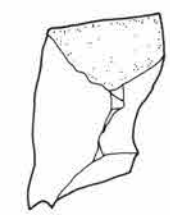
接合No.16

第118図 接合資料

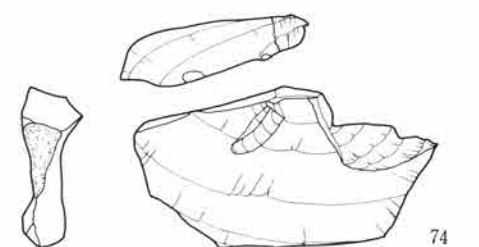
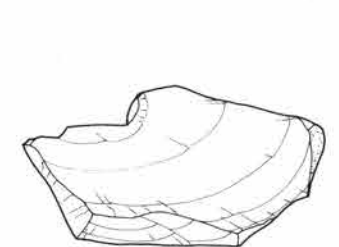
0 10cm



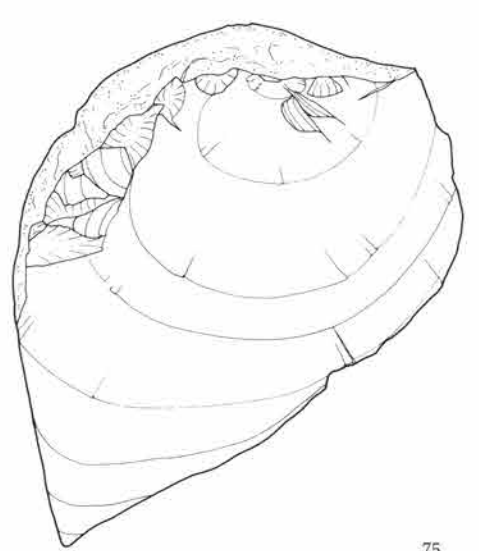
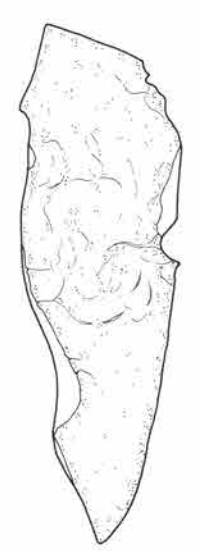
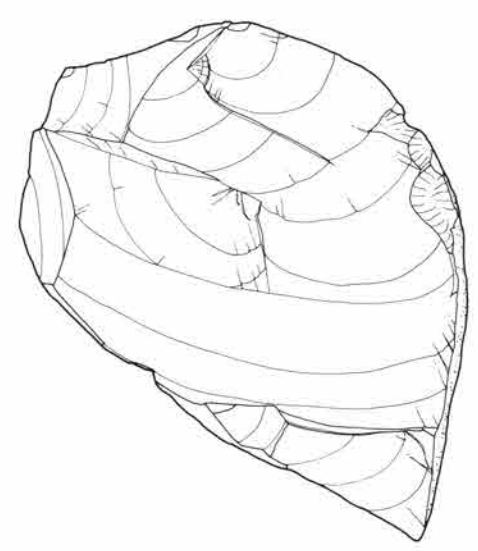
接合No17



73



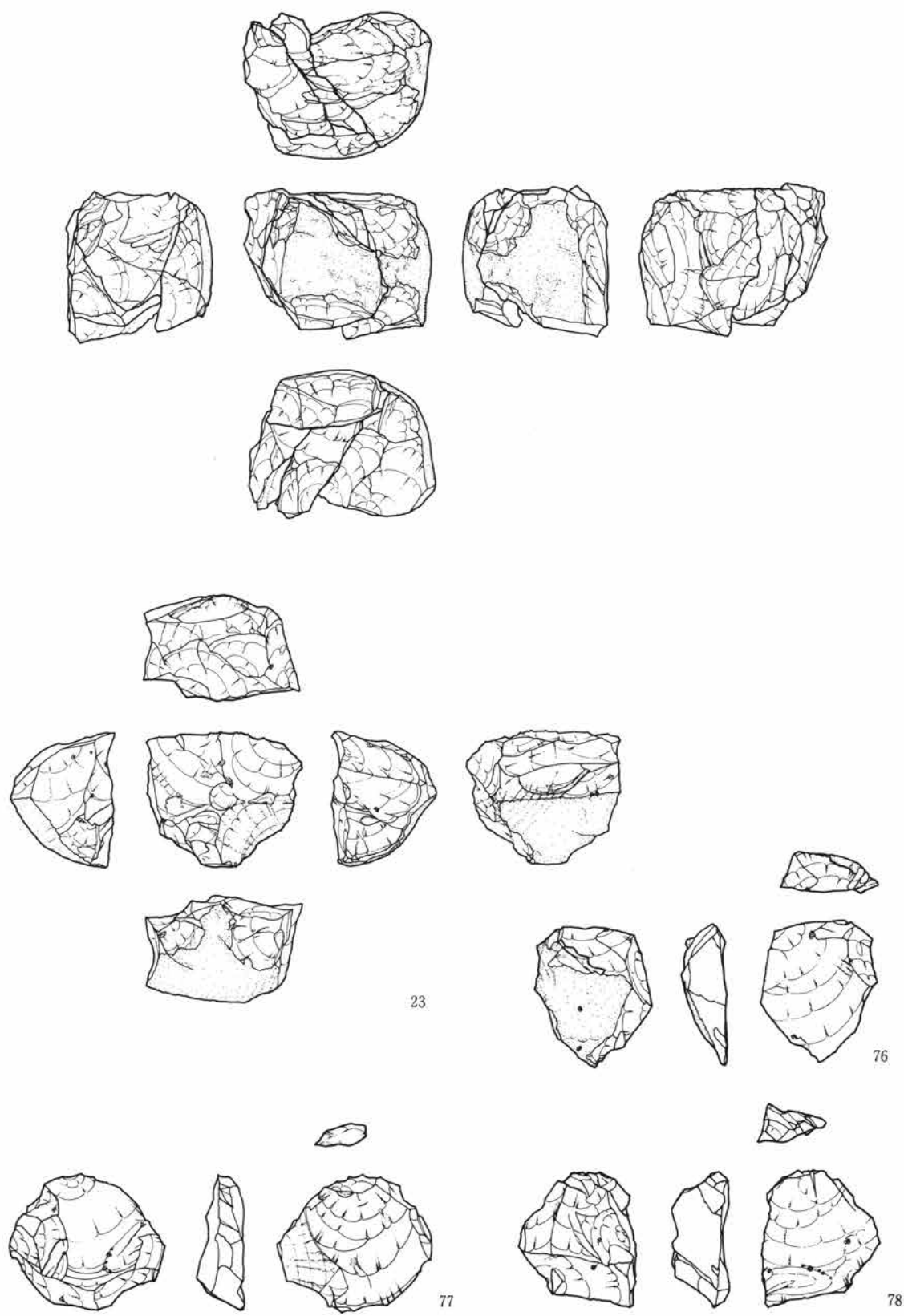
74



75

第119図 接合資料

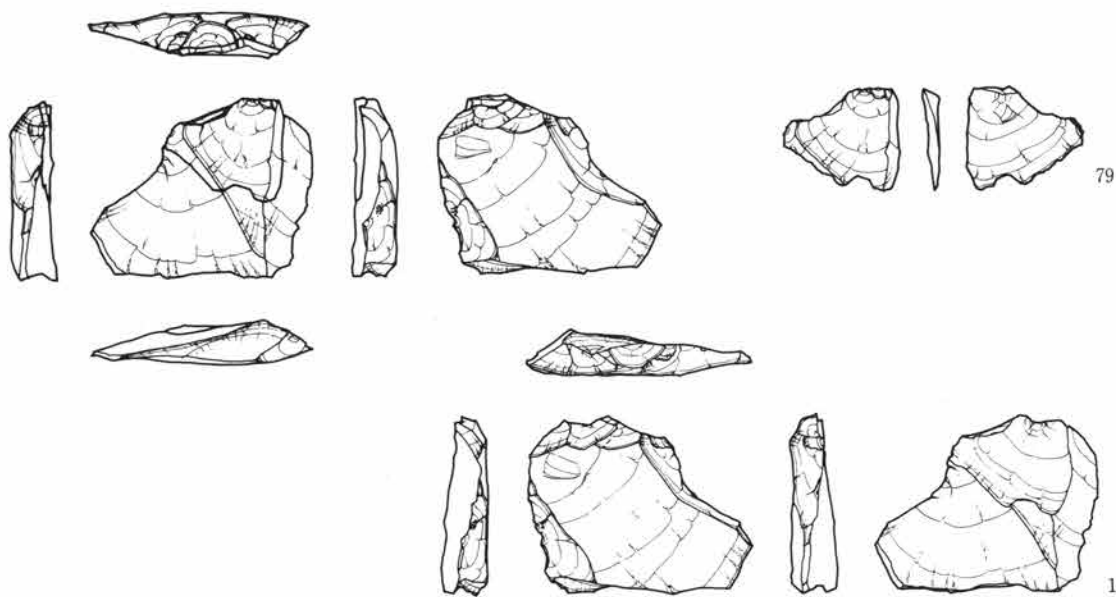
0 10cm



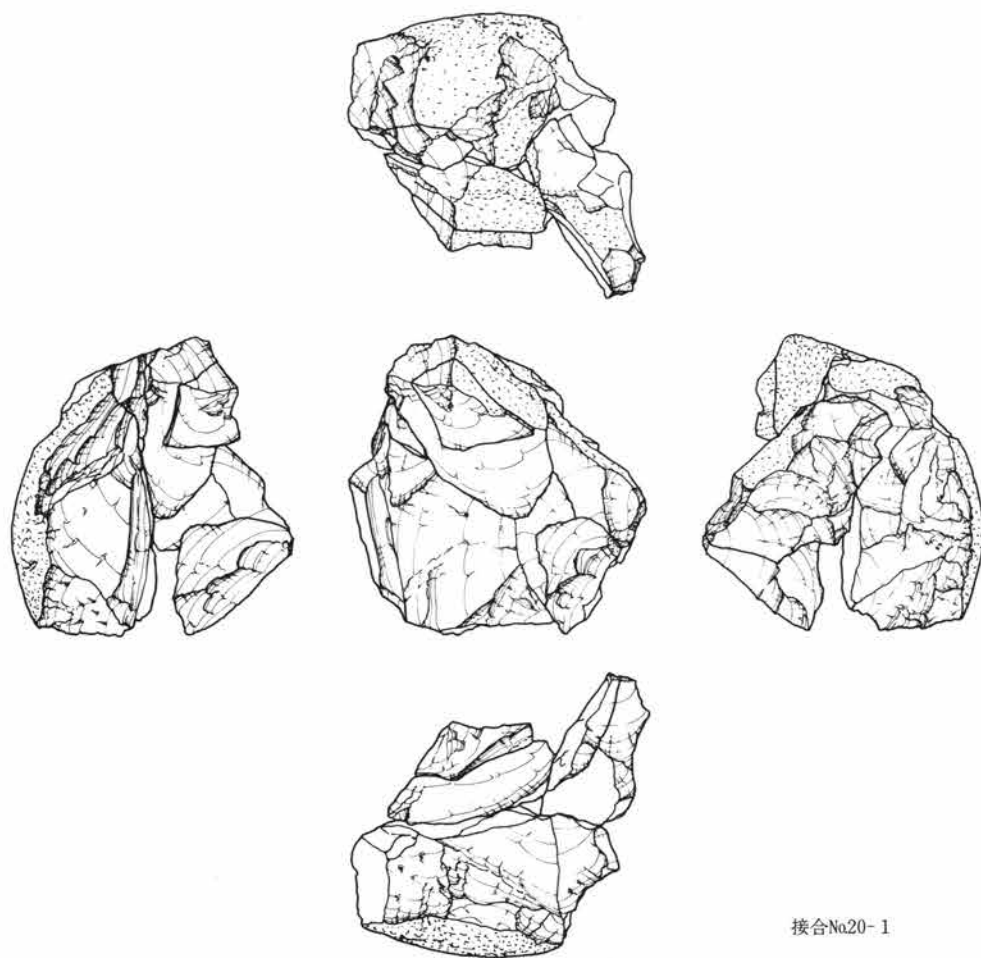
接合No18

第120図 接合資料

0 10cm



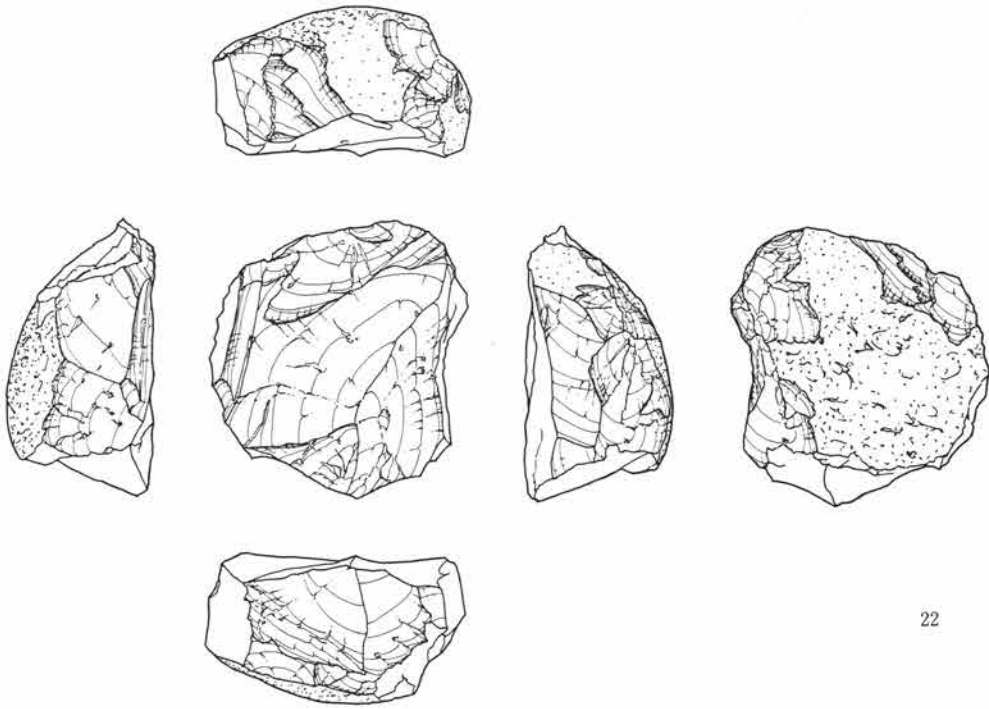
接合No19



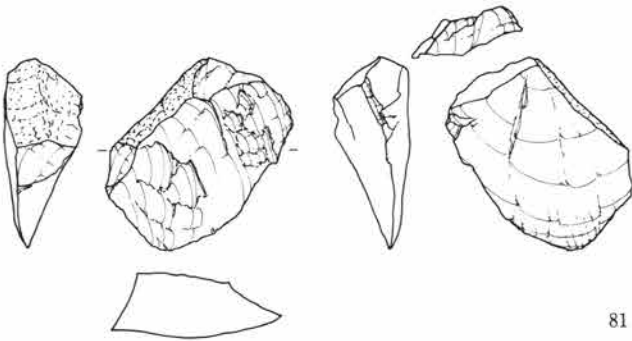
接合No20-1

第121図 接合資料

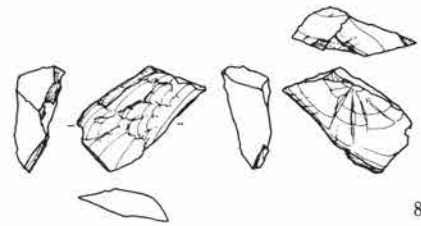




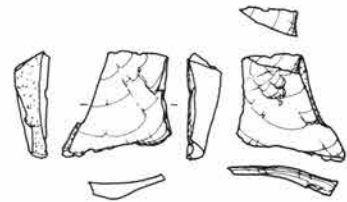
22



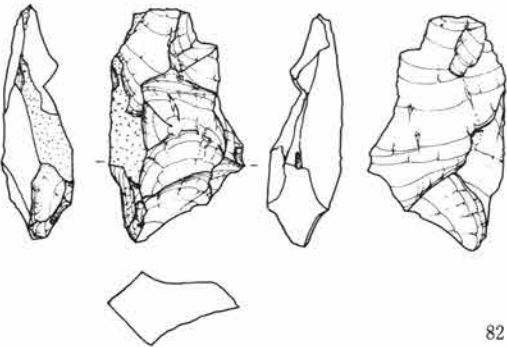
81



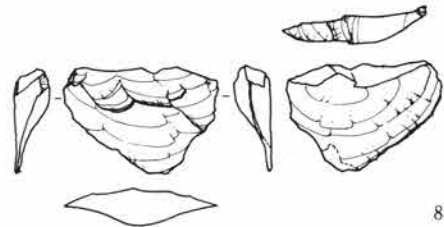
80



83



82

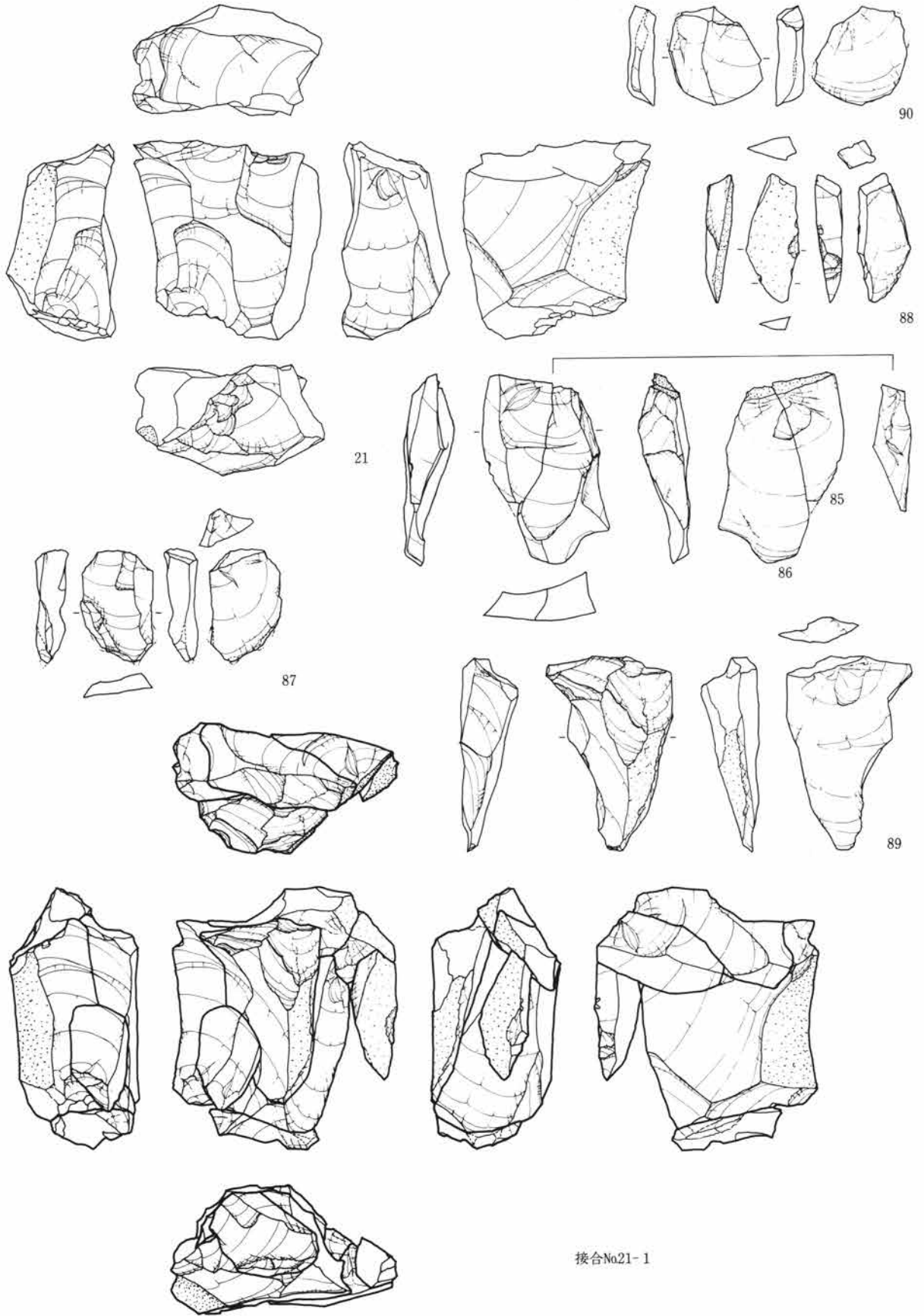


84

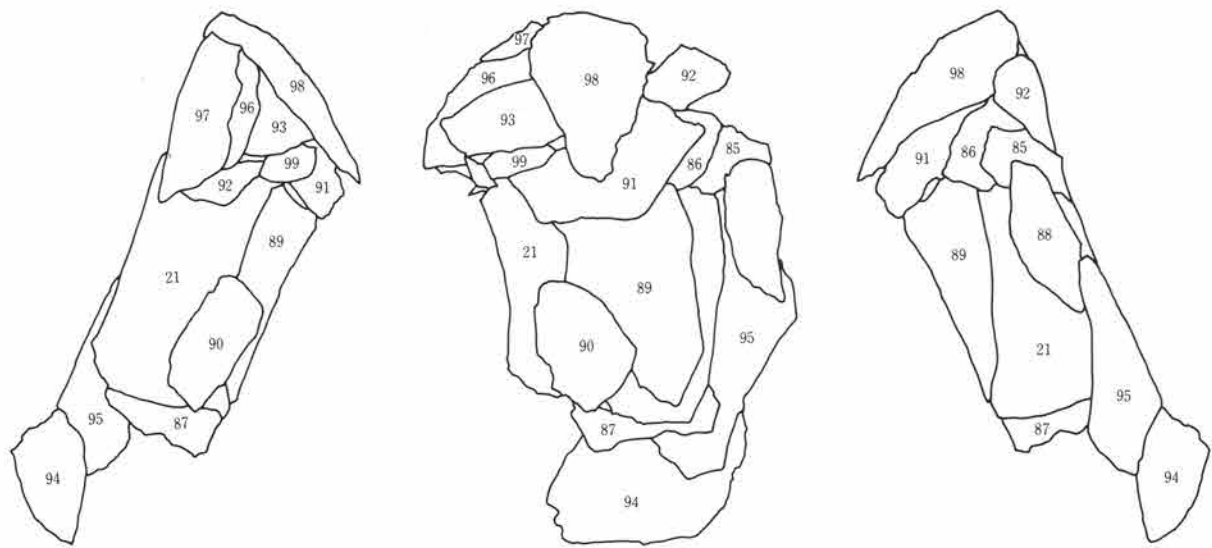
接合No.20-2

第122図 接合資料

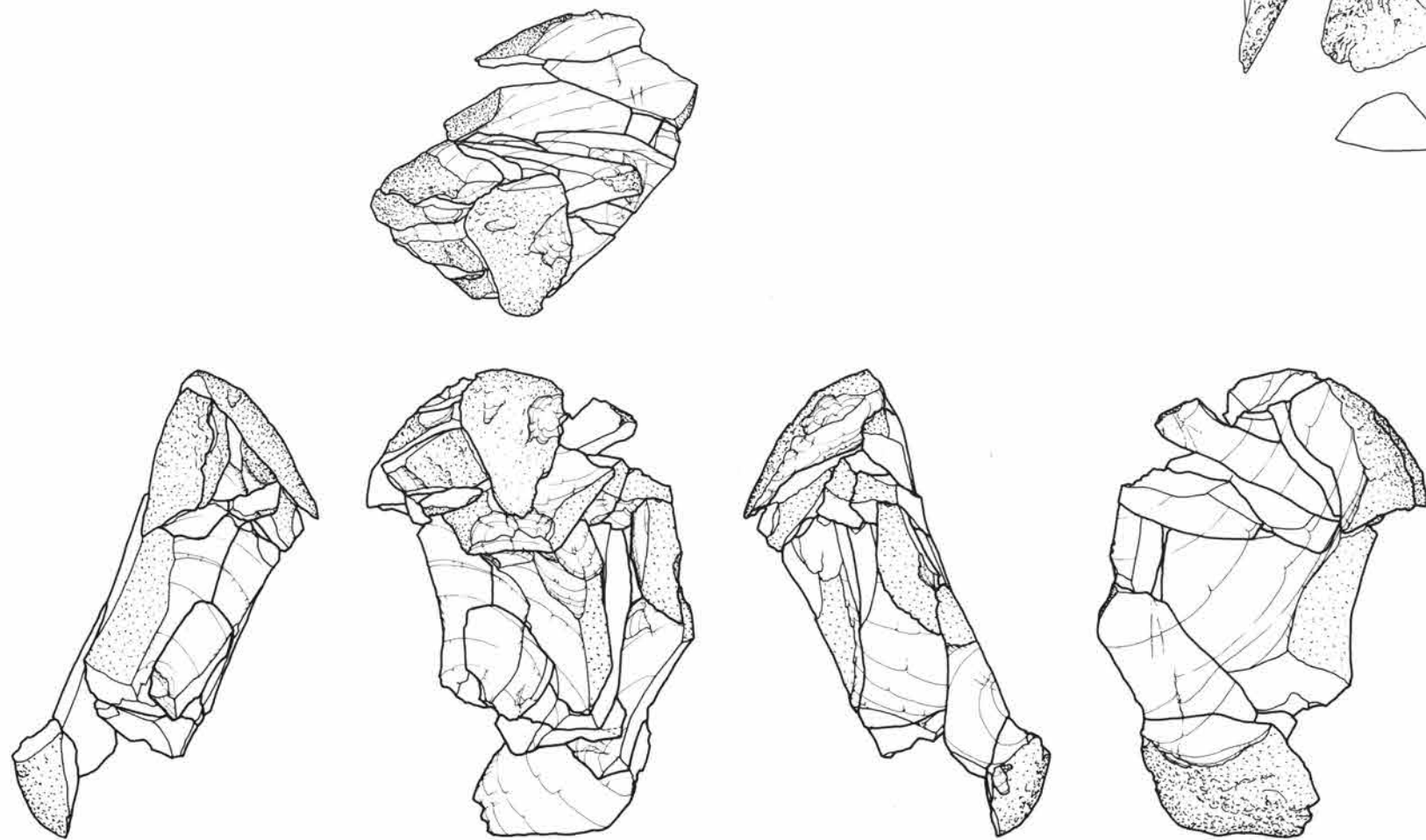
0 10cm



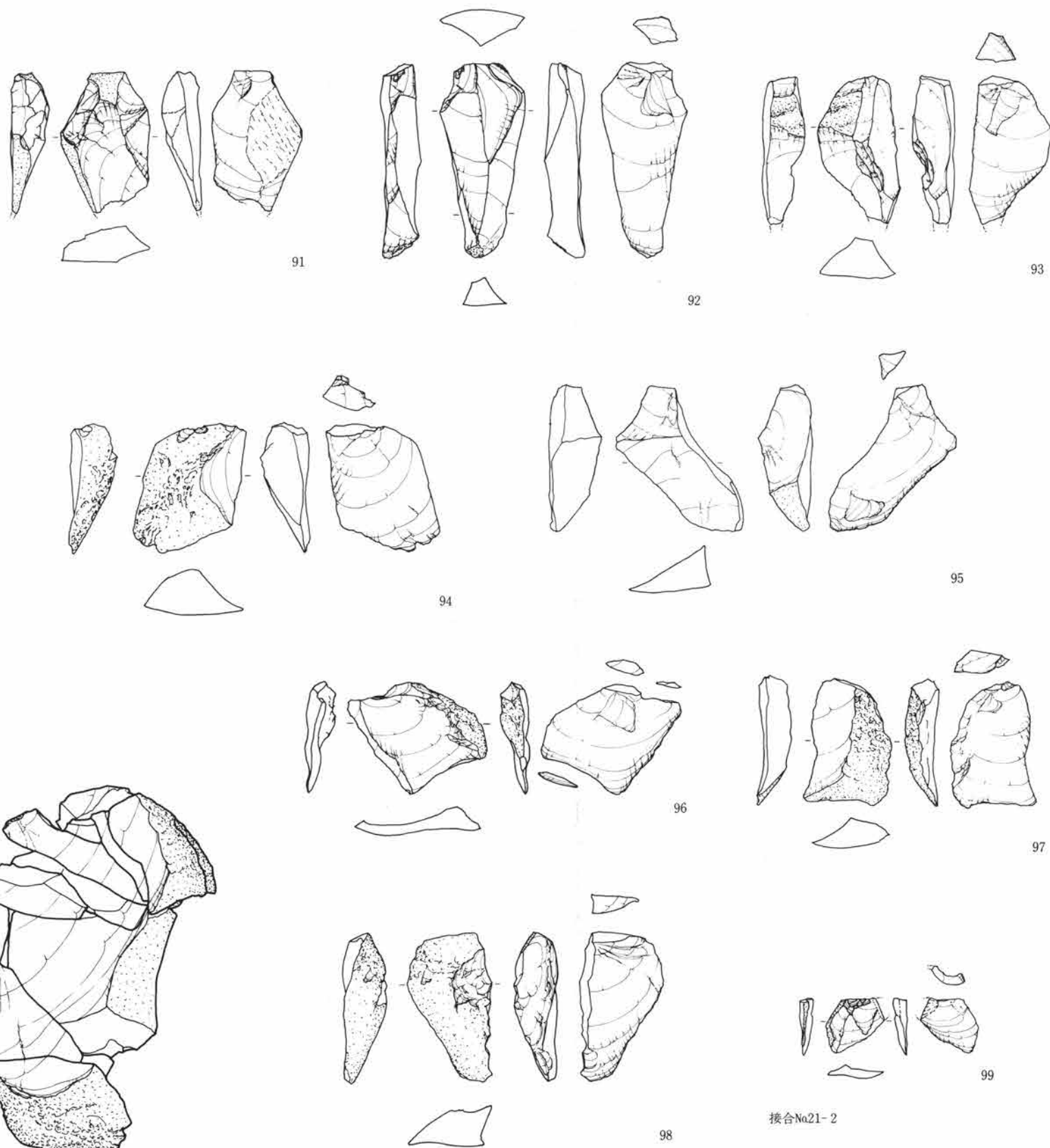
第123図 接合資料



接合模式図

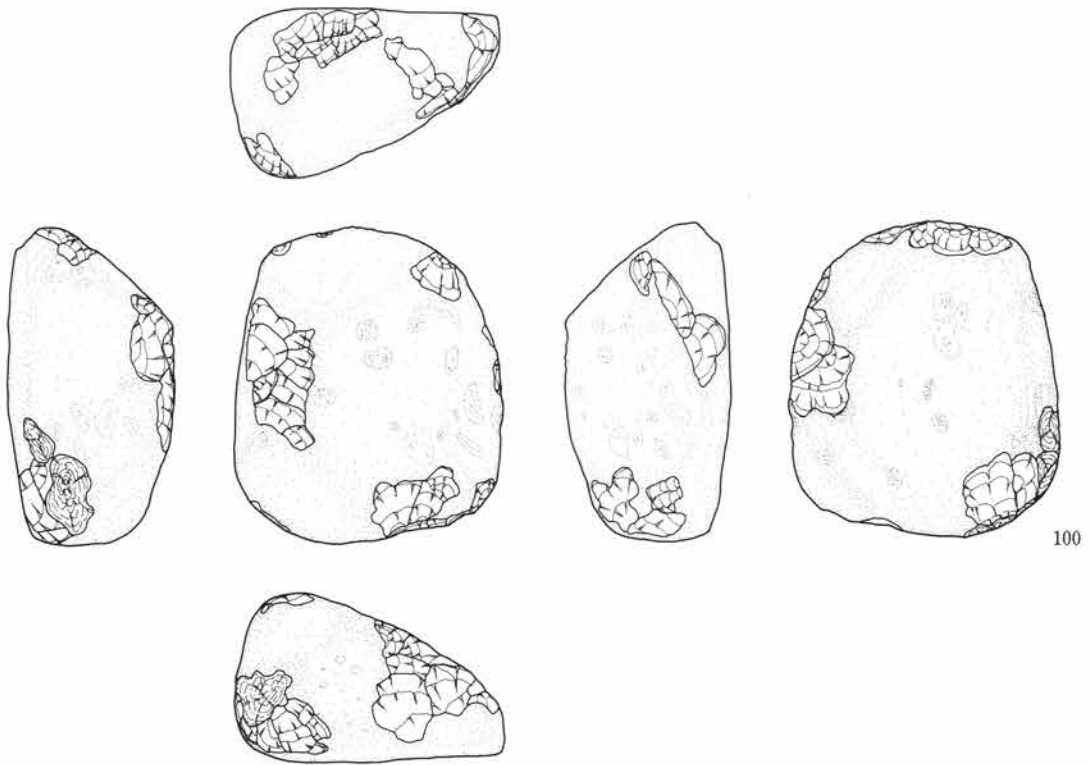


第124図 接合資料

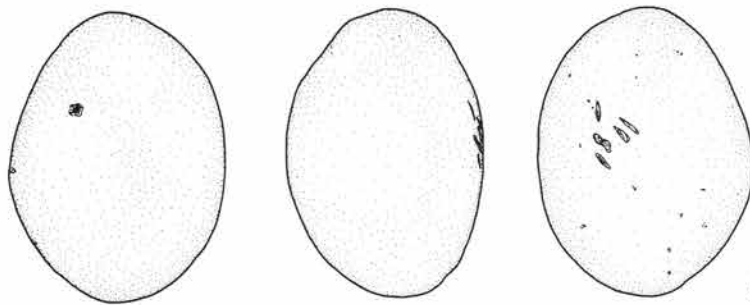


接合Na21-2

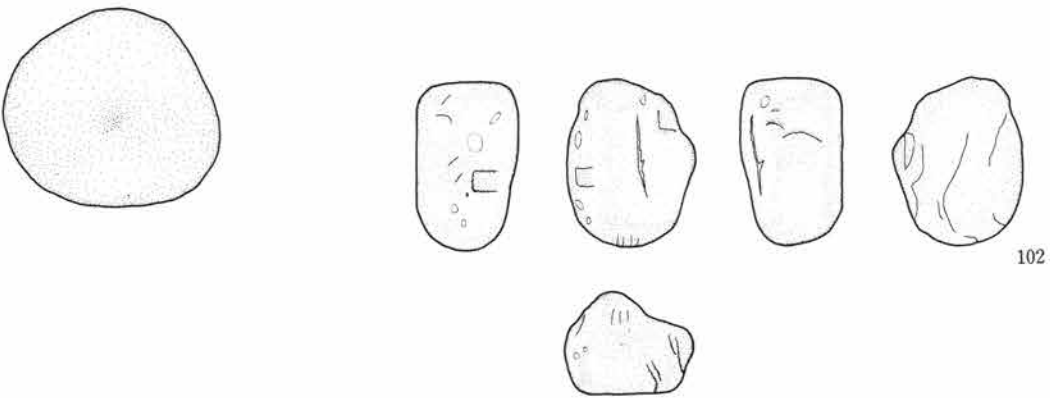
0 10cm



100



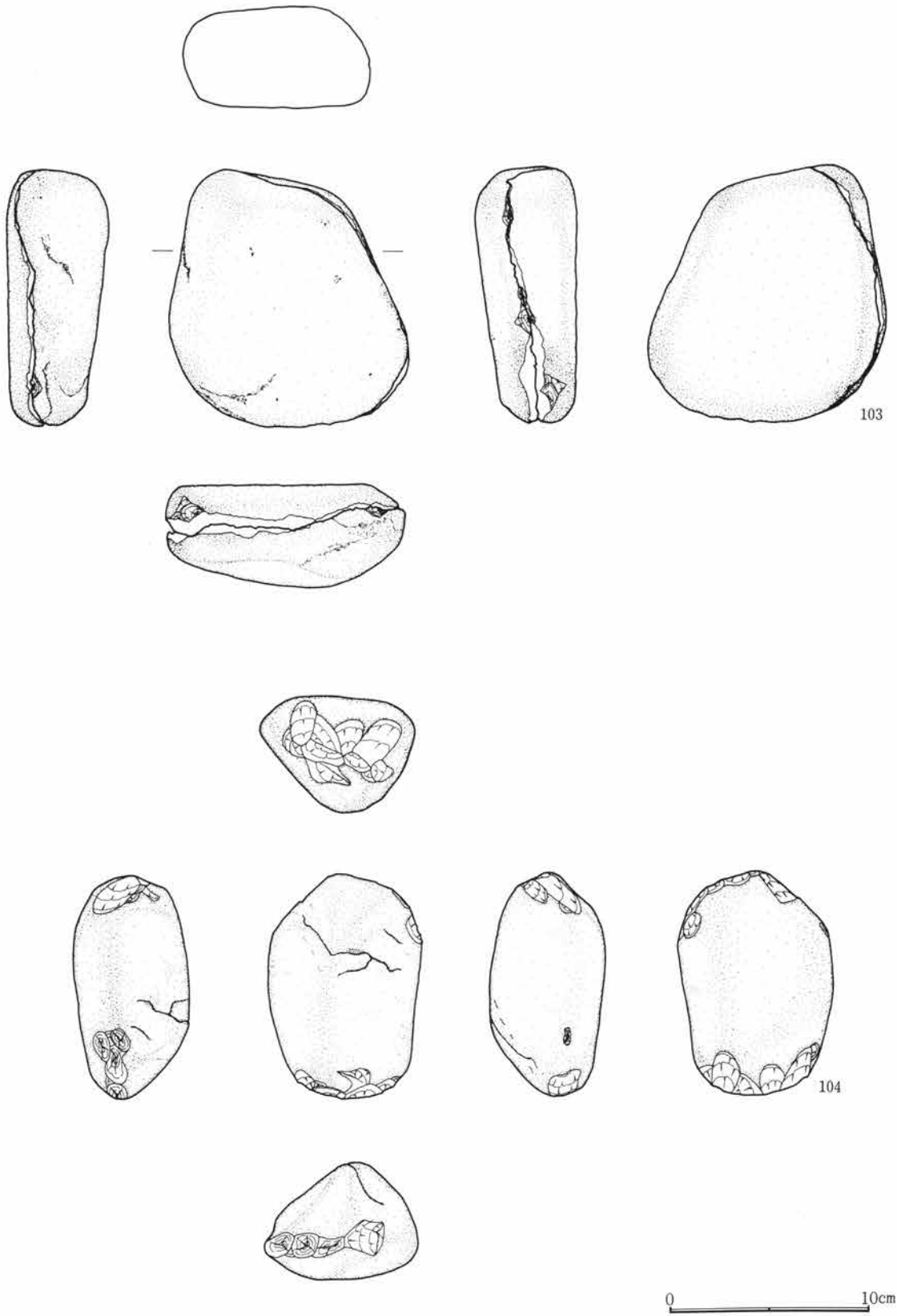
101



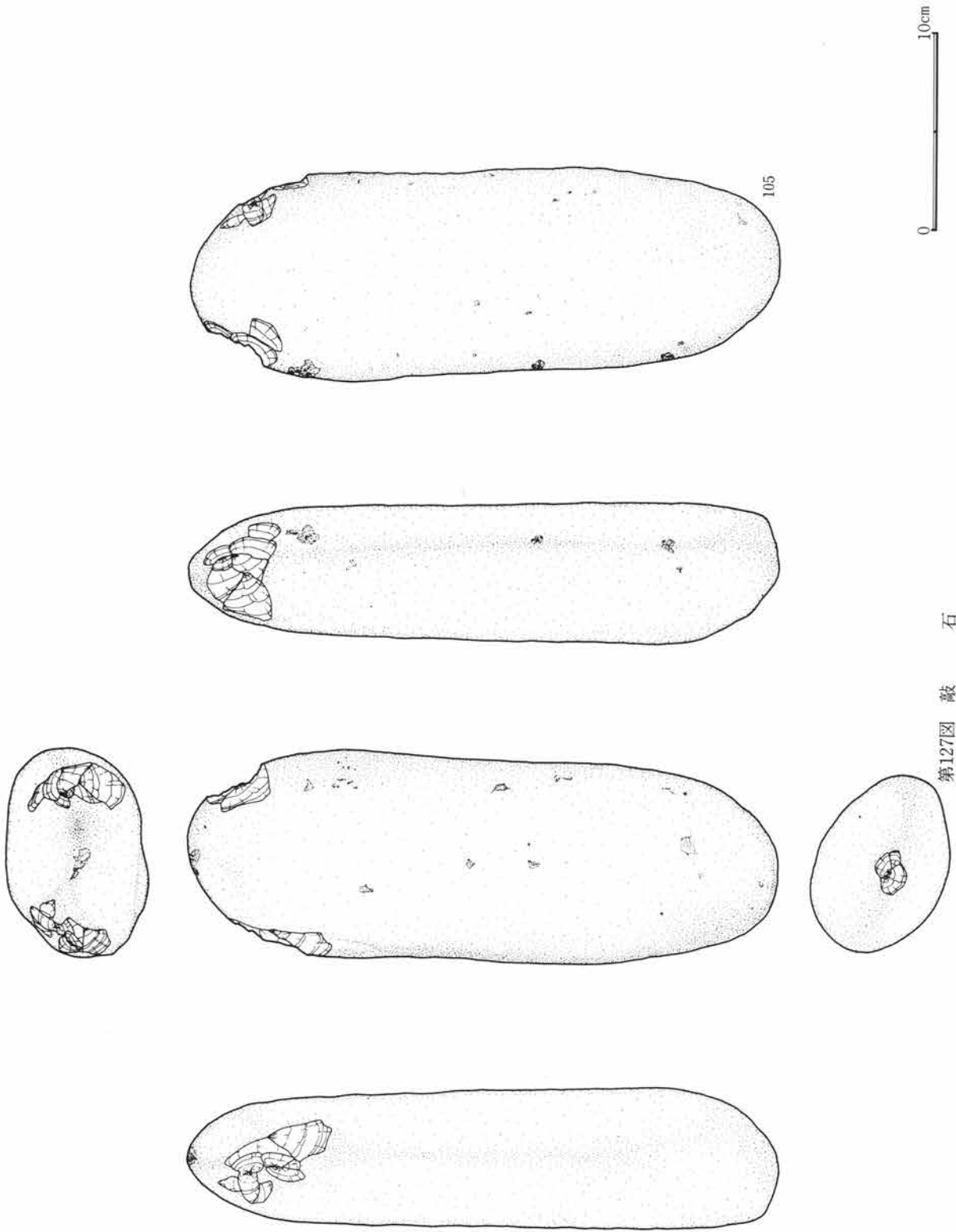
102



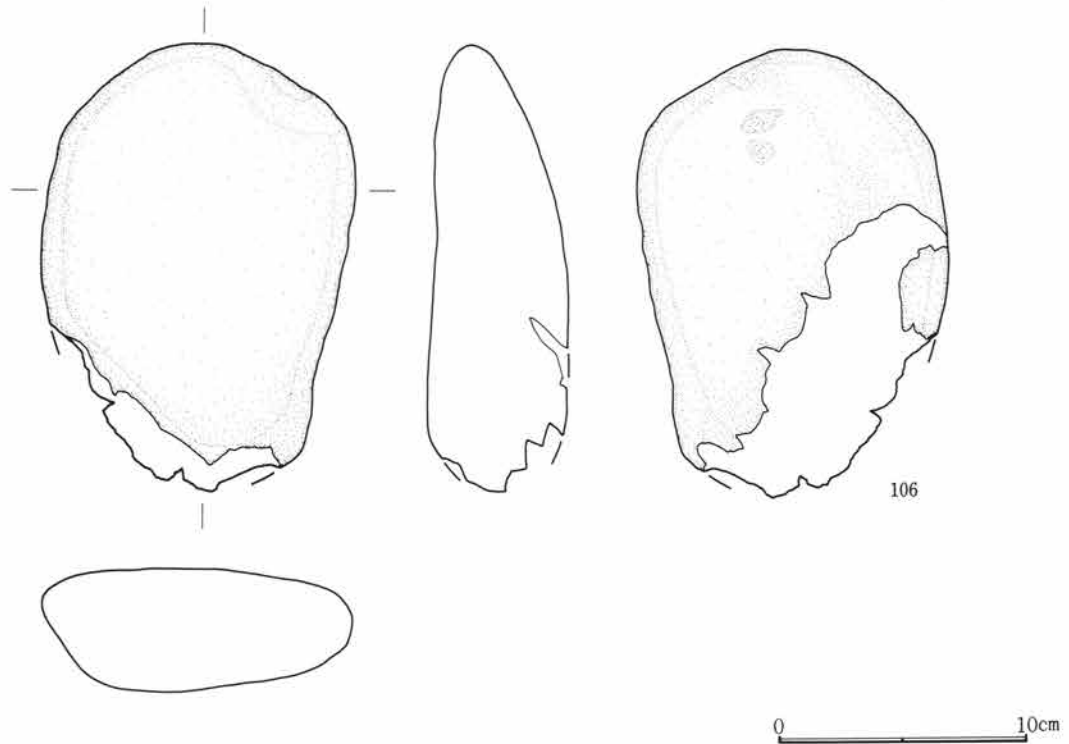
第125図 敲石・磨石



第126図 敲 石



第127図 敲石



第128図 敲 石

続性を持って剥片剥離されている。

接合例 No.6

一定方向からの打撃により剥離されているが、表面の観察から両設打面の石核による剥片剥離行程によるものであろう。

接合例 No.7

接合例No.1と同様、縦長剥片49と縦長剥片の下半部50との接合で、縦長剥片を一定の方向から連続的に剥離していることをうかがわせるものである。

接合例 No.8

表面の剥離面を含め、一定方向から剥離されているが、縦長の52と長幅比のほぼ等しい51という、剥片A類とB類の接合例である。

接合例 No.9

表面にはほぼ礫面を残す縦長剥片の分割あるいは、破損の例である。55は、礫面付近の節理による破損であり、54は、剥片剥離の際の破損あるいは、その後剥片の打面からの分割であると考えられる。

接合例 No.10

稜の調整痕をもつ断面三角形の縦長剥片の分割例である。人為的な分割でなく稜を調整する際の打撃痕が、剥片剥離の際に破損したとも考えられる。稜を調整したのちに、縦長剥片を剥離するという作業工程を想起させるものである。

接合例 No.11

折れた縦長剥片58と、剥片の末端59の接合例である。一定方向からの連続的な剥離作業を示すものではなく、打面移動しながら剥片剥離されていく過程を示すものである。

接合例 No.12

ほぼ一定方向から剥片剥離行程を表す接合例で、60の表面に残る剥離痕、60・61の剥離方向はすべて一定である。

接合例 No.13

ほぼ180°打点を回転する剥片剥離行程を示す接合例である。打面側が折れた横長剥片63を剥離した後下方向からの打撃により62が剥離され、その後打点を180°回転し、一回の打撃により64・63が剥離され、同方向から65を剥離している。

接合例 No.14

横長剥片68と打撃方向を転移させることにより剥かれた、剥片67の接合例である。68は、原石の礫面を剥ぎ落す過程のものとも考えられる。

接合例 No.15

折れた剥片の下半部69と同方向から剥離した碎片の接合例である。69は欠損しているが、縦長剥片の一部であると考えられる。

接合例 No.16

横長剥片を連続的に剥離したものの接合例である。これらはほぼ一定方向より剥離されるが、これらの剥片、特に71・72は、原石の礫面を剥ぎ落す過程のものと考えられる。

接合例 No.17

大型の剥片を剥離してゆく行程を表すもので、自然面を打面とし、打点を左に多少ずらしながら、連続的に剥離を行うという特徴を有する。

接合例 No.18

石核23を中心とする接合例で、一つの作業面の周辺を打面として剥片剥離を行う行程を示している。母岩は直径9cmほどの円礫を用いており、打撃方向を一定にせず、剥片剥離が行れ、その中で76が剥離される。その後、76・77をふくめ、ほぼ一定の打面から剥片剥離を行う行程が見られる。しかし、剥がされた剥片は、部厚なものである。

接合例 No.19

二次加工を有する剥片14と、その二次加工による碎片79の接合例であり、表裏面に加工された石器の製作行程を示すものである。必ずしも碎片79が加工の終りのものでなく、その剥離後も、裏面に加工が加えられているが、こうした接合例により、14は石器の未製品である可能性もあると考えられる。

接合例 No.20

石核22を中心とする接合例で、母岩は直径10cmほどの円礫を用いたものらしいが、まず82・84がほぼ打撃方向を180°変えて剥離されたのち、母岩を半割し二つの石核から剥片を剥ぎ取っている。81・83は、22とは別の石核からはほぼ同じ方向から剥離された横長剥片である。そして22から、半割した面を作業面として80が剥離されている。

接合例 No.21

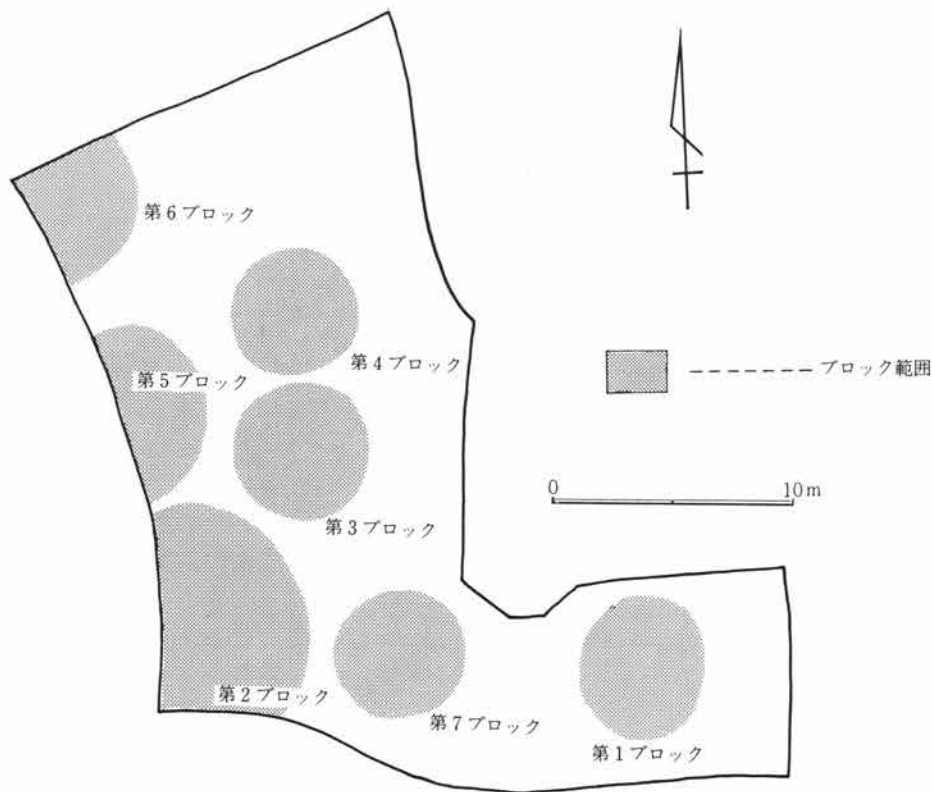
接合例の中で、最多数剥片がの接合したもの。また本遺跡の剥片剥離行程の代表的な例である。母岩は16

cm×10cm×9cmほどの、自然礫を用いている。最初にこの母岩を大きく分割し、その剥離面を打面として剥片剥離を行い(接合図下半部右側面)、そののちその剥離を打面として剥離を行っている(94・95)。その後、接合図の下半部の剥片剥離が進行したと考えられる。その後、最初の半割面を打面とし、98が剥離され、その剥離面を打面として、97・96が剥離された。そして打点を、180°転回させ、93、94、91が連続的に剥離された。この段階は、図23の接合図であるが、下半部の87、90は、接合関係のみからでは剥離順序を明確にしえないが、石核21の打面調整痕などを考えあわせると、この段階の剥離を考えたい。先の88の剥離ののち、打点を約180°回転し、85・86など連続的に剥離し、その剥離面を打面として一方向からの連続的な剥片剥離を行っている(88・89)。この剥離作業ののち、21は残核として捨てられたと考えられる。この接合例No21の剥片剥離過程は、母岩の半割→半割面を打面としての剥片剥離→剥離面を打面とした剥片剥離⇔打点の転移→両設打面石核からの剥片剥離という段階を経て行われると考えられる。(小菅)

5 遺物出土状況(検出遺構)

本遺跡での先土器時代の出土遺物の分布は、調査区全体に直径約3～4m程の円形内におさまる程度の広がりをもつブロック(石器集中部)が、第129図に示すごとく7ヶ所検出することができた。I区では第1ブロック、II区では2ブロックから第7ブロックとなる。

以下、各ブロックごとに説明する。



第129図 ブロック(石器集中個所)範囲図

第1ブロック (第130図・表15)

第1ブロックは、39-A38グリッドを中心に位置するI区で検出された唯一のブロックである。これらの遺物は、平面分布ではそのほとんどが6m×4mの楕円形の中に包括されてしまう。また垂直分布をみると、土層の傾斜度が南へ向うほど大きくなっているため、南北両端でみる遺物の高低差は約1m近くにも達してしまう。しかし実際の遺物の高低差は、土層傾斜を考慮すると約20cm~25cm程であり、出土層位では大方のものが第XVII層の『暗色帯』に包含されるものである。

出土した遺物は、接合した2次加工を加えられた石器1点、剥片等18点の計19点である。

使用される石材は、黒色頁岩と黒色安山岩の2種類で主を成しているが、他石材も若干用いられていることが表15からうかがえる。

表15 第1ブロック出土遺物の石材別表

器種 \ 石材	黒色頁岩	珪質頁岩	黒色安山岩	輝石安山岩	変質安山岩	ひん岩	変質岩	計
ナイフ形石器								
スクレイパー								
彫器								
錐器								
2次加工(調整痕)	1(2)							1(2)
使用痕								
石核								
敲石								
礫				1				1
剥片	7		7		1	1	1	17
計	8(9)		7	1	1	1	1	19(20)

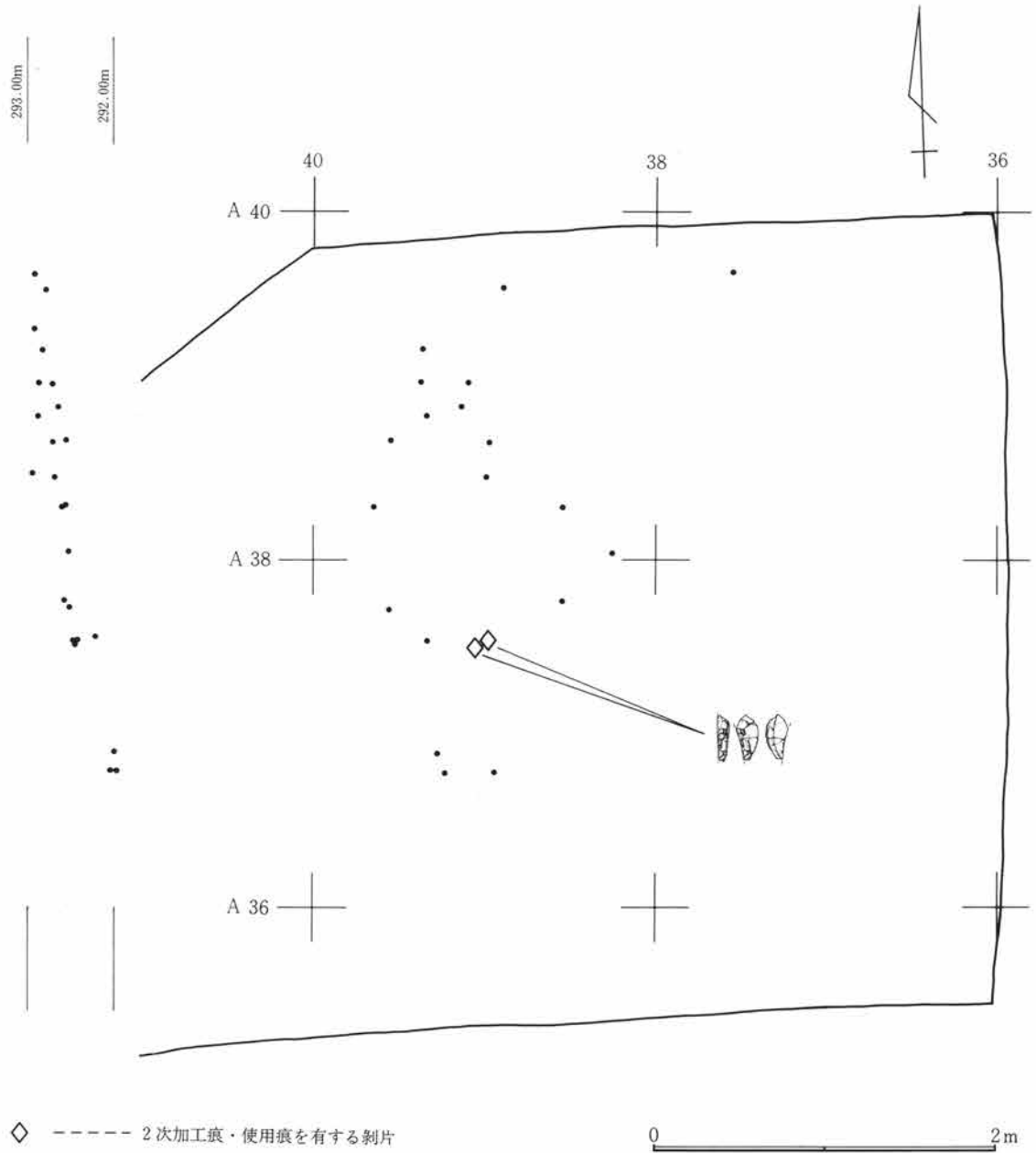
出土した遺物は、スクレイパー1点、彫器1点、錐器1点、2次加工を加えられたもの6点、使用痕の有るもの2点、石核2点、敲石6点という組成からなり、その他に剥片等多数ある。またこれらの遺物に使用される石材には、黒色頁岩が最も多く、次いで黒色安山岩が用いられている。このことは表16に示したとおりである。

ブロック内での各器種ごとの分布状況は、スクレイパー、彫器、錐器、2次加工及び使用痕を有する石器等については、比較的に石器密集部の周囲にその分布多く認められる。敲石についてもその多くはブロック西側に集中している様子が第131図からうかがうことができる。また石器密集部を形成するものは、調整・作出等の剥片及び碎片が主となっている。この出土の状態から、石器製作のための作業場としての意味合いが強く感じられる。

第2ブロック (第131図・表16)

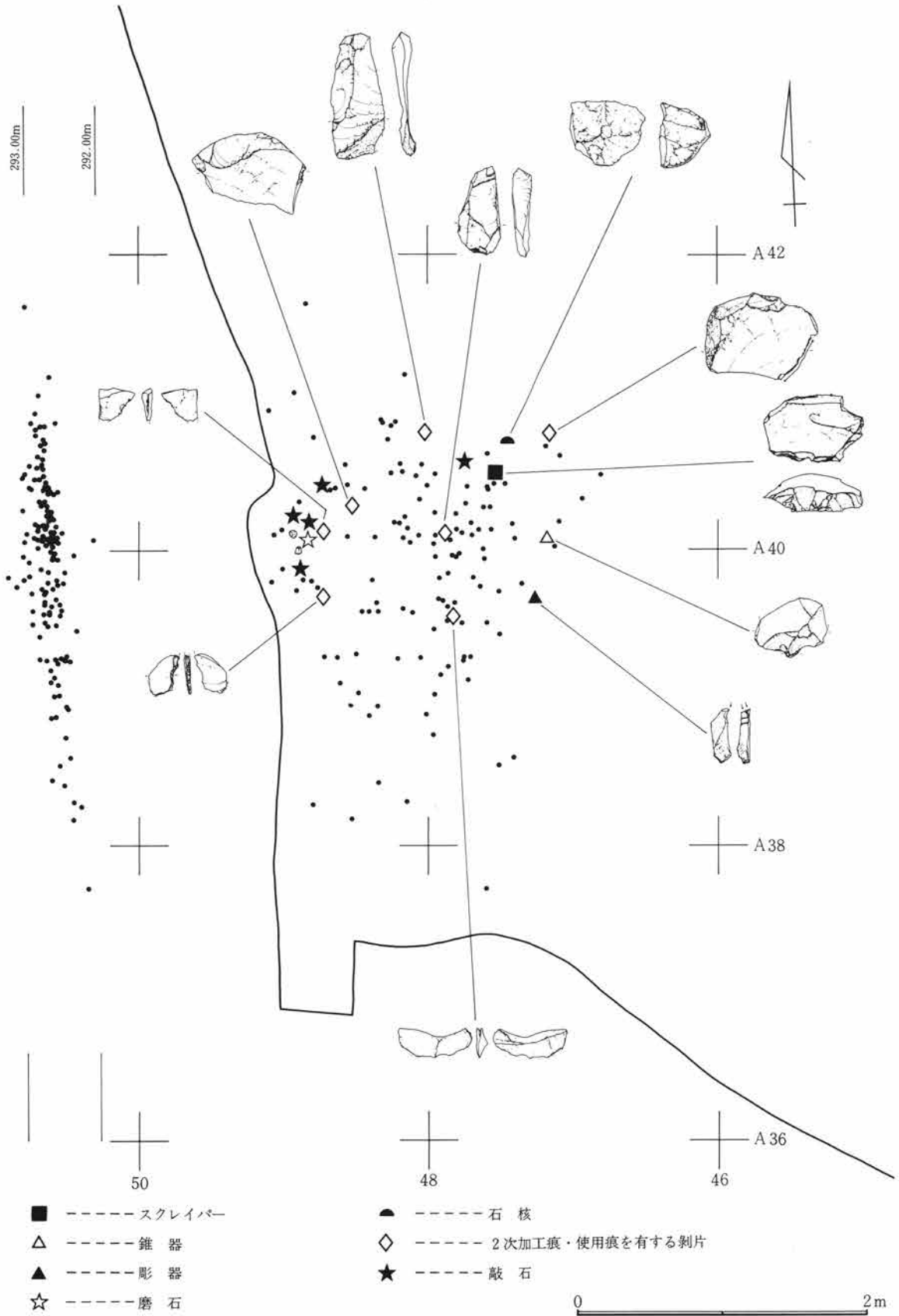
第2ブロックは、調査区(II区)の南西角にあり47-48-A39-A40グリッドを中心に位置する。遺物出土状態を平面分布からみると、中心部の密集度が高く、周辺部では散漫となり、これらの遺物のほとんどが6m×6m程の円の中に包括されてしまう。また垂直分布では、他ブロックと同様に調査区が南傾斜地であるため北側出土遺物と南側出土遺物の高低差がみられる。遺物は中心部が密集し、密集部ほど上下のばらつきがみられるものの、数例を除くとその下面はある程度一定しており、その形状は半レンズ状を呈する。

これらの遺物出土層位は、第XVI層からのものも数例認められるものの、それ以外の多くは第XVII層の暗色帯中からである。垂直分布での安定した遺物出土面は、この暗色帯の中にあって、比較的下位に位置してくる。



第130図 第1ブロック石器組成及び垂直分布図

各器種の石器及び剥片等に使用される石材は、表16に示すとおりである。この表からもわかるように、黒色頁岩によるものが全体の約72%とブロック内での主体を占め、次いで黒色安山岩によるものが約20%、その他の石材によるものが約8%と黒色頁岩との差が大である。また、これらの石材別分類をもとに、母岩別・個体別に分類の必要があるが、黒色頁岩及び黒色安山岩については個々の特徴的なものがなく、その分類が難しいことから行ない得なかった。



第131図 第2ブロック石器組成及び垂直分布図

表16 第2ブロック出土遺物の石材別表

器種	石材	黒色頁岩	珪質頁岩	黒色安山岩	輝石安山岩	変質安山岩	ひん岩	変質岩	斑れい岩	変斑れい岩	石英閃緑岩	凝灰岩	珪質凝灰岩	珪質変質岩	輝緑岩	砂岩	ホルンフェルス	計
ナイフ形石器																		
スクレイパー		1																1
彫器		1																
錐器		1																1
2次加工(調整痕)		1		1														2
使用痕		4		1														5
石核				2														2
敲石					1				1		1						1	4
礫					1						1		1					3
磨石					1													1
剥片		88		22		1	1	1										114
計		96		26	3	1	1	1	1		2		1		1		1	134

第3ブロック (第132図・表17)

第3ブロックは、調査区(II区)のほぼ中央にあり46-A42グリッドを中心に位置する。遺物の出土状態を平面分布からみると、中心部での遺物密集度が高く、周辺部ではその分布が散漫となる。分布の範囲は、これらの遺物のほとんどが5m×5m程の円の中に包括されてしまう。また垂直分布では、他ブロック同様に調査区が南傾斜地であるため、第132図に示したごとく垂直分布図にその高低差が生じている。遺物は、中央の密集部で約20cm程の上下の差が見られるが、全体的には一様に安定していると考えられ、その形状は薄くはあるものの第2ブロック同様に半レンズ状を呈している。

これら遺物の出土層位は、第XVI層からのものが数例認められるものの、それ以外のほとんどのものが第XVII層の暗色帯中からである。垂直分布での安定した遺物出土面は、この暗色帯の中にあつて下位に位置してくる。

出土した遺物は、ナイフ形石器1点、石核1点のほか剥片等である。これらの遺物に使用される石材には、黒色頁岩がその主体を成している。この黒色頁岩の剥片の多くが同一母岩から作り出されたものであることが、第123・124図の接合資料および付図2の石材別接合図からうかがうことができる。また、出土遺物の器種別の石材については、表17に示したとおりである。

ブロック内での各器種の分布状況は、黒色頁岩による石核を中心に剥片主体の遺物密集部が約1m×1m程の範囲に形成され、その周辺にも剥片類が点在する。本遺跡出土遺物の唯一のナイフ形石器は、この石核

表17 第3ブロック出土遺物の石材別表

器種 \ 石材	黒色頁岩	珪質頁岩	黒色安山岩	輝石安山岩	変質安山岩	計
ナイフ形石器	1					1
スクレイパー						
彫器						
錐器						
2次加工(調整痕)						
使用痕						
石核	1					1
敲石					1	1
礫						
剥片	22	1	1	1		25
計	24	1	1	1	1	28

表18 第4ブロック出土遺物の石材別表

器種 \ 石材	黒色頁岩	黒色安山岩	変質安山岩	ひん岩	珪質変質岩	計
ナイフ形石器						
スクレイパー						
彫器						
錐器						
2次加工(調整痕)						
使用痕		2				2
石核						
敲石				1		1
礫						
剥片	8	6	1		1	16
計	8	8	1	1	1	19

を中心とした遺物密集部から東へ約2m程はなれた周辺部から出土している(第132図)。このナイフ形石器も黒色頁岩によるものであり、密集部の石核と同一母岩であると考えられる。

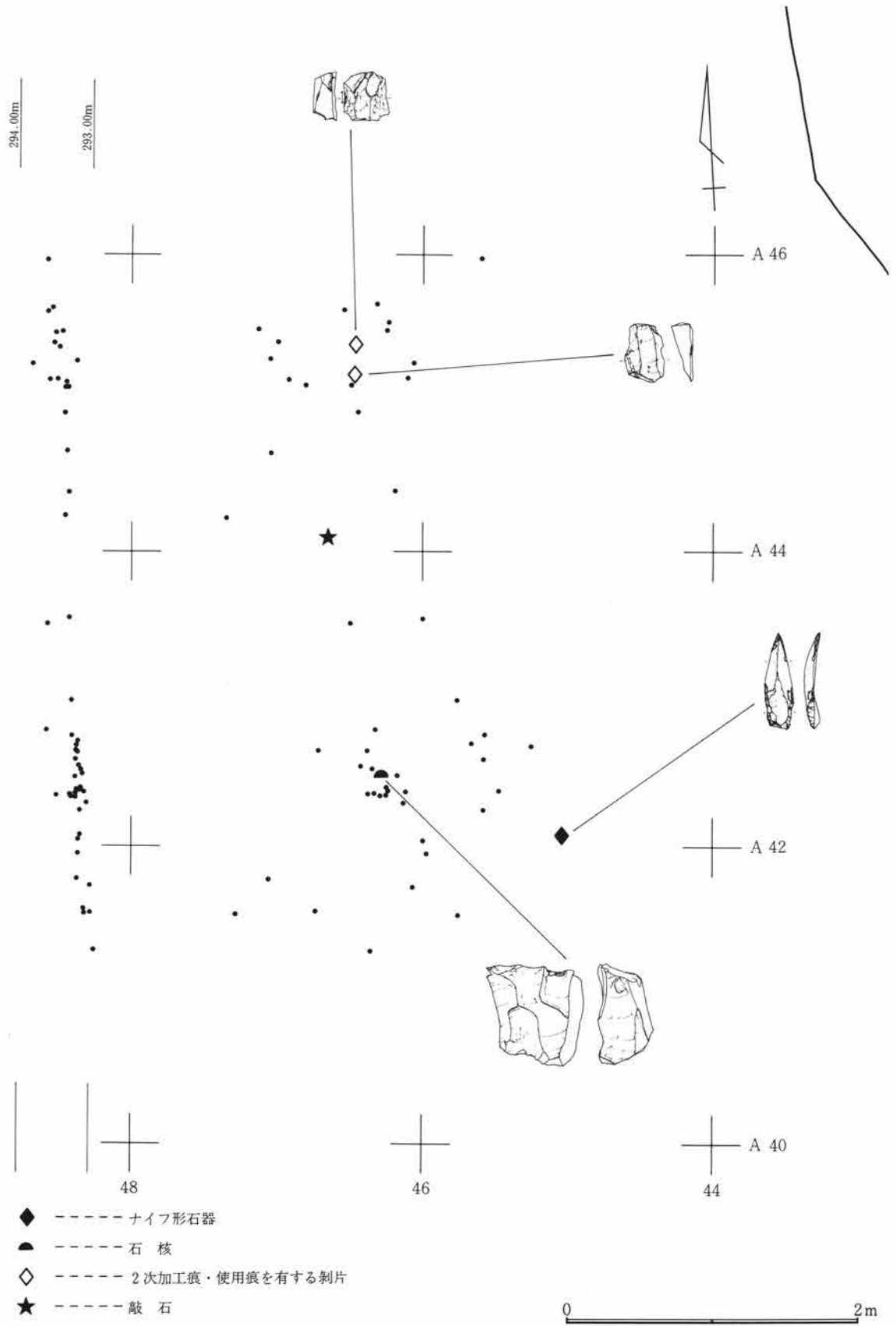
第4ブロック(第132図・表18)

第4ブロックは、第3ブロックのやや北側にあり46-A45グリッドを中心に位置する。遺物の出土状態を平面分布かみると、他ブロックと違い全体的に散漫で出土遺物数も少ないが、一応遺物の集中する部分がありブロックの中心を形成しているようである。分布の範囲は、約5m×5m程の円の中に包括されてしまう。また垂直分布では、他ブロック同様に調査区が南傾斜地であるため、第132図に示したごとく垂直分布図にその高低差が生じている。遺物は、中央の集中する部分で約60cm程の上下差がみられるが、全体的には一様に安定しているようであり、その形状は半レンズ状を呈しているように思われる。

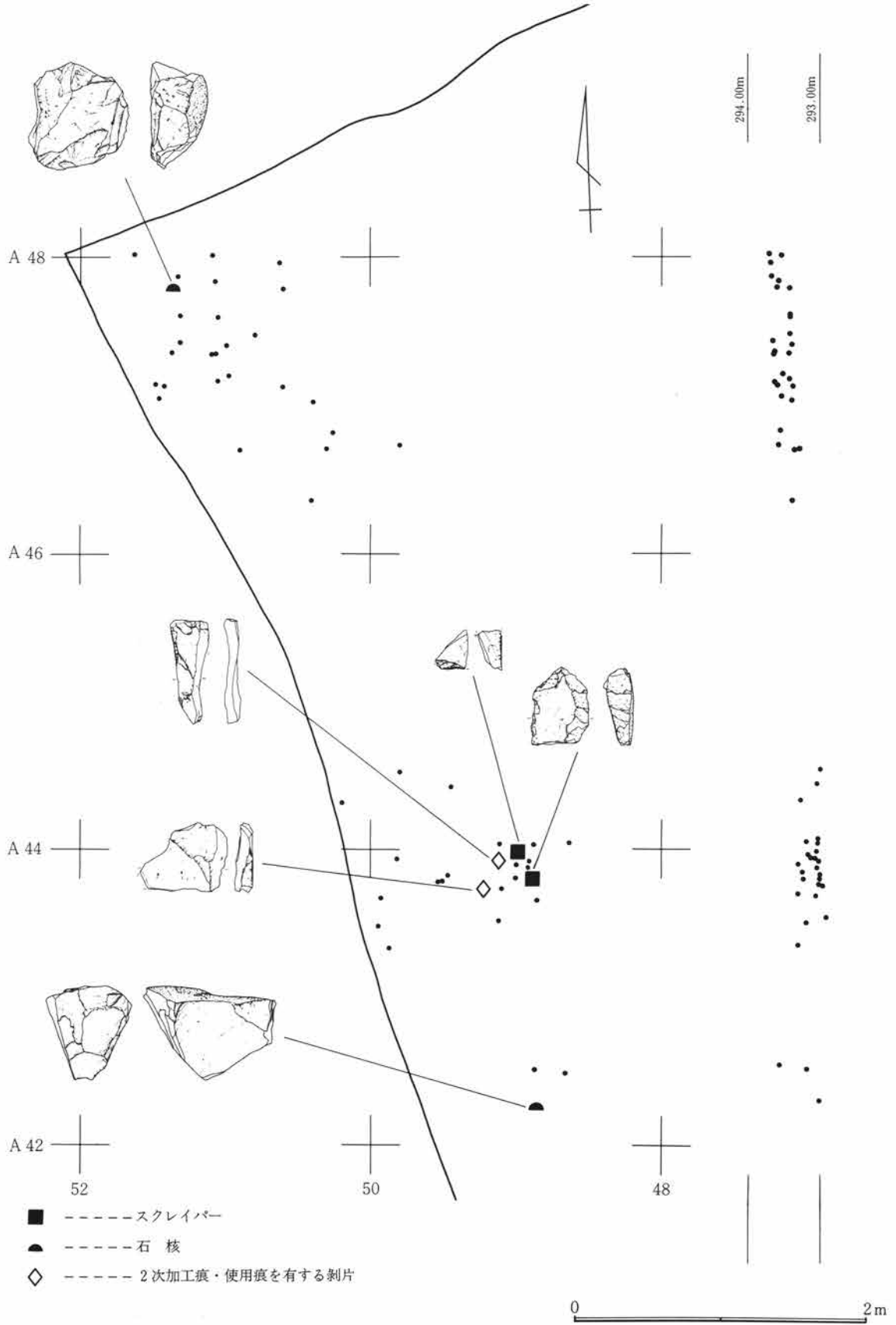
これら遺物の出土層位は、第XV層および第XVI層からのものが数例あるものの、他の遺物については第XVII層の暗色帯中からである。垂直分布での安定した遺物出土面は、第3ブロック同様この暗色帯の中であって下位に位置してくるものと考えられる。

出土した遺物は、使用痕を有する剥片2点、敲石1点の他には剥片等がある。これらの遺物に使用される石材には、黒色頁岩と黒色安山岩によるものが主となり、他に敲石(ひん岩)等にみられるように若干ではあるが他石材を用いられるものがある。出土遺物の器種別の石材については、表18に示しとおりである。

ブロック内での各器種の分布状況は、遺物の集中する部分の中央に使用痕を有する剥片が2点出土し、その周囲に剥片等が、さらに集中部から約2mぐらい南にはなれた位置から大形の敲石が出土している(第132



第132図 第3・4ブロック石器組成及び垂直分布図



第133図 第5・6ブロック石器組成及び垂直分布図

表19 第5ブロック出土遺物の石材別表

器種 \ 石材	黒色頁岩	黒色安山岩	輝石安山岩	変質安山岩	計
ナイフ形石器					
スクレイパー		2			2
彫器					
錐器					
2次加工(調整痕)		1			1
使用痕	1				1
石核	1				1
敲石					
礫			1		1
剥片	14	4		1	19
計	16	7	1	1	25

表20 第7ブロック出土遺物の石材別表

器種 \ 石材	黒色頁岩	黒色安山岩	変質岩	砂岩	計
ナイフ形石器					
スクレイパー		1			1
彫器					
錐器					
2次加工(調整痕)					
使用痕					
石核					
敲石					
礫				1	1
剥片	17	12	1		30
計	17	13	1	1	32

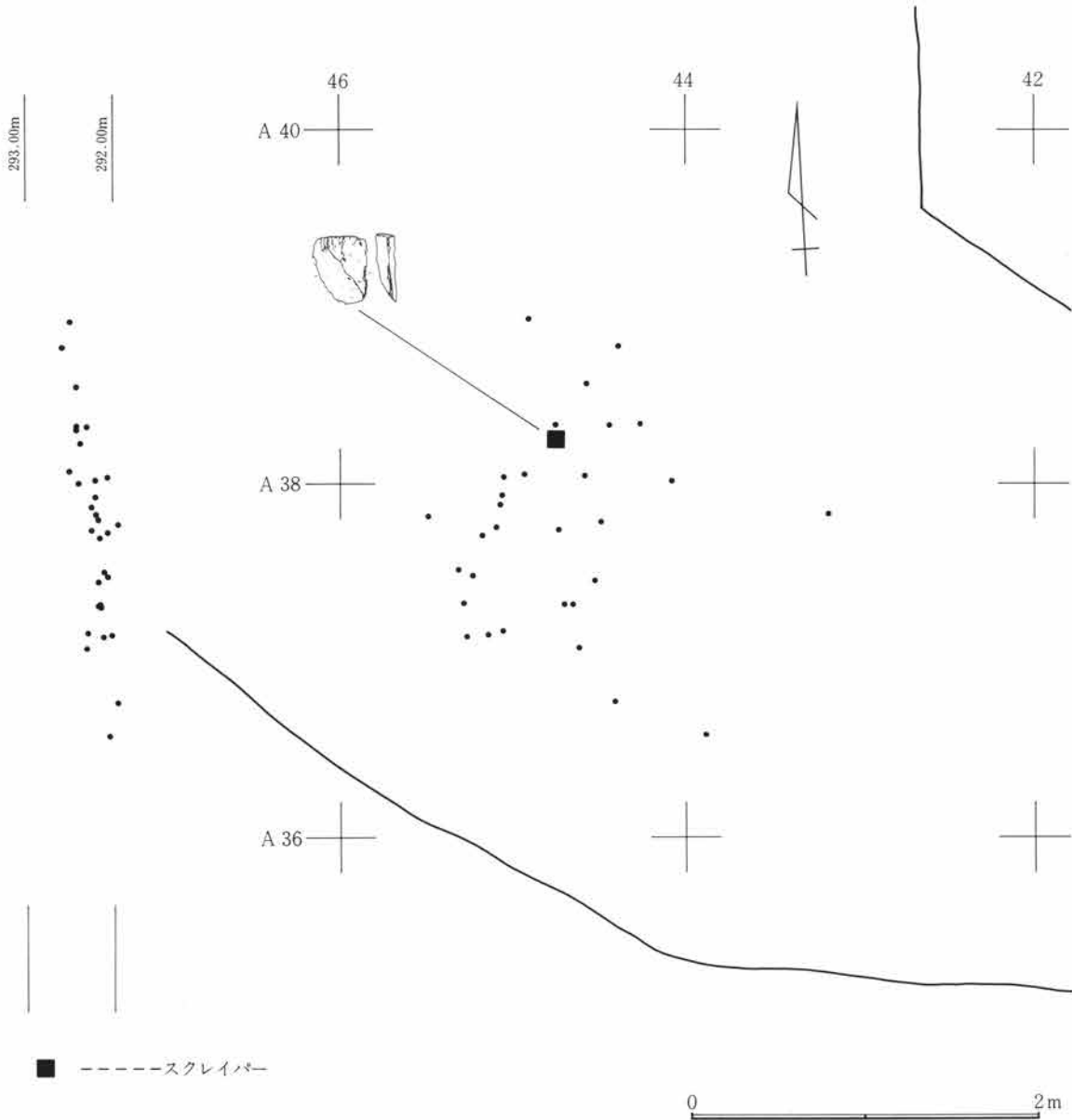
図)。この敲石については、前頃の『出土遺物』の中でもふれた棒状礫を素材としたものである。

第5ブロック (第133図・表19)

第5ブロックは、第2ブロックと第6ブロックの中間にあり48～49-A43グリッドを中心に位置する。遺物の出土状態を平面分布から見ると、現状では遺物の集中する部分が1m×2m程の範囲をもちブロックの中心を形成し、周囲に散在するようである。しかし本ブロックの49-A42グリッドの部分には、風倒木痕によるものと考えられる土層の乱れ(第135図)があり、その部分の中から出土した遺物は正常な出土位置を示さないものが数点あった。これら遺物の分布範囲は、約5m×5m程の円の中に包括されてしまう。また垂直分布では、他ブロック同様に調査区が南傾斜地にあるため垂直分布図にその高低差があらわれる状況にあるが、土層の乱れ部分の周囲から出土した遺物等もあり、第133図に示したごとく遺物の上下差が多くみられる。また、その形状が半レンズ状を呈するものかどうかは明確ではない。

これら遺物の出土層位は、風倒木痕と考えられる土層の乱れ(逆転層)による影響を受けた遺物を除くものでは、第XVI層上面から第XVII層下面までの間に包含され、その上下差は約40cm程である。また遺物は第XVII層中からのものが多く、本来的には他ブロック同様第XVII層の下位にその安定した面があったものと想定される。

出土した遺物は、スクレイパー2点、2次加工を有する剥片1点、使用痕を有する剥片1点、石核1点、他に剥片等がある。これらの遺物に使用される石材には、黒色頁岩によるものが最も多く、次いで黒色安山岩によるものであり、それ以外に若干他石材のものがある。出土遺物の器種別の石材については、表19に示



第134図 第7ブロック石器組成及び垂直分布図

したとおりである。

ブロック内での各器種の分布状況は、遺物の集中する部分にスクレイパーおよび2次加工、使用痕を有する剥片が出土し、遺物出土範囲の南端部に石核が出土している（第133図）。ブロック内に風倒木痕と考えられる土層の乱れ（逆転層）が存在するため、その様相は把握し難い。

第6ブロック（第133図）

第6ブロックは、先の第5ブロックの北側で調査区（II区）の最北部にあり50～51-A47グリッドを中心に位置する。遺物の出土状態を平面分布からみると、約1m×1m程の範囲に遺物が集中するような形でブロックの中心を形成しているようである。また周辺部には散漫な分布が認められる。遺物の分布範囲は、5m×3m程の中に包括される。垂直分布では、調査区が緩やかな南傾斜地であることから他ブロックほど垂

表21 各ブロック石器組成表

器種	ブロック	第1ブロック	第2ブロック	第3ブロック	第4ブロック	第5ブロック	第6ブロック	第7ブロック	計
ナイフ形石器				1					1
スクレイパー			1			2		1	4
彫器			1						1
錐器			1						1
2次加工(調整痕)	1(2)	2				1			4(2)
使用痕			5		2	1			8
石核			2	1		1	1		5
敲石			4	1	1				6
磨石			1						1
磔	1	3				1		1	6
剥片	17	114	25	16	19	24	30		245
計	19(20)	134	28	19	25	25	32		282(283)

直分布図での高低差がない。全体的に約20cm程の遺物の上下差がみられるが、下面は比較的安定するような半レンズ状に近い形状を呈している。

これらの遺物の出土層位は、第XVI層上面から第XVII層下面までの間に包含される。遺物の出土下面は、他ブロック同様に暗色帯(第XVII層)の下位に位置してくると考えられる。

出土した遺物は、石核1点のみでそれ以外はすべて剥片等である。これらの遺物に使用される石材は、黒色安山岩のみに限られていることが特徴的である。

ブロック内での各器種の分布状況は、遺物の集中化部分周辺に石核が出土し、全体的には散漫な剥片の分布となる。

第7ブロック(第134図・表20)

第7ブロックは、第1ブロックと第2ブロックの中間にあり、44~45-A37グリッドを中心に位置する。遺物の出土状態を平面分布からみると、遺物の集中化する部分が認められず全体的に散漫な分布を示す。分布の範

囲は、約5m×5m程の中に包括されてしまう。また垂直分布では、他ブロック同様に調査区が南傾斜地であるため、第134図に示したごとく垂直分布図にその高低差が生じている。遺物は、中央部付近で約50cm程の上下差がみられ、その形状はレンズ状を呈している。

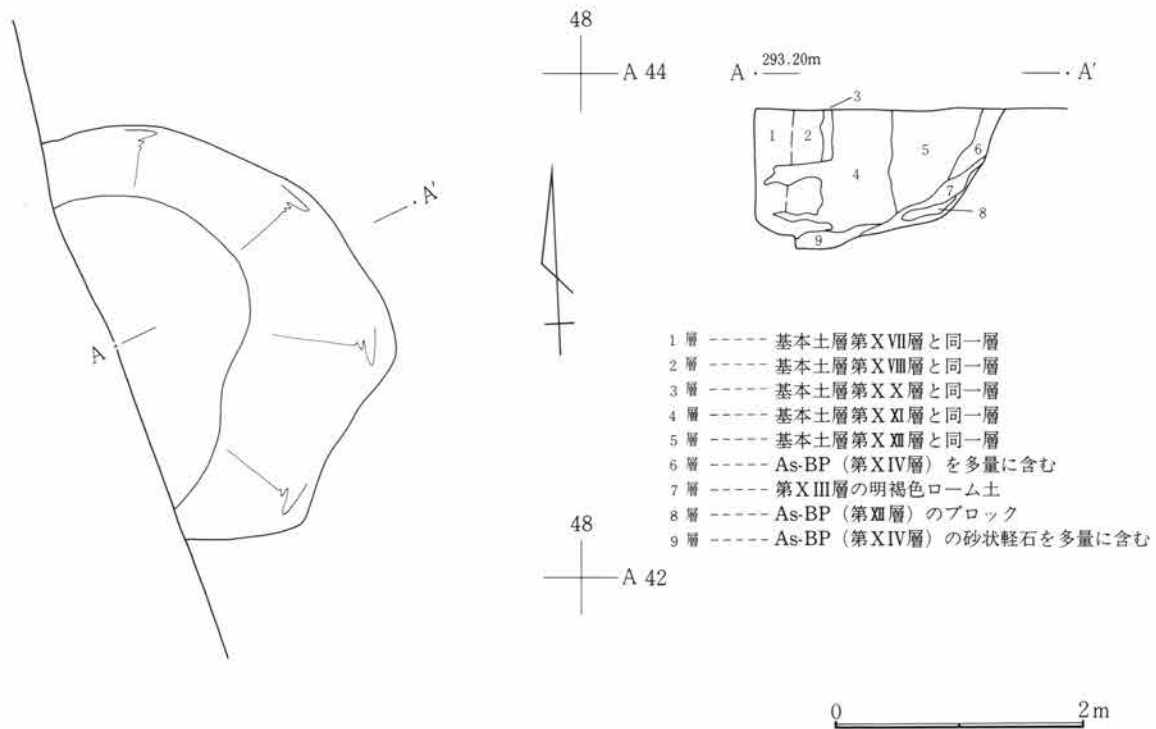
これらの遺物の出土層位は、第XVI層から第XVIII層までの間に包含されていたものであるが、他ブロック同様に第XVII層の暗色帯からのものが主を成している。

出土した遺物は、スクレイパー1点と剥片等である。これらの遺物に使用される石材には、黒色頁岩によるものが最多で、次いで黒色安山岩によるものが多く、他には若干の他石材が用いられている。出土遺物の器種別の石材については、表20に示したとおりである。

ブロック内での各器種の分布状況は、剥片が散漫な分布を示す中にスクレイパーが1点出土するという形である(第134図)。

以上、1ブロックから7ブロックまでの各ブロックの説明をしてきたが、遺物の出土量およびその分布範囲は比較的小規模のもので主体を成し構成していることを知ることができた。

各ブロックから出土した遺物の石器組成を集約すると次のごとくなる(表21)。



第135図 風倒木痕

風倒木痕 (第135図)

前頁の第5ブロックの説明でも述べた、風倒木痕によると考えられる土層の乱れた場所が49-A42グリッドに位置する。形状および規模は、およそ直径2m~3m程の円形になると考えられる。南北の土層断面(付図1)からすると、土層の乱れは第X層のAs-BPから第XXII層までに達しており、第X層堆積以後で第IX層(As-SP)堆積以前時期の所産によるものと考えられよう。東西の土層断面では、第135図に示すごとく第XVII層(暗色帯)から第XXII層までの土層が90度転移した状態で確認することができた。特に土層の転移については、第XIX層・第XX層(HA)がその状態を良好に示している。

なお、転移した土層の第1層(第135図)からは、遺物が数点出土しており基本土層の第XVII層中のものと考えられ、本来は第5ブロックに含まれると思われる。

以上のことから、この土層の乱れを風倒木による痕であると考えたい。また、転移した土層からこの風倒木痕は、西側へ倒木した結果生じたものであると考えられよう。

6 遺物接合状況

個々の出土遺物・接合資料および各ブロック内での遺物出土状況は、先に述べたとおりであるが、本項ではさらに遺物接合について、遺跡内での分布および接合状況等を中心に若干ふれておくことにしたい。

本遺跡における接合状況・分布は付図2に示したとおりで、各ブロック内の接合は出土量の多い第2ブロックでの接合率が最も高く、次いで第7ブロック、第3ブロックの接合率が高い。他ブロックでは、極めて接合資料が少なく、数例のみにとどまっている。

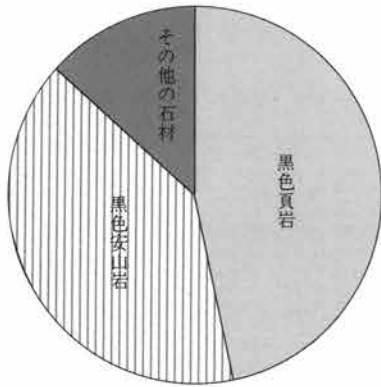
スクレイパーを中心とした接合資料としては、第7ブロックの1例（第113図・接合No.2）だけである。

石核を中心とした接合資料は、第2ブロックで1例（第120・接合No.18）、第3ブロックで1例（第123・124図・接合No.21）、第6ブロックで1例（第121・122図・接合No.20）の計3例だけである。

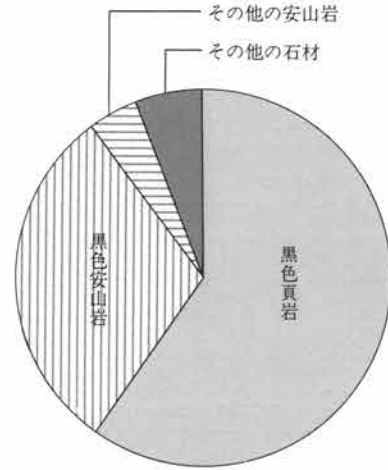
特に第3ブロックの接合資料の場合、ブロックを構成する遺物の多くが黒色頁岩によるもので、しかもそれらが同一母岩からの剥片を主としていたため、接合枚数が多いもののその接合分布は比較的コンパクトにまとまっている。また、黒色頁岩に次ぐ出土量の黒色安山岩による剥片類の良好な接合例は乏しく、第6ブロックのように黒色安山岩による遺物が主体を成しているにもかかわらず、良好な接合資料が得られていない。

ブロック間での接合については、第2ブロックと第7ブロック、第3ブロックと第4ブロックの2例がみられる。

全体的にみると、いずれのブロックにおいても剥片主体の接合にとどまるものが主体となり、しかも同ブロック内での接合例が多く、各ブロックが単一的に独立している傾向がうかがえる。 (谷藤)



第136図 石材別石器割合図



第137図 石材別割合図

表22 出土遺物の石材別表

器種 \ 石材	黒色頁岩	珪質頁岩	黒色安山岩	輝石安山岩	変質安山岩	ひん岩	変質岩	変斑れい岩	石英閃緑岩	凝灰岩	珪質凝灰岩	珪質変質岩	輝緑岩	砂岩	ホルンフェルス	斑れい岩	計
ナイフ形石器	1																1
スクレイパー	1		3														4
彫器	1																1
錐器	1																1
2次加工(調整痕)	3		1														4
使用痕	5		3														8
石核	2		3														5
敲石				2	1	1							1			1	6
磨石				1													1
礫				2					2		1			1			6
剥片	156	1	75	3		2	3	2		1		1			1		245
計	170	1	85	8	1	3	3	2	2	1	1	1	1	1	1	1	282

表23 石器計測表

単位：長さ・幅・厚さcm、重量g、標高値m

遺物 番号	整理 番号	出土位置 (ブロック)	器 種	石 材	計 測 値				標高値	備 考
					長さ	幅	厚さ	重 量		
1		II	剥片	黒色安山岩	(3.27)	(2.06)	(0.59)	4.30	292.99	
2		II	剥片	黒色頁岩	(3.81)	(1.32)	(0.75)	3.20	293.17	
3	78	II	剥片	黒色安山岩	3.92	3.90	1.85	32.40	293.12	
4		II	剥片	黒色頁岩	1.96	1.80	0.76	3.80	293.05	
5	10	II	使用痕	黒色頁岩	4.35	3.10	1.00	3.60	292.96	
6		II	剥片	黒色頁岩	(0.92)	(0.78)	(0.44)	0.30	293.00	
7		II	剥片	黒色頁岩	(1.51)	(1.12)	(0.29)	0.40	292.93	
8		II	剥片	黒色頁岩	(2.40)	(1.45)	(0.14)	0.70	292.94	
9		II	剥片	黒色頁岩	1.52	1.81	0.45	1.20	293.02	
10		II	剥片	黒色頁岩	1.48	0.80	0.48	0.70	292.89	
11		II	剥片	黒色頁岩	2.21	1.89	0.13	2.20	292.88	
12		II	剥片	黒色頁岩	2.80	2.40	0.55	3.80	292.89	
13		II	剥片	黒色安山岩	2.18	4.19	1.67	14.50	293.10	
14		II	剥片	黒色頁岩	(1.55)	(0.95)	(0.30)	0.40	292.78	
15		II	剥片	輝石安山岩	(2.40)	(2.00)	(1.19)	6.60	292.79	
16		II	剥片	黒色頁岩	3.12	2.46	0.72	6.50	292.69	
17	36	II	剥片	黒色頁岩	3.10	2.22	0.74	3.30	292.64	
18		II	剥片	黒色頁岩	(1.50)	(0.89)	(0.20)	0.30	292.57	
19		II	剥片	黒色頁岩	(2.35)	(1.30)	(0.23)	1.00	292.52	
20		II	剥片	黒色頁岩	3.15	3.12	0.98	3.30	292.46	
21		II	剥片	黒色頁岩	3.46	3.08	0.52	5.20	293.62	
22		III	剥片	黒色頁岩	2.20	1.35	0.25	1.80	293.64	
23		III	剥片	黒色頁岩	1.87	1.23	0.50	1.50	293.50	
24	56	VI	剥片	黒色安山岩	6.20	2.35	1.00	22.00	293.53	
25	57	VI	剥片	黒色安山岩	5.90	2.75	1.25	29.90	293.57	
26	22	VI	石核	黒色安山岩	7.10	6.90	4.00	224.60	293.43	
27	81	VI	剥片	黒色安山岩	3.30	5.30	1.75	39.80	293.41	
28		VI	剥片	黒色安山岩	(1.85)	(0.80)	(0.52)	0.70	293.41	
29		VI	剥片	黒色安山岩	3.26	2.20	0.74	3.90	293.69	
30	83	VI	剥片	黒色安山岩	2.82	2.11	0.89	5.00	293.59	
31	58	VI	剥片	黒色安山岩	5.30	4.00	1.38	24.20	293.41	
32	80	VI	剥片	黒色安山岩	(2.35)	(3.55)	(1.05)	7.40	293.39	
33		VI	剥片	黒色安山岩	(2.95)	(1.90)	(0.85)	3.40	293.43	
34		VI	剥片	黒色安山岩	1.75	4.60	1.13	13.40	293.64	
35		VI	剥片	黒色安山岩	(2.50)	(1.10)	(0.32)	1.00	293.44	
36		VI	剥片	黒色安山岩	(1.72)	(1.26)	(0.58)	1.90	293.38	
37		VI	剥片	黒色安山岩	2.84	2.02	0.80	4.10	293.38	
38		VI	剥片	黒色安山岩	(1.80)	(1.40)	(0.20)	0.50	293.30	
39		VI	剥片	黒色安山岩	(3.35)	(2.35)	(1.10)	5.80	293.37	
40		VI	剥片	黒色安山岩	2.75	2.05	0.77	4.60	293.39	
41		VI	剥片	黒色安山岩	(2.20)	(1.35)	(0.62)	1.80	293.59	

遺物 番号	整理 番号	出土位置 (ブロック)	器 種	石 材	計 測 値				標高値	備 考
					長さ	幅	厚さ	重 量		
42	94	IV	剥片	黒色頁岩	4.32	3.68	1.70	33.46	293.42	
43	47	IV	剥片	黒色頁岩	3.45	3.13	0.90	9.80	293.21	
44		IV	剥片	黒色安山岩	1.79	3.11	0.41	2.60	293.38	
45		IV	剥片	黒色安山岩	(2.85)	(2.10)	(0.90)	4.60	293.36	
46	19	IV	使用痕	黒色安山岩	3.68	2.70	1.40	10.20	293.49	
47		IV	剥片	黒色安山岩	(2.10)	(2.05)	(0.50)	1.90	293.61	
48		IV	剥片	黒色安山岩	1.80	2.75	0.40	2.80	293.86	
49	8	IV	使用痕	黒色安山岩	3.30	3.25	1.60	18.70	293.47	
50		IV	剥片	黒色頁岩	2.98	4.12	0.55	7.00	293.52	
51	46	IV	剥片	黒色頁岩	4.15	3.27	0.78	14.70	293.49	
52		IV	剥片	黒色頁岩	2.25	1.00	1.15	5.30	293.58	
53	48	IV	剥片	黒色頁岩	1.92	1.86	0.68	2.80	293.63	
54		IV	剥片	変質安山岩	(2.04)	(2.80)	(0.80)	4.50	293.65	
55		IV	剥片	黒色頁岩	(2.78)	(2.00)	(0.70)	3.50	293.39	
56		IV	剥片	黒色頁岩	(2.10)	(1.35)	(0.42)	0.70	293.33	
57	105	IV	敲石	ひん石	29.60	10.00	6.45	3440.00	293.33	
58		IV	剥片	黒色安山岩	(1.62)	(1.38)	(0.21)	0.70	293.37	
59		IV	剥片	黒色安山岩	1.35	1.26	0.45	0.80	293.38	
60	73	V	剥片	黒色頁岩	5.20	10.15	2.90	221.30	293.00	
61	75	V	剥片	黒色頁岩	11.60	11.00	3.90	552.00	293.04	
62		V	礫	輝石安山岩	(7.75)	(4.80)	(5.26)	172.90	293.03	
63										欠番
64		V	剥片	黒色頁岩	3.00	3.40	1.90	32.60	293.02	
65		V	剥片	黒色頁岩	2.60	1.45	0.45	2.00	293.14	
66		V	剥片	黒色安山岩	5.20	1.90	1.50	14.00	293.29	
67		V	剥片	黒色頁岩	(1.75)	(0.80)	(0.35)	0.50	293.20	
68										欠番
69		V	剥片	黒色頁岩	4.15	4.30	1.70	46.40	293.01	
70	14	V	二次加工痕	黒色安山岩	4.50	6.10	1.10	3.70	292.97	
71	74	V	剥片	黒色頁岩	4.25	8.05	1.60	41.30	292.90	
72	31	V	剥片	黒色頁岩	5.78	5.02	1.22	28.10	293.00	
73		V	剥片	黒色安山岩	(2.95)	(1.50)	(1.40)	4.70	293.00	
74		V	剥片	黒色安山岩	3.80	3.90	1.15	16.20	293.01	
75	18	V	使用痕	黒色頁岩	(2.99)	(2.05)	(1.10)	15.00	293.11	
76	6	V	スクレイパー	黒色安山岩	2.60	2.18	1.62	8.90	293.04	
77										欠番
78	7	V	スクレイパー	黒色安山岩	5.40	4.15	1.70	38.40	293.04	
79		V	剥片	黒色安山岩	1.99	2.15	0.42	2.00	293.06	
80		V	剥片	変質安山岩	(2.90)	(1.80)	(0.72)	4.50	293.56	
81	30	V	剥片	黒色頁岩	6.10	4.52	2.17	55.30	293.29	
82		V	剥片	黒色頁岩	(1.05)	(1.15)	(0.22)	0.30	293.23	
83		V	剥片	黒色頁岩	4.80	2.23	1.71	19.60	293.22	
84		V	剥片	黒色頁岩	3.12	3.45	1.30	27.24	293.19	
85	20	V	石核	黒色頁岩	5.60	5.45	9.18	300.20	293.01	

第VI章 諏訪西遺跡

遺物 番号	整理 番号	出土位置 (ブロック)	器 種	石 材	計 測 値				標高値	備 考
					長さ	幅	厚さ	重 量		
86	87	III	剥片	黒色頁岩	3.70	2.40	0.80	9.40	293.21	
87										欠番
88		II	剥片	黒色頁岩	1.35	4.30	1.30	9.10	292.98	
89	34	II	剥片	黒色安山岩	8.62	7.00	2.52	154.90	292.80	
90		II	剥片	変斑れい岩	(2.80)	(1.73)	(0.58)	3.70	292.84	
91	27	II	剥片	黒色頁岩	2.05	3.40	1.20	9.70	292.93	
92		II	剥片	変質岩	2.60	1.85	1.50	8.80	292.90	
93	51	II	剥片	黒色安山岩	4.62	4.25	1.35	30.60	292.89	
94		II	剥片	黒色頁岩	(1.95)	(1.18)	(0.20)	0.50	292.84	
95	52	II	剥片	黒色安山岩	4.80	2.25	1.55	20.40	292.76	
96	70	II	剥片	黒色安山岩	3.83	5.72	1.71	46.30	292.74	
97		II	剥片	黒色頁岩	(3.60)	(2.70)	(1.05)	6.30	292.74	
98	63	II	剥片	黒色頁岩	7.60	0.75	0.80	14.40	292.80	
99		II	礫	輝石安山岩	(3.01)	(2.47)	(1.55)	14.20	292.81	
100	17	II	使用痕	黒色頁岩	7.30	3.42	1.37	32.30	292.82	
101		II	礫	石英閃緑岩	12.60	10.45	1.80	580.00	292.74	
102	76	II	剥片	黒色安山岩	4.40	3.98	1.40	30.10	292.80	
103	23	II	石核	黒色安山岩	5.12	4.42	3.42	89.50	292.78	
104	64	II	剥片	黒色頁岩	2.55	0.85	0.85	2.20	292.74	
105		II	剥片	黒色安山岩	2.65	3.24	0.68	6.50	292.83	
106	60	II	剥片	黒色頁岩	4.70	3.80	0.80	12.60	292.81	
107	3	II	石錐	黒色頁岩	4.20	5.25	2.35	28.10	292.63	
108		II	石核	黒色安山岩	(4.85)	(3.30)	(1.40)	27.60	292.61	
109		II	剥片	黒色安山岩	(4.55)	(3.60)	(1.32)	33.60	292.71	
110	26	II	剥片	黒色頁岩	5.75	5.53	1.50	65.60	292.67	
111	4	II	スクレイパー	黒色頁岩	4.45	6.90	2.50	81.00	292.71	
112	28	II	剥片	黒色頁岩	5.80	5.52	2.53	90.70	292.70	
113		II	剥片	黒色頁岩	(1.81)	(1.23)	(0.42)	0.80	292.68	
114		II	剥片	黒色頁岩	1.55	2.75	0.50	3.80	292.73	
115		II	剥片	黒色頁岩	1.60	2.70	0.90	4.50	292.69	
116		II	剥片	黒色頁岩	4.62	3.72	0.66	12.90	292.70	
117										欠番
118										欠番
119	61	II	剥片	黒色頁岩	1.55	4.50	0.78	5.40	292.75	
120		II	剥片	黒色頁岩	4.20	5.60	0.97	12.90	292.63	
121		II	剥片	黒色頁岩	2.44	1.65	0.36	1.70	292.69	
122	12	II	使用痕	黒色安山岩	5.40	2.98	1.34	23.10	292.83	
123		II	剥片	黒色頁岩	(3.60)	(2.15)	(2.25)	6.70	292.82	
124	62	II	剥片	黒色頁岩	5.40	3.45	1.00	18.70	292.61	
125	68	II	剥片	黒色頁岩	1.60	0.97	1.35	4.40	292.92	
126		II	剥片	黒色頁岩	(2.35)	(0.80)	(0.70)	1.40	292.71	
127	68	II	剥片	黒色頁岩	3.00	3.35	1.20	20.20	292.65	
128		II	剥片	黒色頁岩	1.11	3.38	0.72	2.20	292.80	
129	35	II	剥片	黒色頁岩	6.78	7.48	3.05	1.20	292.62	

遺物 番号	整理 番号	出土位置 (ブロック)	器 種	石 材	計 測 値				標高値	備 考
					長さ	幅	厚さ	重 量		
130		II	剥片	黒色頁岩	3.60	4.68	0.70	9.80	292.69	
131	72	II	剥片	黒色頁岩	4.25	3.22	0.55	9.40	292.75	
132		II	剥片	黒色頁岩	(1.70)	(1.40)	(0.70)	3.20	292.80	
133										欠番
134	35	II	剥片	黒色頁岩	2.20	4.08	2.27	36.10	292.65	
135	15	II	二次加工痕	黒色頁岩	4.57	7.53	1.50	54.90	292.67	
136		II	剥片	黒色頁岩	5.35	1.90	0.90	11.30	292.90	
137	29	II	剥片	黒色頁岩	8.05	6.22	2.33	202.80	292.67	
138		II	剥片	黒色安山岩	1.60	2.23	0.45	1900.00	292.67	
139		II	剥片	黒色頁岩	3.90	1.30	0.30	2.10	292.78	
140		II	剥片	黒色頁岩	3.35	3.30	1.20	9.40	292.60	
141		III		凝灰岩	(4.06)	(3.40)	(1.84)	27.20	293.32	
142	91	III	剥片	黒色頁岩	4.90	3.40	1.32	24.95	293.24	
143		III	剥片	黒色安山岩	(2.40)	(1.10)	(0.50)	1.60	293.23	
144	89	III	剥片	黒色頁岩	6.75	3.40	1.50	41.86	293.20	
145	96	III	剥片	黒色頁岩	4.20	4.90	0.60	15.32	293.17	
146	21	III	石核	黒色頁岩	6.20	3.40	5.80	179.39	293.16	
147	95	III	剥片	黒色頁岩	4.10	3.20	1.60	25.46	293.25	
148										欠番
149	97	III	剥片	黒色頁岩	4.70	3.05	1.05	17.51	293.25	
150	92	III	剥片	黒色頁岩	7.50	3.25	1.30	32.42	293.19	
151										欠番
152	24	III	剥片	黒色頁岩	8.45	4.56	2.20	68.20	293.13	
153	86	III	剥片	黒色頁岩	6.10	2.60	1.50	26.53	293.11	
154	85	III	剥片	黒色頁岩	4.40	2.20	1.40	14.42	293.20	
155	25	III	剥片	黒色頁岩	6.15	4.83	2.72	84.40	293.30	
156		III	剥片	黒色頁岩	(3.10)	(3.25)	(2.40)	24.76	293.28	
157	104	III	敲石	変質安山岩	11.20	7.50	6.00	658.00	293.21	
158		III	剥片	黒色頁岩	1.53	2.12	0.18	0.80	293.25	
159	98	III	剥片	黒色頁岩	5.55	3.32	1.75	25.21	293.22	
160		III	剥片	珪質頁岩	7.40	3.85	2.45	113.80	293.19	
161		III	剥片	黒色頁岩	3.52	2.67	1.32	22.00	293.18	
162	1	III	ナイフ型石器	黒色頁岩	6.40	2.10	0.80	10.30	293.18	
163	93	III	剥片	黒色頁岩	5.50	3.00	1.55	25.09	293.03	
164	88	III	剥片	黒色頁岩	4.50	1.90	0.80	8.05	293.20	
165		III	剥片	黒色頁岩	(1.89)	(0.95)	(0.34)	0.70	293.04	
166		III	剥片	輝石安山岩	(3.05)	(1.18)	(0.55)	1.60	293.12	
167	99	III	剥片	黒色頁岩	1.60	2.15	0.45	2.10	293.97	
168		II	剥片	黒色頁岩	1.55	2.35	0.65	2.40	293.84	
169		II	剥片	黒色安山岩	3.80	4.25	1.70	39.80	292.79	
170	2	II	彫器	黒色頁岩	3.65	1.32	8.30	3.40	292.56	
171	65	II	剥片	黒色頁岩	4.30	7.70	1.10	4.80	292.61	
172		II	剥片	黒色頁岩	3.24	1.81	1.17	6.20	292.55	
173		II	剥片	黒色頁岩	(1.50)	(1.05)	(0.45)	0.60	292.59	

第VI章 諏訪西遺跡

遺物 番号	整理 番号	出土位置 (ブロック)	器 種	石 材	計 測 値				標高値	備 考
					長さ	幅	厚さ	重 量		
174		II	剥 片	黒色頁岩	(2.30)	(1.45)	(0.35)	0.90	292.60	
175		II	剥 片	黒色安山岩	(2.30)	(2.05)	(1.05)	4.40	292.70	
176		II	剥 片	黒色頁岩	(3.35)	(1.48)	(0.40)	2.00	292.57	
177	11	II	使 用 痕	黒色頁岩	1.42	2.88	0.62	4.30	292.72	
178		II	剥 片	黒色頁岩	1.39	2.82	0.75	5.00	292.71	
179		II	剥 片	黒色頁岩	1.60	1.83	0.69	3.10	292.50	
180		II	剥 片	黒色頁岩	(1.20)	(0.89)	(0.15)	0.20	292.67	
181		II	剥 片	黒色頁岩	1.80	1.45	0.25	1.80	292.71	
182		II	剥 片	黒色頁岩	(3.90)	(2.25)	(0.62)	4.70	292.72	
183	67	II	剥 片	黒色頁岩	2.00	2.15	0.50	3.70	292.66	
184	9	II	二次加工痕	黒色頁岩	2.95	1.90	0.40	2.20	292.72	
185		II	剥 片	黒色頁岩	(5.35)	(2.56)	(0.90)	12.70	292.74	
186		II	剥 片	黒色頁岩	3.25	2.75	1.30	11.80	292.68	
187		II	礫	珪質凝灰岩	(6.82)	(3.14)	(2.13)	45.40	292.72	
188		II	剥 片	黒色頁岩	1.30	3.12	0.98	5.10	292.76	
189		II	剥 片	黒色安山岩	2.75	2.33	1.42	2.60	292.45	
190		II	剥 片	黒色頁岩	(1.14)	(0.92)	(0.15)	0.20	292.49	
191		II	剥 片	黒色頁岩	2.38	1.40	1.15	3.90	292.54	
192		II	剥 片	黒色頁岩	(2.10)	(1.40)	(0.75)	1.80	292.40	
193		II	剥 片	黒色頁岩	3.02	2.20	1.15	4.40	292.58	
194		II	剥 片	黒色安山岩	(1.62)	(1.56)	(0.32)	1.10	292.41	
195	71	II	剥 片	黒色頁岩	2.10	2.45	0.52	2.20	292.58	
196		II	剥 片	黒色頁岩	(2.30)	(1.15)	(0.25)	0.60	292.54	
197		II	剥 片	変質安山岩	(2.65)	(1.42)	(0.76)	2.30		
198		II	剥 片	黒色頁岩	(1.15)	(0.90)	(0.08)	0.10	292.64	
199		II	剥 片	黒色頁岩	(2.00)	(1.35)	(0.40)	0.66	292.55	
200		II	剥 片	黒色頁岩	(3.05)	(2.22)	(0.59)	3.30	292.64	
201		II	剥 片	黒色頁岩	(1.90)	(1.10)	(0.35)	0.50	292.38	
202		II	剥 片	黒色頁岩	2.80	2.20	0.68	3.10	292.44	
203		II	剥 片	黒色頁岩	1.92	2.70	0.45	2.70	292.34	
204		II	剥 片	黒色頁岩	(1.50)	(1.05)	(0.35)	0.30	292.34	
205		II	剥 片	黒色頁岩	(1.90)	(3.12)	(0.50)	3.50	292.24	
206		II	剥 片	黒色頁岩	2.00	2.49	0.90	3.20	292.14	
207	45	VII	剥 片	黒色頁岩	4.20	5.00	0.80	29.80	292.50	
208	33	VII	剥 片	黒色安山岩	3.32	4.90	1.80	45.50	292.60	
209	54	VII	剥 片	黒色頁岩	2.52	1.75	1.00	4.30	292.44	
210		VII	剥 片	変質岩	(2.30)	(1.32)	(1.36)	4.00	292.41	
211	45	VII	剥 片	黒色頁岩	1.60	2.98	0.50	3.10	292.32	
212	42	VII	剥 片	黒色安山岩	2.75	2.67	0.85	5.80	292.44	
213		VII	剥 片	黒色頁岩	2.25	2.45	0.85	3.90	292.52	
214		VII	剥 片	黒色安山岩	(1.23)	(0.75)	(0.23)	0.20	292.44	
215	5	VII	スクレイパー	黒色安山岩	3.70	3.20	1.10	11.50	292.39	
216		VII	剥 片	黒色安山岩	4.47	2.83	1.02	14.00	292.21	
217	50	VII	剥 片	黒色安山岩	3.35	4.02	1.20	15.60	292.19	

遺物 番号	整理 番号	出土位置 (ブロック)	器 種	石 材	計 測 値				標高値	備 考
					長さ	幅	厚さ	重 量		
218		VII	剥片	黒色頁岩	2.60	1.98	0.98	4.60	292.18	
219	55	VII	剥片	黒色頁岩	3.05	2.22	1.03	5.70	292.27	
220		VII	剥片	黒色頁岩	5.71	1.91	1.02	12.40	292.27	
221		VII	剥片	黒色安山岩	5.78	2.50	1.70	39.50	292.08	
222	69	VII	剥片	黒色安山岩	4.77	3.97	1.58	31.20	292.12	
223	49	VII	剥片	黒色安山岩	9.18	5.00	2.00	64.90	292.08	
224	41	VII	剥片	黒色頁岩	4.25	2.70	1.02	12.20	292.15	
225	40	VII	剥片	黒色頁岩	1.70	1.08	0.60	1.30	292.12	
226	44	VII	剥片	黒色頁岩	4.18	5.22	1.76	36.80	292.04	
227	37	VII	剥片	黒色安山岩	2.92	2.23	0.92	7.50	292.32	
228		VII	剥片	黒色頁岩	(0.98)	(1.05)	(0.52)	0.50	292.18	
229										欠番
230		VII	剥片	黒色安山岩	(1.85)	(0.88)	(0.39)	1.00	292.15	
231		VII	剥片	黒色頁岩	2.58	2.00	0.47	2.50	292.32	
232		VII	剥片	黒色頁岩	3.07	1.83	0.40	2.40	291.97	
233	40	VII	剥片	黒色頁岩	3.45	3.43	0.95	12.10	292.41	
234		VII	礫	砂岩	(2.40)	(2.28)	(1.40)	8.20	292.05	
235	90	III	剥片	黒色頁岩	3.03	3.48	0.86	10.21	292.24	
236		II	剥片	黒色頁岩	3.10	3.40	0.50	7.80	292.64	
237		II	剥片	黒色安山岩	(3.35)	(1.80)	(0.75)	3.90	292.72	
238	102	II	敲石	輝緑岩	6.60	5.15	3.90	18.90	292.55	
239	66	II	剥片	黒色安山岩	4.00	1.30	0.35	2.20	292.62	
240		VI	剥片	黒色安山岩	4.28	2.38	1.22	12.00	293.70	
241										欠番
242		VI	剥片	黒色安山岩	(1.32)	(0.85)	(0.15)	0.20	293.62	
243		VI	剥片	黒色安山岩	(2.18)	(1.04)	(0.41)	0.70	293.63	
244	82	VI	剥片	黒色安山岩	5.89	3.56	1.66	30.00	293.63	
245	84	VI	剥片	黒色安山岩	(2.60)	(3.90)	(0.90)	8.50	293.60	
246		VI	剥片	黒色安山岩	(1.50)	(0.82)	(0.17)	0.20	293.52	
247		VI	剥片	黒色安山岩	2.13	4.65	2.06	30.70	293.55	
248		V	剥片	黒色頁岩	0.78	3.63	0.57	2.20	293.27	
249		IV	剥片	珪質変質岩	(2.02)	(1.75)	(1.10)	3.60	293.53	
250	79	II	剥片	黒色頁岩	2.62	3.10	0.25	2.30	292.65	
251	16	II	使用痕	黒色頁岩	5.12	7.75	2.07	86.40	292.55	
252	77	II	剥片	黒色頁岩	3.80	4.85	1.57	32.40	292.71	
253		II	剥片	黒色安山岩	(1.42)	(1.27)	(0.18)	0.40	292.72	
254		II	剥片	黒色安山岩	(0.75)	(0.52)	(0.15)	0.10	292.71	
255		II	剥片	ホルンフェルス	2.55	3.63	0.60	6.90	292.54	
256		II	剥片	ひん岩	(4.00)	(2.20)	(1.05)	9.50	292.48	
257		II	剥片	黒色頁岩	(1.80)	(0.46)	(0.16)	0.20	292.61	
258	100	II	敲石	輝石安山岩	12.35	10.50	6.70	1200.00	292.57	
259	106	II	敲石	斑れい岩	17.70	12.30	5.15	1700.05	292.54	
260	101	II	磨石	輝石安山岩	11.40	8.50	7.80	1000.00	292.54	
261										欠番

第VI章 諏訪西遺跡

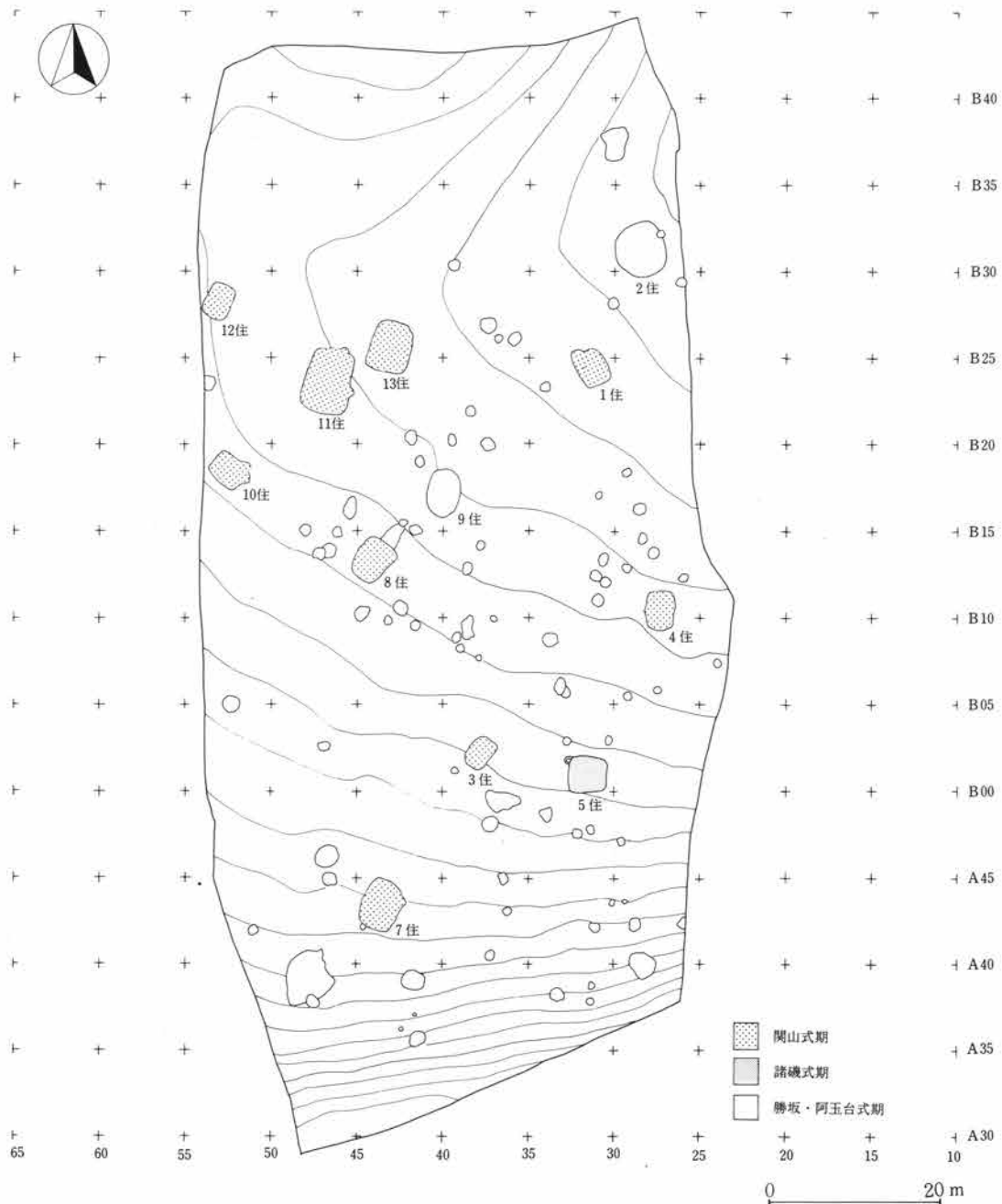
遺物 番号	整理 番号	出土位置 (ブロック)	器 種	石 材	計 測 値				標高値	備 考
					長さ	幅	厚さ	重 量		
262		II	剥 片	黒色頁岩	2.05	3.49	1.05	5.50	292.53	
263										欠番
264		II	剥 片	黒色頁岩	(1.37)	(0.78)	(0.20)	0.30	292.63	
265		II	剥 片	黒色頁岩	(1.70)	(1.05)	(0.65)	0.70	292.57	
266		II	剥 片	黒色頁岩	(1.86)	(0.90)	(0.15)	0.30	292.51	
267		II	剥 片	黒色安山岩	(2.25)	(0.58)	(0.58)	0.70	292.48	
268		II	剥 片	黒色頁岩	(4.15)	(2.30)	(1.60)	14.90	292.46	
269		II	剥 片	黒色頁岩	4.60	5.80	2.10	86.70	292.53	
270	103	II	敲 石	石英閃緑岩	12.20	10.80	4.75	563.00	292.67	
271		II	剥 片	黒色頁岩	3.55	2.02	0.66	3.37	292.44	
272		II	剥 片	黒色安山岩	(1.22)	(0.99)	(0.45)	0.50	292.43	
273		II	剥 片	黒色安山岩	(2.30)	(1.65)	(0.42)	1.80	292.38	
274		II	剥 片	黒色頁岩	(2.18)	(1.38)	(0.65)	2.00	292.29	
275	43	VII	剥 片	黒色頁岩	3.90	3.77	0.82	12.40	292.22	
276		VII	剥 片	黒色頁岩	(1.95)	(1.35)	(0.48)	1.10	291.97	
277	53	VII	剥 片	黒色頁岩	4.90	4.42	1.62	42.50	292.08	
278	59	VII	剥 片	黒色安山岩	2.27	3.22	1.15	7.90	293.54	
279	32	VII	剥 片	黒色安山岩	3.40	5.38	2.02	33.80	292.41	
280		V	剥 片	黒色頁岩	1.42	3.90	0.38	3.20	293.05	
281		I	剥 片	黒色安山岩	3.05	3.17	1.15	10.97	292.90	
282	39	I	剥 片	黒色安山岩	4.45	4.67	1.80	38.86	292.76	
283		I	剥 片	黒色頁岩	5.50	4.10	1.66	29.03	292.82	
284		I	剥 片	黒色頁岩	(3.25)	(2.20)	(1.25)	8.58	292.85	
285	38	I	剥 片	黒色安山岩	4.00	2.80	0.90	14.23	292.70	
286		I	剥 片	黒色安山岩	(2.75)	(1.80)	(0.45)	2.07	292.64	
287		I	剥 片	黒色頁岩	1.52	1.52	0.63	2.18	292.87	
288		I	剥 片	黒色頁岩	4.90	3.52	1.21	25.25	292.55	
289										欠番
290		I	剥 片	黒色頁岩	3.92	2.64	1.18	13.95	292.57	
291		I	剥 片	黒色安山岩	(1.78)	(1.15)	(0.52)	0.87	292.67	
292		I	礫	輝石安山岩	(2.08)	(1.72)	(1.06)	4.20	292.58	
293		I	剥 片	変質岩	(1.90)	(1.72)	(0.72)	3.45	292.51	
294		I	剥 片	黒色頁岩	1.42	1.40	0.78	1.69	292.56	
295	13	I	二次加工痕	黒色頁岩	1.10	0.95	0.55	0.71	292.44	
296	13	I	二次加工痕	黒色頁岩	1.40	1.30	0.60	1.29	292.44	
297		I	剥 片	変質安山岩	(3.26)	(2.49)	(1.42)	12.22	292.43	
298		I	剥 片	ひん岩	(2.16)	(1.87)	(0.44)	1.50	292.50	
299		I	剥 片	黒色安山岩	1.39	1.18	0.51	1.34	291.98	
300		I	剥 片	黒色安山岩	2.18	3.30	0.52	3.43	291.95	
301		I	剥 片	黒色頁岩	2.96	1.76	0.30	2.13	292.01	

第 3 節 縄文時代

1 住居址

諏訪西遺跡において検出した住居址は計12軒である。当初の遺構確認時には、13号まで番号を付したが、6号住居址については、調査により住居址とは認められず。欠番とした。

分布状況は第138図に示すように台地中央から南斜西部分に検出されている。時期は前期前葉9軒、前期後半1軒、中期前半2軒で、それぞれの形状は中期に比定される2軒が円または長円形で、他は隅丸長方形ないしは方形に近い形を呈していた。炉址は1・3・4・7・8・10・11・12・13号住居址が石組ないしは、



第138図 諏訪西遺跡全体図

礫を据えたものに埋甕を持つ形態、5号住居址は埋甕炉、2・9号住居址が地床炉であった。柱穴に関しては、1・3・4・5・8・10・12・13号住居址については壁柱穴を持ち、2・9号住居址は4ないしは6本の支柱穴を持つ。13号住居址については、ほとんど掘り込みが認められず、住居址内より2次的な火熱を受けたこぶし大の礫が集中して出土しており、他の住居址とはやや異質な感がある。また柱穴も検出できなかった。規模は11号住居址が最も大きく、掘り込みも深かった。各住居址の詳細については次項以降で述べて行くこととするが、一集落と捉えた場合前期前葉について見れば、下記のような状況が窺える。

1・3・4・7・8・10・11・12・13号住居址については、若干の時間差はあろうが、ほぼ同時期として捉えられよう。その中で1・3・4・10・12号住居址は位置、形態等より見てもほぼ同時に存在した可能性が強い。これらの住居により囲まれた場所は共同の広場として意味を持っていたことも考えられ、11・13号住居址の持つ、他の住居址との違いも、このような背景があったのではないだろうか。住居址の分布は調査区外にも若干広がることは予想されるが、今回の調査で検出した遺構は前期における集落の構造を知る上でも新しい資料となり得るものであろう。

1号住居址 (第139図)

調査区の中央やや北東寄り、30～32-B23～25グリッドに位置する。形状は、隅丸長方形を呈し、主軸方向は、N-28°-Wである。

規模は、径4.25×3.20mで、壁の高さは約45cmである。各壁はほぼ垂直に掘り込まれており、北西コーナーに土壇の重複が見られた。

壁柱穴がほぼ全周している。径15～20cm、深さは10～30cm程で形状のはっきりとしないものが多く、溝状になっているものもある。

支柱穴は、6本と考えられる。東側は縦に3本並んでいるが、西側は不規則な並び方を示しており、壁柱穴と併用ということも想定できる。

床面は、かなりしっかりとしており凹凸も少ない。ローム粒と黒色土混土を入れ込んで踏み固めている。本址は、覆土中よりローム粒子と炭化物が多く検出されており、東壁際には多量の炭化物が流れ込むような状態で見られた。また床面上には、炭化材が若干見られ、床面全体に炭化物が散在しており、火を受けたと考えられる。埋土も人為的である。

1号住居炉址 (第141図)

住居址中央やや北寄りに設けられていた。川原石および石皿の転用材を使った石組炉である。底に幅20cm長さ30cm、厚さ6cm程の偏平な石を置き、周りにコの字状に石を据えている。炉の周辺は、深さ10cm程すり鉢状に凹んでおり、炉の前面に径20cm、深さ20cm程のピットが検出されている。埋甕を抜きとった痕と考えられ、底の部分がかなり焼土化している。

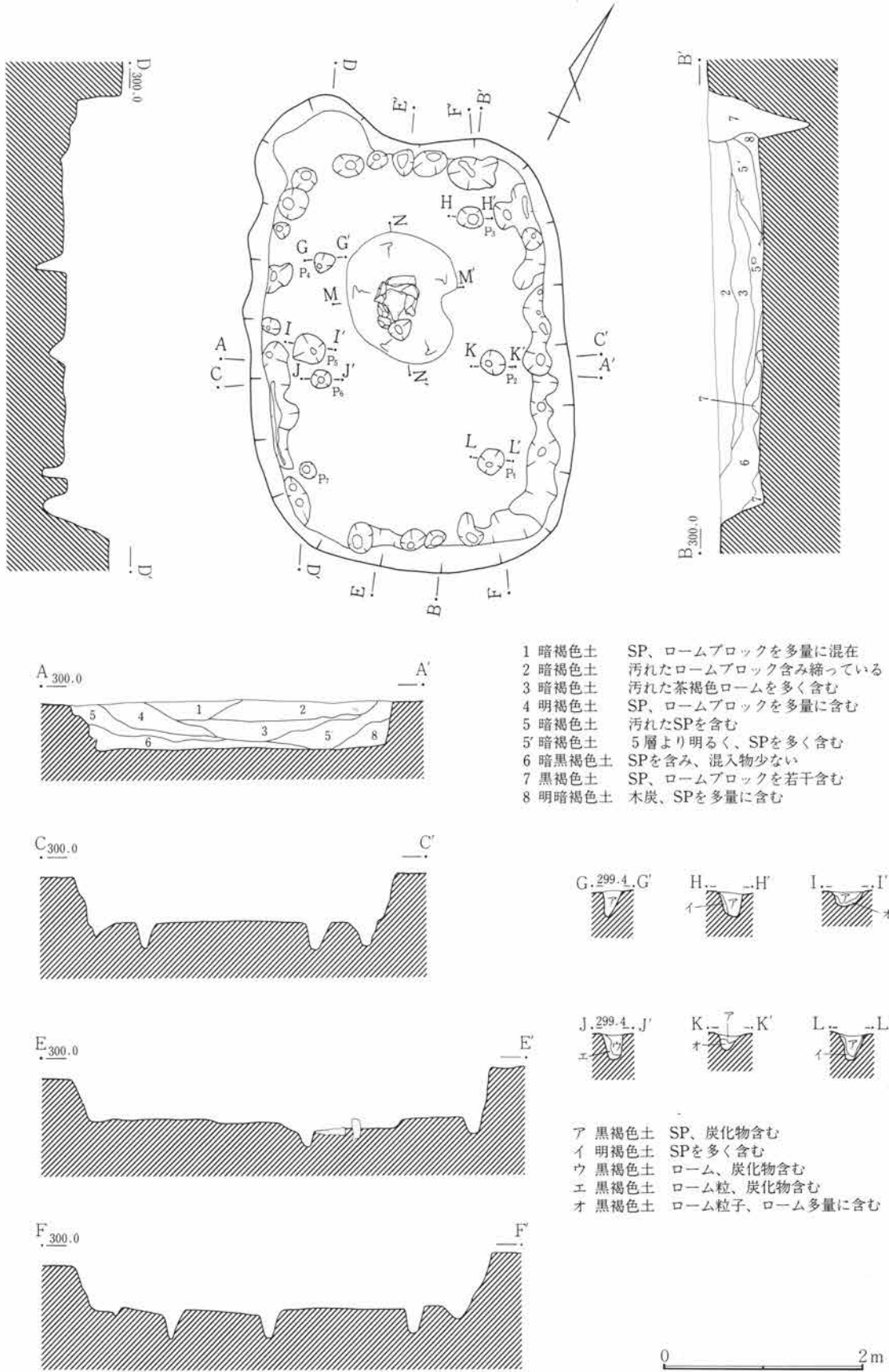
炉の中および周辺には焼土は少なく、若干の炭化物がローム粒子を含んで堆積していた。

遺物出土状態 (第140図)

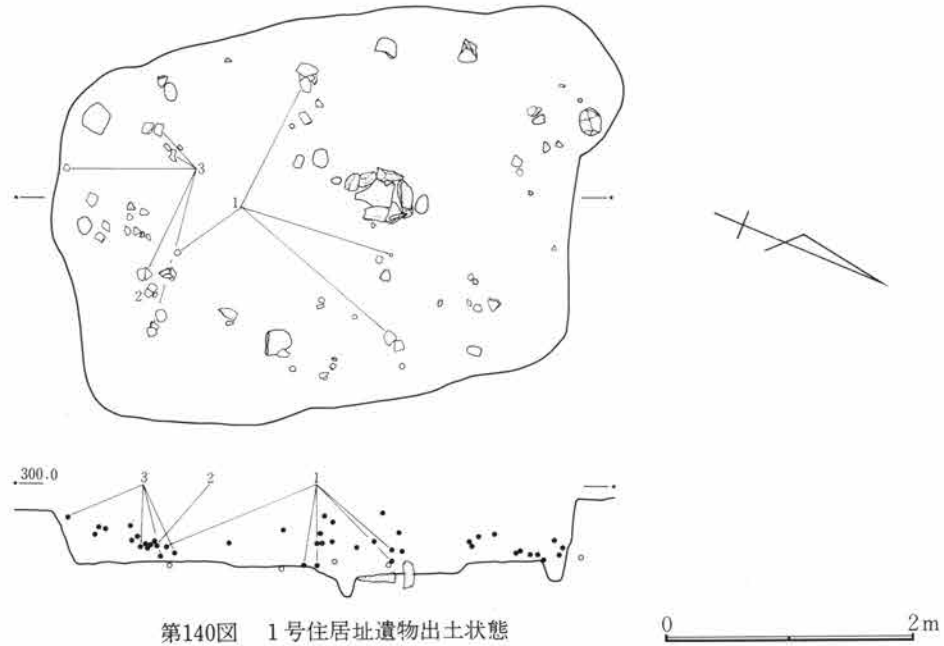
出土遺物は、住居址の壁に沿って廻るような状況で出土している。第142図-1の深鉢は、3号住居址出土のものと同接合した。石器類は床面近くより出土したものが多かった。(小野)

出土土器 (第142・143図)

1は口縁が平縁で深鉢形となる無文の土器である。2は口縁が平縁な小形の深鉢形となるもので、口縁部に数条の併行沈線が廻らされ、その間に併行沈線を鋸歯状に施す。また沈線間には刻みをもつ。胴部上半に

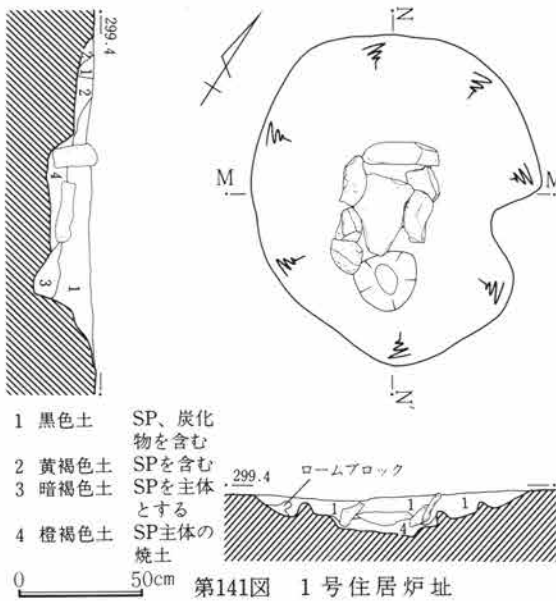


第139図 1号住居址



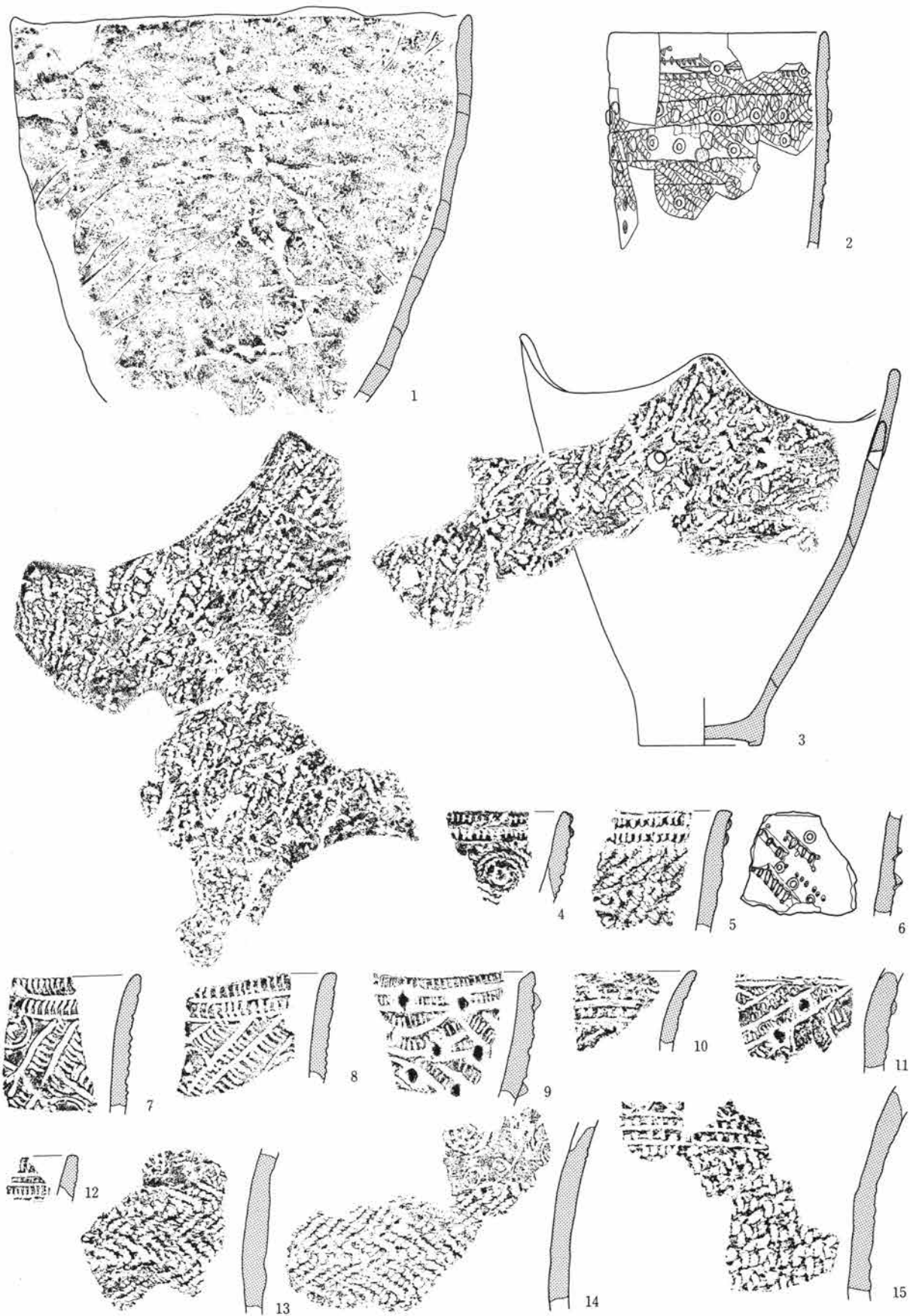
第140図 1号住居址遺物出土状態

は閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施し、下半には閉端環付のRLを数段施す。さらに竹管状施文具による円形刺突文を全面に、瘤状の貼付文を胴部に施している。3は口縁が波状口縁となる深鉢形で、口縁部下に孔を有する。文様は口縁以下にR・Rの2本による結節回転を施し、底部がやや上げ底となるもの。4・5・6は刻目をもつ隆帯を施したものである。平口縁で、口縁直下に2条の刻目をもつ隆帯を廻らせ、口縁部文様に撚糸側面圧痕文及び円形刺突文を施したもの4。平口縁で、口縁直下に刻目をもつ隆帯を廻らせ、それ以下に閉端環付のLRを施したもの5。口縁部に2条の刻目をもつ隆帯を斜位に施すとともに円形刺突文も施したもの6。7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17は、口縁部文様に併行沈線と沈線間の梯子状沈線による文様が主に施されるもので、7・8・10・12・17の平縁となり、梯子状沈線をもつ併行沈線による文様を口縁直下に数条廻らせ、その下に上下区画線連結ないしは鋸歯状に描いたもの。16は双頭の波状口縁となり、梯子状沈線をもつ併行沈線による文様を、口縁直下に1条廻らせ、その下に蕨手状等を

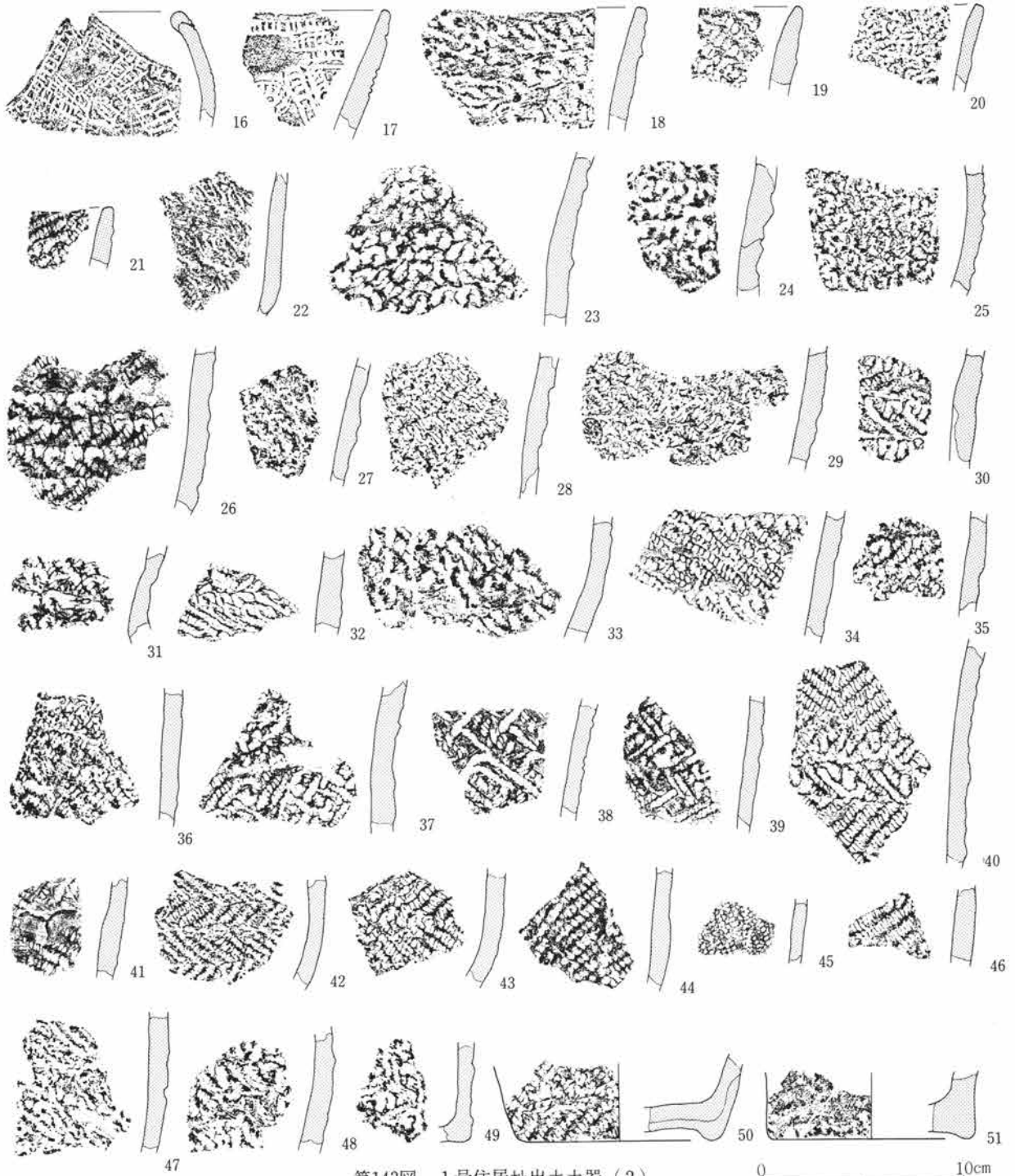


第141図 1号住居炉址

描いたもの。14は口縁部に梯子状沈線をもつ併行沈線による文様で蕨手状を描きさらに沈線で円形文を施し、胴部にLR・RLの結束による羽状縄文を施したもの。15は頸部に梯子状沈線をもつ併行沈線を廻らせることで、口縁部と胴部との文様帯区画を行ない、胴部に閉端環付のRLを数段施したもの。9・11は口縁部文様に梯子状沈線をもつ併行沈線を施すとともに、瘤状突起の貼付をもつもの。18・19・20・21は、平縁で全面に縄文を施したもので、閉端環付のR・Lによるもの18、LRによるもの19・20・21がある。23・24・25・26・27・28・30・35は、胴部に閉端環付のRL・LRによる羽状縄文を施したもので、0段多条を用いたもの26・28・30もある。29・31・32・33・34・36は、



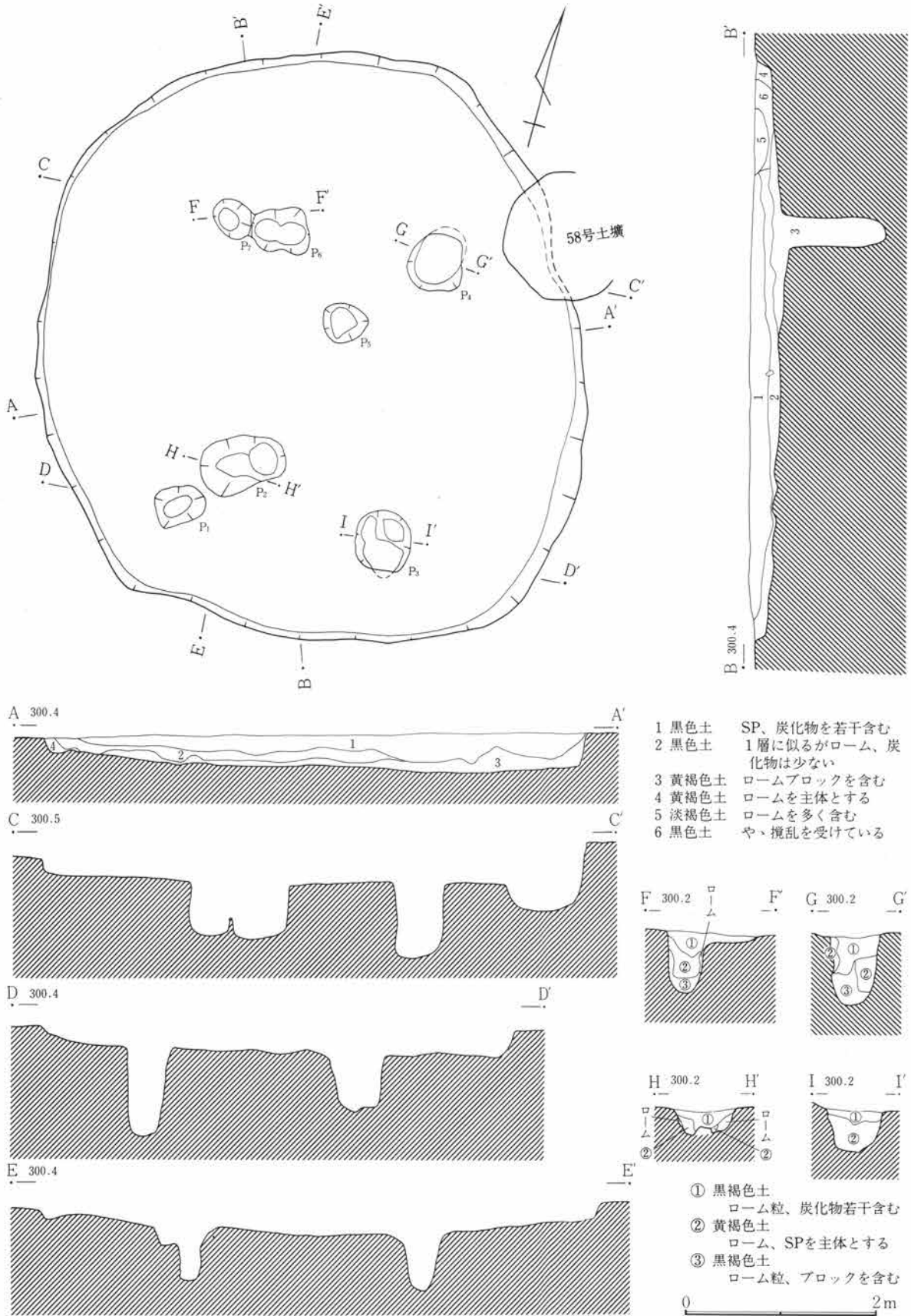
第142図 1号住居址出土土器(1)



第143図 1号住居址出土土器(2)

0 10cm

胴部に閉端環付のRL・LRによる羽状縄文を施したもので、0段多条を用いたもの26・28・30もある。29・31・32・33・34・36は、胴部に閉端環付のRLを施したもので、0段多条を用いたもの29・33もある。37・38・39・40は、胴部に結節回転を施したもので、Rを2本用いた結節のもの37・39と、Rを2本の結節及びLを2本の結節により羽状に施したもの38・40がある。41・42は胴部にLR・RLにより羽状縄文を施すもので、0段多条を用いるもの42もある。43は胴部にRL(0段多条)・LRの結束による羽状縄文を施す。44・45・46・47・48は胴部にRLを施したもので、46は0段多条を使用する。49・50・51は底部である。49は結節回転。50はLR・RLの羽状縄文。51は無文である。(谷藤)



第144図 2号住居址

2号住居址 (第144図)

調査区北東、東壁寄り、27~29-B29~32グリッドに位置する。調査区内では最も高い所で検出された。形状は、東西にややひしゃげた円形を呈す。規模は径6.0m×5.6mで、壁の高さは高所で30cm、平均15cm程で、北側に比べ、南側は削平されており、残りは良くない。北東部分に58号土壙が半分程重複していた。

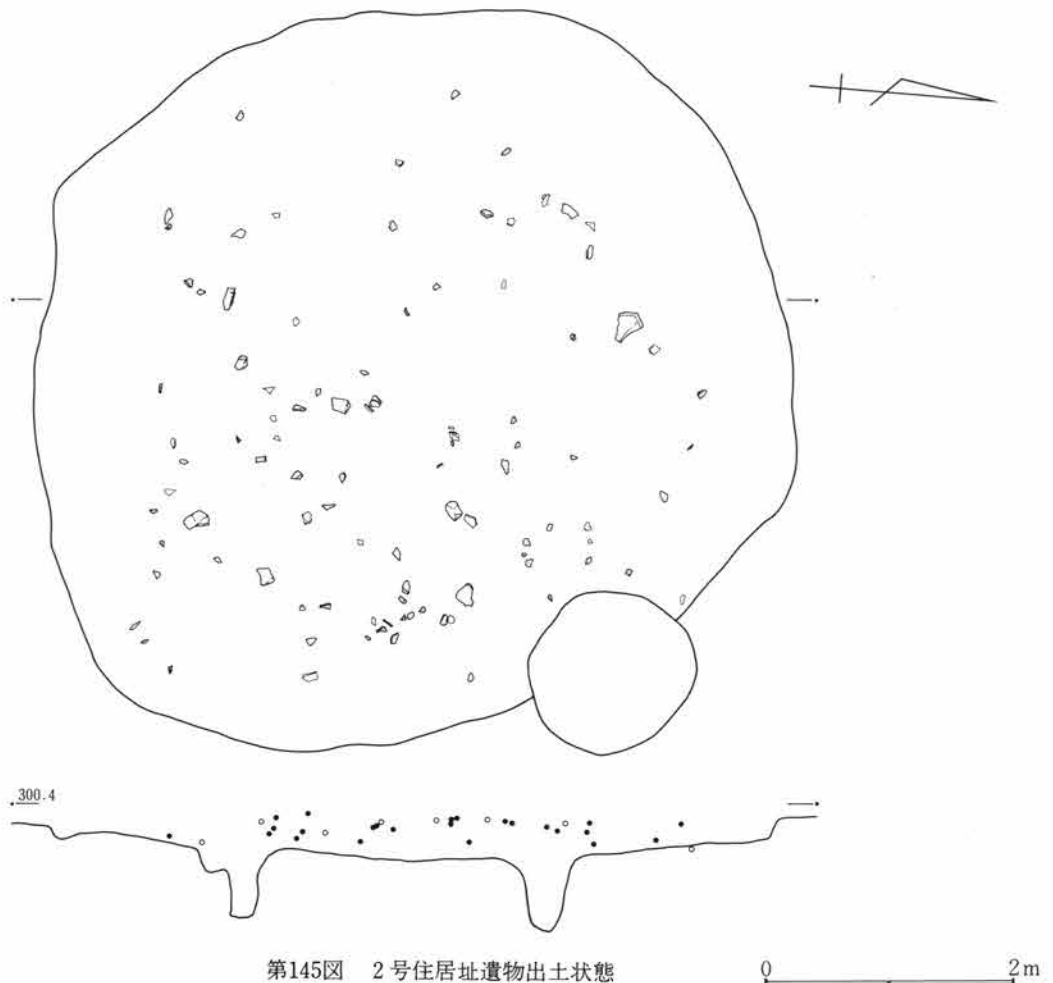
床面は、掘り込んだローム面を踏み固めて地床としており、若干の凹凸はあるものの、比較的平らで、中央部分は堅緻であった。

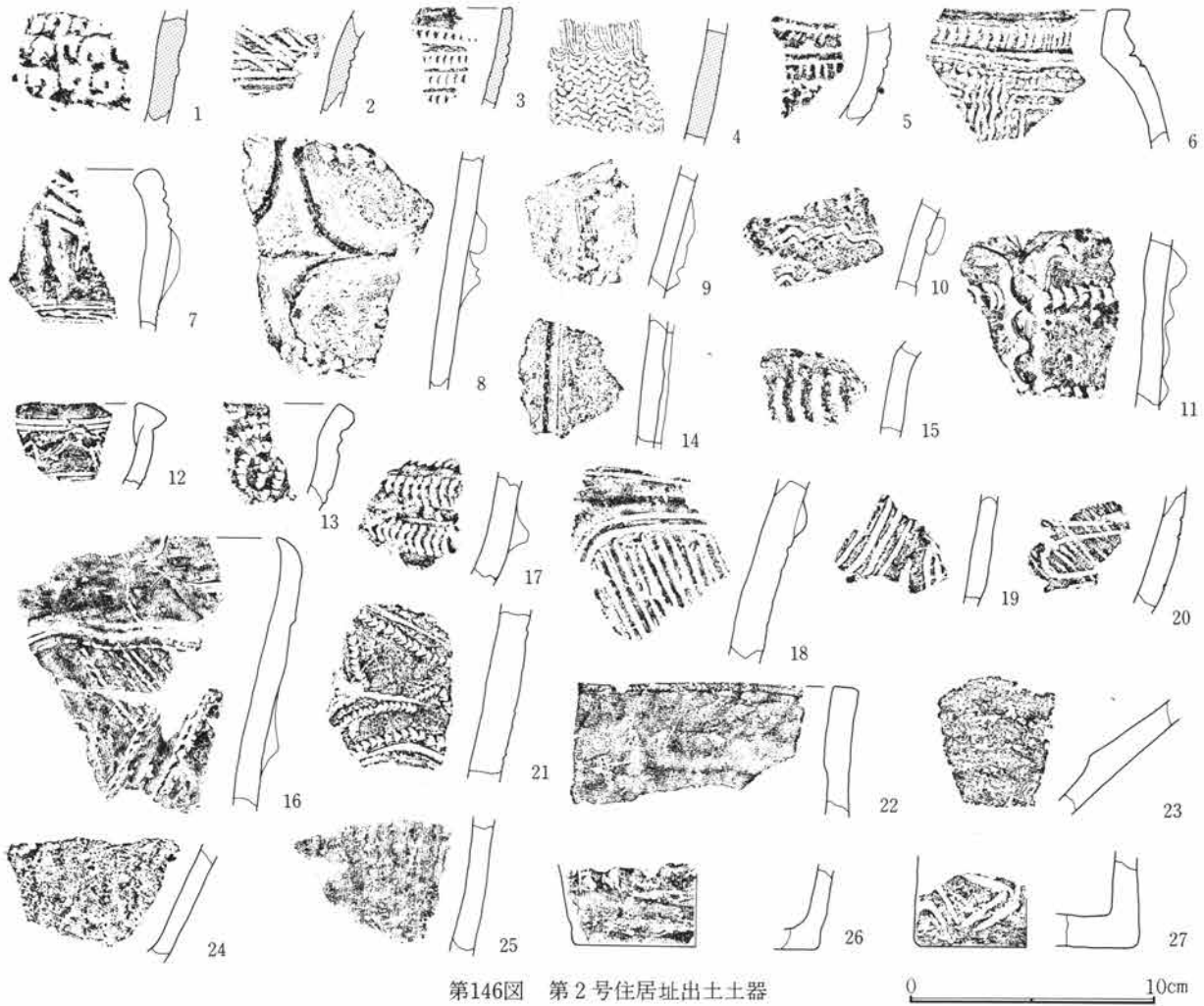
ピットは計7本検出されている。中央部に位置するピット5を除いて柱穴の可能性はある。ピット6、ピット7およびピット1、ピット2はそれぞれ近接しており、形状、覆土等の観察から1回ないし2回の建て替えと考えられる。

それぞれの規模、深さは、ピット1は径50×40cm、深さ90cm。ピット2は径90×50cm、深さ55cm、ピット3は径50×50cm、深さ60cm。ピット4は径60×55cm、深さ80cmで、やや南に傾いた掘り方となっている。ピット5は、中央付近に位置し、径40cm程である。ピット6はひょうたん状で2つのピットが接した形となっている。径60×45cmで深さ55cmである。ピット7は径40×30cm、深さ50cmで、ピット6に接している。なおピット2、ピット3の中より川原石が出土している。中期前半の住居址である。

炉址

明確には認められなかったが、ピット5の周辺より若干の焼土が検出されている。





第146図 第2号住居址出土土器

遺物出土状態 (第145図)

出土遺物は比較的少なかった。土器片30点、石器類184点で、ほぼ全面的に散在していた。

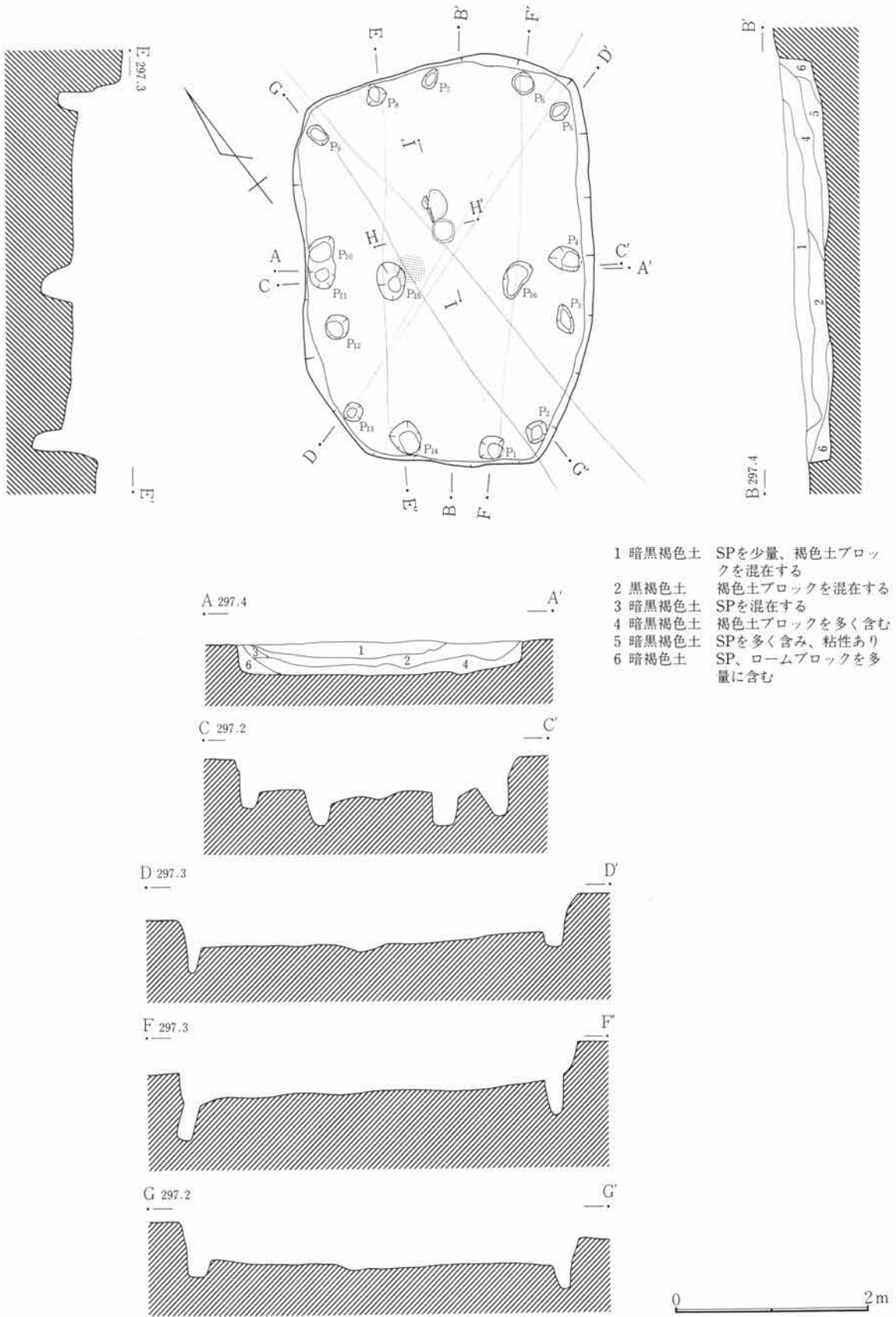
覆土層より出土しているものが多く、特に礫の出土が目立った。

(小野)

出土土器 (第146図)

1は閉端環付のLRを施したもの。2は半截竹管による平行沈線を横・斜位に施したもの。3は平縁で、半截竹管による平行沈線と爪形文が施されたもの。4は櫛状の施文具による上下幅の大きいコンパス文を描き、その下に組紐を施す。5は併行沈線と梯子状沈線が施されたもの。6～27は胎土に雲母を含むものである。6は平縁で、口縁部に半截竹管具による平行沈線と爪形文をもち、頸部以下に平行沈線による文様が施される。7は波状口縁となり、平行沈線と垂下する隆帯が施される。8は胴部に隆帯で文様を施したもの。9・11・14は、胴部に垂下する隆帯をもつもので、11は爪形文を施すものである。10は隆帯をもち、波状に沈線を施したもの。12・13は平縁で、口縁部に平行沈線を施したもの。15は胴部に大きな爪形文を施したものの。16は平縁で、口縁部が無文となり、胴部に隆帯及半截竹管による連続刺突文をもつ。17は胴部に隆帯をもち、大きな爪形文を施したもの。18・19・20は、平行沈線によって文様区画を行ない、区画内にやや斜位に条線を施したもの。21は胴部に沈線及び竹管具による連続的な刺突を施すもの。22・23・24・25は無文のものであり、22は平縁となる。26・27は底部である。

(谷藤)



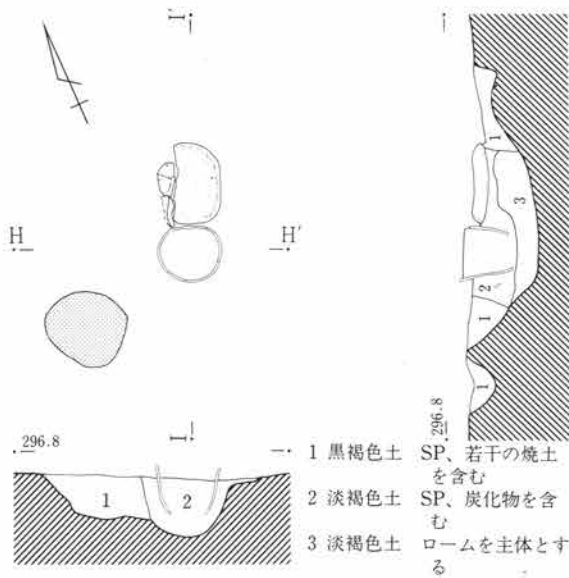
第147図 3号住居址

3号住居址 (第147図)

調査区中央、やや南寄り、37~38-B01~03グリッドに位置する。規模は、径4.1×2.9mで、形状は隅丸長方形を呈するが、北側が若干開いた形となる。今回検出した住居址でもっとも規模が小さい。

主軸方向は、N-38°-Eである。残壁高は平均40cm程である。各壁は、ほぼ垂直に近い状態で立ち上がる。床面は、若干の凹凸を持ち、南側がやや低くなっている。その比高差は、15cm程である。

柱穴は、壁に沿って14本が検出された。規模は、ピット1が径30×25cm、深さ35cm。ピット2が径25×20cm、深さ25cm。ピット3が径30×20cm、深さ10cm。ピット4が径30×23cm、深さ28cm。ピット5が径22×18cm、深さ15cm。ピット6が径24×22cm、深さ36cm。ピット7が径22×14cm、深さ10cm。ピット8が径22×20cm、深さ24cm。ピット9が径25×15cm、深さ18cm。ピット10が径28×24cm、深さ14cm。ピット11が径24×23cm、深さ17cm。ピット12が径26×24cm、深さ16cm。ピット13が径22×20cm、深さ26cm。ピット14が径33×28cm、深さ29cm。ピット15が径40×30cm、深さ28cm。ピット16が径40×20cm、深さ34cmである。それぞれのピット



第148図 3号住居炉址

トがやや内側へ傾くように掘り込まれていた。

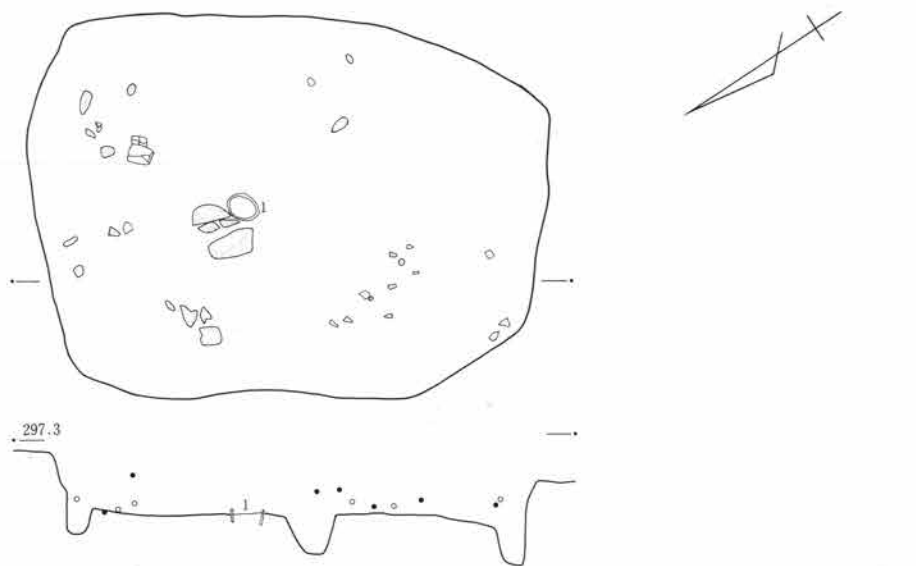
炉址 (第148図)

中央がやや北寄りに埋甕炉が検出されている。その北側に半裁された長さ30cm、幅15cm程の川原石と2個の礫が置かれていた、埋甕は底を抜かれており、口縁部4cm残して埋設された状態あった。南側には径30×40cmの範囲に、焼土の堆積が見られた。

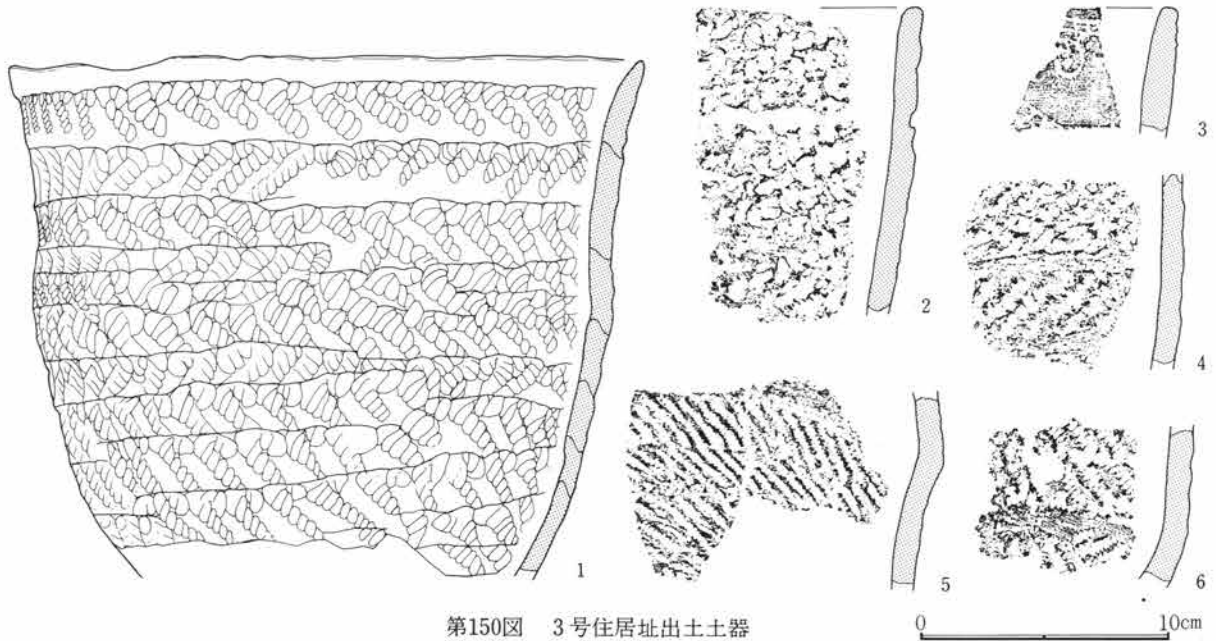
若干の焼土、炭化物が周辺に見られたが、土器の中にはほとんど検出さなかった。

遺物出土状態 (第149図)

出土遺物は、多くはなく、石器、礫に混じって、数片の土器が出土したのみである。第150図-1は埋甕炉に使用されていたものである。石器は、打製石斧および



第149図 3号住居址遺物出土状態



第150図 3号住居址出土土器

石皿が炉の転用材として出土している。

(小野)

出土土器 (第150図)

1は平縁となり、胴部がややふくれる深鉢形を呈する。口縁部に狭い無文帯をもち、胴部には閉端環付のRL・LRによる羽状縄文施される。2は平縁で全面にL $\langle \frac{R}{R} \langle \frac{L}{R} \rangle \frac{L}{R}$ を施す。3は口縁部に梯子状沈線をもつ併行沈線により斜位・蕨手状等の文様を描く。4・6は胴部にLR・RLにより羽状縄文を施す。5は胴部に開端他条(繊維束)結縛をもつRL(0段多条)を施し、その下に開端他条結縛をもつR $\langle \frac{L}{R}$ を施したものである。

(谷藤)

4号住居址 (第151図)

調査区の中央やや東寄り、26~28-B09~11グリッドに位置する。約北半分が農道下であったため、南側を先行調査し、残りを農道移設後に行なった。平面形状はやや小形の隅丸長方形を呈す。主軸方向はN-3°-Eである。規模は、径4.6×3.2mである。

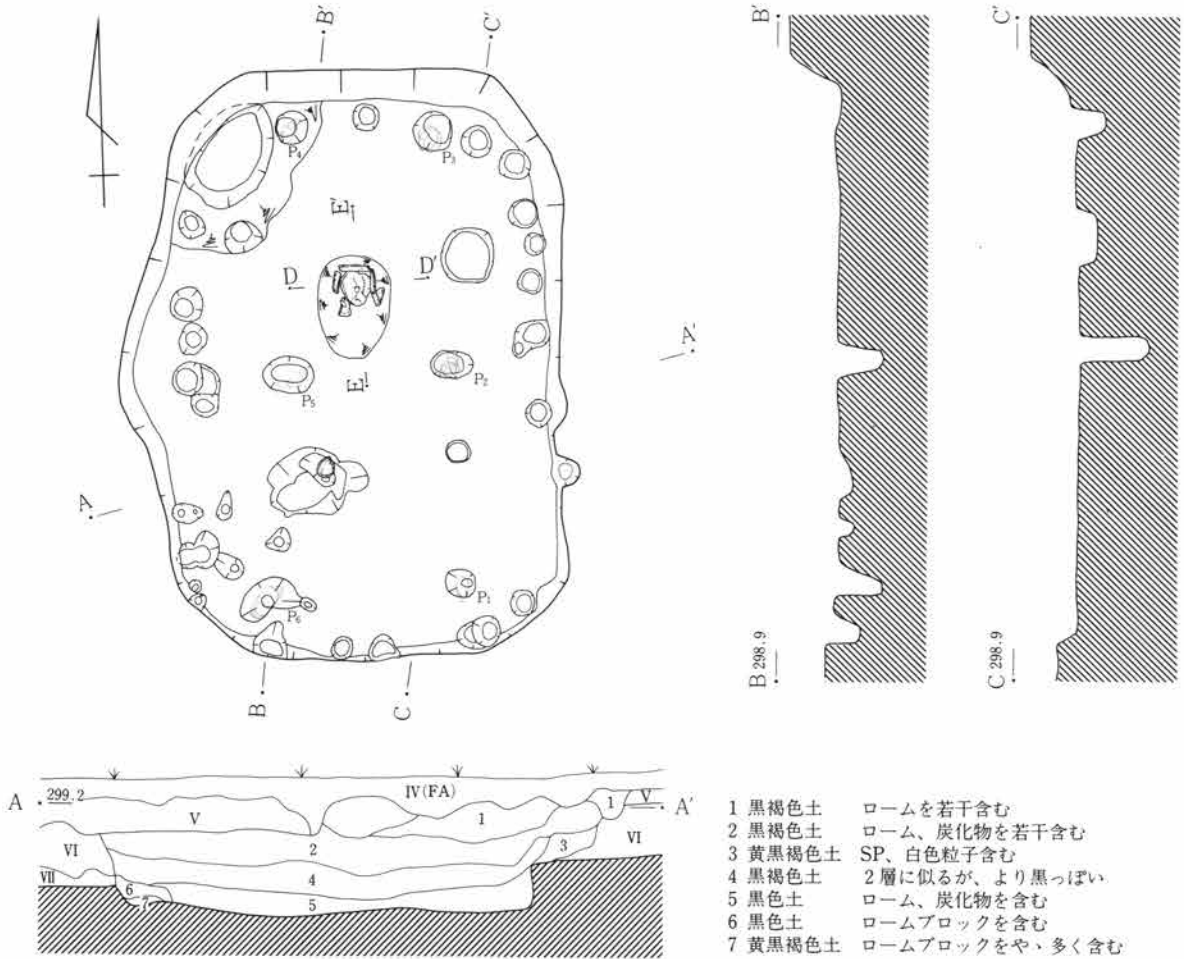
各種の残りは良くなく、北側が良好で40cm、南側は5cm程である。北壁はやや斜めに立ち上がる。

主柱穴は、ピット1~ピット6までの6本と考えられるが、並び方はやや不定であった。ピット1は径25×20cm、深さ35cm。ピット2は径35×22cm、深さ55cm。ピット3は径35×35cm、深さ20cm。ピット4は径30×25cm、深さ32cm。ピット5は、径40×25cm、深さ36cm。ピット6は径45×20cm、深さ35cmであった。また、径20~15cm、深さ20~40cmの壁柱穴が20箇所程設けられているが、南側部分は数が少ない。掘り込みは住居内側にやや傾いている。

床面は、平らで良く締っている。主柱穴、壁柱穴の他にも、用途不明のピットがあり、北西コーナーに接して、径100×50cm、深さ45cm程の掘り込みが検出されている。

炉址 (第152図)

中央やや北寄りに、石組炉が設けられていた。30cm程の不正五角形をしたやや偏平な川原石を敷き、その北側からコの字に囲うように石を組んでおり、炉の部分はやや凹んでおり、炉石は若干埋め込まれている。炉の前面には、径35cm、深さ20cm程のピットが検出されており、土器を抜き取った跡と見られる。炭化物、



第151図 4号住居址

0 2m

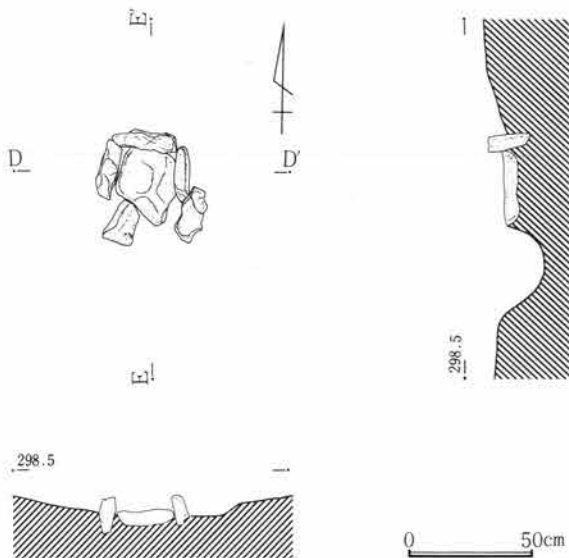
焼土はそれ程検出されなかったが、炉の西側に、炭の堆積が検出された。

遺物出土状態 (第153図)

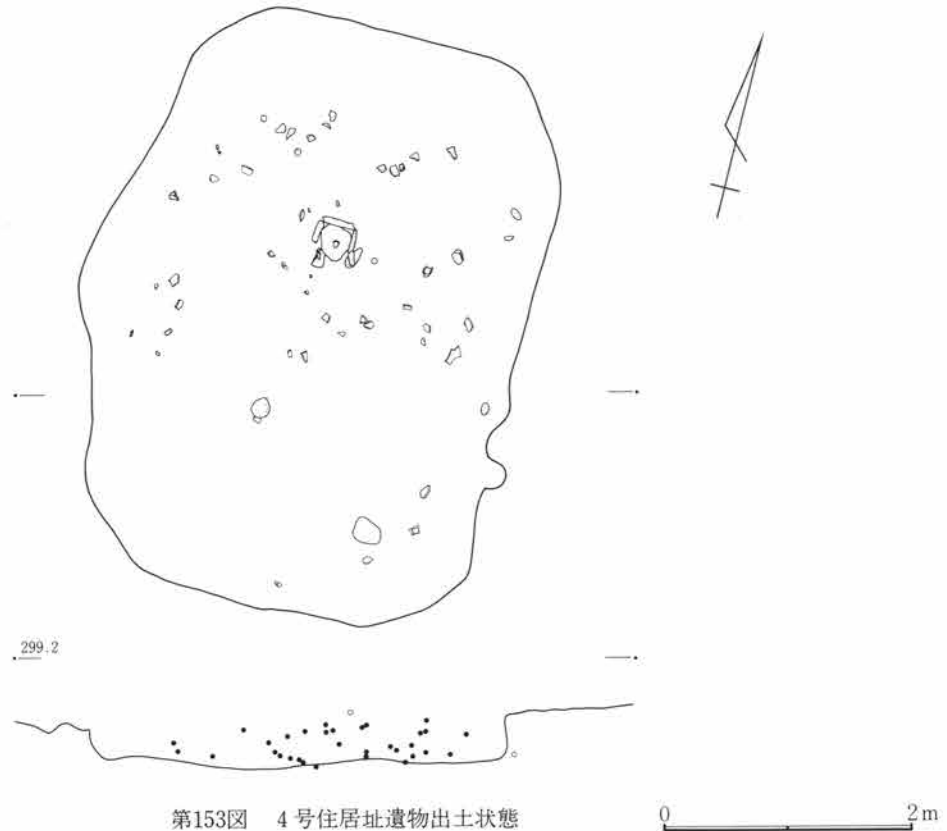
本址からの出土遺物は少なく、器形を推定し得るようなものは無かった。層位的には、床面、覆土中から出土している。石器は、5点出土している。(小野)

出土土器 (第154図)

1は口縁部に刻目をもつ隆帯を廻らせ、円形刺突と蕨手状に捺糸側面圧痕文を施したもの。2・3は口縁下及び頸部に梯子状沈線をもつ併行沈線を数条廻らせ、口縁部に同様の沈線により連結線・蕨手状等の文様を描き、さらに円形刺突・瘤状貼付文を施すものである。4は波状口縁となり、口縁直下に梯子状沈線をもつ併行沈線を廻らせ、口縁部に同様の沈線により文様を描き、円形刺突・瘤状貼付文を施す。5は梯子状沈線をもつ併行沈線で、口縁部文様と胴部文様との区



第152図 4号住居炉址



第153図 4号住居址遺物出土状態

画を行ない、口縁部に山形状に文様を描く。胴部には閉端環付のRL・LRにより羽状に施される。7・8は口縁部に梯子状沈線をもつ併行沈線で、5と同様の文様を描いたもの。6・9・11は頸部に口縁部文様と胴部文様を区画する梯子状沈線をもつ併行沈線を廻らせ、口縁部に同様の沈線で連結線・菱形等を描き瘤状貼付文を施し、胴部には閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施したもの。12・13は平縁で口縁部以下にLR・RLによる羽状縄文を施したもの。14は口縁部に瘤状貼付文をもち、胴部に閉端環付のRLを施したもの。15は平縁で深鉢形を呈するものと思われるもので、口縁部は隆帯が1条廻らせた無文となり、胴部には開部他条結縛をもつ縄文を施したもの。16は波状口縁となるもので、口縁直下に沈線を廻らし以下はRLを施す。17は平縁で口縁部直下に併行沈線を廻らせたもの。18・19・20・21・23・24は胴部に閉端環付のLR・RLにより羽状に施されたもの。22は胴部に閉端環付のRLを施したもの。25・26・27は、胴部にLないしRを2本用いて結節回転を施したもので、羽状となるもの25もある。28・29・30・31は、胴部にLR・RLによる羽状縄文を施したもの。32は胴部にLR・RLの結束による羽状縄文を施したもの。33・34は胴部にLRを施したもの。35は胴部及び底部に半截竹管具による爪形刺突を廻らせる。36はやや上げ底となる底部にも縄文を施すものである。(谷藤)

5号住居址 (第155図)

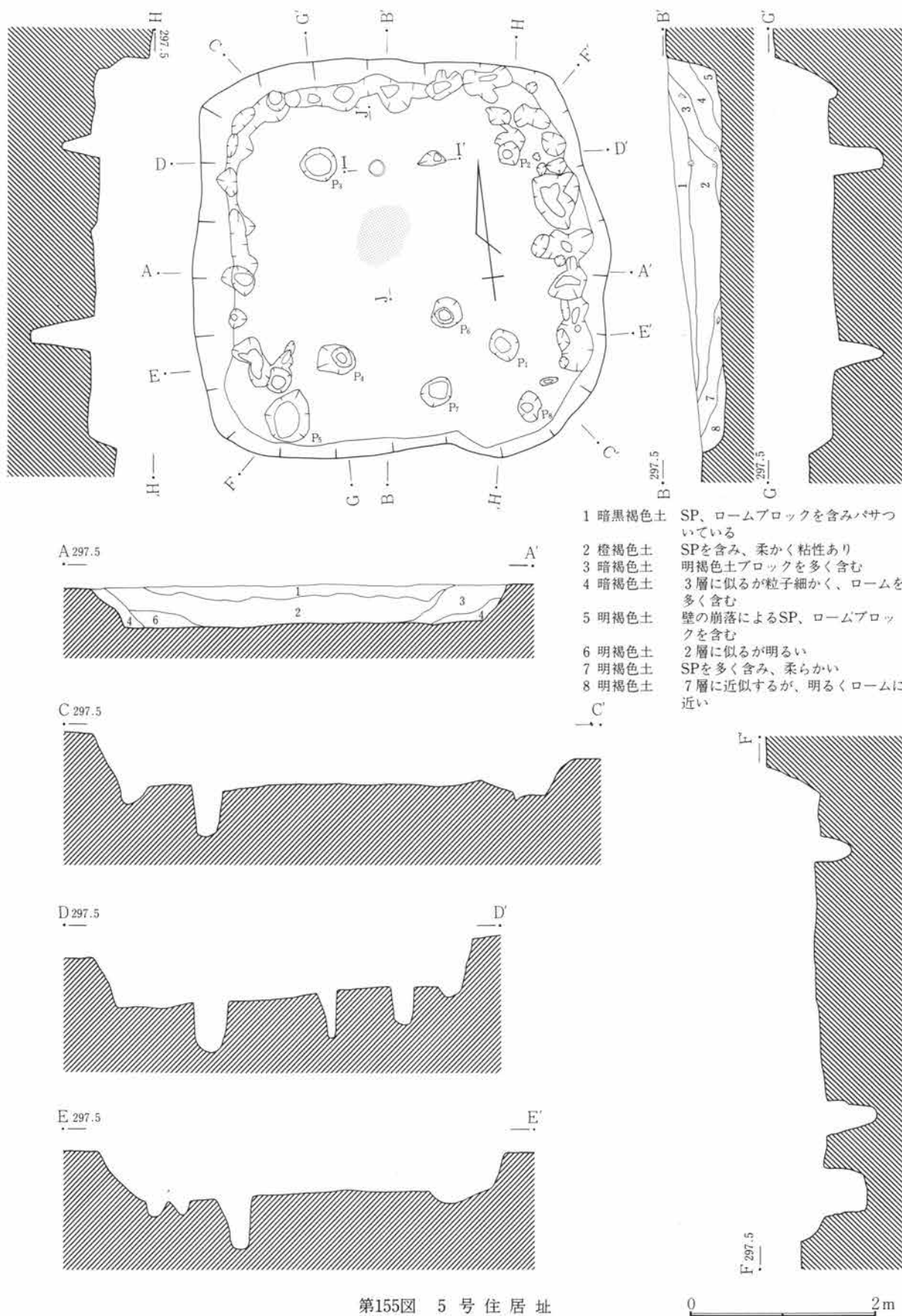
30~32-A49~B01グリッドに位置する。北西コーナーで70号土壌を半分程切っている。形状はほぼ方形を呈し、規模は、径4.45×4.1mである。壁の高さは、北壁側が残存状態が良く60~50cmで、南壁が30cm程である。それぞれの壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方向はN-3°-Eである。

床面は、ほぼ平坦で、部分的にローム混土を入れ込んでいる。中央部分は堅緻で、焼土が検出されている。



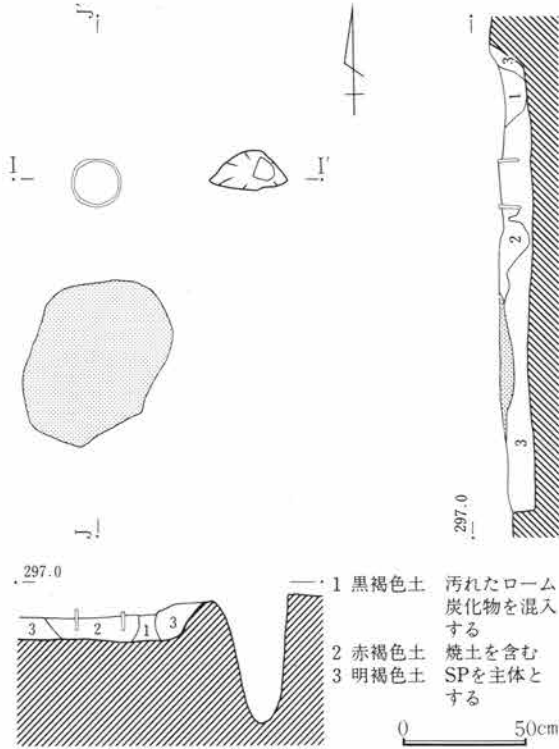
第154図 4号住居址出土土器

0 10cm



第155図 5号住居址

支柱穴はピット1～ピット4の4本と思われる。それぞれの規模は、ピット1が径35×30cm、深さ69cm。ピット2が径25×22cm、深さ40cm。ピット3が径40×35cm、深さ89cm。ピット4が径40×30cm、深さ60cmである。また、ピット5は径60×45cm、深さ46cm。ピット6は径35×30cm、深さ44cm。ピット7は径30×25cm、深さ37cm。ピット8は径35×30cm、深さ22cm。ピット9は径30×15cm、深さ55cmである。



第156図 5号住居炉址

さらに、南壁を除いた各壁際に、溝状に連なる深さ10～15cmの小ピットが検出されている。

炉址 (第156図)

中央やや北より、ピット2とピット3を結んだ線上に、埋甕炉を検出した。深鉢の胴部を利用しており、 $\frac{2}{3}$ 位を埋め込んで作られていた。周辺および炉の南側には焼土がかなり見られ、厚さ約5cmであった。

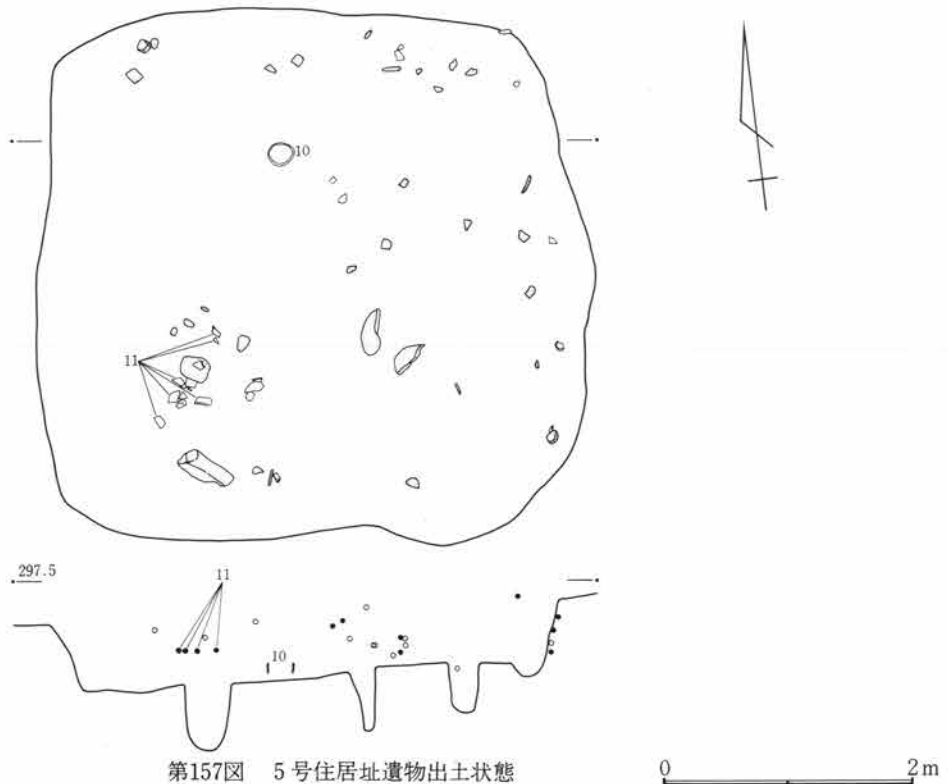
遺物出土状態 (第157図)

出土遺物の中、土器は埋甕として使用されていた10と覆土中の破片が接合した11の他は小破片であった。石器は覆土中より、98点出土しており、石皿は埋没途中で投げ込まれた状況を良く示していた。

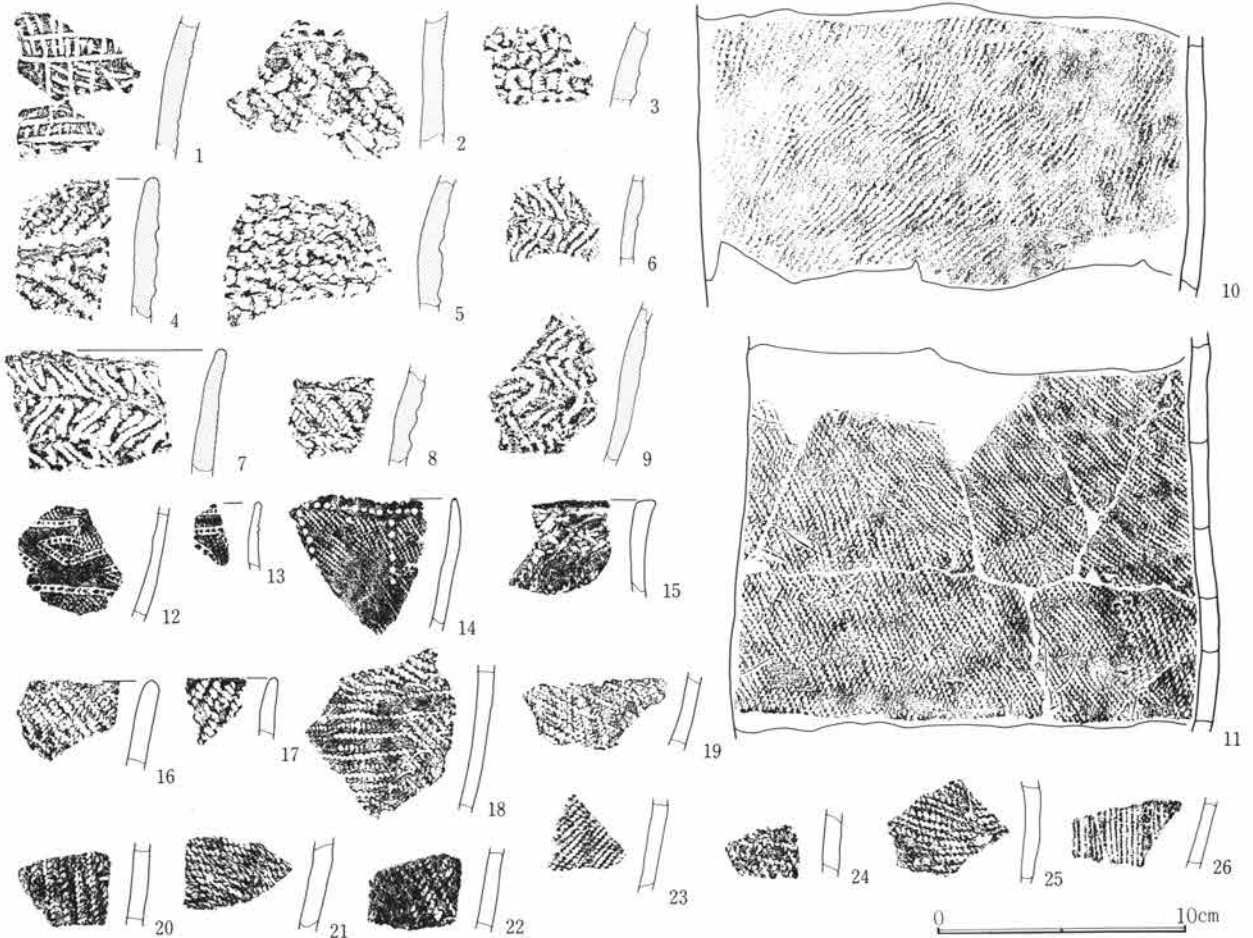
なお本住居址は、諸磯a式期の住居である。(小野)

出土土器 (第158図)

1は口縁部文様に梯子状沈線をもつ併行沈線を施したものの。2は半截竹管具による爪形文をもつ平行沈線で、口縁部と胴部の区画を行ない、胴部にRLを施し



第157図 5号住居址遺物出土状態

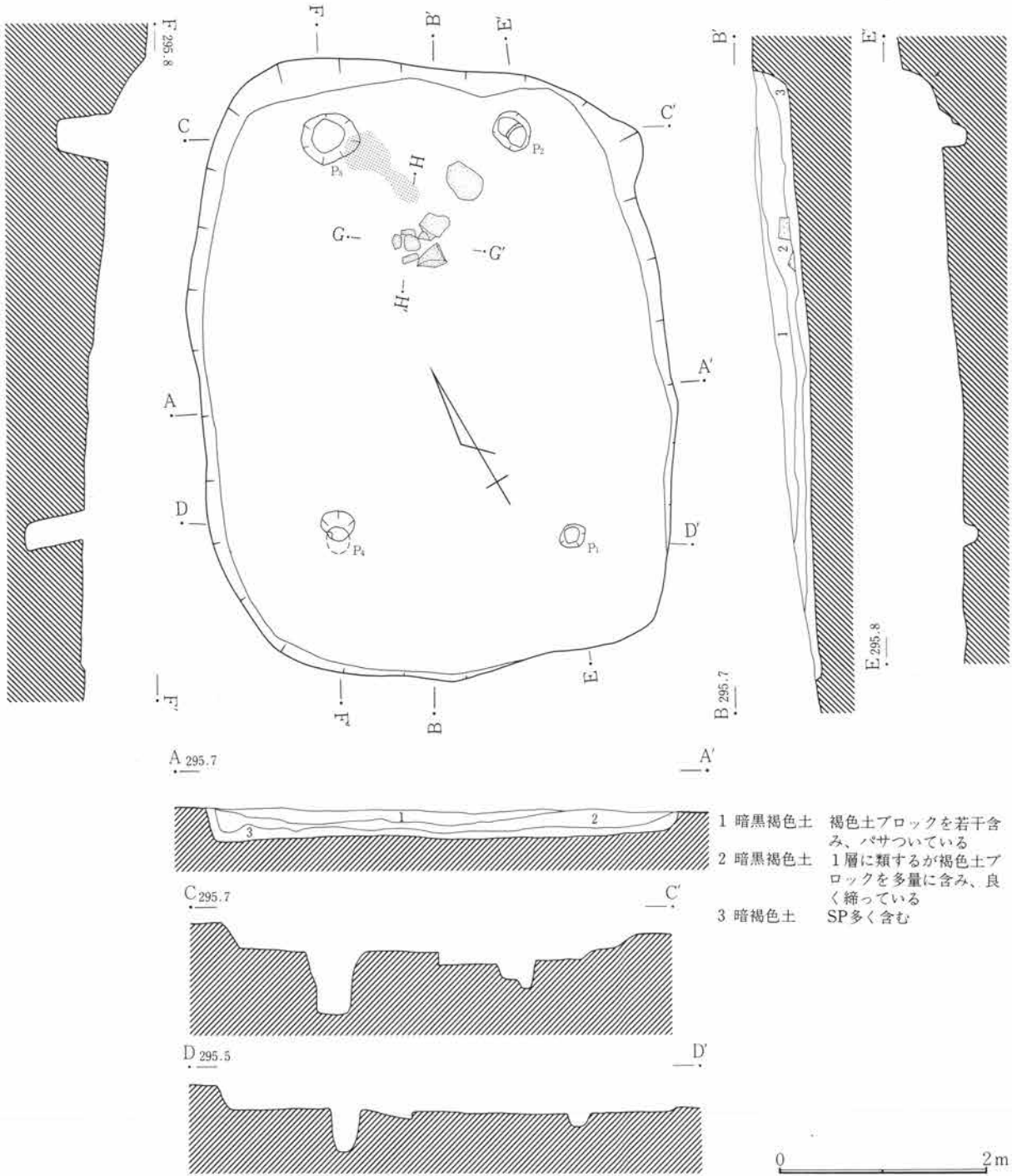


第158図 5号住居址出土土器

たもの。3・4・5は閉端環付のLR・RLにより羽状に施されたもの。5は平縁である。6・7・8・9・はLR・RLによる羽状に施されたもの。7は平縁のものである。10は深鉢形を呈する胴部で、全面にLRが施されたもの。11は胴部がややふくらむ深鉢形を呈するもので、RLが施されたもの。12は半截竹管による爪形文をもつ平行沈線で口縁部地文及び胴部にRLが施されたもの。13は平縁で口縁部に爪形文をもつ平行沈線が施されたもの。14はゆるやかな波状口縁で、口縁に刻目もち、口縁直下に竹管具による円形刺突1条廻らせ、また垂下させる。地文にはRLが施される。15は平縁で、口縁以下にLRの付加条（LRの2本付加）が施されている。16は波状口縁となるもので、口縁以下にLを施したもの。17は平縁で、口縁以下にLRを施したもの。18は胴部にRLを軸とした付加条（RL2本付加）を施したもの。19は胴部にRLと条間隔のあく単軸絡条体を施したもの。20・21・22・23・24・25は胴部にRLを施したもの。26は胴部に細かい条線を施したものである。
 (谷藤)

7号住居址 (第159図)

42~44-A42~44グリッドに位置する。調査区のやや南西寄りで見出した。南壁に82号土壌が重複する。四辺がやや外へ膨んだ隅丸長方形を呈す。規模は、5.3×4.5mで、壁の高さは、北側で最高25cmあるが、南側は削平されており、ほとんど残存していない状況であった。壁の立ち上がりも、不明瞭な部分があり、全体的にゆるやかな掘り込みであった。主軸方向は、N-24°-Eである。

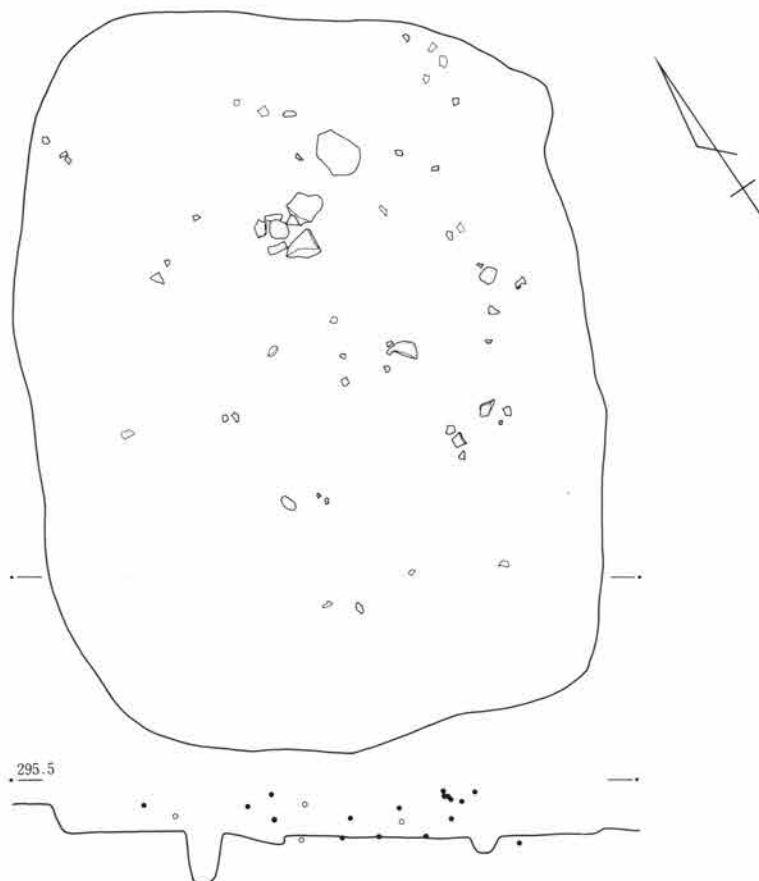


第159図 7号住居址

床面は、はっきりしない部分もあり、あまり堅緻では無く、ゆるく南傾斜を示しており、壁周溝等見られなかった。

柱穴はピット1～4の4本が各コーナー寄りに検出された。規模は、ピット1が28×24cm、深さ14cm、ピット2が36×40cm、深さ60cm、ピット3が53×46cm、深さ50cm、ピット4が30×30cm、深さ54cmである。

炉址 (第161図)



第160図 7号住居址遺物出土状態

0 2m

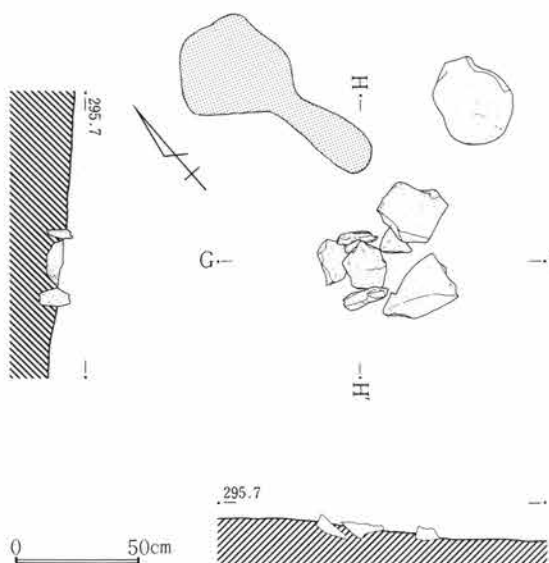
中央やや北寄りに板状の角礫を敷き、その回りをやはり同様の石で囲った石組炉が検出されている。付近にやや大きめの礫が検出されたが、炉材として利用されていたかどうかは不明である。焼土、炭化物が炉の北側に細長く見られたが、炉の内部、および周辺には、ほとんど見られなかった。

遺物出土状態 (第160図)

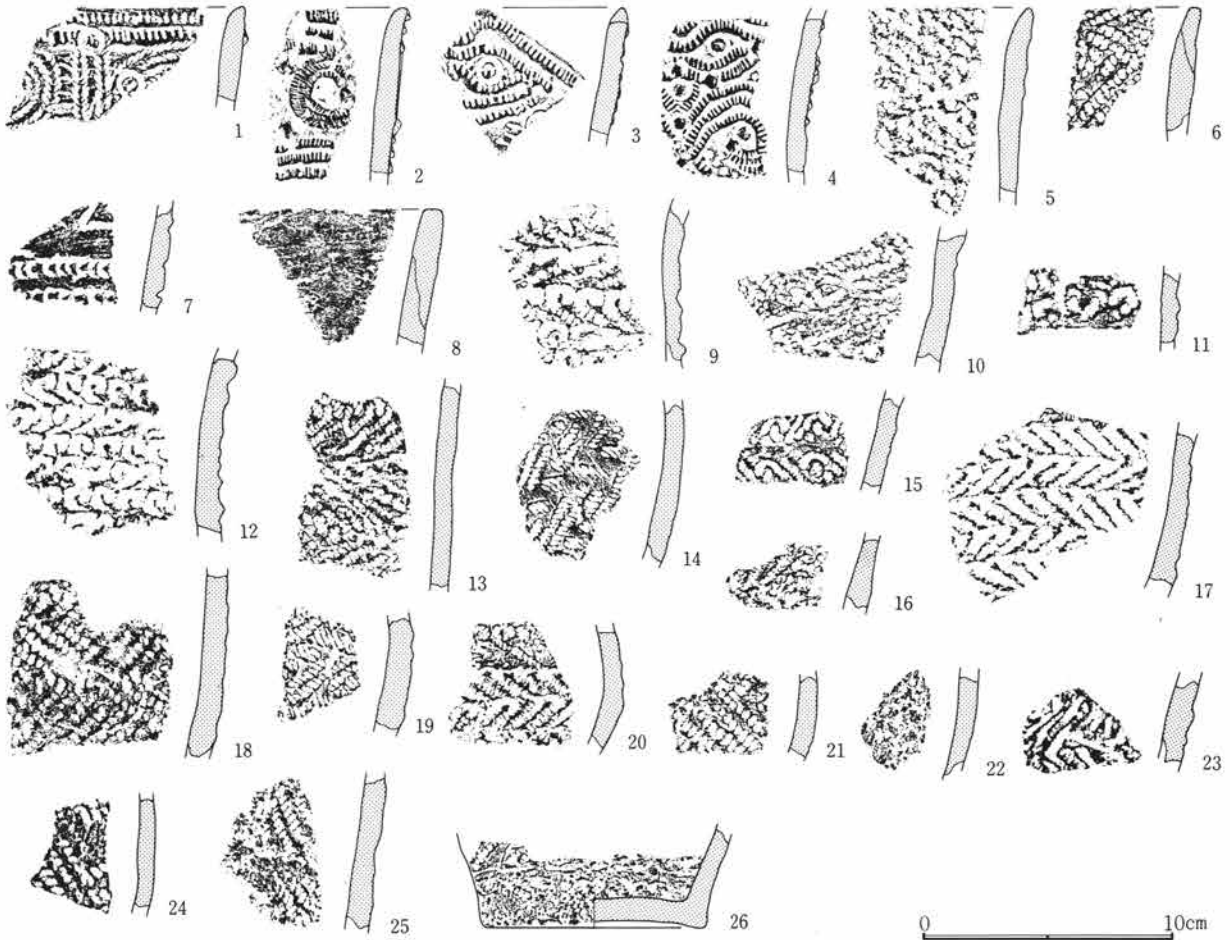
出土遺物は少なく、住居内北半分に散在して、土器片、石片等が覆土中より出土している。(小野)

出土土器 (第162図)

1は平縁で、口縁直下に刻目をもつ隆帯を2本廻らせ、口縁部文様に撚糸側面圧痕、竹管具による円形刺突及び棒状具による刺突を施したもの。2は平縁で口縁直下及び頸部に刻目をもつ隆帯を3条づつ廻らせ口縁部文様を区画し、3条の刻目をもつ隆帯で蕨手状に施し、さらに瘤状の突起を貼付したもの。3・4は双頂となる波状口縁で口縁直下に刻目をもつ隆帯で蕨手状に、また円形刺突及び瘤状の突起を貼付させたもの。5・6は平縁で、口縁以下に閉端環付のLR・RLにより羽状を施したもの。7は口縁部文様に併行沈線及



第161図 7号住居炉址



第162図 7号住居址出土土器

び半截竹管具による爪形文が施される。8は平縁で無文のもの。9・10・11・12・13は、胴部に閉端環付のLR・RLにより羽状を施したもの。14・15・19は胴部に側面環付のLR・RLにより羽状を施したもの。16・17・18・20・21・22・23・24・25は、胴部にLR・RLによる羽状を施したものである。（谷藤）

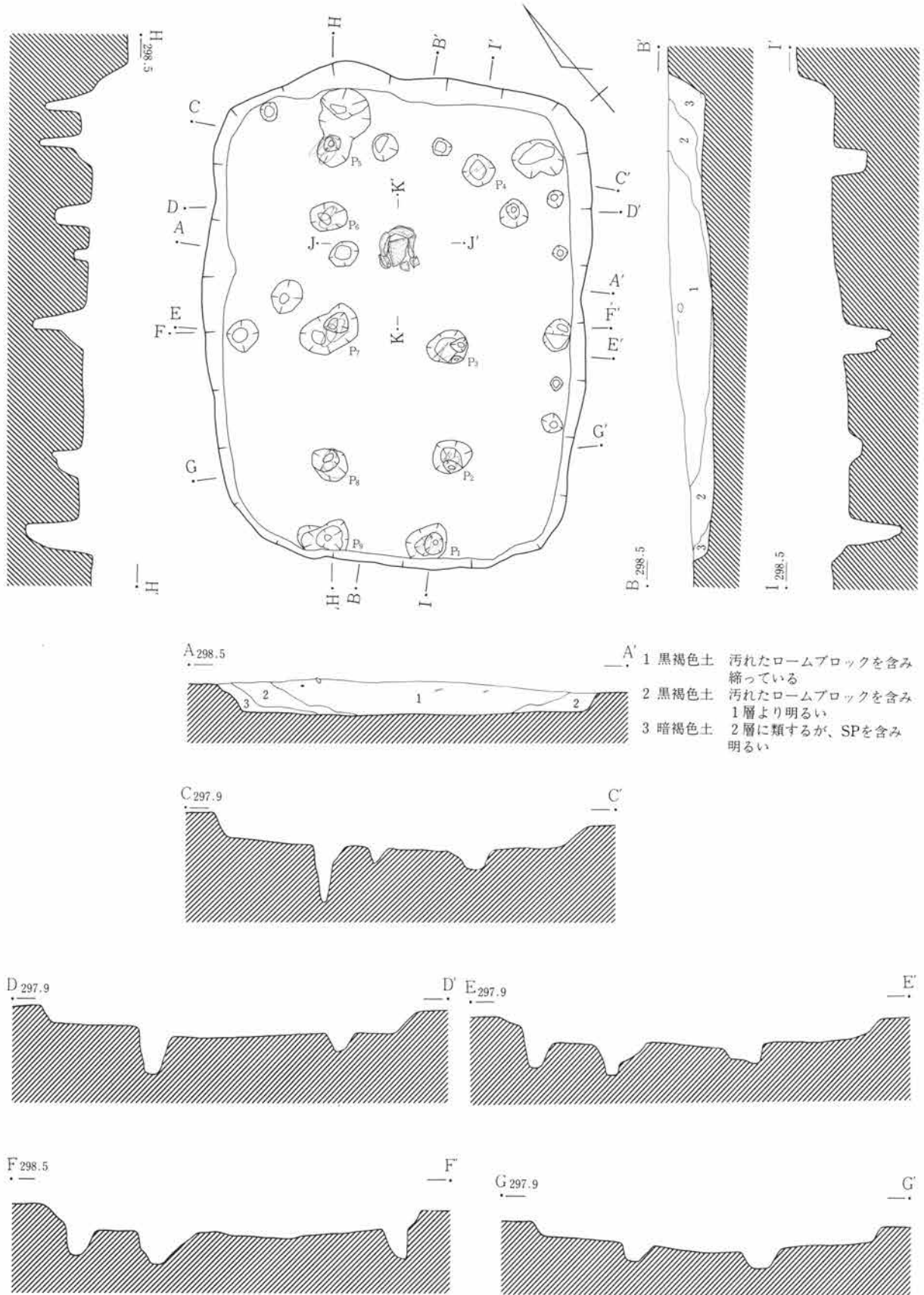
8号住居址（第163図）

調査区中央やや西寄り、43～45-B12～14グリッドに位置する。27号土壌が北側に重複するが、新旧関係は不明である。

形状は、隅丸長方形を呈し、規模は5.1×4.0mで、主軸方向はN-37°-Eである。壁高は30～20cmであるが、南側は削平されており、残存状況は良くなかった。

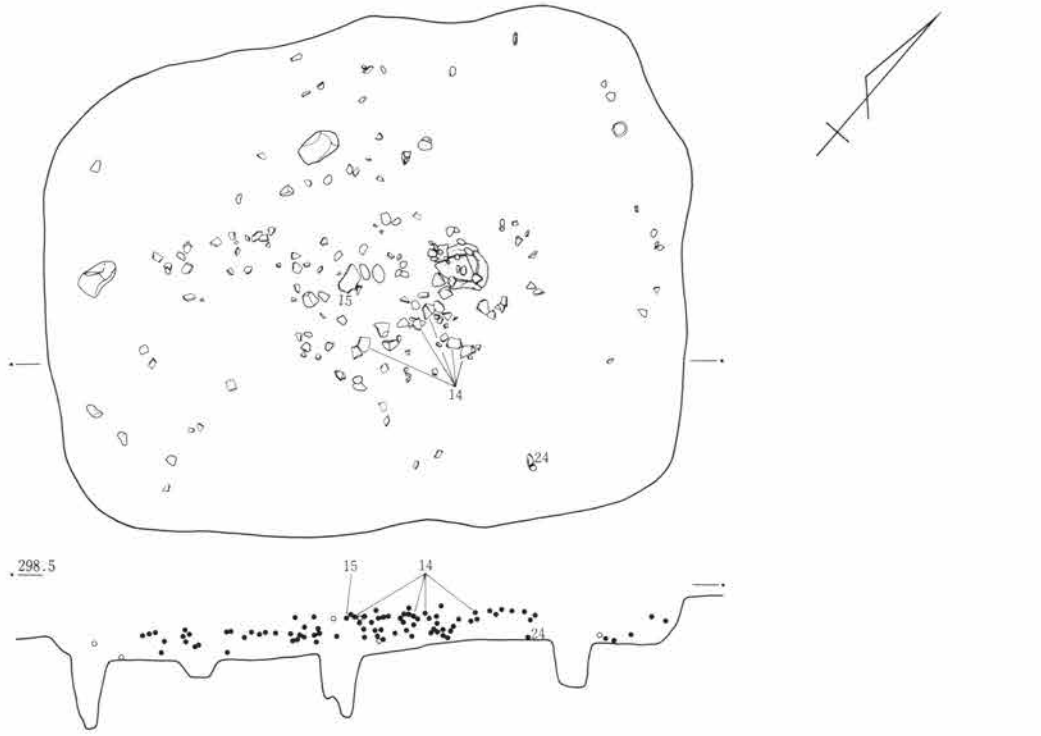
床面は、全体的にゆるやかな凹凸が見られ、南コーナー付近がやや落ち込んだ状況を呈していた。比較的踏み固められていたが、特に炉の周辺が顕著であった。

主柱穴は、ピット1～ピット8の8本と思われる。長軸方向に2列対応して並ぶ、それぞれ規模はピット1が径45×30cm、深さ60cm、ピット2が径40×35cm、深さ24cm、ピット3が径40×30cm、深さ52cm、ピット4が径35×30cm、深さ30cm、ピット5が径40×40cm、深さ56cm、ピット6が径65×35cm、深さ58cm、ピット7が径45×35cm、深さ22cm、ピット8が径50×30cm、深さ62cmである。また西壁および東壁際中央にピット



第163図 8号住居址

0 2m



第164図 8号住居址遺物出土状態

9、ピット10が、北隅および東隅にピット11、ピット12がそれぞれ検出されており、補助柱穴と考えられる。

炉址 (第165図)

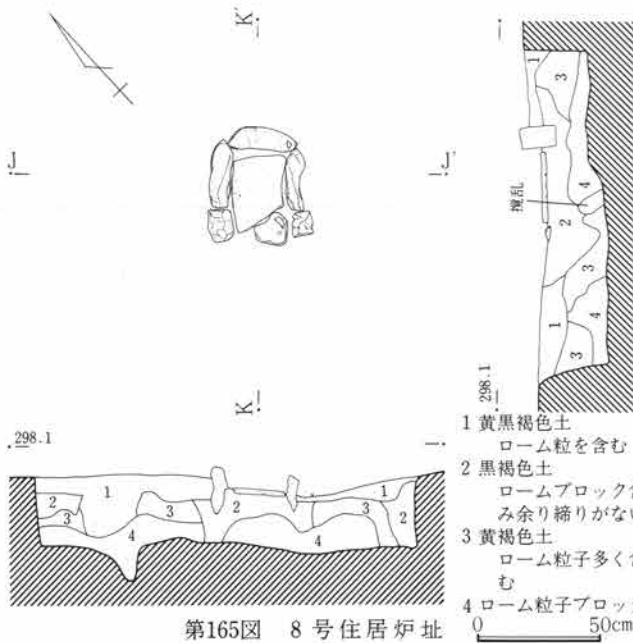
中央やや北寄りに設けられており、偏平な川原石と石皿の転用を用いた石組炉である。径25×20cm、厚さ2.5cm程の板状の石を敷き、その回りを門状に囲って炉としている。周辺には焼土、炭化物ともほとんど検出されなかった。

遺物出土状態 (第164図)

土器は破片を中心に80片程出土した。中央部分に集中しており床面より浮いた状態であった。石器類は、11点程出土した。(小野)

出土土器 (第166・167図)

1は平縁で、口縁直下に刻目をもつ隆帯を1条廻らせ、以下に刺突を施したもの。2は平縁で口縁直下に刻目をもつ隆帯を2条廻らせ、以下にLRを施したもの。3は刻目をもつ隆帯による口縁部文様を構成し、胴部には閉端環付のLR・RLにより羽状を施したもの。4は閉端環付のLR・RLにより羽状を施したもの。5は波状口縁となり、口縁直下に併行沈線を廻らせ、口縁部文様に梯子状沈線をもつ沈線により蕨手状等に描出させる。6は波状口縁となり併



第165図 8号住居炉址



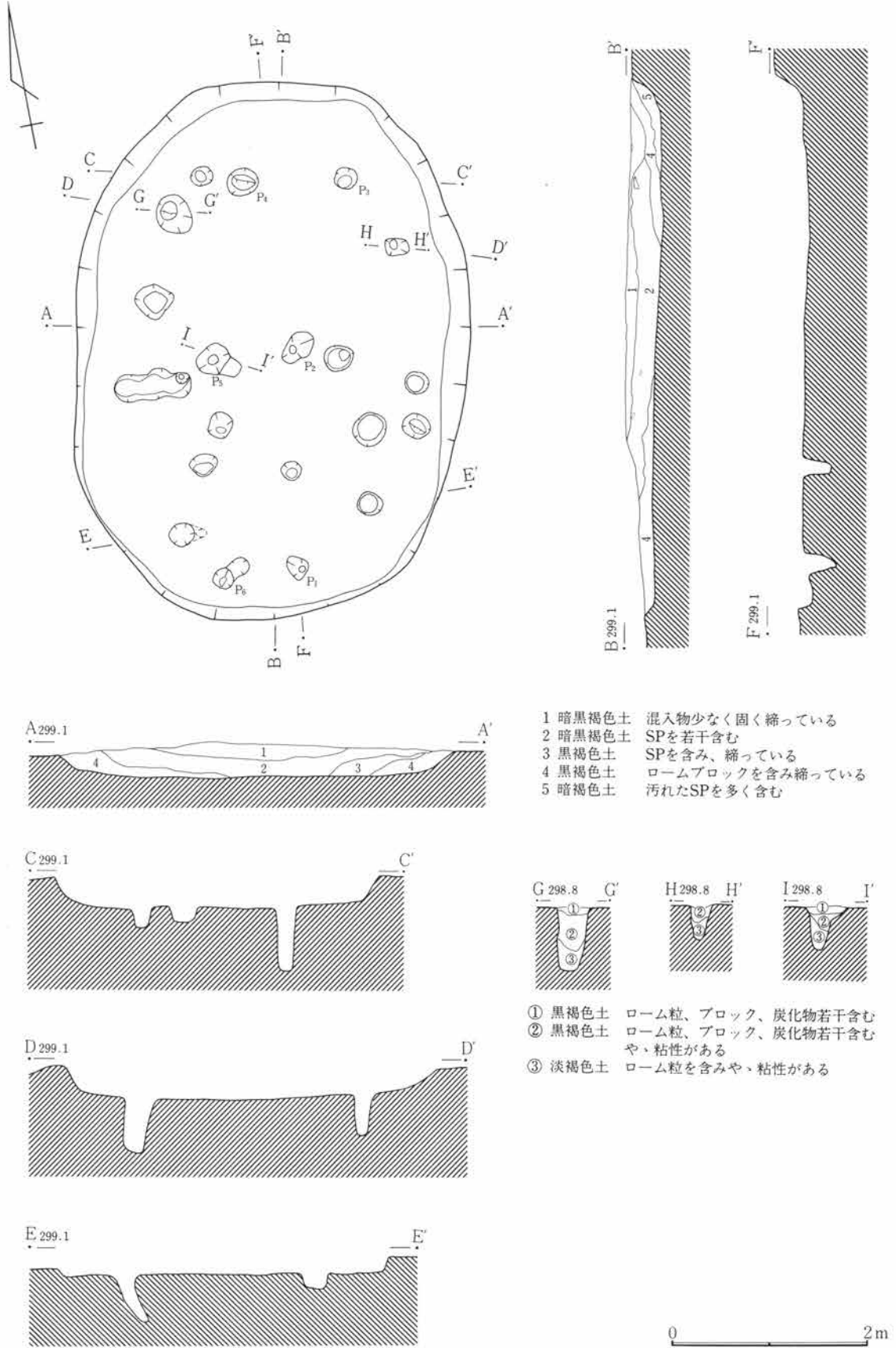
第166図 8号住居址出土土器(1)



第167図 8号住居址出土土器(2)

0 10cm

行沈線・円形刺突及び瘤状の突起を貼付させるもの。7は併行沈線を施したもの。8は胴部に爪状文をもつ半截竹管具による平行沈線を廻らせ、また、菱形状に文様を描く。地文には閉端環付のLRが施される。9は刻目をもつ半截竹管具による平行沈線を廻らせ、以下胴部にLR・RLの結果による羽状縄文を施す。10は半截竹管具によるややくずれたコンパスタ文を廻らせ、胴部に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施す。11・12・13は、平縁で口縁部に斜位ないしは鋸歯状に沈線を施し、胴部に縄文を施したもので、併行沈線を廻らせるもの12もある。14は平縁となる深鉢形を呈し、口縁以下に閉端環付のRLを施す。15は胴部が



- 1 暗黒褐色土 混入物少なく固く締っている
- 2 暗黒褐色土 SPを若干含む
- 3 黒褐色土 SPを含み、締っている
- 4 黒褐色土 ロームブロックを含み締っている
- 5 暗褐色土 汚れたSPを多く含む

- ① 黒褐色土 ローム粒、ブロック、炭化物若干含む
- ② 黒褐色土 ローム粒、ブロック、炭化物若干含むや、粘性がある
- ③ 淡褐色土 ローム粒を含みや、粘性がある

第168図 9号住居址

ややふくれる深鉢形を呈し、胴部に閉端環付のRL・LRにより羽状縄文を施す。16・18・20・22は、平縁で口縁以下に閉端環付のRLないしはLRを施したもの。17・19・23・24は、口縁以下にLないしRを2本用いた結節回転を施したもので、0段多条を用いるもの17・23もある。26・27・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・41・42・44・46は、胴部に閉端環付のR・RLによる羽状縄文を施したもので、5段多条を使用し中間に無文帯をもつもの32・44、半截竹管具によるくずれたコンパス文を巡らせるもの26・35・41・42がある。43・47は、胴部に閉端環付のLRないしRLを施したもので、0段多条を使用するもの47もある。45・51は、胴部にLR・RLによる羽状縄文を施す。48・49は、胴部にLRないしRLを施すもので、0段多条を使用するもの49もある。50は胴部にL（0段多条）を2本用いた結果回転を施したもの。28・52・53は、底部であるが、底に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文等を施したもの28・53、同様にLを2本用いた結節回転を施すものがある。 (谷藤)

9号住居址 (第168図)

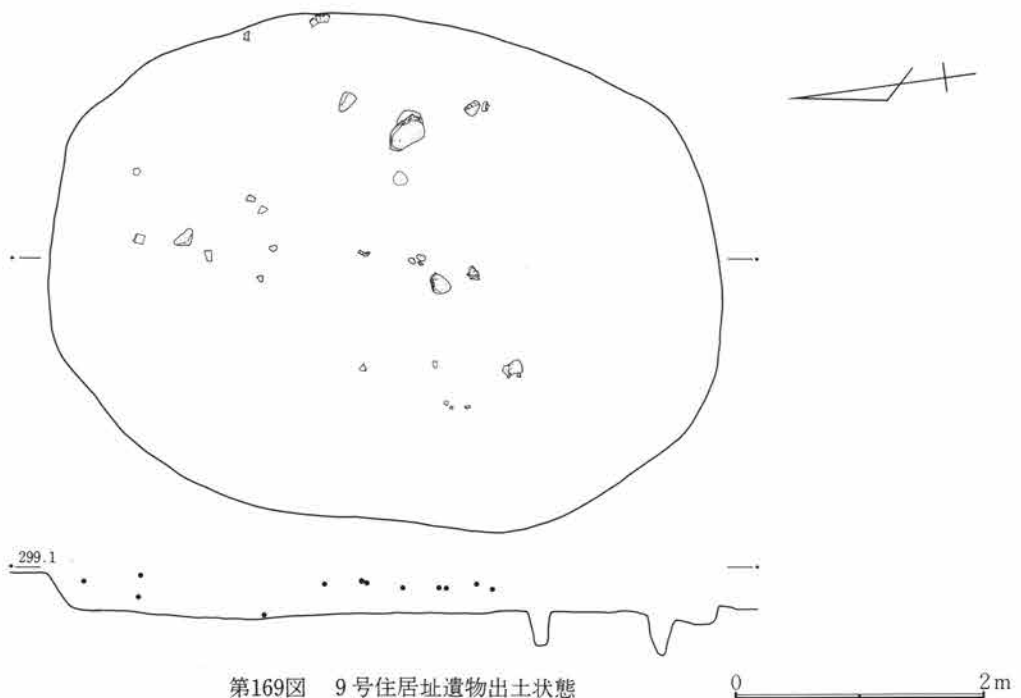
調査区中央、39～40-B15～18グリッドに位置する。形状は南北に長い長円形を呈し、主軸方向はN-12°-Eである。規模は、長径5.3m×短径4.0mである。

壁高は、平均25cmであり、全体的にやや斜めに立ち上がる。床面は、比較的平坦で、ロームを踏み固めて地床としており、かなり締っている。

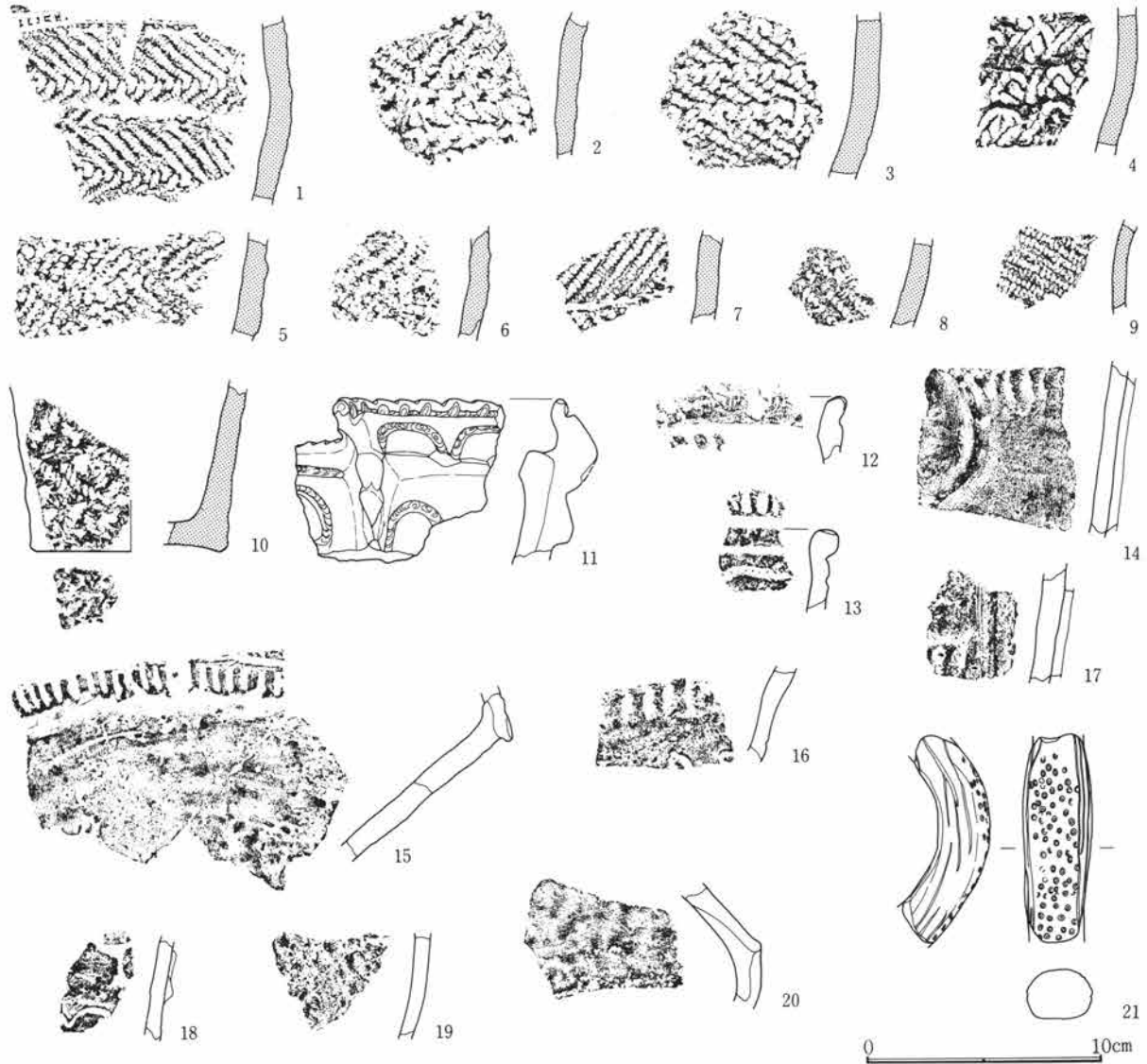
ピットは、総数21を検出した。明確な対応関係はつかめなかったが、ピット1～ピット6の6本が支柱穴と考えられる。それぞれの規模はピット1が径24×2cm、深さ30cm、ピット2が径30×26cm、深さ16cm、ピット3が径23×22cm、深さ66cm、ピット4が径20×27cm、深さ18cm、ピット5が径32×30cm、深さ44cm、ピット6が径22×20cm、深さ22cmである。

炉 址

認められなかった。



第169図 9号住居址遺物出土状態



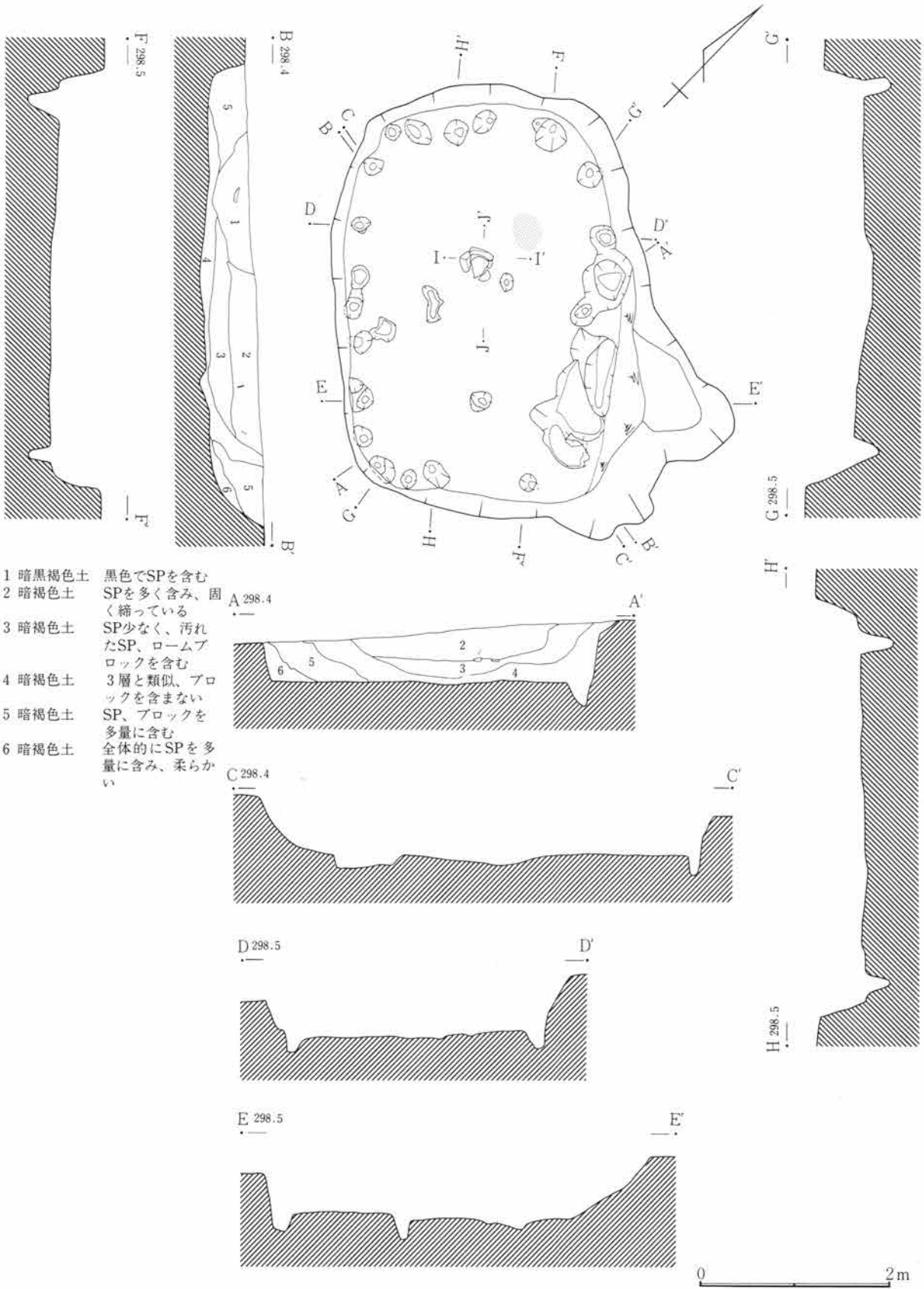
第170図 9号住居址出土土器

遺物出土状態 (第169図)

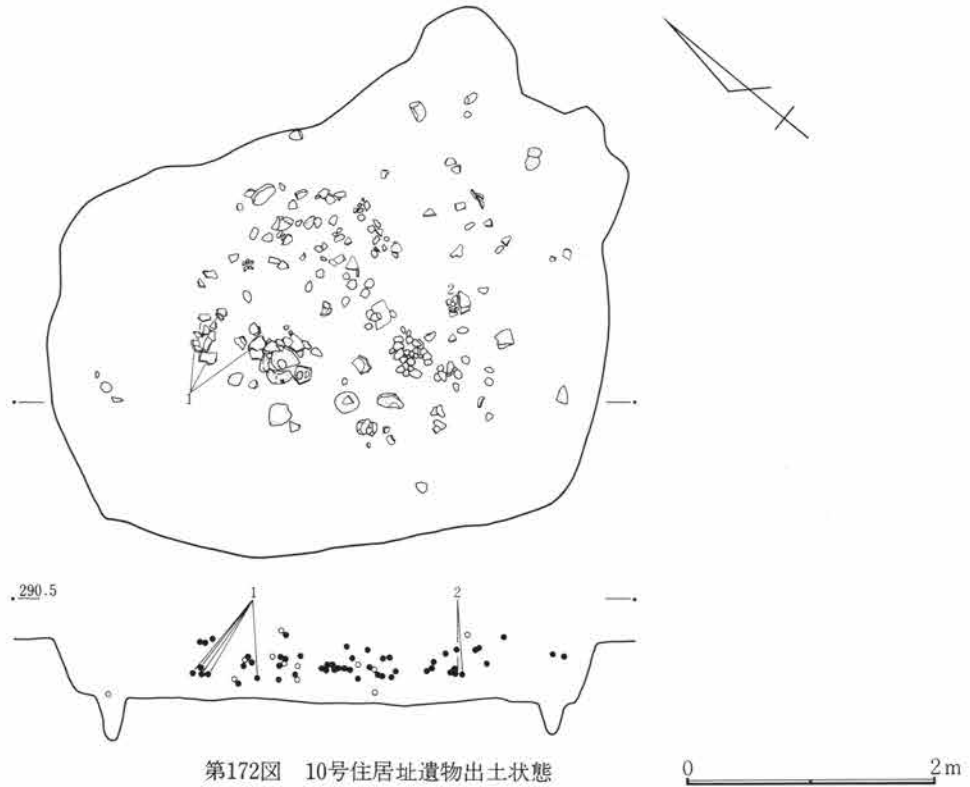
覆土および床画より土器片、石器類が出土しているが少ない。時期は中期前半である。 (小野)

出土土器 (第170図)

1は梯子状沈線をもつ併行沈線で文様区画を行ない。胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)の結束による羽状縄文を施すもの。2は胴部に閉端環付のLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施すもの。3は胴部に閉端環付のRLを施すもの。4は胴部にL・Lの2本による結節回転を施すもの。5~8は胴部にL・RLによる羽状縄文を施すもので、0段多条を用いるもの7もある。9は胎土に砂粒を含むもので、胴部にRLの縄文を施す。10は胴部に縄文を施すやや上げ底となる底部である。11~14・16~18・20は、胎土に小砂粒・礫および雲母を含むもので、刻目をもつ隆帯で文様区画を行ない、区画内に押し引きによる連続刺突・爪形文等をもつもの。15・19は胎土に小砂粒・礫を含むもので、無文ないしは屈曲する部分に刻目・平行沈線を施すもの、21は橋状となる把手部で、刺突および沈線が施されるもの。 (谷藤)



第171図 10号住居址



第172図 10号住居址遺物出土状態

0 2m

10号住居址 (第171図)

調査区西壁寄りに検出した、51~53-B17~19グリッドに位置する。形状は、や小型の隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-46°-Wである。

規模は、径4.5m×3.3mである。壁高は、平均40cmで、各壁はほぼ垂直に掘り込まれており、コーナー付近は上端が不明瞭であったが、廃棄後の崩落かと思われる。特に南東コーナー部は顕著であった。

柱穴は、径15~30cm、深さ10~20cm程の壁柱穴が24箇所、ほぼ全周している。それぞれの間隔は一定ではなく、特に南側については入口部と思われる約1mの幅をもってピットが検出された。

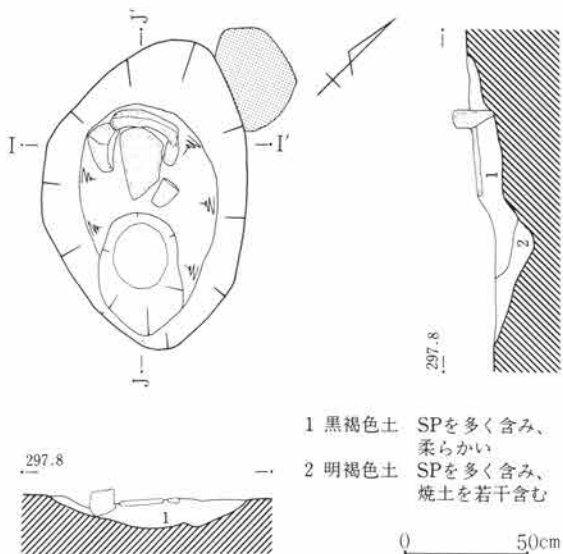
床面は、若干の凹凸があり、部分的にロームと黒色土の混土を踏み固めて床面としている。住居址中央に焼土、炭化物が認められた。

炉址 (第173図)

住居址中央やや北寄りに検出された。厚さ2cmの板状の石を敷き、その回りを門状に礫で囲った石組炉である。背の部分に用いた石は石皿の転用材である。前面に径50×30cm、深さ15cmのピットが掘り込まれていた。炉の周辺には、ローム粒子を含んだ焼土が見られ、炉はその上に乗るような状態で検出されている。

遺物出土状態 (第172図)

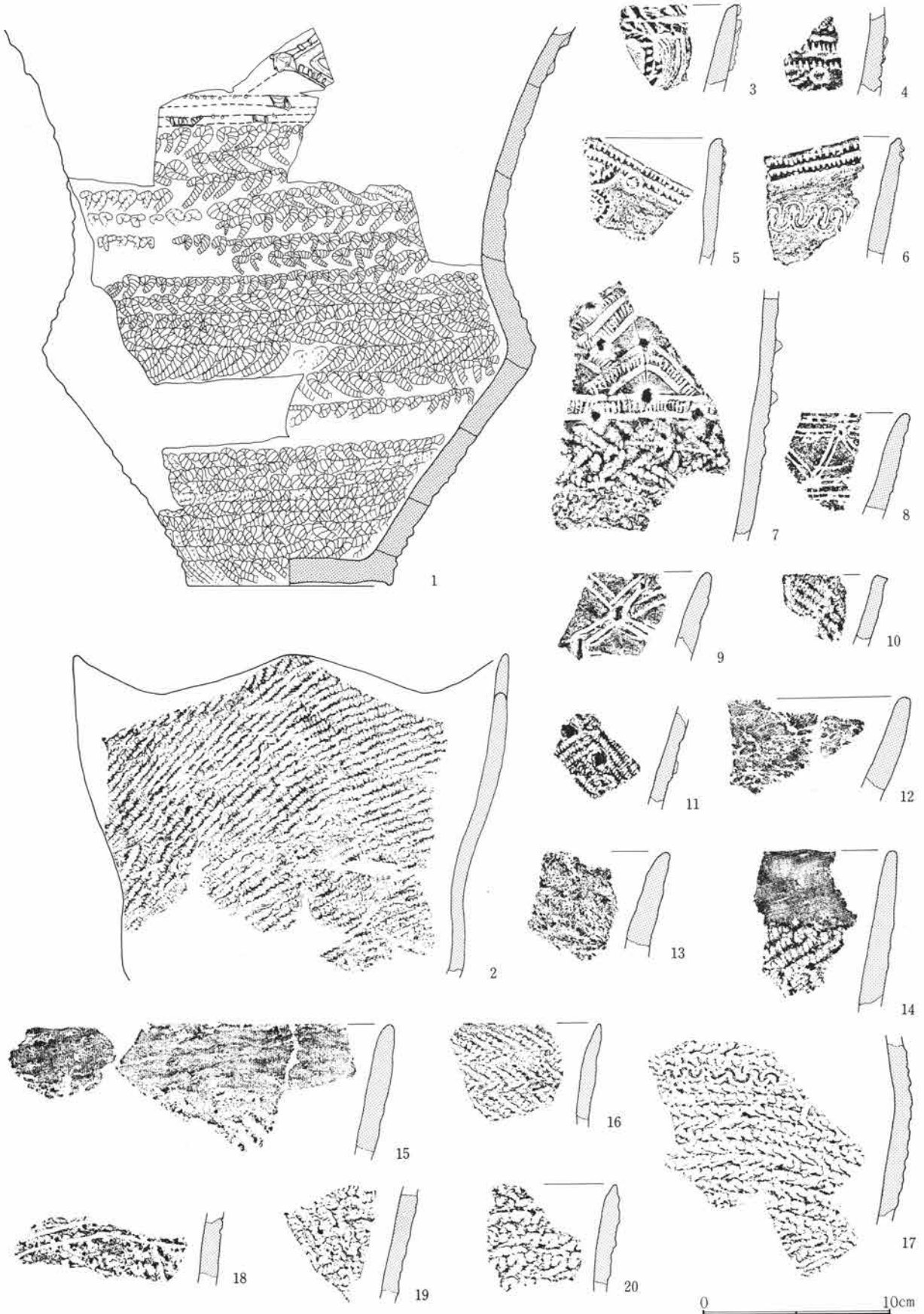
出土遺物は土器50片、石器20点程であるが、覆土中より出土したものが多かった。土器は、器形を復元で



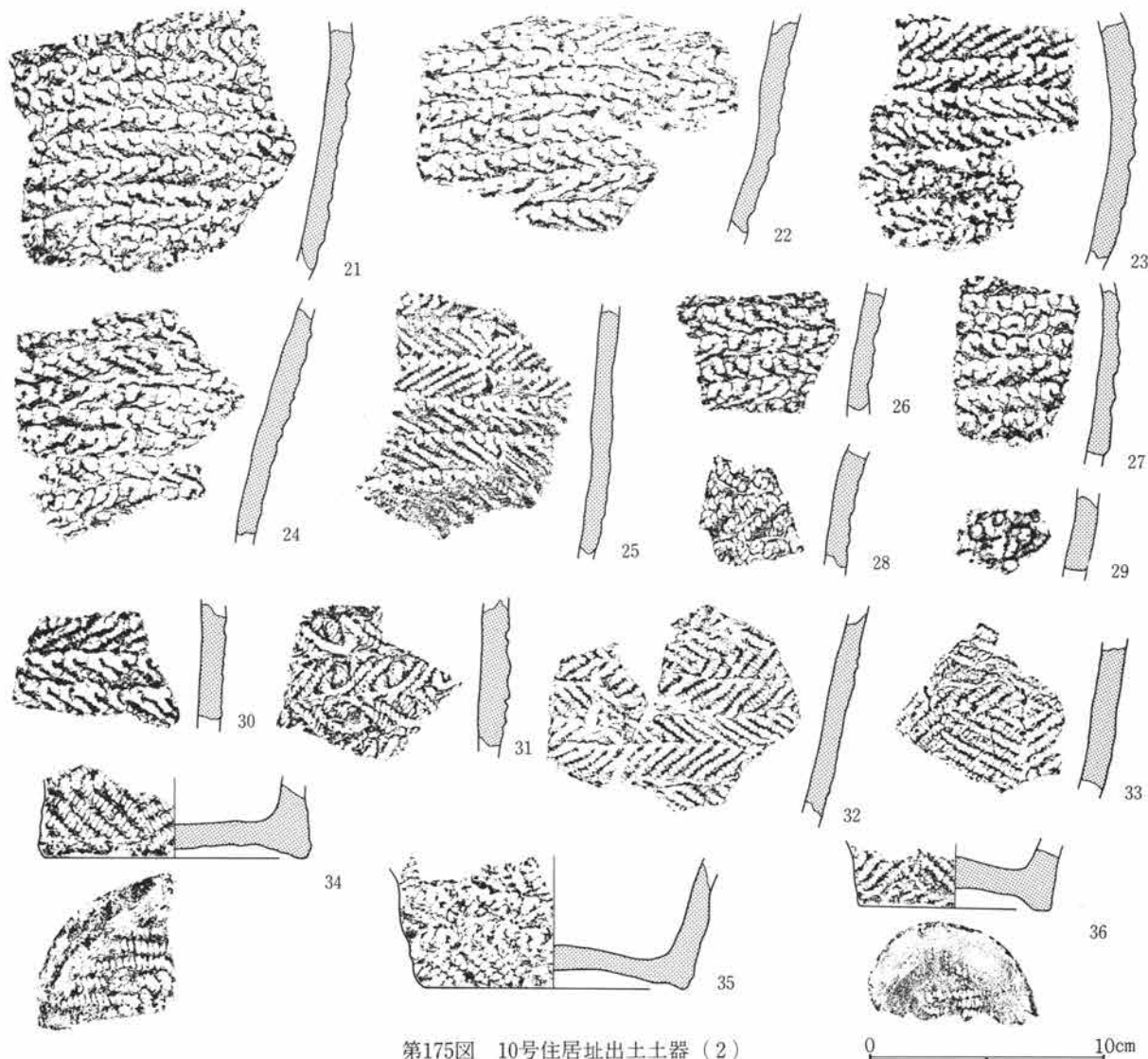
- 1 黒褐色土 SPを多く含み、柔らかい
- 2 明褐色土 SPを多く含み、焼土を若干含む

0 50cm

第173図 10号住居炉址



第174图 10号住居址出土土器(1)



第175図 10号住居址出土土器(2)

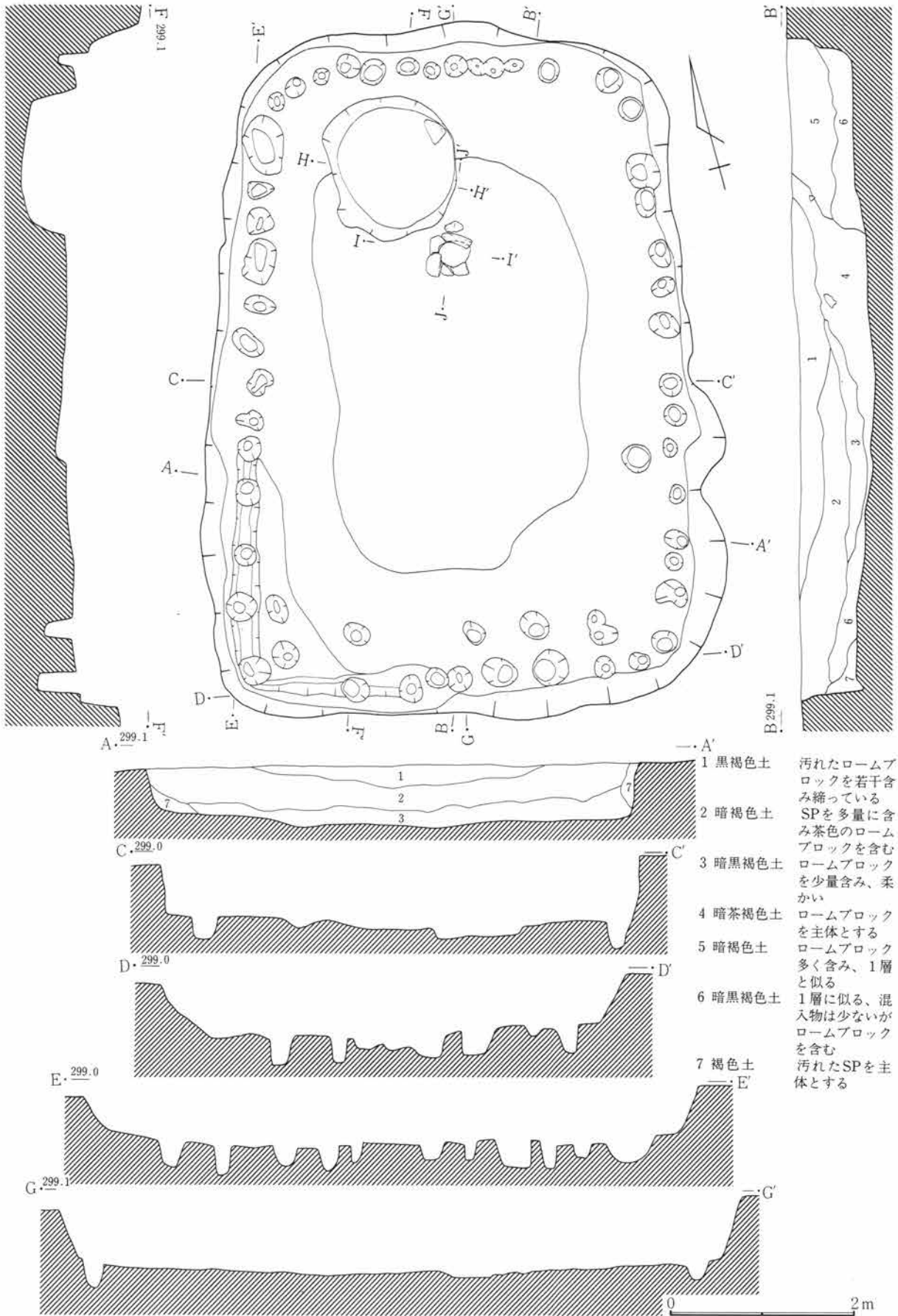
きるものは1点だけで、他はほとんどが小片であった。

石器類も覆土上層より出土したものが多く、中に混じって火をかなり受けた小礫がまとめて40個程検出されている。

(小野)

出土土器 (第174・175図)

1は口縁が開き胴部下半で「く」字状に屈曲する深鉢を呈し、口縁部文様として刻目をもつ細い隆帯で菱形を描き、胴部には閉端環付のLR・RLにより羽状縄文を施す。2は波状口縁となり胴部がふくらむ深鉢を呈し、口縁以下にLR(0段多条)を施す。3～6は口縁部に刻目をもつ細い隆帯を施すもので、口縁直下に数条廻らせるもの3・5・6、口縁部に円形刺突を施すもの4・5、さらにコンパス文状の沈線を施すもの6がある。7は口縁部に梯子状沈線をもつ併行沈線で山形文等を描き、その下に同様の沈線を廻らせ胴部文様との区画を行なう。また瘤状貼付文をもつ。胴部には閉端環付のLR・RLにより羽状縄文を施す。8は平縁で口縁部の上下に半截竹管による平行沈線を廻らせ、その間に同様の沈線による鋸歯状を描き交点に円形刺突をもつ。9は平縁で口縁部に併行沈線により菱形を描き、沈線の交点に瘤状貼付文をもつ。10・11は、口縁直下にLRないしLR・RLによる羽状縄文を施すもので、瘤状貼付をもつもの11もある。12～



第176図 11号住居址

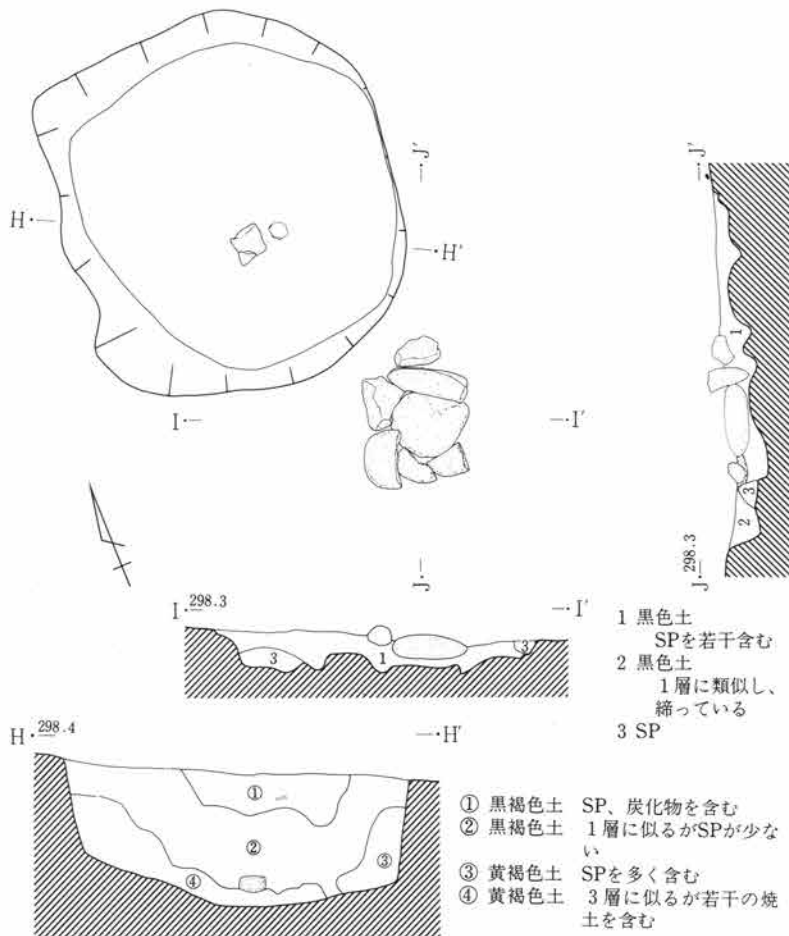
15は平縁で口縁部が無文帯となり以下に縄文を施すもので、閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施すもの14もある。16は口縁以下にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施すもの。17は、胴部にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文およびL・Lの2本による結節回転を施し、半截竹管によるコンパス文をもつもの。18は胴部地文に縄文をもち併行沈線を数条廻らせたもの。20は平縁で口縁以下に閉端環付のLR（0段多条）を施したもの。19・21・23は胴部に閉端環付のLR・RLにより羽状縄文を施すもので、0段多条を用いるもの21・23・25・27・30がある。31は胴部にL・LおよびR・Rの2種類による結節回転を施したもの。16・32・33は、口縁以下および胴部にLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施す。34～36は、胴部に0段多条を用いた閉端環付・結束のLR・RLによる羽状縄文を施す上げ底となる底部で、底面に縄文をもつもの。（谷藤）

11号住居址（第176図）

調査区中央やや北西寄り、45～48-B21～25グリッドに位置する。北東側に近接して、13号住居址が位置している。北壁、東壁にそれぞれ71・40号土壌が重複しているが、新旧関係は不明である。

形状は、南側が僅かに広がる隅丸長方形を呈し、規模は径7.4×5.3mで、今回調査した住居址中で最大規模を持った住居址であり、遺存状態も良好であった。主軸方向は、N-14°-Eである。

壁の高さは、70～50cmでそれぞれの壁の立ち上がりは垂直に近く、かなりしっかりとしている。壁際には、壁柱穴が全周しており計8本が確認され、また南側のその内側に6本のピットが検出されている。なお、南西



第177図 11号住居炉址

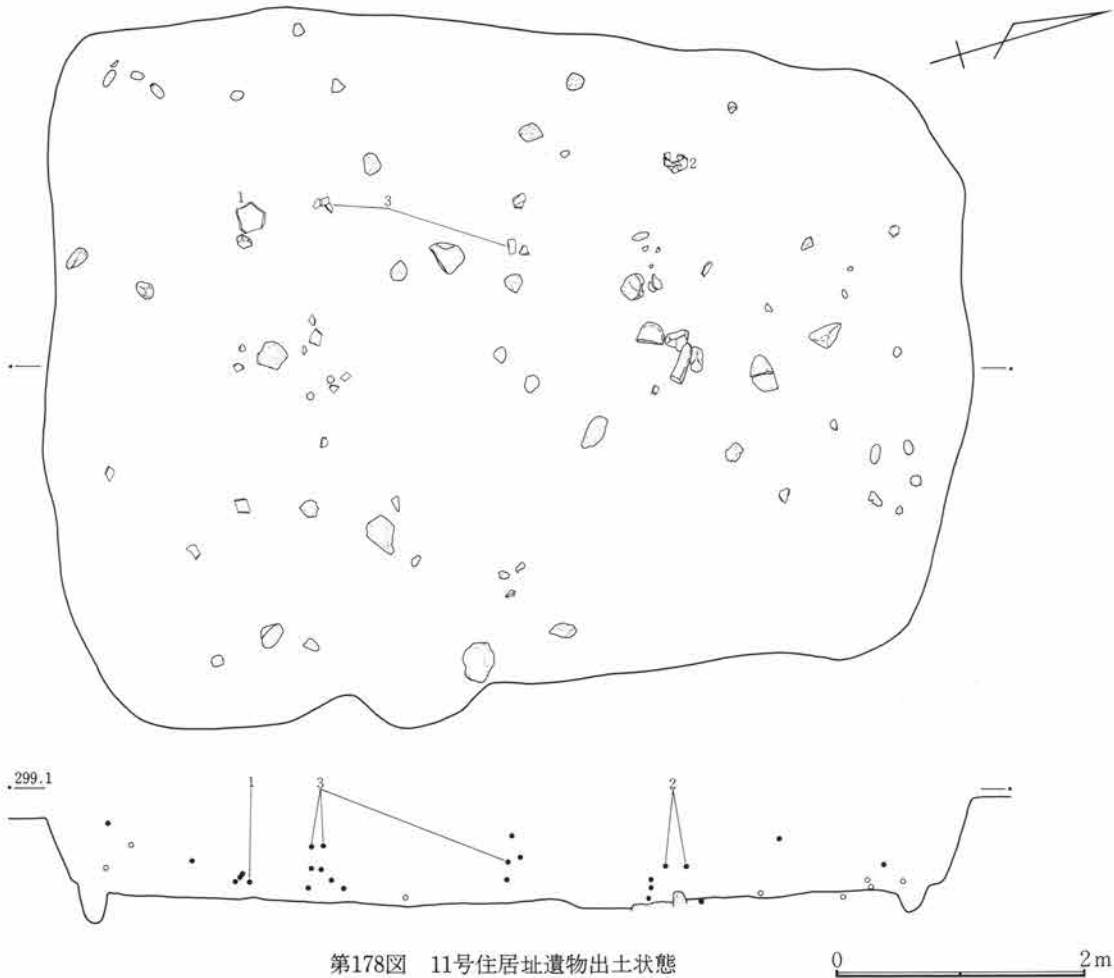
0 50cm

コーナー部分は柱穴をつなぐように、部分的に溝が掘られていた。

柱穴の径は平均20cmで、深さは20～30cm程である。底は平らなものが多く見られた。

床面は中央部が長さ5m、幅2.5mの範囲でやや落ち込んでおり、その部分はかなり軟弱で、ふかふかした状態であった。

炉の北に接して径1.5×1.4m、深さ55cmの土壌が検出されている。断面形は鍋型を呈し、底は平らであった。中からの出土遺物は少なく、若干の土器片、石片が検出されたほか、下層より焼土が僅かに検出されている。埋土には締りがなく、上面には炉から続く炭化物の広がりが認められ



第178図 11号住居址遺物出土状態

0 2m

たことから、住居使用時には、埋められていたと考えられるが、用途については検討の必要がある。

炉址 (第177図)

住居址中央やや北寄りに設けられていた。川原石7個を用いた石組炉である。径30cm程のやや偏平な川原石を中心に据え、それを囲むように6個の石が口状に配されていた。そのうち2個は石皿の破損品が転用されており、元々は立てられていたものが、廃棄後倒たものであろう。焼土は、ほとんど見られず、炭化物の薄い層が周辺に見られた。

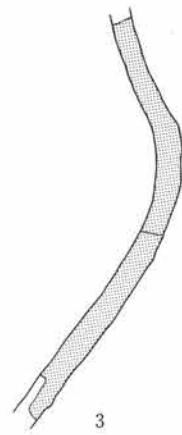
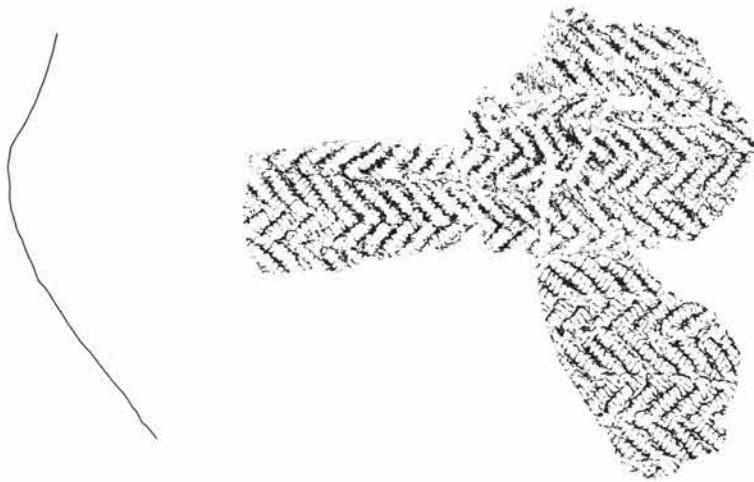
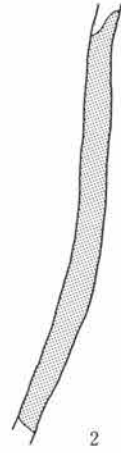
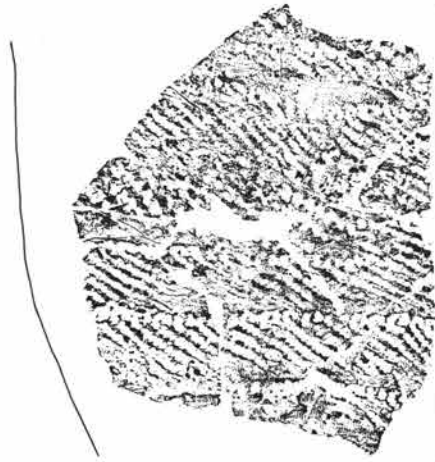
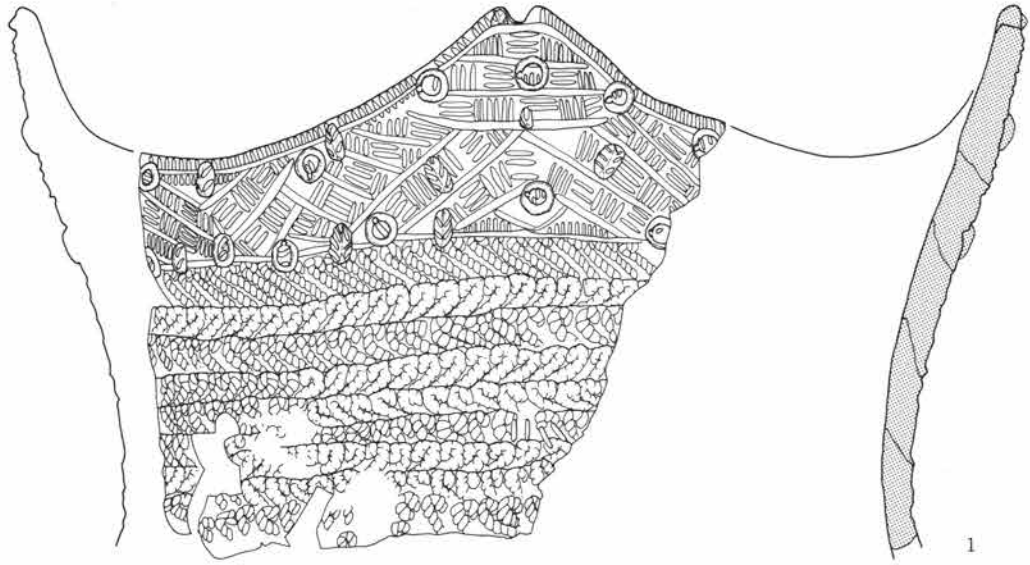
遺物出土状態 (第178図)

出土遺物は、土器70片、石器18点が出土している。覆土中および床面より検出されたが、量的にはそれ程多くはなかった。

(小野)

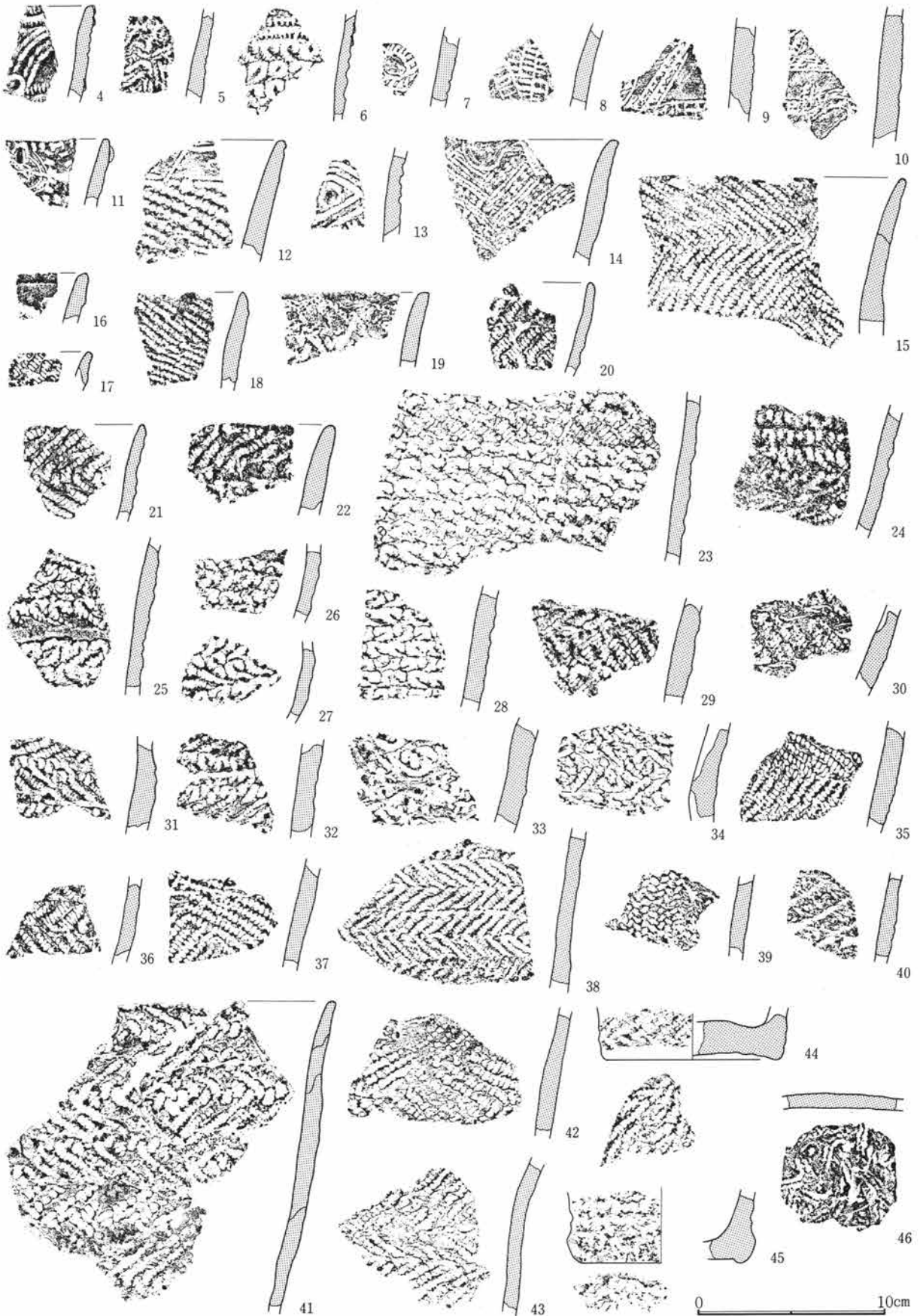
出土土器 (第179・180図)

1は双頭をもち波状口縁となり胴部がややふくらむ深鉢で、口縁直下に梯子状沈線をもつ併行沈線を廻らせ、頸部に沈線1条廻らせることで口縁部文様を区画する。その口縁部文様には、波頂下連結・鋸歯状ないしは山形状に併行沈線を描き、沈線内には横位・縦位に交互に梯子状の沈線を施し、刻目をもつ瘤状貼付文・円形刺突文を配する。胴部には、閉端環付のRL・LRによる羽状縄文を施す。2はやや胴部がふくらむ深鉢の胴部で、閉端環付のRLを施したもの。3は胴部がかなりふくらむ深鉢の胴部で、LR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したもの。4・5は口縁直下に刻目をもつ隆帯を廻らせ口縁部に撚糸側



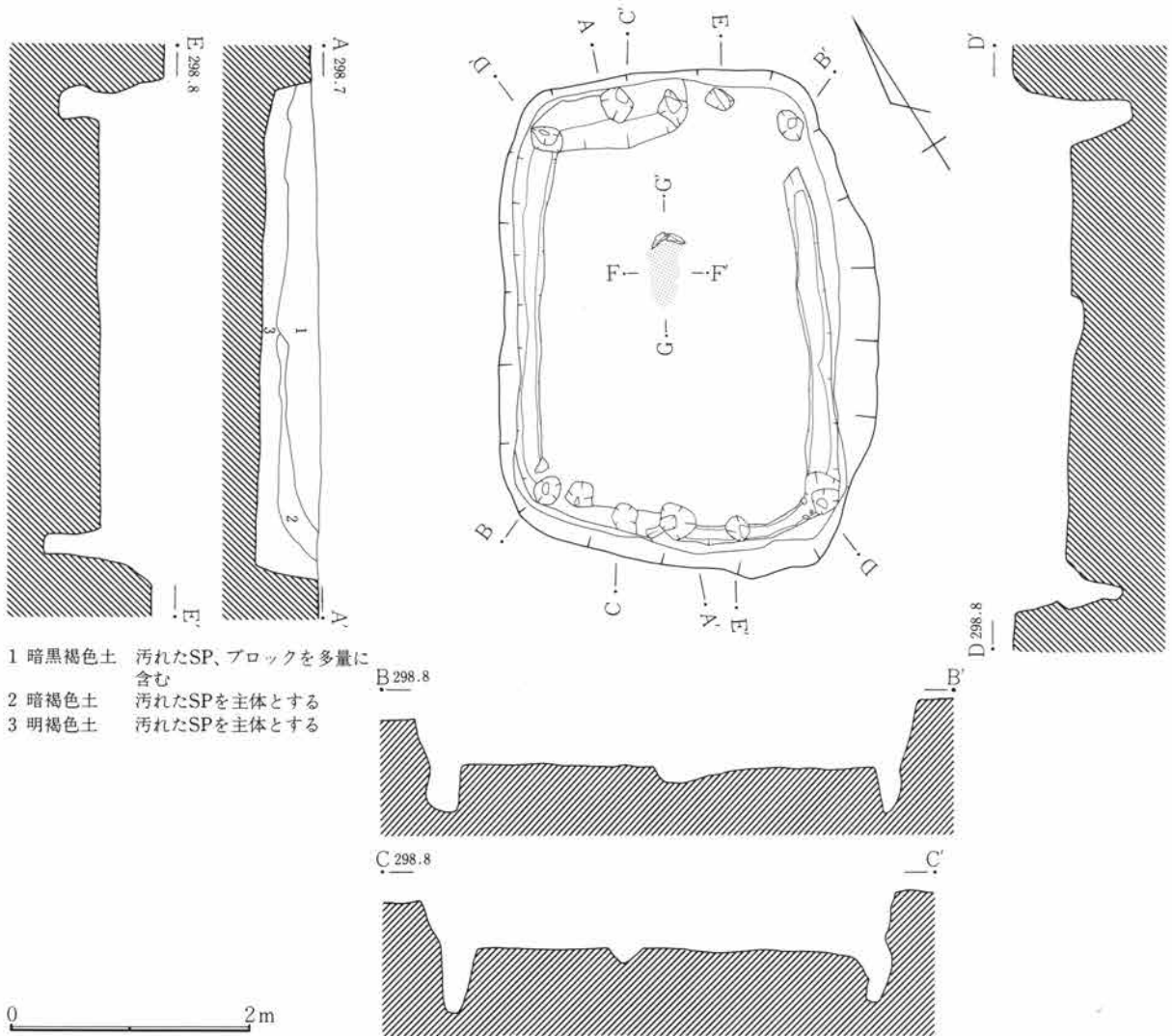
0 10cm

第179図 11号住居址出土土器（1）



第180図 11号住居址出土土器(2)

面圧痕・円形刺突等を施したもの。6は口縁部に刻目をもつ隆帯及び円形刺突を施し、胴部に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施したもの。7・9・10は、口縁部に梯子状沈線をもつ併行沈線により文様を描くもので、円形刺突をもつものである。9・10・11は波状口縁となり、口縁直下に刻目状の刺突を巡らせ、口縁部に併行沈線による蕨手状となる曲線及び刺突・瘤状貼付文をもつもの。8は口縁部に梯子状沈線をもつ併行沈線で文様を描くもの。12・13は、口縁部に併行沈線で文様を描き円形刺突をもつもので、12には胴部にRLを施す。14は波状口縁となり、口縁部に半截竹管による波状文を廻らせ、胴部に直前段合捺 $\langle \begin{smallmatrix} R \\ L \end{smallmatrix} \rangle$ $\langle \begin{smallmatrix} L \\ R \end{smallmatrix} \rangle$ による羽状縄文を施す。16は口縁部が無文となり、胴部にRLを施したもの。15・17・18・19・20・21・22は、全面に縄文を施したもの。23は、胴部に閉端環付のRL（0段多条）を施したもの。24～29・31・32は、胴部に閉端環付のLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施す。30・33・34は、胴部に結節回転を施すもので、LR（0段多条）・LR（0段多条）の2本を用いるもの30、R・Rの2本を用いるもの33・34がある。35～38・40・43は、胴部にLR・RLによる羽状縄文を施すもので、0段多条を用いるもの36・38がある。41・42は、胴部にLR・RLの結束による羽状縄文を施す。39は、単節縄の組紐による回転圧痕である。44～46は、底部片で底面に結節回転を施すもの46がある。（谷藤）



第181図 12号住居址

12号住居址 (第181図)

調査区の北西、西壁寄り、52~54-B27~28グリッドに位置する。形状は隅丸長方形を呈し、規模は、径4.05m×3.2mで小型の住居址である。東壁がゆるく外側へ膨んでいるが壁上端の崩落と思われる。

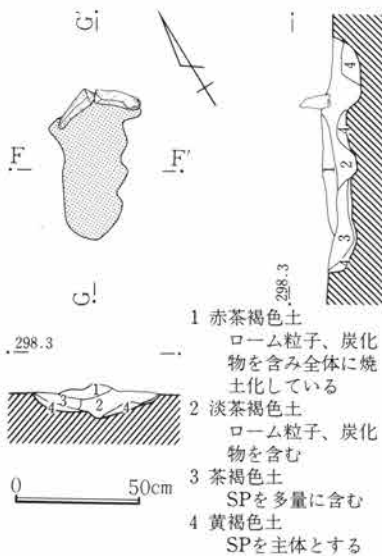
壁の高さは、20~50cmで立ち上がりはほぼ垂直である。主軸方向はN-32°-Eである。

壁周溝が北東コーナーを除いて、ほぼ全周しており、北側に5本、南側に6本の柱穴と思われるピットが相対するように並ぶ。それぞれの径は20~30cmで深さ30~50cmを計り、住居の内側へ向かって、傾斜を持って掘り込まれている。周溝は、幅約20cm、深さは3~5cmでかなり浅い。

床面は、やや凹凸を持ち南側半分は一段と低くなっている。かなり良く踏み固められており、面的には平坦であった。

炉址 (第182図)

中央やや北寄りに設けられていた。2個の角礫を $\frac{1}{3}$ 程埋め込んでくの字に配置し、炉としていた。その前面に幅40cm、長さ1m程の細長く、厚さ5~10cmの炭化粒子を含んだ焼土層が検出された。



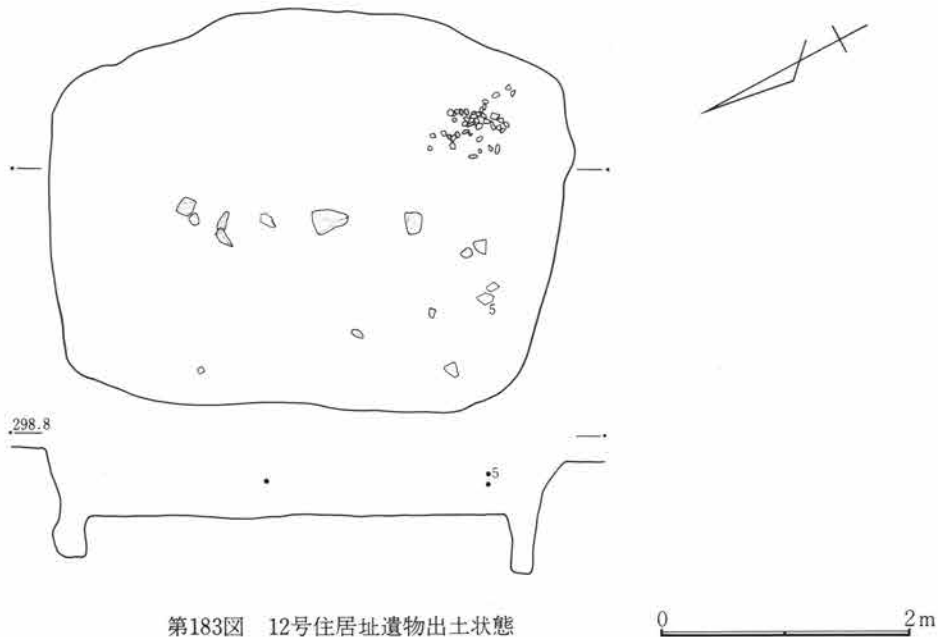
第182図 12号住居炉址

遺物出土状態 (第183図)

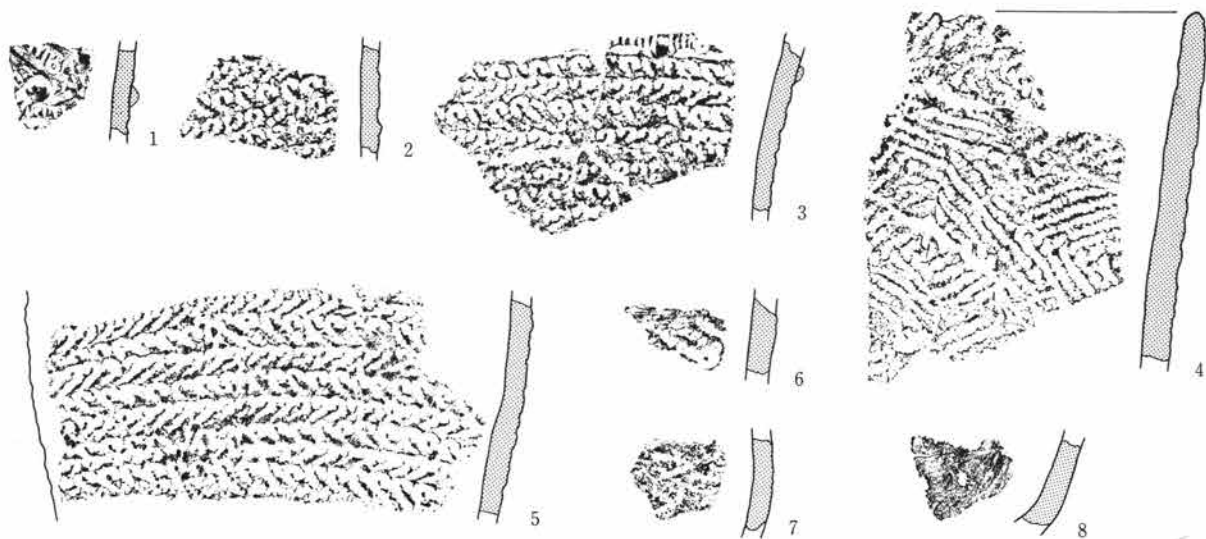
出土遺物は少なく、土器10片、石器は4点、主に覆土中より出土している。南東コーナー部分付近において床面より10cm程浮いて、約50個の焼けた小礫が投げ込まれた状態でまとまって出土している。(小野)

出土土器 (第184図)

1は口縁部に梯子状沈線をもつ併行沈線で文様を描き、円形刺突・瘤状貼付文を施したものの。2・3・5・6は、胴部に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施したもので、同一個体と思われる。4は波状口縁となり全面にLR(0段多条)・RL(0段多条)の結束による羽状縄文を施したものの。7は胴部に縄文を施したものの。8は無文で尖底となる底部である。(谷藤)

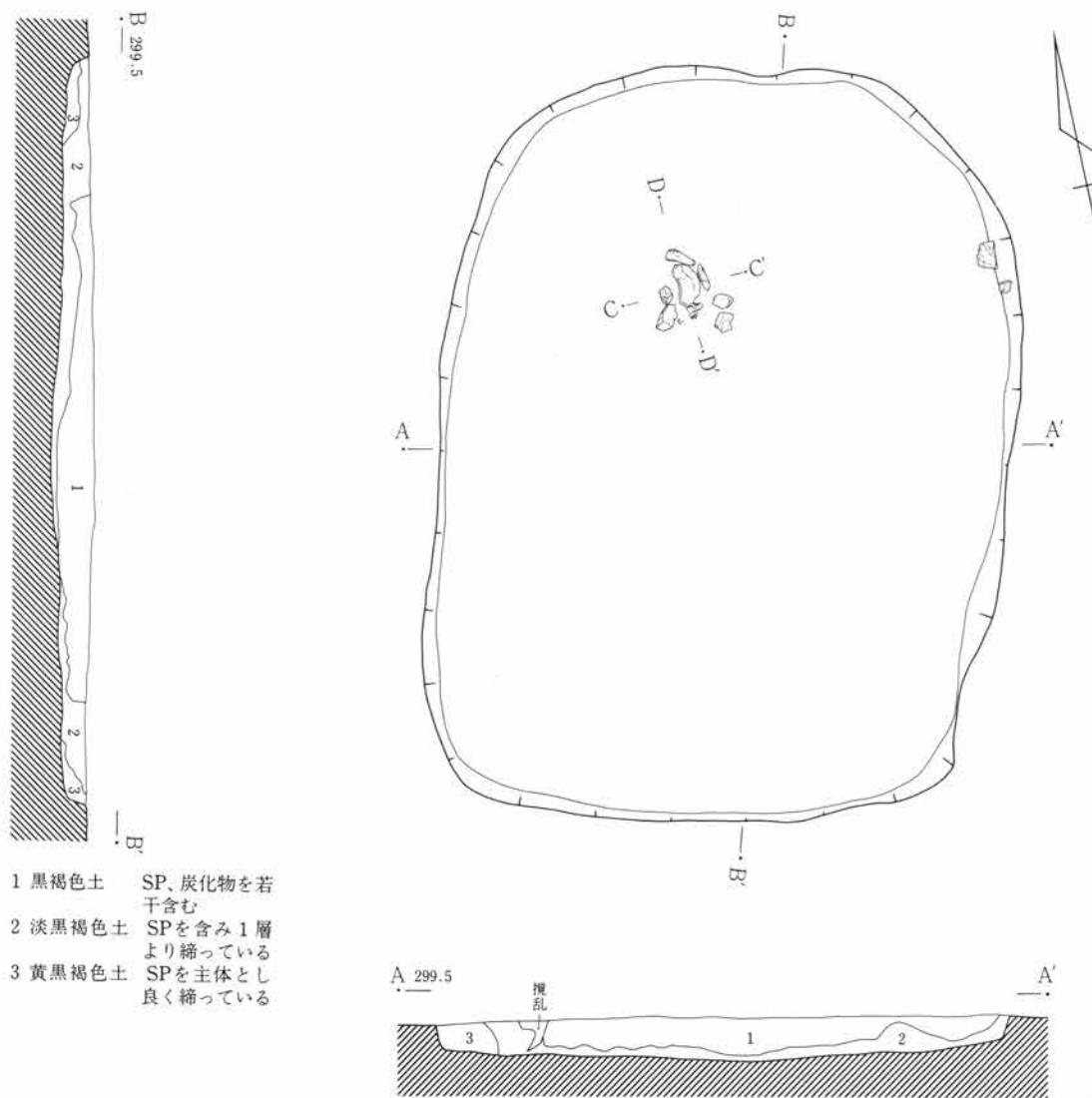


第183図 12号住居址遺物出土状態



第184図 12号住居址出土土器

0 10cm



- 1 黒褐色土 SP、炭化物を若干含む
- 2 淡黒褐色土 SPを含み1層より縮っている
- 3 黄黒褐色土 SPを主体とし良く縮っている

A 299.5

攪乱

第185図 13号住居址

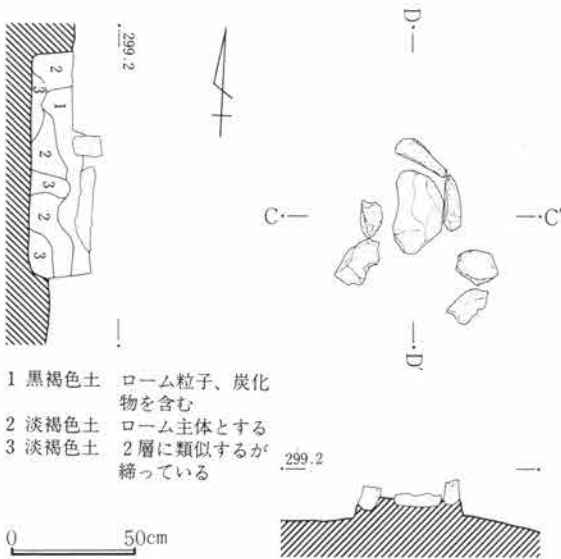
0 2m

13号住居址 (第185図)

調査区の中央やや北寄り、42~44-B24~27グリッドに位置する。西側に11号住居址が近接している。当初、礫が集中して検出されたために、集石遺構と考えたが、調査を進めるうちに炉と思われる石組を検出したために、住居址と認定した。

形状は、不明瞭で、掘り込みの範囲と思われる部分については判らず、部分的にその痕跡をとどめていたにすぎなかった。したがって規模については多分に推定の部分が多い。

住居の形は隅丸方形と思われ、規模は径5.5×4.5m程である。壁高は平均15cm程である。



第186図 13号住居炉址

床の最終使用面もはっきりとせず、柱穴、周溝等の検出もなかった。

炉址 (第186図)

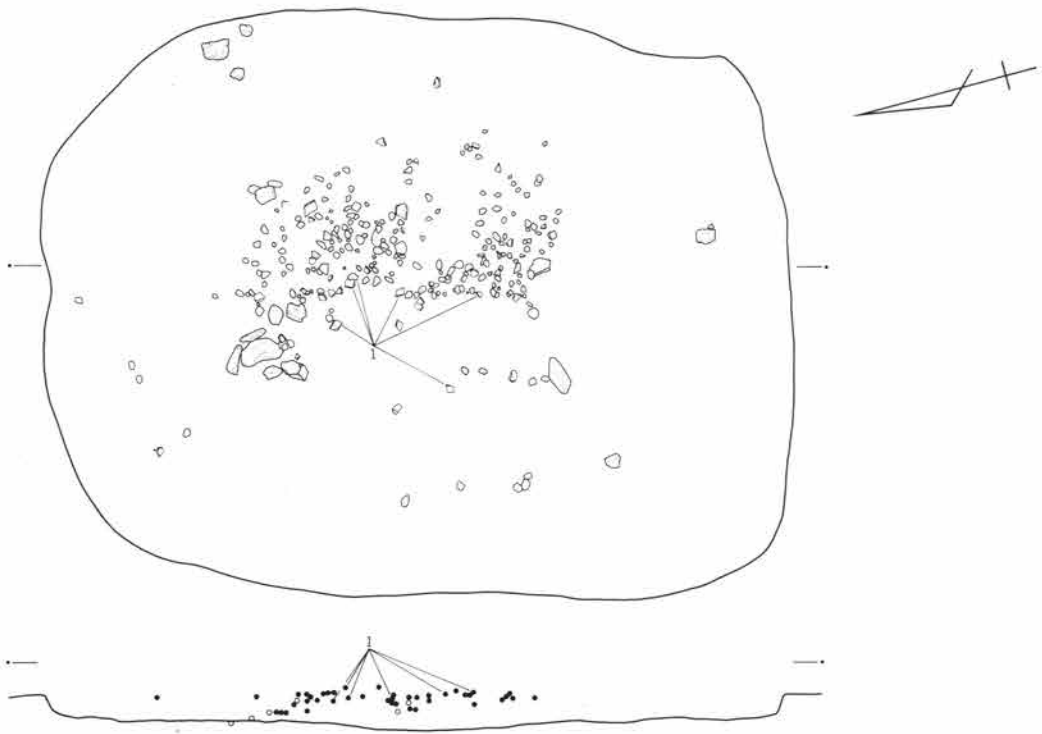
中央やや北寄りに検出した。かなり崩れた状態であり、底石の他は動いているものと思われたが、口状に囲った石組炉であったと考えられる。周辺より若干の炭化物が検出された。

遺物出土状態 (第187図)

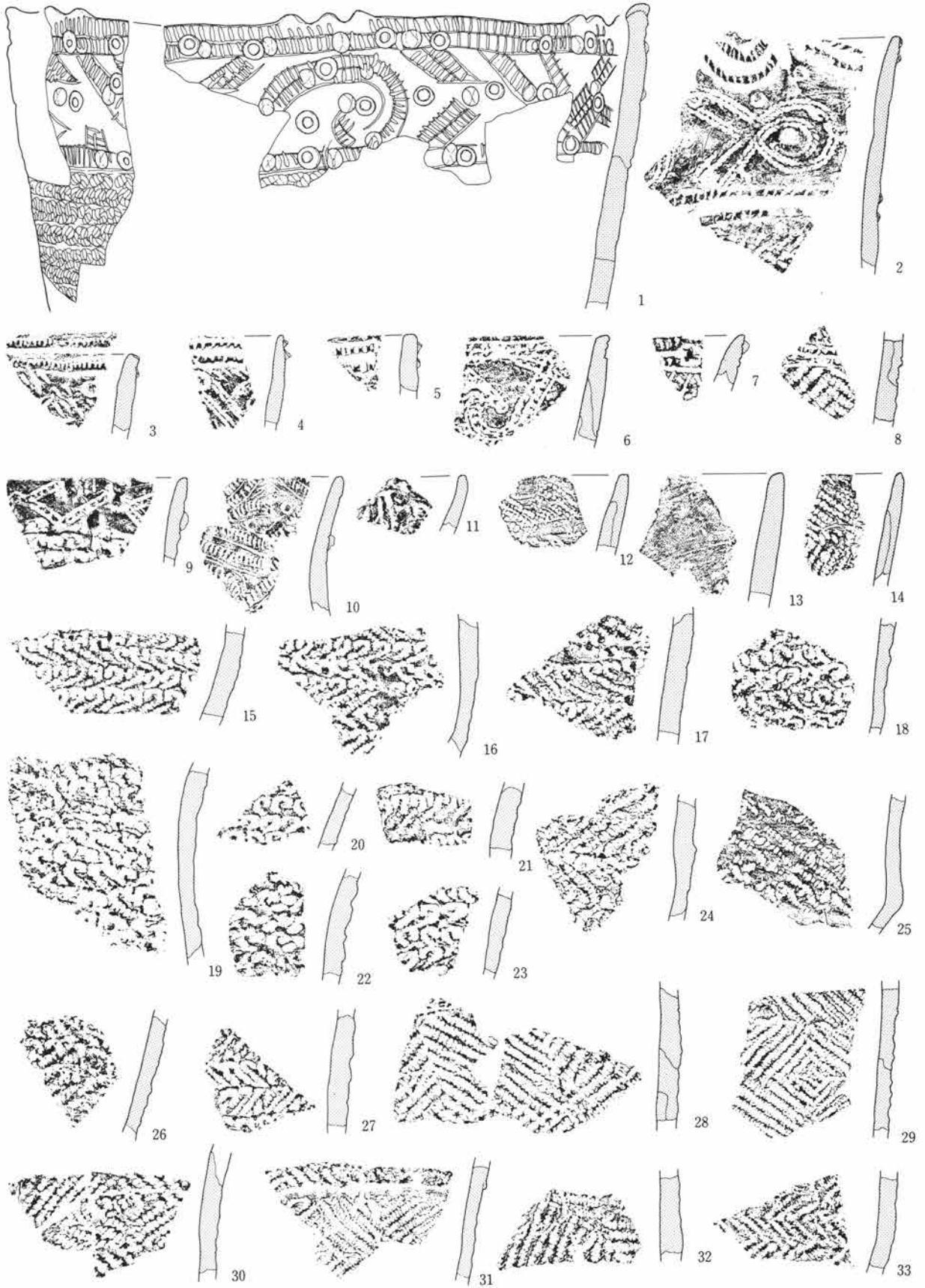
住居址中央部分に、若干数の土器の破片が多量の小礫に混じって出土した。1は炉の付近より出土している。また炉には、石皿が転用されていた。(小野)

出土土器 (第188・189図)

1は口縁に小突起をもつ平鉢となる深鉢で、口縁直

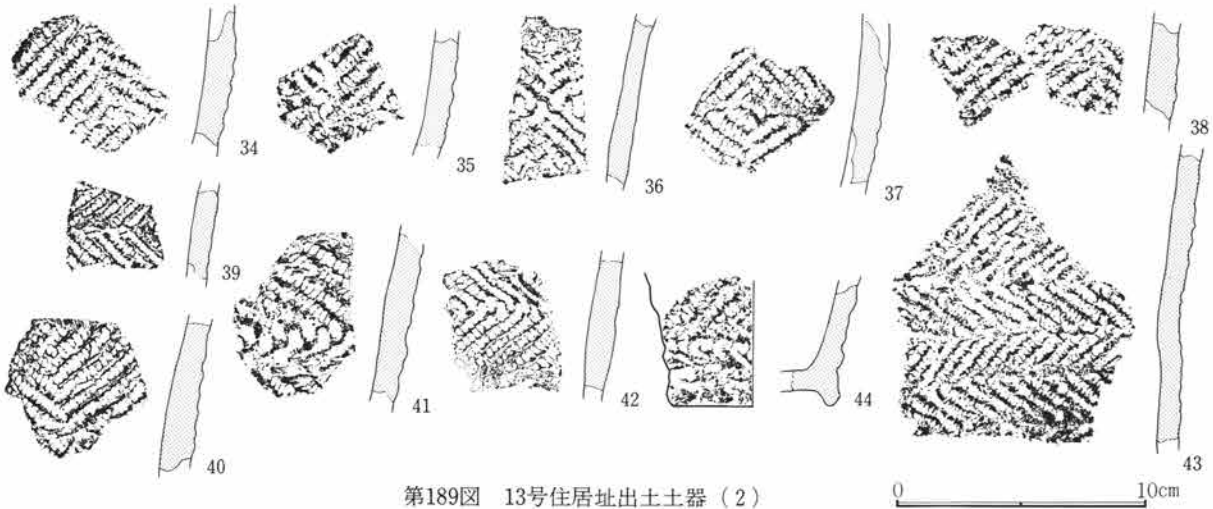


第187図 13号住居址遺物出土状態



第188図 13号住居址出土土器(1)

0 10cm



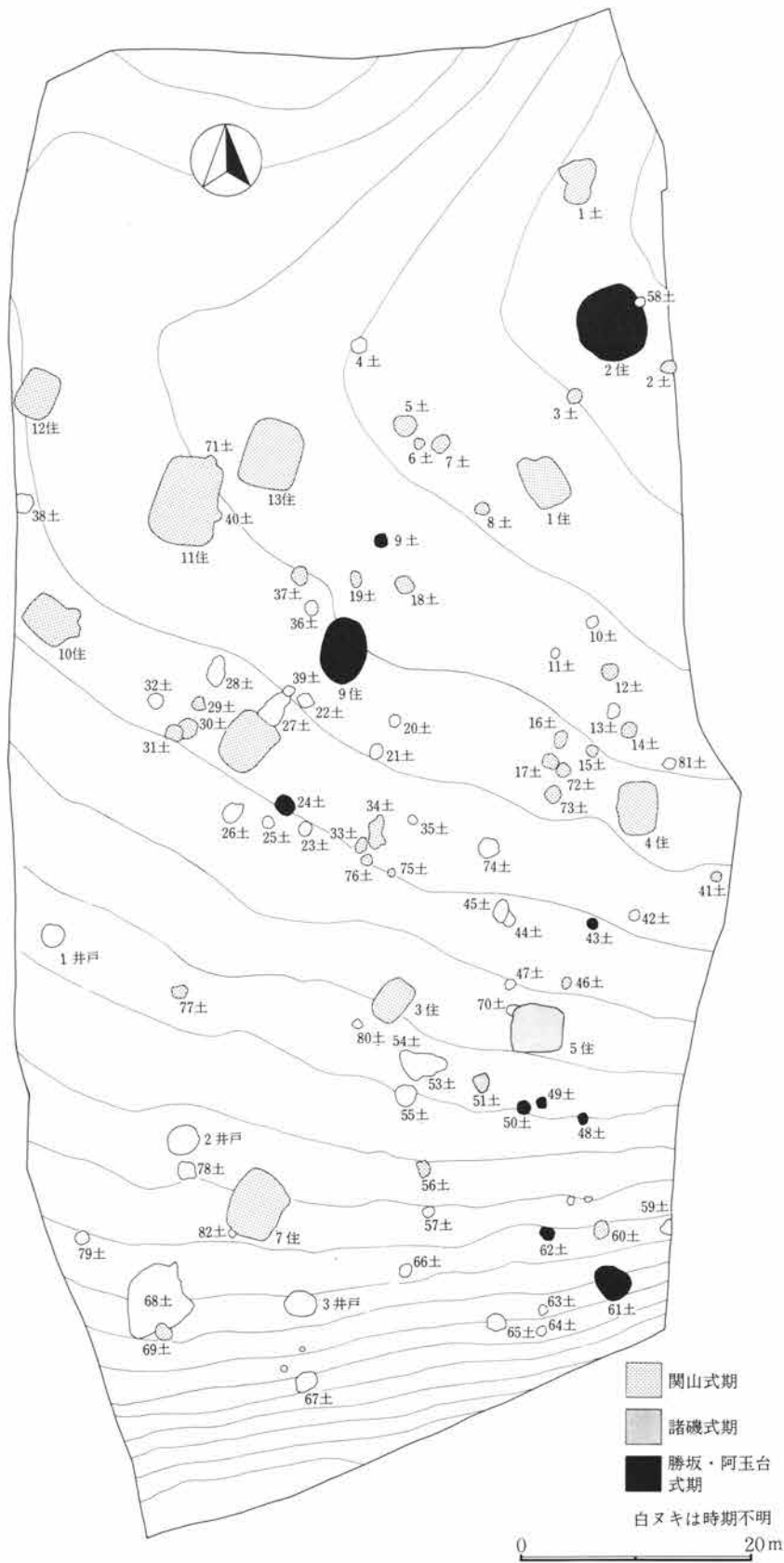
第189図 13号住居址出土土器(2)

下及び頸部に梯子状沈線をもつ併行沈線を廻らせ、その内部に同様の併行沈線で蕨手状・上下区画線連結等の文様を描く。胴部には閉端環付のLR・RLによる羽状縄文が施される。2は波状口縁となり、口縁直下及び頸部に刻目をもつ隆帯を2条廻らすともに、波頂部下にも曲線的に施す。口縁部文様には、蕨手がくずれた「∞」状の撚糸側面圧痕及び円形刺突をもち、胴部には閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施す。3・4は、平縁で口縁直下に刻目をもつ隆帯を廻らせ、口縁部文様に撚糸側面圧痕文・円形刺突・刺突文を施したもの。5は平縁で口縁直下に刻目をもつ隆帯を廻らせ、以下胴部に縄文を施す。6は平縁で口縁直下に梯子状沈線をもつ併行沈線を2条廻らせ、口縁部文様に同様の併行沈線による蕨手・区画線連結等及び円形刺突・瘤状貼付文を施したもの。8は頸部に梯子状沈線をもつ併行沈線を廻らせ、胴部にLR(0段多条)・RLによる羽状縄文を施す。9は平縁で、口縁部文様に梯子状沈線をもつ併行沈線による鋸歯文を描き、山形等を付加させ菱形を描出させている。さらに瘤状貼付文をもち、胴部には閉端環付のRLを施したもの。11は波状口縁をなし、口縁部に沈線に及び半截竹管による半円状の刺突を施したもの。12・14は全面に縄文を施すもので、12はRLを施す。14はRL・LR(0段多条)の結束による羽状縄文を施したもの。15・16・17・18・20・21・23は、胴部に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施すもので、15・28は0段多条を使用する。19・22は胴部に閉端環付のRLを施したもの。24・27は胴部に側面環付のLR・RLにより羽状縄文を施したもの。25は胴部にL(0段多条)を施したもの。26・36・41・42は、胴部にLR・RLの結束による羽状縄文を施したもの。28・29・30・31・32・33・34・35・37・38・39・40・43は、胴部にLR・RLによる羽状縄文を施したもので、29・31・33・43は0段多条を使用する。(谷藤)

2 土 壇 (第191~201図)

本遺跡において検出した総数は82基であった。時期は何れも縄文時代のものと思われるが、その規模、形状に関しては多様である。分布状況は(第190図)で見られるように、台地中央部より南側斜面にかけて広がっており、8・9号住居址周辺と、4号住居址周辺にやや集中箇所が見られる。最も高い所にある58号土壇と低い67号土壇との比高差は約8mもある。

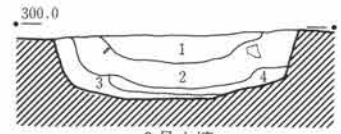
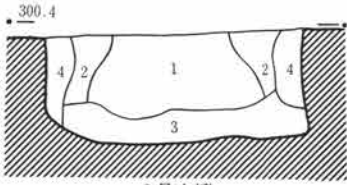
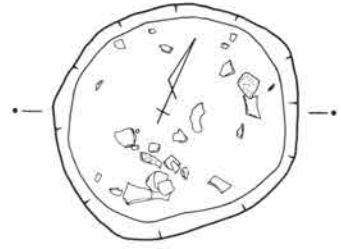
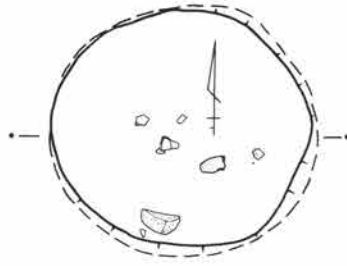
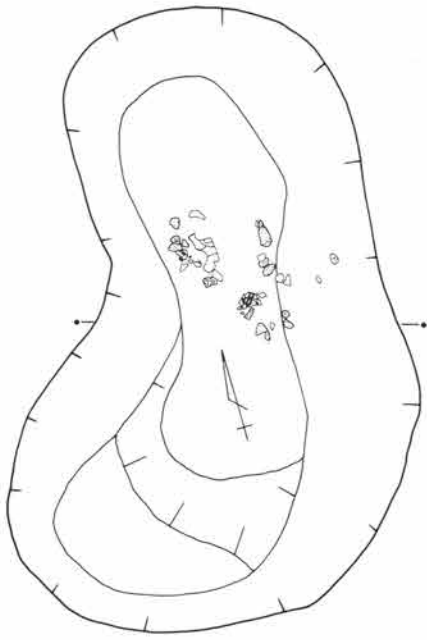
出土遺物による時期を見ると、関山I式期が30基、諸磯式期3期、勝坂式期10期、不明31基である。それ



第190図 土壌時期別分類図

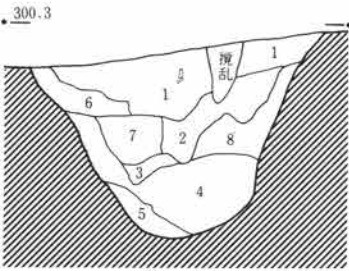
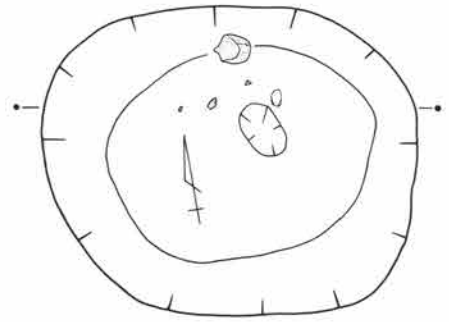
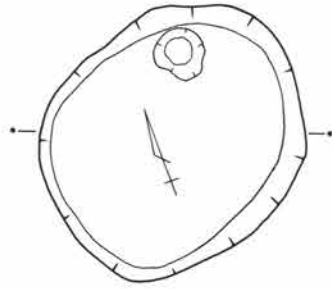
それぞれの時期の土壌について分布を見ると、それぞれにまとまりが見られることから一連の用途を目的として掘られたことが考えられる。

出土した遺物について見ると、土器のほとんどは小片で、量も比較的少なかったが、50号土壌においてはほぼ完形の深鉢が2個体セットで検出された。石器類に関しては、石斧、スクレイパー類を中心に出土しているがやはり量的には余り多くはない。7号土壌より半分に分かれた石皿が、56号土壌からは塊状耳飾りの欠損品が出土した。なお、52号土壌については調査後の検討により、53号土壌と同一と考えられたために欠番とした。さらに68号土壌については、黒褐色土の落ち込みが不定形な広がりをしていたために土壌としたが、不確定な要素もある。また以下の表中、形態分類の基準については中畦遺跡の分類(P-70、第56図)を参照されたい。なお重複の新旧関係については明確なものについてのみ記述を行った。時期については出土土器による判断である。(小野)

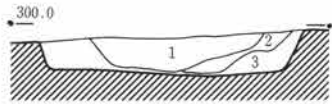


2号土壇

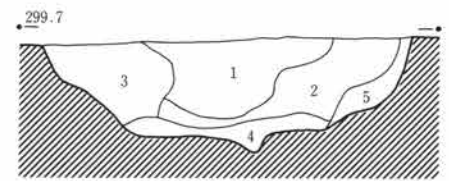
3号土壇



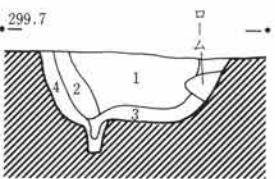
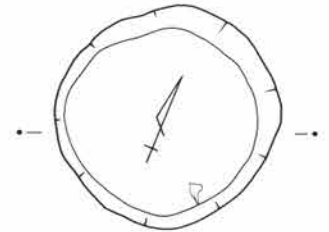
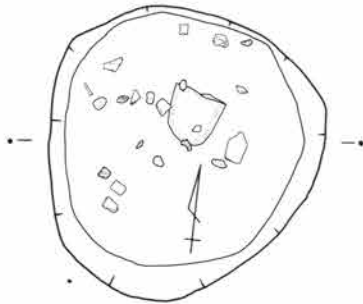
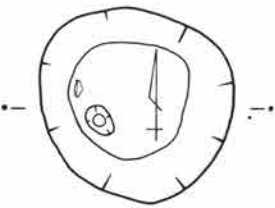
1号土壇



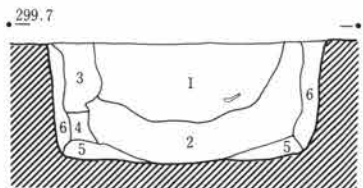
4号土壇



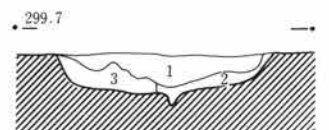
5号土壇



6号土壇



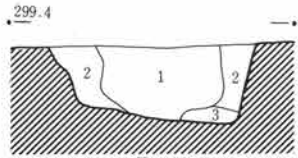
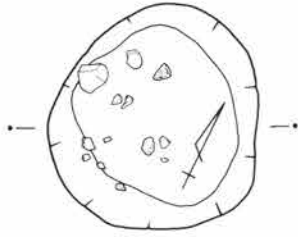
7号土壇



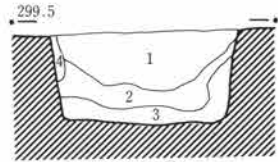
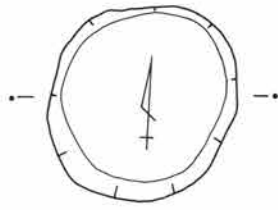
8号土壇

第191図 土壇 (1)

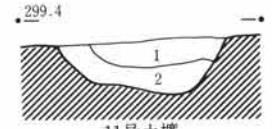
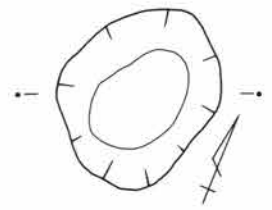




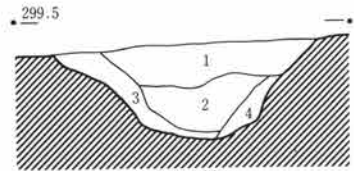
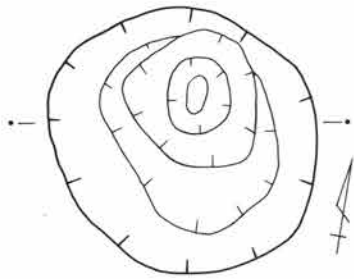
9号土坑



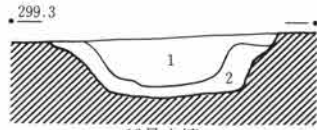
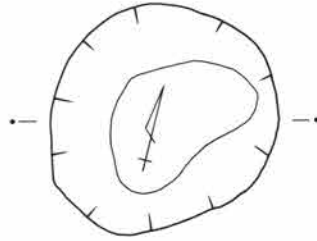
10号土坑



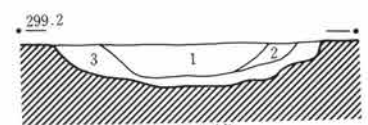
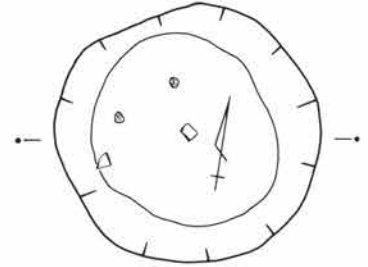
11号土坑



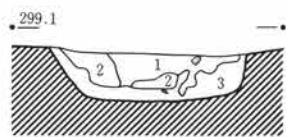
12号土坑



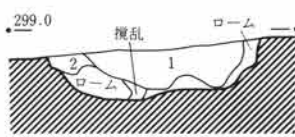
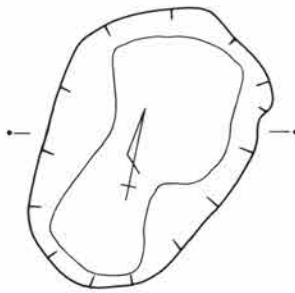
13号土坑



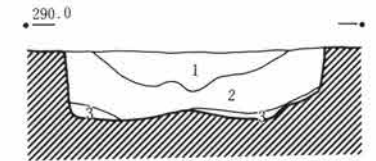
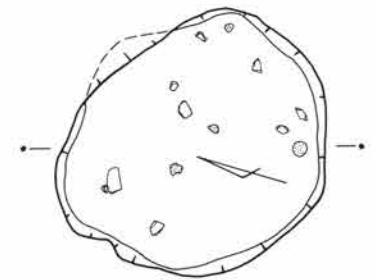
14号土坑



15号土坑



16号土坑



17号土坑

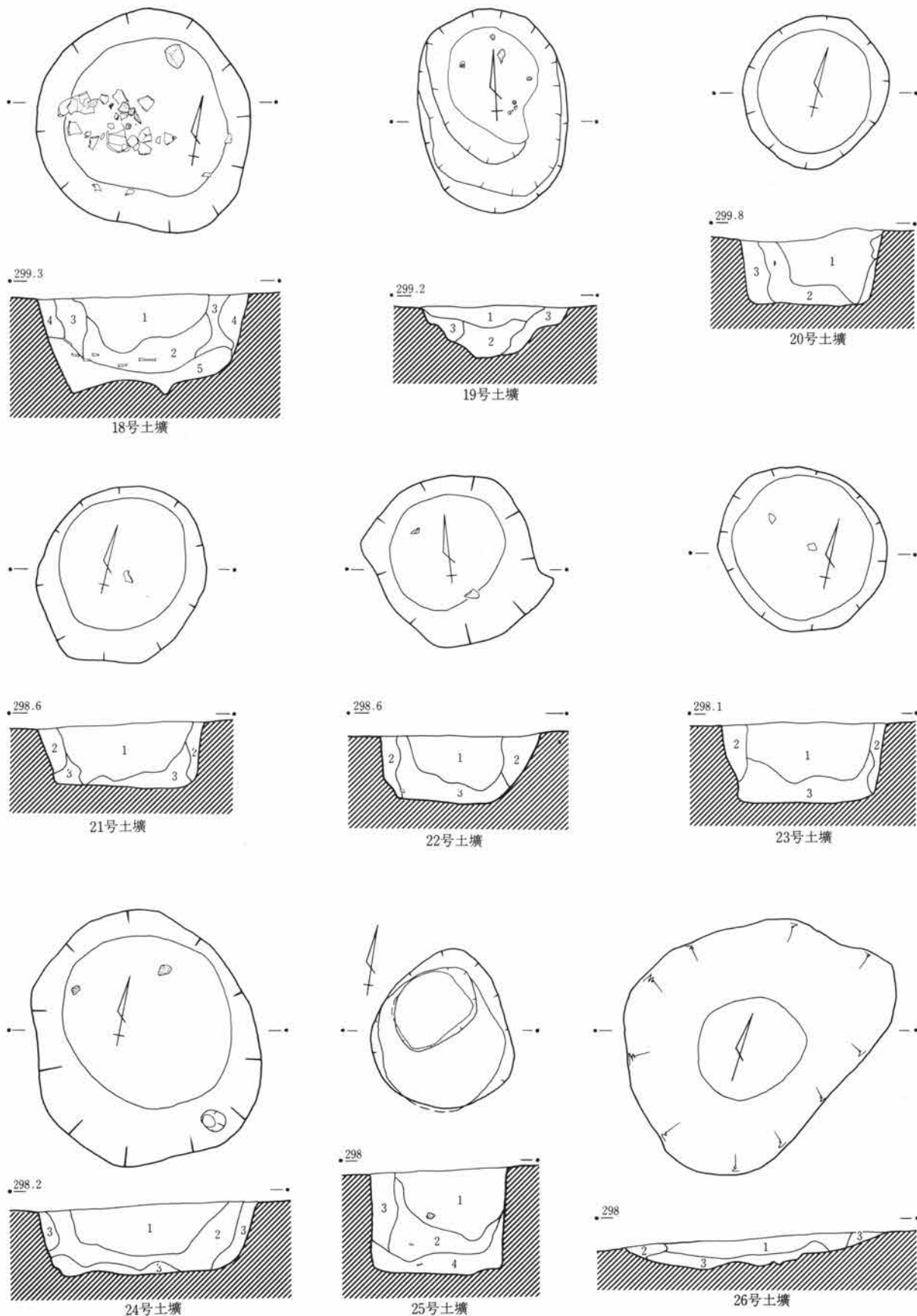
第192図 土 坑 (2)

0 1 m

表24 土壌一覧表

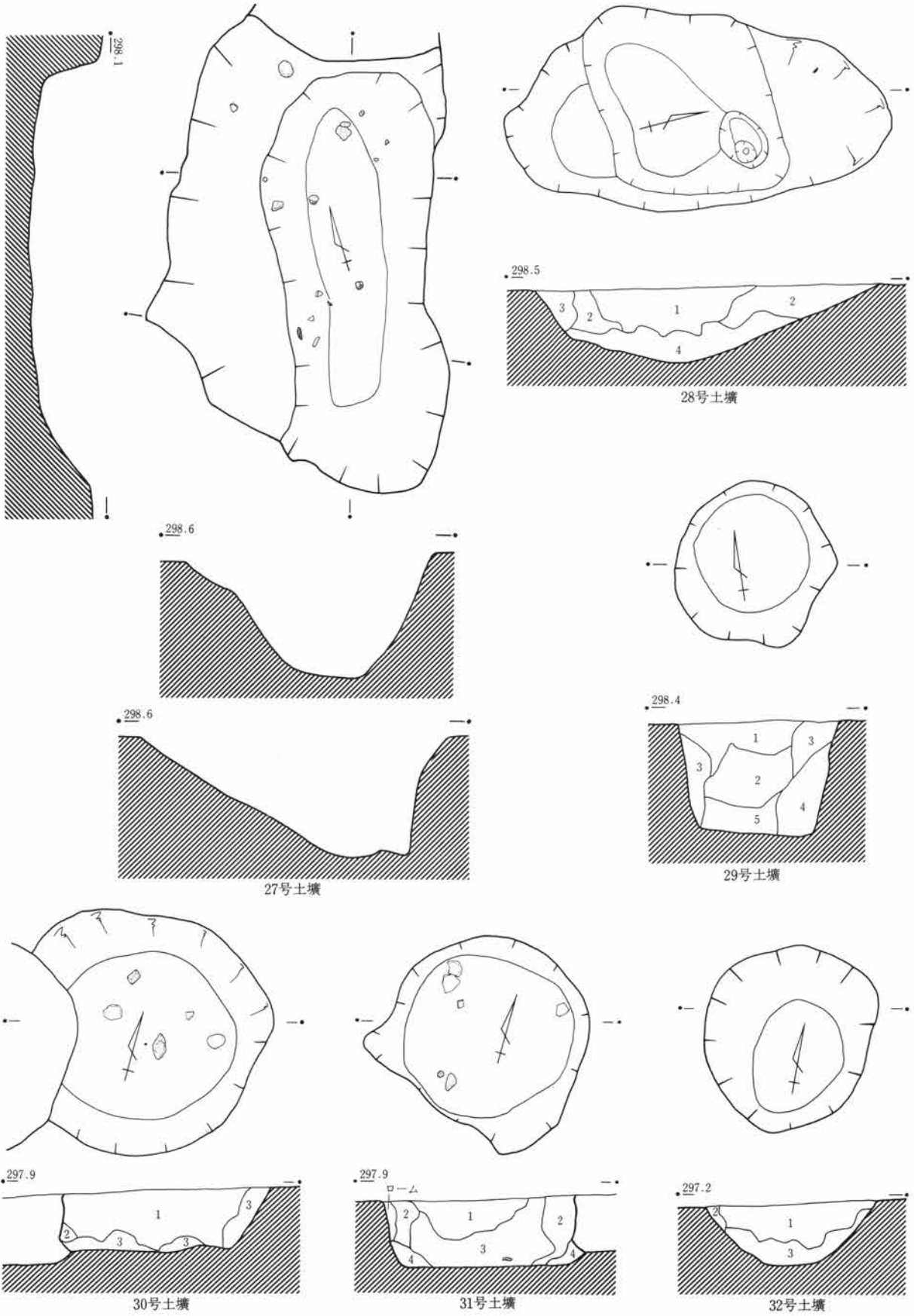
(関)は関山期、(諸)は諸磯期、(勝)は勝坂期を示す。

番号	位置(グリッド)	形状	規模(cm)	出土遺物	分類	土 層	備 考
1	29~30-B36~38	不正長円	450 313 100	土器片 (関) 磨石1点	I	1 黒褐色土 ローム粒、炭化物含む 2 黒褐色土 ローム粒、炭化物含む 3 黒褐色土 2に以るが炭化物少ない 4 黒褐色土 ローム粒やや多く含む 5 橙褐色土 6 淡黒褐色土 7 黒褐色土 8 淡黒褐色土	
2	25~26-B29	円	148 125 57	土器片 (関) スクレイパー 1点	II B	1 黒色土 炭化物、ローム粒少量含む 2 黒褐色土 ローム分を含む 3 黒色土 S P粒若干含む 4 黒褐色土 ロームを含む	
3	29~30-B27~28	円	130 120 34	土器片 (関) 石匙	III B	1 黒色土 ローム粒、白色粒を含む 2 黒色土 炭化物を含む 遺物包含層 3 黄黒褐色土 ローム分を含む 4 黄褐色土 炭化物、ロームを含む	
4	39-B29~30	円	150 126 21		III B	1 黒色土 白色粒を含む 2 黒褐色土 白色粒、ローム粒を含む 3 黒褐色土 ロームブロックを含む	
5	37-B26~27	円	200 132 60	土器片 (関) 打製石斧1点 スクレイパー 1点	III A	1 黒褐色土 ローム粒、炭化物を含む 2 黒褐色土 1よりローム粒多く含む 3 黄褐色土 ローム主体 4 橙褐色土 S P多量に含む 5 黄褐色土 ローム主体	
6	36~37-B25~26	円	104 102 52	土器片 (関)	III B	1 黒褐色土 ローム粒、炭化粒を含む 2 黒褐色土 ローム分やや多い 3 黒褐色土 ローム粒多く含む 4 黒褐色土 ロームを主体とする	
7	35~36-B25~26	円	156 148 60	土器片 (関) 礫1点 スクレイパー 1点 石皿1点	II A	1 黒褐色土 ローム粒、炭化粒含む 2 黒褐色土 ローム粒、炭化物含む 3 黄黒褐色土 ローム、ローム粒含む 4 黒褐色土 ローム粒やや多い 5 褐色土 S P粒を多く含む 6 黄褐色土 ロームを主体とする	
8	33~34-B23	円	120 117 27	土器片 (関) 石片	III B	1 黒色土 2 黒褐色土 ロームブロックを含む 3 黄褐色土 ローム粒、ブロック含む	
9	38-B21~22	不正円	120 112 42	土器片 (勝) 打製石斧1点	II A	1 黒褐色土 ローム粒若干含む 2 黄褐色土 ローム多量に含む 3 黄褐色土 2よりもやわらかい	
10	29-B18		100 100 48		II A	1 黒褐色土 ローム粒若干含む 2 黒褐色土 ローム粒やや多い 3 黄褐色土 ローム粒多く含む 4 黄褐色土 ローム主体とする	
11	30~31-B16~17		100 78 30		III A	1 黒褐色土 2 黒褐色土 ロームブロック含む	
12	28-B15~16	不正円	148 140 50	土器片	III A	1 黄褐色土 ローム粒、ブロック含む 2 黒褐色土 ローム粒含む 3 黒褐色土 ローム粒、ブロック含む 4 黄褐色土 S Pブロックを主体	
13	28-B14	不正円	130 127 32		III A	1 黒褐色土 ローム粒を若干含む 2 黒褐色土 1に以るが黄色味が多い	
14	27~28-B13~14	円	134 133 22	土器片 (関)	III A	1 黒色土 ロームを若干含む 2 黒褐色土 ロームブロックを含む 3 黄褐色土 ロームを主体とする	
15	29-B12~13	円	112 96 24	土器片 石匙1点	III B	1 黒色土 2 黒褐色土 ロームを若干含む 3 黄黒褐色土 ローム多量に含む	
16	30~31-B12~13	不正長円	160 110 26	土器片 (関)	IV	1 黒色土 炭化物若干含む 2 黄褐色土 ロームを主体とする 3 ローム	



第193図 土 坑 (3)

0 1 m

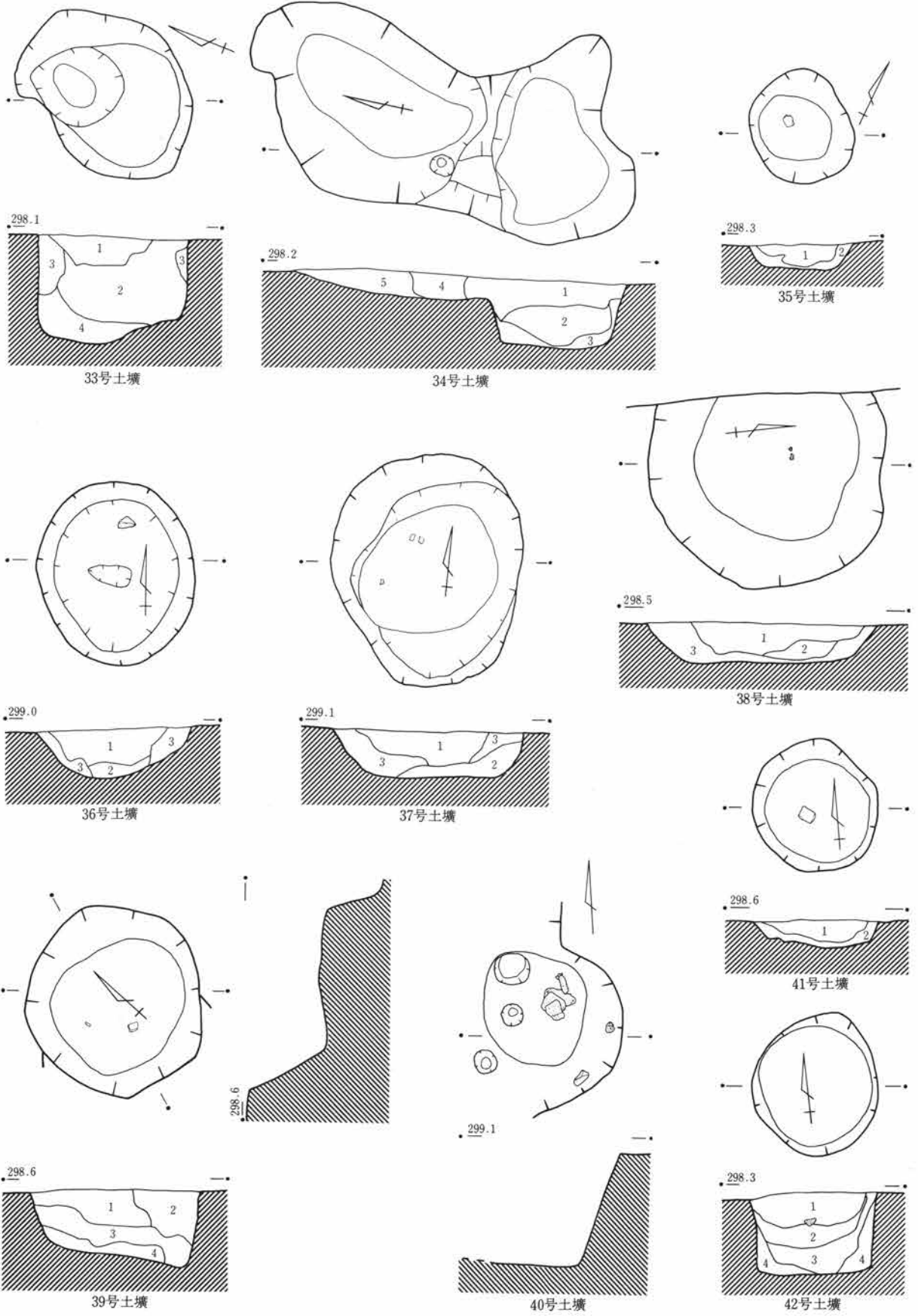


第194図 土 坑 (4)

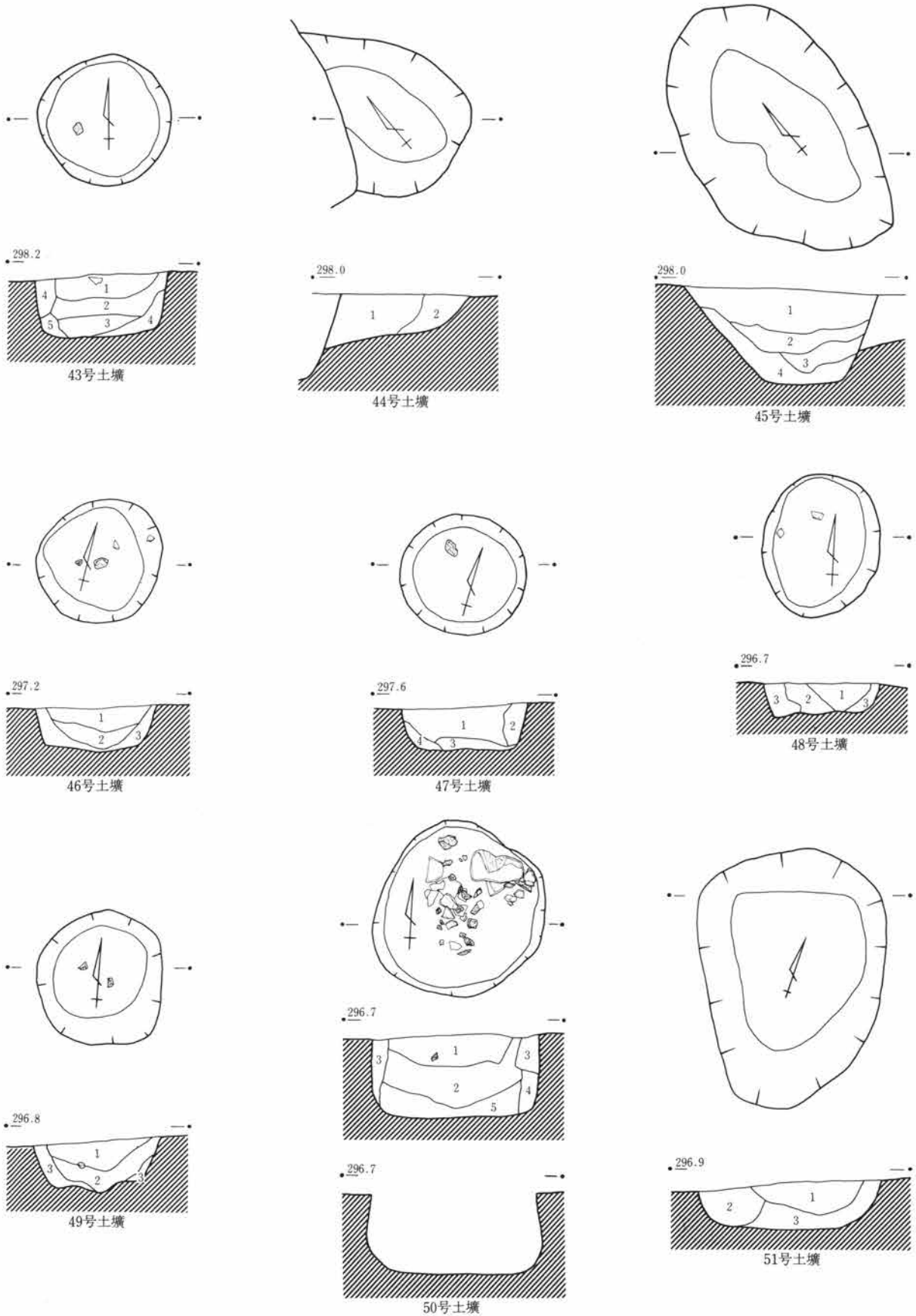
0 1m

第VI章 諏訪西遺跡

番号	位置(グリッド)	形状	規模(cm)	出土遺物	分類	土層	備考
17	30~31-B12	不正円	152 122 34	土器片 (関)	II A	1 黒褐色土 ローム、炭化物若干含む 2 黒色土 ローム、炭化物若干含む 3 ローム地山	
18	37-B19~20		158 150 70	深鉢1点(関) 磨製石斧1点	II A	1 黒色土 ローム粒僅かに含む 2 黒色土 ローム粒、炭化物含む 3 黒色土 ロームやや多く含む 4 黄褐色土 ローム主体とする 5 黒褐色土 SPを下部に多く含む	
19	39-B19~20	長円	142 104 36	土器片 (関)	IV	1 黒褐色土 ローム含む 2 黒褐色土 ローム、炭化物粒子含む 3 黄褐色土 ローム主体とする	
20	37~38-B13~14	円	106 96 50		II A	1 黒褐色土 淡褐色ロームを含む 2 黒褐色土 ローム、下部にSP含む 3 黒褐色土 ロームブロック状に含む	
21	38~39-B12~13	長円	132 114 45		II A	1 黒褐色土 ローム粒、炭化粒を含む 2 淡黒褐色土 ロームを含む 3 黒褐色土 SP粒子を含む	
22	41~42-B14~15	不正円	120 112 47		II A	1 黒褐色土 ローム粒、炭化粒子含む 2 淡黒褐色土 ロームブロックを含む 3 黒褐色土 SP粒子を含む	
23	41~42-B09	円	118 114 56		II A	1 黒褐色土 ローム粒含む 2 褐色土 ロームを主体とする 3 黒褐色土 SP粒子多く含む	
24	42~43-B10	不正円	176 160 48	土器片 (勝)	II A	1 黒褐色土 ローム粒若干含む 2 黒褐色土 ローム粒、炭化物含む 3 黄褐色土 ロームブロックを含む	
25	43-B09	不正円	110 100 74		II A	1 黒褐色土 ローム粒含む 2 黒褐色土 ローム粒多く含む 3 黒褐色土 ローム粒、ブロック含む 4 暗褐色土 ロームを多く含む	
26	44~45-B09~10	不正長円	200 154 20		IV	1 黒色土 ローム粒白色粒子含む 2 黒褐色土 ロームを主体とする 3 黒色土 ローム分を若干含む	
27	41~42-B13~15	不正長円	304 200 48	土器片 (勝) スクレイパー1点 磨石1点	I		8号住居址と39号土壌と重複する
28	44~45-B15~16		272 136 52	石匙1点	IV	1 黒褐色土 ローム粒、炭化物含む 2 黒褐色土 1よりもやや色が明るい 3 暗褐色土 ロームを主体とする 4 黄褐色土 ローム分、ローム粒含む	
29	46-B14~15	円	116 112 82	土器片 (関)	II A	1 暗褐色土 ロームブロックを含む 2 暗褐色土 1よりも色が暗い 3 黒褐色土 ロームブロックを含む 4 黒褐色土 ローム粒多く含む 5 暗褐色土 ローム粒、ブロック含む	
30	46~47-B13~14	不正円	180 174 42	土器片 (関) 磨石1点	II A	1 黒褐色土 ローム粒、炭化物含む 2 淡黒褐色土 ローム粒、炭化物含む 3 黄褐色土 ロームブロックを含む	31号土壌と重複する
31	47-B13	円	150 134 49	土器片 (関) スクレイパー1点 彫器1点	II A	1 黒褐色土 ローム粒、炭化物含む 2 黒褐色土 ローム粒多く含む 3 黒褐色土 炭化物多く含む 4 黄黒褐色土 炭化物、ローム粒含む	30号土壌を切る
32	48-B14~15	円	130 124 42		III A	1 黄黒褐色土 ローム粒、ブロック含む 2 攪乱 3 黄褐色土 ロームを主体とする	
33	39-B08~09	不正長円	130 102 76	土器片 (関)	II A	1 黒褐色土 ローム粒、炭化物含む 2 黒褐色土 ローム粒少ない 3 黄黒褐色土 ロームブロック含む 4 黄黒褐色土 SP粒子含む	
34	38~39-B08~09	不正長円	250 140 46	土器片 (関)	II A	1 黒褐色土 ローム粒若干含む 2 黒褐色土 3 黄褐色土 4 黒色土 5 黄褐色土	



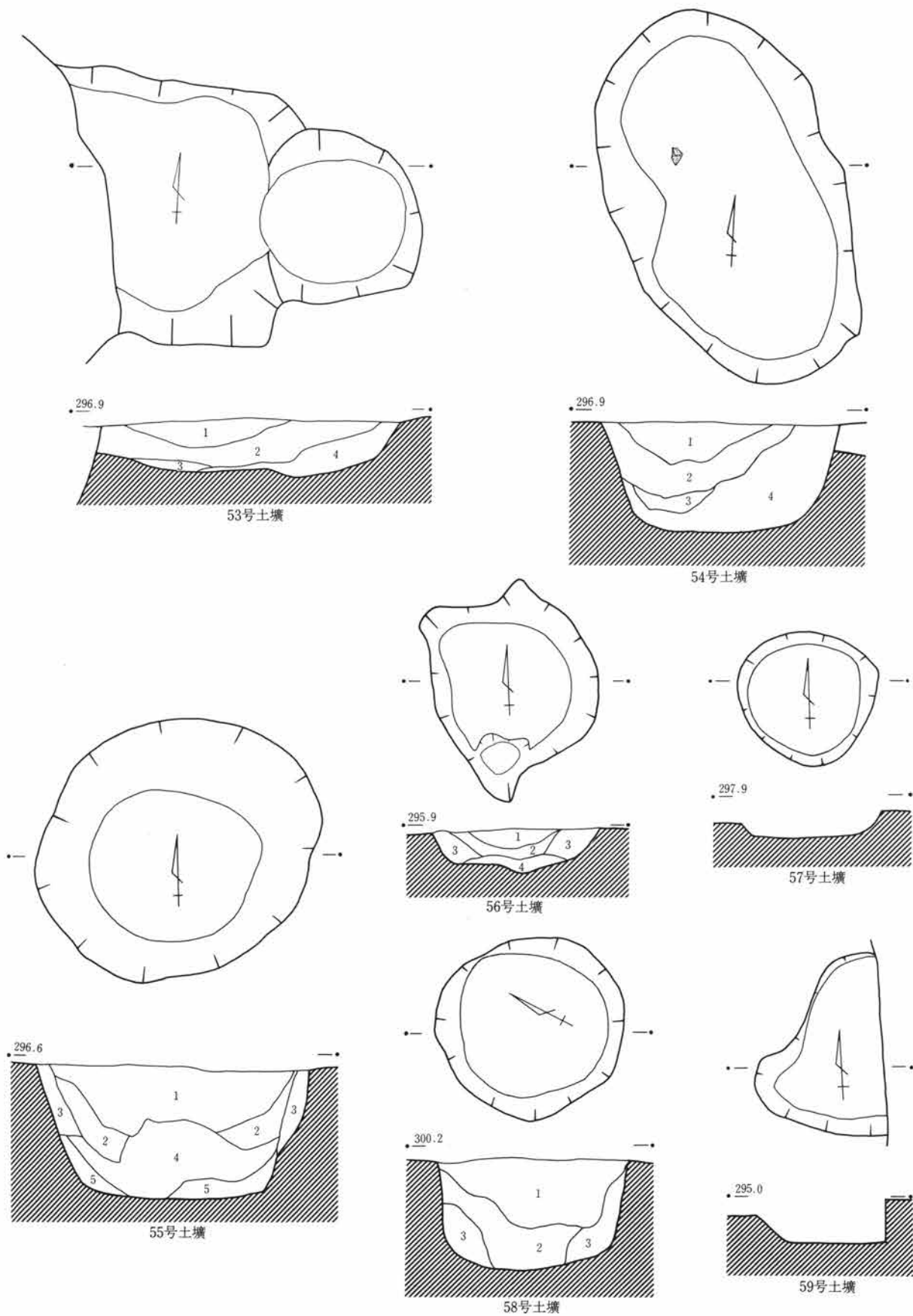
第195図 土 壙 (5)



第196図 土 壙 (6)

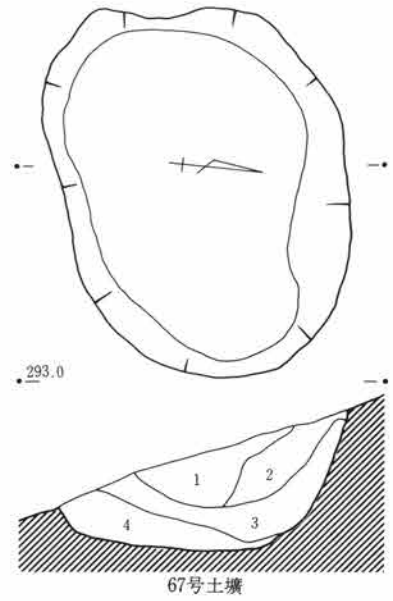
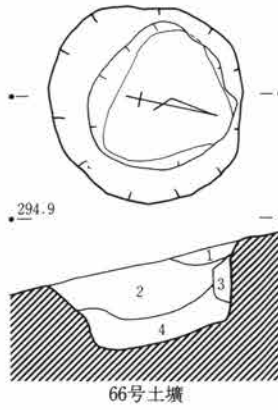
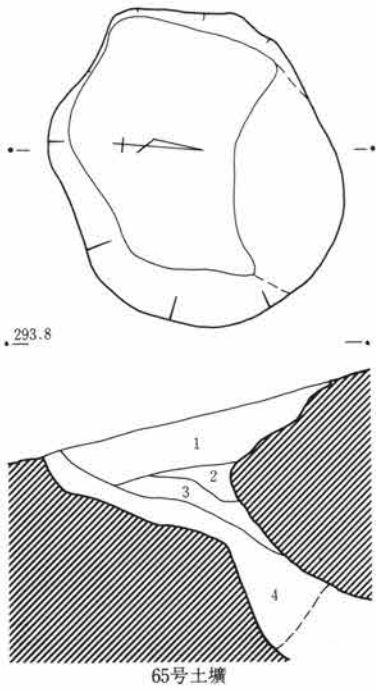
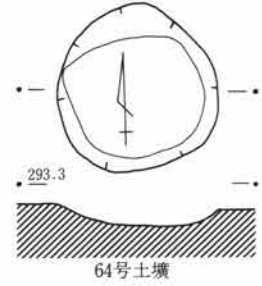
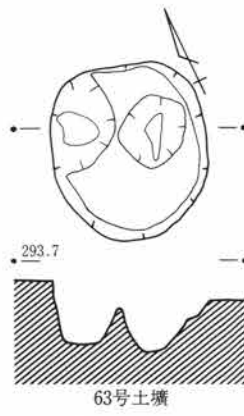
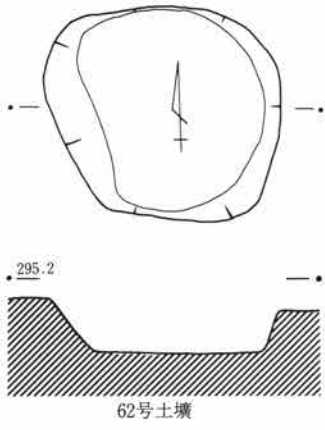
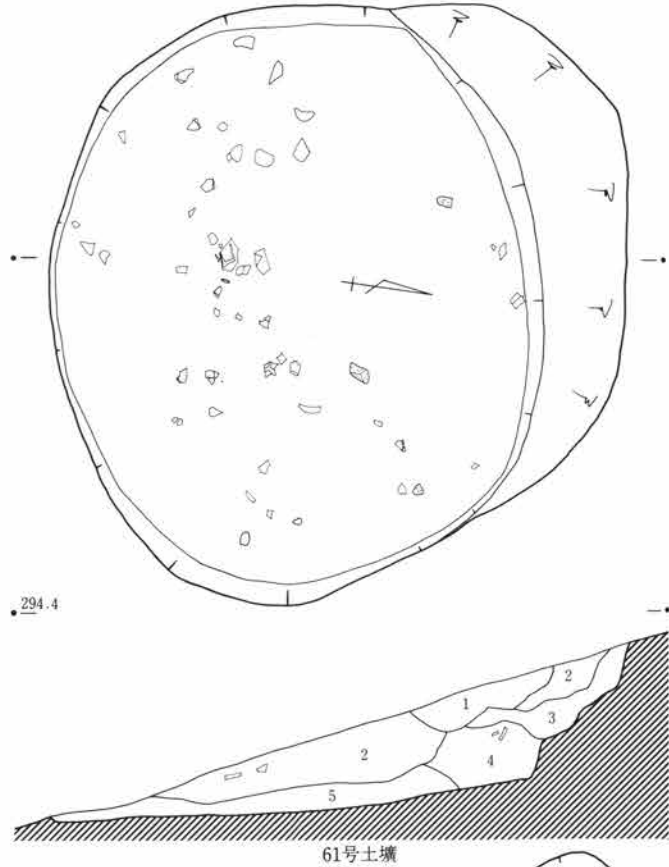
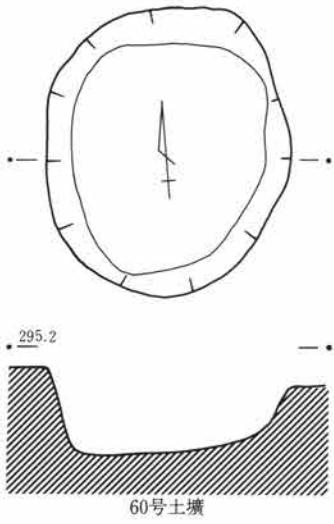
0 1 m

番号	位置(グリッド)	形状	規模(cm)	出土遺物	分類	土層	備考
35	37-B09	不正円	80 70 18		III B	1 黒褐色土 ローム粒若干含む 2 黄黒褐色土 ローム粒ブロック含む	
36	41-B08~09	長円	122 110 34		III A	1 黒褐色土 炭化物、ローム含む 2 黒褐色土 ロームを多く混入する 3 黒褐色土 ロームを主体とする	
37	41~42-B19~20	不正長円	160 140 30	土器片 (関)	III B	1 黒褐色土 ローム粒、ブロック含む 2 黒褐色土 ロームを多く含む 3 黄褐色土 ローム、白色粒若干含む	
38	53~54-B23~24		168 136 30	土器片 (勝)	III B	1 黒褐色土 ローム粒、炭化物含む 2 黒褐色土 1に以るが炭化物少ない 3 黄黒褐色土 ローム主体とする	
39	42-B15	円	136 126 54	土器片 (関)	II A	1 黒色土 ローム粒若干含む 2 黒褐色土 ロームブロック含む 3 黒色土 ロームブロック若干含む 4 黄褐色土 ローム主体とする	27号土壌と重複する
40	45-B22~23	円	126 (102) 80	台石1点	II A		11号住居址と重複する
41	23~24-B07	円	92 84 20	土器片 (関)	III B	1 暗褐色土 明褐色土ブロック含む 2 明褐色土 明褐色土ブロックを主体	
42	27-B05	円	90 90 58		II A	1 暗褐色土 褐色土ブロック含む 2 暗褐色土 ブロックを多く含む 3 暗褐色土 2層に類似粒子が細かい 4 暗褐色土 SPを多く含む	
43	29-B05	円	92 92 44	土器片 (勝)	II A	1 暗黒褐色土 明褐色土ブロック含む 2 暗黒褐色土 混入物少ない 3 暗黒褐色土 炭化物を多く含む 4 明褐色土 明褐色土ブロック含む 5 暗褐色土 SPを多く混入	
44	32~33-B05	長円	(110) 90 32		IV	1 暗褐色土 粘性ロームブロック含む 2 明褐色土 ロームブロック主体	45号土壌に切られる
45	33-B05~06	不正長円	200 124 66		I	1 暗黒褐色土 SPを含む 2 暗黒褐色土 1層より暗い 3 暗褐色土 ローム粒を若干含む 4 暗褐色土 ローム粒、ブロック含む	44号土壌と重複する
46	30-B02	円	90 84 30	土器片 (関)	III B	1 暗褐色土 褐色土ブロックを含む 2 暗褐色土 ロームブロック、SP含む 3 明褐色土 ロームブロック、SP含む	
47	32~33-B02	円	90 84 34		III B	1 暗褐色土 褐色土ブロック多く含む 2 明褐色土 明褐色土ブロック含む 3 明褐色土 SPローム粒を多く混入 4 明褐色土 ローム粒、ブロック主体	
48	29-A46~47	長円	100 82 23	土器片 (勝)	III B	1 暗黒褐色土 SPを若干含む 2 暗褐色土 ローム粒を若干混入 3 明褐色土 ローム粒、SPを含む	
49	31-A47	不正円	96 90 35	土器片 (勝)	III B	1 暗褐色土 褐色土ブロック多く含む 2 暗褐色土 ローム粒含む 3 明褐色土 ローム粒ブロック含む	
50	32-A47	円	125 110 57	深鉢2点(勝) 彫器1点 スクレイパー2点	II A	1 暗黒褐色土 SPを多く含む 2 暗黒褐色土 褐色土ブロックを含む 3 明暗褐色土 ローム粒を多量に含む 4 暗褐色土 SPを含む 5 暗褐色土 粒子の細かい土	
51	33~34-A47	長円	180 133 33	土器片 (諸) 打製石斧2点	III A	1 暗褐色土 ロームブロック含む 2 暗褐色土 よごれたローム粒主体 3 明褐色土 ローム粒、SP主体	



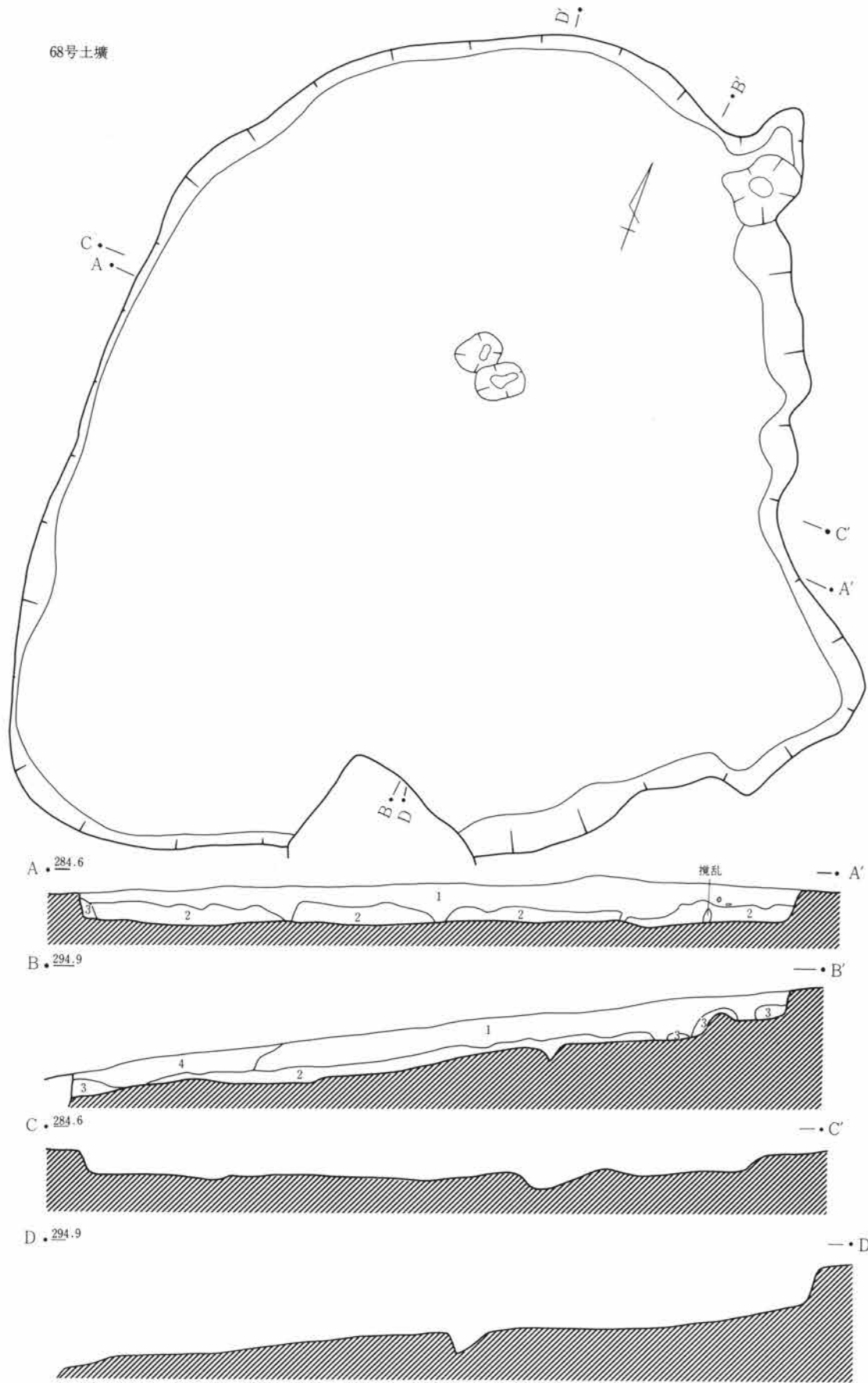
第197図 土壇 (7)

0 1m

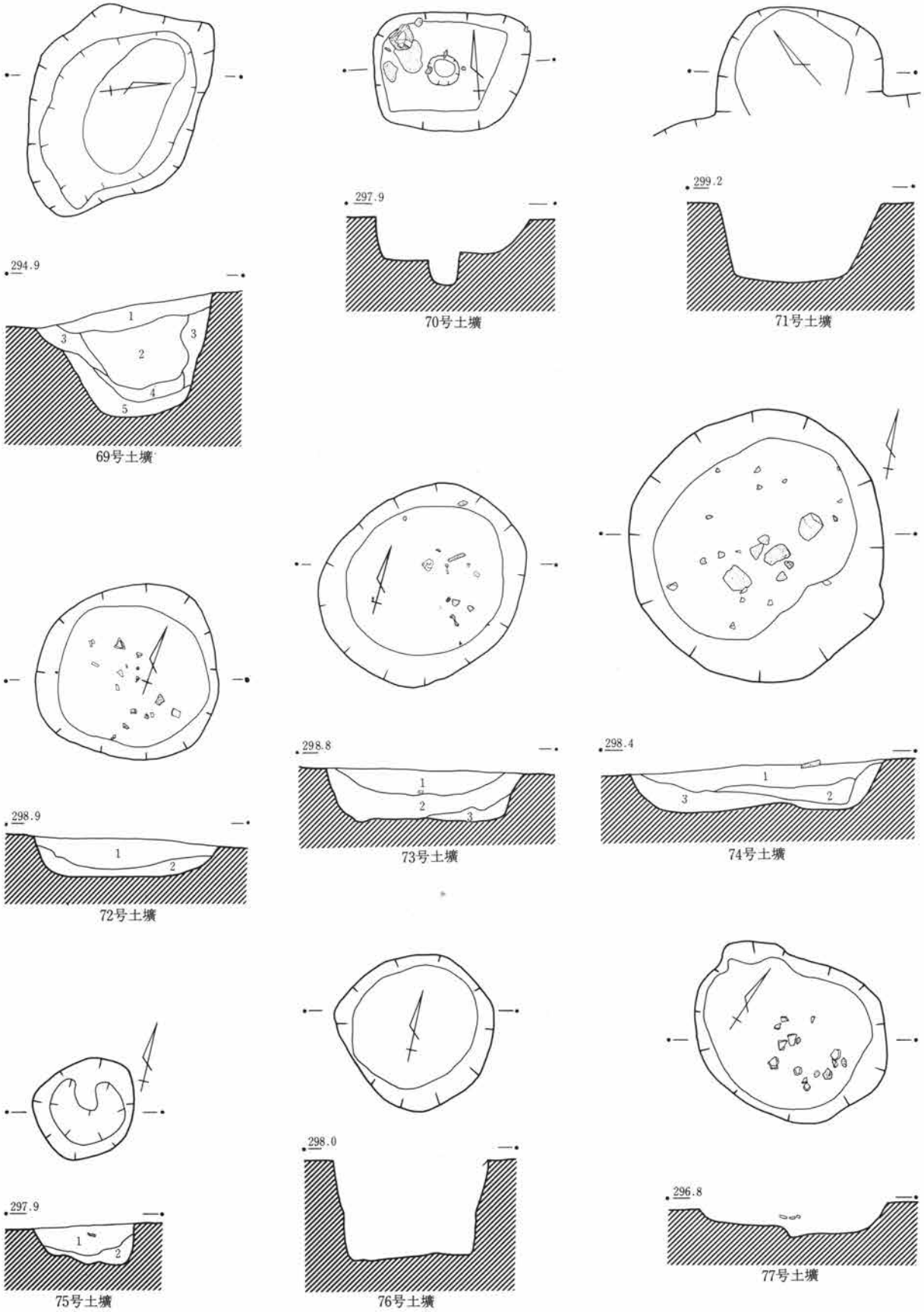


第198図 土 壙 (8)

0 1 m

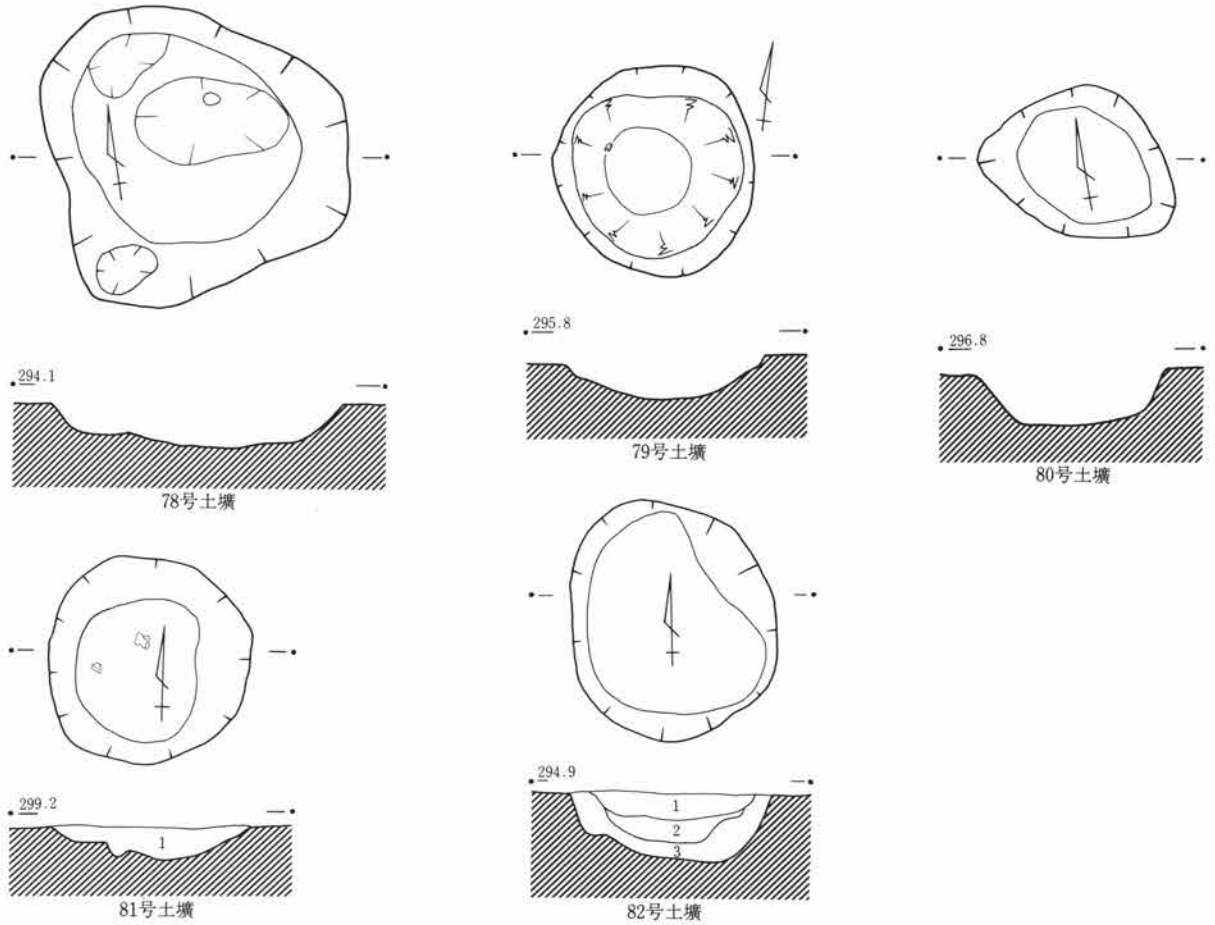


第199図 土 塙 (9)



第200図 土 坑 (10)

0 1 m



第201図 土 壙 (11)

0 1m

番号	位置(グリッド)	形状	規模(cm)	出土遺物	分類	土 層	備 考
53	35~36-A 48~49	不正	220 188 40	土器片 (諸)	IV	1 暗褐色土 ロームブロック少し含む 2 暗褐色土 ロームブロックSP含む 3 暗褐色土 ロームブロック含む 4 明褐色土 ローム粒、ブロック含む	54号土壙と重複する
54	36~37-A 48~49	長円	270 162 78		I	1 黒褐色土 SPを多く含む 2 黒褐色土 ロームブロック混入 3 黒褐色土 2層に類するが明るい 4 黒褐色土 ローム粒を若干混入	53号土壙を切る
55	37-A 47~48	円	203 180 93		II A	1 暗黒褐色土 SP、ローム含む 2 暗黒褐色土 1層に以るやや明るい 3 黄褐色 ローム、崩落土である 4 暗褐色土 ロームブロックを含む 5 明褐色土 ロームを主体とする	
56	36-A 44~45	不正円	130 115 30	土器片 (関) 球状耳飾 1点	IV	1 暗黒褐色土 SPを若干含む 2 暗黒褐色土 ローム粒、SP含む 3 暗褐色土 ローム粒を多く含む 4 明暗褐色土 SPブロックを含む	
57	36-A 42~43	円	100 100 30		III B		
58	27-B 31~32	円	134 120 80		II A	1 淡褐色土 炭化物若干含む 2 淡褐色土 1に以るがしまりが無い 3 褐色土 SP粒子含み黒っぽい	2号住居址と重複する

番号	位置(グリッド)	形状	規模(cm)	出土遺物	分類	土層	備考
59	26-A42	不正円	130 90 20		IV		
60	28~29-A41~42	長円	150 130 84	土器片 (関)	III A		
61	27~29-A39~40	楕円	332 308 56	土器片 (勝) 打製石斧1点 スクレイパー 1点 磨石1点	—	1 黒褐色土 ローム粒含む 2 黒褐色土 ローム粒含む 3 黄褐色土 ロームを主体とする 4 黒褐色土 ローム粒、炭化物含む 5 淡褐色土 ローム、炭化物含む	
62	31-A41~42	不正円	140 122 27	土器片 (勝)	III B		
63	30-A38	円	92 82 30		IV		
64	31-A37	円	85 84 10		III B		
65	33-A37~38		174 142 130		—	1 黒褐色土 ローム粒ブロックを含む 2 黒褐色土 1に類しやや暗い 3 黒褐色土 1に以るがブロック含む 4 暗褐色土 ローム粒が主体	
66	37-A40	円	110 102 40		II A	1 耕作土 2 暗褐色土 SPを多く含む 3 SPを主体とする 4 明褐色土 SPとローム粒主体	
67	41~42-A35~36	長円	210 152 58		II A	1 暗褐色土 SPを若干含む 2 暗褐色土 ローム粒を少し含む 3 明褐色土 SPを多量に含む 4 明褐色土 3に類しローム粒含む	
68	46~49-A37~40	不正円	582 544 25	土器片 石鏃1点 スクレイパー4点 打製石斧1点	—	1 暗褐色土 ロームを主体とする 2 淡褐色土 ロームを主体とする 3 ローム層 4 黄褐色土	69号土壙と重複する
69	47~48-A37~38	不正長円	170 122 77	土器片 (関) 石鏃1点	I	1 黄褐色土 ローム粒若干含む 2 黒褐色土 ローム粒、炭化粒含む 3 黄褐色土 ロームブロック主体 4 黄褐色土 ロームを多く含む 5 淡褐色土 ロームを多く含む	68号土壙と重複する
70	32-B01	隅丸長方	110 80 30	土器片 (関) 磨石1点	III B		5号住居址と重複する
71	45~46-B25	不正円	118 (80) 65	土器片 (関)	II A		11号住居址と重複する
72	30-B11~12	円	128 126 26	土器片 (関)	III B	1 暗黒褐色土 褐色土ブロック含む 2 暗褐色土 ローム粒を含む	
73	30~31-B10~11	円	148 124 34	土器片 (関) スクレイパー1点 打製石斧1点	III B	1 暗褐色土 褐色土ブロック多く含む 2 暗褐色土 SPを少し含む 3 暗褐色土 黄色土の小ブロック含む	
74	33~34-B08~09	円	184 182 32	敲石1点	III B	1 暗褐色土 褐色土ブロック多く含む 2 暗褐色土 1と同色ブロックを含む 3 暗褐色土 暗褐色のロームブロック	
75	38-B07	不正円	76 66 28	土器片 (関)	IV	1 暗褐色土 SPを多く含む 2 暗褐色土 ロームブロック粒含む	
76	39~40-B07~08	不正円	106 102 72	土器片 (関)	II A		

番号	位置(グリッド)	形状	規模(cm)	出土遺物	分類	土層	備考
77	46~47-B02	不正長円	142 112 20	土器片 (関) スクレイパー 1点	IV		
78	46~47-A44~45	不正形	178 166 20		IV		
79	51-A41~42	円	110 106 20	石鏃1点	III A		
80	39-B00~01	不正円	110 80 23		III B		
81	25~26-B12	不正円	113 108 16		IV		
82	44-A41~42	不正長円	130 112 34		III A	1 黒褐色土 SP褐色土ブロック含む 2 暗黒褐色土 SP、ローム粒混在 3 褐色土 SPブロックローム粒混在	

土壙出土土器 (第202~211図)

1号土壙 (1~16)

1は波状口縁となり、口縁直下および頸部に梯子状沈線をもつ併行沈線を2条廻らせ、その内部に同様の併行沈線により蕨手状等を描く。2は、平縁で口縁直下および頸部に併行沈線を廻らせ、その内部に併行沈線を鋸歯状に施し菱形、三角等の文様を描き、瘤状の突起を貼付する。また孔を有する。胴部には、RL(0段多条)・LRで結束による羽状縄文を施す。3は胴部に半截竹管によるコンパス文をもち、地文にLR・RLの結束による羽状縄文を施す。4・6~10・16は胴部に、閉端環付のLR・RLにより羽状縄文を施すもの。5は、胴部に閉端環付のRLを施すもの。11・15は、胴部にLR・RLによる羽状縄文を施すもので、15は上げ底となる底部である。14は、胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)の結束による羽状縄文を施すもの。12・13は、胴部にRLを施すものである。

2号土壙 (17~26)

17は、口縁部に平行沈線および円形刺突文をもつもの。18は、胴部に半截竹管による爪形の連続刺突を廻らせ、地文に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施す。19・20・22~24は、胴部に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施したもので、0段多条を用いたもの20・22もある。21は、胴部にL・Rの2本による結節回転を施したもの。25は、波状口縁となり全面にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したもの。26は、胎土に砂粒を含む無文のものである。

3号土壙 (27~41)

27は、波状口縁となり口縁部に刻目をもつ細い隆帯を施すとともに、蕨手状等の捺糸側面圧痕を施す。28・29は、双頭となる波状口縁で、口縁部に梯子状沈線をもつ併行沈線により蕨手状および連結線等を描き、円形刺突・瘤状貼付文を施す。38は、双頭となる波状口縁で、口縁直下に刻目および半截竹管による並行沈線を廻らせ、口縁部に梯子状沈線をもつ並行沈線により蕨手状・連結線および瘤状貼付文を施す。32は、口縁部に梯子状沈線をもつ併行沈線により蕨手状・連結線および円形刺突・瘤状貼付文を施し、その下に梯子状沈線をもつ併行沈線を廻らせ口縁部文様の区画を行ない、胴部に縄文を施す。31は、平縁で口縁直下に梯子状沈線をもつ平行沈線(半截竹管)により蕨手状・菱形・円形等を描き、胴部には閉端環付・開端他条(纖維束)結縛のRLを施す。30は、波状口縁となり口縁直下および頸部に梯子状沈線をもつ併行沈線を廻らせ、

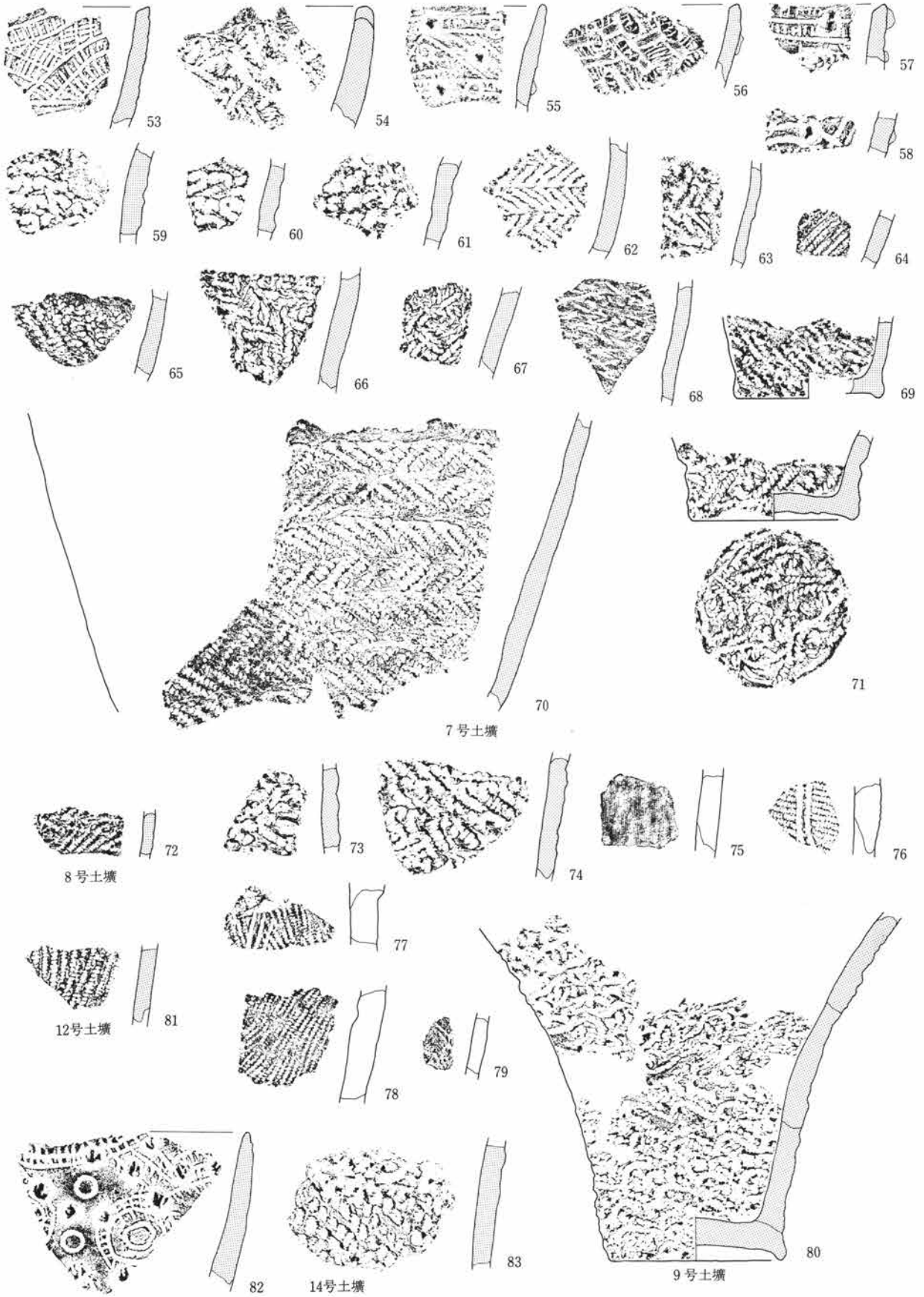


第202図 1・2・3号土壙出土土器

0 10cm



第203図 3・5・6号土壙出土土器



第204图 7・8・9・12・14号土壙出土土器

0 10cm

口縁部に同様の沈線により連結線ないし菱形を描き、胴部には閉端環付のRLを施す。40は、平縁で口縁部および胴部下部に閉端環付となる原体の環部の圧痕・瘤状貼付文をもち、胴部には閉端環付のRLを施す。33・36は、胴部に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施す。34・35は、胴部に閉端環付のRLを施す。37は、胴部に閉端環付・開端他条（繊維束）結縛のLR（0段多条）およびLR（0段多条）・RL（0段多条）の結束による羽状縄文を施す。39は、胴部にLR・RLの結束による羽状縄文を施したやや上げ底となる底部である。41は、平縁で全面にLR（0段多条）・RL（0段多条・開端他条結縛）の結束による羽状縄文を施す。

5号土壙（42～47）

42は、胴部に閉端環付のLR（0段多条）・RLにより羽状縄文を施す。43は、胴部にRL（0段多条）を施す。44～47は、同一個体と思われるもので、胴部にLR・RLによる羽状縄文を施し、上げ底となる底部にも縄文を施す。

6号土壙（48～52）

48は、双頭となる波状口縁で、口縁直下に梯子状沈線をもつ併行沈線を廻らせ、口縁部に連結線等を描き瘤状貼付文および円形刺突を施す。49は、口縁部に併行沈線で文様を描き、瘤状貼付文および円形刺突を施す。50は、胴部に閉端環付のLR（0段多条）を施す。51は、無文の丸底ないしは尖底となる底部片である。52は、胴部に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施す。

7号土壙（53～71）

53は、波状口縁となり口縁直下に梯子状沈線をもつ併行沈線を廻らせ、口縁部に同様の沈線で連結線等を描く。54は、双頭となる波状口縁で、口縁以下にL・Rの2本を用いた結節回転を施す。55は、平縁で口縁直下および口縁部に梯子状沈線をもつ併行沈線を数条廻らせ、口縁部に刻目状の連続刺突を鋸歯状に施し、円形刺突・瘤状貼付文を施す。56は、波状口縁となり口縁直下に刻目および半截竹管具による平行沈線を数条廻らせ、口縁部に同様の刻目・沈線を描き、刻目をもつ瘤状貼付文をもつ。57・58は、口縁部に併行沈線で文様を描き、瘤状貼付文をもつもので、併行沈線間に梯子状沈線をもつもの57もある。59～61は、胴部に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施したもの。62・70は、胴部にLR・RLにより羽状縄文を施したもの。63・66～68は、胴部に結節回転を施したもので、L・Rの2本によるもの66・67と、L・Lの2本によるもの63・68がある。64・65は、胴部にLRを施したもの。69は、上げ底となる底部で、胴部下に閉端環付のRLを施したもの。71は、やや上げ底となる底部で、R・Rの2本による結節回転を施したもの。

8号土壙（72）

72は、胴部にLRを施したもの。

9号土壙（73～80）

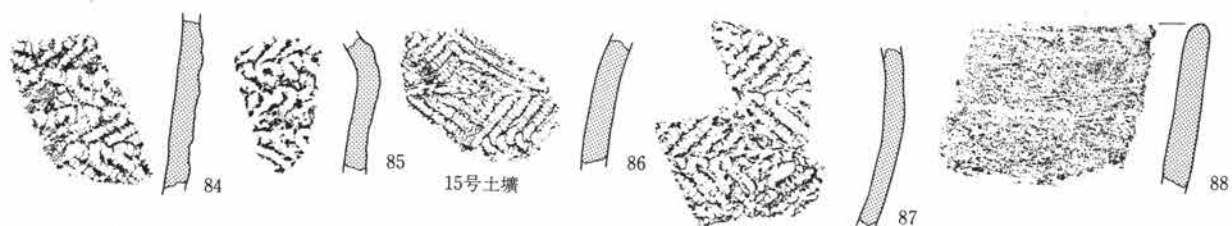
73・74は、胴部に閉端環付のRLを施すもので、0段多状を用いるもの74もある。75～79は、胎土に小砂粒・礫を含むもので、75は無文のもの。76・77・79は、胴部に隆帯および半截竹管による平行沈線で文様を描くもので、地文にRLを施す76・77。78は、胴部にRLを施す。80は、上げ底となる底部をもつ深鉢で、胴部にL・Lの2本による結節回転を施したもの。

12号土壙（81）

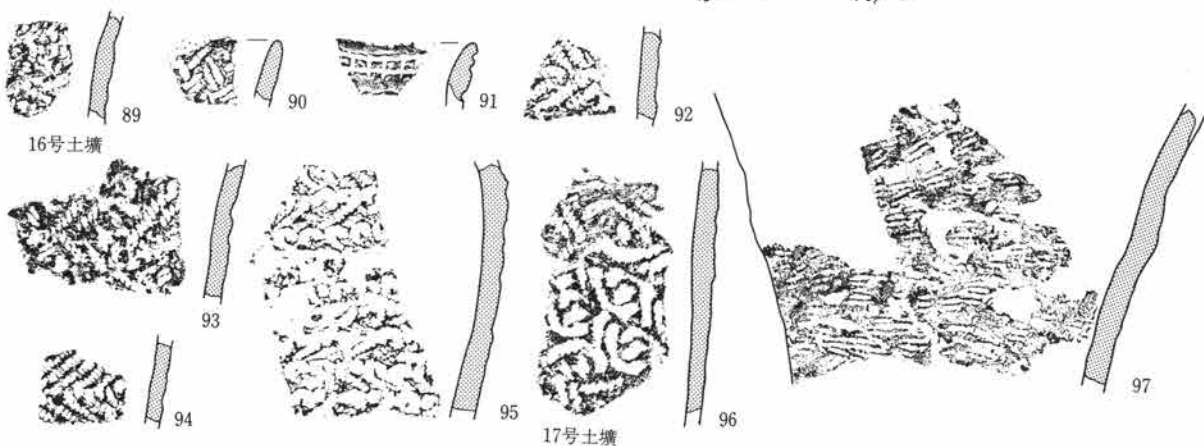
81は、胴部にRL（0段多条）を施したもの。

14号土壙（82・83）

82は、波状口縁で口縁直下に梯子状沈線をもつ併行沈線を2条廻らせ、口縁部に同様の沈線により連結線・



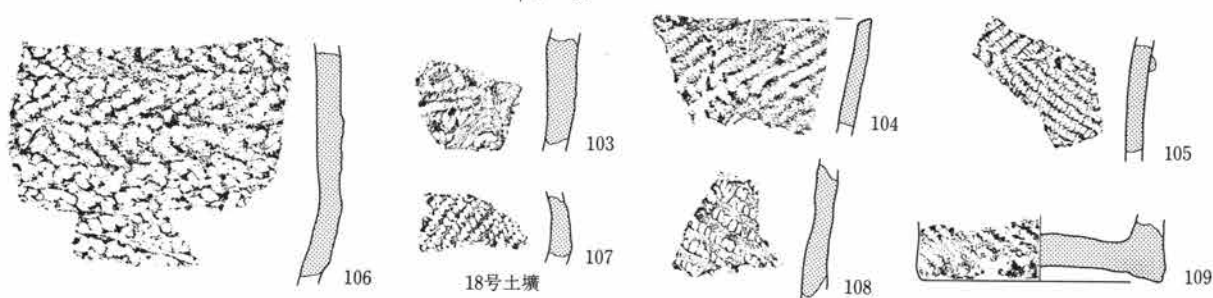
15号土壙



16号土壙



17号土壙



18号土壙

第205图 15・16・17・18号土壙出土土器

0 10cm

蕨手等を描き、刻目をもつ瘤状貼付文および円形刺突を施す。83は、胴部にRLR(前前段多条)を施したものの。

15号土壙(84~88)

84・85・87は、胴部に閉端環付のLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施す。86は、胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施す。88は、無文の平縁である。

16号土壙(89)

89は、胴部にLR・RLによる羽状縄文を施すもの。

17号土壙(90~97)

90は、波状口縁となり口縁直下に梯子状沈線をもつ併行沈線を廻らせたもの。91・95・96は、胴部にL・LないしはR・Rの2本による結節回転を施すもの。92は、胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したものの。94は、胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)の結束による羽状縄文を施したものの。97は、胴部にアナダラ属の貝殻による貝殻背圧痕を施したものの。

18号土壙(98~111)

98は、胴部にふくらみをもつ深鉢で、口縁部に梯子状沈線をもつ併行沈線で文様を描き、瘤状貼付文を配する。胴部には、閉端環付のLR・RLにより羽状縄文を施す。99は、波状口縁となり口縁直下および頸部に梯子状沈線をもつ併行沈線を廻らせ、口縁部に同様の沈線により蕨手・連結線等を描く。100は、平縁で口縁直下に半截竹管による爪形文をもつ平行沈線を廻らせ、口縁部に同様の沈線および爪形文をもたない平行沈線により文様を描く。101・104は、平縁で口縁以下にLR(0段多条)・RL(0段多条)の結束による羽状縄文を施す。102は、平縁で小形の深鉢を呈し、口縁以下にLRを施すとともに円形刺突をもつ。103・105は、胴部にLR・RLにより羽状縄文を施すもので、0段多条を用い瘤状貼付文をもつ。107~109は、胴部にLRないしはRLを施すもので、0段多条を用いやや上げ底となるもの109。106は、胴部に閉端環付のLR・RLにより羽状縄文を施す。110は、平縁となる深鉢で口縁以下に縄文を施すが、上半にはLR(0段多条)・R(0段多条)による羽状縄文を2段施し、下半にRLR(0段多条)を施す。111は、胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)を施す方向を変化させながら羽状縄文を施す。

19号土壙(112)

112は、胴部にRLRを施したものの。

24号土壙(113~117)

113は、波状口縁となり口縁直下に半截竹管による爪形文をもつ平行沈線を廻らせ、口縁部に同様の沈線で連結線を描く。115~117は、胴部にRLを施すもので、0段多条を用いるもの115・117がある。114は、胎土に砂粒を含み、胴部に隆帯および平行沈線を施す。

27号土壙(118~128)

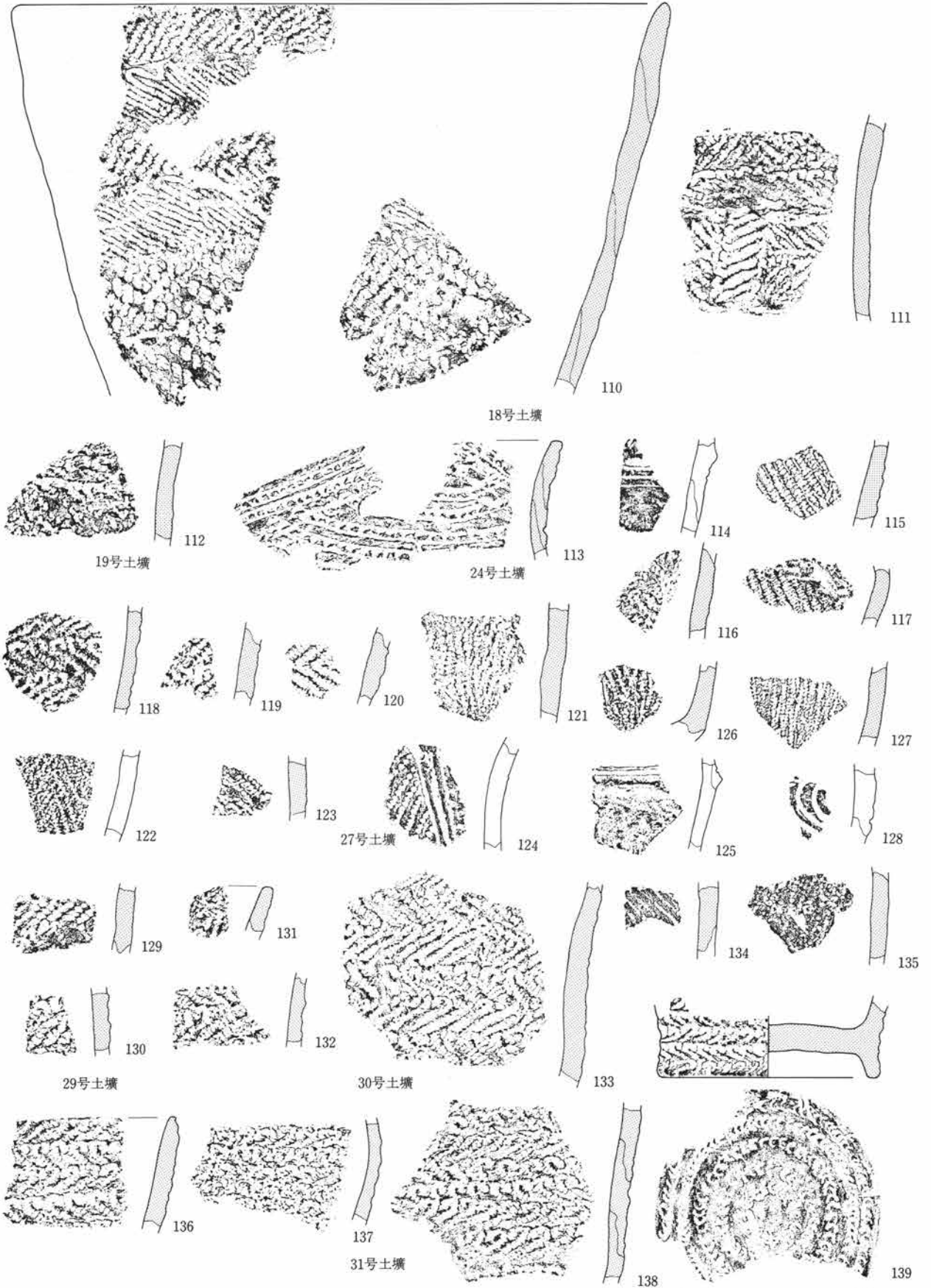
118・119は胴部の閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施す。120・123は、胴部にLR・RLによる羽状縄文を施す。121・126は、胴部にRLを施したものの。122・124・125・127・128は、胎土に砂粒を含むもので、胴部にRLを施すもの122・127。沈線による曲線を描くもの128。垂下する平行沈線もち区画内に斜位に連続刺突を施すもの124。隆帯および爪形文もち、胎土に雲母片をも含むもの125がある。

29号土壙(129・130)

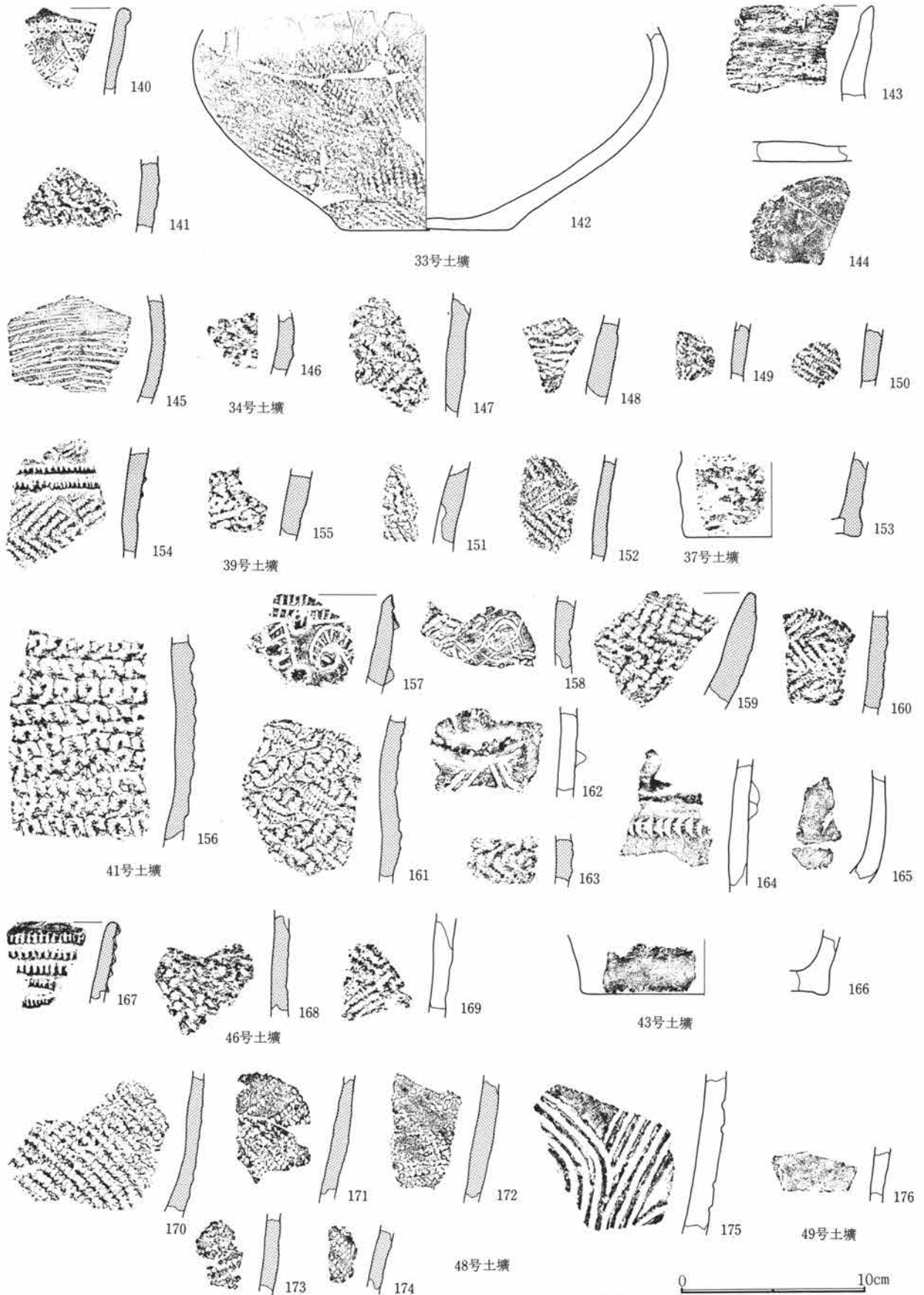
129は、胴部にRLを施したものの。130は、胴部に閉端環付のLRを施したものの。

30号土壙(131~135)

131~133は、口縁以下ないしは胴部に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施したもので、0段多条を用



第206图 18·19·24·27·29·30·31号土壙出土土器



第207图 33・34・37・39・41・43・46・48・49号土壤出土土器

いるもの132・133もある。134・135は、胴部にRLを施したものの。

31号土壙 (136~139)

136~139は、口縁以下ないしは胴部に閉端環付のLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施したもので、139は、上げ底となる底部で底に半截竹管による連続爪形文を円形に施す。

33号土壙 (140~144)

140は、波状口縁となり口縁直下に半截竹管による爪形文をもつ平行沈線を廻らせ、口縁部にも同様の沈線により文様を描く。141は、胴部に閉端環付のLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施す。143は、口縁部が無文となるもの。144は、底部である。142は、胎土に細砂粒を含み、胴部がかなり張る器形となりRLを施す。

34号土壙 (145~147)

145は、胎土に砂礫を含み胴部に条線を横位に施す。146・147は、胴部に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施す。

37号土壙 (148~153)

148~151は、胴部にLRないしはRLを施すもので、0段多条を用いるもの150もある。152は、胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)により羽状縄文を施す。153は、胴部に縄文を施す底部片である。

39号土壙 (154・155)

154は、頸部に刻目をもつ細い隆帯を2条廻らせ、口縁部には円形刺突および刺突、胴部にはLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施す。155は、胴部に閉端環付のLR・RLにより羽状縄文を施す。

41号土壙 (156)

156は、胴部に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施すもの。

43号土壙 (157~166)

157は、口縁直下に梯子状沈線をもつ併行沈線を2条廻らせ、口縁部に同様の沈線で蔽手および連結線を施し瘤状貼付文をもつ。158は、胴部に半截竹管による平行沈線で曲線を描きその上下に縄文を施す。159・160は、口縁以下ないし胴部にLR・RLで羽状縄文を施す。161は、胴部にL・Lの2本による結節回転を施したものの。163は、胴部にLR・RLの結束による羽状縄文を施す。162・164~166は、胎土に砂粒および雲母を含むもので胴部に隆帯・爪形物をもつもの164。隆帯・押しきによる沈線を施すもの162。無文となるもの165・166がある。

46号土壙 (167~169)

167は、口縁に刻目をもつ隆帯を数条廻らせるもの。168は、胴部に組紐による回転圧痕が施される。169は、胴部にLR、RLによる羽状縄文が施される。

48号土壙 (170~175)

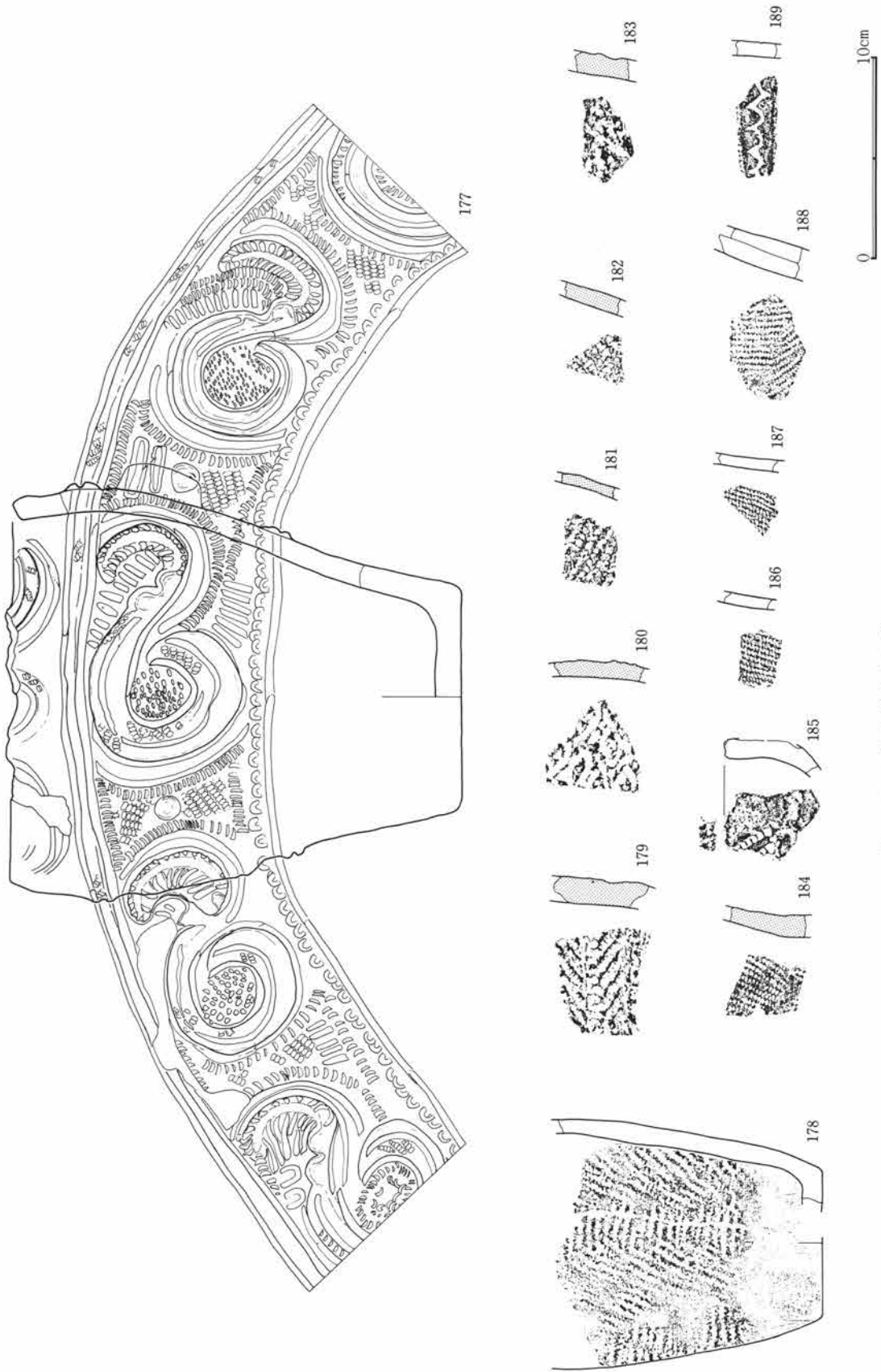
170~174は、胴部にRLを施したものの。175は胎土に砂粒を含み、胴部に沈線により曲線等の文様を描くもの。

49号土壙 (176)

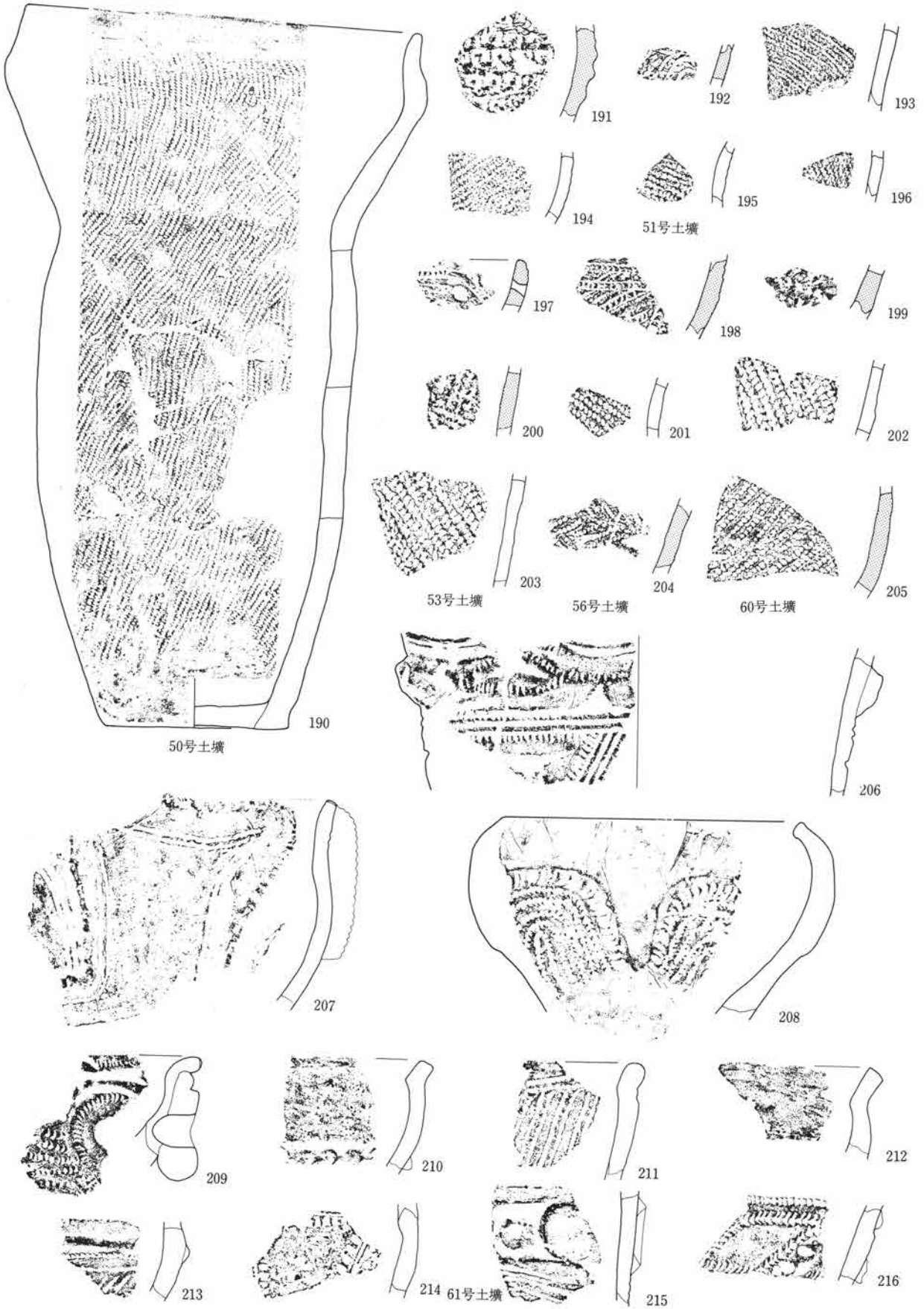
176は、胎土に砂粒を含み無文となる胴部片である。

50号土壙 (177~190)

177は、平縁となり口縁に1ヶ所把手をもつ深鉢を呈し、胎土には小砂粒・礫を含む。文様は口縁に隆帯と沈線により曲線を描き隆帯による把手をもつ。胴部には上下に隆帯および沈線を廻らせ、その区画内に「∞」状に隆帯を配し、地文にLRをもち半截竹管および棒状具等により沈線・刺突文を施す。178は、胎土に砂粒



第208図 50号土壙出土土器



第209图 50·51·53·56·60·61号土壙出土土器

0 10cm

を含み胴部にRLを施したものの。179は、胴部に閉端環付のLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施す。180は、胴部にL・Lの2本による結節回転を施したものの。182・183は、胴部にRLを施したものの。184は、胴部に閉端環付のLRを施したものの。181・185～189は、胎土に砂粒を含むもので、胴部に密なRLを施したものの185～188。胴部に沈線により押し引きを施すもの181。また沈線で小さな弧状ないしは鋸歯状を描くもの189がある。190は、やはり胎土に砂粒を含むものでキャリパー形を呈する平縁の深鉢となる。口縁部が幅狭の無文帯となり胴部に密なRLを施すものである。

51号土壙（191～196）

191は、胴部に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施す。192は、胴部に半截竹管による平行沈線で曲線を描く。193～196は、胎土に砂粒・小礫を含むもので胴部にRLを施したものの。

53号土壙（197～203）

199は、胴部に縄文を施したものの。197・198・200～203は、胎土に砂粒を含むもので、波状口縁となり波頂下に孔を有し、半截竹管による爪形文をもつ平行沈線を施すもの197。197と同一個体と思われるもので、口縁部に半截竹管による爪形文をもつ平行沈線により文様を描くもの198。胴部にRLを施したものの200～203がある。

56号土壙（204）

204は、胴部にLR・RLにより羽状縄文を施したものの。

60号土壙（205）

205は、胴部にLRを施したものの。

61号土壙（206～234）

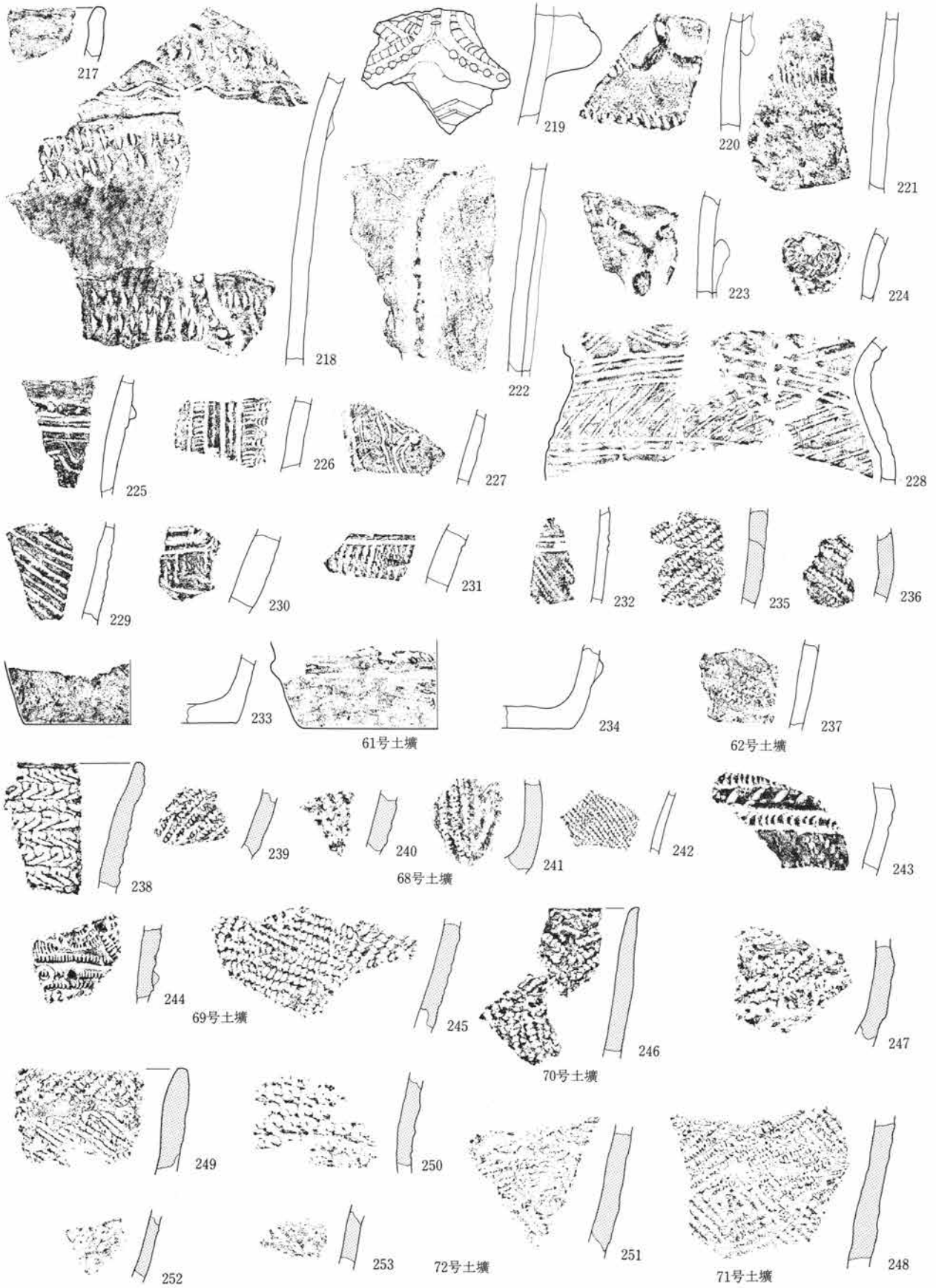
206・209・212・215・216・224・226・230～234は、胎土に小砂粒・礫を多く含むもので、刻目をもつ隆帯により文様区画を行ない平行沈線および連続刺突により文様を描くもの206。刻目をもつ隆帯で孔を有する把手状となり、把手の隆帯上には連続する爪形刺突を施すもの209。無文となる口縁のもの212。隆帯を平行に施しその間に隆帯で円形文をもつもの215。刻目をもつ隆帯で文様を描き、隆帯の両側に連続刺突をもつもの216。胴部両側に連続刺突をもつ平行沈線を垂下させ文様区画を行ない、区画内に連続する爪形刺突で文様を描くもの226。胴部に円形状の文様をもち刺突および円形文をもつもの224。胴部に平行沈線を施し、地文に捺糸文ないしは縄文を施すもの230～232。胴下部に隆帯を廻らせるもの234がある。208は、胎土に砂粒を多く含む内反する口縁をもつ深鉢で、口縁部に「□」状に2種類の工具による連続刺突を施したものの。207・210・211・213・214・218～223・225・227～229は、胎土に小砂粒・礫および雲母片を多量に含むもので、口縁部に刻目をもつ隆帯で文様を描き口縁が突起状となり、隆帯の両側には半截竹管による押し引きの沈線を施したものの207。口縁部が無文ないしは刺突をもつ隆帯をもつもの210・217。口縁部に半截竹管で押し引きによる沈線を横位・斜位に施したものの211・229。胴部に隆帯で文様区画を行ない、区画内に連続爪形刺突および半截竹管による波状沈線・押し引き沈線等を施すもの218～223・225・227。頸部がくびれ胴部が張る深鉢を呈し、平行沈線を廻らせ文様区画を行ない、区画内に斜位の沈線および波状沈線を施すもの228。

62号土壙（235～237）

235～237は、胴部にRLを施したものの。

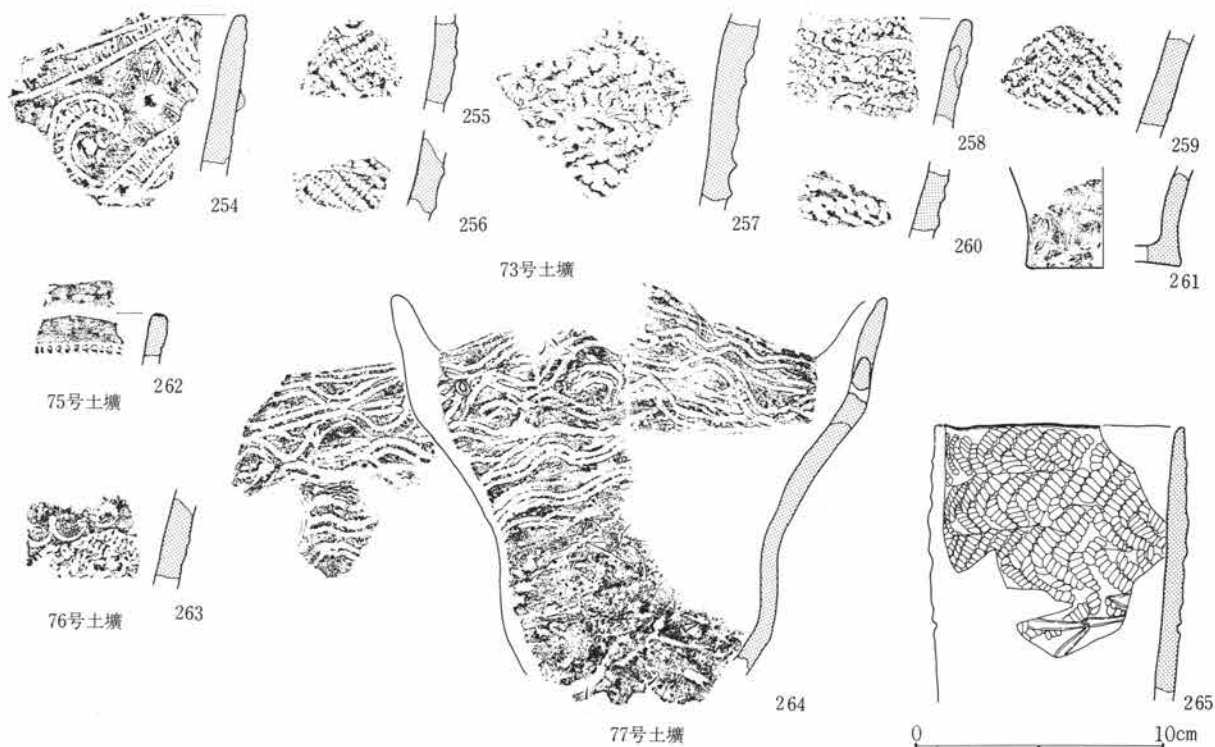
68号土壙（238～243）

238は、口縁以下に閉端環付のLR・RLにより羽状縄文を施したものの。239は、胴部にLRを施したものの。



第210图 61·62·68·69·70·71·72号土壙出土土器

0 10cm



第211図 73・75・76・77号土壙出土土器

240は、胴部にLR・RLにより羽状縄文を施したもので、241は、胴部に縄文を施した底部片である。242・243は、胎土に砂粒を含むもので、胴部にRLを施したもの242、地文にRLを施し半截竹管による連続爪形文を廻らせ、さらにその間に刻目状に沈線を施したもの243。

69号土壙 (244・245)

244は、口縁部に刻目をもつ細い隆帯を数条廻らすとともに、蕨手等を描き円形刺突および瘤状貼付文をもつ。胴部には閉端環付の縄文が施される。245は、胴部にLR・RLの結束による羽状縄文が施される。

70号土壙 (246)

246は、口縁以下にLR・RLにより羽状縄文を施すもの。

71号土壙 (247・248)

247は、胴部に閉端環付のLRを施したもの。248は、胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)の結束による羽状縄文を施したもの。

72号土壙 (249~253)

249は、口縁以下にLR(0段多条)・R(0段多条)による羽状縄文を施す。250は、胴部に閉端環付のRLを施す。251は、胴部にL・Rの2本による結節回転を施す。252・253は、胴部に縄文を施すもの。

73号土壙 (254~261)

254は、双頭となる波状口縁で口縁直下に梯子状沈線をもつ併行沈線を廻らせ、口縁部に同様の沈線により蕨手を描くとともに、刺突および瘤状貼付文を施す。255は、胴部にLR(0段多条)・RL(0段多条)による羽状縄文を施し、円形刺突をもつ。256・259は、胴部にLR(0段多条)を施したもの。257・260は、胴部に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施すもので、0段多条を用いるものもある257。258は、波状口縁で口縁以下に閉端環付のRL(0段多条)を施す。261は、底部片である。

75号土壙 (262)

262は、胎土に砂粒を含むもので、口縁部に半截竹管による爪形文をもつ平行沈線を廻らせるもの。

76号土壙 (263)

263は、胴部に半截竹管によるコンパス文をもち、地文にLR (0段多条)・RL (0段多条)の結束による羽状縄文を施すもの。

77号土壙 (264・265)

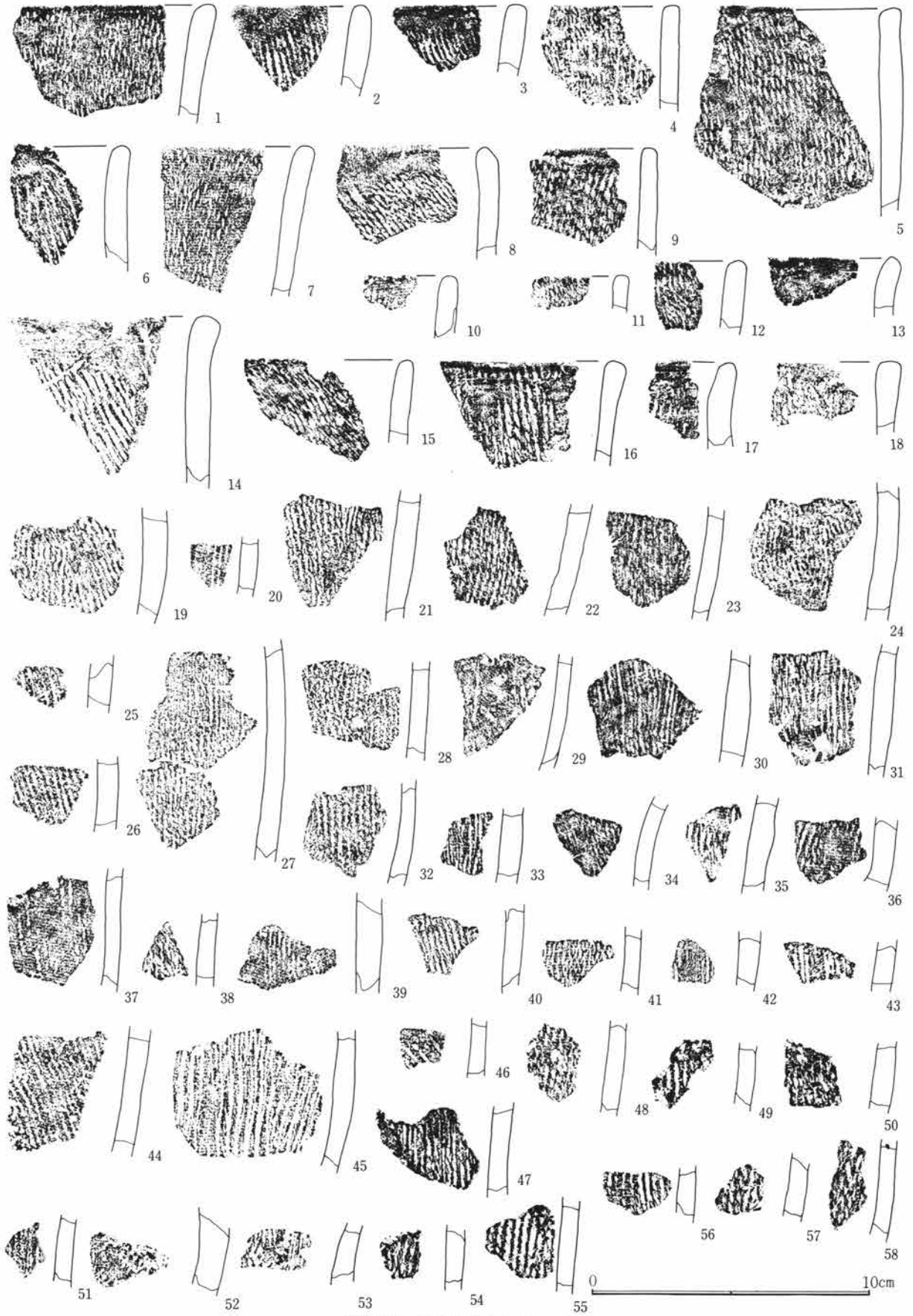
264は、波状口縁となり胴部がくびれ胴下半部がふくれる深鉢を呈し、口縁から胴上半にかけて半截竹管による波状口縁でくずれた菱状ないしはレンズ状に数条廻らせ、レンズ内に平行沈線および弧線等を施す。また口縁部に孔を有する。265は、小型の深鉢を呈するもので、口縁以下にLR (0段多条)・RL (0段多条)を施すものである。(谷藤)

遺構外出土土器 (第212図～第217図)

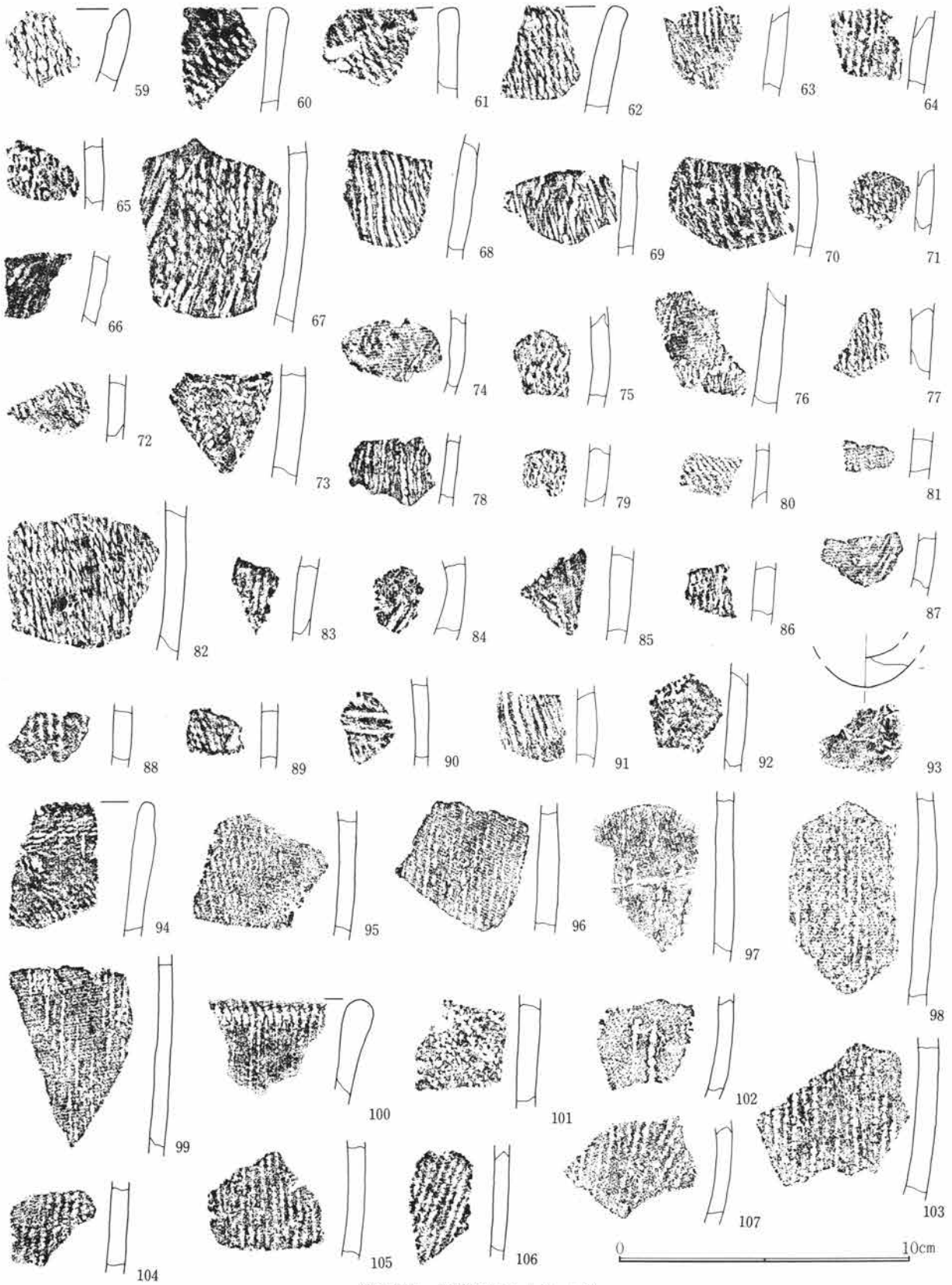
遺構外より出土した土器片は、総数500片程であり、時期は早期から中期にわたっている。その主体をなすものは前期前半のもので、遺構の数とも比例している。また調査区中央から南西部会において撚糸文土器が約200片程出土したが、前期の遺構埋土中より出土したものが多く、またグリッド出土のものも層位的な確認はできなかった。中期前半に比定されるものは50片程で、2号・9号住居址周辺および南東斜面部分においてその出土が見られた。以下それぞれの時期に大別し説明を加えたい。

早期前半の土器	(夏島・稻荷台式期の土器)	第212図～第214図
前期前葉の土器	(ニッ木・関山式期の土器)	第215図～第216図 (217～241)
前期後半の土器	(諸磯a・b式期の土器)	第216図 (242～249)
中期前半の土器	(勝坂・阿玉台式期の土器)	第216図 (250・251)～第217図

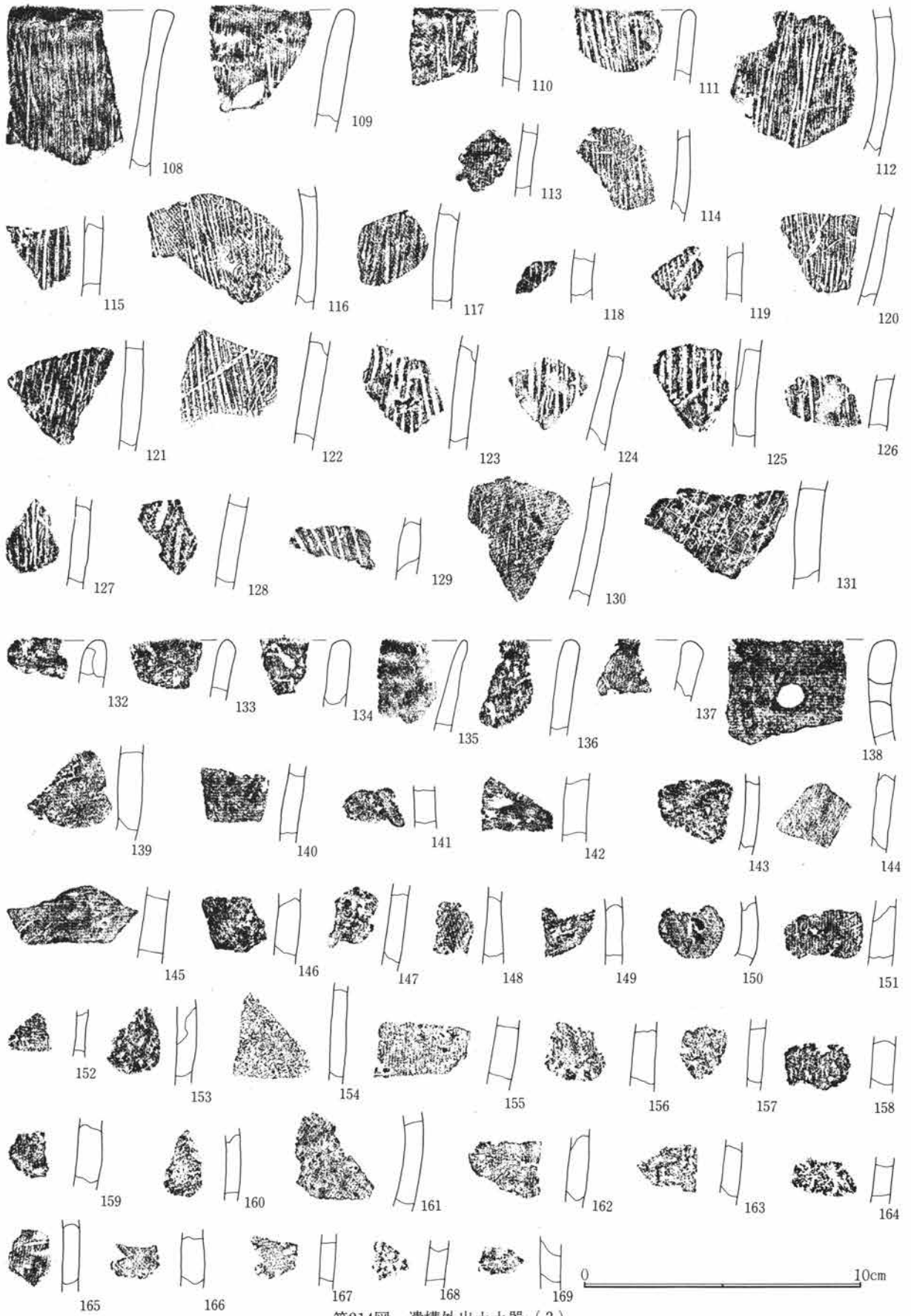
1～55は口唇下より撚糸文を縦位施文するものである。1～36、38～55はRの撚糸文を施文する。1～18は口縁部片である。2・3・8・10・13・14・17・18は口唇部直下に無文部分を持つ。口縁の断面形状は丸頭状のもの、1・2・6・7・10・12・13・14・15と角頭状のもの3・4・5・9・11・16・18があり、さらに8はやや外削ぎ状、17は内削ぎ状となっている。8は口唇部がやや内傾、13・14はやや外反する。施文された撚糸原体は比較的細いものが密に浅く施文されるものが多いが、中には14・16のように太いものが強く施文されるものもある。45については一見条線様に見える。6・18・37・49などは施文がまばらである。原体の撚りはほとんどがRであるが、37はLが用いられている。第213図59～92も撚糸文を器面に縦位施文するものである。59～62は口縁部片である。59は尖り気味、60は丸頭状、61・62は角頭状を呈す。59・67・69・76・78は節が不揃いである。特に67・69は太い原体が用いられている。60・61・66・70・73・85・88は条間が空いている。93は底部片であろう、僅かに撚糸の圧痕が見られる。94は口縁部片である。撚糸文が口縁に沿って横位に施文され、下位にはやや左傾した撚糸文が縦位に施文されている。95・96・99・107は撚糸Lが施文される。97・98・100・101・102・103・104・105・106・107は器面に縄文が施文される。100は口唇部が丸く肥厚する。いずれも非常に堅緻な土器である。第214図108～130はいわゆる絡条体条痕文である。108～111は口縁部片、108は角頭状を呈す。110・112・116・123・124・125は条痕とともに、回転圧痕も若干観察される。130は非常に浅く条痕が走りやや趣きを異にする。131は、細い沈線による斜格子目文が付される沈



第212図 遺構外出土土器(1)



第213図 遺構外出土土器(2)



第214図 遺構外出土土器（3）

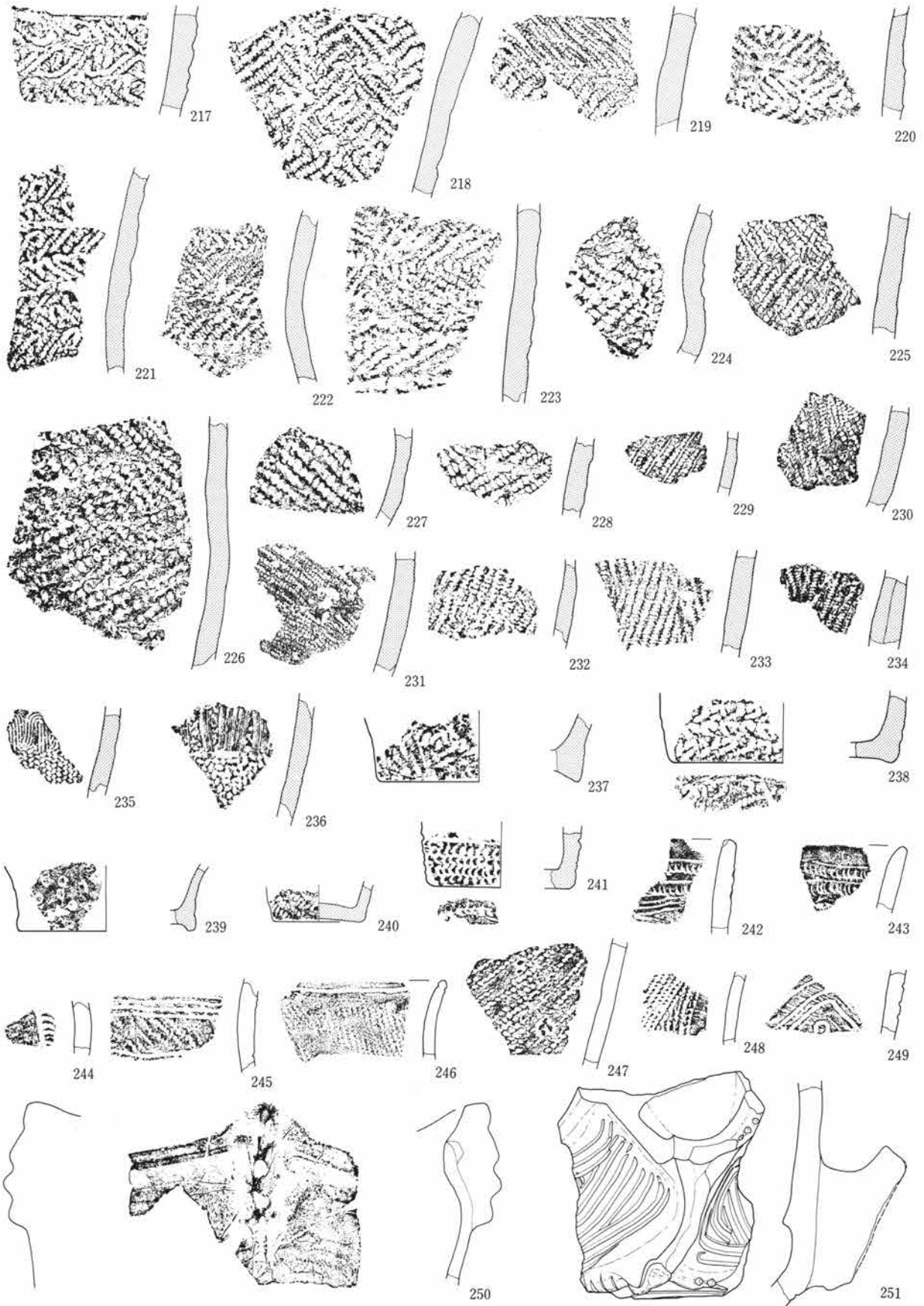
線文系の土器である。132～169は無文のものを一括したが、施文を持つ土器の無文部分が入っている可能性もある。132～138は口縁部である。135は口唇部がかなり薄く仕上げられている。138は口唇部がやや肥厚し、両面より穿孔された補修孔を持つ。何れも内外面ともにていねいに撫でられているものが多い。

以上の土器は比較的焼成が良好であり、色は赤褐色ないしは灰褐色を呈す。砂粒を含むものが多く、内面はかなりていねいに仕上げられている。厚さは5～8mmのものが多い。縄文が施文されているものがやや薄手に作られているようである。

170は、波状口縁となり口縁部に捺糸側面圧痕および刺突を施すもの。171～174は、口縁直下ないしは口縁部に刻目をもつ隆帯を廻らせ、捺糸側面圧痕および刺突を施すもの。175・176は、口縁部に刻目をもつ細い隆帯および捺糸側面圧痕で文様を描くとともに、瘤状貼付文ないしは円形刺突をもつ。177・181は、口縁直下および口縁部下部に刻目をもつ細い隆帯を廻らせるとともに瘤状貼付文ないしは円形刺突をもつもので、胴部に閉端環付のLR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施すもの180・181。LR（0段多条）・RL（0段多条）による羽状縄文を施すもの179もある。183・184は、双頭となる波状口縁で、口縁直下に梯子状沈線をもつ併行沈線を廻らせ、口縁部に併行沈線・梯子状沈線で文様を描くとともに瘤状貼付文および円形刺突を施す。185～196・199は、口縁部に梯子状沈線をもつ併行沈線で蕨手・山形等の文様を描き、円形刺突・瘤状貼付文をもつものないしはもたないもの等がある。197・198は、口縁部に半截竹管による平行沈線をもつもの。200は、平縁で口縁部に孔をもち半截竹管による連続爪形文およびコンパス文をもつもの。202・203は、平縁で口縁以下にLの縄文を施すもの。204・207・208・209は、胴部に閉端環付のLR・RLによる羽状縄文を施すもので、0段多条を用いるもの204・208もある。205・207・209～214は、胴部に閉端環付のLRないしはRLを施すもので、0段多条を用いるもの205もある。216・217・221は、胴部に0段多条のL・LないしはR・Rの2本による結節回転を施すもの。218・220・222～224は、胴部にLR・RLの結束による羽状縄文を施すもので、0段多条を用いるもの218・222・223もある。219・225・226は、胴部にLR・RLによる羽状縄文を施すもので、0段多条を用いるもの228もある。227～234は、胴部に斜行縄文を施すもので、LRを施すものに228・232～234。RLを施すものに227・230・231。附加条（LRに1本附加）を施すものに229があり、これらの内0段多条を用いるのは230・232～234である。201は、胴部に半截竹管の平行沈線により菱形となる文様を描き、地文に閉端環付のLR・RLを羽状に施すもの。235・236は、胴部に半截竹管ないしは櫛歯状工具により縦長となるコンパス文を描き、地文に組紐による回転圧痕が施されるもの。237～241は、胴部に閉端環付・結束等による羽状縄文および半截竹管による連続爪形刺突を施すやや上げ底となる底部片である。242～244・259・242～244・259・264は、胎土に砂粒を含むもので、口縁部および胴部に半截竹管による爪形文・平行沈線を施し胴部に平行沈線等による文様を描く。241～246は、胎土に砂粒を含むもので、口縁直下ないしは胴部に平行沈線を施し地文にRLの縄文を施すもの。248は、胎土に砂粒を含み、胴部に結節沈線による文様を描くもの。249は、胎土に砂粒を含み、胴部地文に捺糸文を施し、半截竹管による平行沈線で文様を描き円形刺突をもつもの。250・252～255・257・258・261～263・265・267・269・271・272は、胎土に小砂粒・礫および雲母を含むもので波状口縁となり波頂下に刻みをもつ隆帯を垂下させるもの250。波状ないし平縁となる口縁部に隆帯により文様区画がなされ、区画内に押し引きの沈線により斜位・弧状・波状・鋸歯状等の文様を描くもの253・255・257・258・261～263・265・267。平縁で無文のもの269。胴部に刻みをもつ隆帯および隆帯で文様区画を行ない、区画内に大形の爪形文をもつもの252・254、胴部に大形の爪形文をもつもの271・272がある。251・256・266・268・270・273～291は、胎土に小砂粒・礫を含むもので、波状口縁となり口縁部に大形の隆帯により文様区画するとともに把手をもち、区画内に沈線により文様を描くもの251・256・286。口縁部が無文となるもの



第215図 遺構外出土土器(4)



第216図 遺構外出土土器 (5)

0 10cm



第217図 遺構外出土土器 (6)

268・270。口縁以下にLRの縄文を施すもの289。胴部に隆帯および沈線により文様区画ないしは文様を描くもの266・279・281・282。胴部に平行沈線ないしは斜行沈線および鋸歯状の沈線・大形の爪形文等により文様を描くもの278・288。胴部に押引きの沈線による平行線および曲線等を主体とする文様を描くもの273・274・277・283・284。胴部に隆帯による文様区画および押引きの沈線による文様を描くもの276・280。胴部に平行沈線および押引きによる沈線で文様を描くもの285。胴部地文に縄文をもち、押引きの沈線ないしは隆帯および沈線による文様を描くもの275・287。胴部にRLの縄文をもつもの290。胴部が無文となっているもの291がある。

(小野・谷藤)

4 石器 (第218~239図)

本遺跡における縄文時代の石器出土数は次の通りであった。住居址内137点、土壌内39点、遺構外、表採45点で、総数221点であった。

各住居址内からの出土点数は、1号住居址12点、2号住居址24点、3号住居址7点、4号住居址5点、5号住居址18点、7号住居址6点、8号住居址11点、9号住居址2点、10号住居址20点、11号住居址18点、12号住居址4点、13号住居址9点である。出土数は多いとは言えないが、その組成内容を見ると、打製石斧類に関しては、前期のものは定型化されたものが少なく、極端に内厚のものや、刃部の作りが雑なものが目立つ。また縦剥ぎ、横剥ぎの剥片を用いたスクレイパー類が多く含まれている。石皿や敲石・磨石の類についても各住居址毎に出土が見られ、当時における食料生産活動の中で占める粉食加工の在り方を示している。

石鏃については、総点数33点で余り多くはなかった。形は有茎のものは無く、抉りを持つ三角鏃が多かった。大きさは1.5~2.0cmのものが多い中で、1.0cm以下というものも2点ほど出土している。

石材は、黒曜石が11点、チャートが16点、黒色頁岩が3点、黒色安山岩1点、デイサイト1点であった。磨製石斧は少なく、僅かに3点の欠損品が出土している。いずれもやや厚手の蛤刃状を呈す。石材は変輝緑岩、輝緑岩、蛇紋岩である。すべて基部欠損品である。

装身具類の出土も少なく、56号土壌より半分に割れた球状耳飾りが1点出土しているのみである。

以下、各遺構毎に出土石器の説明を加えて行きたい。

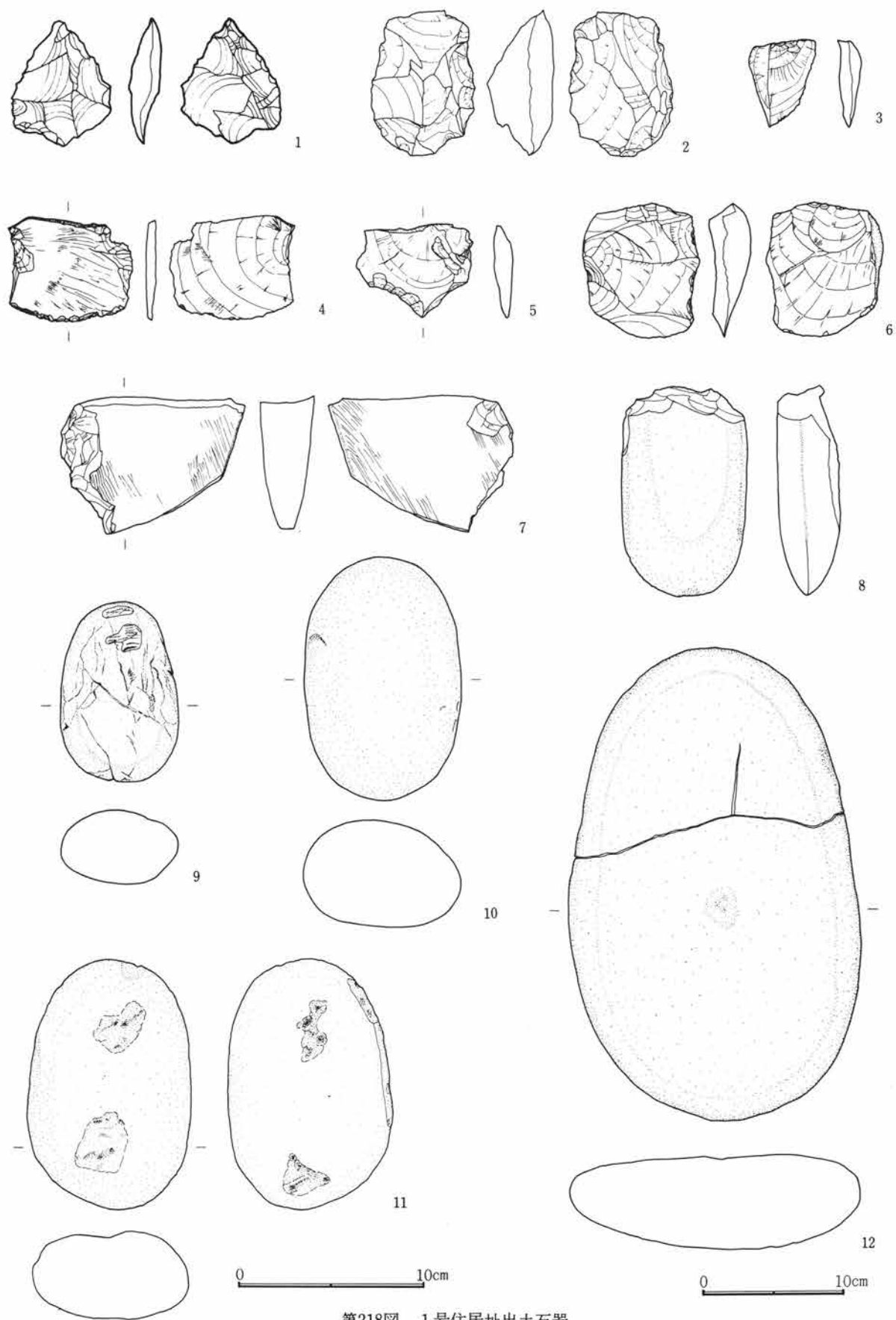
(小野)

1号住居址 (第218図)

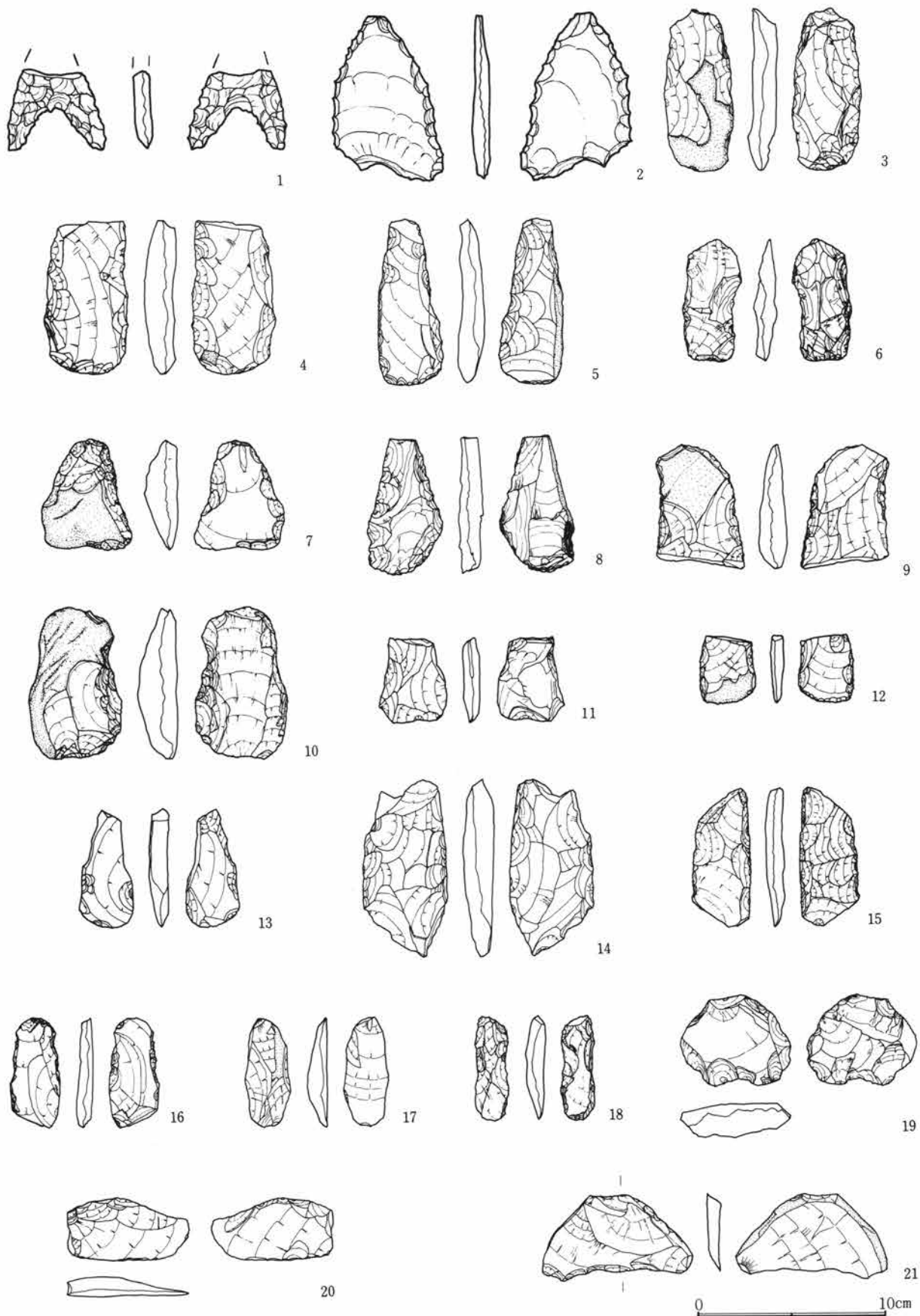
1は石鏃である。基部の突出した三角形を呈す。基部は剥ぎ取ったままでほとんど無調整である。2は打製石斧で基部を欠損する、甲厚である。3・4・5・6はスクレイパーである。3は片縁に刃部を作る。4は板状剥片を利用している。5は凹刃である。6は厚手の剥片を利用している。7は磨製の石斧か、両面、側縁に磨き痕が認められる。8は蛤刃状の磨製石斧である、表面にカーボンの付着が認められる、基部欠損。9・10・11は磨石である。10は全体に磨痕が見られる。11は両面に打痕、および側面にも打痕が見られる。

2号住居址 (第219・220図)

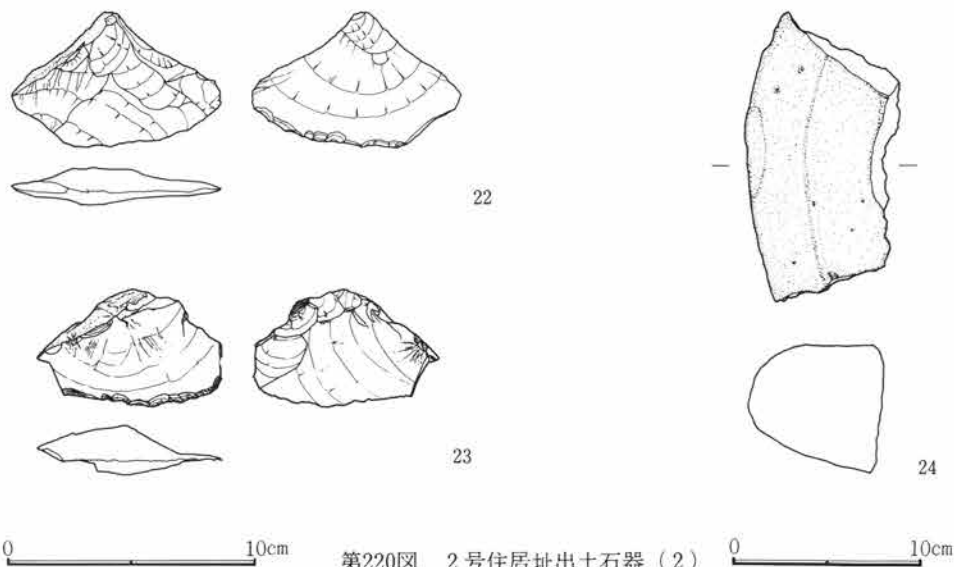
1はやや深い抉りを持つ長脚石鏃である。作りはていねいである。先端部を欠いている。2も石鏃である。薄く剥ぎ取った剥片を利用している。両側縁に両側から調整を加えている。3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18は打製石斧である。3は片面に一部礫面を残す。4は短冊形を呈し、片面にやや膨らみを持つ。刃部先端は使用による磨減が見られる。基部欠損。5は撥形を呈し、横断面が三



第218図 1号住居址出土石器



第219图 2号住居址出土石器(1)



第220図 2号住居址出土石器(2)

角形をなし、刃部は片縁のみ作り出している。6は不定形で雑な作りである。7は三角形を呈し、片面に礫面を残す。8は片縁に調整を加える。刃部は肉厚である。9は刃部を欠損している。両側縁に刃部を作り出している。基部が曲がっている。10は礫面を残した剥片を利用している。両側縁に刃潰しを行なっている。11・12・13は小型のものである。11・12は基部を欠いている。13・14は基部・刃部を欠いている。16・17・18は小型の打製石斧である。18は小型ながらいねいに作り上げられている。19・20・21・22・23はスクレイパーである。19は肉厚である。21は側縁に礫面を残す。何れも片面からの剥離で刃部を作る。24は石皿の破片である。

3号住居址 (第221図)

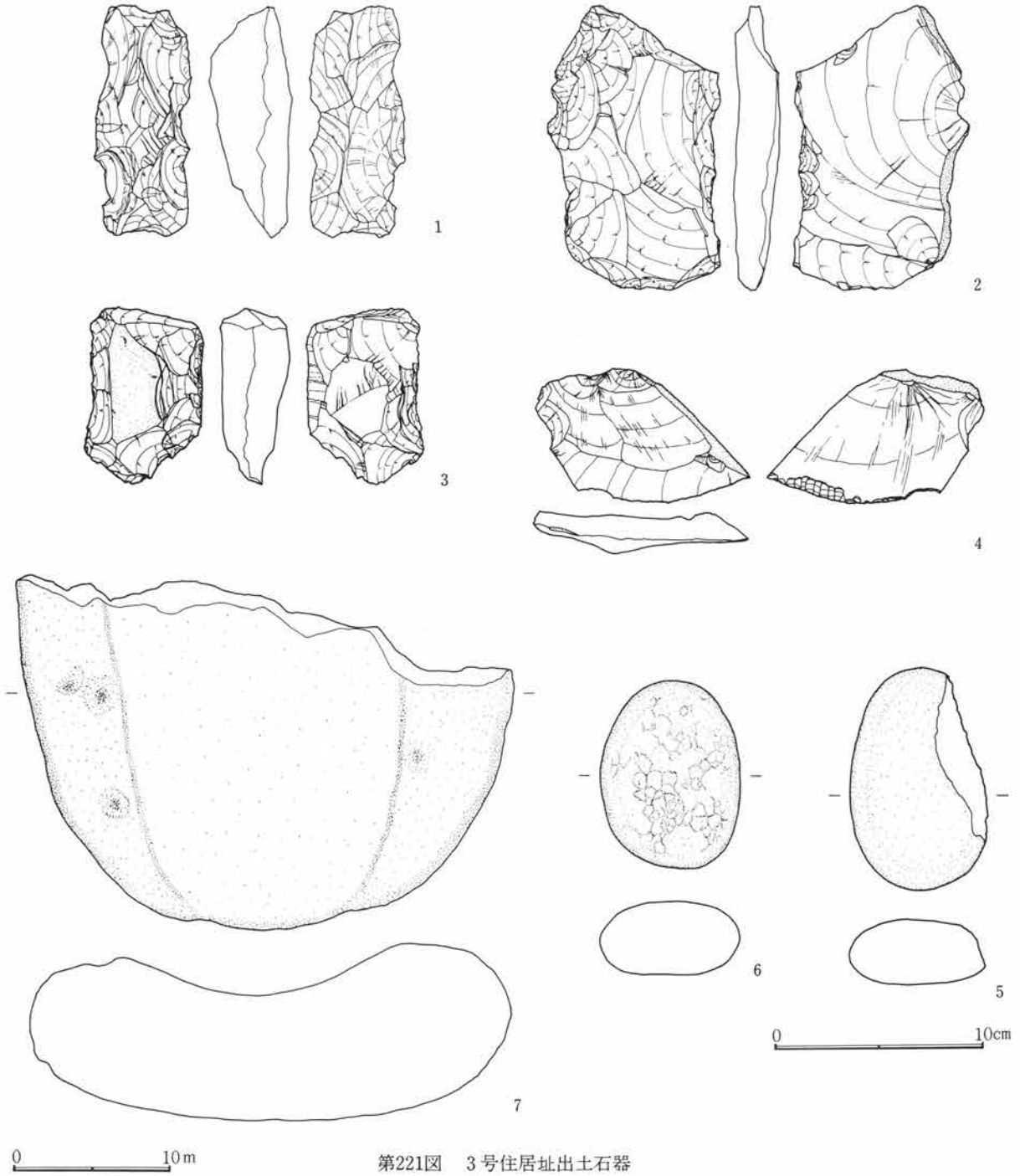
1はかなり肉厚の打製石斧である。全体的に荒割りされている。2も打製石斧で大型の板状破片を横割ぎによって得ている。3は肉厚の石斧である。片面に礫面を残す。4は菱形の破片の一辺に押圧剥離により、刃部を作り出している。5・6は磨石である。6は火熱を受け表面に蜂巢状のひびが入っている。7は石皿で½程を欠損している。両側に若干の凹み痕を持つ。

4号住居址 (第222図)

1・2は石鏃である。1は礫面を一部に残す。2は正三角形を呈し、½程欠損している。3はスクレイパーである。両縁に簡単な刃部を持つ。4は横刃のスクレイパーである。5は磨石である。両面平らである。

5号住居址 (第223・224図)

1・2・3はやや細身の短冊型石斧である。2は片面に礫面を残し、厚手である。3は基部・刃部も欠いている。4・5・7は撥型石斧である。4・5は刃部を欠く。6・8・9は不定形で、刃部もほとんど調整を行っていない。6・9は片面に礫面を残す。10・11はスクレイパー、10は全体的に風化している。11は肉厚である。12はスクレイパーで直刃である。13の刃部は弧状を呈す。14は磨石で両端に若干の敲打痕が見られる。15は棒状の礫器で端部に打痕有り。16は磨石。17はほぼ円形で偏平な磨石である。側縁に打痕と思われる凹凸が認められる。18は石皿である。卵形を呈し大きく凹み、裏面には12コ程の凹み穴が観察される。

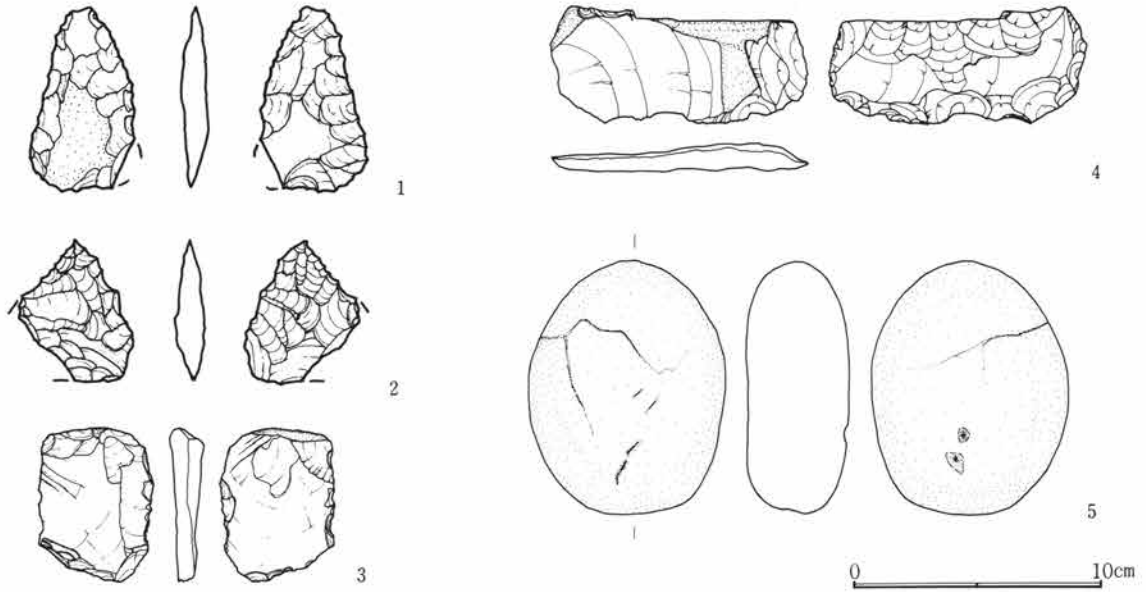


第221図 3号住居址出土石器

ほぼ半分に割れており、住居内では離れて出土した。

7号住居址 (第225図)

1は弧状の刃を持つスクレイパー。2・3は不定形のスクレイパーである。側縁に刃を持つ。4・5は磨石である。6は台石と思われる、側縁は打ち割られて形を整形されているが、両面は秘めて平滑である。



第222図 4号住居址出土石器

8号住居址 (第226図)

1・2はほとんど抉りを持たない石鏃である。1は厚みがある。3は打製石斧であるが、非常に肉厚で、礫面を残し、礫器に近いものであろう。4は小型のスクレイパーである。片方の側縁に細かい刃を作り出す。5は一次剥離による破片を利用した肉厚のスクレイパーである。6・7・8もスクレイパーで、6は弧状、7は直刃である。8は縦型の剥片の側縁に刃部を持つ。9は磨石。10は凹み石である。11は石皿であるが、使用面の凹みは浅い。

9号住居址 (第227図)

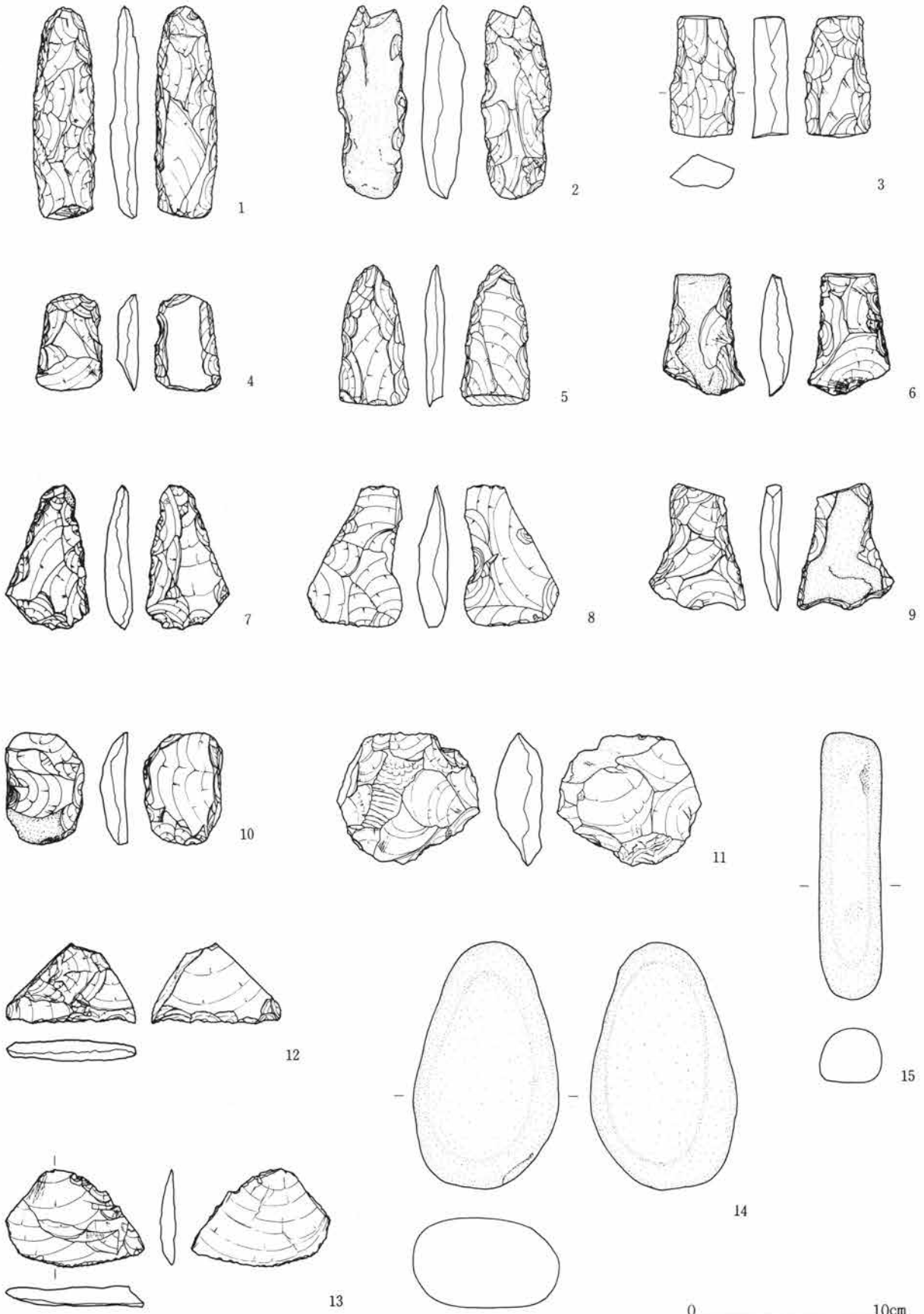
1は打製石斧の基部と思われる。2は大型の礫で、側縁の一部が欠けており、表面に磨り痕が若干認められる。床面に半分以上埋め込まれた状態で出土している。

10号住居址 (第228・229図)

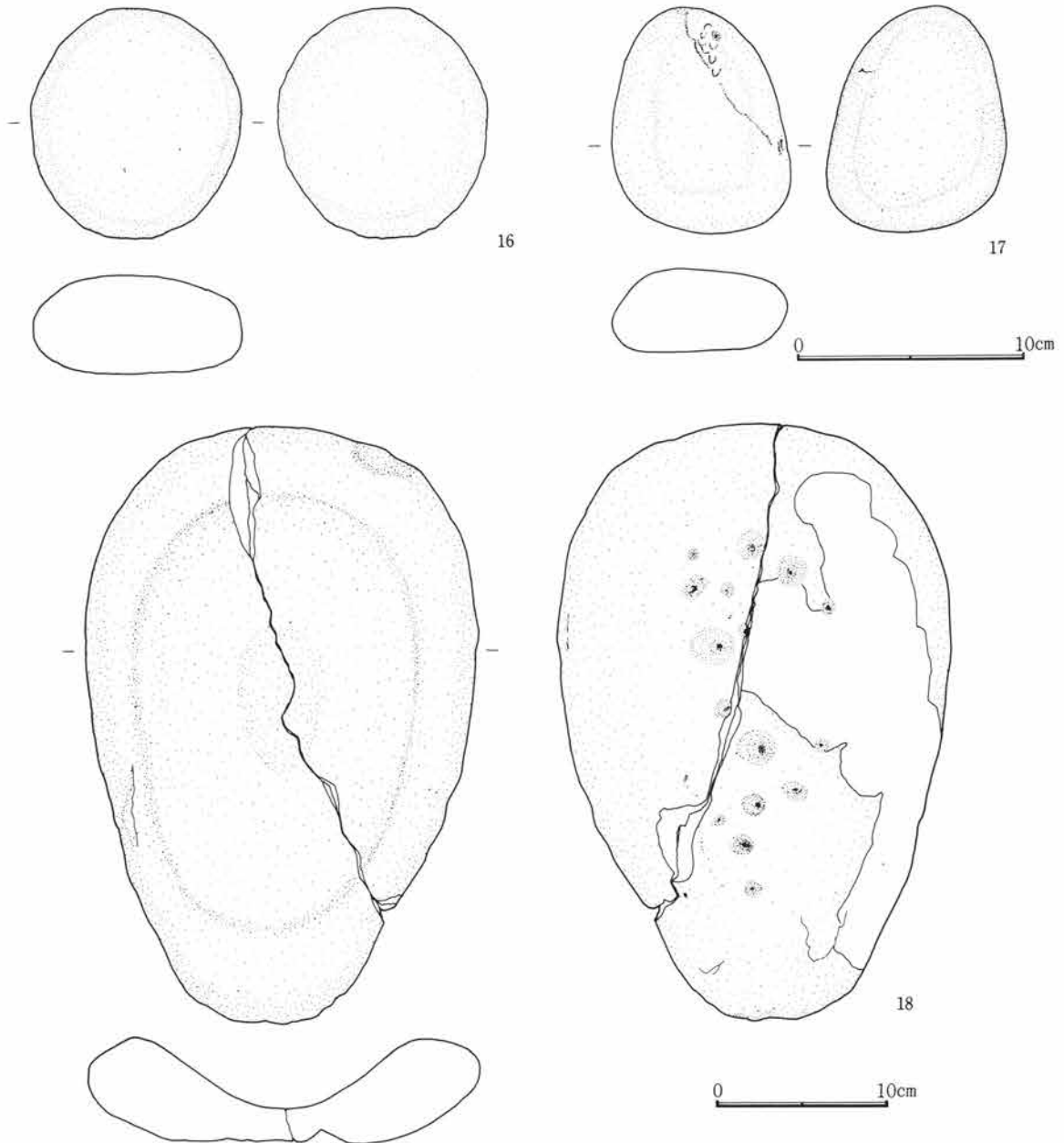
1は三角形を呈する有抉鏃である。2は不定形鏃である、一部欠損している。3は撥型の打製石斧である基部がやや尖る。4は小型の撥型打製石斧である。5・6・9は縦型剥片を利用したスクレイパー。7は石匙である。基部の抉りと刃部以外は手を加えていない。8は一部に礫面を残す。10は不定形で直交する2辺に刃部を持つ。11は側縁には下辺に刃を持つ。13・14はラウンドスクレイパー状に打撃面を除いた部分に刃部を作り出している。15は直刃に近い。16は半割した礫を利用した敲石である。縁辺部に打痕が見られる。17は部分であるが磨石であろう。両面に若干の打痕が見られる。18は磨石である。両面・縁辺部に打痕が見られる。19は偏平な石を利用した台石である。20は石皿。約半分を欠いている。海の部分が大きく、裏面に擦痕状の凹みが見られる。

11号住居址 (第230・231図)

1は抉鏃である。両側縁は両面からの押圧剥離による調整が行なわれている。2も同様にいいない作り

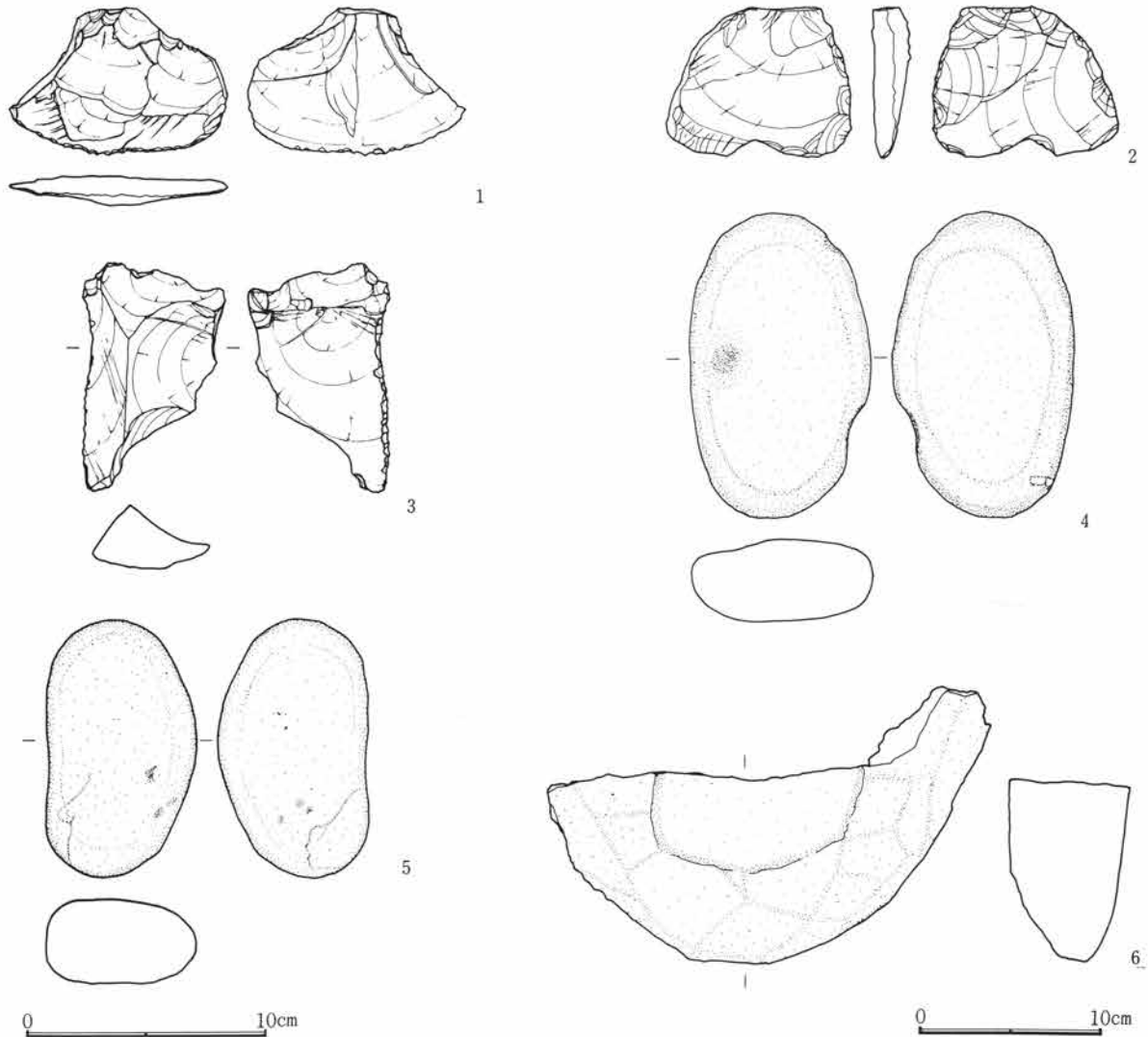


第223図 5号住居址出土石器(1)



第224図 5号住居址出土石器(2)

である。やや幅広で、抉りはほとんどない。3は中央部で極端に厚くなる三角鎌である。4は頁岩製である。先端部を欠いている。5は刃部のやや膨らむ打製石斧である。両側縁部に若干の調整が見られる。6・7はスクレイパーで縦剥ぎの剥片を利用している。8は大型の横剥ぎ片を利用しているスクレイパーである。片面からの押圧剥離により刃を作り出している。刃部にはかなりの磨耗が観察される。9は敲石である。握部欠損している。10は敲石。端部・縁辺に使用痕が見られる。11は磨石。12・13は凹石であるが磨石としても使用されている。14は磨石。両面・側縁に使用痕が見られる。15・16は石皿である。15は一部欠損している端部凹穴が数カ所見られる。凹部はあまり深くない。16は磨面に若干凹みを持つ。約半分に分れており、一片は13号住居址より出土している。17は台石と考えられ、表面に径1～2cm程の小穴が見られる。18は石皿の破片である。偏平な石を利用しており、使用面は若干低くなっており、磨耗している。



第225図 7号住居址出土石器

12号住居址 (第232図)

19・20は石鏃であり若干の抉りを持つ。19は黒曜石、20は黒色頁岩である。21・22はスクレイパー。21は片側縁、22は両側縁に簡単な刃を作っている。

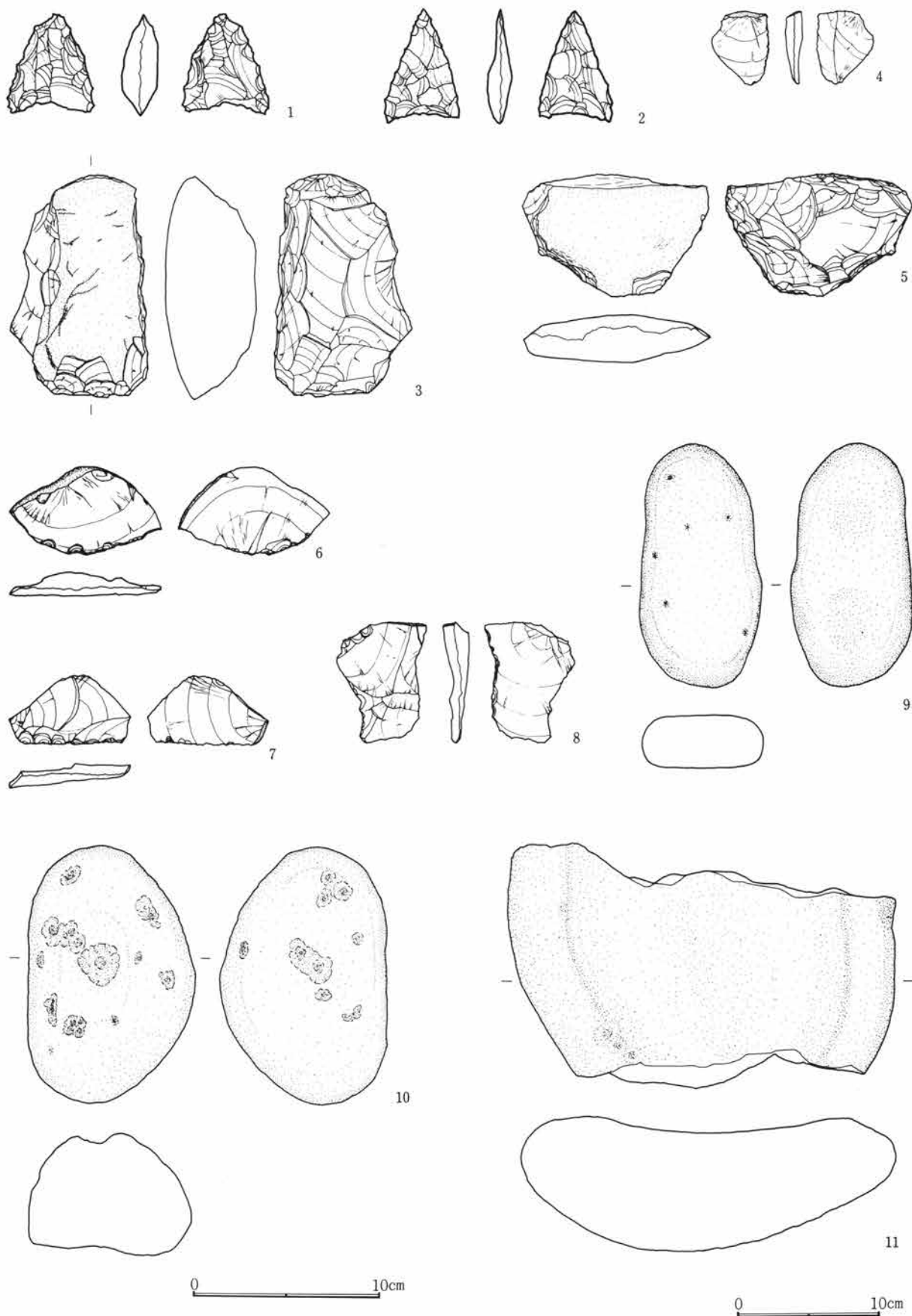
13号住居址 (第233図)

1は有抉鏃である。両面からの押圧剥離により、形を整えている。先端部を欠いている。2は打製石斧の辺部欠損品であろうか、かなり磨耗が見られる。3は縦形の石匙である。雑なつまみ部と一辺に刃部を持つ。4・5はスクレイパーである、伴に底辺に刃部を持つ。5は石匙とも考えられるが意識してつまみを作り出してはいない。6・7・8は磨石。伴に長円形の小礫を用いている。7は両面に打痕が観察される。9は石皿と考えられるが、使用面は余りへこみは見られない、二つに割れており一部炉石として使われていた。

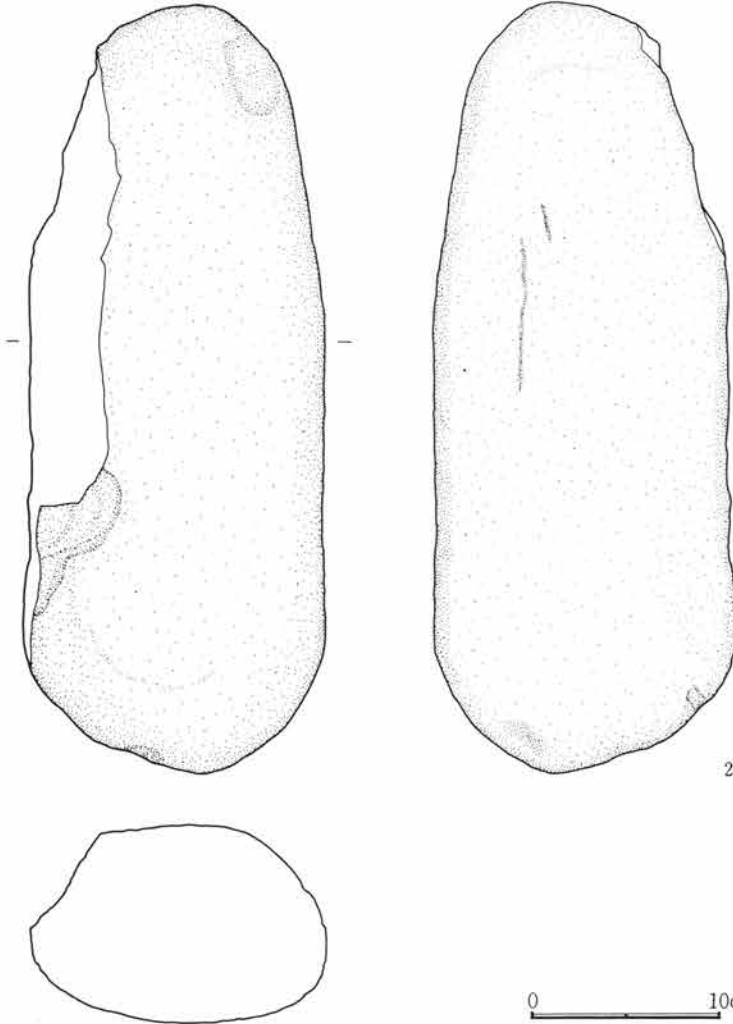
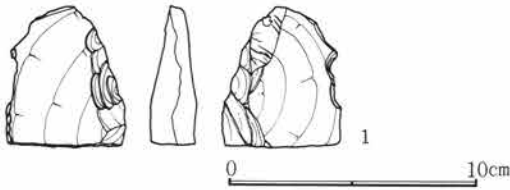
(小野)

土壌出土の石器について

1号土壌 (第234図 1)



第226図 8号住居址出土石器



第227図 9号住居址出土石器

1は敲石である、約半分が欠損している。

2号土壙 (第234図 2)

2はスクレイパー剥片の縁片部の一部に簡単な刃部を作り出している。

3号土壙 (第234図 3)

3は縦剥ぎの剥片を利用し、側縁部に片面からの押圧剥離により、刃を作り出した。小型のスクレイパー。

5号土壙 (第234図 4・5)

4は角ばった剥片の両側縁に刃部を作る。5は光の尖った剥片の両側縁に刃部を持つスクレイパーである。

7号土壙 (第234図 6・7)

6は横長剥片を利用したスクレイパー、礫面を残す。7は石皿である。約半分を欠いていて使用面は弓状に凹んでいる。

9号土壙 (第234 8)

8は打製石斧である。小型の製品で横剥ぎの破片を縦に利用しており、雑な作りである。

15号土壙(第234図 9)

9は石匙である。丸い刃部につまみ部を作り出しているが、刃は半分程しかつけられていない。

18号土壙 (第234図 10)

10は磨製石斧の刃部欠損品である。

かなり大型で、表面はていねいに仕上げられている。

27号土壙 (第234図 11・12)

11は弓なりの破片を利用したスクレイパーである。端部に簡単な刃が作り出されている。12は丸く偏平な川原石を利用した磨石であり両面は使用によると思われる磨耗が観察される。

28号土壙 (第235図 13)

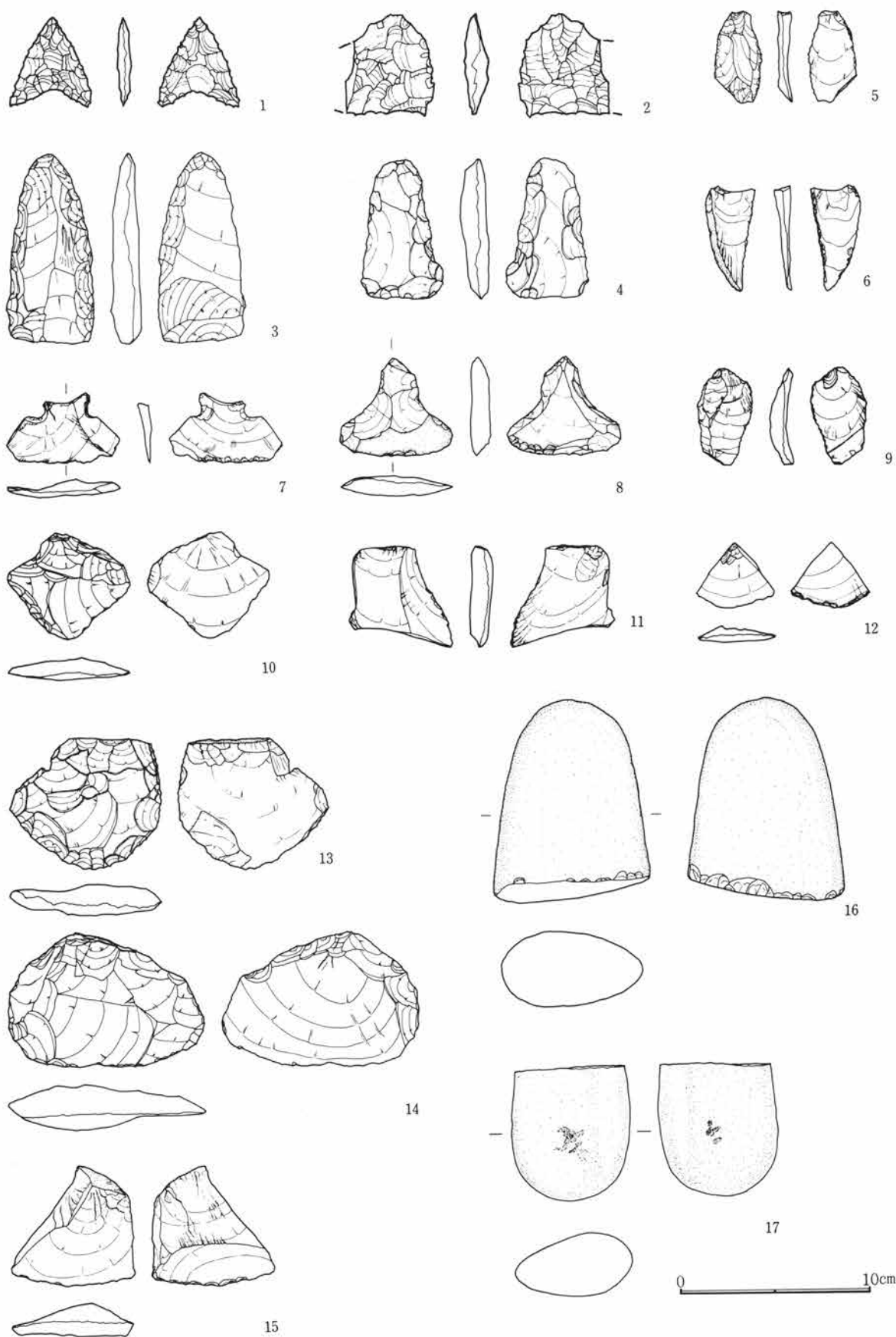
13は横型の石匙である。抉りの少ないつまみ部を持ち弧状の刃部を持っている。

30号土壙 (第235図 14)

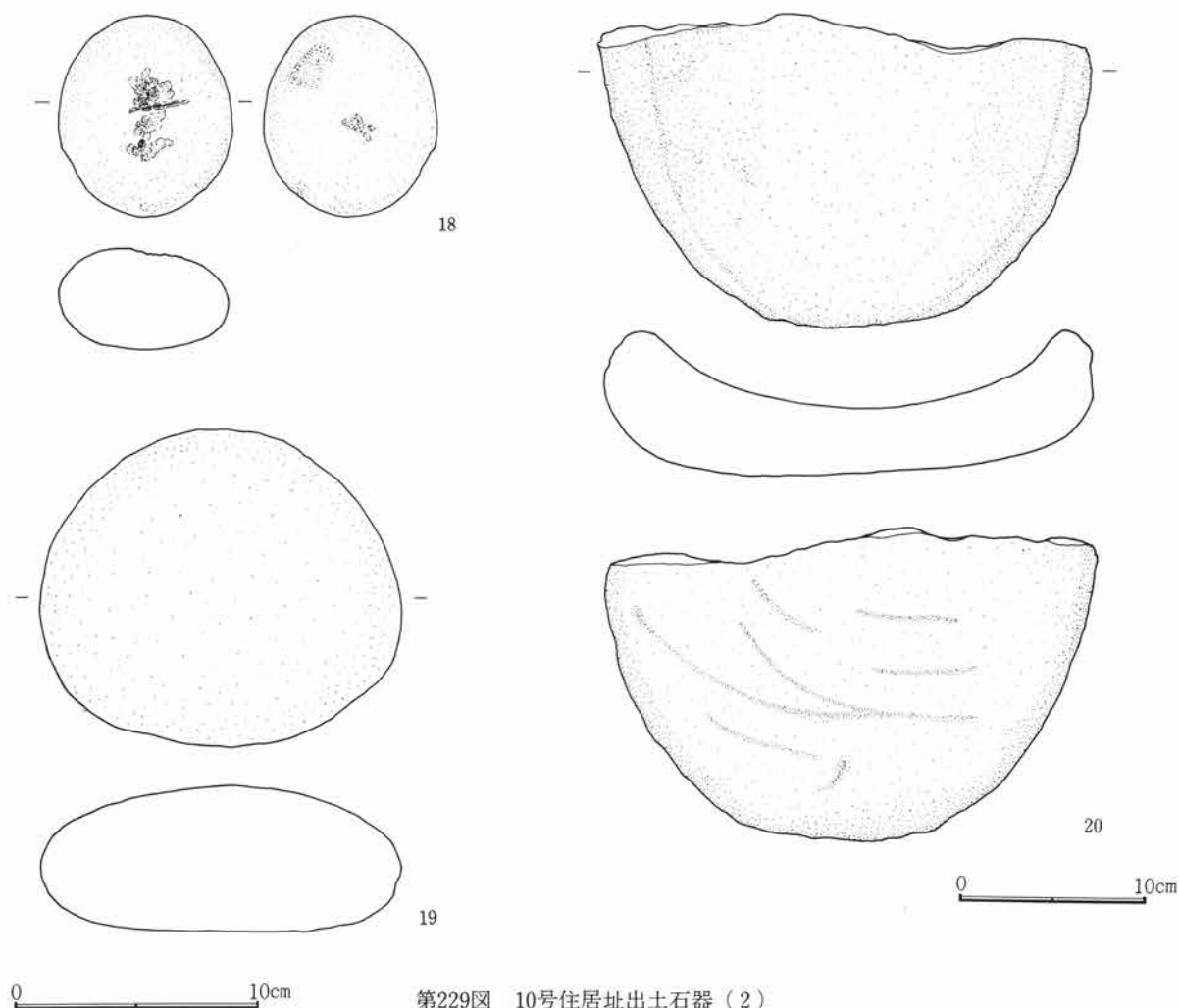
14は楕円形の礫を用いた磨石である。両面・側面に使用痕が認められ、さらに打痕による凹みも見られる。

31号土壙 (第235図 15・16)

15は断面三角形の縦形剥片を用いたスクレイパー。16は三角形の剥片の一辺に刃部を作り出している。



第228図 10号住居址出土石器(1)



第229図 10号住居址出土石器(2)

40号土壙 (第235図 17)

17は台石の破片である。使用面は平らで使用痕が見られる。

50号土壙 (第235図 18~20)

18・19はスクレイパーである。18は縦形剥片。19は横形剥片を利用している。20は肉厚の舟底形の石片を用いている。弧状の縁辺部に荒く刃部を作り出している。

51号土壙 (第235図 21・22)

21・22は共に剥片を利用したスクレイパーである。同一母岩から製作したと考えられる。

56号土壙 (第235図23)

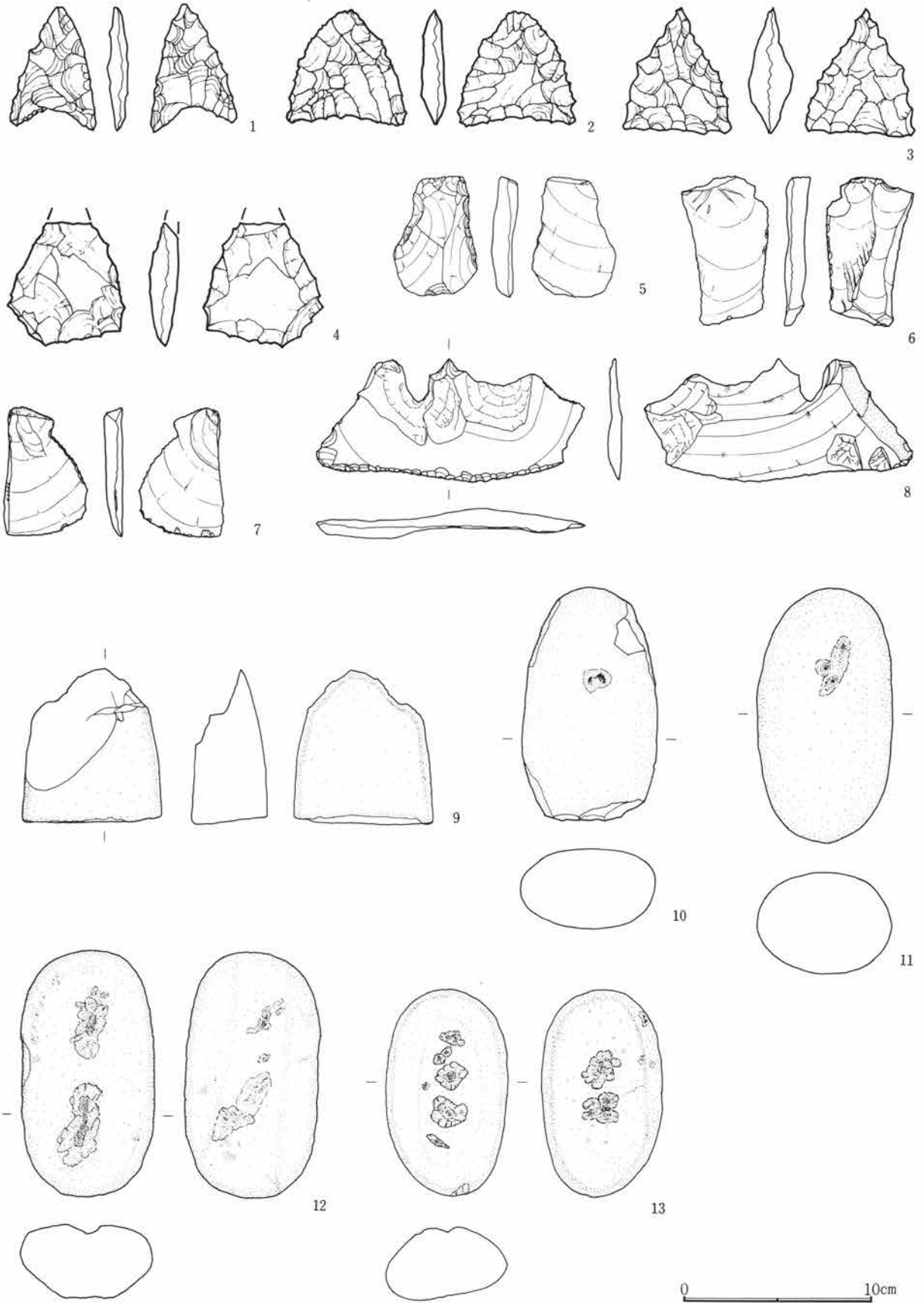
23は塊状耳飾りである。やや頭をつぶれた円形で中央部には径6mm程の穴が両面から穿たれている。またその斜上にも径2mm程の小孔がやはり両面から穿たれている。約半分を欠損している。蛇紋岩製である。

61号土壙 (第235 24~26)

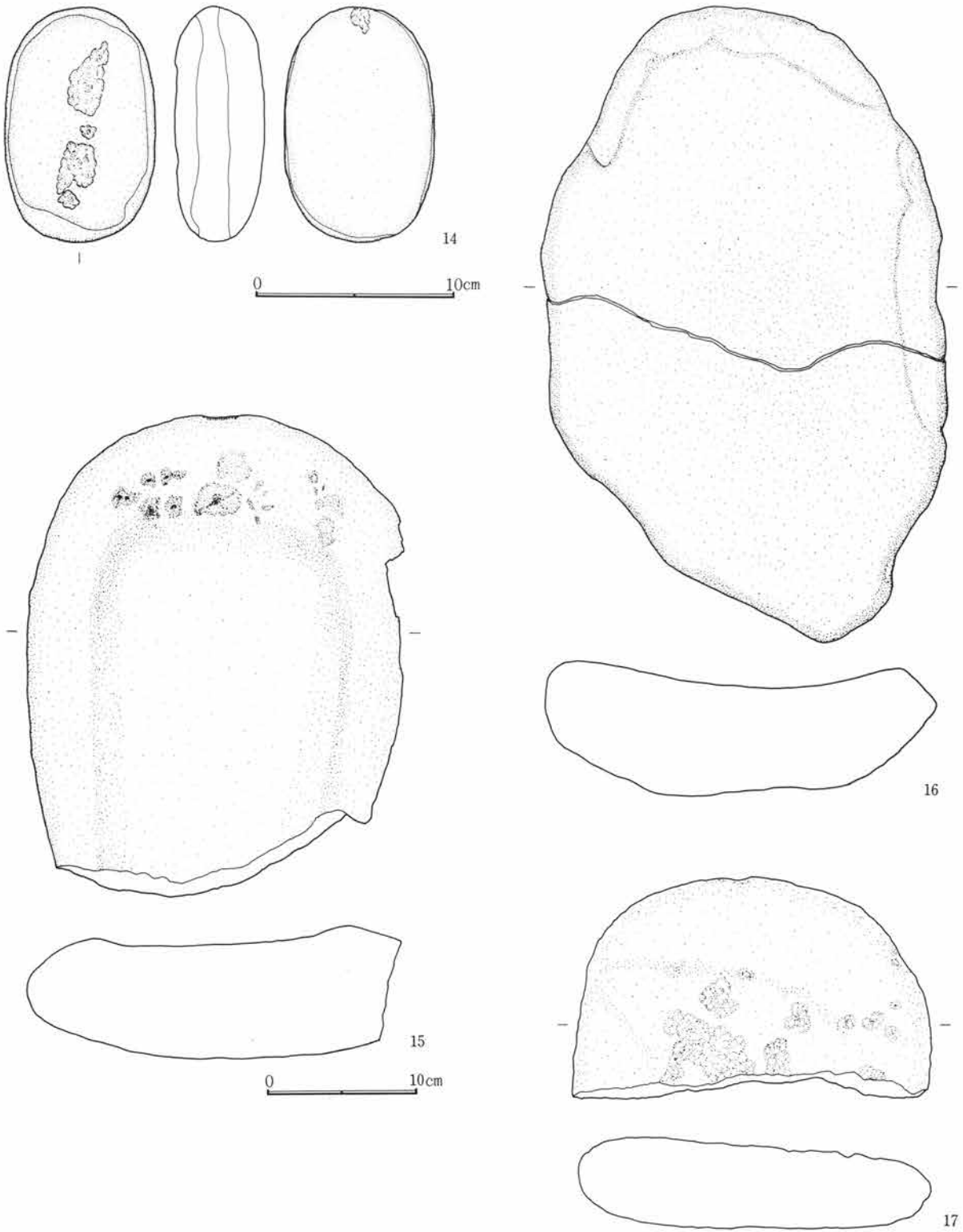
24は打製石斧である。片面に礫面を残している。25はスクレイパーである。26は磨石である。両面に打痕が見られる。端部は欠損している。

68号土壙 (第236図 27~32)

27は両脚鋏である。片方の脚を欠損している。28は縦型のスクレイパーである。片側縁に刃部を持つ。29は

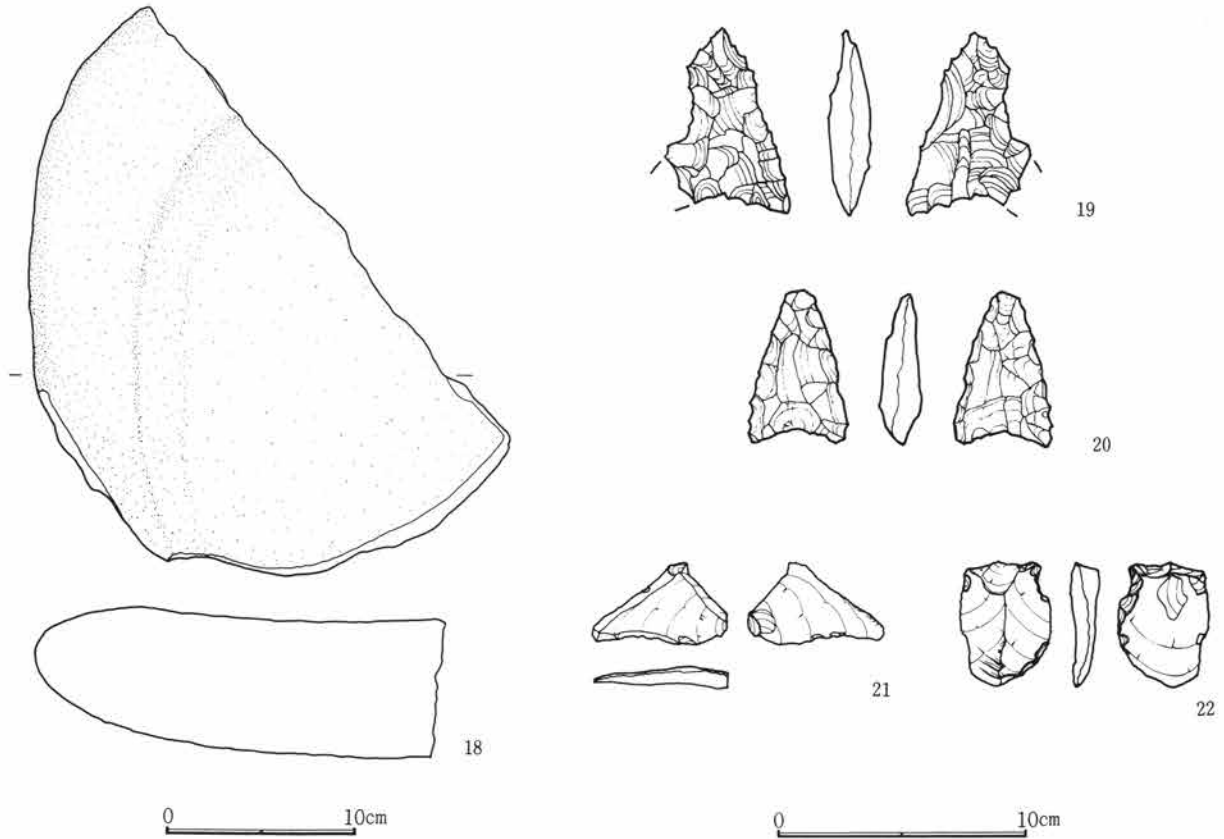


第230图 11号住居址出土石器(1)



第231図 11号住居址出土石器(2)

打製石斧としたが、厚みを持った刃部で切るといふ作業には不向きである。30はスクレイパー。台形を呈し、打面は自然面を持つ。31・32は小型の剥片を用いたスクレイパーである。



第232図 11号・12号住居址出土石器(3)

69号土壙 (第236図 33)

33は両側縁がやや膨らみを持つ、石鏃である。抉りは浅い。

70号土壙 (第236図 34)

34は敲石である。長円形の川原石を用いている。側縁、両面に打痕が見られる。片方の端部を欠損する。

73号土壙 (第236図 35・36)

35は中央が細くなった糸巻状を呈し、スクレイパーである。片側縁に簡単な刃部を作り出している。36は打面に礫面を持った不定形スクレイパーである。2辺に簡単な刃を持つ。

74号土壙 (第236図 37)

37は敲石である。川原石を半截し、断面を使用面としている。いわゆるスタンプ形を呈す。

77号土壙 (第236図 38)

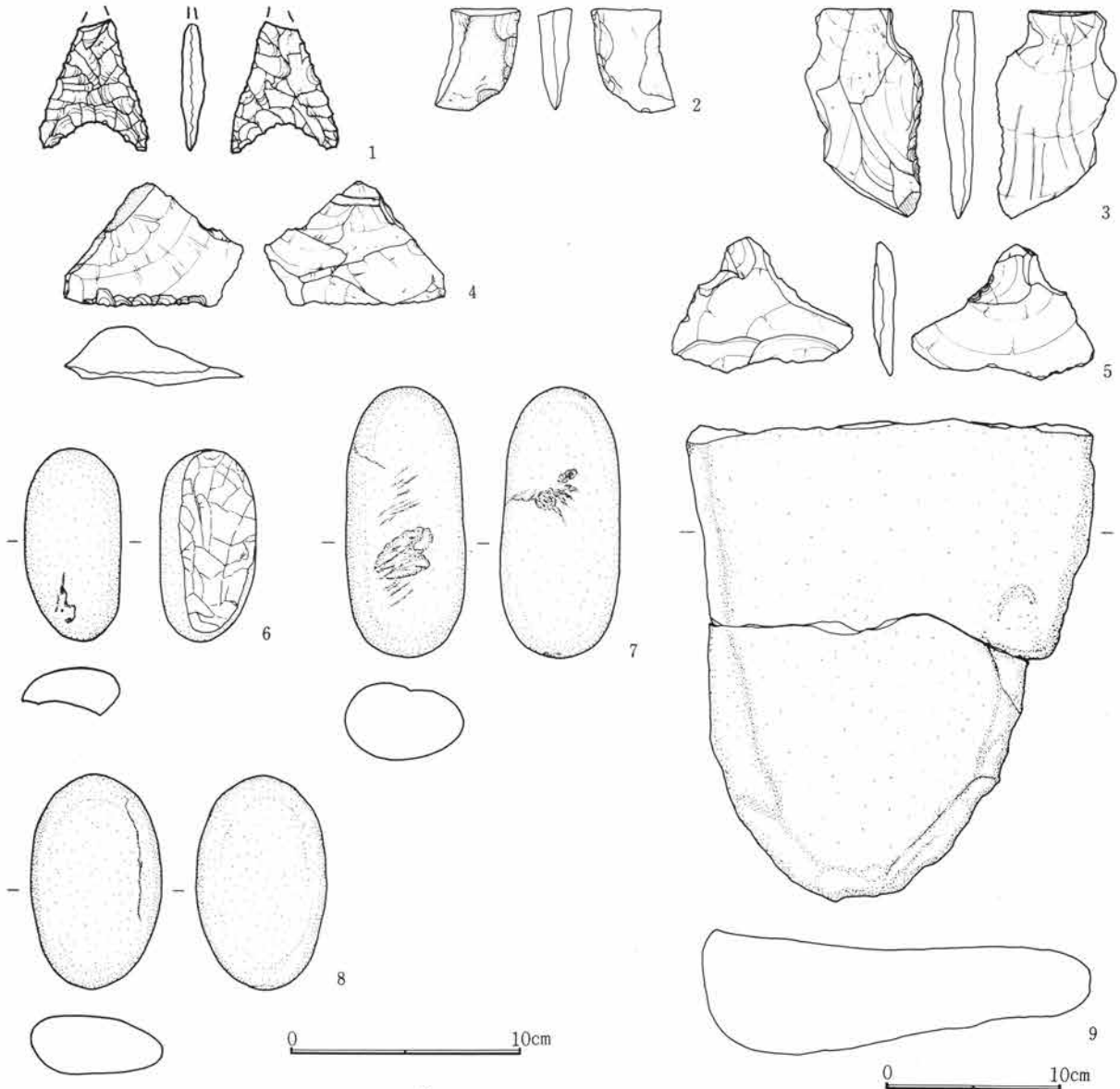
38はスクレイパー。端部が尖がった剥片の一部に刃を持つ。

79号土壙 (第236図 39)

39は石鏃。小型の両脚鏃でかなり薄手である。石材はチャートである。

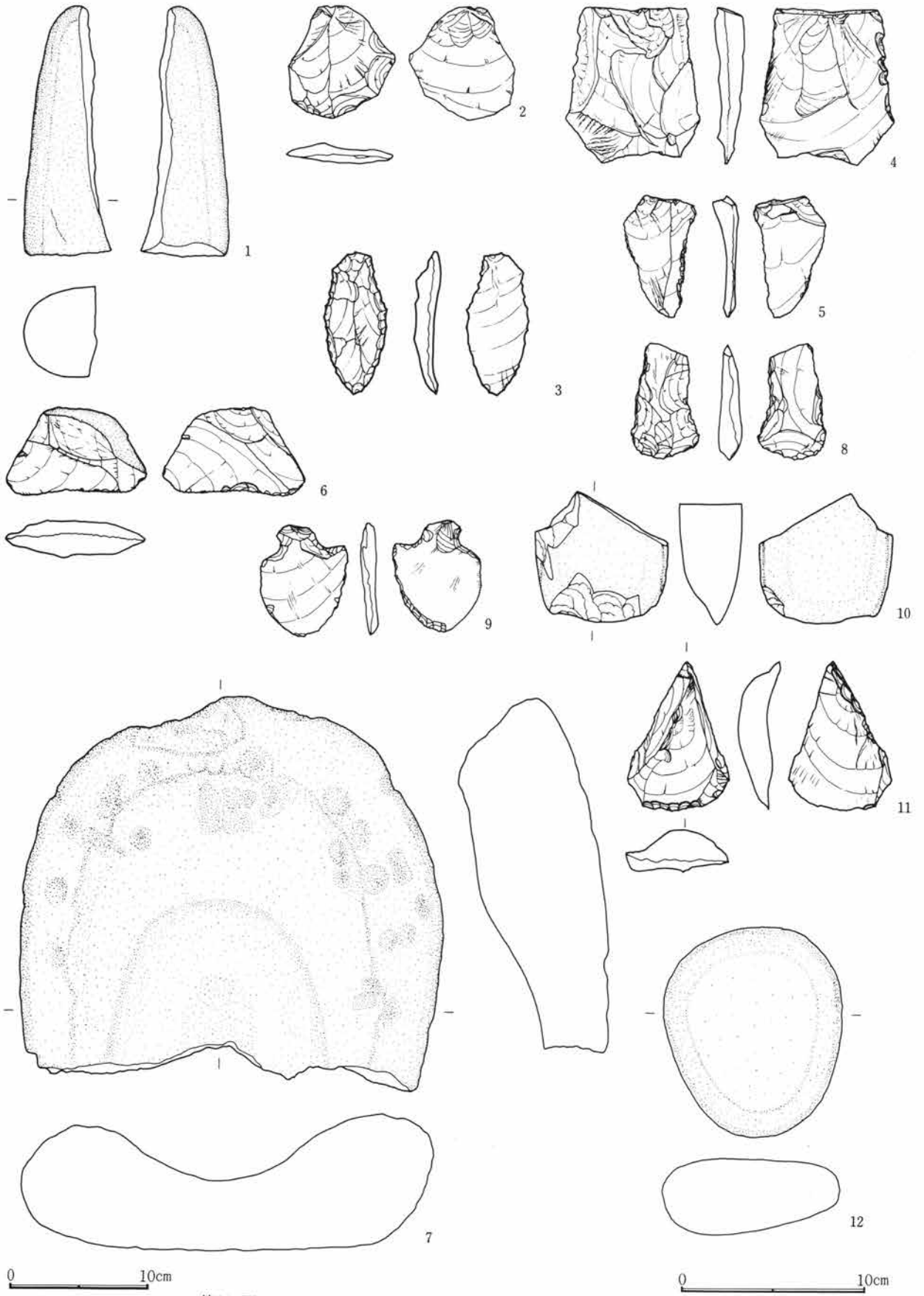
遺構外出土石器 (第237・238・239図)

1～14は石鏃である。1はやや大型の鏃で薄く剥ぎ取った剥片の縁辺に両面から剥離を行なっている、抉りも深く入っている。頁岩製である。2・3は三角形を呈し、両脚が大きく開いた形である。4は二等辺三角形を呈し、片方の脚も欠損している。5・6・7は形態的には近似している。6はやや抉りが深い。5は

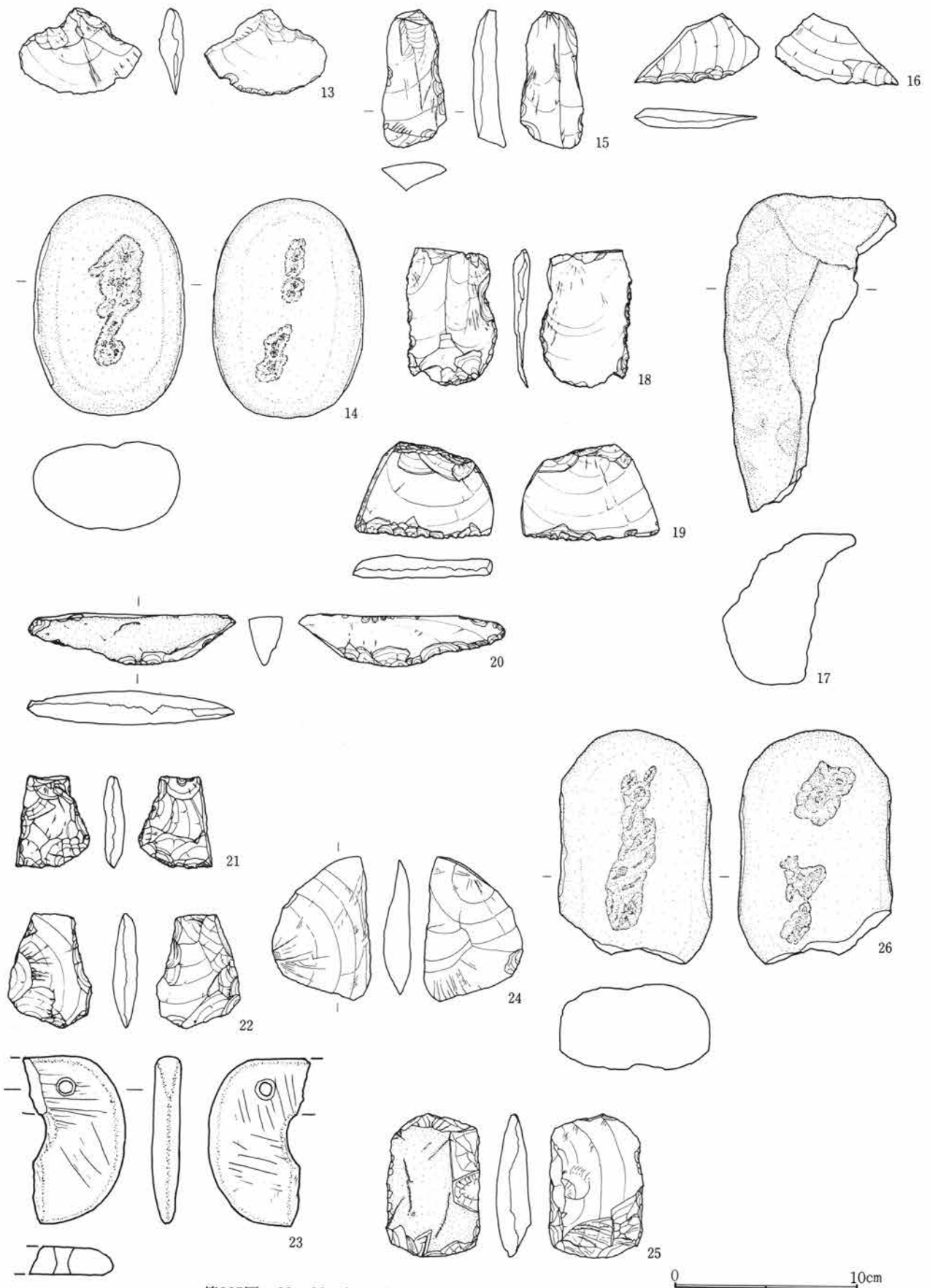


第233図 13号住居址出土石器

中央部の厚みがある。7は非常に小さなものである。8・9・10・11は作りがやや雑である。端部の仕上げも余りていねいでない。抉りを持たないものが多い。12は先端部の欠損品かと思われる。石材は8・9・11がチャート、10・12が黒曜岩である。13・14は石鏃と思われるが、スクレイパーの可能性もある。15・16は石錐であろう、縦長のつまみ部を持ち、15は断面台型の錐部を持つ、16は先端部を欠いている。17は短冊型の打製石斧、側縁部はほぼ真直ぐに仕上げられている。刃部を欠損する。18・19は荒割りされた打製石斧である。18は厚さがあり礫器という感じである。19は大型で側縁部に一部歯潰しがなされている。基部に礫面を残す。20・21・22は小型の打製石斧である。20は短冊型、21・22は撥型を呈す。何れも断面に自然面を残している。23は分銅形の打製石斧である。左右から深く抉りが入る。礫面を残し裏面は平らである。抉り部はかなり磨滅している。24は打製石斧であるが、刃部を欠損している。25・26・27は石匙である。25は三角形の頂点部分とつまみ部を持つ。26・27はつまみ部がややずれて大きめのつまみ部が付される。27は縦形石匙である。28・29・30・31・32・33・34・35・36・37は縦形のスクレイパーである。28・29・37は打撃面

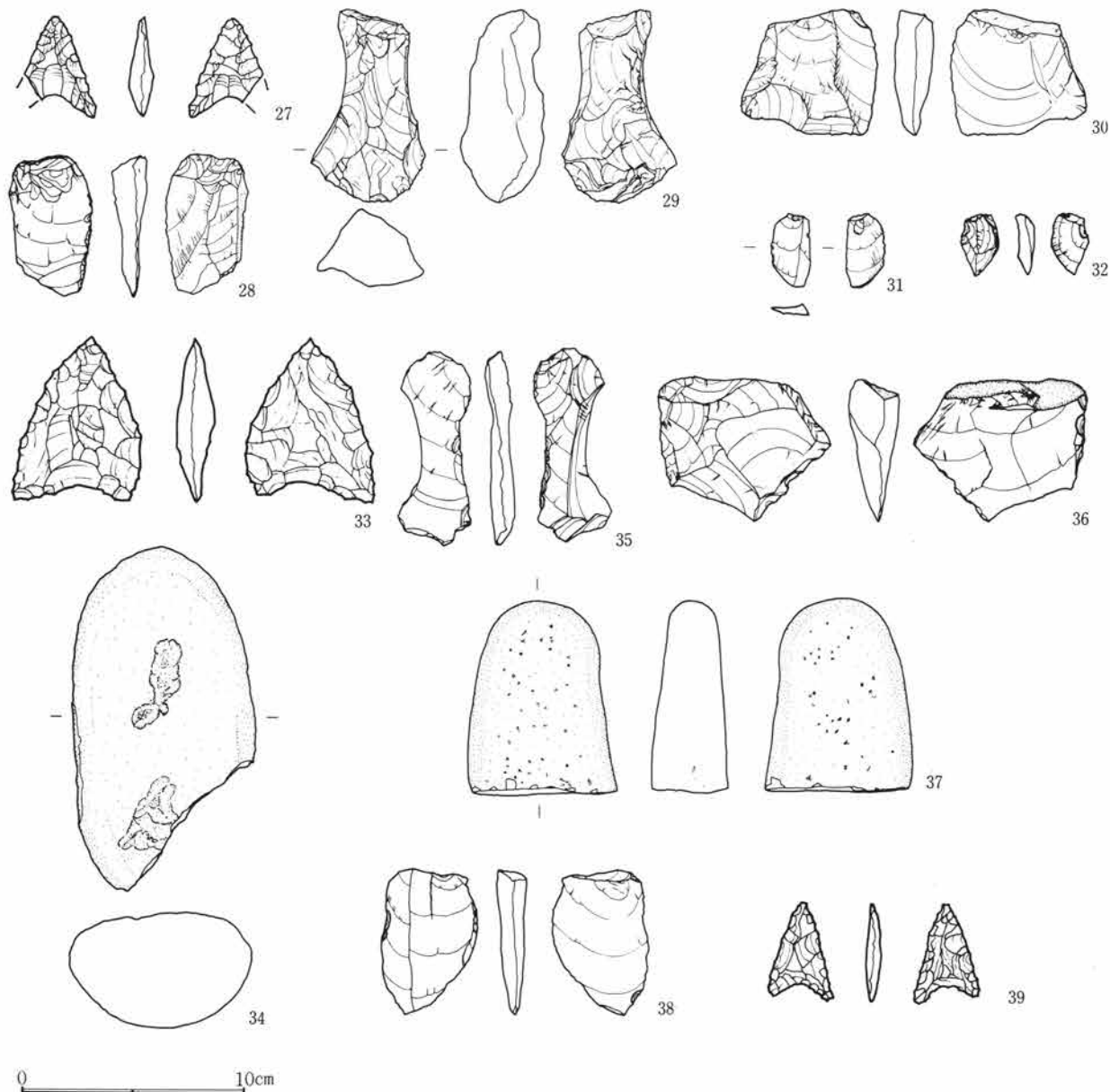


第234図 1・2・3・5・7・9・15・18・27号土坑出土石器



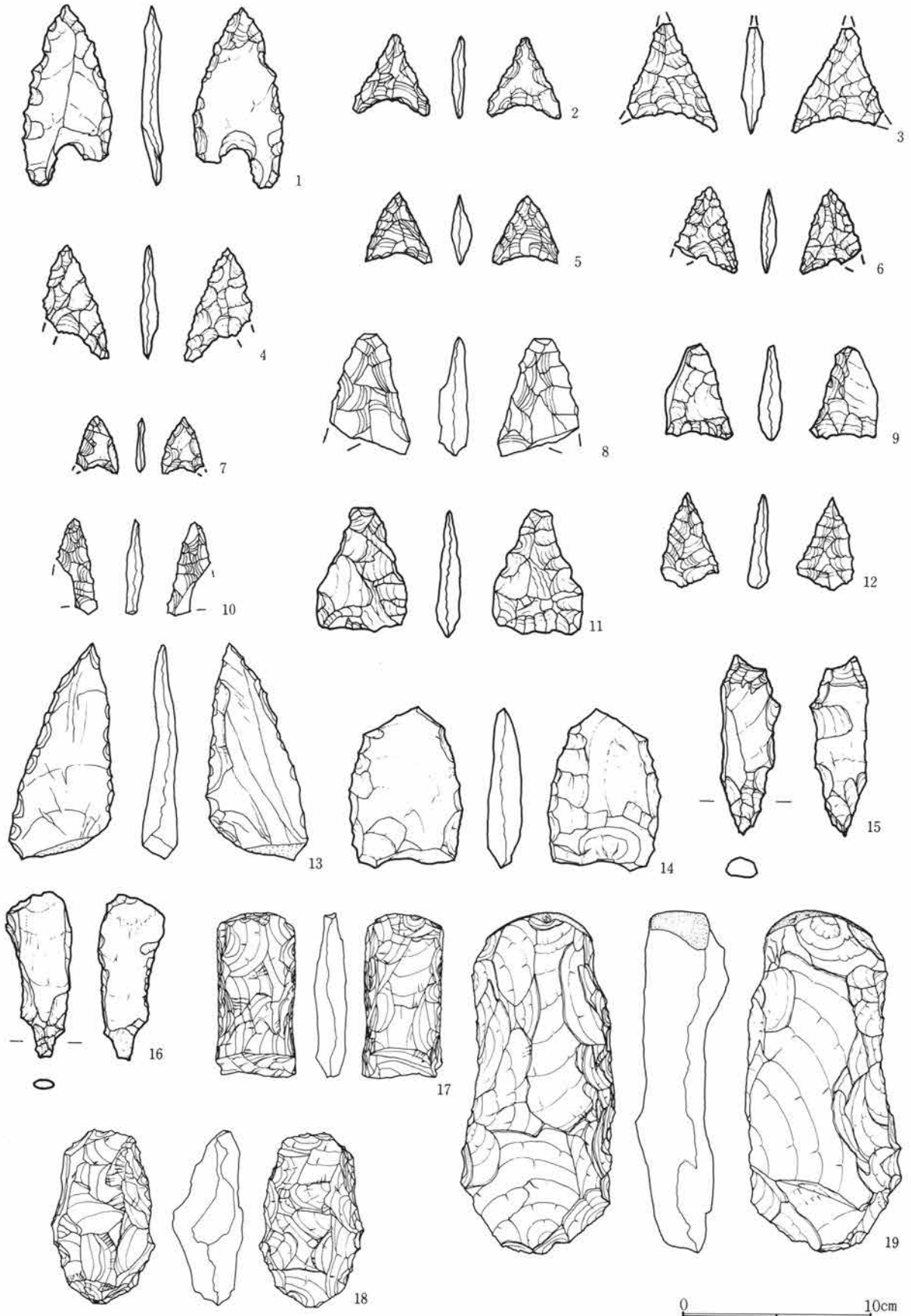
第235図 28・30・31・40・50・51・56・61号土壙出土石器

0 10cm

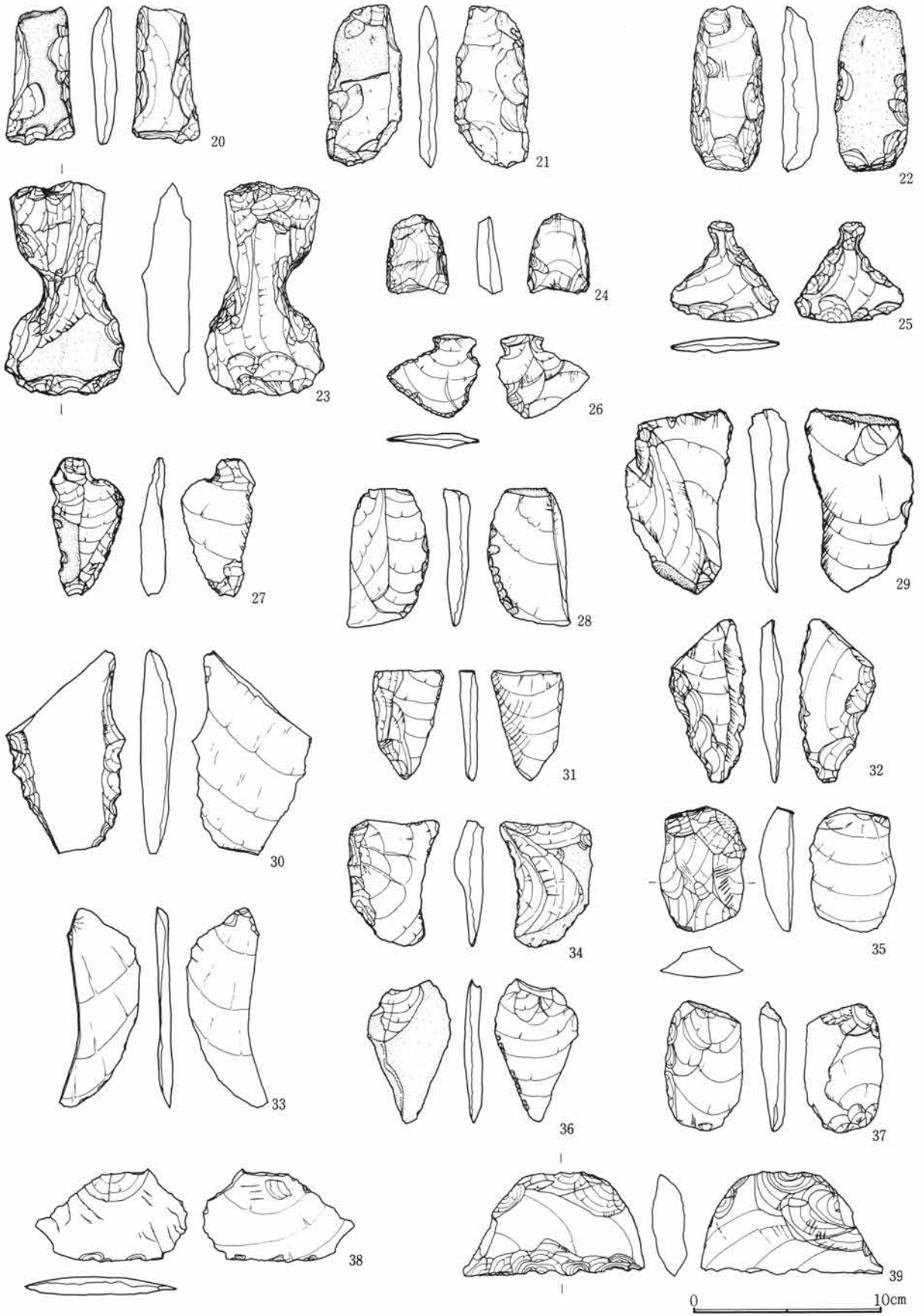


第236図 68・69・70・73・74・77・79号土壙出土石器

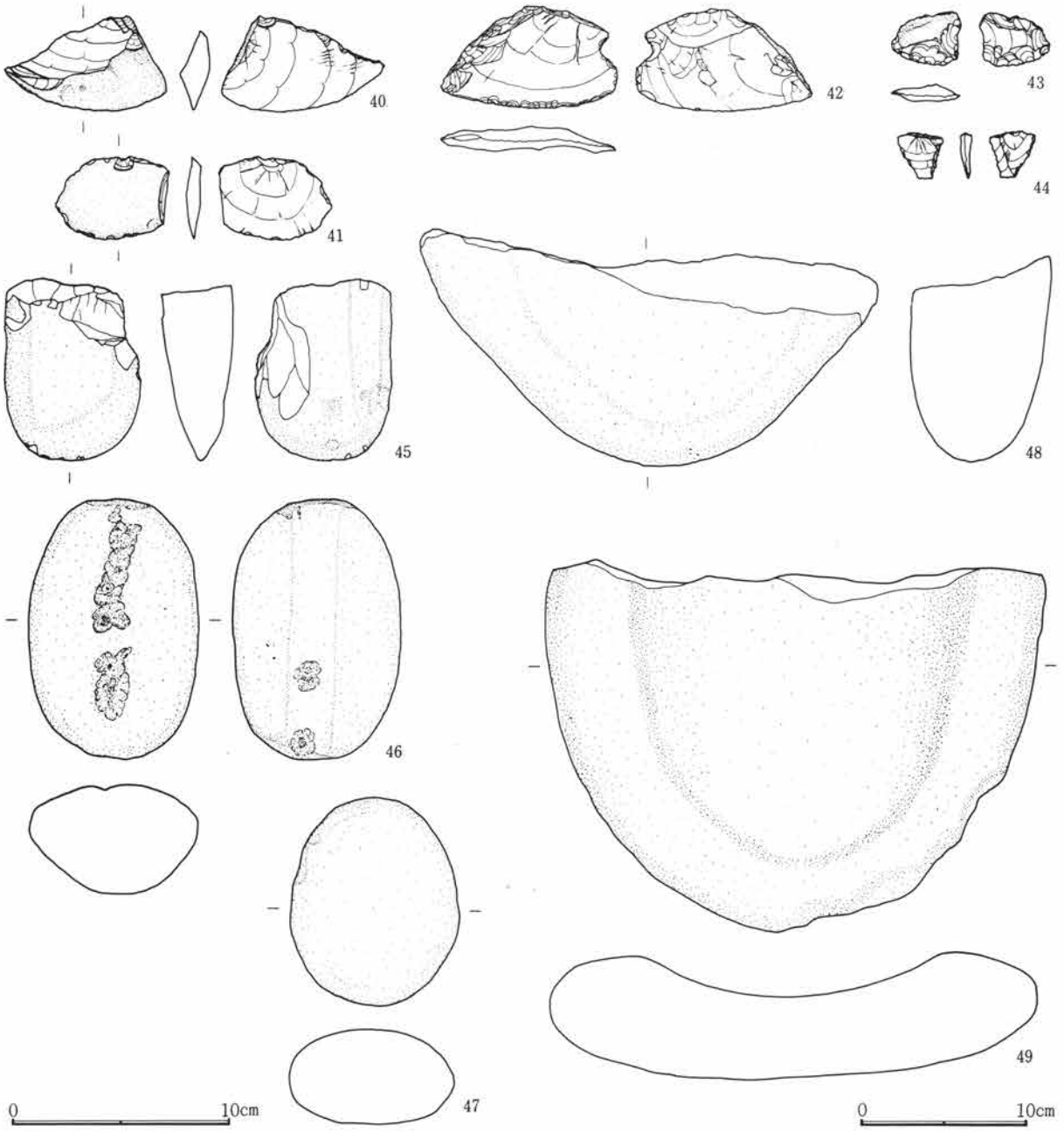
に礫面を残している。30は両側縁に粗い歯を持つ。34・36は一次剝離片を用いており、自然面を残す。33は薄手の剥片でカーブを持つ。38・39・40・41・42・43は横型スクレイパーである。38・40・41・42・43は刃部に若干のカーブを持つ。39は厚手で、粗い刃を持つ。40・41は礫面を残している。43は小型でやはり礫面を持つが、石鏃の可能性もある。44は小型の三角形をした剥辺の二辺に刃を持っている。45はやや大型の磨製石斧である刃は丸みを持ち使用痕が観察される。基部を欠損する。石材は蛇文岩である。46・47は磨石である。46は表面端部に打痕が見られ、使用による磨滅による陵が縦に走る。47はやや偏平な川原石を利用している。48は台石の欠損品である。表面に使用による磨滅が若干観察される。49は石皿である。偏平な石を利用している。凹み部は浅いが使用により平滑になっている。半分に割れている。 (小野)



第237図 遺構外出土石器 (1)



第238図 遺構外出土石器(2)



第239図 遺構外出土石器(3)

表25 石器観察表

図番号	出土位置	種類	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
1号住居址									
1	1 住	石 鎌	II-A	2.2	1.7	0.6	1.5	チャート	
2	1 住	打製石斧	—	7.7	5.6	3.7	136.8	黒色安山岩	
3	1 住	スクレイパー	I	4.6	3.5	1.2	15.9	黒色頁岩	
4	1 住	スクレイパー	II-B	5.5	6.6	0.7	27.8	黒色頁岩	
5	1 住	スクレイパー	III	4.9	6.2	1.0	27.8	黒色頁岩	
6	1 住	スクレイパー	III	7.1	6.3	2.2	98.4	黒色頁岩	
7	1 住	磨製石斧 ?	—	7.2	9.8	2.9	298.2	蛇紋岩	両面に線条痕有り
8	1 住	磨製石斧	I	11.2	6.7	3.4	372.7	変輝緑岩	基部欠損
9	1 住	磨 石	II-B	9.6	6.3	3.9	353.3	ひん岩	
10	1 住	磨 石	II-B	13.0	8.5	5.7	928.7	輝石安山岩	
11	1 住	磨 石	II-A	13.4	8.9	4.7	793.7	輝石安山岩	側縁に使用痕有り
12	1 住	石 皿	III	33.6	20.7	6.7	7600.0	ひん岩	
2号住居址									
1	2 住	石 鎌	I-A	1.4	1.7	0.4	0.6	黒曜石	先端部欠損
2	2 住	石 鎌	I-A	2.8	1.9	0.3	1.9	デイサイト	
3	2 住	打製石斧	I-A	8.5	3.6	1.3	48.1	黒色頁岩	
4	2 住	打製石斧	I-A	8.0	4.4	1.5	75.3	黒色頁岩	
5	2 住	打製石斧	I-B	8.8	3.5	1.3	48.0	黒色頁岩	
6	2 住	打製石斧	I-A	6.4	3.1	1.2	21.8	黒色頁岩	
7	2 住	打製石斧	II-A	5.8	4.7	1.8	42.2	黒色頁岩	
8	2 住	打製石斧	II-B	7.2	4.0	1.3	40.1	黒色頁岩	
9	2 住	打製石斧	II-A	6.6	4.6	1.5	46.1	黒色頁岩	刃部欠損
10	2 住	打製石斧	II-B	8.0	4.9	2.1	93.5	黒色頁岩	
11	2 住	打製石斧	II-A	4.5	3.6	0.9	16.1	黒色頁岩	基部欠損
12	2 住	打製石斧	II-B	3.6	2.9	0.7	9.8	黒色頁岩	基部欠損
13	2 住	打製石斧	II-B	6.1	2.9	1.0	20.0	黒色頁岩	
14	2 住	打製石斧	I-A	9.2	4.5	1.7	82.9	黒色頁岩	
15	2 住	打製石斧	I-A	7.2	3.1	1.0	25.4	黒色頁岩	
16	2 住	打製石斧	I-A	5.8	2.6	0.8	14.4	黒色頁岩	
17	2 住	打製石斧	I-A	5.8	2.3	1.0	12.4	黒色頁岩	
18	2 住	打製石斧	I-A	5.5	1.8	1.0	13.3	黒色頁岩	
19	2 住	スクレイパー	II-B	5.8	4.8	1.8	48.8	黒色頁岩	
20	2 住	スクレイパー	II-A	6.4	3.3	1.1	21.1	黒色頁岩	
21	2 住	スクレイパー	II-A	7.9	4.5	1.6	44.8	黒色頁岩	
22	2 住	スクレイパー	II-B	8.3	5.4	1.5	46.5	黒色頁岩	
23	2 住	スクレイパー	II-B	7.4	4.6	2.0	37.9	黒色頁岩	
24	2 住	石 皿	II	15.4	8.2	7.6	1000.0	輝石安山岩	破片
3号住居址									
1	3 住	打製石斧	I	11.0	4.5	3.8	170.2	黒色頁岩	
2	3 住	打製石斧	I	13.5	8.3	2.2	223.2	黒色頁岩	
3	3 住	打製石斧	I	8.4	5.7	3.3	161.8	黒色頁岩	
4	3 住	スクレイパー	II-B	10.3	6.4	1.7	97.1	黒色頁岩	
5	3 住	磨 石	—	10.6	6.5	3.1	283.4	黒色頁岩	
6	3 住	磨 石	I-A	8.9	6.7	3.5	285.1	黒色頁岩	
7	3 住 炉	石 皿	II	22.4	31.6	11.2	8750.0	輝石安山岩	約1/2欠損
4号住居址									
1	4 住	石 鎌	II-A	2.5	1.4	0.4	1.2	チャート	自然面残す
2	4 住	石 鎌	II-A	1.9	1.6	0.4	0.9	黒曜石	
3	4 住	スクレイパー	I	6.1	4.6	1.3	38.7	黒色頁岩	
4	4 住	スクレイパー	II-A	10.3	4.6	1.1	62.6	黒色頁岩	
5	4 住	敲 石	I-B	10.0	7.9	4.3	500.6	輝石安山岩	
5号住居址									
1	5 住	打製石斧	I-A	11.0	3.3	1.5	61.6	黒色頁岩	
2	5 住	打製石斧	I-A	10.1	3.7	2.2	101.6	黒色頁岩	
3	5 住	打製石斧	I-A	6.4	3.4	1.9	55.6	黒色頁岩	刃部欠損
4	5 住	打製石斧	I-A	5.0	3.4	1.1	24.1	黒色頁岩	
5	5 住	打製石斧	I-B	7.4	3.7	1.1	36.6	黒色頁岩	刃部欠損
6	5 住	打製石斧	II-A	6.4	4.3	1.6	43.5	黒色頁岩	基部欠損
7	5 住	打製石斧	I-B	7.6	4.4	1.3	37.5	黒色頁岩	

図番号	出土位置	種類	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
8	5 住	打製石斧	I-B	7.4	5.0	1.6	56.2	黒色頁岩	
9	5 住	打製石斧	II-B	6.6	5.1	1.0	39.3	黒色頁岩	
10	5 住	打製石斧	II-B	5.9	4.1	1.4	42.8	黒色頁岩	
11	5 住	スクレイパー	II-B	6.9	7.6	2.7	128.3	黒色頁岩	
12	5 住	スクレイパー	II-A	6.8	4.2	1.2	31.7	黒色頁岩	
13	5 住	スクレイパー	II-B	7.3	5.1	1.0	35.1	黒色頁岩	
14	5 住	敲石	II-B	13.0	7.7	4.7	697.5	輝石安山岩	端部に打痕有り
15	5 住	敲石	—	14.0	3.3	3.2	254.4	輝緑岩	
16	5 住	磨石	I-A	9.9	7.9	3.9	451.2	輝石安山岩	側縁に打痕有り
17	5 住	磨石	I-A	10.1	9.3	4.4	606.4	石英閃緑岩	
18	5 住	石皿	I	34.8	22.9	6.1	6810.0	点紋緑色片岩	裏面に凹穴を持つ
7号住居址									
1	7 住	スクレイパー	II-B	9.0	6.0	1.2	51.6	黒色頁岩	
2	7 住	スクレイパー	III	6.2	7.7	1.6	77.7	黒色頁岩	
3	7 住	スクレイパー	III	9.4	5.9	2.4	97.2	黒色頁岩	
4	7 住	磨石	II-A	12.6	7.5	3.6	560.7	輝石安山岩	
5	7 住	磨石	II-A	10.7	6.3	3.5	379.7	石英閃緑岩	
6	7 住	石皿	III	15.1	24.6	7.0	2200.0	石英閃緑岩	
8号住居址									
1	8 住	石 鎌	I-B	1.7	1.5	0.5	1.2	チャート	
2	8 住	石 鎌	I-A	2.0	1.3	0.4	0.6	チャート	
3	8 住	打製石斧	II-A	11.7	7.4	5.1	547.9	黒色頁岩	
4	8 住	スクレイパー	I	3.8	3.0	0.9	7.5	黒色頁岩	
5	8 住	打製石斧	II-B	9.9	6.5	2.6	181.8	黒色頁岩	
6	8 住	スクレイパー	II-B	8.1	4.6	1.2	29.9	黒色頁岩	
7	8 住	スクレイパー	II-A	6.4	3.7	0.8	19.5	黒色頁岩	
8	8 住	スクレイパー	III	6.4	4.7	1.3	22.9	黒色頁岩	
9	8 住	磨石	—	13.0	6.5	3.0	419.7	ひん岩	
10	8 住	凹石	II-A	13.7	8.9	6.4	954.0	輝石安山岩	
11	8 住 炉	石皿	II	17.3	27.4	10.0	5220.0	輝石安山岩	両端を欠く
9号住居址									
1	9 住	打製石斧	II-A	5.6	4.8	1.9	46.1	黒色頁岩	
2	9 住ピット	台石	—	40.9	16.1	10.5	11005.0	ひん岩	表面磨滅している
10号住居址									
1	10 住	石 鎌	I-B	1.5	1.4	0.3	0.3	黒曜石	
2	10 住	石 鎌	II-B	1.7	1.5	0.4	1.1	黒曜石	
3	10 住	打製石斧	I-A	9.8	4.6	1.5	75.8	黒色頁岩	
4	10 住	打製石斧	I-B	7.3	4.3	1.4	42.4	黒色頁岩	
5	10 住	スクレイパー	II-A	4.7	2.5	0.7	6.9	黒色頁岩	
6	10 住	スクレイパー	II-A	5.4	2.6	0.7	7.2	黒色頁岩	
7	10 住	石 匙	II-B	5.9	3.6	0.9	11.7	黒色頁岩	
8	10 住	石 匙	II-B	5.9	5.0	1.1	27.7	黒色頁岩	
9	10 住	スクレイパー	I	5.0	2.9	0.9	6.3	黒色頁岩	
10	10 住	スクレイパー	III	5.5	6.4	1.1	28.9	黒色頁岩	
11	10 住	スクレイパー	III	5.2	5.4	1.2	31.1	黒色頁岩	
12	10 住	スクレイパー	II-B	4.0	3.3	0.7	7.3	黒色頁岩	
13	10 住	打製石斧	II-B	7.9	6.8	1.6	88.8	黒色頁岩	
14	10 住	スクレイパー	II-B	10.2	7.0	2.4	141.6	黒色頁岩	
15	10 住	スクレイパー	II-B	6.4	6.2	1.7	43.9	黒色頁岩	
16	10 住	敲石	II-B	10.6	8.2	4.3	500.0	輝石安山岩	打面に使用痕有り
17	10 住	磨石	—	7.0	6.3	3.3	235.9	輝緑岩	
18	10 住	磨石	I-B	8.1	7.1	4.3	327.2	砂岩	端部に打痕有り
19	10 住	台石	—	17.2	19.6	7.9	4030.0	石英閃緑岩	
20	10 住	石皿	II	17.0	26.5	7.9	3200.0	輝石安山岩	裏面に条痕有り
11号住居址									
1	11 住	石 鎌	I-A	2.1	1.5	0.3	0.7	黒曜石	
2	11 住	石 鎌	II-B	2.0	2.1	0.4	1.1	黒曜石	
3	11 住	石 鎌	II-A	2.1	1.8	0.8	2.4	チャート	
4	11 住	石 鎌	II-A	2.1	2.1	0.4	1.8	黒色頁岩	先端部欠損
5	11 住	打製石斧	II-B	6.3	4.4	1.1	36.0	黒色頁岩	
6	11 住	スクレイパー	III	7.8	4.6	1.0	32.0	黒色頁岩	

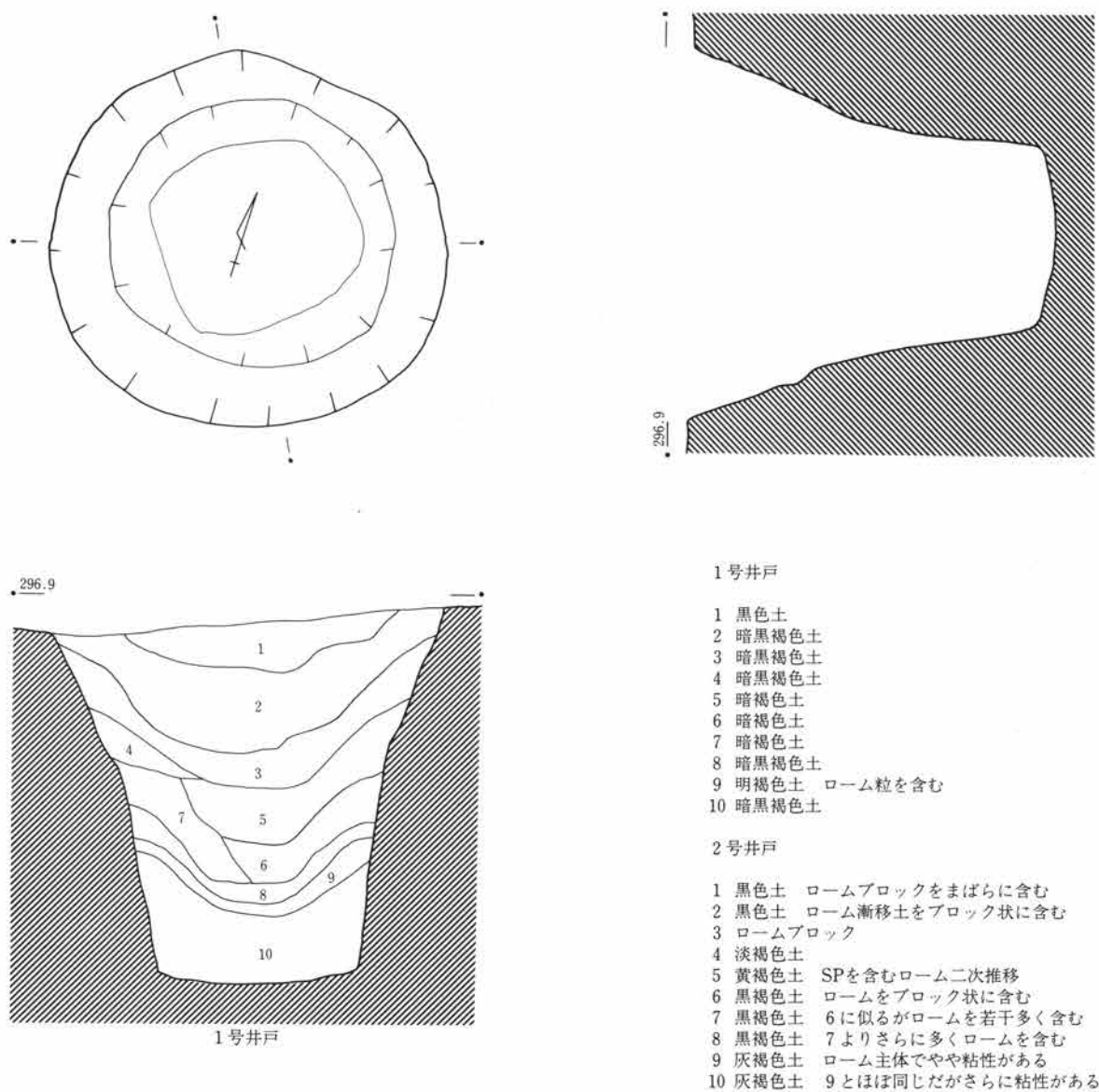
第VI章 諏訪西遺跡

図番号	出土位置	種類	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
7	11 住	スクレイパー	II-B	6.8	4.5	0.9	24.4	黒色頁岩	
8	11 住	スクレイパー	II-B	14.2	6.3	1.0	78.0	黒色頁岩	
9	11 住	敲石	II-B	8.1	7.4	4.1	272.0	輝石安山岩	
10	11 住	敲石	II-B	12.3	7.2	4.2	611.6	輝石安山岩	端部に打撃痕有り
11	11 住	磨石	II-A	13.4	7.2	5.4	748.3	輝石安山岩	
12	11 住	凹石	II-A	12.9	7.1	4.1	511.3	輝石安山岩	表面磨滅痕有り
13	11 住	凹石	II-A	10.9	6.4	3.8	355.3	輝石安山岩	
14	11 住	磨石	II-A	11.7	7.6	4.7	645.2	輝石安山岩	縁辺部に使用痕有り
15	11 住	石皿	II	31.9	25.1	9.3	10180.0	輝石安山岩	一部欠損
16	11住と13住	石皿	III	42.0	27.0	9.6	12400.0	輝石安山岩	
17	11 住 炉	石皿	III	14.8	23.9	6.5	2880.0	輝石安山岩	一部欠損
18	11 住 炉	石皿	II	30.1	25.6	9.1	6440.0	輝石安山岩	一部欠損
12号住居址									
1	12 住	石 鏃	I-A	2.4	1.6	0.5	1.2	黒曜石	脚部欠損
2	12 住	石 鏃	I-A	2.0	1.3	0.5	1.0	黒色安山岩	
3	12 住	スクレイパー	II-A	5.4	3.2	0.8	8.6	黒色頁岩	
4	12 住	スクレイパー	I	4.9	3.6	1.2	17.9	黒色頁岩	
13号住居址									
1	13 住	石 鏃	I-A	1.8	1.5	0.4	0.7	チャート	先端部欠損
2	13 住	スクレイパー	I	4.4	3.7	1.6	21.2	黒色頁岩	
3	13 住	石 匙	I-A	8.9	5.1	1.3	60.9	黒色頁岩	
4	13 住	スクレイパー	II-A	7.7	5.3	1.7	54.2	黒色頁岩	
5	13 住	スクレイパー	II-A	7.8	5.8	1.0	30.3	黒色頁岩	
6	13 住	磨石	II-B	8.3	4.2	2.0	85.6	輝石安山岩	火熱を受けている
7	13 住	磨石	II-A	11.6	5.2	3.3	313.7	石英閃緑岩	
8	13 住	磨石	—	9.2	5.7	2.8	213.5	石英閃緑岩	
9	13住炉70土壇	石皿	III	27.5	23.4	8.5	4880.0	輝石安山岩	表面磨滅している
土壇									
1	1号土壇	磨石	III	13.4	4.8	5.0	399.1	輝石安山岩	
2	2号土壇	スクレイパー	II-B	5.7	6.0	1.1	34.2	黒色頁岩	
3	3号土壇	スクレイパー	I	2.5	1.1	0.4	1.1	チャート	
4	5号土壇	打製石斧	III	8.4	7.3	1.5	95.3	黒色頁岩	
5	5号土壇	スクレイパー	I	6.5	3.9	1.3	17.2	黒色頁岩	
6	7号土壇	スクレイパー	II-A	7.7	4.8	2.0	55.8	黒色頁岩	
7	7号土壇	石皿	I	28.4	30.3	10.8	14206.0	輝石安山岩	一部欠損
8	9号土壇	打製石斧	I-B	6.2	3.7	1.3	24.6	黒色頁岩	
9	15号土壇	石 匙	I-B	6.0	4.7	0.9	24.6	黒色頁岩	
10	18号土壇	磨製石斧	I	7.0	7.2	3.4	228.9	輝緑岩	基部欠損
11	27号土壇	スクレイパー	II-B	8.0	5.6	1.7	65.9	黒色頁岩	
12	27号土壇	磨石	I-A	11.3	9.7	4.1	678.9	石英閃緑岩	
13	28号土壇	石 匙	II-B	6.6	4.7	1.2	26.4	黒色頁岩	
14	30号土壇	磨石	II-A	11.9	8.2	4.8	739.0	輝石安山岩	縁辺部使用痕有り
15	31号土壇	彫器	I	7.4	3.5	1.4	37.8	黒色頁岩	
16	31号土壇	スクレイパー	II-A	6.7	3.9	1.0	20.2	黒色頁岩	
17	40号土壇	台石	—	23.2	12.4	11.0	2330.0	輝石安山岩	
18	50号土壇	スクレイパー	I	7.5	5.1	0.9	31.2	黒色頁岩	
19	50号土壇	スクレイパー	II-A	5.2	7.6	1.3	58.4	黒色頁岩	
20	50号土壇	彫器	—	11.2	2.7	1.8	58.1	黒色頁岩	
21	51号土壇	打製石斧	I-B	5.0	4.0	0.9	22.7	黒色頁岩	
22	51号土壇	打製石斧	II-A	6.2	4.6	1.3	36.0	黒色頁岩	
23	56号土壇	塊状耳飾	—	3.1	1.9	0.5	4.5	蛇紋岩	欠損品
24	61号土壇	スクレイパー	II A	7.8	5.4	1.8	69.6	黒色頁岩	
25	61号土壇	打製石斧	II A	7.8	5.2	1.9	92.0	黒色頁岩	
26	61号土壇	磨石	II A	12.7	8.4	4.7	702.4	輝石安山岩	側縁部使用痕有り
27	68号土壇	石 鏃	I B	1.5	1.0	0.3	0.4	チャート	脚部欠損
28	68号土壇	スクレイパー	I	6.3	3.7	1.7	25.8	黒色頁岩	
29	68号土壇	打製石斧	III	8.5	5.1	3.6	133.0	黒色頁岩	
30	68号土壇	スクレイパー	III	5.5	6.0	1.7	56.2	黒色頁岩	
31	68号土壇	スクレイパー	I	3.2	1.8	0.5	2.5	赤色珪質岩	
32	68号土壇	スクレイパー	I	2.7	1.7	0.7	2.9	黒色頁岩	
33	69号土壇	石 鏃	I-B	2.4	1.9	0.6	1.2	チャート	

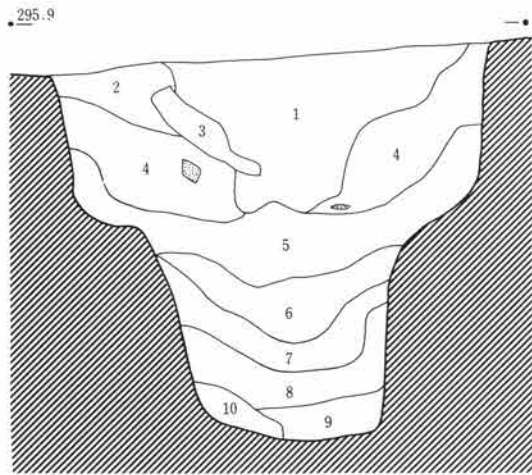
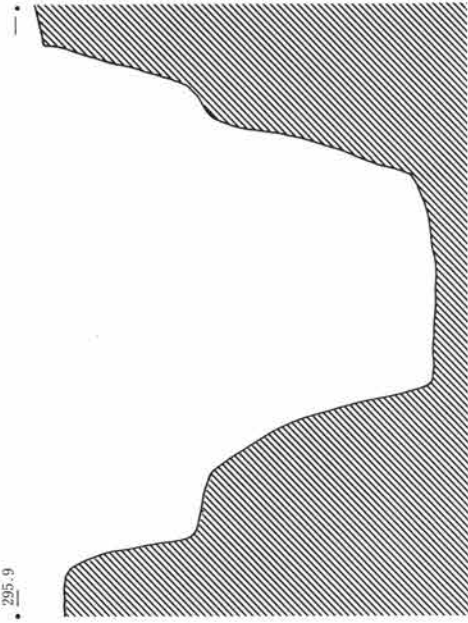
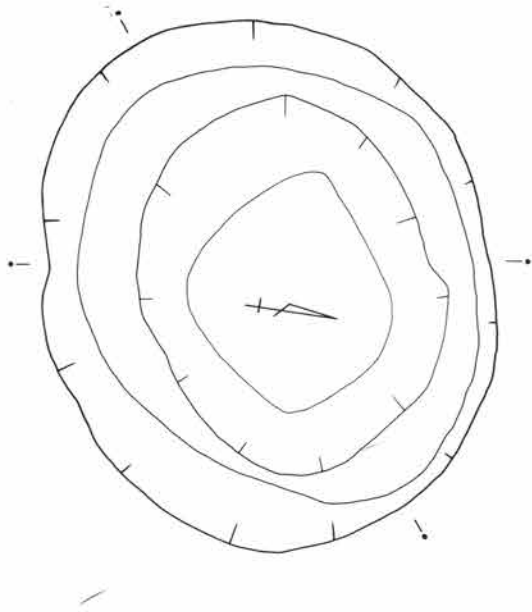
図番号	出土位置	種類	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
34	70号土壙	磨石	II-A	15.3	8.2	5.4	751.6	輝石安山岩	側縁部使用痕有り
35	73号土壙	打製石斧	III	8.6	3.1	0.9	23.5	黒色頁岩	
36	73号土壙	スクレイパー	III	6.3	7.7	2.3	91.7	黒色頁岩	
37	74号土壙	敲石	—	8.5	6.7	3.4	273.7	石英斑岩	使用面磨減
38	77号土壙	スクレイパー	I	6.4	4.3	1.3	27.1	黒色頁岩	
39	79号土壙	石 鏃	I-A	1.4	1.0	0.2	0.3	チャート	
遺構外									
1	表 採	石 鏃	I-A	3.1	1.6	0.3	1.6	黒色頁岩	
2	表 採	石 鏃	I-B	1.4	1.3	0.2	0.2	チャート	
3	表 採	石 鏃	I-A	1.8	1.6	0.4	0.7	チャート	先端部欠損
4	表 採	石 鏃	I-A	1.9	1.1	0.3	0.4	黒曜石	脚部欠損
5	表 採	石 鏃	I-B	1.2	1.2	0.3	0.3	黒曜石	
6	表 採	石 鏃	I-A	1.5	1.1	0.3	0.4	チャート	脚部欠損
7	47A43G	石 鏃	I-B	1.0	0.8	0.2	0.1	チャート	
8	表 採	石 鏃	I-A	2.1	1.4	0.5	1.1	チャート	脚部欠損
9	表 採	石 鏃	II-A	1.6	1.2	0.5	0.8	チャート	
10	表 採	石 鏃	II-B	1.6	0.7	0.3	0.2	黒曜石	脚部欠損
11	表 採	石 鏃	II-B	2.2	1.6	0.5	1.5	チャート	
12	表 採	石 鏃	II-B	1.6	1.0	0.3	0.3	黒曜石	
13	表 採	石 鏃	II-B	3.7	1.8	0.6	3.3	黒色頁岩	
14	表 採	石 鏃	II-B	2.8	2.0	0.6	3.2	黒色頁岩	
15	50A40G	石 鏃	—	3.1	1.1	0.4	1.4	チャート	
16	50A40G	石 鏃	—	2.8	1.1	0.4	1.4	黒曜石	
17	表 採	打製石斧	I-A	8.6	4.3	1.8	77.8	黒色頁岩	刃部欠損
18	50A40G	打製石斧	I-A	9.2	5.5	3.7	196.9	黒色頁岩	
19	50B30G	打製石斧	I-A	18.0	8.2	4.5	712.9	黒色頁岩	
20	表 採	打製石斧	II-A	7.2	3.6	1.3	38.8	黒色頁岩	刃部欠損
21	43A48G	打製石斧	I-A	8.5	4.0	1.1	43.0	黒色頁岩	
22	43A48G	打製石斧	II-B	8.7	3.9	1.8	78.4	黒色頁岩	
23	表 採	打製石斧	III	11.3	6.3	2.8	195.9	黒色頁岩	袂部分磨減している
24	43A48G	打製石斧	II-B?	4.1	3.3	1.1	19.3	黒色頁岩	
25	45A40G	石 匙	II-A	5.7	5.2	0.7	15.7	黒色安山岩	
26	表 採	石 匙	I-B	4.9	4.4	0.8	10.1	黒色頁岩	
27	表 採	石 匙	I-A	7.3	3.9	1.3	21.4	黒色頁岩	
28	表 採	スクレイパー	I	7.3	4.4	1.4	45.5	黒色頁岩	
29	表 採	スクレイパー	I	9.7	5.7	2.1	90.7	黒色頁岩	
30	表 採	スクレイパー	I	10.7	6.4	1.9	109.3	黒色安山岩	
31	45A40G	スクレイパー	I	5.8	3.8	1.0	19.0	黒色頁岩	
32	表 採	スクレイパー	I	8.6	4.1	1.2	36.3	黒色頁岩	
33	45A40G	スクレイパー	I	10.6	3.9	0.7	29.1	黒色頁岩	
34	表 採	スクレイパー	II-A	6.7	4.9	1.6	38.9	黒色頁岩	
35	表 採	スクレイパー	III	6.6	4.6	1.9	55.6	黒色頁岩	
36	表 採	スクレイパー	I	7.5	4.5	0.9	24.1	黒色頁岩	
37	50A40G	打製石斧	I	6.9	4.1	1.3	44.2	黒色頁岩	
38	50B20G	スクレイパー	II-B	4.9	8.0	0.9	37.6	黒色頁岩	
39	表 採	スクレイパー	II-A	9.6	5.4	2.1	104.5	黒色頁岩	
40	表 採	スクレイパー	I	7.4	4.3	1.4	39.2	黒色頁岩	
41	50B20G	スクレイパー	II-B	5.1	3.8	0.7	13.5	黒色頁岩	
42	50B20G	石 匙	II-B	4.6	8.0	1.1	34.2	黒色頁岩	
43	表 採	スクレイパー	II-B	3.1	2.4	0.9	6.0	黒色頁岩	
44	50A40G	スクレイパー	I	2.1	2.0	0.5	1.6	黒色頁岩	
45	表 採	磨製石斧	I	8.3	6.3	3.3	239.6	蛇紋岩	基部欠損
46	表 採	磨石	II-A	9.5	7.8	4.5	490.1	輝石安山岩	磨減による稜を持つ
47	表 採	磨石	I-A	9.5	7.8	4.5	490.1	花崗岩	
48	表 採	石 皿	III	14.4	28.1	8.5	3720.0	石英閃緑岩	
49	表 採	石 皿	II	22.1	30.6	7.7	5660.0	輝石安山岩	1/2欠損

第 4 節 弥生・古墳時代以降

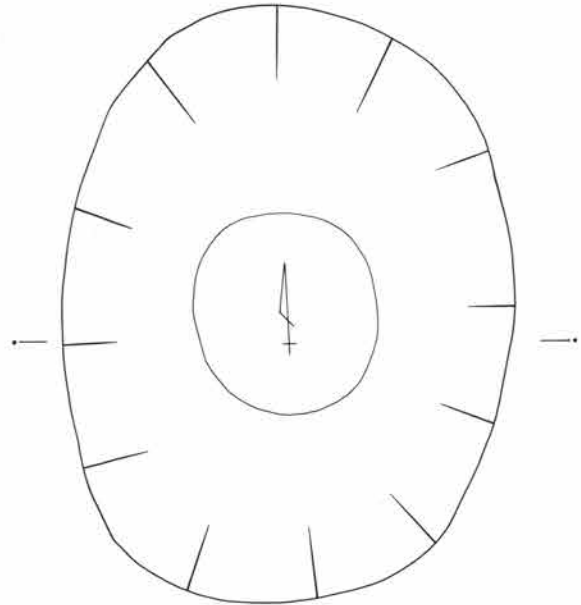
既期の遺構に関しては、井戸址と思われるものが調査区南西部において3基。南北にはほぼ等間隔で並んで掘り込まれたものを検出したが他に遺構は見られず、また当初調査区内に古墳ではないかと思われた若干の高まりがあったが調査によってその形跡は認められなかった。



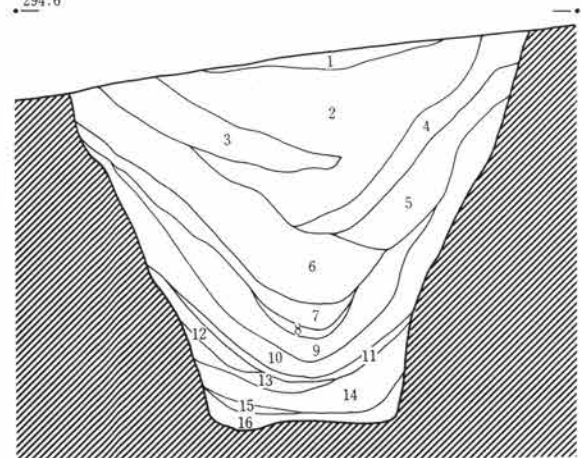
第240図 井 戸 (1)



2号井戸



294.6



3号井戸

3号井戸

- 1 ニツ岳降下灰層 (FA)
- 2 黒色土 ローム小粒子を極く僅かに含む
- 3 黒色土 2に似るがローム粒を多く含む
- 4 黒褐色土 ロームを若干含む
- 5 黄褐色土 4よりさらにロームを混入する
- 6 黄褐色土 ロームを多量に含む
- 7 淡褐色土 ロームを含む
- 8 黄褐色土 ローム粒を多く含む
- 9 黄褐色土 8に似るがローム粒子目立つ
- 10 黄褐色土 ローム主体
- 11 黄褐色土 ロームを含む
- 12 黄褐色土 ローム
- 13 黄褐色土 やや砂利っぽいロームを含む
- 14 黄褐色土 ロームを含みやや粘性を持つ
- 15 黄褐色土 ロームブロックを混入
- 16 黄褐色土 13に似るが明るい

第241図 井 戸 (2)



1 井戸址

1号井戸 (第240図)

52～53-B04～05グリッドにて検出した。長径226cm×短径210cmで深さ約200cmで、断面は下部やや太いロート状を呈す。底は方形で崩落により下面は明確には検出し得なかったが、平らであったと考えられる。

2号井戸 (第241図)

46～47-A45～46グリッドにて検出した。長径282cm×短径240cmで深さ200cmであった。断面は中段を持つロート状を呈す。底面はやや方形を呈し、かなり平らであった。

3号井戸 (第241図)

41～42-A38～39グリッドにて検出した。長径315cm×短径240cmで深さ200cmである。断面は巾広のロート状を呈し、底面は平らであった。覆土最上層にてFA(二ツ岳降下火山灰)の一次堆積を認めた。

3基とも時期を決定する遺物の出土はなかったが、弥生後期から古墳時代初頭にかけて、ほぼ同時期に掘られたものと考えられる。

2 その他の出土遺物

出土遺物については、弥生時代のものは皆無であり、古墳時代のものについても須恵器片が2点と滑石製の板状製品が表採資料によって得られたのみである。(第242図)

1・2は須恵器甕の破片である。外面に格子目状の叩き目を有す。1は内面に青海波文様のあて目を持つ。3は厚さ4.5mmで両面に断面V字状の細い擦痕を数条有す。滑石製の板状製品である。(小野)



第242図 古墳時代の遺物

第 5 節 諏訪西工事用道路の調査

1. 概要

関越道建設のため農道の拡幅に伴う発掘調査である。地形的には諏訪西遺跡と同じ台地上にあり諏訪上遺跡として知られているところである。調査区は道路に沿った細長いものとなり、調査区を4区（A～F）と分けて調査した結果古墳時代後半の住居址1軒と縄文時代の土壙10基を検出、その他B区北寄りの部分では縄文中期の土器片を多量に含む包含層を調査した。A・B区以外においてはほとんど遺構・遺物は検出されなかった。

西方300m程離れた諏訪西遺跡では縄文前期を主体としているが、B区の遺物出土状況からすると中期の遺構が付近に存在することが想定される。また包含層より出土した土器の中に押型文土器が含まれており、注目される。

2. 縄文時代

A区において1基、B区6基、C区3基の土壙を検出した。1号土壙は当初住居址かとも思われたが、小規模であること、柱穴、炉址等が検出されないことなどから土壙として処理した。

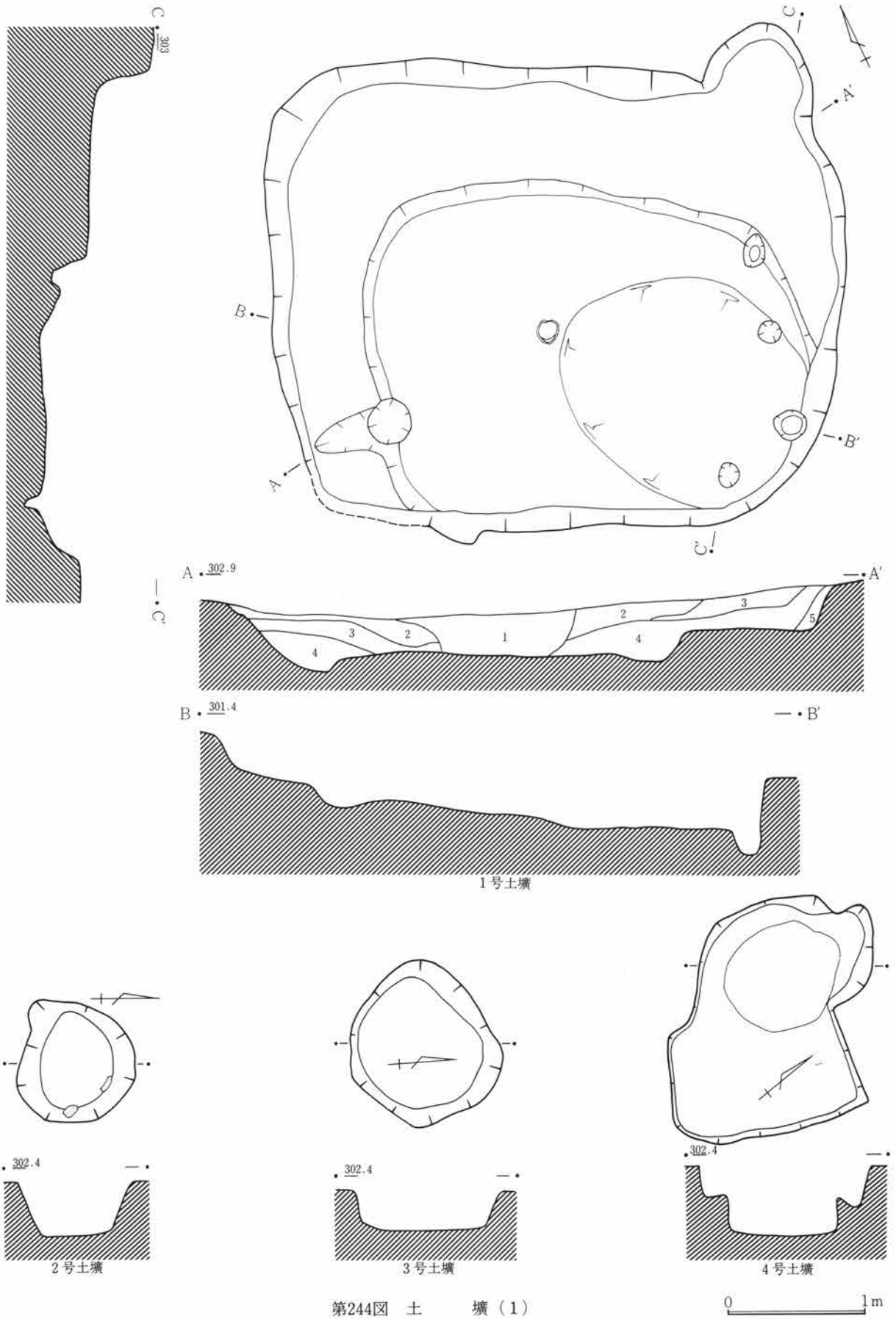
他の土壙については、土器片と若干の石器類が出土している。中には掘り方面の不明解なものもあり、部分的に攪乱を受けたものもある。

B区包含層中より出土した土器は早期から中期に及び特に中期前半の土器を主体とするが器形を復元し得るものは少なく、北斜面にあることから、土器溜りとしての性格を持つものと考えられる。

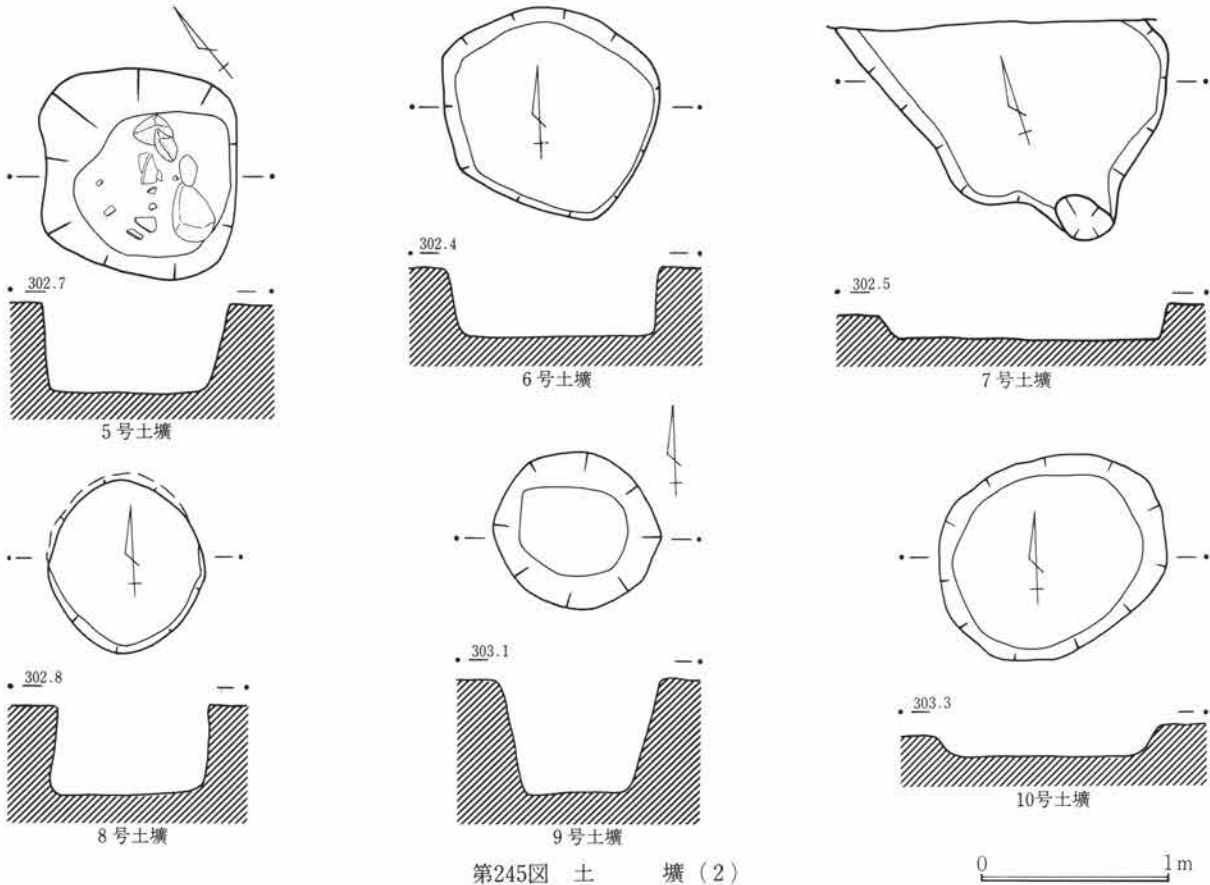


第243図 工事用道路全体図

0 50m



第244図 土 壙 (1)



第245図 土 坑（2）

3. 土坑（第244・245図）

1号土坑は隅丸長方形を呈し、規模もやや大きい。中央部よりやや浮いた状態ではあるが深鉢形土器（第246図-1）が出土している。2～7号土坑はB区西部分でまとまって検出したが、出土遺物は少ない。（小野）

表26 土坑一覧表

番号	位置	形状	規模(m) たて×よこ×深さ	出土遺物	時期	土 層	備 考
1	175～177-C04 ～06	隅丸長 方	4.2×3.3 ×0.8	深鉢 土器片 スクレイパー 2点	十三善 提	1 黒褐色土 2 明茶褐色土 ローム粒含む 3 茶褐色土 " 4 明褐色土 SP粒子含む 5 ローム	掘り込みが2段に なっている。 南側は削平されて いる。
2	284-C15～16	円	0.89×0.84 ×0.4	土器片	阿玉台		
3	284-C16～17	円		—	—		
4	283～284-C17	不正円	1.18×1.1 ×0.25	土器片	阿玉台		上面攪乱を受ける
5	282-C14	不正円	1.1×1.0 ×0.48	土器片	関 山		
6	281-C15	不正円	1.1×1.15 ×0.38	土器片 スクレイパー	阿玉台		
7	282-C17	不正円	—×1.2 ×0.18	土器片	阿玉台		約半分未掘、 浅い土坑である。
8	262-C05	円	0.9×0.82 ×0.45	土器片 打製石斧2点	阿玉台		断面、やや袋状を 呈す。
9	261-C01～02	円	0.9×0.8 ×0.6	—	—		
10	257-B48	円	1.2×1.05 ×0.15	—	—		しみ状の落ち込み か。

土壙出土土器（第246図）

1号土壙（1～6）

1は土壙の中央より出土している。口縁部・底部を欠損している。器形は胴部でややしまる。肩部・口縁部が、開く形となる。地文にL Rの縄文を横位施文し、胴上位に1本の半截竹管による結節浮線文を横に廻らし、胴部は、縦の結節浮線が17本、ほぼ等間隔に垂下している。

2・3は同一個体で無文地に、横位の結節浮線を持つ。焼成の良い堅緻な土器である。口唇部は内そぎ。4はL R縄文地に縦に、5は無文地に横の結節浮線を持つ。6は底部片で、まばらにR Lが施文されている。

2号土壙（7～9）

7は口縁部・端部でわずかに外へ屈曲する。沈線による渦巻を持つ。口唇部には竹管による刻みを持つ。8は胴部片で整形痕が連続して施文。9は口縁部でゆるく内側へ向かっている。口唇部は押されており幅広となる。無文である。

4号土壙（10～13）

10は口縁部でL Rの縄文を持つ。11は薄手の作りで、口縁直下に2本の連続爪形文を横に廻らしている。12は沈線による渦巻文を持つ、薄手の土器である。13は無文の浅鉢の底部片である。

5号土壙（14）

14は口縁部片で地文に

6号土壙（15～21）

15はL R・R Lで羽状縄文を作る。16は口縁部がくの字に屈曲する。17は沈線による渦巻文を施し、内側は刺突文が付される。18は沈線により渦巻文。19はH字に、ミミズバレ状の隆線が付される。20はR L縄文。21は底部片で縦に条線が平行に付される。

7号土壙（22～25）

22はL Rの縄文。23は口縁部片で端部が肥厚する。口縁下に連続爪形文が2条横に廻る。24は縦の隆帯を持つが中央がへこむ。25は半截竹管により横位、波状文が付されている。

8号土壙（26～29）

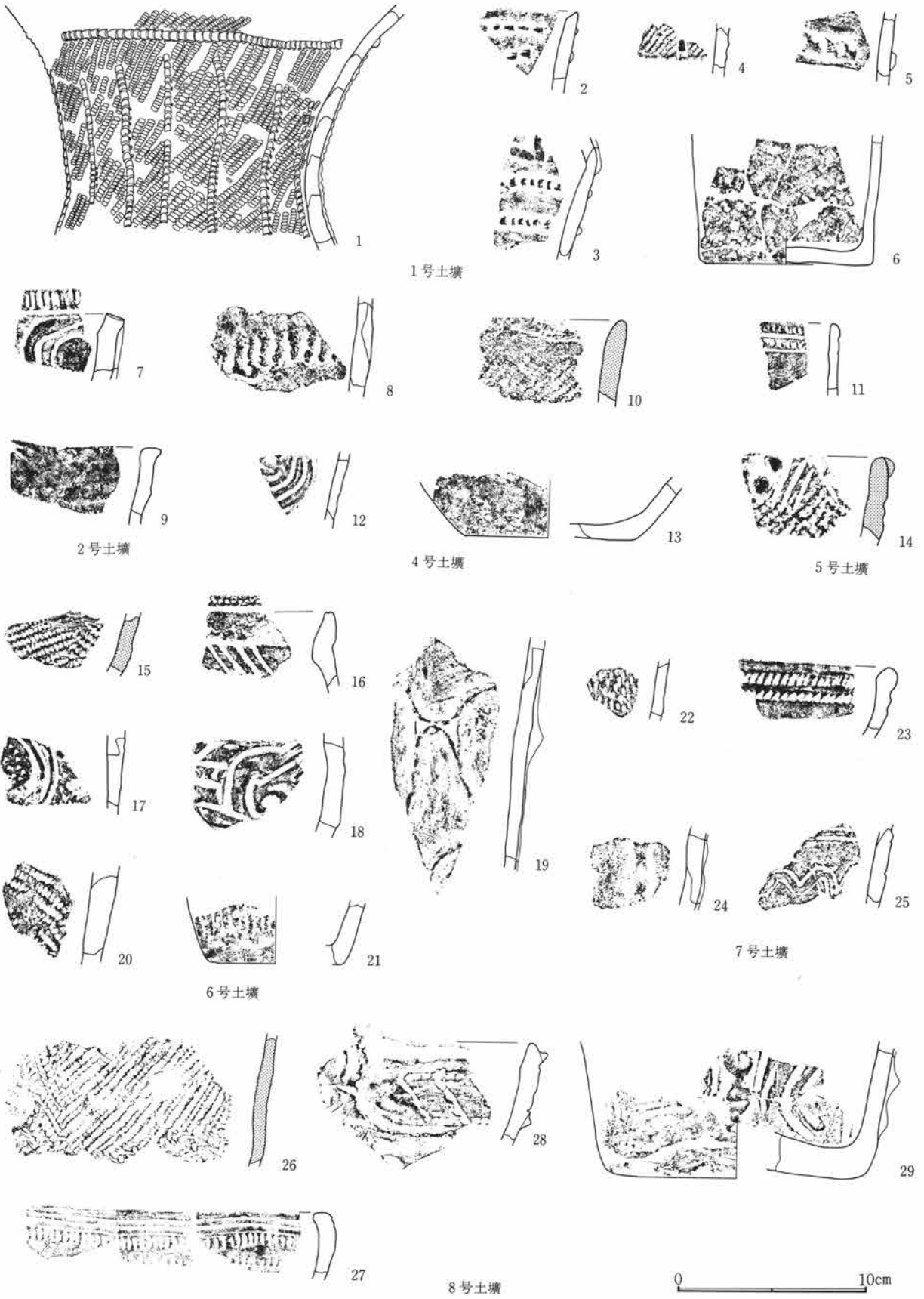
26はR LとR L + Rの付加条により、縦・横の羽状縄文が表出されている。内面よく研磨された土器である。27はやや内湾し、端部が若干肥厚する口縁部片である。口縁に沿って平行沈線が廻り、その下位に連続爪形文。28は口縁部片である。隆帯により楕円の区画文を作りYの中は隆帯に沿って爪形刺突文を走らせ、さらに斜めに付す。29は底部片。指頭によるくぼみを持った隆帯を縦に付し、棒状工具による沈線で幾何学文を描く。

B区出土土器（第247～254図）

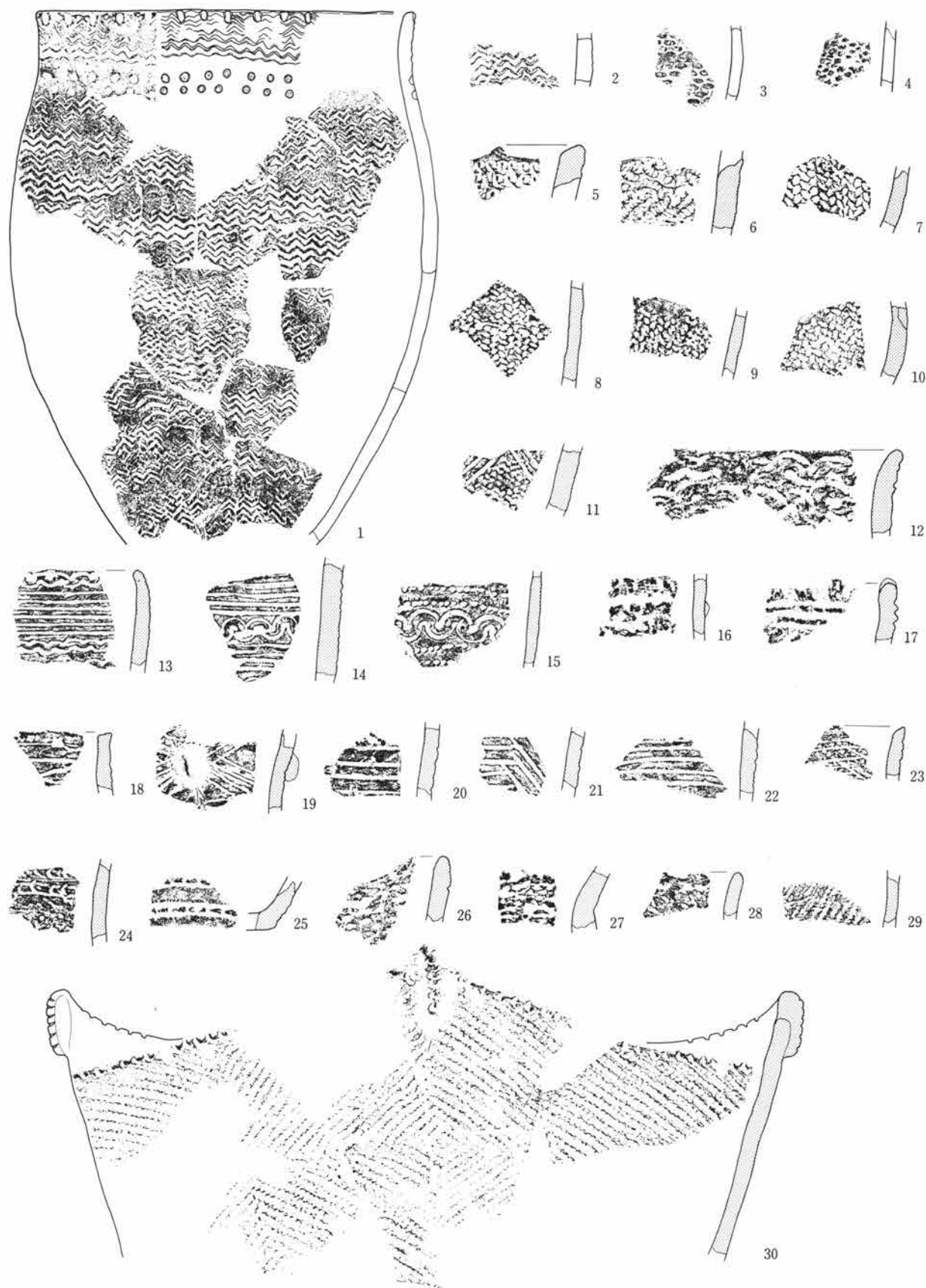
調査区は東西に延びる台地の北斜面にあたり、農道が大きくS字に曲がりながら北側に下がって行く南側である。道路に沿って幅3～4mで調査は行なった。約30cmの表土下に20cm程のF P層を検出した。その下は黒色土、ローム漸移、ローム層となり黒色土下層からローム上面までの中に多数の土器片・石器が検出されたが、遺構は認められなかった。

出土した土器は早期から中期まで約500点程であるが、中期のものが約80%を占めている。以下出土土器についてI～IV群に分類を行ない説明を加える。

第1群 早期後半の押型文土器である。（1・2・3・4）

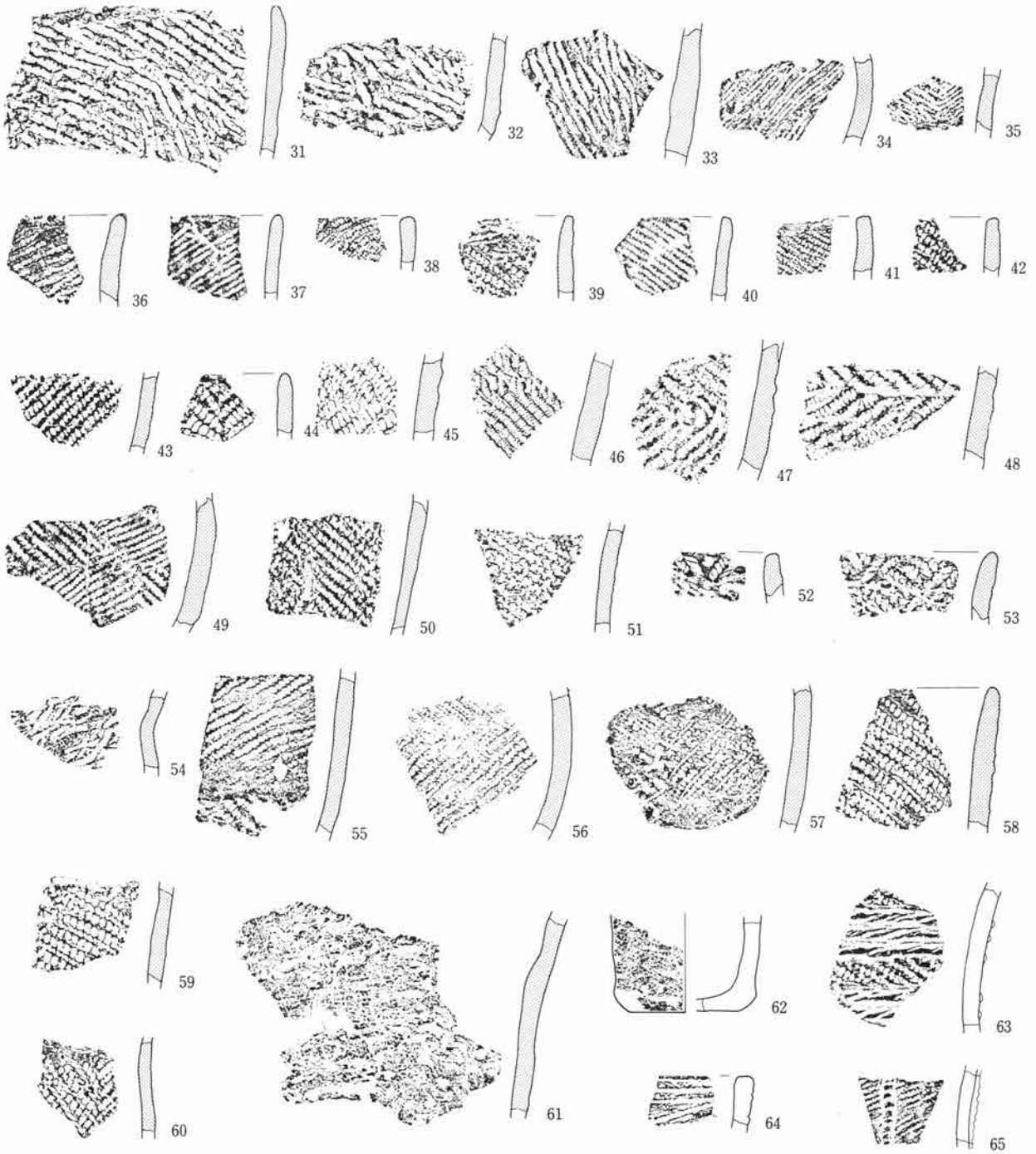


第246図 1・2・4・5・6・7・8号土壙出土土器



第247图 B区出土土器（1）

0 10cm



第248図 B区出土土器（2）

0 10cm

1類 山形押型文土器である1・2。1は器形を復元し得るもので推定口径20cmである。底部は尖底と思われるが欠損している。胴部中位でやや膨らみ、口縁部は外反ぎみに立ち上がる。口縁部から胴部にかけて山形押型文を重畳施文し、頸部には、竹管状工具による円形刺突文を2段廻らしている。口唇部は、竹管による刻みを外側から付けている。灰色っぽい土器で石英粒が目立つ。2は1と似てはいるが別個体片であろう。3・4は楕円押型文土器である。横位に回転施文される。

第II群 前期前半の土器で繊維を多量に含む一群である（5～62）。

1類 関山式土器に比定される。 a種 コンパス文を持つもの5・6。5は突起を持つと思われる。
 b種 地文に組紐を施文する7・8・9・10・11。11はさらに平行沈線が施文される。

2類 黒浜式土器。 a種 コンパス文を持つもの12・13・14・15。13・14は同一個体。平行沈線を横位に重畳施文し、その間にコンパス文を付す。15は刺突文を横に施文し、コンパス文を持つ。 d種 隆帯、貼付文を持つ16・17。16は口縁部に沿って隆帯を持ち、上に刺突文を加える。17は口縁部に沿って平行沈線を施し、口唇部に耳状の貼付文を持つ。 c種 平行沈線を持つものを一括した18・19・20・21・22・23。19は貼付文を平行沈線が交錯する所へ付す。 d種 爪形文、刺突文を持つもの。24・25は連続爪形文を持つ。26・27は棒状工具による刺突文を持つ。 e種 縄文が施文されるものを一括した。28・29は無節の縄文を施文する。28はR、29はLである。30は四単位の波状口縁を持つ深鉢形土器。波頂部に刻みを持った耳状の貼付文を持ち、口唇部にも竹管による刻みを付す。RL・LRの縄文で菱形を作る。内面は平滑に研磨される。31・32・33は無節Rを施文する。34はL、35はRとLで羽状を作る。36・37・38・39・40・41・42は口縁部片。36・37・38はLR、39・40・41・42・50はRLを施文する。43はLR、前々段多条。44・45・46・47・48・49はRL、LRを用いて羽状を作る。51は異節R $\begin{matrix} & & R \\ & \swarrow & \downarrow \\ L & & L \end{matrix}$ と思われる。52・53はLR 2本を用いた結縄文を施文。54は反撚LLである。55・56はLR、57・58・59・60は付加条第一種である。 f種 その他の土器61・62。61は無文に見えるが、器面に細線による斜格子文、半截竹管によるコンパス文が見られる。

第III群 前期後半の土器である。(63・64・65)

1類 諸磯b式土器である63・64。 63は地文にRLの縄文を持ち、篋状工具による刻みを持った浮線文が横に貼り付けられている。64は口縁部片半截竹管による平行沈線を持つ。

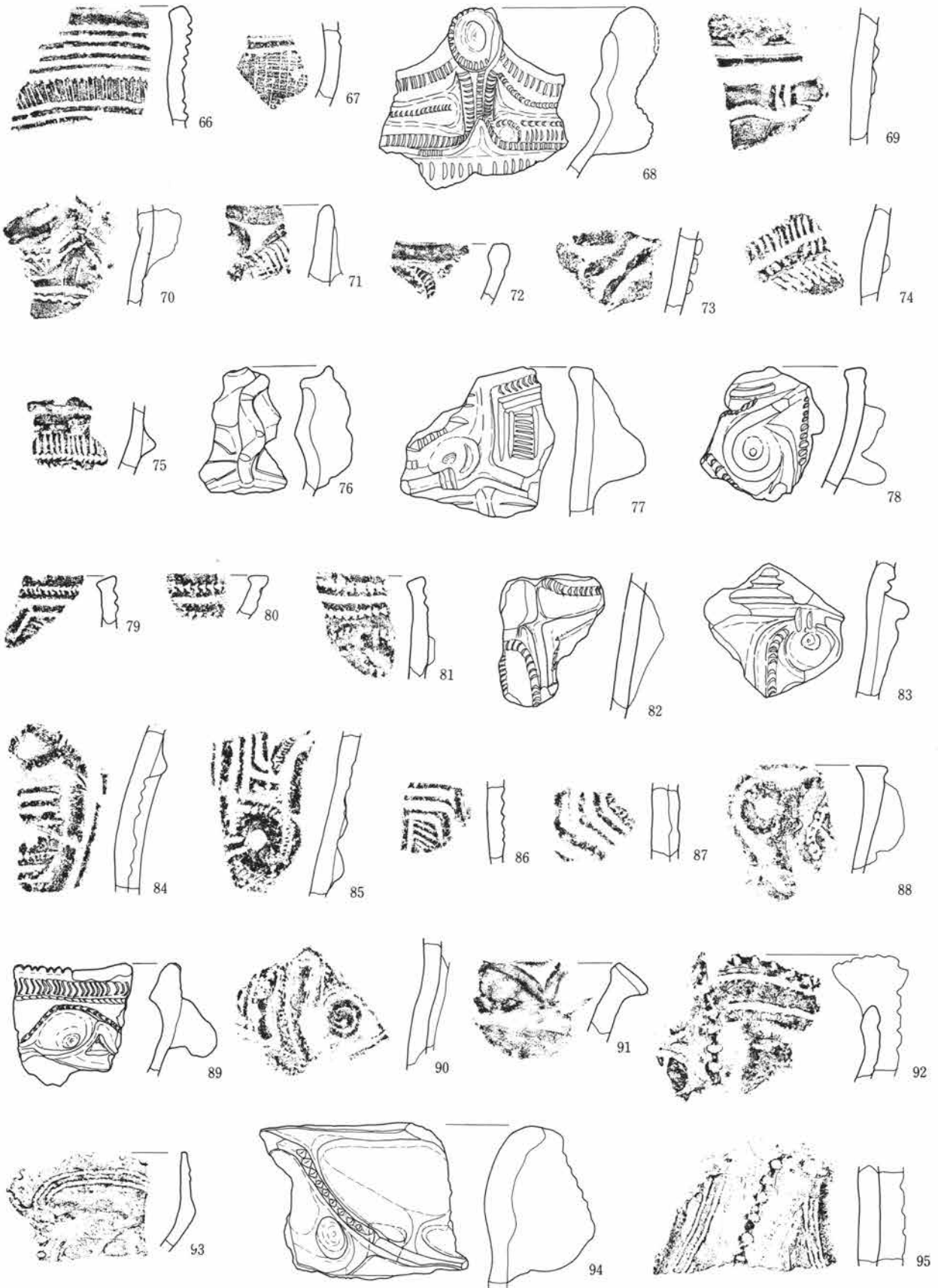
2類 65は十三菩提式土器に比定される。LRを地文に持ち、縦の結節浮線文が付される。

第IV群 中期の土器群を一括した。(66~183)

1類 中期初頭の五領ヶ台式土器に比定される土器を一括した66・67。66は口縁部破片で、4条の沈線横走し、連続刺突下に平行集合沈線文を施す。内面に煤付着の胎土に石英粒を含む。67は沈線下に平行集合沈線を刻目に施す。

2類 勝坂式土器を一括した68~90。68は波状口縁、波頂部が円環状の突起となる。突起下隆帯が垂下し区画を構成すると思われる。区画内は幅広の半截竹管文、幅狭の竹管文と三叉文で充填されるしっかりした作りである。69・70とも口縁下に小突起を付す。71・72は口縁下に三叉文を施し、竹管文が沿う。73~75はおそらく描象文と思われる。73は細隆帯による三本指の描出であろう。76は隆帯を蛇行させ突起頂部で渦巻きとなる。77~87はおそらく1個体であろう。口縁下に渦巻状の突起を付し、隆帯によって区画文を構成し、幅広の竹管文とペン先状の刺突を施す深鉢である。88も渦巻状の突起を持つ。89は口唇部に刻みを施す。竹管文を平行させペン先状の連続刺突も施す。眼鏡状突起に側して三叉文を施す。90も渦巻状突起を隆帯が巻き、沈線と連続刺突文が沿う。91は浅鉢であろう。平縁。

3類 阿玉台式土器をまとめた92~176。92は扇状把手に2条の結節沈線を施す。把手外縁、垂下する隆帯に刻みを施す。口縁下には角押文による楕円枠が施される。93も扇状把手、外縁に刻み。把手内に2条の竹管文を施す。94はゆるい波状縁を呈すと思われる。口縁部より刻みを施した隆帯が弧状に下る。隆帯には眼鏡状突起と10mm前後の孔を穿つ。95~101は山形状の突起を一括した。95~98とも頂部より刻みを持つ隆帯を垂下させる。96は突起内外縁に刻みを施して頂部両端より隆帯が「Y」字状に垂下し、分岐点を玉抱き三叉文を意匠する。99も三形突起で突起中央につまみを付す。100は波状口縁であろう。2列の結節沈線が口縁



第249図 B区出土土器（3）

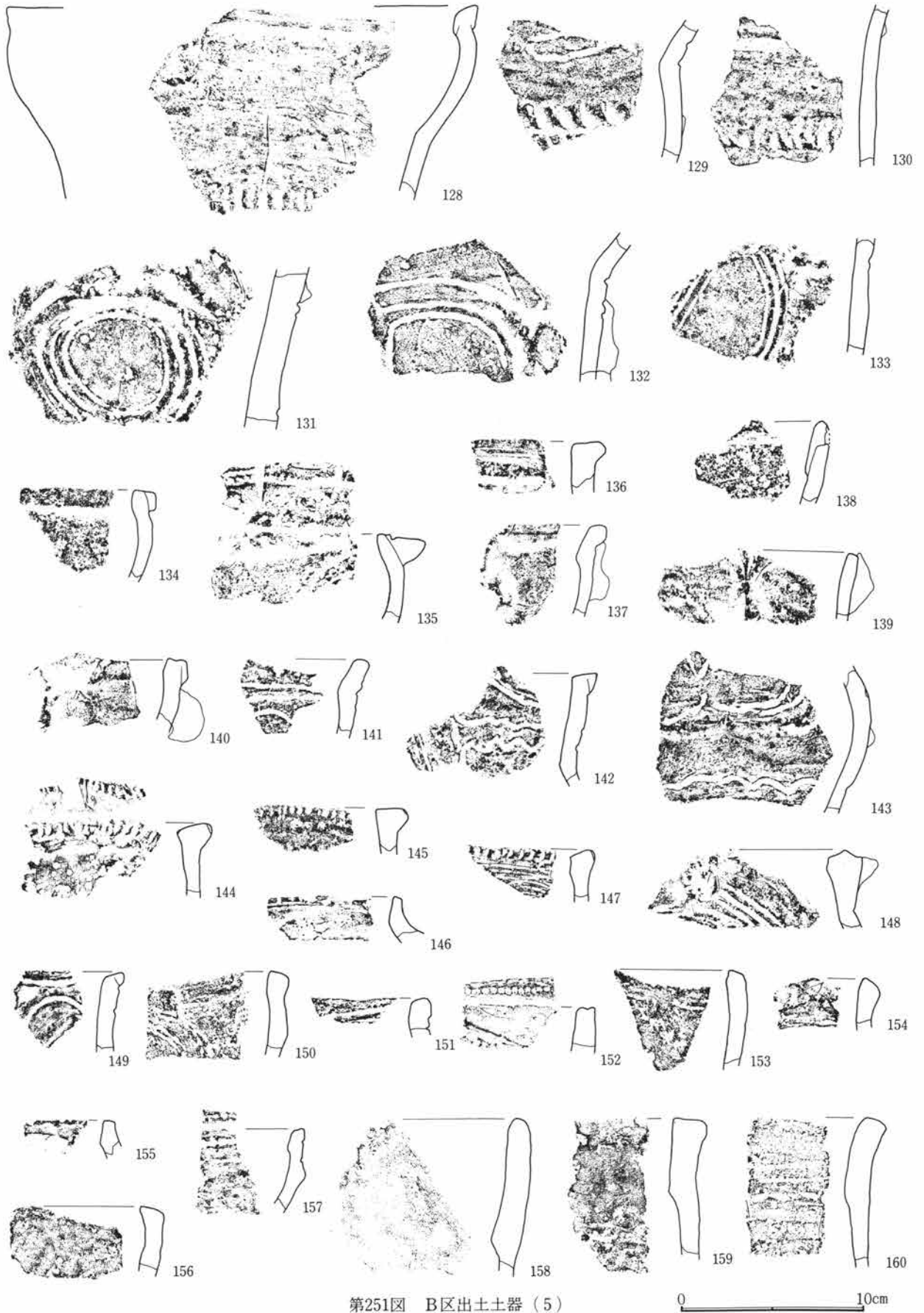
0 10cm



第250図 B区出土土器（4）

0 10cm

に沿う。101は波状あるいは山形状の口縁、垂下する隆帯が剥落する。外縁、隆帯に沿って2列の結節沈線が施される。102は波状口縁、波頂部より垂下する刻みを持つ口縁部文様帯を区画し、隆帯口縁に沿って幅の狭い竹管文が連続する。区画内は竹管の刺突が斜位に連続する。103も波状口縁と思われる。波頂部は欠損するが、頂部より隆帯が垂下、刻みを持つ横位の隆帯との接点は突起となる。隆帯による区画内は角押文を施す。横位の隆帯下は幅広の爪形文を施す。104は平縁で隆帯による楕円杵を構成する。楕円接合部は「Y」字状。2列の結節沈線が口縁、隆帯に沿う。105は波状口縁、隆帯による楕円杵。杵内は2列の結節沈線、楕円接合部は「X」字状を呈す。106・107は同一個体であろう。平縁で隆帯による楕円杵を構成する。口縁、隆帯に沿って刻みを施す。杵内は4本単位の浅い沈線が杵に沿う。楕円接合部「X」字状。108～112はゆるい波状口縁を呈し、隆帯による楕円杵を構成し、杵内を結節沈線あるいは角押文で沿わせる。113はやはり平縁で隆帯による楕円杵を構成する。114は楕円杵の接点部は盛りあがり刻みを施す。杵内は1条の結節沈線が沿い、斜位に2条の沈線を施す。115は平縁、隆帯による杵状文、杵内は隆帯に沿うものと、斜位の結節沈線を施す。116・117は口唇部に刻みを施し、斜位の結節沈線を施す。118は口唇部著しく外反する。口唇下に2条の角押文と斜位の結節沈線を施す。119は楕円状の突起を持つ平縁。隆帯による楕円杵を構成し突起内・杵内は結節沈線を施す。120～123は同一個体であろう。平縁で口唇部および頸部の隆帯に刻みを持つ口唇下に1条の結節沈線を横走させ、隆帯にはさまれた間を結節沈線によるU字状ないしは波状のモチーフを描くのであろう。124は平縁。口唇下と頸部に断面三角形の隆帯を付し、角押文が沿う。125は平縁か。口唇部に2千以上の刻み。口唇下に2条、頸部上に小波状を描く1条の結節沈線を施す。126は隆帯による楕円杵、口唇部上に結節沈線。隆帯に沿い1条の角押文を杵内に沿わせ、山形の結節沈線を施す。127は平縁。結節沈線で楕円を描くのであろう。口縁下に1条の結節沈線を横走させる。128は突起部を欠損する波状口縁の深鉢。胴部輪積みに上り幅広の爪形文を施す。129は胴部破片・結節沈線で楕円を描す。幅広のヒゲ状の刻みを施す。120～123の胴部破片か。130は胴部破片、細隆帯を付し、幅広の爪形文を施す。131は胴部破片。細隆帯で弧を描き、3条の沈線で円環状のモチーフを描出する。132は胴部破片。隆帯を「Y」字状に付し、隆帯に沿って結節沈線を施す。133は胴部破片、隆帯と三本の沈線を施す。134～136は口唇部に隆線を持つ。135の隆線上には連続竹管を施す。137～138は口縁下につまみ状突起を付す。139の突起上には小三叉文を施す。141・142は波状口縁で、口縁に沿って結節沈線を施す。口縁下に結節沈線で小波状のモチーフが描かれるのであろう。143は胴部破片。細隆帯を横位に付し、下位に結節沈線、上位に沈線による小波状のモチーフが施される。144～147は口縁部上端に平坦面を持ち、口唇部外面にまばらな刻みを施す。浅鉢の口縁片と思われる。148は波状口縁。波頭部に突起を持ち、3～4条の沈線を施す。149は波状口縁に沿って1条の結節沈線を施す。150はゆるい波状口縁、弧を描く剥落した隆帯に2列の結節沈線が両端に沿う。151もゆるい波状縁、1条の結節沈線が口縁に沿う。152はゆるい波状縁。口唇部に竹管の連続刺突、口唇下は同一工具の押し引きによる結節沈線。153～156はゆるい波状縁で無文の土器。157は平縁。頸部でゆるく屈曲する。口唇上に連続竹管文、口縁部に2列の結節沈線が平行する。薄手の浅鉢か。158は大型の波状縁の突出部。無文。159～173はゆるい波状縁。口唇部に平坦面を持つ。無文で、器肉は厚い。164～168は無文の浅鉢。169は平縁、口唇部に狭い平坦面を持つ。170はゆるい波状縁、口唇部に平坦面を持つ。169・170とも無文。171は平縁か。口唇部に浅い刻みを施す。刻みを持つ隆帯を横走させる。口縁と隆帯の間には幅広の竹管文と幅狭の竹管文を平行する。横走する竹管文にはさまれて、幅狭の竹管文で「U」字状の意匠文を施す。172は胴部破片。連続竹管文で2重の円環状もモチーフを施す。以下3条の竹管文のうち上2本に縦の押引を交互に施し小波状文を描き出す。縦方向の連続刺突文が以下に続き横長の楕円杵状文が重走するのであろう。173は胴部破片、刻みを持つ隆帯が交叉する。



第251図 B区出土土器（5）



第252図 B区出土土器（6）

隆帯で平行四辺形の区画を意図したものであろう。区画内は結節沈線で充填させる。174は平鉢、隆帯上は連続刺突文、隆帯間は連続刺突文と結節沈線を施す。175・176は底部破片である。175は浅鉢か。

第253・254図は完形土器および複元個体を図示しまとめた。177・178・179・180は2類、181・182・183は3類。

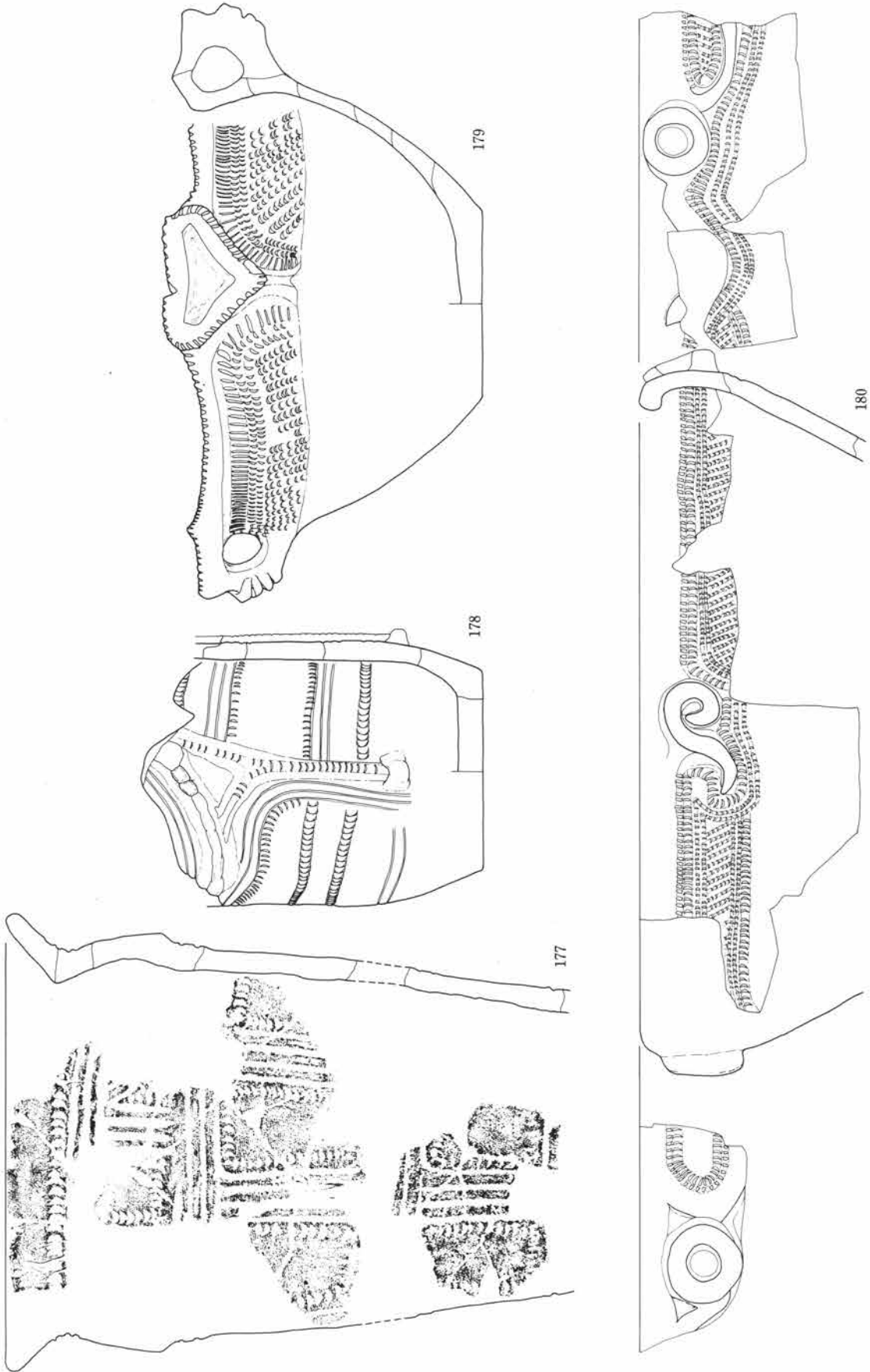
177は深鉢。口縁部は外傾し、頸部下半で屈曲する。3条の沈線を1組として口縁部—頸部—胴部下半を横位区画し、頸部文様帯・胴部文様帯とも4条の沈線で縦位区画する。各区画内は半截竹管文が沈線に沿って連続する。内面の器壁は荒れている。胎土に砂粒を含む。色調はにぶい橙色を呈す。

178は深鉢。胴部下半～底部のみ残存。弧を描く隆帯が胴部上半に伸び、下半は垂下する隆帯によって4単位(A + A + a + a')に区画される。区画内は沈線と半截竹管が施される。垂下する隆帯の最下端はつまみ状の瘤となる。胎土に砂粒、色調はにぶい橙色。

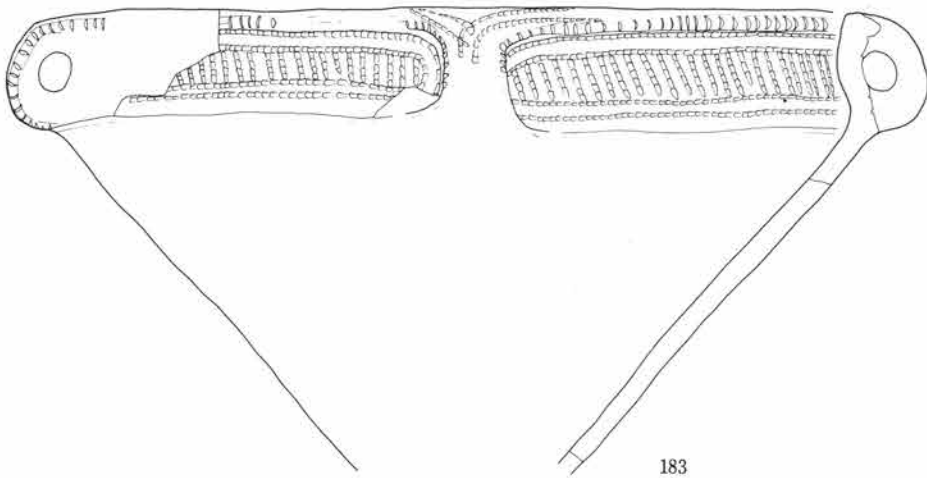
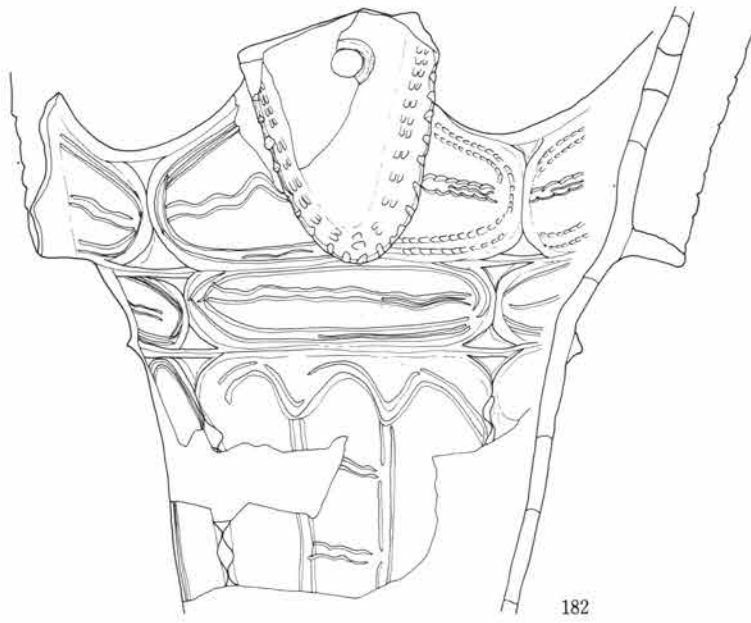
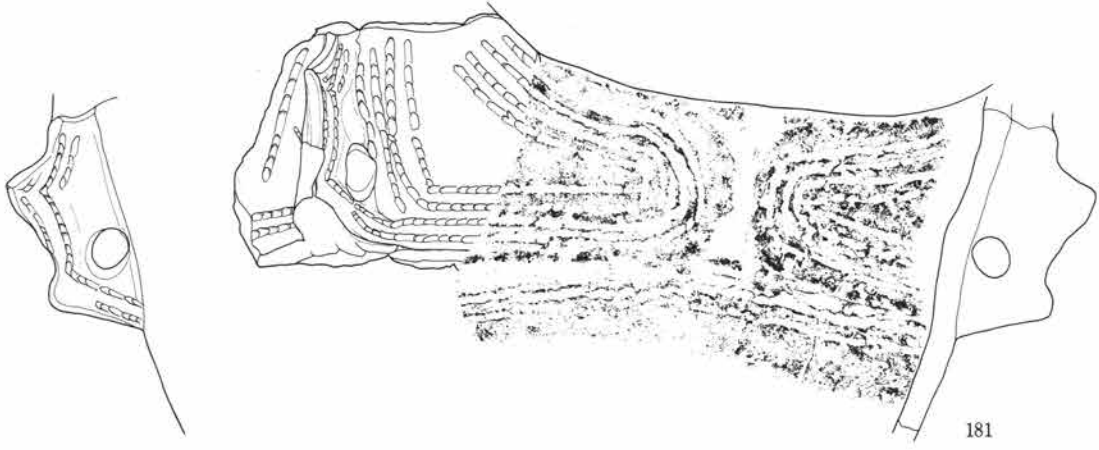
179は浅鉢。口縁～胴部の $\frac{1}{4}$ を欠損する。ハート形の突起と上面に三角形の平坦面を築く把手を持つ。おそらく把手・突起とも各2箇配し4単位を構成したと思われる。口唇部は刻みを施し、口縁から頸部の屈曲にかけて幅広の半截竹管と幅狭い半截竹管文の2種で充填する。胴部および内面は磨いている。胎土に少量の長石・石英。色調はにぶい褐色を呈す。

180は浅鉢。胴下半および口縁部 $\frac{1}{3}$ 欠損。口唇部は内彎する。口縁一部に赤色処理の痕跡あり。円環状の突起と「∞」字状の突状を2箇1単位として2単位配したのであろうか。突起間は幅広の半截竹管文と結節沈線で充填される。突起・口縁部はていねいに磨く。胎土に少量の砂粒。色調はにぶい黄褐色。

181は深鉢。口縁部の $\frac{1}{2}$ のみ残存。大型の扇状か山形の突起および口縁下にやや雑な作りの把手を持つ。口



第253図 B区出土土器（7）



0 10cm

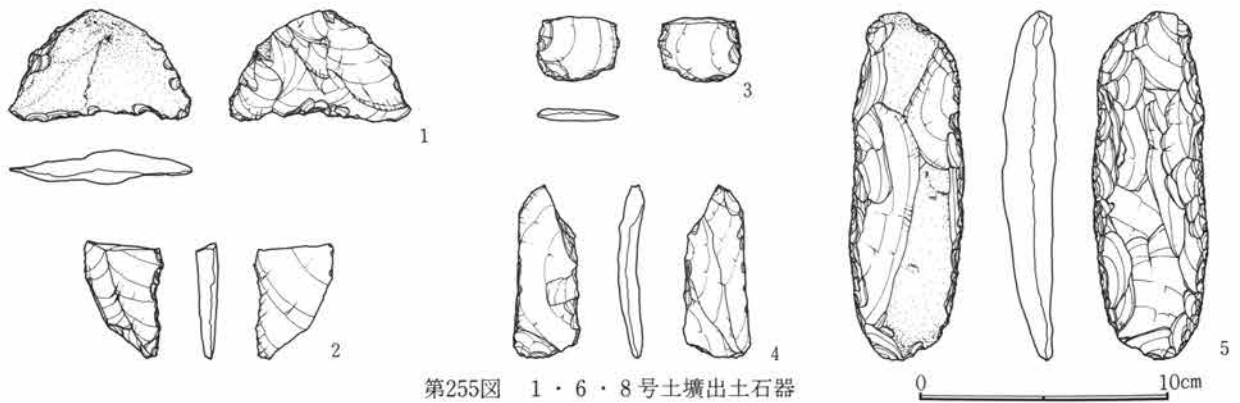
第254図 B区出土土器（8）

縁部文様帯は隆帯で区画され、2本1組の結節沈線を4本施し、隆帯・把手・突起に沿わせる。胎土は石英・雲母末などを多量に含み、雑な感をうける。色調はにぶい褐色を呈す。

182は深鉢。胴部下半、把手の1部を欠損、隆帯で枠どられた把手を持つ。「U」字状に垂下する把手の内側には並列する刺突文が施される。口縁部・頸部と胴部は断面三角形の細隆帯で横位区画する。口縁部文様帯は、細隆帯による区画をなし、2本1組の沈線と結節沈線が隆帯に沿う。頸部文様帯は隆帯による楕円枠を構成する。区画内および楕円枠内は沈線による波状文を施す。胴部は隆帯が「Y」字状に垂下し、4単位を構成する。単位内は2本1組の沈線が波状文をなし、波の下端から2本の沈線が垂下し、それが隆帯に沿うように「Y」字の効果を出している。胎土は少量の長石・雲母末。色調はにぶい橙色。

183は浅鉢。口縁～体部 $\frac{1}{2}$ および $\frac{1}{2}$ 底部欠損、小型の把手が付く。おそらく4単位であろう。口唇部から把手にかけて結節沈線が並列し、また口唇部および把手側縁には刻みを施す。口唇部文様帯としては2本1組の結節沈線が口唇下と頸部に横走し、把手内で接し長楕円枠を区画する。枠内は結節沈線が施される。胎土は雲母末・長石。色調は暗い褐色を呈す。

(山口)



第255図 1・6・8号土壌出土石器

土壌出土石器（第255図）

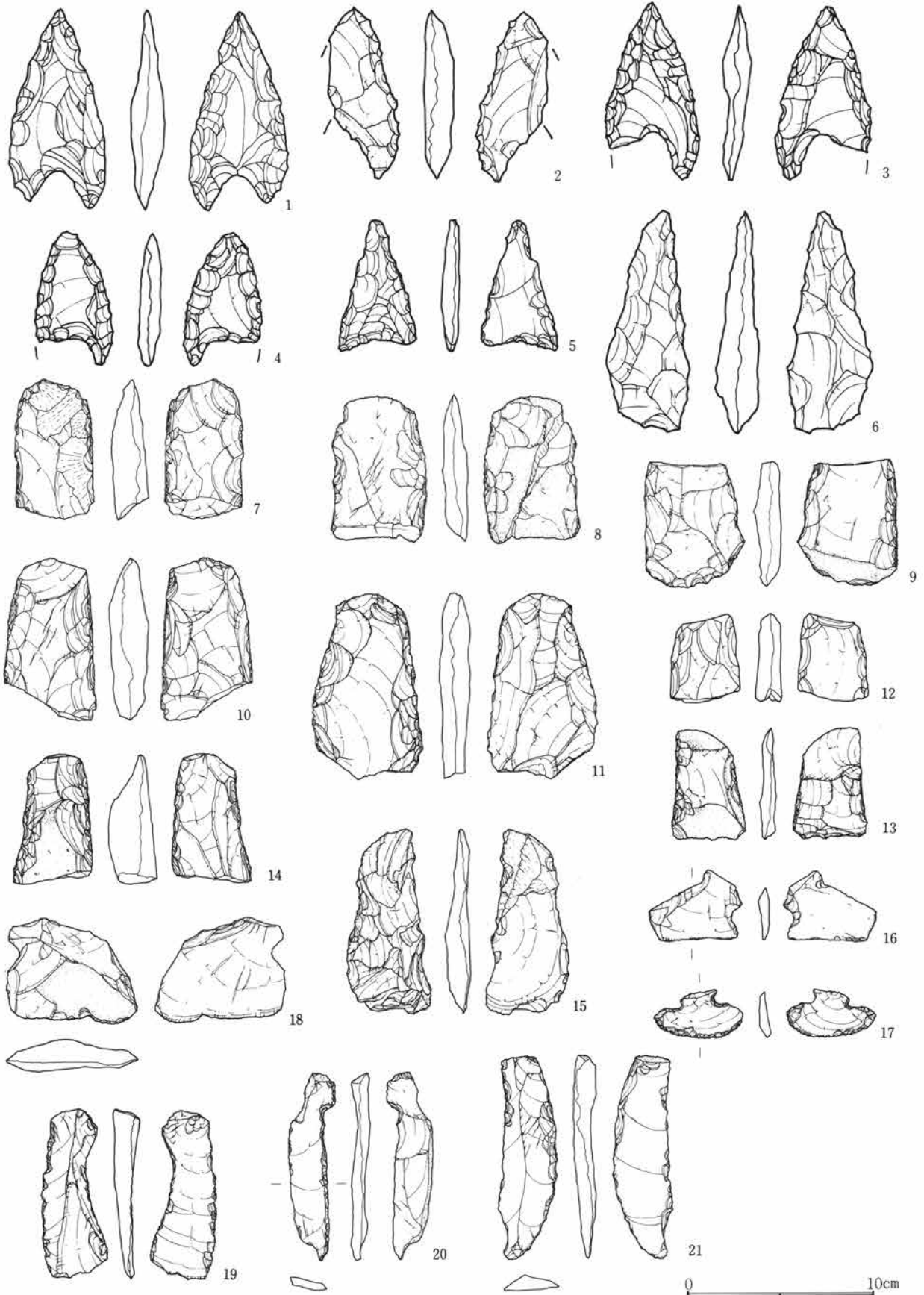
1・2は1号土壌出土のスクレイパーである。1は礫面を残した横型剥片の下辺に簡単な刃を作り出している。2はやや縦長の剥片の一辺に片面からの剥離による刃部を作る。3は6号土壌出土のスクレイパーである。薄い剥片の両辺に刃を持つ。4・5は8号土壌出土。4はやや小型の打製石斧である。やや反った剥片を用いており、側縁部に若干の調整を加えている。5は縦長の打製石斧である。片面に礫面を持ち、基部・刃撃はやや丸みを持つ、側縁に歯潰しを行なっている。

表27 土壌出土石器観察表

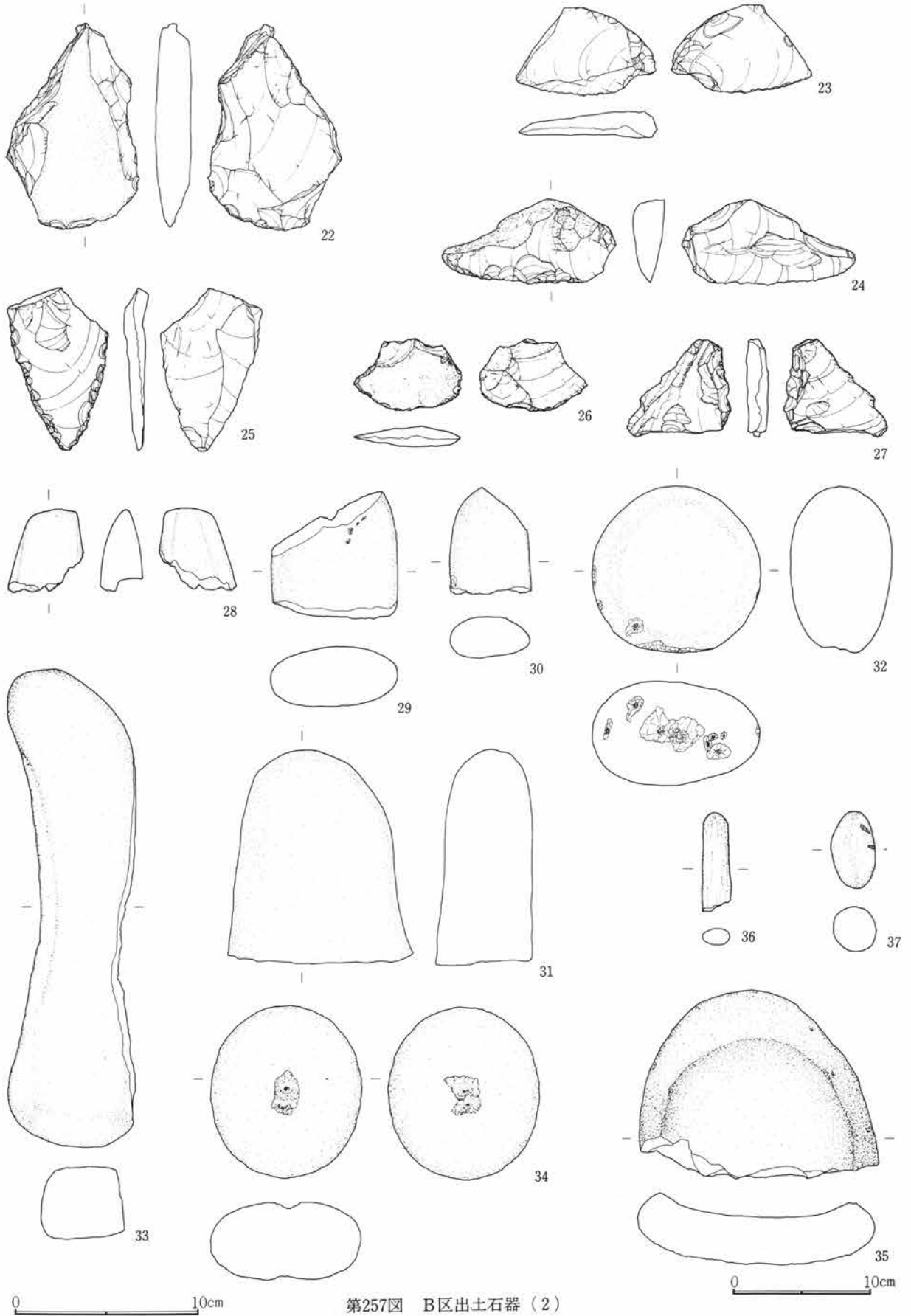
番号	出土位置	種類	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	1号土壌	スクレイパー	II-A	7.3	4.4	1.4	32.7	黒色頁岩	
2	1号土壌	スクレイパー	III	4.6	3.2	0.9	11.2	黒色安山岩	
3	6号土壌	スクレイパー	I-A	2.6	3.3	0.5	5.8	黒色頁岩	
4	8号土壌	打製石斧	I-A	6.9	2.7	0.9	17.4	黒色頁岩	
5	8号土壌	打製石斧	I-A	13.8	4.6	2.1	138.0	黒色頁岩	

B区グリッド出土石器（第256・257図）

B区出土の石器の総点数37点であった。そのほとんどが調査を北寄りの部分にて出土したものがあり、時期の帰属は不明である。種類の内訳は、石鏃6点、打製石斧9点、石匙5点、スクレイパー7点、磨製石斧1点、



第256図 B区出土石器（1）



第257図 B区出土石器（2）

敲石4点、磨石1点、凹石1点、石皿1点、不明2点である。

1・2・3・4はやや大きめの抉りを持つ石鏃である。側縁部分わずかに膨みを持つ、いわゆる鋏形鏃に近い。5は二等辺三角形を呈し、抉りはごく僅かである。6は石槍の先端部分の可能性がある。7・8・10は短冊形打製石斧の刃部欠損品である。何れも側縁部は歯潰しによる調整が行われている。9は打製石斧の基部欠損品である。刃部の一面に礫面が残る。11は撥型の打製石斧である。12は打製石斧。刃部を欠いている。かなり磨滅が見られる。13は小型の打製石斧である。刃部がやや広がる。基部・刃部に礫面を残している。14は打製石斧であるが、かなり厚みを持つ。刃部を欠損する。15は打製石斧であるが、やや不定形で、雑な作りである。16・17・18は横型の石匙である。16は台形の刃部とやや大きめのつまみ部が端にずれて付く。刃は雑な作りである。17はカーブを持った刃部の中央部分につまみが付く。18は不定形な一次剥片の打点部に簡単なつまみ部を持つ。19・20は縦形の石匙である。19は縦長剥片の両側縁に刃を持つ。20は片方の側縁に刃を持つ。反対側の部分には礫面を残している。つまみ部にも礫面を残す。21は縦長のスクレイパーである。弧状の縦長剥片を用いている。22は荒割りされた一次剥片を用いたスクレイパーである。23・24は横型のスクレイパーである。下縁に簡単な刃部を持つ。25は尖頭状の剥片の両側縁部に片面剥離による刃部を作り出している。26は片面に礫面を残した薄片を利用した下縁に弧状の刃部を持つ。27はやや厚手の三角形を呈

表28 B区出土石器観察表

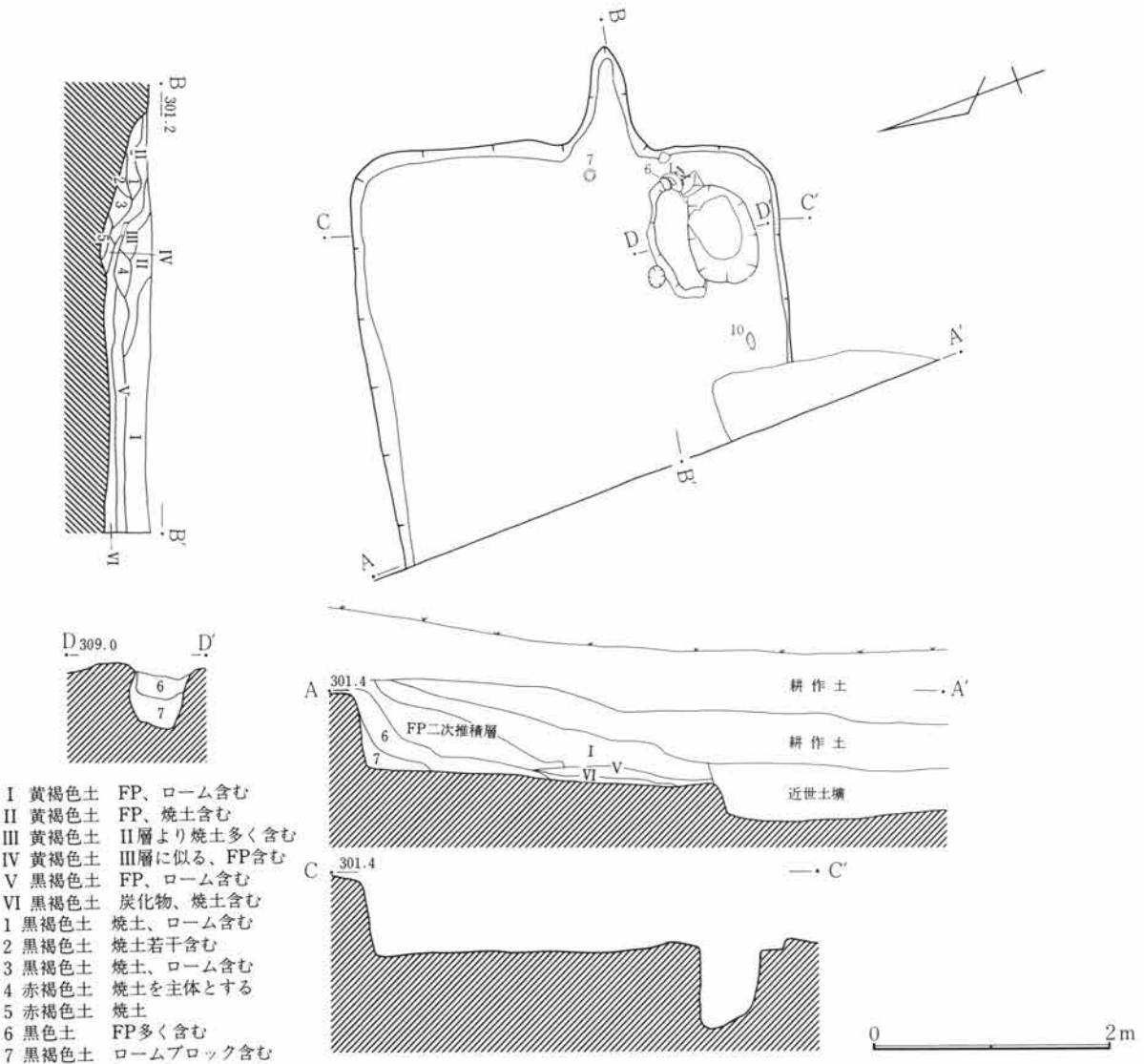
番号	グリッド	種類	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	269C14	石 鏃	I-A	3.5	1.8	0.6	3.1	黒色安山岩	
2		石 鏃	I-A	3.0	1.2	0.5	1.48	黒色頁岩	
3	270C15	石 鏃	I-A	3.1	1.7	0.5	1.7	黒色頁岩	
4	268C15	石 鏃	I-B	2.4	1.4	0.4	1.4	黒色頁岩	
5	268C14	石 鏃	II-B	2.3	1.4	0.3	0.8	黒色頁岩	
6	268C15	石 鏃	—	3.8	1.5	0.8	3.48	黒色安山岩	
7		打製石斧	I-A	7.5	4.3	1.9	71.9	黒色頁岩	
8	268C14	打製石斧	I-A	7.8	5.1	1.4	69.1	黒色頁岩	
9		打製石斧	I-A	6.7	5.4	1.5	59.0	黒色頁岩	
10		打製石斧	I-A	8.6	5.0	2.1	105.2	黒色頁岩	
11		打製石斧	II-A	9.9	6.0	1.7	109.0	黒色頁岩	
12		打製石斧	I-A	4.7	3.7	1.3	29.0	黒色頁岩	
13	268C15	打製石斧	II-A	5.9	4.0	0.9	21.5	黒色頁岩	
14	268C14	打製石斧	II-A	6.9	4.3	2.5	75.6	黒色安山岩	
15	269C15	打製石斧	II-B	9.8	4.6	1.4	53.9	黒色頁岩	
16	268C14	石 匙	III	5.0	3.8	0.9	13.1	黒色頁岩	
17	268C15	石 匙	II-B	4.7	2.6	0.6	6.2	黒色頁岩	
18		石 匙	III	7.0	5.6	1.7	51.5	黒色頁岩	
19	269C13	打製石斧	—	9.1	3.6	1.5	30.0	黒色頁岩	
20		石 匙	I-A	10.0	2.5	1.0	19.9	黒色頁岩	
21		石 匙	—	10.8	3.3	1.2	37.9	黒色頁岩	
22		打製石斧	—	11.1	7.3	2.1	177.5	黒色頁岩	
23	269C14	スクレイパー	II-B	7.6	4.8	1.5	46.3	黒色頁岩	
24		スクレイパー	III	9.4	4.5	1.7	67.4	黒色頁岩	
25		スクレイパー	I	8.8	5.5	1.3	43.6	黒色頁岩	
26	268C15	スクレイパー	II-B	5.8	3.8	1.1	21.1	黒色頁岩	
27	269C13	スクレイパー	—	5.3	5.7	1.2	31.9	黒色安山岩	
28		磨製石斧	—	4.5	4.1	2.3	50.0	珪質頁岩	
29		磨 石	III	6.8	6.9	3.2	230.2	ひん岩	
30		磨 石	III	5.8	4.4	2.2	87.4	黒色頁岩	
31	1住	敲 石	III	11.6	10.0	5.6	960.0	閃緑岩	
32		磨 石	I-A	9.0	9.1	5.6	610.3	石英斑岩	
33		敲 石	—	25.7	7.0	4.65	1258.5	輝緑岩	
34		凹 石	I-B	9.3	8.2	4.3	457.4	輝石安山岩	
35		石 皿	I	13.3	17.4	5.2	1361.2	輝石安山岩	
36	269C15	礫 器	—	5.4	1.7	0.9	12.2	黒色片岩	
37	268C15	礫 器	—	4.2	2.4	2.4	27.2	不 明	

す。石片の一辺に粗い刃部を持つ。28は磨製石斧の基部である。表面非常に良く研磨されている。珪質頁岩製である。29は磨石の欠損品と考えられるが、敲石としても再利用している。30はやや小さめの川原石を利用した敲石である。31はやや偏平な川原石を利用したスタンプ状の敲石である。32は円礫を用いた磨石である。両辺部に敲打による使用痕が見られる。33は細長い礫を用いた台石である。表面平滑であり、両端に打痕が見られる。34は凹石である。両面中央部に凹みを持ち、縁辺に使用痕が見られる。35は石皿である。約半分を欠損している。36・37は使途不明石器である。36は棒状の礫で一部欠損している。黒色頁岩製。37は卵形を呈した礫で、表面に磨痕、擦痕が見られる。軟らかい石であるが石材は不明である。（小野）

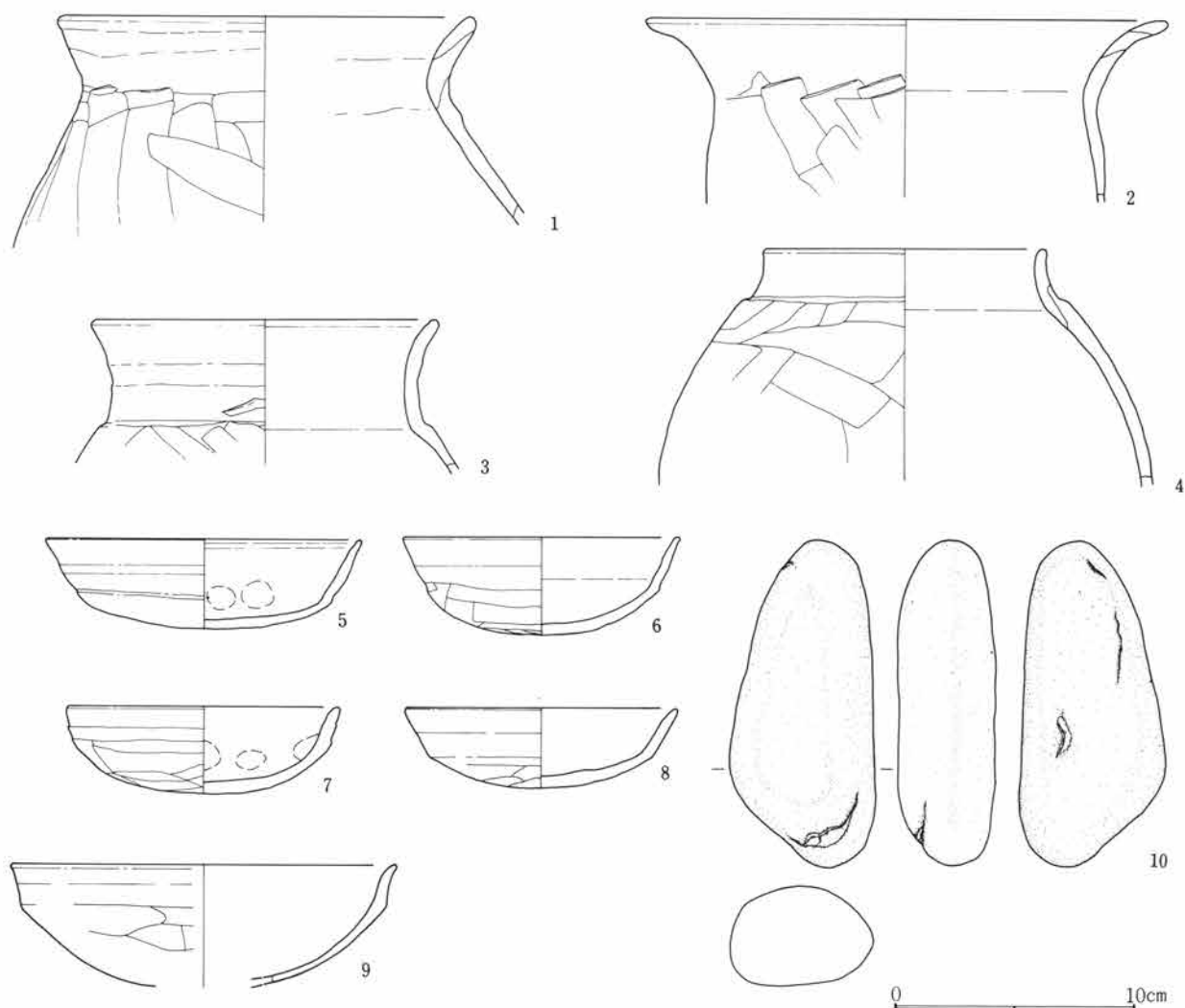
第 6 節 古墳時代の遺構と遺物

1号住居址（第258図）

村道横野1号線から北側の台地上に取り付けられることになった道路の拡幅部分の、174~176-B48~A000に検出された。西側4/5程は調査区外のため調査できなかった。形状はやや東西に長い隅丸長方形を呈し、規模は、3.5×4.0mである。壁の残存状況は、北側が60cm程あるのに対して、南側は、削平がひどく10cm程



第258図 1号住居址



第259図 1号住居址出土土器・石器

であった。各壁面は、ほぼ、垂直に掘られており、壁周溝は見られない。かまどは、東壁中央やや南寄りに設けられており、焚口の掘り方幅70cm、長さ100cmであった。崩落しており、炭化物・焼土が検出された。

南東コーナー部に85×55cm、深さ65cmの貯蔵穴があり、北側部分に接し高さ7～8cm幅30cm程のロームを踏み固めた土手状遺構が見られた。

遺物は、かまど前面に集中して出土しており、床面は、比較的平らで良く踏み固められていた。

覆土中に北壁よりFPの二次堆積層の流れ込みが観察され、また覆土・貯蔵穴上層には、FPが多量に含まれていることからFP降下後、余り時を経ない時点で構築されたものと考えられる。（小野）

表29 1号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	甕	口径 17.5	やや直線的な肩部からくの字に曲がる口縁となる。口縁端部は丸みを持つ。	外面 口縁部横撫で、胴部縦篋削り下→上へ 内面 口縁部胴部横撫で。口縁部接合痕残る。	1～2mmの砂粒含む	良	にぶい橙色	口縁および胴上半部残存
2	甕	口径 21.5	ほとんどふくらみを持たない胴部から、大きく外反する口縁が付く。	外面 横撫で胴部縦篋削り 内面 横撫で	1mm程の砂粒多く含む	良	にぶい黄橙色	口縁から肩部にかけて1/3残存

第VI章 諏訪西遺跡（工用道路）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	甕	口径 14.5	口縁部直立ぎみに立ち上り、口唇部やや外反する。	外面 肩部鋭削り、口縁部強い横撫でにより段を持つ。 内面 横撫で	微砂粒多く含む	良	にぶい橙色	口縁部1/4残存
4	短頸壺	口径(11.8)	丸みを持った肩部に短く直に立つ口縁部が付く。頸部に段を有す。	外面 胴部鋭削り、左→右口縁部横撫で 内面 横撫で	1-2mm程の石英粒目立つ	良	外面にぶい黄橙色 内面黒色	口縁部および肩部1/5残存
5	坏	口径 13.1 器高 3.7	底部丸底を呈し口縁部外反して立ち上がる。口唇内面に浅い沈線を持つ	外面 体部鋭削り、口縁部横撫で 内面 撫で	微砂粒若干含む	良	淡い褐色	約1/2残存底部 外面荒れている
6	坏	口径 11.6 器高 4.1	丸底を呈し口縁はほぼ直に外反する、不明瞭な稜を持つ。	外面 体部不定方向鋭削り 内面 口縁部横撫で	1mm程の砂粒僅かに含む	良	橙色	3/4残存
7	坏	口径 11.3 器高 3.6	ゆるい丸底の体部に、やや外反する口縁を持つ。弱い稜を2段有す。	外面 体部鋭削り左→右 内面 口縁部横撫で、内面に指おさえ痕残す	微砂粒僅かに含む	良	橙褐色	底部に黒斑有り 完形
8	坏	口径 11.3 器高 3.3	ゆるい丸底を呈し、弱い稜を持つ。口縁部は外反する。	外面 体部鋭削り左→右口縁部横撫で 内面 横撫で	砂粒僅かに含む	良	橙色	1/10残存
9	坏	口径 16.1	丸みを持つ体部から口縁部はほぼ直に立ち、口唇部は僅かに外反する。	外面 体部鋭削り口縁部横撫で 内面 横撫で	砂粒僅かに含む	良	黄橙色	1/8残存

番号	出土位置	種類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
10	南壁際	敲石	13.5	6.0	4.8	510.0	黒色頁岩	両端・側面の一部に弱い敲打痕有り

第 VII 章 まとめ

第 1 節 先土器時代

1 土層について

本遺跡群の位置する赤城山西麓においては、従来浅間山を給源とする浅間一板鼻黄色軽石 (As-YP) 及び浅間一板鼻褐色軽石 (As-BP) の純堆積を確認することができるとされてきた。しかし、同地域での発掘調査が進められて行く中で、As-BPについては、容易に認められるもののAs-YPは、極一部の遺跡で確認することができたのみにとどまっており、むしろ、As-YPとAs-BPの中間に介在する浅間一白糸軽石 (As-SP) を20~30cmの厚さを持つ良好な堆積状態で認めることができる。これに近い状況としては、赤城山西南麓富士見村 (龍口遺跡) においても同様である。As-SPについて新井 (1984) は、『色調は、両者類似し、単独に産出する場合、識別が難しいことがある。(中略) 給源から東方に80km以上、南北幅は未詳だがかなり広い可能性がある。』として、下位指標テフラとの層位からその時代を約1.5万年前と推定している。

中畦・諏訪西の両遺跡では、As-YPの純堆積がないためこのAs-SPが単独に堆積しているため調査頭初As-YPと誤認していた面があったが、その後As-SPであると位置づけている。

また、前述した事例から推察すると、赤城山西麓以東 (南麓を含む) でのAs-YPの純堆積層の確認は、かなり難しく、As-SPの堆積の確認を行ない得る地域の方が多いと思われる。(谷藤)

2 中畦遺跡

本遺跡での先土器時代の遺物は、第VII b層中に包含された単一時期の石器製作に伴う石器群としてとらえることができよう。

その時期としては、出土層位からAs-SP (第VIII層) 降下以後と考えられるが、As-YPとの関係は明確ではない。また出土遺物からは、ナイフ型石器をみるとそれを産出する時期でも最終末段階のものと考えられ、南関東 (特に武蔵野台地) と比較するならば第IV上層に、ないしは第III層でも下位ぐらいに出土する遺物に対比されたい。

このナイフ型石器と同時期ぐらいに考えられる遺物は、県内においては極めて少ない。層位的な面から本遺跡と同層より出土している遺跡としては、本遺跡の北側約700m程の尾根状台地に位置する見立溜井遺跡が上げられる。先に述べたごとく、赤城山西麓域における土層は、ほとんど同様の堆積を呈しており、この見立溜井遺跡も例外ではない。遺物はAs-SPの上層より出土し、黒曜石を主材とした槍先形尖頭器を伴う石器集中部が数ヶ所確認されている。

本遺跡と見立溜井遺跡を比較した場合、遺物の出土層位は同じではあるが、出土遺物の内容にナイフ形石器と槍先形尖頭器という差がある。同一の器種による比較がなし得ない以上、単的に両遺跡の遺物が同時期のものであると断定するには問題があろう。しかし、同一層位出土という面をとらえるならば、近接した時間帯の中にあると考えられることはできる。いずれにしろ今後の検討が要される。(谷藤)

3 諏訪西遺跡

岩宿遺跡 (S. 24) 以来今日に至るまで、全国的に先土器時代の調査・研究が各地・各研究者によって押し進められている中で、群馬県内においても近年の開発等に伴う新資料の急増により、再度概期の研究が

県内研究者の間で討論されているのが現状である。特に群馬県の場合には、浅間山、榛名山、赤城山の三山を給源とする火山灰及び軽石層（鍵層）の良好な堆積状況を呈する地域が多いことから、この鍵層となる軽石層の降下年代を明確にすることで、サンドイッチ状に堆積した各土層の年代（時間幅）を容易に割り出すことができることになる。つまり、各土層から出土する遺物、あるいは各文化層の年代をある程度までおさえることが可能となり得る。このことも、群馬県の先土器時代研究での注目すべき要因の一つである。

さて本遺跡における先土器時代は、先の項で述べたごとく出土した遺物、状況から重複した文化層からなるものでないことがうかがえる。また、出土した遺物が同時期帯、あるいは近接した時間帯の中で所産されたもの、所謂単一時期のものであるか否かを考える上で、また編年的な位置づけを考える上からも、次の3点について検討を加えてみたい。

- ① 遺物の出土状況及び出土層位、接合資料分布
- ② 出土石器の検討
- ③ 剥片剥離技術

以下、上記3点の項目毎に検討し、本遺跡での先土器時代のまとめとしたい。

遺物の出土状況及び出土層位、接合資料分布

本遺跡で検出された第1～7ブロックまでの出土遺物は、垂直分布においてそのほとんどが半レンズ状を呈し、遺物の出土安定面（分布が最大に広がる面）としては、やはりそのほとんどが基本土層第XVII層（暗色帯）に位置する。さらにこの暗色帯中にあっても包含される遺物は、この層の比較的下位に位置してることが調査所見としていえよう。つまり、周辺の他遺跡での出土状況を考えるならば、暗色帯の中での文化層が複数となる可能性が十分に考えられる。

また、接合分布をみるとブロック間で接合した第2・7ブロック、第3・4ブロックについては、同一時期の所産によるものとして考えられる。さらに他ブロックにおいても単一的な傾向にあるという点から、やはり同一時期の可能性のあるものとして十分考えられる。

出土石器の検討

本遺跡で出土した石器群を代表するものとして、基部加工のナイフ形石器(1)があげられる。素材の縦長剥片の形状をほとんど変えず、基部と先端のみに加工を有し、比較的大型である点は、ナイフ形石器の中でも祖源的なものといえよう。

スクレイパーについては、素材となる剥片の表面から裏面へと急角度で荒い加工を施す類（7・4）が注目されよう。また、二次加工痕を有する石器(14)としたものを考えあわせれば、南関東の高井戸東遺跡（小田、他）において指摘された『へら状石器』との関連をも想起されるが、この時期にこうした加工を有する石器のあることを指摘するにとどめたい。

彫器(2)についても、素材加工のあり方などを考えると、高井戸東遺跡第IX上層文化にその類例がみとめられよう。

さらにこれら石器群の中でもう1つ特長的なものとして、大型の敲石の一群であろう、平均約1600g、もっとも重い例(104)においては3440gというもので、全国的にもあまり例を見ないであろう。これは、時期的な問題とを含むと思われるが、石器製作工程や、用いられる石材を考えるにあたって今後の検討が必要とされる。

剥片については、先にA～C類の3分類を行なったが、この内A類の縦長剥片とされるものは、全体出土量の中でも少なく、また縦長剥片使用の石器も極少である。このA類に比べ、B、C類に属する剥片が遺物の主体を成している。特に黒色安山岩によるものは、B、C類に属されるものが多い。

このように、個々の石器のあり方、その組成から見ると、先土器時代の中でも比較的古い時期様相を示すものが多くみうけられる。また、これらの石器から本遺跡と同時期と考えられる遺跡は、群馬県においてもまた全国的にも少ないようであるが、南関東と対比させた場合武蔵野I b期の頃との対応関係が考えられそうである。

本遺跡における接合例の観察では、特にその剥片剥離行程を示す例(接合No.1～8、11～13、16～18、20、21)が最も多く、本遺跡の時期における剥片剥離技術を語るものであろう。これらの剥片剥離行程を示す例は、先に述べた剥片A類を主体とするもの(接合No.1、4、7、13、21)と剥片C類を主体とするもの(接合No.3、16、17、20)が、その代表的な例と言えそうである。ところで、剥片B類の中で剥片A類と同様な剥片剥離行程を示すものを指摘したが、接合例中において、剥片A類を含まないものでも、単設あるいは両設打面の石核から剥離されたと考えられるもの(接合No.2、6、12)があり、剥片A類とB類の接合例(接合No.8)も存在する。これらから考えても、剥片A類を剥離する行程に、B類の一部も含まれると考え、その行程を示す例が比較的多い。さて、この剥片剥離行程は、接合No.21に代表される様に、数度、一定の打面から剥片剥離を行ったのち、打面再生をせず、任意に打面を転移して行くものと考えられる。また頭部調整や打面調整などはあまり行なわれない。剥離された剥片は、全体的に縦長剥片であるが、剥片A類の代表的な例(接合No.20ならびに92)を、含むにもかかわらず、決して多いとは言えない。剥片A類の代表例は、こうした剥片剥離技術の中から剥離されているものと考えたい。

これは、当時の製作者が石器製作にあたり、縦長剥片の作出を意識している結果として産出されたものであろう。

剥片A類の代表例は、石刃と言われる縦長剥片と形状的に近いと考えられるが、その剥離行程を観察すると所謂「石刃」と称されるものではなく、むしろこうした縦長剥片を作出する剥片剥離技術的にも未熟なものであり、より古い様相を示しているものと考えたい。群馬県内において、AT降下以前に位置づけられる赤城山西麓の遺跡や、月夜野周辺の遺跡の石器群の中でも、最も古い一群として位置づけられるかもしれない。本遺跡の接合例は、接合No.20を除けば、用いている石材、接合する数とその状態は、決して良好とは思えないが、今後、この石器群に近いと考えられる勝保沢中山遺跡などの資料との対比が行なわれることによりこうした時期の剥片剥離技術も明確にされるであろう。(谷藤・小菅)

参考文献

・杉原荘介 他	「岩宿遺跡」明大文学部研究報告書考古学第1冊		1956 (昭31)
・小田静夫 他	「高井戸東遺跡I～V」	高井戸東遺跡調査会	1976～77 (昭51～52)
・杉原荘介 他	「武井遺跡」明大文学部研究報告書考古学第7冊		1977 (昭52)
・芹沢長介	「磯山遺跡」東北大学考古研究会考古学資料集第1		1977 (昭52)
・鈴木遺跡調査団	「鈴木遺跡I」	鈴木遺跡刊行会	1978 (昭53)
・ " "	「 " II」	"	1980 (昭55)
・ " "	「 " III」	"	1981 (昭56)
・芹沢長介	「向山遺跡」東北大学考古研究会考古学資料集第3		1980 (昭55)
・安孫子昭二 他	「多摩蘭坂遺跡」	恋ヶ窪遺跡調査会	1980 (昭55)
・関矢 晃	「榊形遺跡」	宮城村教育委員会	1981 (昭56)
・実川順一 他	「花沢東遺跡」	恋ヶ窪遺跡調査会	1984 (昭59)
・篠原 正 他	「大竹・小竹遺跡」	月夜野町遺跡調査会	1985 (昭60)

第2節 縄文時代

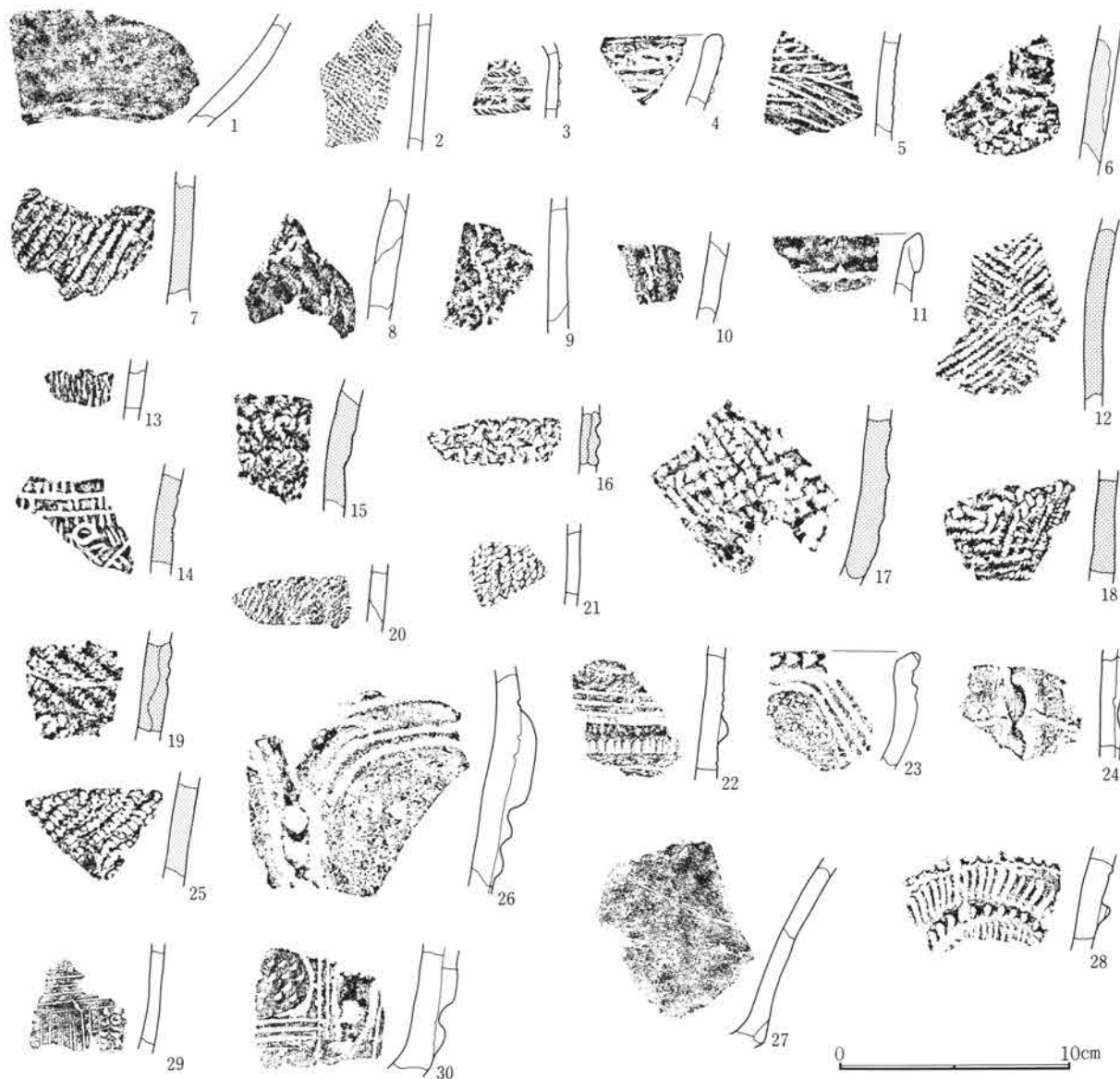
1 胎土分析

中畦・諏訪西遺跡より出土した土器について、遺跡別、時期別さらには分布域の違い等に分け、土器の胎土分析を試みた。分析の方法等については後に述べることとする。分析の主目的については、従来あまり行なわれていなかった縄文土器について、今後へ向けての資料蓄積を行ない、さらには分析方法の試行によってより有効な方法を検討して行くことであるが、分析結果の検討、理解の仕方には多くの課題があり、分析者との相互理解が要求されている。

群馬県内では従来、須恵器や土師器等の分析は度々行なわれて来ており、特に須恵器に関しては、分析結果の検討により、窯址推定へのアプローチとして有効な方法となりつつある。しかしながら縄文土器に関しては、ほとんど行なわれていなかったため、その有効性も判断できないのが現状である。

分析方法および測定条件

蛍光X線分析 分析用試料は各試料を $10\mu\text{m}$ 以下に粉碎し、5~10gを径4cmの円板に成型して使用した。



第260図 胎土分析資料

測定条件は次のとおりである。

蛍光X線分析装置 理学電機株式会社 KG-4型

X線管球 銀対陰極 50KV〔20mA〕

分光結晶 Fe、Sr、RbにはLiF (2d=4,028Å) Ca、K、Ti、Si、AlにはEDDT (2d=8,808Å)
MgにはADP (2d=10,648Å)

検出器 LiFを使用したときS・C EDDT、ADPを使用したときP・C

時定数 1

計数法 Fe、Ca、K、Ti、Sr、Rbはチャートにより、Si、Al、Mgは定時計数法によった。なおチャートは4°/minとした。

波高分析器 積分方式

測定線 FeKβ、CaKα、KKα、TiKα、SiKα、AlKα、MgKα、SrKα、RbKαの各1次線を使用した。

X線照射面積 20mmφ

標準試料 群馬県埋蔵文化財調査事業団から依頼を受けた土器5点(203・205・210・213・215)を化学分析し標準試料とした。

表30 胎土分析資料観察表

番号	遺跡名	出土位置	時期	文様構成	色調	胎土の特徴
1	中 畦	3号住	諸磯b	無文	にぶい橙色	
2	"	6号住	"	縄文RL	褐色	精製されている
3	"	5号住	"	浮線文	明赤褐色	"
4	"	グリッド	"	"	にぶい橙色	"
5	"	4号住	黒 浜	平行沈線文	にぶい褐色	砂粒目立つ
6	"	5号住	"	"	灰褐色	含繊維
7	"	"	"	"	橙色	"
8	"	30号土壇	五嶺ヶ台	結節縄文	にぶい赤褐色	微石粒若干含む
9	"	グリッド	"	"	にぶい橙色	2～3mmの石英粒多く含む
10	"	"	"	"	明赤褐色	赤色粒子含む
11	"	7号住	"	折り返し口縁	暗赤褐色	"
12	"	グリッド	黒 浜	羽状縄文	橙色	含繊維
13	諏訪西	"	燃糸文	"	にぶい赤褐色	"
14	"	"	関山I	沈線による文様、刻み、円形文	明黄褐色	含繊維
15	"	11号住	"	ループ文	明褐色	" 白色粒子含む
16	"	4号住	"	"	赤褐色	"
17	"	"	"	羽状縄文	橙色	"
18	"	"	"	ループ文	灰褐色	"
19	"	8号住	"	"	赤褐色	"
20	"	5号住	諸磯a	縄文LR	にぶい橙色	"
21	"	"	"	"	"	微石粒含む
22	"	グリッド	阿玉台	隆帯、半截竹管による沈線、刻み	橙色	"
23	"	"	"	連続刺突文、沈線文	灰褐色	金雲母多く含む
24	"	4号住	"	縦の波状隆帯、沈線文	にぶい褐色	砂粒多く含む
25	(工道路)	B区	黒 浜	縄文LR	にぶい黄褐色	含繊維
26	"	"	阿玉台	隆帯、連続刺突文	灰黄褐色	含雲母
27	"	"	"	無文	にぶい褐色	" 若干含む
28	"	"	勝 坂	隆帯上にキャタピラ文	にぶい褐色	"
29	"	"	"	縦横の沈線文	褐色	"
30	"	"	"	隆帯、沈縄文、刺突文	橙色	"

分析結果の検討

第260図1～5はほぼ同時期の所産と考えられる一群であり、原料も同一の場所から採った粘土で焼かれた

ものと推定したが、分析結果は、数値に大きなばらつきが見られた。このことは、推測の域は出ないが、1は浅鉢、3・4はキャリパー形の深鉢で胎土に精、粗の違いが見られることから用いられた粘土、混和材が異なっていた可能性を指摘できる。また4および5の胎土は肉眼観察によって近似した所見を得ている。

6と7は共に繊維土器であるが、胎土の観察では6に多く含まれる小石粒は、7にはほとんど見られない。8～11は、ほぼ同時期の所産で、かつその分有機が東関東、利根川下流域に求められるものであるが、9については、胎土中に含まれる石英粒が目立ち、8、10、11との違いはグラフ上にも表われている。

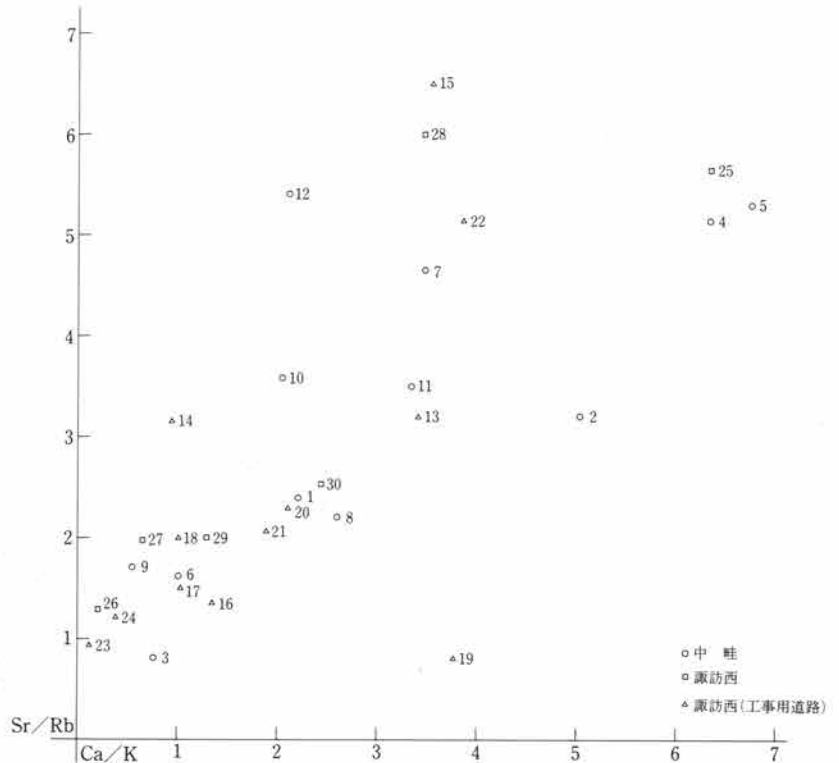
14～19は前期前半に位置付けられるものであり、胎土中に多くの繊維

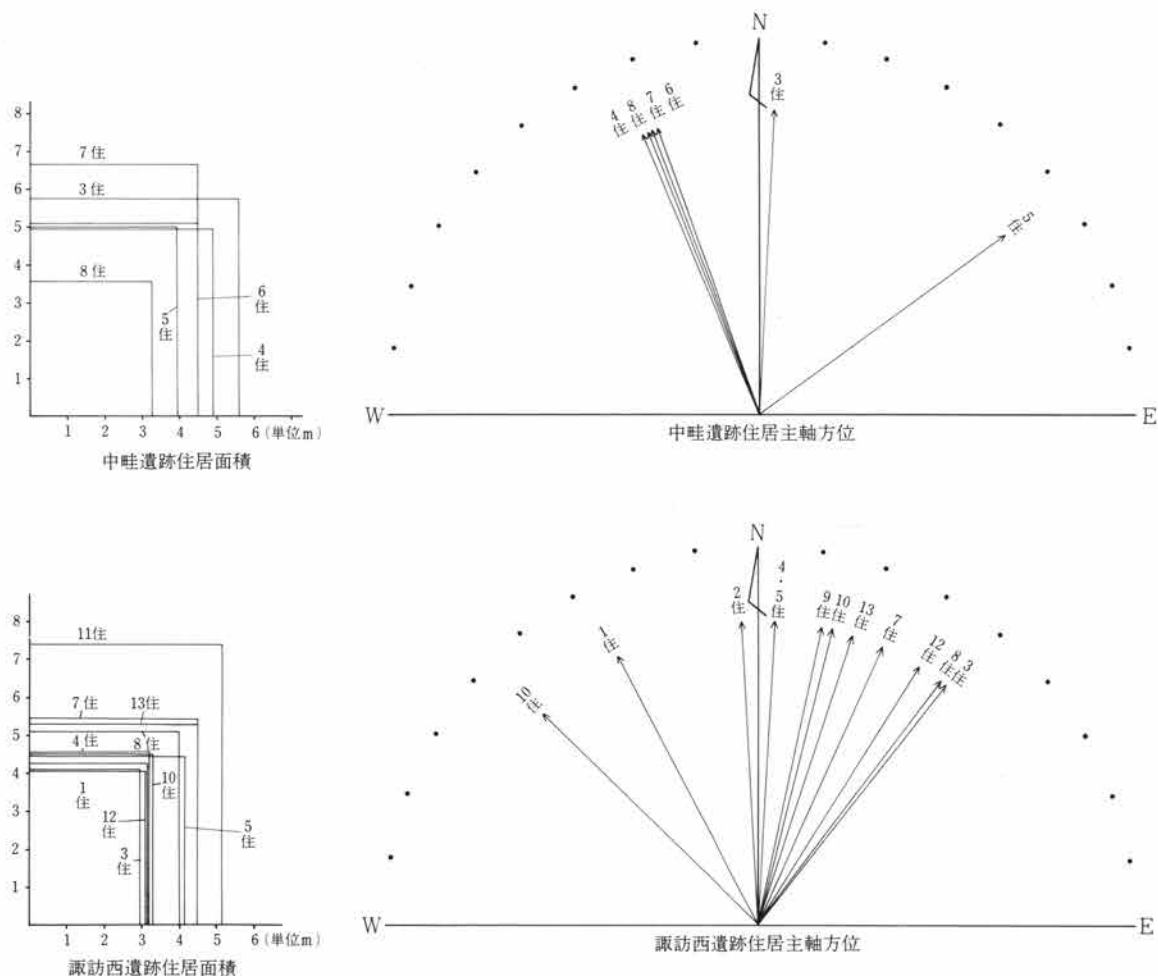
を含む。分析結果では少ない数値でまとまる一群として捉えられ、同一の所の粘土で作られた可能性を示すが、15、19についてはCa/Kの値が大ききひらきを示している。20・21・23～30は前期後半から中期前半に位置する一群で無繊維土器である。いずれも堅致な土器である。ここで興味あることは、20・21・23・24・26・27・29・30は両数値ともに少ない部分に分布が見られる。これに対して22・25・28は数値が大となっている。このことについては個々の土器に当たって見れば以下のようなことが言えよう。25については、縄文が施文されており他のものより時期的にはやや先行するものであり、数値的に近似する4・5とむしろ共伴すると考えられる。また22・28は、胎土をつぶさに観察すれば、同時期に見られる23・24・26・27・29・30に比して含まれる砂粒は小さく、特に他の土器中に見られる金雲母はほとんど見られない。さらに付け加えるならば型式的には22・28は勝坂式、他は阿玉台式に分類され得ることも傍証の一端にはなり得るだろう。このことは土器が搬入されたものかどうかは別として、材量として用いられた粘土が違っていたことと考えるのは想像にかたくない。

以上胎土分析結果と、土器片各々の胎土観察及び型式・分布域の違いとを合わせて述べたが、やや独断的なものとなったきらいはある。まだまだ縄文土器の分析方法、基準には問題があると思われ、今後さらに検討、資料の蓄積を進めるとともに、資料操作の方法を我々の側から検討して行く必要があるであろう。(小野)

2 中畦・諏訪西遺跡の住居址形態について

両遺跡において検出した縄文時代の住居址は総数18軒であった。本項ではこれらの住居址について、形態の変化を時期を追って若干述べることにする。





第262図 住居址面積・主軸方位

18軒の住居址はその出土遺物より次のような時間的序列が想定される。

諏訪西1・3・4・7・8・10・11・12・13号住居址→中畦7・5号住居址→諏訪西5・中畦6号住居址→中畦4・3号住居址→諏訪西9・2号住居址。これらは必ずしも連続的には辿れないが、住居址の構造について見れば各期における特徴を示していると言えよう。

各住居址の規模・形態は第262図に示すように、中畦遺跡では3・7号住居址がほぼ同等の面積を持つが、両者には時間的に差があり、このグラフでも明らかなように、長方形を基本としたものから方形を基本とするものに変化していることが窺われる。このことは諏訪西遺跡についても同様で（中期に比定される2・9号住居址は除いてある）諸磯期に比定される5号住居址は、たて、よこの比率が近くなってほぼ方形を呈している。

また諏訪西遺跡の住居址は、その大きさにより1・3・4・10・12号住居址の小形グループ、7・8号住居址の中形、13号住居址の大形の3グループに大別される。これは時間的な差か、一集落内におけるバラエティーなのか今後の検討課題である。

柱穴については、関山期に比定される諏訪西1・3・4・7・8・10・12号住居址については、支柱穴4・6・8本を持つものがあり、4本と思われるものは7・10・12号住居址がある。6本と思われるものは1・3・4号住居址で壁に沿って壁柱穴が廻る。1・3号住居址は中央の一对が柱穴間隔が広くとられている。

8本柱穴を持つものは8号住居址で、入口部より若干広がりを持って並列している。11号住居址については主柱穴は検出されず、壁柱穴が全周しており、南側部分については、内側にも一列配され、二重になっている。13号住居址については柱穴、壁溝ともに見られなかった。

炉址について見ると、川原石や石皿等を転用した石組炉を持つものは、1・4・7・8・11・13号住居址、1ないし2個の川原石を据えたものは3・12号住居址で、埋甕を伴うものは3号住居址および諸磯期の5号住居址であった。炉の位置は各主柱穴を結んだラインの内側で、中央やや北寄りに設けられたものがほとんどであった。

中畦遺跡の住居址については黒浜期に比定される5号住居址は主柱穴は見られず、壁柱穴のみである。7号住居址は6本の柱穴を持つと考えられるが整然とした形では検出されなかった。径もやや小なものが多かった。諸磯期の6・3・4号住居址については、やや先行する6号住居址には、柱穴は検出されなかった。3号住居址については明確なものは2本だけであった。4号住居址は、ほぼ対角線上に4本が検出されている。

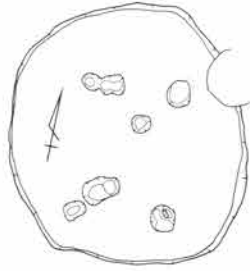
炉址は、5・7号住居址は地床炉で川原石が一つ据えられ、中央やや奥壁寄りに設けられていた。6・2・4号住居址はいずれも埋甕炉で、6号住居址は北寄り、3・4号住居址は中央やや南西寄りに2カ所設けられていた。ただし、3号住居址に関しては調査時の所見から建て替えがなされたと思われ、同時に2コが使用されていなかったと思われる。

各住居址の形状は5号住居址は短辺の一方がやや長い、いわゆる台形を呈しており、大小の差はあるが諏訪西遺跡の11号住居址からの流れを汲むものである。7号住居址はほとんど長方形を呈しており、この時期には少なくとも2系統以上の形状があったことが窺われる。

第263図は、中畦・諏訪西両遺跡の住居址変遷図である。前期前半に少なくとも9軒の住居址が造られており、そこには大・中・小のグループ分けが可能であった。しかもそれらの多くが石組炉、ないしは埋甕炉を持っている。壁溝を持つものは1・12号住居址のみで、1・4・10・12号住居址は多くの壁柱穴を持っている。次期の黒浜期になると中畦遺跡において5・7号住居址が造られ、両者とも黒浜期の前半部分に位置付けられると思われるが、その規模は異なり、面積は5号住居址の17.88㎡に対して7号住居址は30.15㎡である。また5号住居址は柱穴は持たず壁溝のみであったのに対して、7号住居址は基本的に6本の主柱穴を持った構造で一部に壁溝を持つ。諸磯期に該当するものとしては中畦6号住居址・諏訪西5号住居址・中畦3・4号住居址がある。中畦6号住居址は不正形を呈し柱穴も検出されなかった。諏訪西の5号住居址は隅丸方形で主柱穴は4本、壁柱穴を持ち埋甕炉を持つ。中畦の3・4号住居址はやや後出のもので、両者は相前後して造られたと見られる。共に隅丸方形で、4号住居址は主柱穴4本と埋甕炉を持つ。3号住居址は柱穴は不明瞭であったが、埋甕炉を持った建て替え住居址である。中畦遺跡においてはその後の住居址は検出されず土壌のみが存在した。

諏訪西遺跡については、中期前半期の住居址(2号住居址・9号住居址)が2軒検出されている。2号住居址は柱穴は4本であるが、建て替えた痕跡が認められる。9号住居址は6本ないし8本の柱穴を持つと思われる。形は2号住居址が円形に近く、9号住居址は長円形を呈している。炉は共に地床炉である。関山、黒浜期から続いた長方形を基本としたプランから、諸磯期に入り、方形さらには円形と移り、中期になると円形プランが主体となることは従来より言われていることであるが、今後一定地域内での住居形態の変遷を調べることは、上屋の構造を考えて行く上でも、さまざまな問題を提起するものと思われる。今回は個々の住居構造について述べるには至らなかったが、周辺地域での資料集積と合わせて課題として行きたい。(小野)

勝坂・阿玉台期

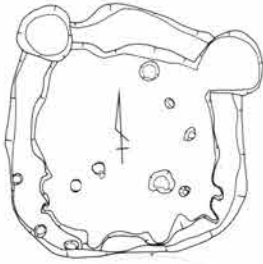


諏訪西 2住



諏訪西 9住

諸磯期



中畦 3住



中畦 4住

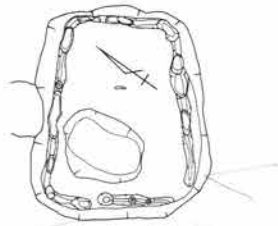


中畦 6住



諏訪西 5住

黒浜期

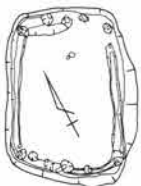


中畦 5住



中畦 7住

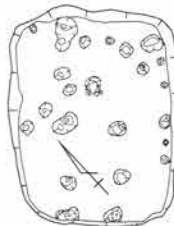
関山期



諏訪西 12住



諏訪西 10住



諏訪西 8住



諏訪西 7住



諏訪西 1住



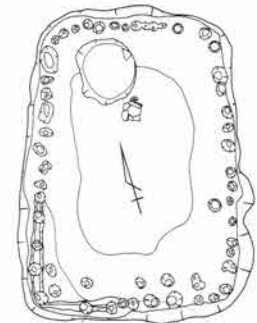
諏訪西 3住



諏訪西 4住



諏訪西 13住



諏訪西 11住

0 5m

第263図 住居址変遷図

3 諏訪西遺跡の出土土器について

諏訪西遺跡から出土した土器については、先項で各遺構及び遺構外遺物として説明したごとくであるが、縄文時代早・前・中期と多時期のものに亘っている。これらの土器を大別的に分類すると、以下の通りとなる。

- 第I群土器 撚糸文系土器
- 第II群土器 (繊維含有土器)
 - 第1類 花積下層式土器 (新田野段階)
 - 第2類 下吉井式土器 (最終末段階)
 - 第3類 二ツ木式土器
 - 第4類 関山I式土器
 - 第5類 関山II式土器
- 第III群土器 諸磯式土器
- 第IV群土器 中期前半
 - 第1類 阿玉台式土器
 - 第2類 勝坂式土器

これらの時期の群馬県内出土土器の報告例は未だ少なく、また近県での研究は多くの先学者によって進められているものの、本県においては未解決のままというのが現状であり、従来とは異なる土器様相を呈している可能性を十分含んでいる。そういう中で本遺跡で出土した土器も、細部にわたって検討することが必要とされよう。とりあえず第II群土器について若干検討することとしたい。

第II群土器

第II群土器には、先にも記述したごとく縄文時代前期の花積下層式終末(新田野段階)から関山式までの土器を一括したもので、これらのものをさらに口縁部に施文された文様から、第1類から第5類まで分類を行なうとともに細分化を試みることにした。

分類及び細分については以下の通りである。

1類 142図1、154図1、162図1、166図1、180図1・2、188図3～5、215図170～173

口縁部に数条の刻目をもつ隆線を廻らせ、撚糸側面圧痕による蕨手状の文様を施し、この蕨手の中心に円形刺突を有する。また口縁部文様帯内に刺突を施すもの(「八」字に刺突を施すものもある)。

2類 211図274

口縁部に波状沈線を「≈≈≈」状に数段描き、その間に弧状のくずれた沈線を描くもの。

3類

a 174図3・4、188図2、215図174～176

口縁部文様帯の区画に刻目をもつ細い隆線を数条廻らせ、区画内に同様の隆線により弧状の文様を配する。また、撚糸側面圧痕による蕨手状の文様を描き、円形刺突等を施すもの。

b 162図2～4、175図5、202図27、207図154・167、210図244、215図117～181

口縁部文様帯の区画に刻目をもつ細い隆線を数条廻らせ、区画内に同様の複数の隆線により蕨手状の文様を描き、さらに円形刺突および貼瘤等を施すもの。

c 142図6、174図1

口縁部文様帯の区画に刻目をもつ細い隆線を数条廻らせ、区画内に同様の複数の隆線により菱形の文様を描き、その交点部分に貼瘤を施すもの。

d 142図5、166図2

口縁部に刻目をもつ細い隆線を数条廻らせ、以下胴部に縄文を施すもの。

4類

a 154図2・3、188図1・6、203図38・48、204図53・54・56、205図99、207図143、215図183~187

口唇部に瘤状の小突起をもち、口縁部に口縁部文様帯を区画する梯子状沈線をもつ併行沈線を数条廻らせる。区画内には、梯子状沈線をもつ三本単位の併行沈線により、蕨手文及び各種連結線等の文様を描き、さらに円形刺突・貼瘤等を施すもの。

b 142図9・11、154図4~10・14、166図5~7・9、174図7、180図7~11、184図1、188図7・8、202図30、215図190

口縁部文様帯を区画する梯子状沈線をもつ併行沈線を廻らせ、区画内に同様の梯子状沈線をもつ併行沈線で蕨手文・山形文・連結線等を描き、さらに円形刺突・貼瘤等を施すもの。

b 188図9

口縁部文様に梯子状沈線をもつ併行沈線により、鋸歯文と山形文の組み合わせにより菱形文を描き、貼瘤等を施すもの。

d 142図7・8・10・12~15、143図16・17、158図132、162図7、188図10、201図1・28・29・31・32、204図82、206図113、207図157、211図254、215図189・194・195・199

口縁部文様帯の区画に梯子状沈線をもつ半截竹管具の平行沈線で、蕨手文・山形文・連結線等の文様を描くもの。なお、この種のものには、円形刺突・貼瘤を施すものも少なくはない。

e 179図1

口縁部に梯子状沈線をもつ平行沈線を廻らせ、単沈線による連結線・山形文ないしは鋸歯文を描き、その沈線間に刻目状に短沈線を縦・横交互に施すもので、円形刺突・貼瘤を有するもの。

f 174図9、202図2、215図196

口縁部に半截竹管具による平行沈線で、菱形文を描き、その交点及び頂点部に貼瘤等を施すもの。

g 166図11、174図8、204図55

口縁部文様帯を区画する半截竹管具による平行沈線を数条廻らせ、区画内に同様の沈線による鋸歯文を描き、その頂点等に円形刺突を施すもの。

h 166図12・13

口縁部に単沈線による鋸歯文を描くもの。

i 180図12

口縁部文様帯を区画する半截竹管具による平行沈線廻らせ、区画内に連結線等の文様を描き、さらに円形刺突等を施すもの。

j 205図102、202図40

口縁以下に縄文を施すもので、円形刺突ないしは貼瘤等を有するもの。

k 143図18~21、150図2、154図12・13、162図5・6、166図14・16~24、174図2・10・16・20、167図23・24、180図15・17~22、188図12・14、202図25、203図41、205図91・101・104、206図110・131・136、210図238・246・249、211図265、215図202・203

口縁以下に縄文のみを施すもの。

l 150図1、154図15、162図8、174図12～15、180図16

口縁部に無文帯をもつもので、無文帯に1条の隆帯が廻るものもある。

m 142図1、205図88、207図143

無文のものである。

5類

a 180図14

口縁部に半截竹管具による波状沈線を描くもの。

b 146図4、216図235

口縁部に櫛歯状工具による波状コンパス文を描くもの。

以上、第II群土器を分類してきたが、次にこれらの土器に文様の推移・変遷及び編年の位置づけについて若干ふれてみたい。

1類土器について

口縁部隆線は、前出する花積下層式土器の有段口縁が変化したものと考えられ、捺糸側面圧痕及び円形刺突・刺突については、前出土器から継承された文様である。前出土器と比較すると特に捺糸側面圧痕では区画帯内に最大限大きく描かれ、また刺突、前出土器の文様構成される中で規則正しく施文されていたものが、くずれた現象を呈しているといえる。つまり、捺糸側面圧痕が主文様として用いられる花積下層式の最終段階期のものである。

2類土器について

この種の土器については群馬県内でも例はなく、他地域の系統をもつものと思われ、渋谷昌彦1981・1982—1983・1984の一連の論文の中で扱われた下吉井式土器に属するものと考えられる。とりあえず現段階では氏の下吉井式土器細分の終末期にあたるものと考えたい。

3類a土器について

口縁部文様帯を区画する刻目をもつ隆線及び捺糸側面圧痕による文様描出は、前出の花積下層式新田野段階期から継承されたもので、新たに刻目をもつ隆線の区画帯内への使用が行なわれる。円形刺突については、本来の施文位置がくずれ、区画内に多用される。また刺突については、みられなくなる。特に、この時期の土器は、資料が少ないためその細分は難しいと思われるが、捺糸側面圧痕の文様変化をたどることで所謂二ツ木式土器の存在及び細分を行なうことが十分にできる要素を含んでいることから、むしろこの段階を設定することにより、よりスムーズな変遷をたどることができよう。つまり、口縁部文様に刻目をもつ細い隆線と捺糸側面圧痕が共存施文され、円形刺突の規則性がくずれる段階。この種の良い資料としては、深作東部遺跡群（1984）から出土している。

3類b・c・d土器について

口縁部文様の区画には前出土器からの継承するものであり、また口縁部に口縁文様としての同様の隆線のみが施されるものもみられる。前出の捺糸側面圧痕による蕨手状文については、この段階において刻目をもつ細い隆線に置き変えるという現象がみられる。特に複数の隆線により施文することからも、その意味を察することができよう。さらに区画内に描かれる文様に、蕨手状文だけでなく菱形文もみることができがこの菱形文の出自については不明である。さらに、この段階に貼瘤の施文が行なわれる。つまり、口縁部文様に

刻目をもつ細い隆線による文様が盛行し、貼瘤が出現する段階。

4類 a・b・c 土器について

口縁部に描かれる文様は、前出土器にみられた刻目をもつ隆線が、梯子状沈線をもつ併行沈線に変化したものである。基本的な主文様であった蕨手文についての文様系譜は前出する土器にたどることができる。鋸歯文（菱形文）についても同様であろう。特に蕨手文については先にも述べたが、花積下層土器で描かれる燃糸側面圧痕によるものが、その描出効果を継承しつつも描出方法を変化させ、この時期に至っている。それは、梯子沈線が燃糸側面圧痕の際の縄文の節、3本で1単位となる併行沈線が燃糸側面圧痕の際の2の条を意味すると考えることができ、この点については文様変遷を考える上で重要視する必要がある。山形文・連結文等の付加文様については、前出土器にもその現れをみることができるが、この時期に至って明確に口縁部文様の一部として施文される。また、梯子状沈線と併行沈線による鋸歯文・山形文での菱形文を描く土器については、前出する刻目をもつ隆線による菱形文にその系譜がたどれるものの、この時期にあつては菱形文は主流をなし得ず、むしろ鋸歯文・山形文が主であると考えたい。つまり、この時期は、口縁部文様に梯子状線をもつ併行沈線による文様描出が盛行する段階である。

4類 d・e・f・g 土器について

口縁部文様を描く沈線が、前出する土器までは棒状工具等の単線による併行沈線であったのに対し、この時期になると半截竹管具による平行沈線に変化する。この例はd土器の中によくみられる現象で、特に梯子状沈線部分が従来直線であったのに、弧線に変化している点のみをみることで、その現象がよくうかがえる。口縁部文様を構成する蕨手文は、その本来の燃糸側面圧痕の同一描出効果がくずれ、単に蕨手文を描くという点のみが継承されたもので、また一部の梯子状沈線についても同様であると考えられる。つまり、口縁部文様に施される文様が、併行沈線から平行沈線に変化し、それまでの基本的な部分で守られてきた文様が簡略化の傾向にある段階。

4類 h・i 土器について

この時期になると従来までの口縁部主文様はかなりくずれ、また梯子状沈線等にもみられなくなる。そして口縁部文様には鋸歯・菱形文等の文様が主となり、円形刺突は僅かに残るのみのようである。つまり、口縁部文様が平行沈線主体の文様となる段階で、後出する関山Ⅱ式とかなり類する点が多くなる過渡的段階と考えたい。

4類 j・k・l・m 土器について

口縁部以下に縄文を施す土器については、花積下層式からその系譜をたどることができると思われるが、jのごとく貼瘤等が施される土器については、他土器と比較することである程度の時期限定が可能となり得ると考えたい。また口縁部に無文帯等をもつ土器及び無文土器の出自については、未だ不明な点が多く詳細については記述はさけることにしたい。

5類 a・b 土器について

口縁部文様に前出土器の文様を継承している点は認められるものの、新要素及び文様の簡略化がかなり共存進行する段階。（胴部以下に施文される縄文については、特に変化がいちぢるしい。）

本遺跡出土の縄文前期前葉の土器（第Ⅱ群土器）を分類し、それらの土器の文様の推移・変遷については前述したとおりで、文様変遷及びその編年的位置づけを図に示すと第264図のごとくとなる。この図での問題としては次の点があげられる。新田野段階からニッ木式・関山Ⅰ式までの口縁部文様及び蕨手の変遷は、意

表31 黒坂禎二氏による各説比較表（「深作東部遺跡群」1984より転載）

組合わせ例	各 説	本報告 分類	篠 遠 分類	篠 遠 1955	駒 形 1972	庄 野 1974	青 木 1979	下 村 1981	高 橋 1981
① 細隆帯区画+撚糸圧痕+円竹		1 A a		花 積	花 積	花 積	二ツ木	花 積	花 積
② 細隆帯区画+撚糸圧痕+貼付		1 A c	a 類	花 積	二ツ木	二ツ木	二ツ木	二ツ木	—
③ 刻みのある細い隆起帯+貼付		1 B c	c 類	二ツ木	?	二ツ木	二ツ木?	二ツ木	関山 I
④ 梯子状沈線+円竹+貼付		1 C b 1 D b	b 類	二ツ木	?	関山 I	関山 I	二ツ木	関山 I
⑤ 梯子状沈線+貼付		1 C c 1 D c		関山?	関山 I	関山 I	関山 I	関山 I	関山 I

外とスムーズに追うことができるのに対し、菱形文については先にも述べたとおりその出自が不明な点である。この点については、他地域からの異系統文様である可能性、ないしは単に資料の未出土の可能性も十分考えられるが、花積下層式に菱形文の構成が含まれていることを踏まえ、今後の検討を要する。








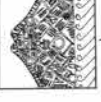
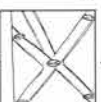
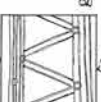



本遺跡から出土した4種j~m土器については、現段階では図に示したように、とりあえずこの時期に伴うものとしておきたい。

二ツ木式をめぐる問題については、篠遠喜彦（1955）によって「二ツ木式」が提唱された後、多くの研究者により諸説が発表され論考されてきたにもかかわらず、未だ漠然とした認められ方にとどまっている。この点について、近年刊行された深作東部遺跡群（立木新一郎・山形洋一・その他1984）の中で黒坂禎二がまとめている。またこの報文中で黒坂の『文様の組合せ』による時間細分の内容については、筆者の文様変遷によるくり方とほぼ同意見ではあるが、その結果は黒坂とは異なりむしろ庄野（1974）と同様となった（表31参照）。これは、土器の口縁部文様あるいは胴部文様のどちらに視点を置いたかという視点の相違によるものであろう。土器の分析にあたっては、筆者も胴部文様（縄文）の重要性については十分理解できるし、その必要性には賛同する。しかし、こと細文を試みる際には土器の中で変化・変遷の著しい部分を取り扱わざるを得ない。その結果としてどの部分に視点をしぼるかは、土器によって様々であるが難しく容易にいかないのが現状であろう。

この二ツ木式土器を中心とした細分案についても、まだまだ検討を要する点があると思われるが、とりあえず本遺跡出土土器のまとめとしたい。（谷藤）

参考文献

・篠遠喜彦	「千葉県東葛飾郡二ツ木第二貝塚」日本考古学年報3	日本考古学協会	1955	(昭30)
・庄野靖寿	「関山貝塚」埼玉県埋蔵文化財調査報告書第3集	埼玉県教育委員会	1974	(昭49)
・武井則道	「新田野貝塚」	立教大学考古学研究会	1974	(昭49)
・荒井幹夫 佐々木保俊	「打越遺跡」富士見市文化財報告書第14集	富士見市教育委員会	1978	(昭53)
・小出輝雄				
・下村克彦	「新田野段階花積下層式土器と二ツ木式土器について」奈和第19号	奈和同人会	1981	(昭56)
・高橋雄三	「花積下層式土器の研究—関東・東北南部における縄文前期社会の成立—」考古学研究第28巻第1号	考古学研究会	1981	(昭56)
・渋谷昌彦	「第V章 木島遺跡出土土器について（考察）」「木島—静岡県富士川町木島遺跡第4次調査報告書」		1981	(昭56)
・小出輝雄	「花積下層式土器の成立と展開」富士見市遺跡調査会研究紀要2	富士見市遺跡調査会	1982	(昭57)
・渋谷昌彦	「木島式土器の研究—木島式土器の型式細分について—」静岡県考古学研究		1982	(昭57)
・佐々木保俊	「関山式土器について」人間・遺跡・遺物	文献出版	1983	(昭58)
・渋谷昌彦	「神之木台・下吉井式土器の研究—その型式内容と編年的位置について—」小田原考古学研究会々報11		1983	(昭58)
・岩井重雄	「遺構と遺物」北宿遺跡発掘調査報告書		1983	(昭58)
・立木新一郎 山形洋一他	「深作東部遺跡群」	大宮市遺跡調査会	1984	(昭59)

分類	模 式 図 ・ 文 様 変 遷	編年
1 類		花新 積野 下段階
3 類	 	I ツ 木
4 類	      	A 山 I
5 類	  	B C 関 山 II

第264図 分類模式図・文様変遷及び編年(案)

結 び

中畦・諏訪西遺跡において検出された遺構・遺物は先土器時代から平安時代と幅広い時期にわたっており赤城山西麓における歴史の一端を示す貴重な資料を得ることとなった。

中畦遺跡で検出された先土器時代の石器、石片は数は少なかったが、本地域では最初の発掘例となったわけでその意義は大きいと言える。その直後に見立溜井遺跡・諏訪西遺跡・勝保沢遺跡、北橋村では分郷八崎遺跡において、さらに遡る時期のものが発見され、にわかに赤城西麓が注目されることとなったわけである。

縄文時代については両遺跡における主体を為したもので、中畦遺跡では黒浜式期から諸磯b式期の住居址が検出され、2ないし3時期にわたって居住されたことが想定される。黒浜式期の住居址より出土した土器の中には有尾式も含まれ、近年県内各地で注目されているこの時期の追加資料となるであろう。また7号住居址の覆土上層より出土した注口土器（註1）は注目される。諸磯式期に比定される住居址は3・4・6号住居址の3軒を検出した。3・4号住居址は隣接して掘り込まれており、土器の出土状況、接合等から考えると4→3号住居址という先後関係が認められ、極めて近い時期に位置付けられる。6号住居址はやや古く位置付けられ、出土土器中には黒浜式期に比定されるもの散見された。また住居址中に五領ヶ台期の土壙が2基重複していたと思われ、内1基内よりいわゆる下小野式の半完形品が出土している。県内では数少ない資料であり、検討を要する。五領ヶ台式期以降の遺構・遺物に関しては平安時代に至るまで皆無であり、全く居住域としては顧り見られなかったことになる。

平安時代については2軒の重複住居址を検出した。遺存状況は悪く、出土土器等も少なかったが、特筆すべき遺物として皇朝十二銭の一つ「富寿神宝」（注2）が出土している。

諏訪西遺跡では先土器時代より古墳時代にかけての遺構・遺物が検出されたが、先土器時代に関しては赤城山西麓におけるBP下の検出例としては最初となったわけでその意義は大きいと考える。今後の資料検討が進む中で明確にすべき問題が明らかになってくるものと考えられる。

縄文時代については前期前半を中心とする住居址12軒が検出され、特に花積下層最終段階より関山1式へかけての、資料を得ることができた。該期のまとまった集落としては県内では数少ないものである。中期に関しては阿玉台、勝坂式期の住居址・土壙を検出した。さらに工事用道路においても数多くの同期の土器が出土した。その出土土器としては早期の撚糸文土器片が100片以上出土している。隣接する見立溜井遺跡等でも出土しており数少ない県内の資料増加が期待され、今後南関東との対比が進む中で、編年的な位置付けが確立されて行くものと考えられる。また工事用道路B区内の中期土器片が大量に出土した包含層最下層より出土した押形文土器は、その器形を知ることができる県内での貴重な資料となるものである。長野県の細久保式に対比するものと思われるが、今後県内資料の集成と合わせて検討すべきであろう。

今回の両遺跡の調査によって実に多くの成果を上げることができたが、それに伴う問題点、疑問点も出てきた。本書ではこと細かにそれらを扱うことはできなかったが、今後他遺跡との比較検討を行なう中で個々の問題点を明確にし、検討を加えて行きたい。

最後ではあるが本書をまとめるに当たりお世話になった方々に深く感謝申し上げたい。 (小野)

註1 県内での、こうした注口土器の出土例としては隣接する北橋村八幡山・松井田町人見出土（群馬県立博物館）のものがある。なお非常に類似したものとして、東京都世田谷区堂ヶ谷遺跡（1982）34号住居址出土のものがある。

註2 県内では関越道関連の国分寺中間地域遺跡で2例出土している。

主要参考文献

・杉原荘介	「上野樽遺跡調査概要」 考古学10-10		1939	(昭14)
	「敷島村誌」	勢多郡敷島村誌編纂委員会	1959	(昭34)
・大場盤雄	「鍋屋町遺跡」	柿崎町教育委員会	1960	(昭35)
・山本良知	「宮田畦畔遺構調査概要」 時報第25号	群馬大学史学会	1961	(昭36)
・西村正衛	「茨城県稲敷郡浮島貝ヶ窪貝塚-東部関東における縄文前期後半の文化研究、その1-」 早稲田大学教育学部学術研究第15号		1966	(昭41)
・西村正衛	「茨城県北相馬郡取手町向山貝塚-東部関東における縄文前期後半の文化研究、その2-」		1967	(昭42)
	「港北ニュータウン地域内文化財調査報告IV」 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団編	横浜市埋蔵文化財調査委員会	1972	(昭47)
・山崎 一	「群馬県古城址の研究」上巻	群馬県文化事業振興会	1971	(昭46)
・赤城村教育委員会編	「文化財関係資料集(第三集)」	赤城村教育委員会	1973	(昭48)
・井上唯雄	「寺内遺跡」	赤城村教育委員会	1975	(昭50)
・清藤一順	「飯山満東遺跡」	房総考古資料刊行会	1975	(昭50)
・大場盤雄	「上原」	長野県文化財保護協会	1976	(昭51)
・青木秀雄	「風早遺跡」	庄和町風早遺跡調査会	1979	(昭54)
・青木秀雄	「高輪寺遺跡」 久喜市埋蔵文化財調査報告書	久喜市教育委員会	1979	(昭54)
・鈴木徳雄	「白石城」 埼玉県遺跡調査報告書 36集	埼玉県教育委員会	1979	(昭54)
・中島 宏 他	「伊勢塚-東光寺裏遺跡」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第26集 上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書IV	埼玉県教育委員会	1980	(昭55)
・赤山谷三	「三原田遺跡」(住居篇)	群馬県企業局	1980	(昭55)
・若月吾吾	「笠懸村稲荷山遺跡」 笠懸村埋蔵文化財調査報告書第3集	笠懸村教育委員会	1980	(昭55)
・鈴木敏昭	「諸磯b式土器の構造とその変遷(再考)」 土曜考古第2号	土曜考古学研究会	1980	(昭55)
・白石浩之	「細田遺跡」 神奈川埋蔵文化財調査報告 23	神奈川県教育委員会	1981	(昭56)
・山根弘人 他	「御所遺跡」 山梨大学考古学研究会調査報告第2集	山梨大学考古学研究会	1981	(昭56)
・杉原荘介 芹沢長介	「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」 明治大学文学部研究報告考古学第二冊		1981	(昭56)
・青木義脩 他	「大北遺跡・井沼方遺跡発掘調査報告書」 浦和市遺跡調査会報告書第15集	浦和市遺跡調査会	1981	(昭56)
・笹森健一	「縄文時代前期の住居と集落」 土曜考古第3・4・5号	土曜考古学研究会	1981.82	(昭56.57)
・樋口昇一	「阿久遺跡」 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 一原村その5昭和51・52・53年度一	日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会	1982	(昭57)
・桜井清彦 他	「堂ヶ谷戸遺跡I・II」	世田谷区遺跡調査会	1982	(昭57)
	「向原遺跡」 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1	神奈川県教育委員会	1982	(昭57)
・山形洋一 他	「宮ヶ谷塔第5貝塚」 大宮市遺跡調査会報告第5集	大宮市遺跡調査会	1982	(昭57)
・市川 修	「上南原」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第10集	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	1982	(昭57)
・今村啓爾	「諸磯式土器」 縄文文化の研究3	雄山閣	1982	(昭57)
・荒井幹夫 他	「打越遺跡」 富士見市文化財報告第26集	富士見市教育委員会	1983	(昭58)
・小淵 秋 他	「稲荷丸北遺跡」	稲荷丸北遺跡調査団	1983	(昭58)
・市川 修	「塚屋・北塚屋」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団第25集 埋蔵文化財発掘調査報告-III-	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	1983	(昭58)
・大塚昌彦 綿貫綾子他	「有馬条里遺跡」 渋川市発掘調査報告書第7集	渋川市教育委員会	1983	(昭58)
・白石浩之	「諸磯b式土器の型式細分とその問題点」 人間・遺跡・遺物-わが考古学論集1-	麻生優 編	1983	(昭58)
・藤巻幸男 小島敦子他	「賀茂遺跡」	群馬県埋蔵文化財調査事業団	1984	(昭59)
・鹿島英明 齊藤祐司	「上野ヶ谷戸遺跡」 日高町埋蔵文化財調査報告第6集	日高町上野ヶ谷戸遺跡調査会	1984	(昭59)
・昼間孝次 庄野靖寿	「尾ヶ崎遺跡」	庄和町尾ヶ崎遺跡調査会	1984	(昭59)
・目黒吉明	「青宮西遺跡」 福島県会津高田町文化財調査報告書第5集	福島県会津高田町教育委員会	1984	(昭59)
・鈴木敏昭	「茶屋遺跡」 白岡町埋蔵文化財調査報告書第2集	白岡町教育委員会	1984	(昭59)
・大賀 健 他	「1.北貝戸遺跡 2.川上遺跡 3.小仁田遺跡」 関越自動車道(新潟線)水上町埋蔵文化財発掘調査報告書	日本道路公団 群馬県教育委員会 水上町遺跡調査会	1985	(昭60)
・黒岩文夫 富澤敏弘	「中棚遺跡」 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書	群馬県昭和村教育委員会 群馬県教育委員会 日本道路公団	1985	(昭60)
	「見立(溜井・大久保)遺跡展」	赤城村歴史資料館 4月企画展資料	1985	(昭60)

写 真 图 版



中畦遺跡遠景（北から）



中畦遺跡遠景（東から）



先土器時代調査区全景



先土器時代調査区全景



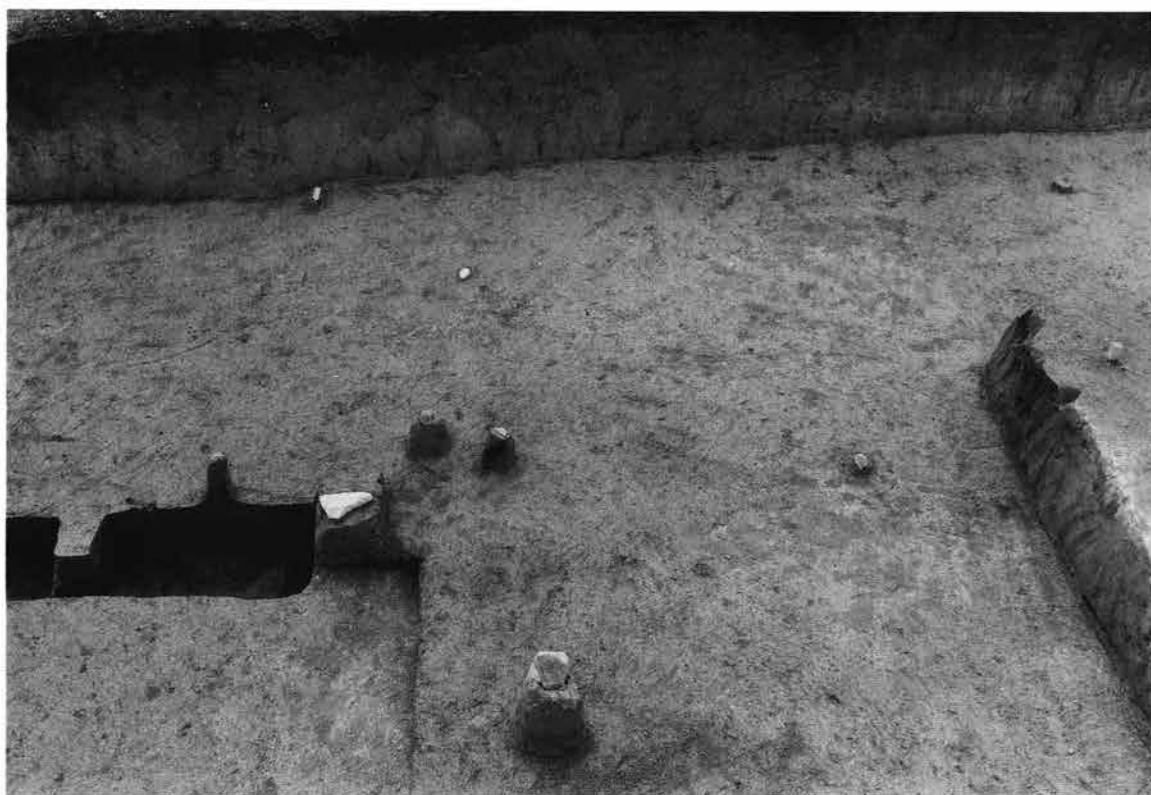
先土器時代調査区セクション



先土器時代遺物出土状態



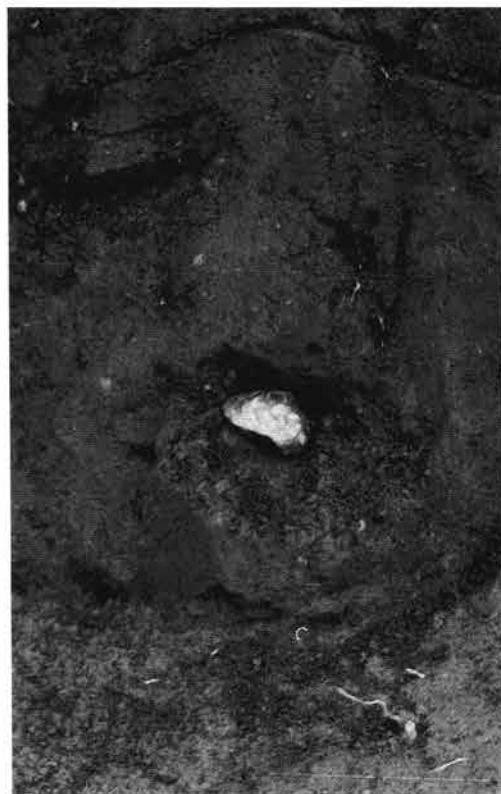
先土器時代遺物出土狀態全景



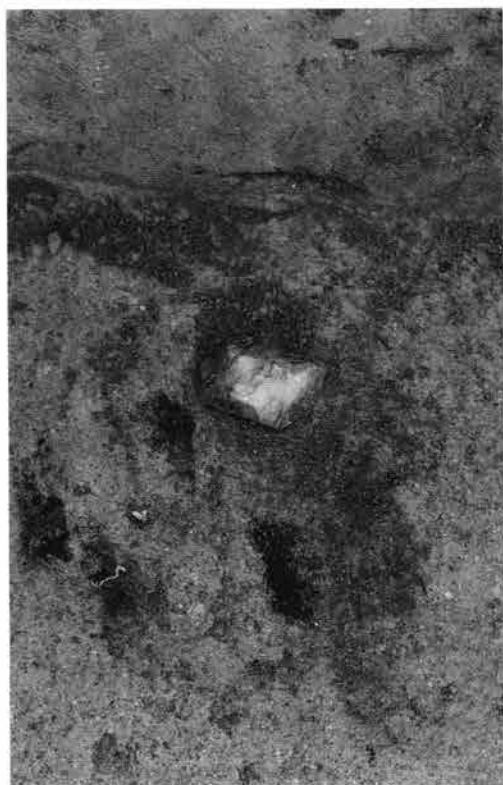
先土器時代遺物出土狀態全景



先土器時代遺物出土状態 (No. 4)



先土器時代遺物出土状態 (No. 6)



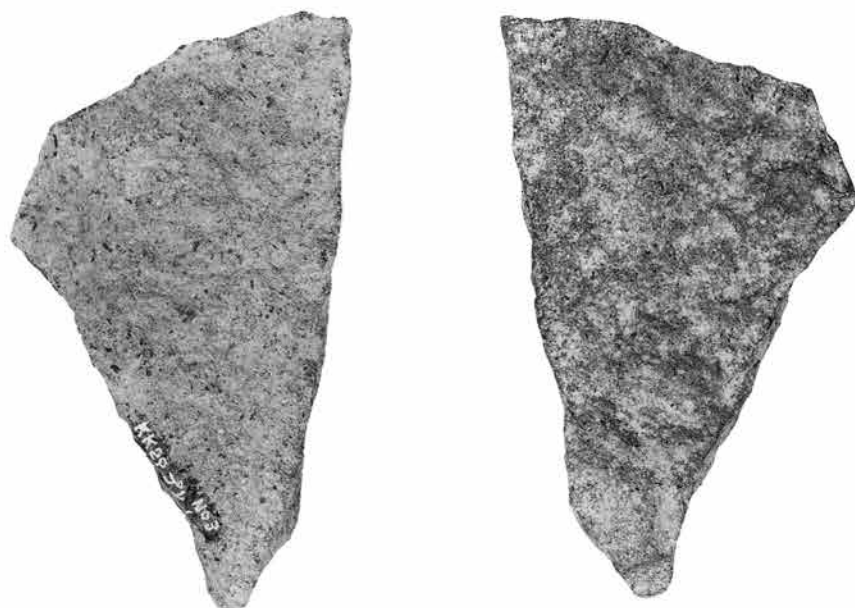
先土器時代遺物出土状態 (No. 8)



先土器時代遺物出土状態 (No. 9)

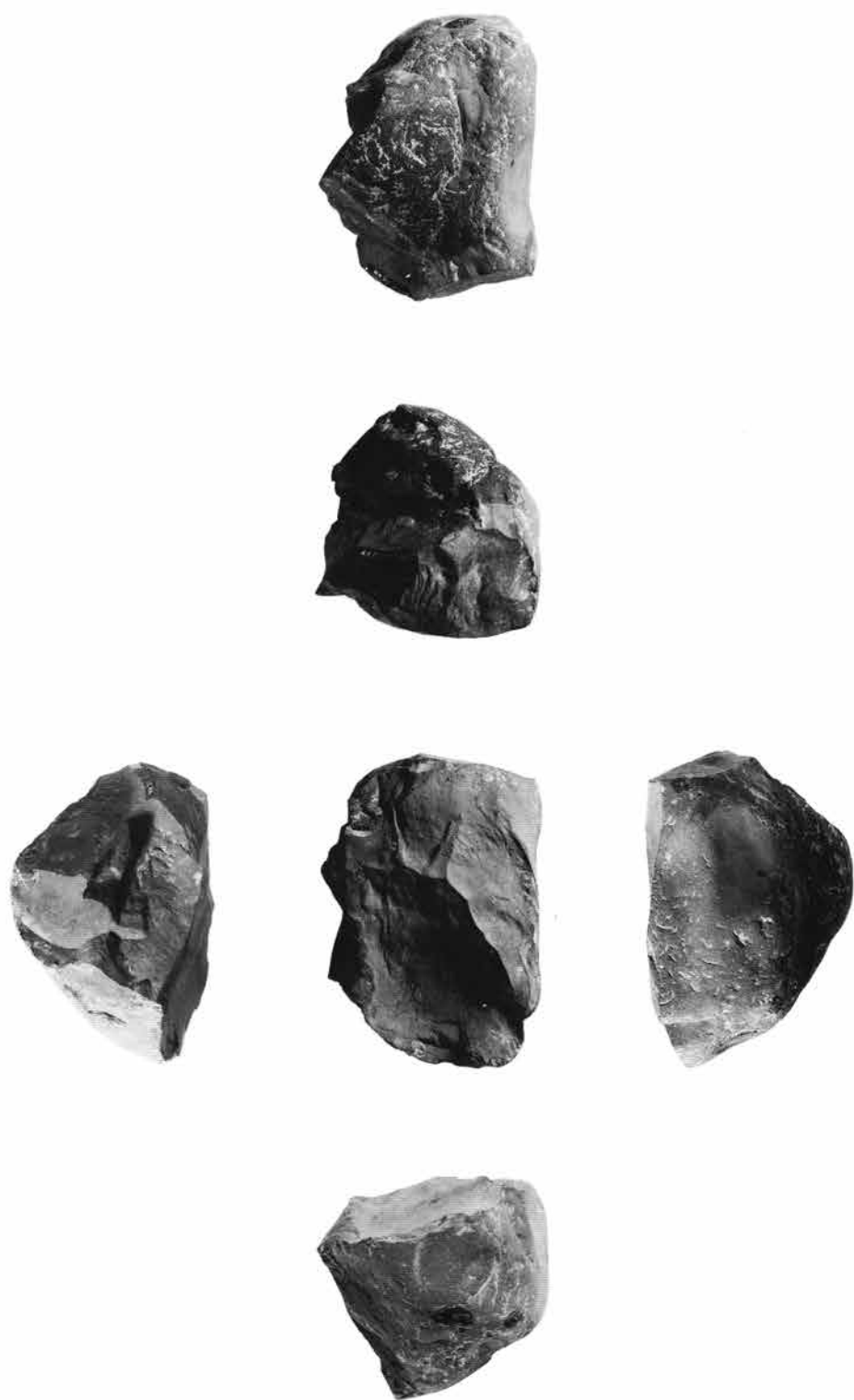


(S = 1/2)



先土器時代出土遺物

(S = 1/3)



(S = 1/3)

接合資料



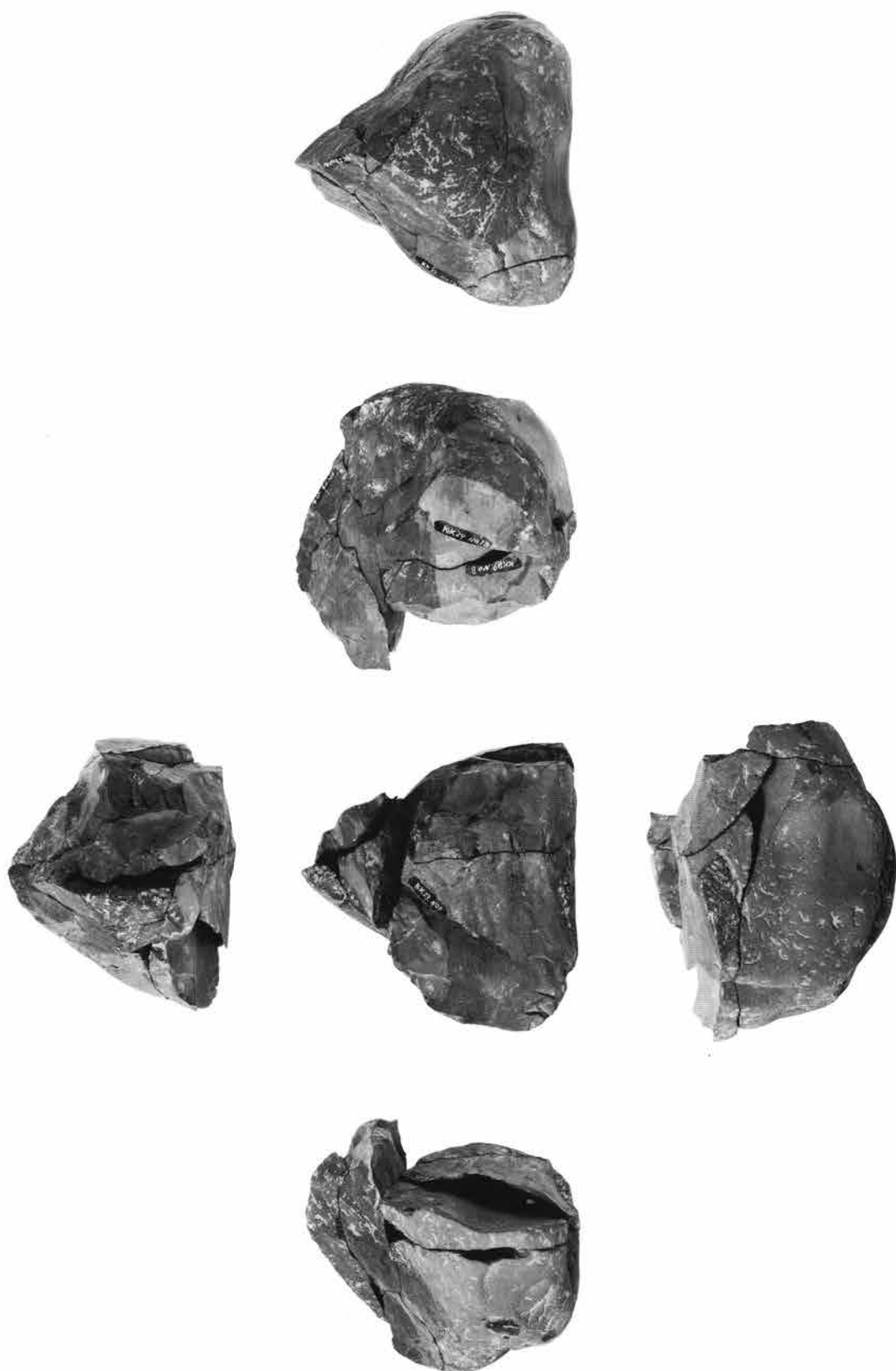
先土器時代出土遺物

(S = 1/2)



(S = 1/2)

接 合 資 料



(S=1/8)

接 合 資 料



3号住居址全景（南より）



遺物出土状態



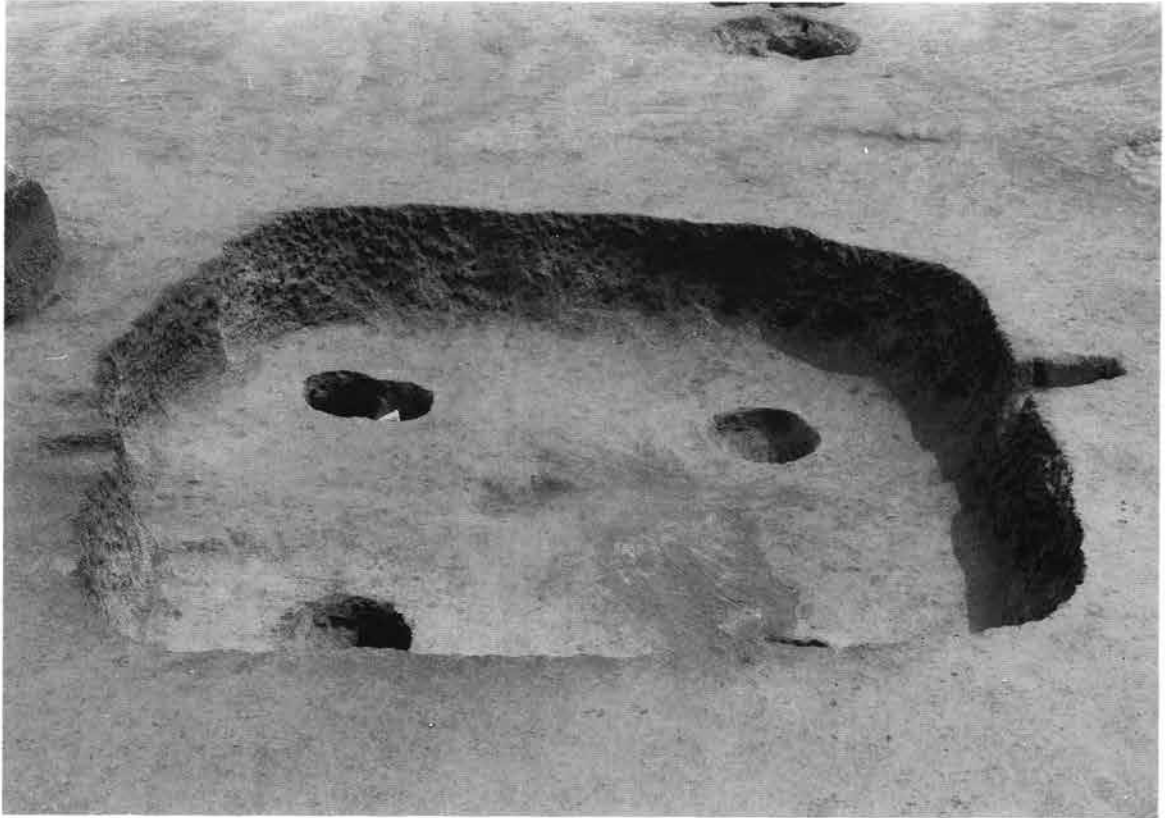
埋壺炉



埋壺炉



埋壺炉セクション



4号住居址全景（西より）



遺物出土状態



埋甕炉



埋甕炉



埋甕炉セクション



5号住居址全景（西より）



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



住居址全景（南から）



6号住居址全景（南より）



遺物出土状態



遺物出土状態



埋壺炉



埋壺炉セクション



7号住居址全景（南より）



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



炉 址



8号住居址全景（南より）



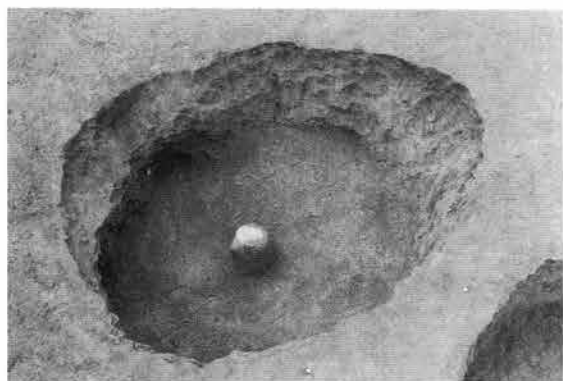
遺物出土状態



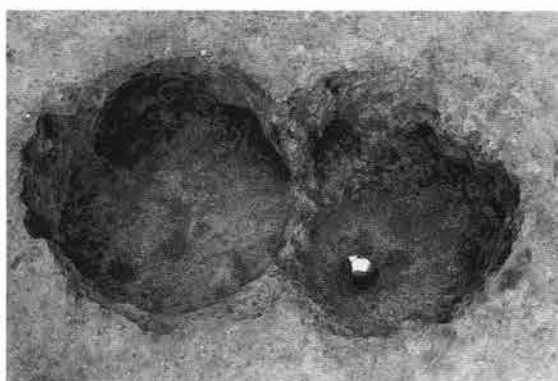
1・2号土坑



3号土坑



4号土坑



5・6号土坑



7号土坑



8号土坑



9号土坑



10号土坑



11号土坑



12号土坑



13号土坑



14号土坑



14号土坑遗物出土状态



15号土坑



16号土坑



17号土坑



18号土壙



19号土壙



20号土壙



21号土壙



22号土壙



23号土壙



24号土壙



25号土壙セクション



25号土坑



27号土坑



28号土坑



29号土坑



30号土坑



31号土坑



32号土坑



33号土坑



34号土坑



35号土坑



36号土坑



37号土坑



38号土坑



40号土坑



41号土坑



42号土坑



43号土坑



47号土坑



47号土坑遺物出土狀態



48号土坑遺物出土狀態



48号土坑



49号土坑



51号土坑



52号土坑



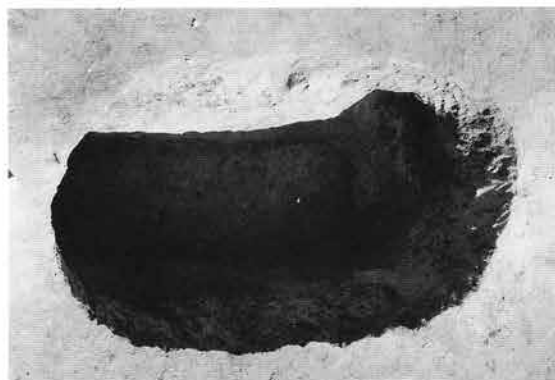
54号土壙



55号土壙



56号土壙



57号土壙



58号土壙



59号土壙



60号土壙



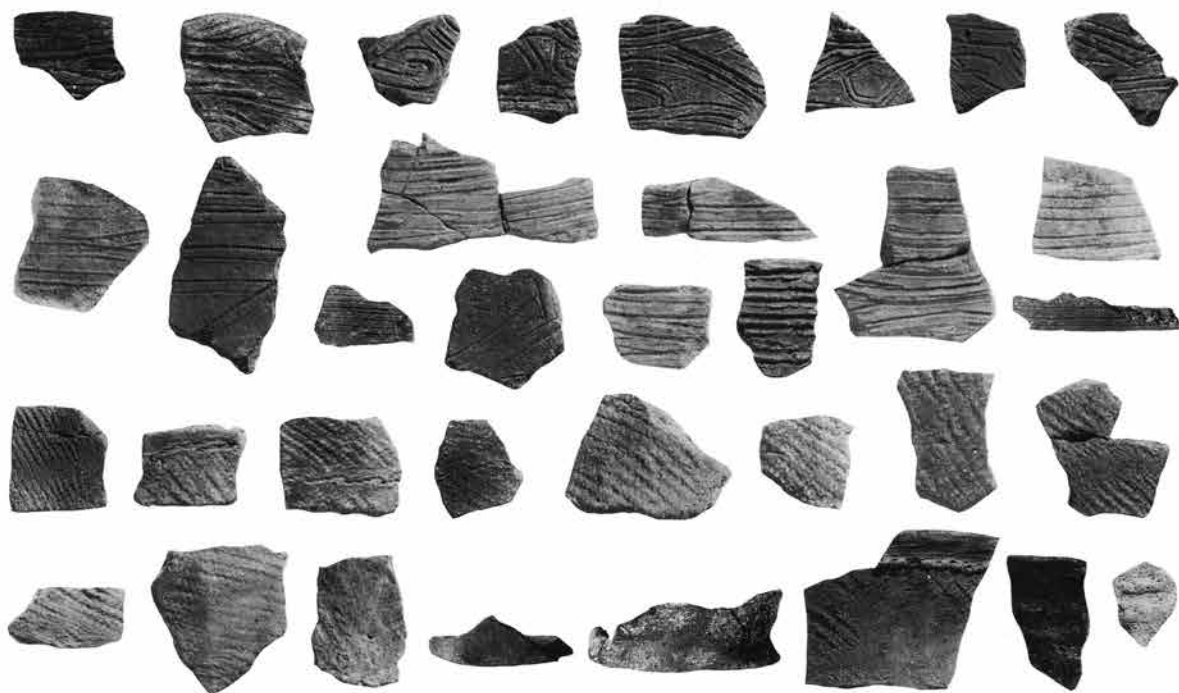
61号土壙



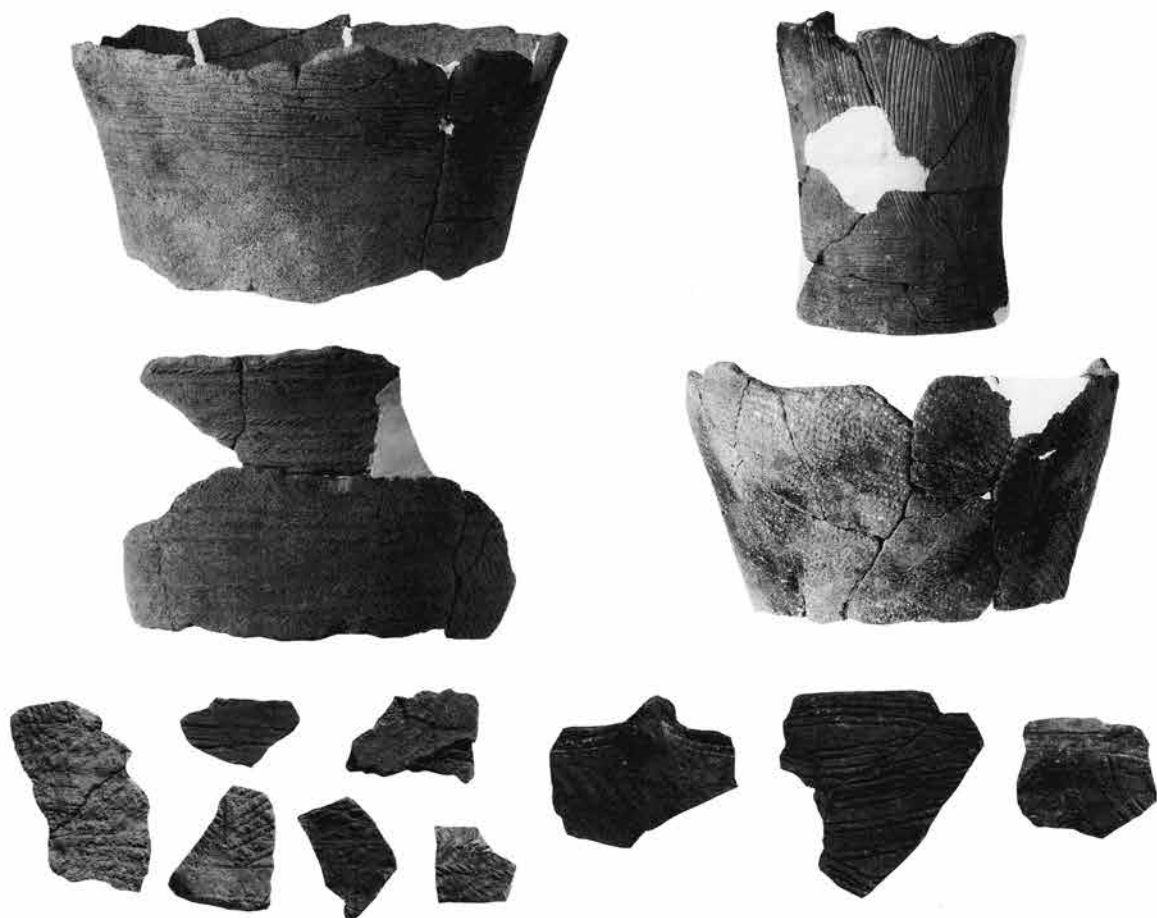
3号住居址出土土器



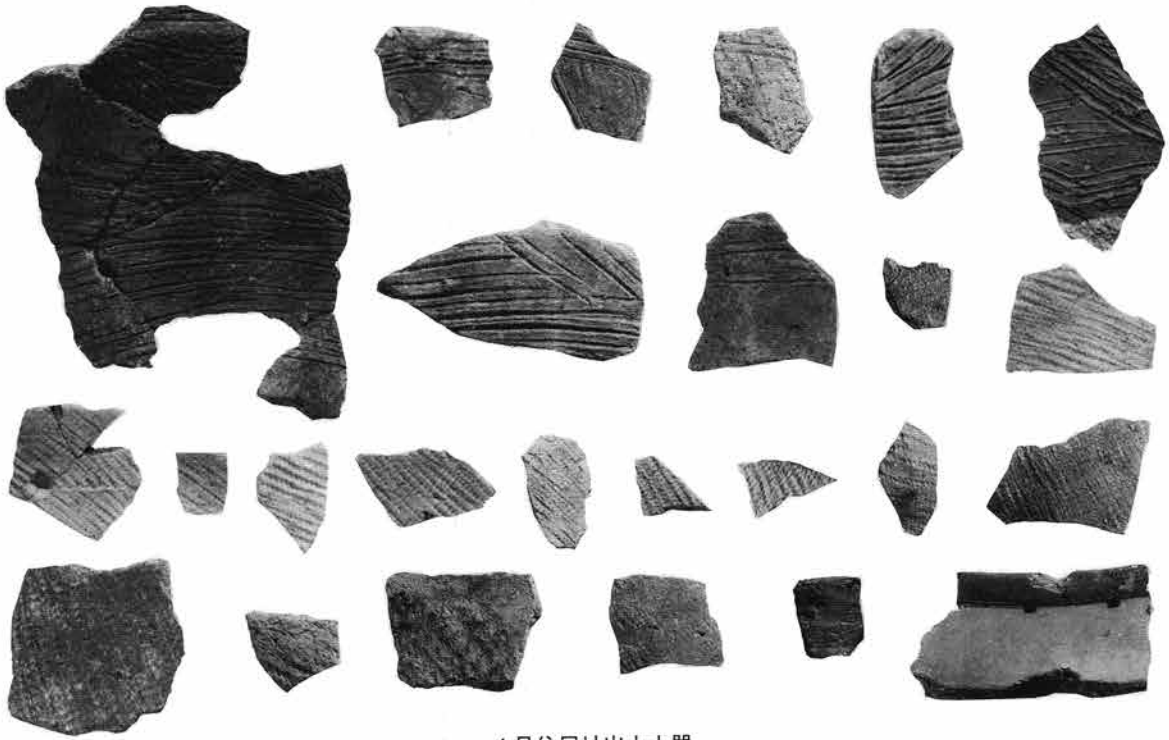
3号住居址出土土器



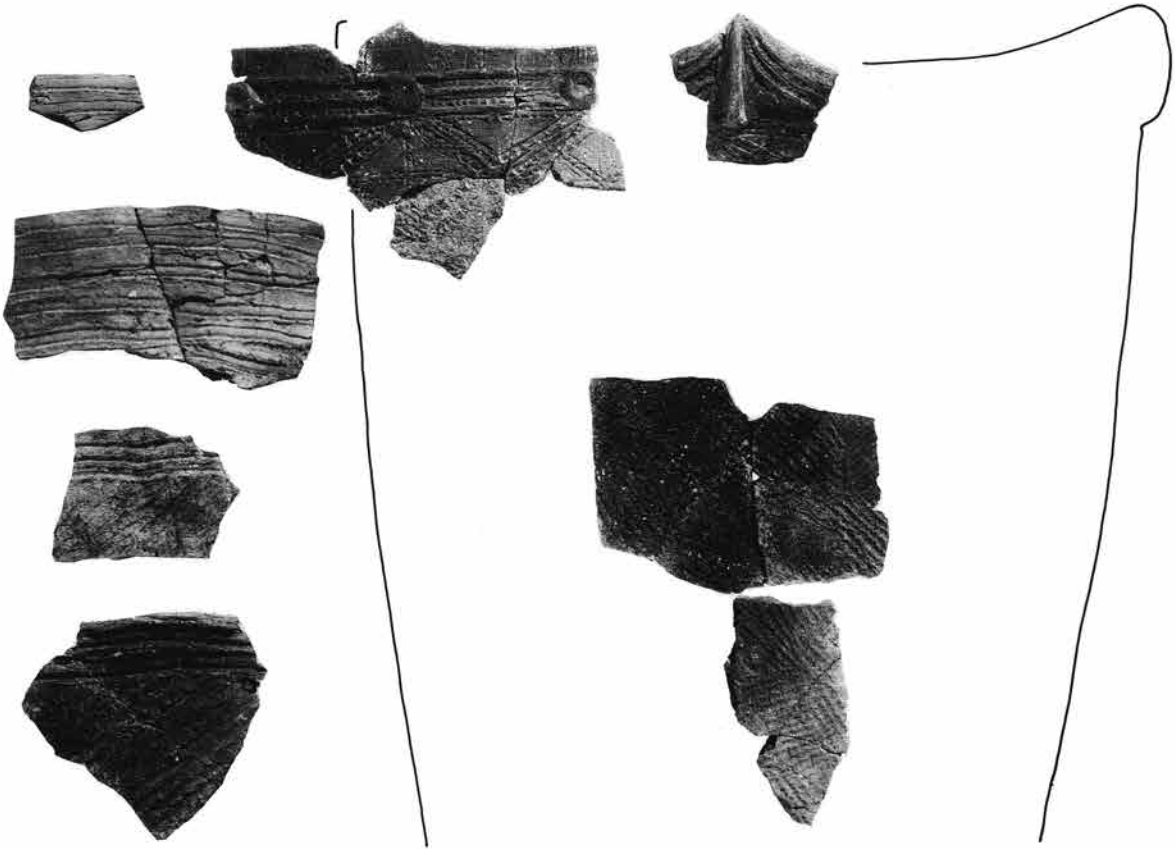
3号住居址出土土器



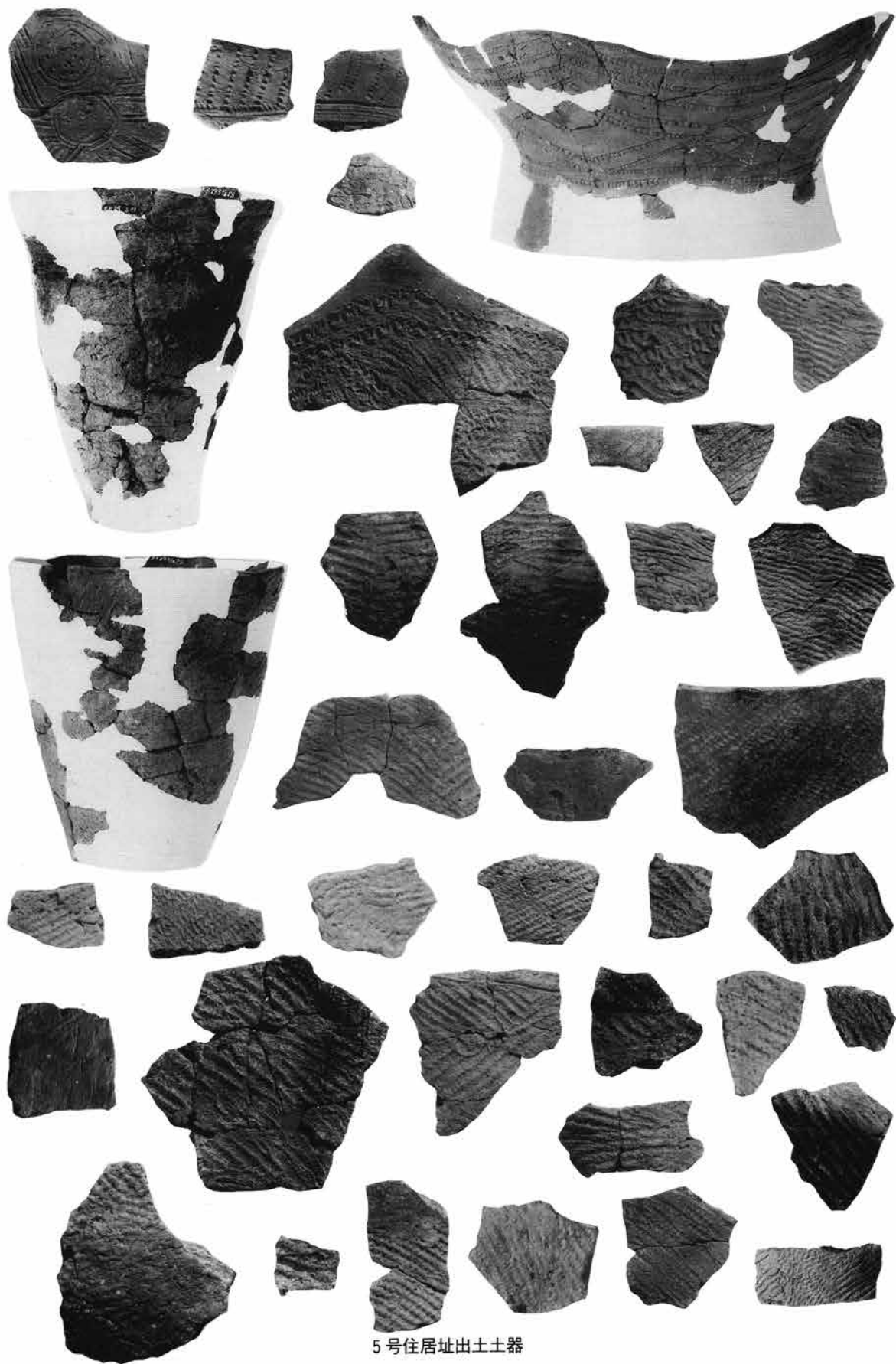
4号住居址出土土器



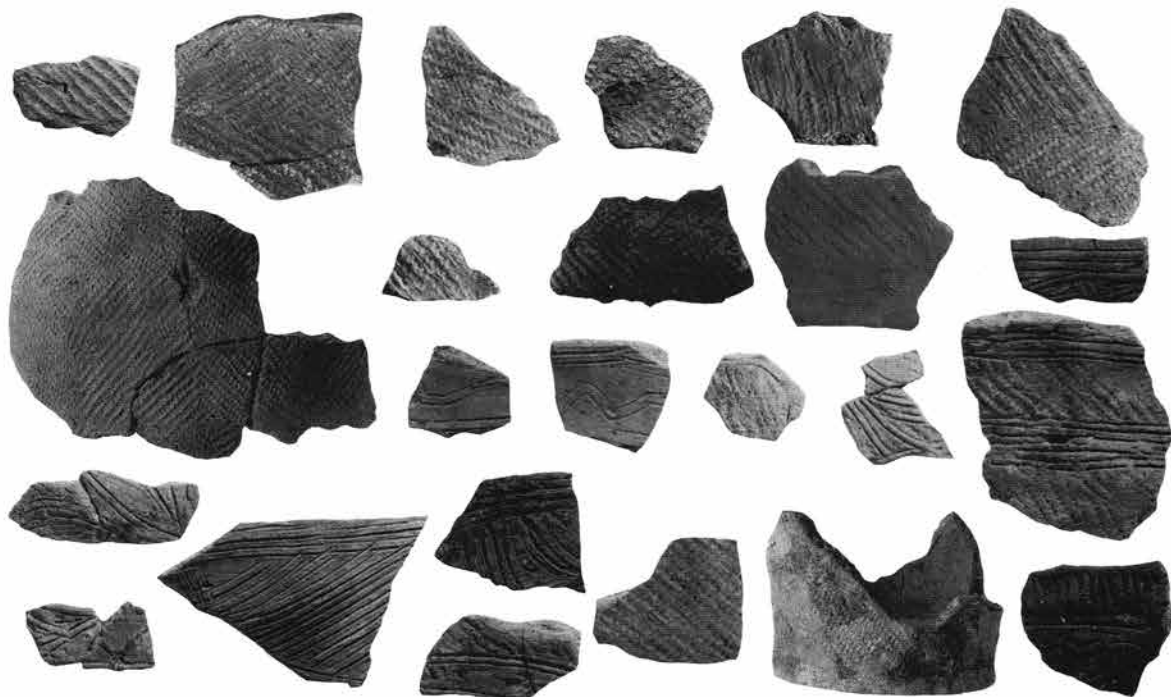
4号住居址出土土器



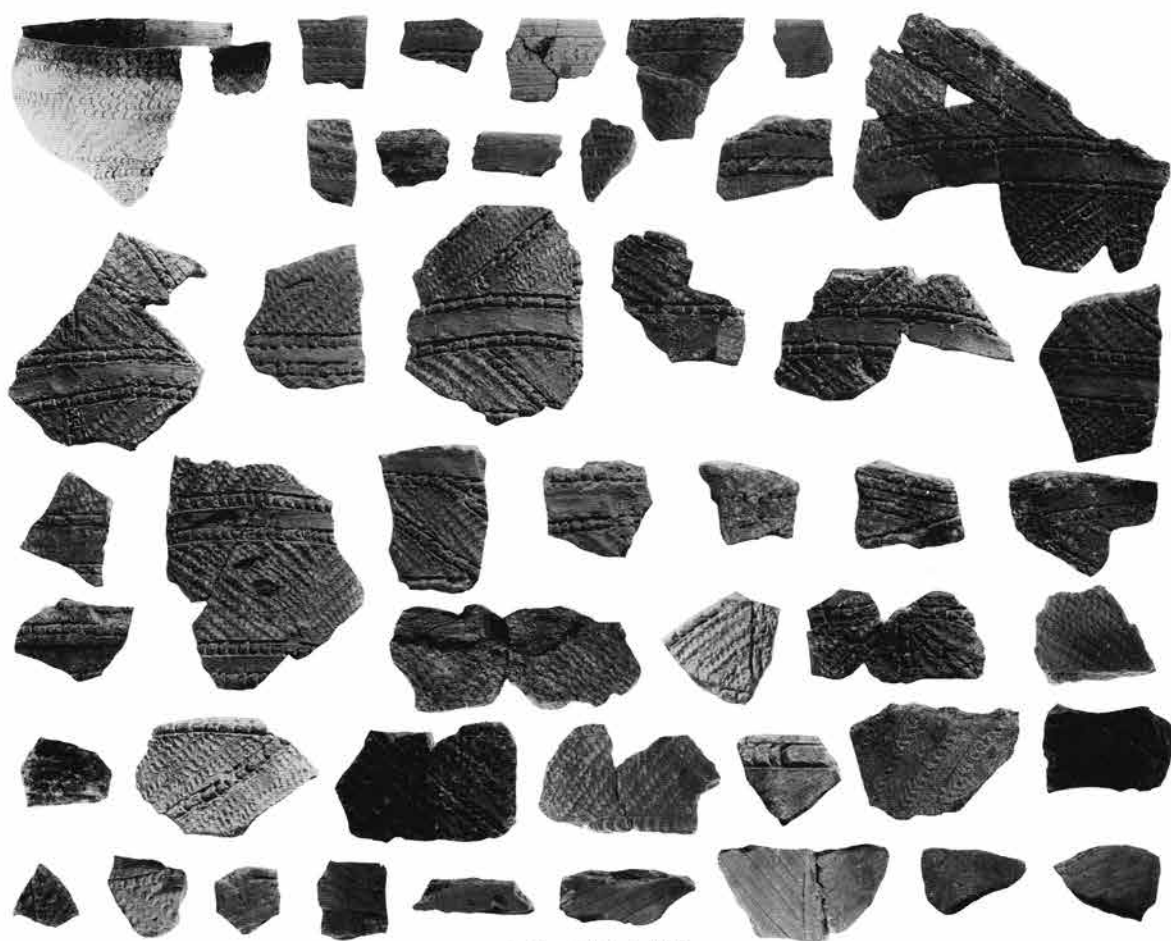
5号住居址出土土器



5号住居址出土土器



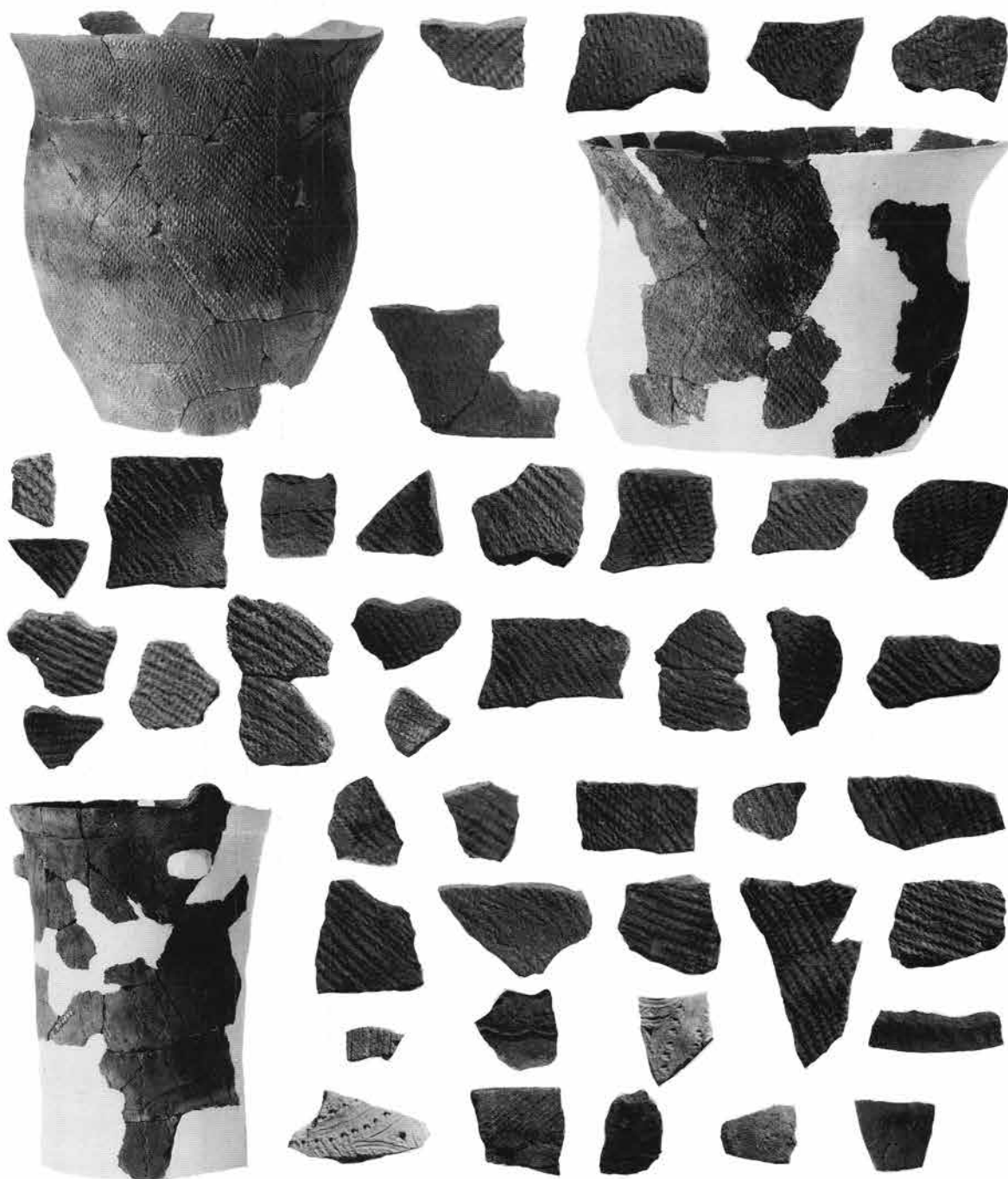
5号住居址出土土器



6号住居址出土土器



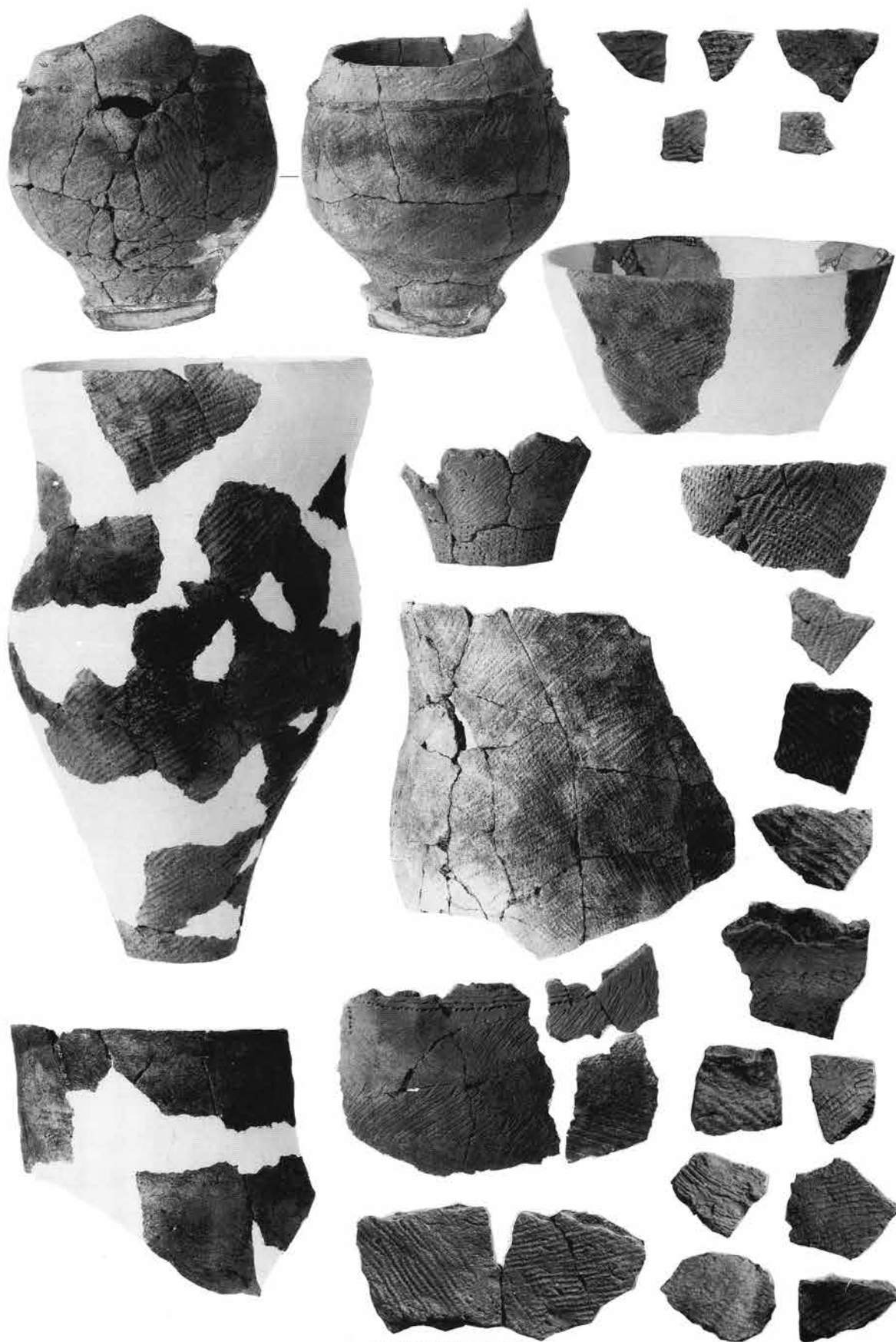
6号住居址出土土器



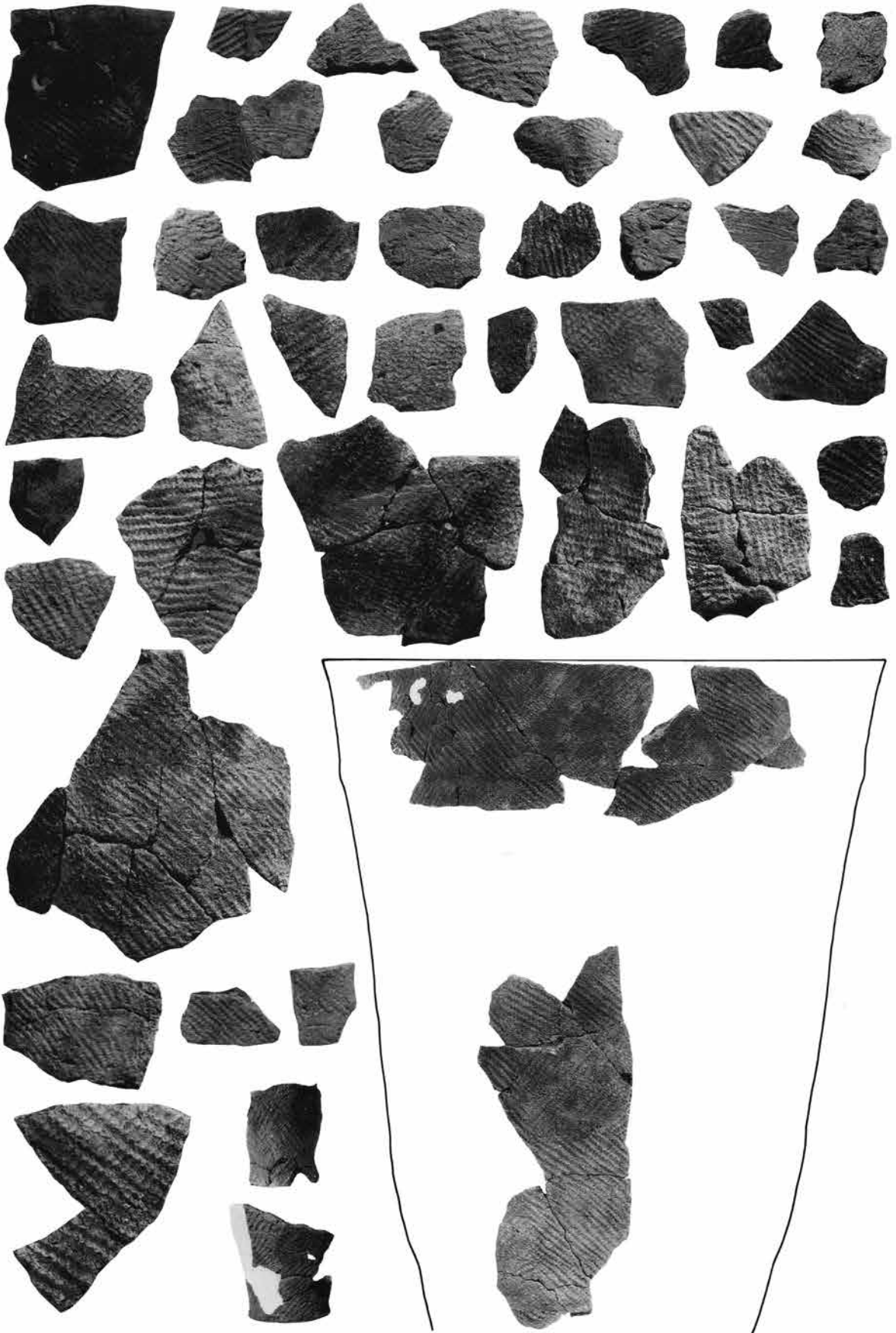
6号住居址出土土器



7号住居址出土土器



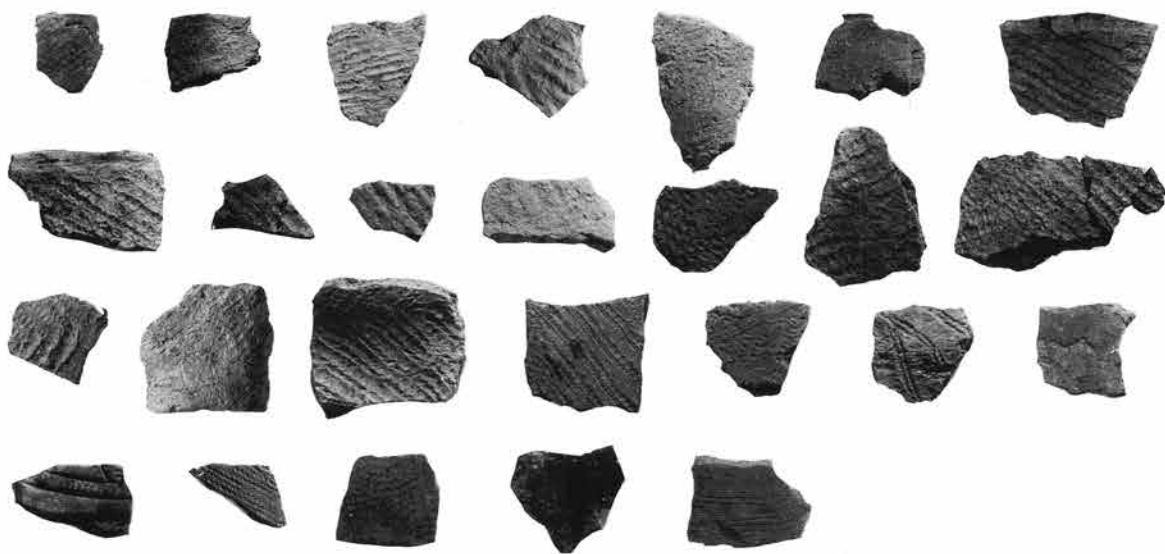
7号住居址出土土器



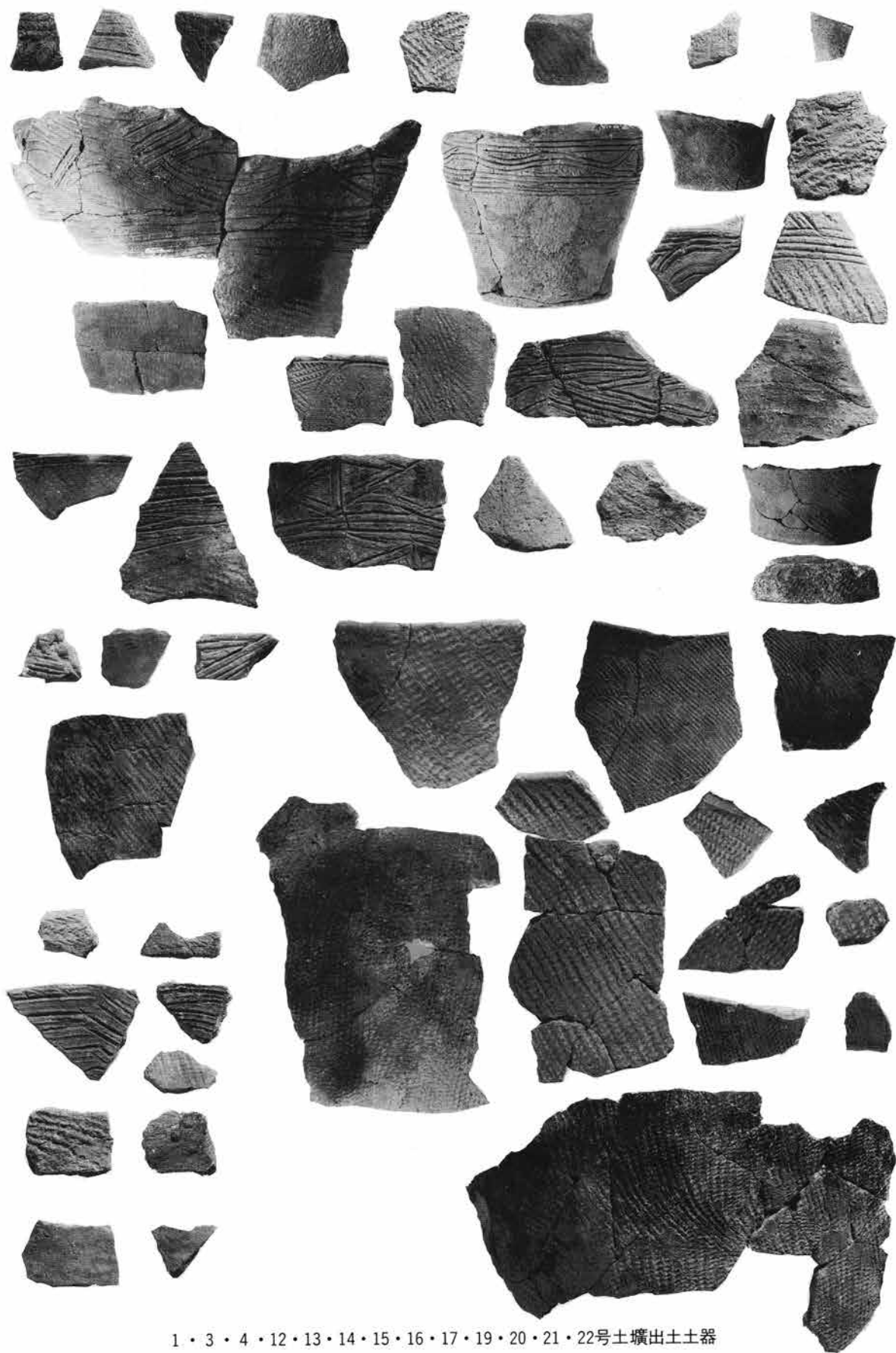
7号住居址出土土器



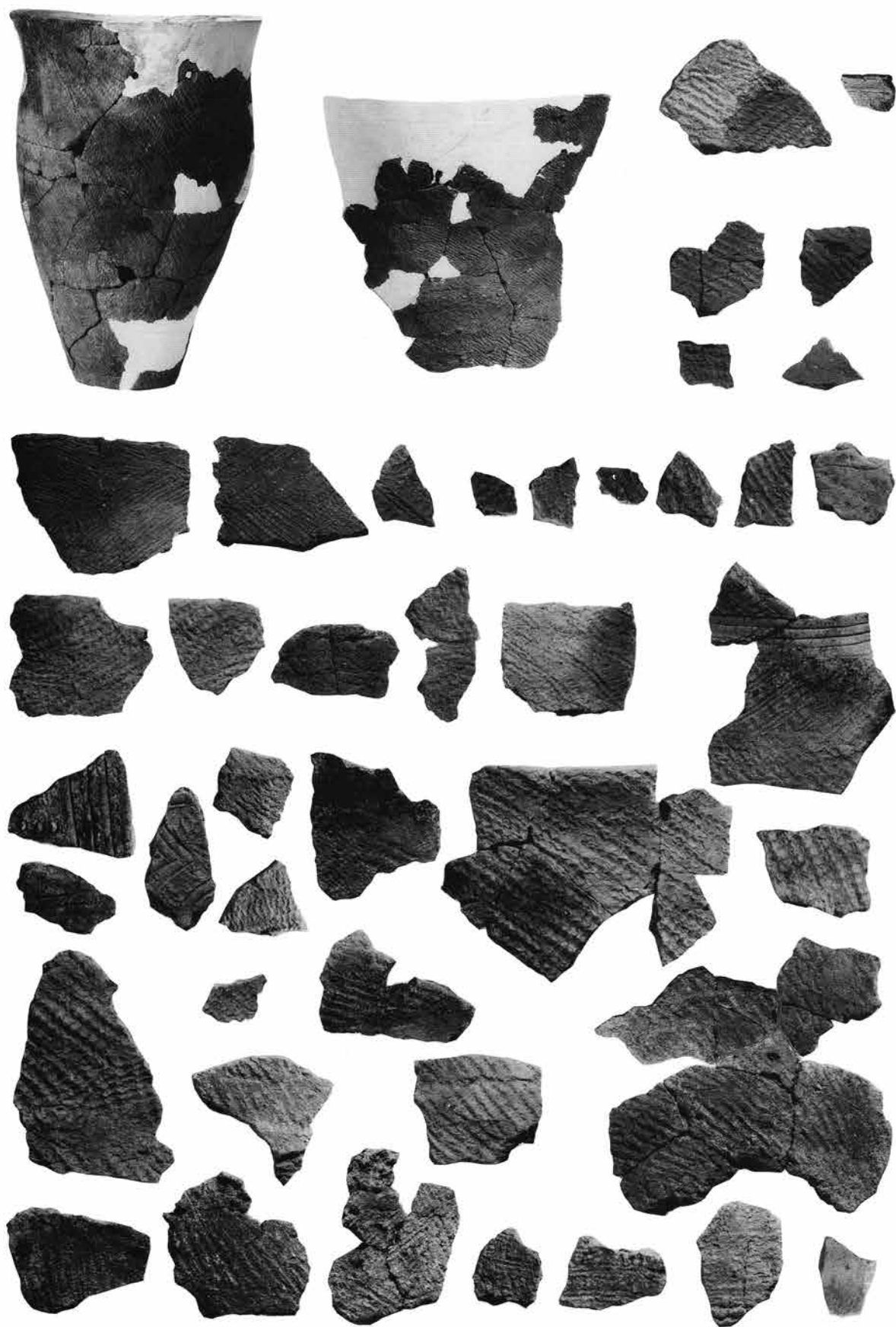
7号住居址出土土器



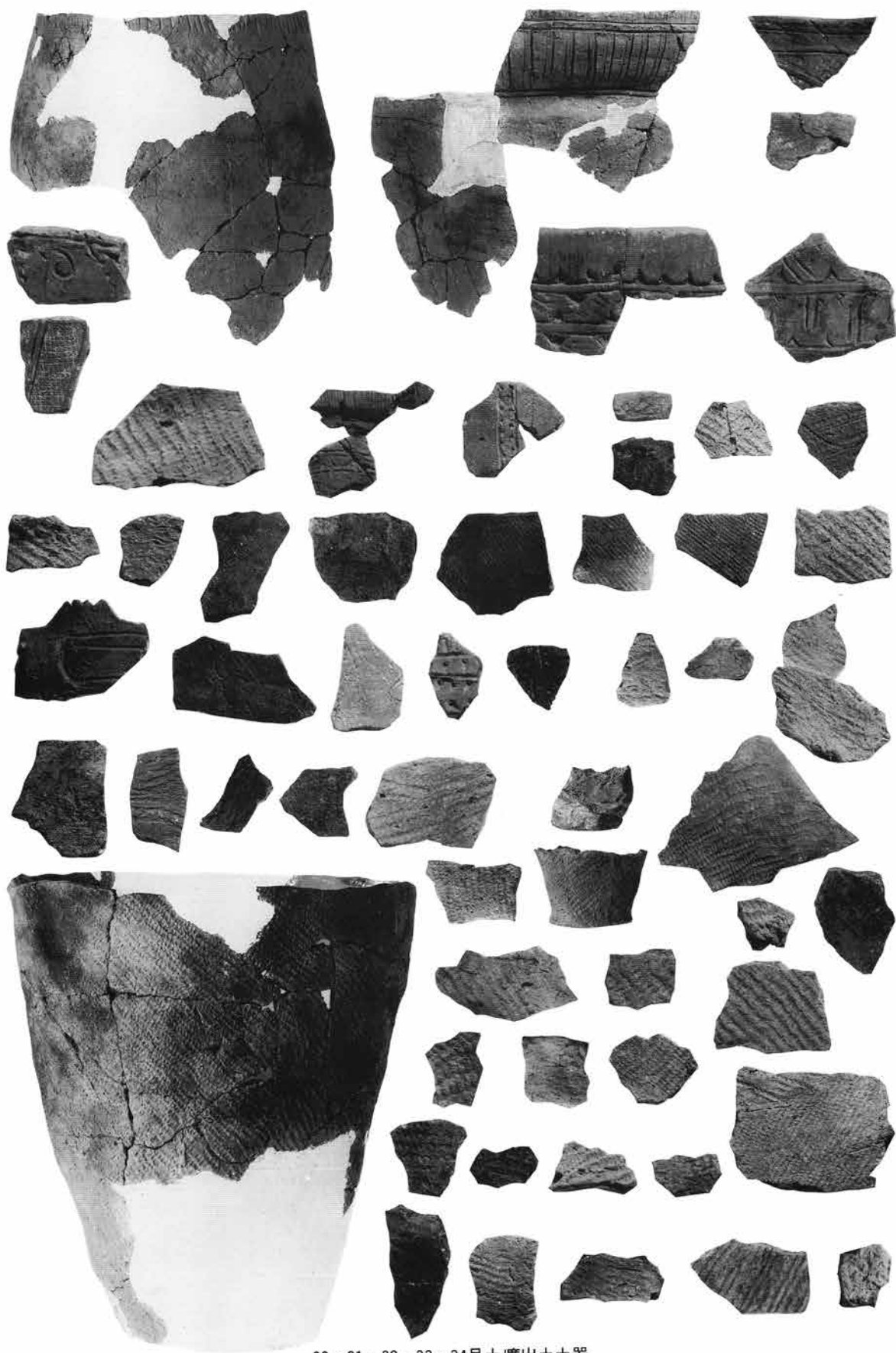
8号住居址出土土器



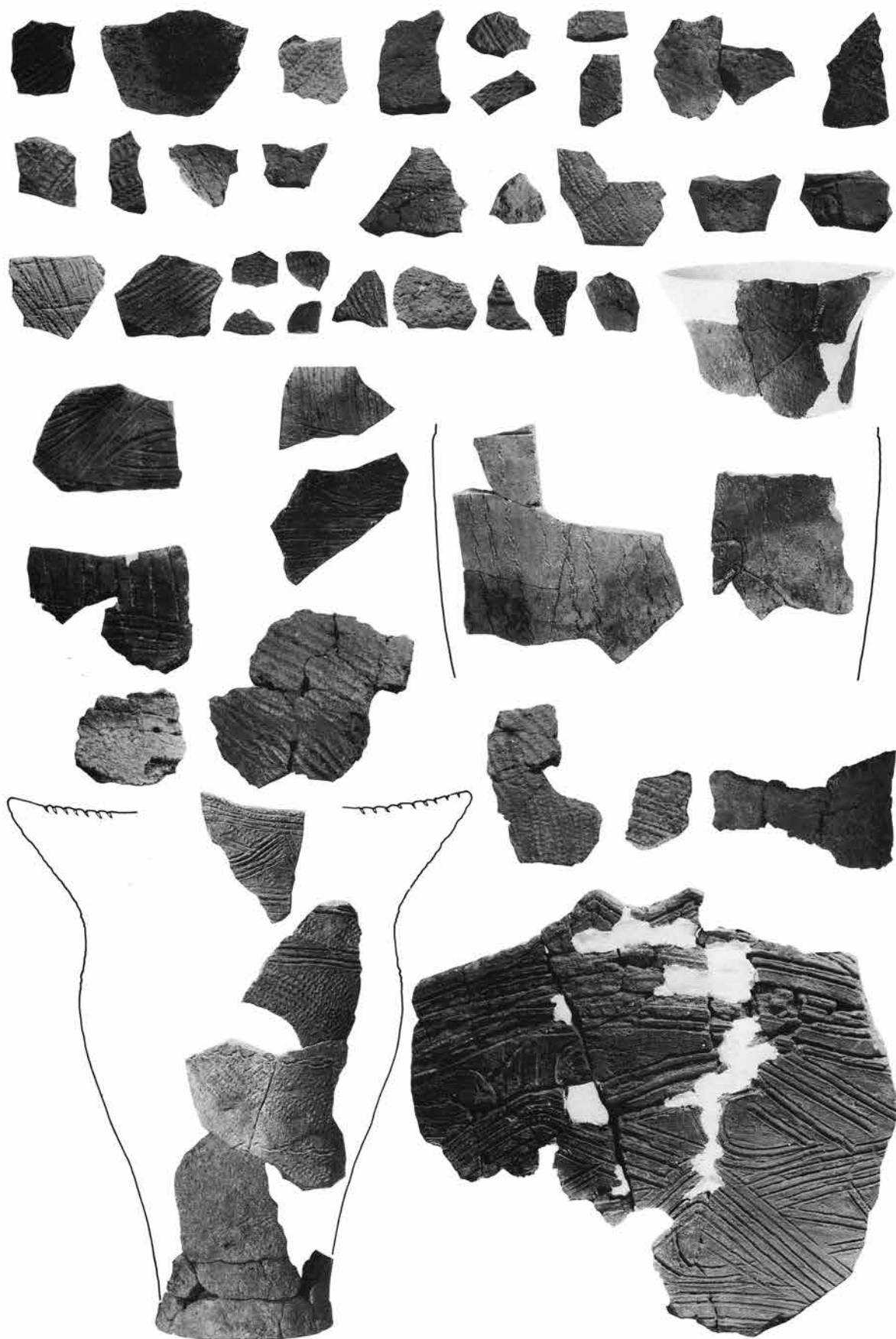
1・3・4・12・13・14・15・16・17・19・20・21・22号土壙出土土器



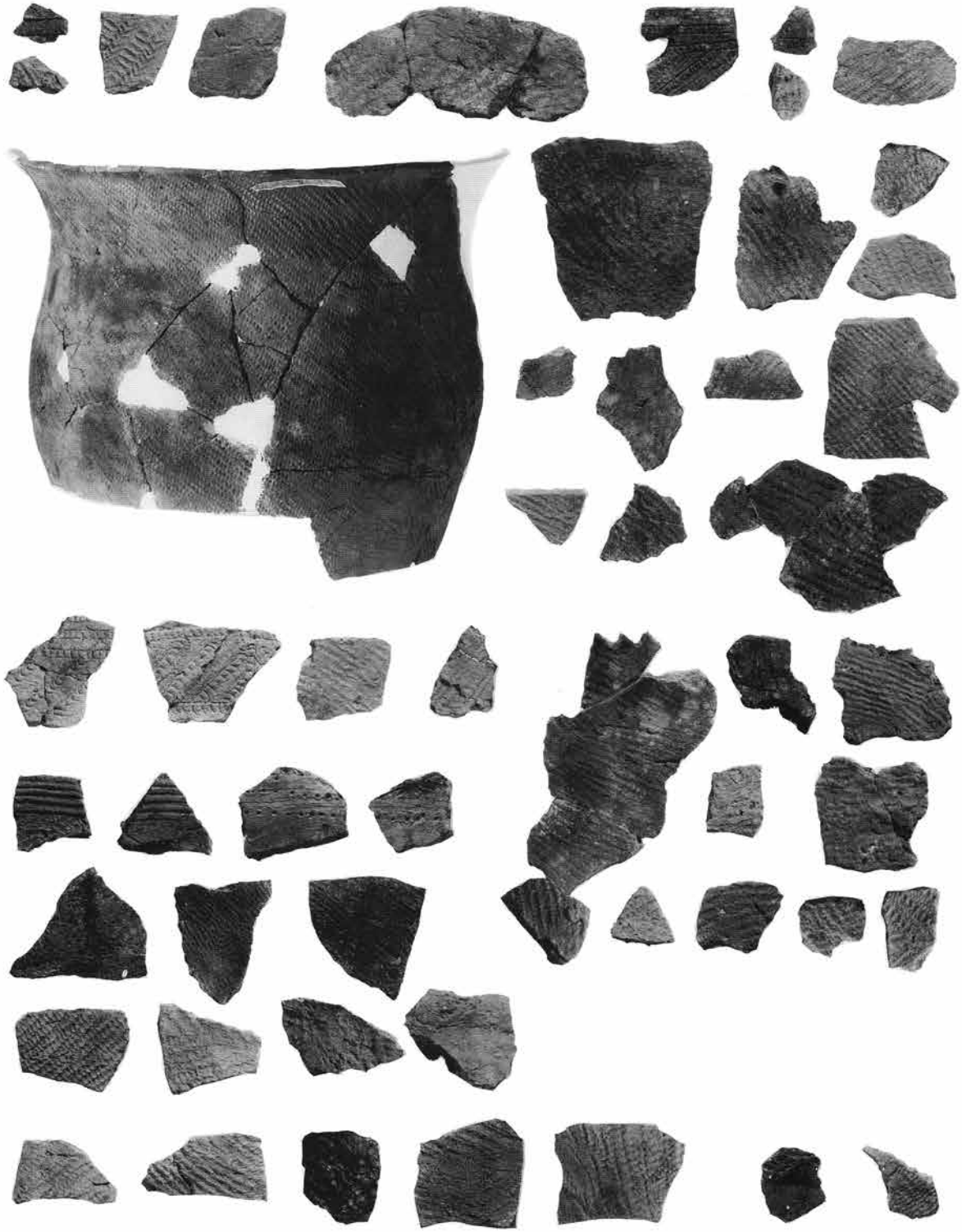
21・23・24・26・27・28・29号土壙出土土器

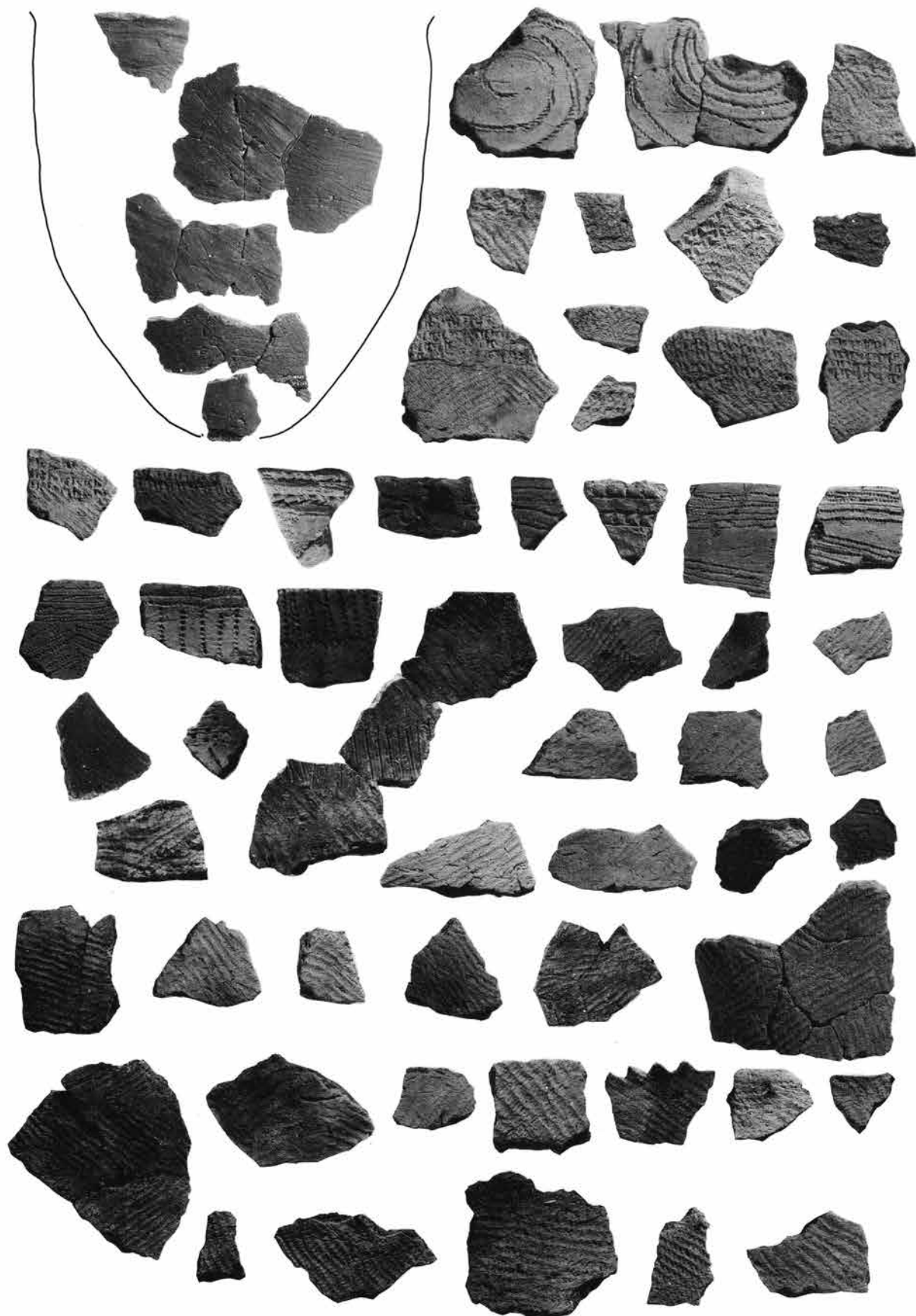


30・31・32・33・34号土壙出土土器

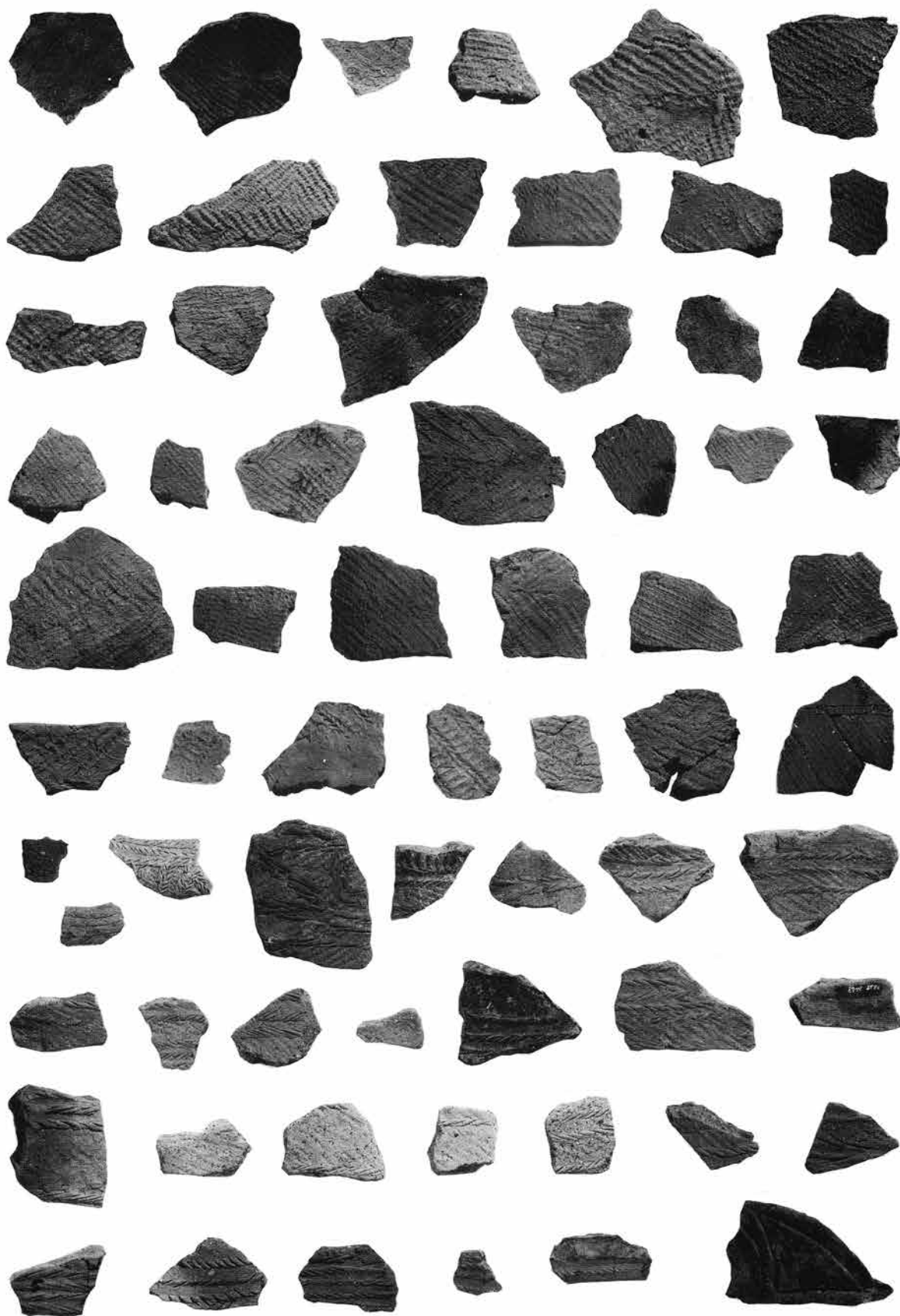


34·35·36·40·46·47号土坑出土土器

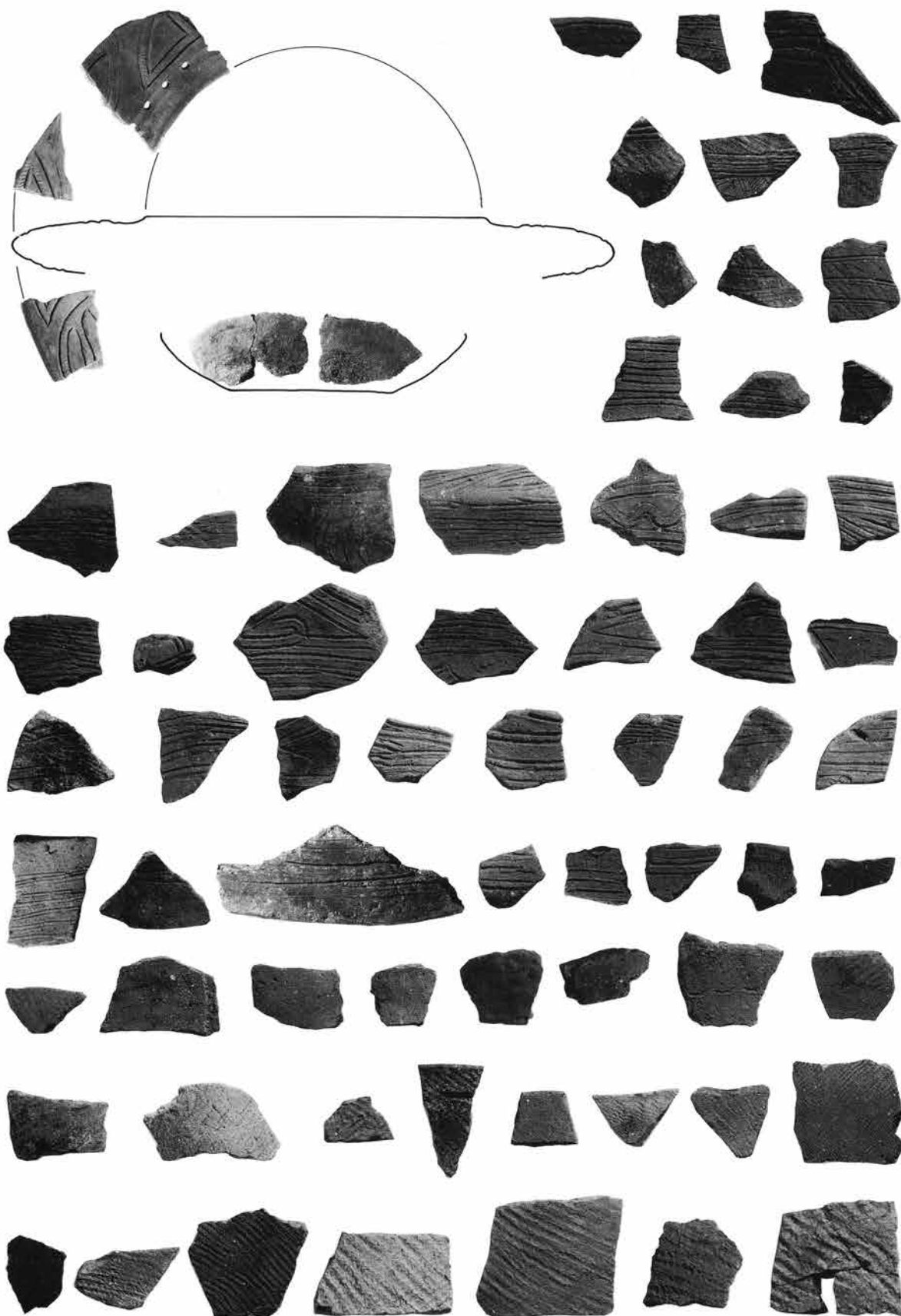




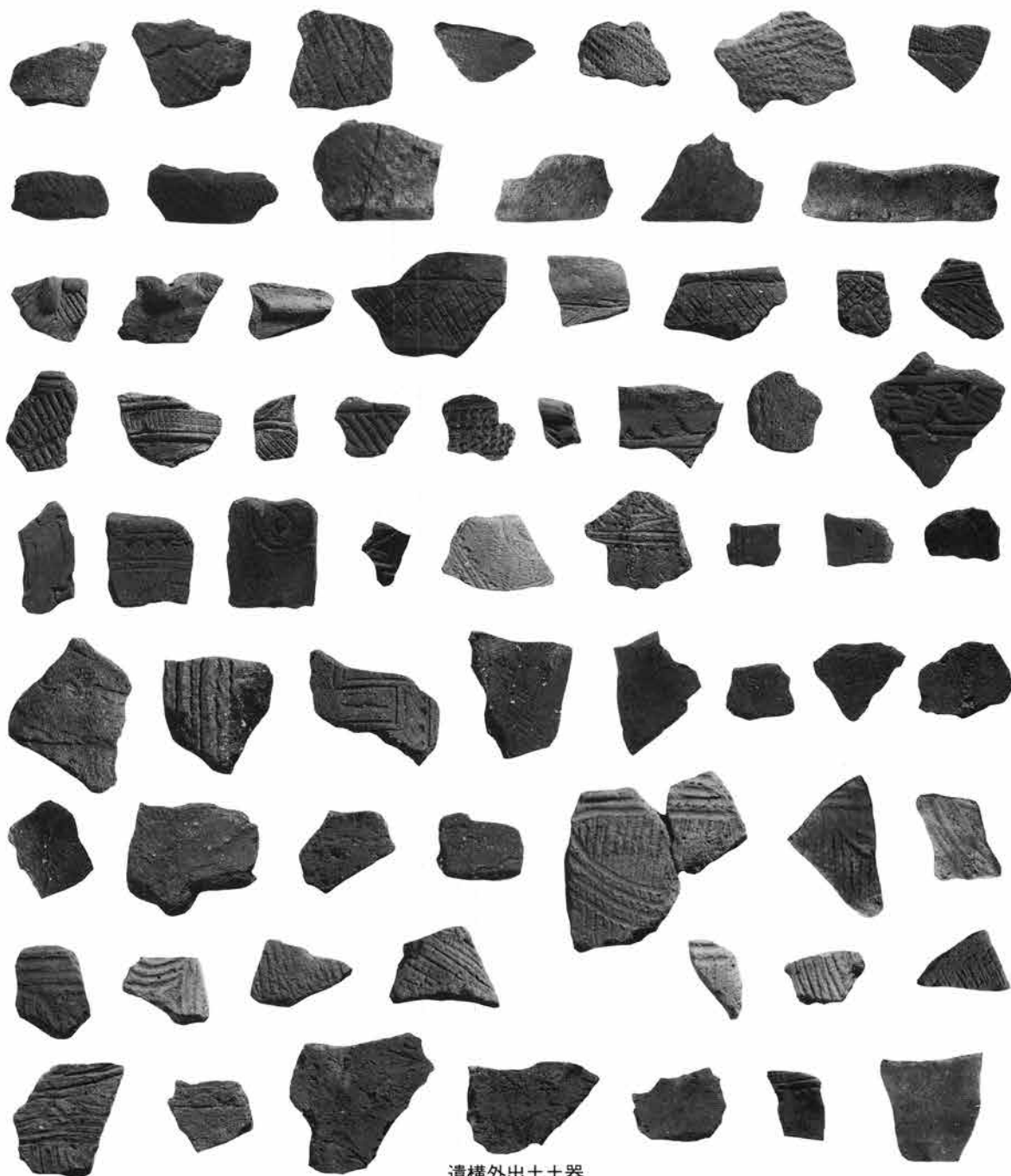
遺構外出土器



遺構外出土器



遺構外出土土器



遺構外出土土器



遺構外出土青磁



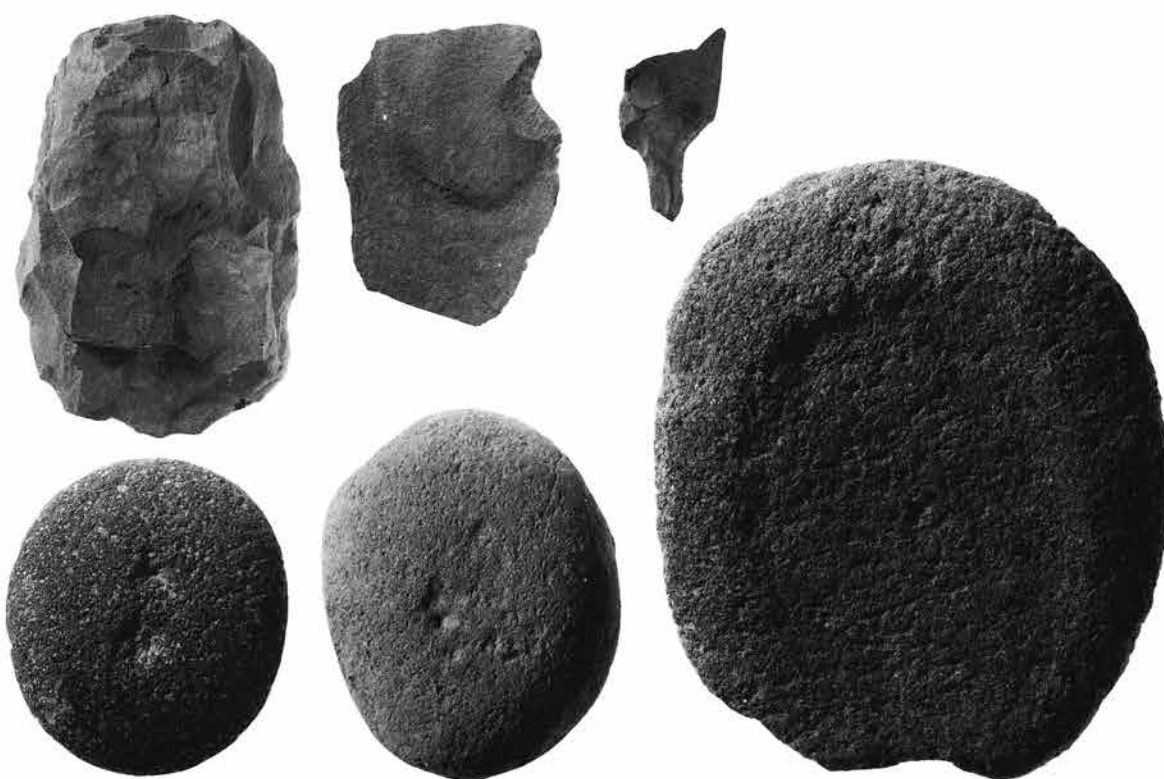
3号住居址出土石器



4号住居址出土石器



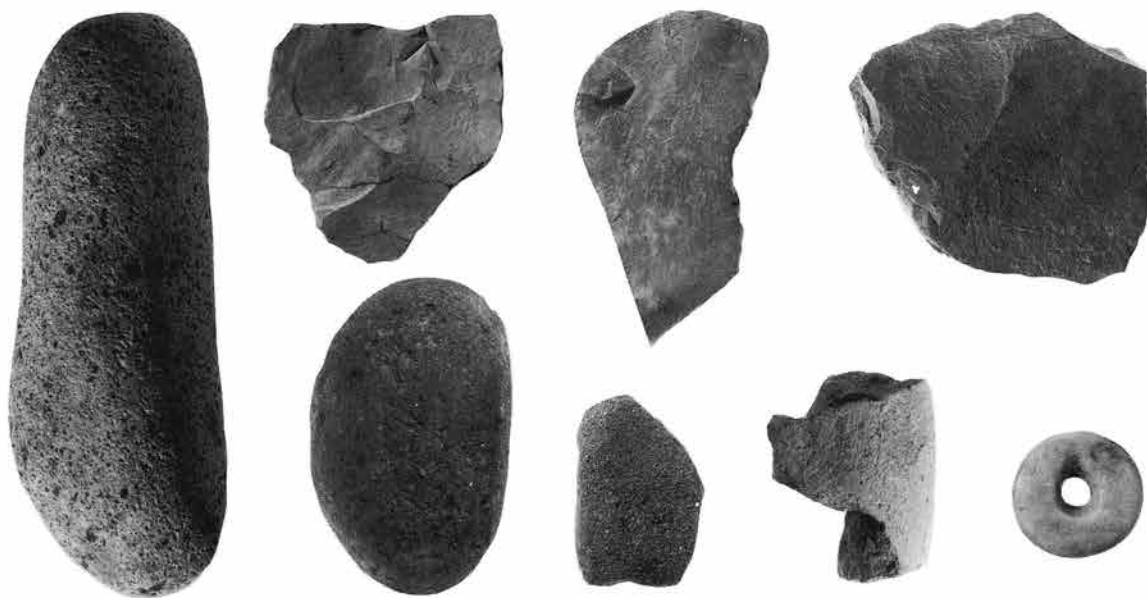
4号住居址出土石器



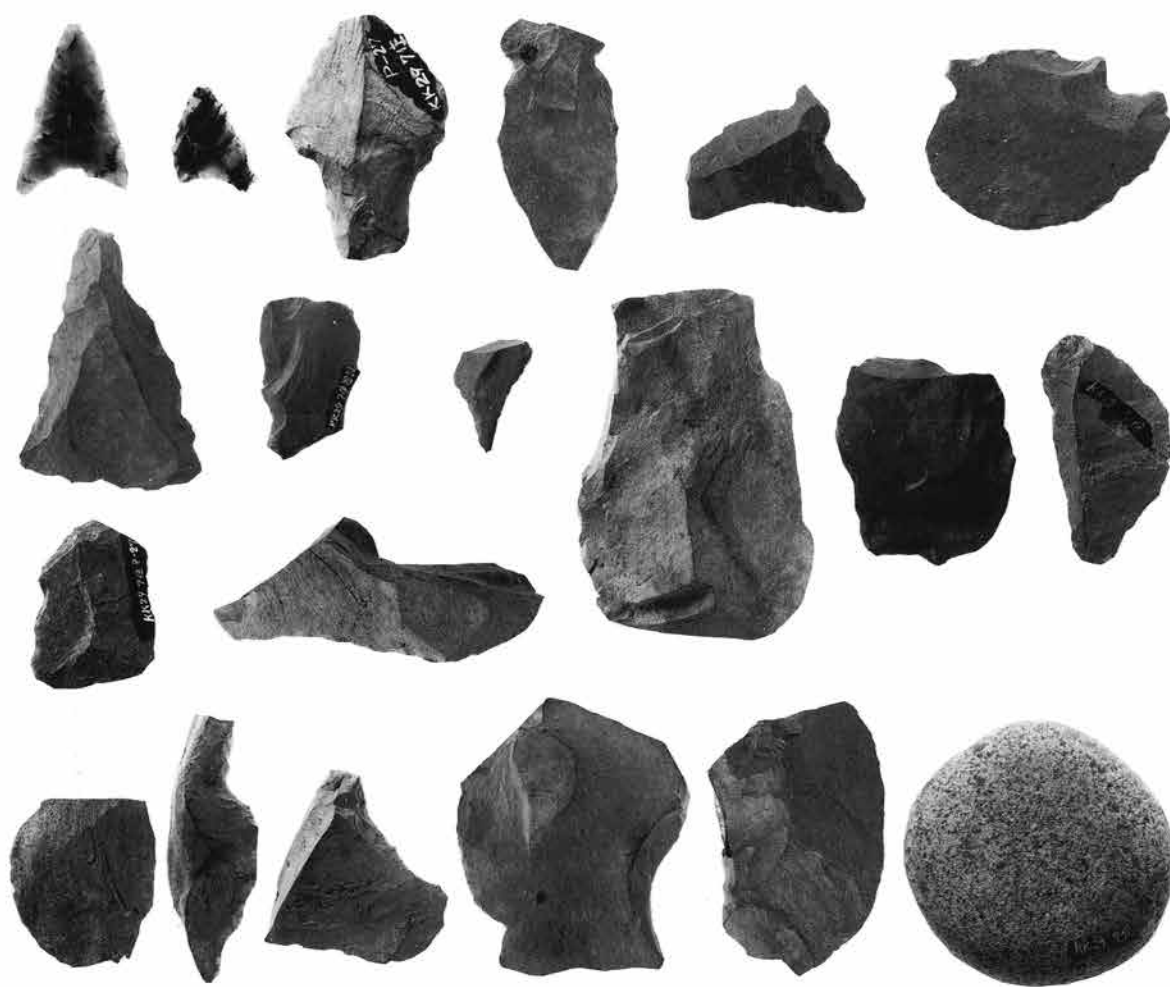
5号住居址出土石器



6号住居址出土石器



6号住居址出土石器



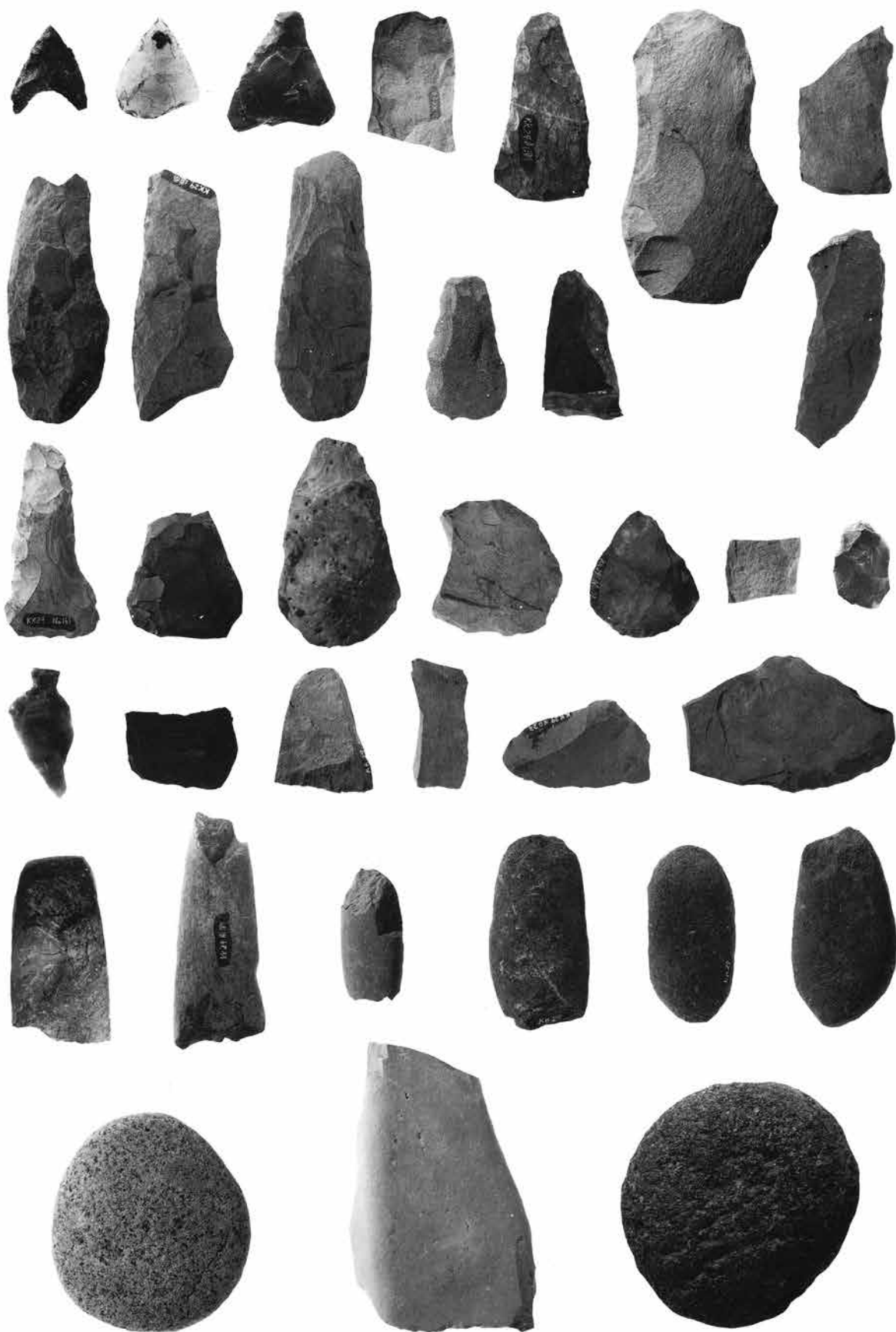
7号住居址出土石器



7号住居址出土石器



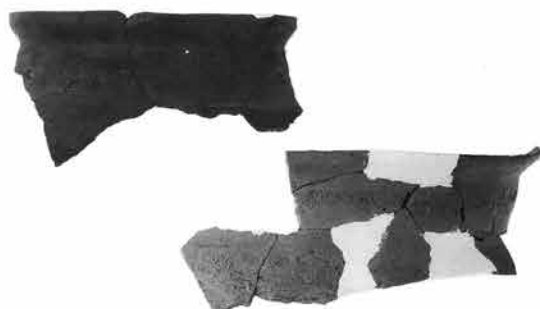
4 · 14 · 17 · 27 · 29 · 30 · 32号土壙出土石器



遺構外出土石器



全 景



1号住居址出土土器・銭貨



全 景



2号住居址出土土器



諏訪西遺跡全景（航空写真）



諏訪西遺跡全景（航空写真）



上 先土器時代
試掘Jトレンチ遺物出土状態

下 先土器時代
調査区全景（北から）





先土器時代 調査区全景（東から）



先土器時代 調査区北壁セクション



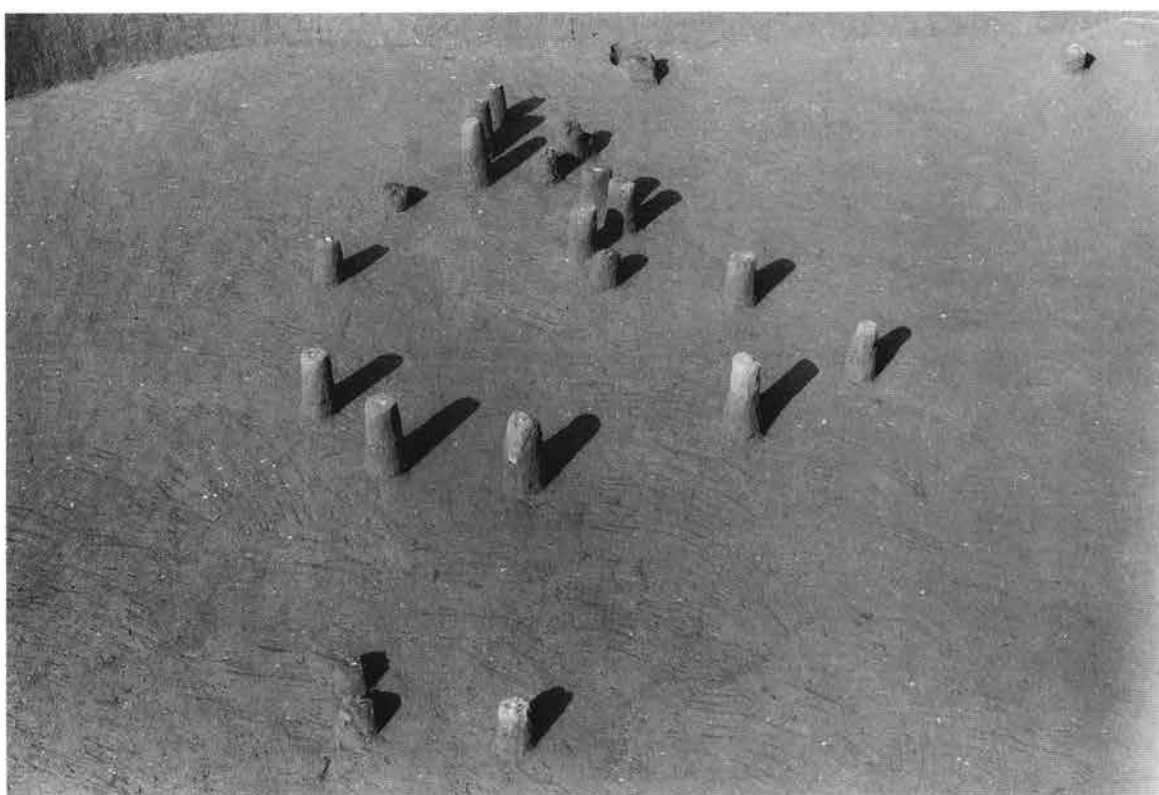
先土器時代 調査区東壁セクション



先土器時代 調査区西壁セクション



先土器時代 第1ブロック 遺物出土状態



先土器時代 第1ブロック 遺物出土状態



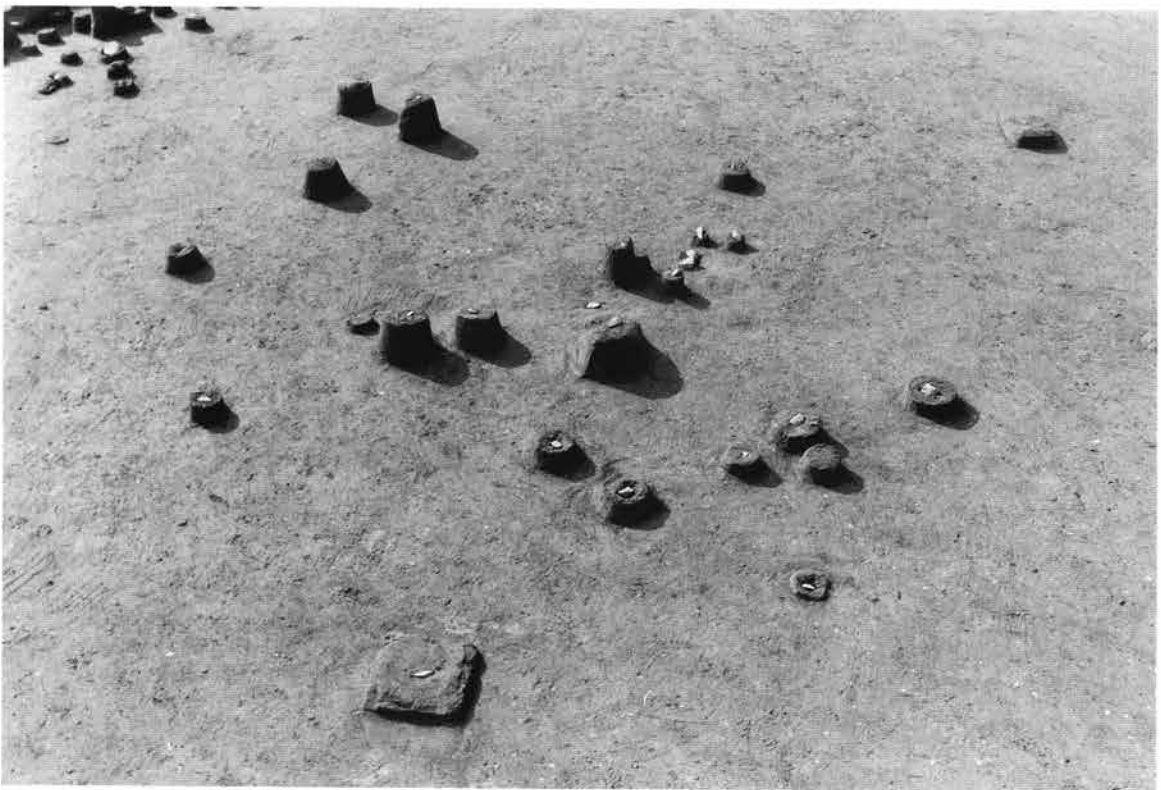
先土器時代 第2ブロック 遺物出土状態



先土器時代 第2ブロック 遺物出土状態



先土器時代 第2・3ブロック 遺物出土状態



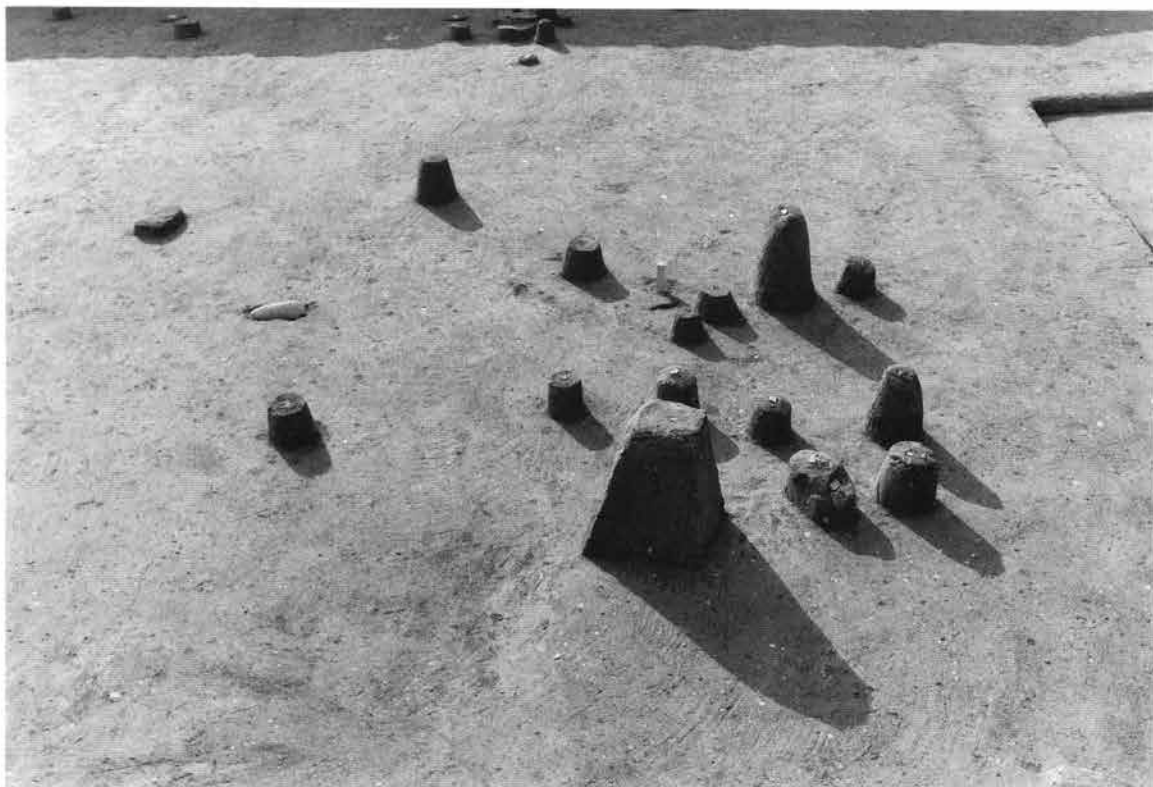
先土器時代 第3ブロック 遺物出土状態



先土器時代 第3ブロック 石核出土状態



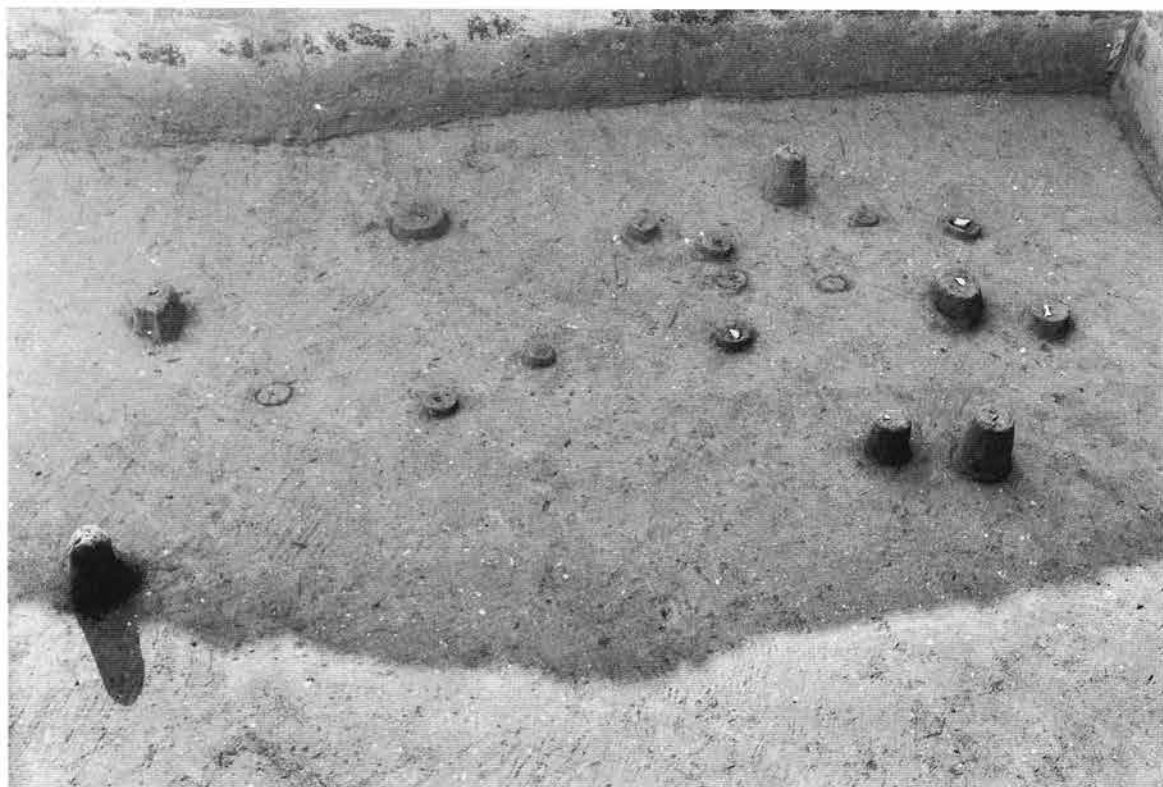
先土器時代 第3ブロック ナイフ形石器出土状態



先土器時代 第4ブロック 遺物出土状態



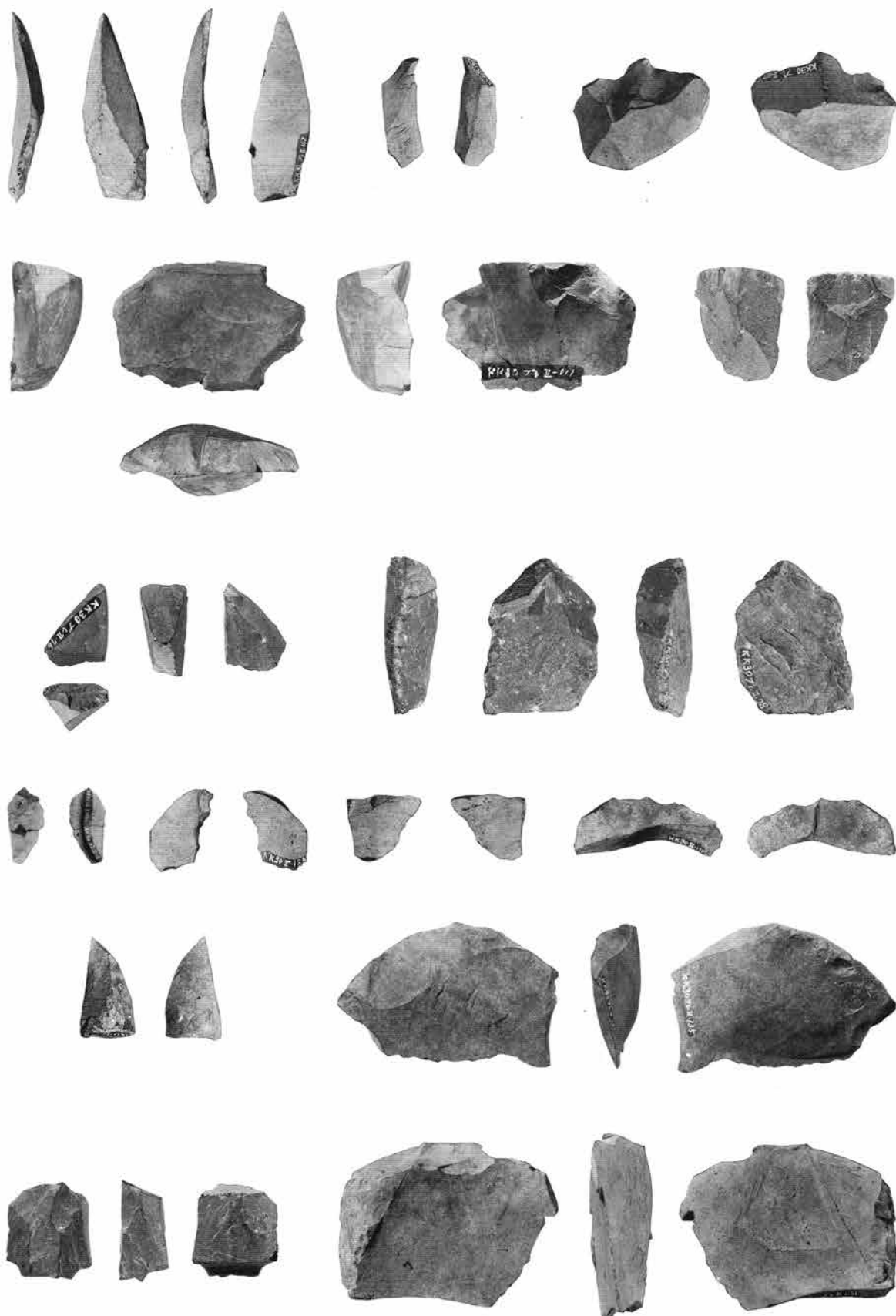
先土器時代 第5ブロック 遺物出土状態



先土器時代 第6ブロック 遺物出土状態

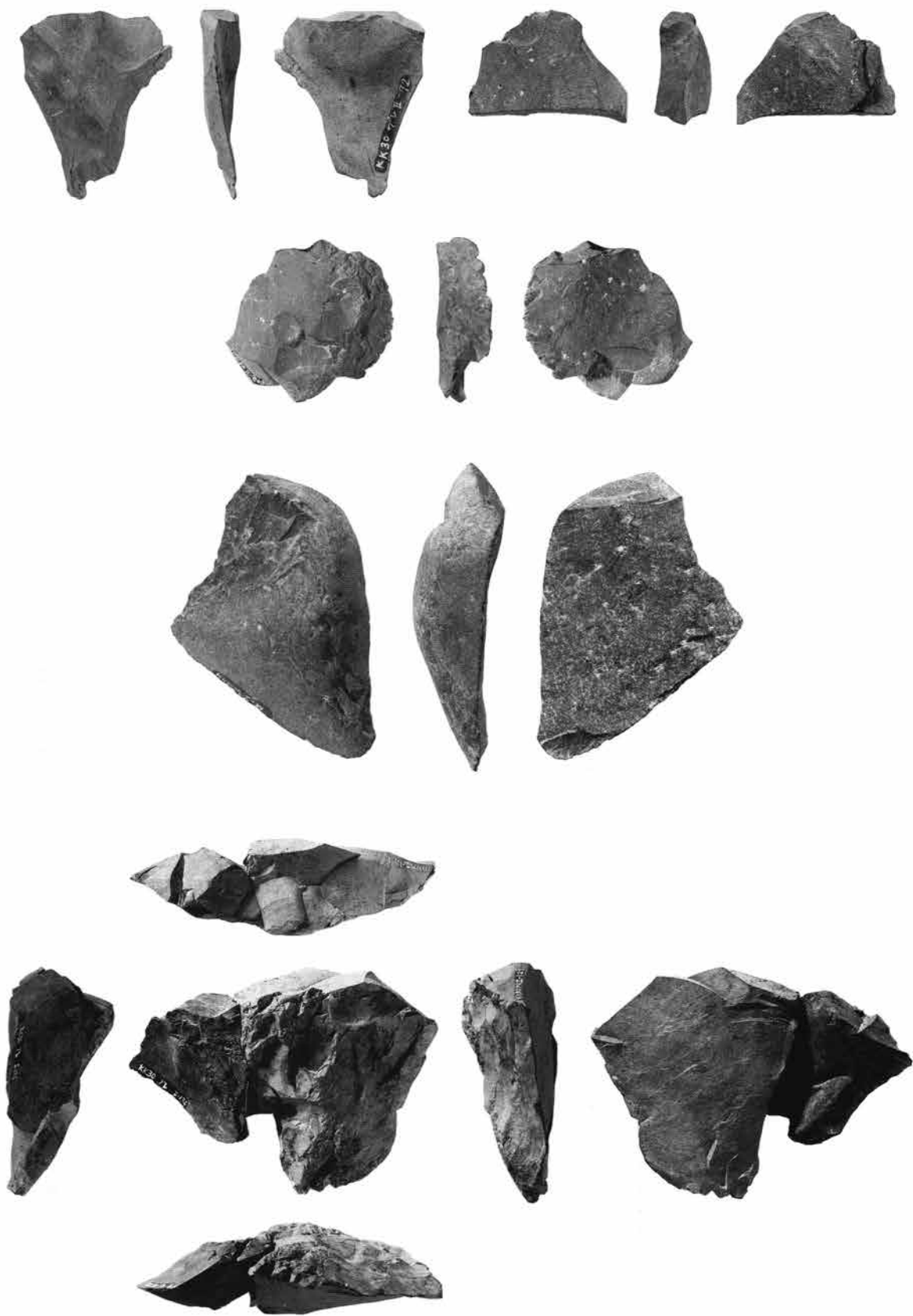


先土器時代 第7ブロック 遺物出土状態



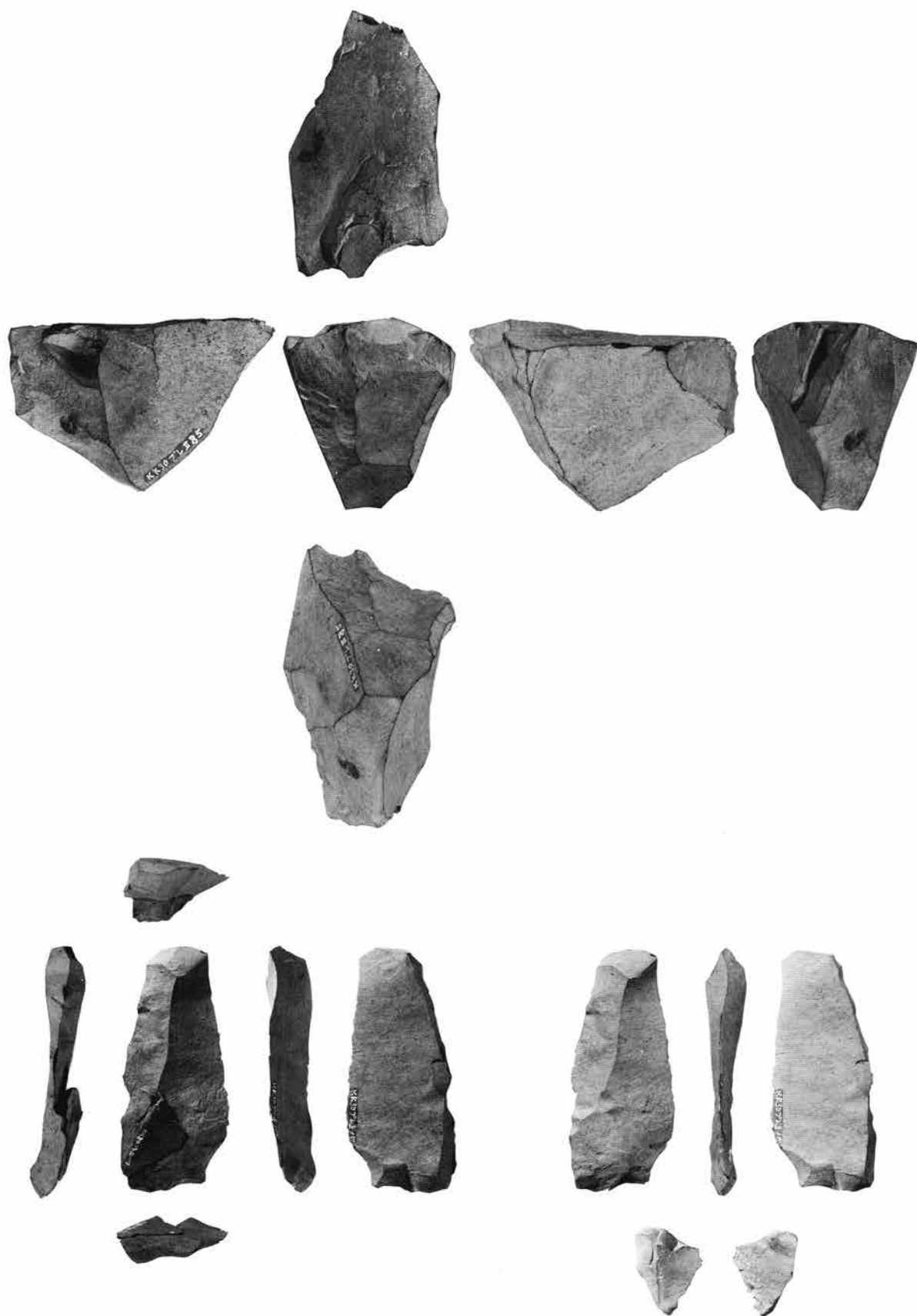
先土器時代出土遺物

(S=1/2)



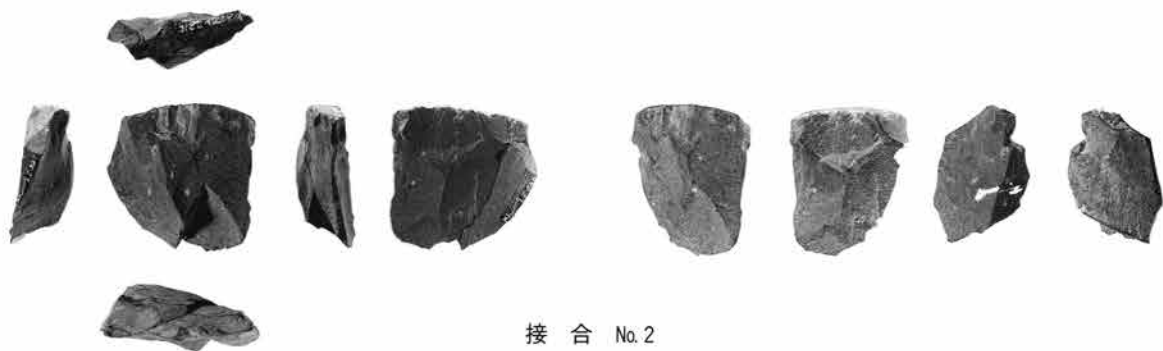
先土器時代出土遺物

(S=1/2)



接合 No. 1

(S=1/2)



接合 No. 2

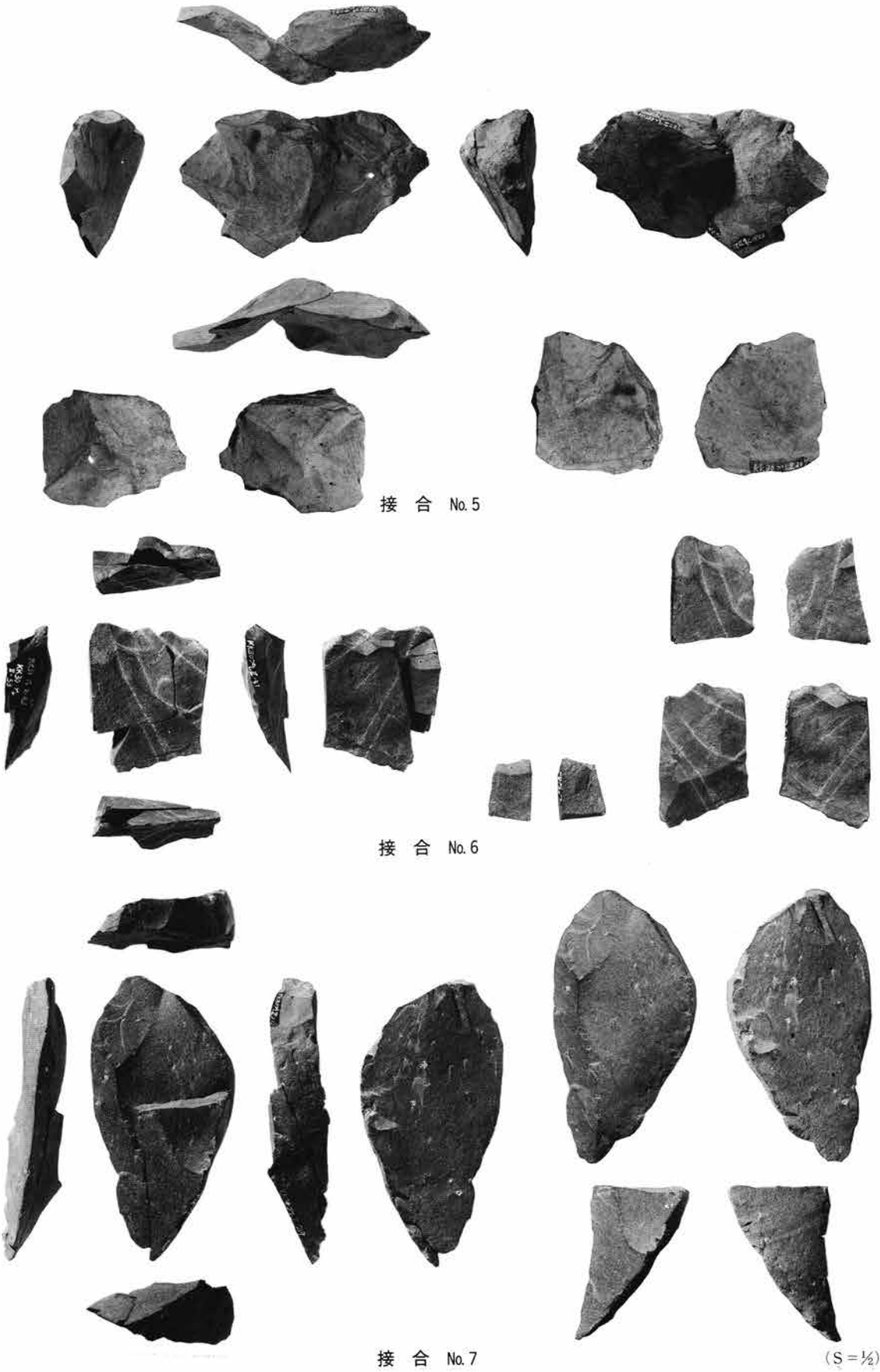


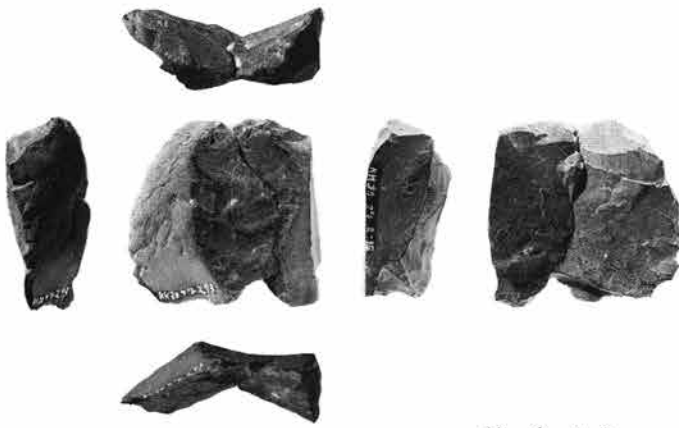
接合 No. 3



接合 No. 4

(S = 1/2)

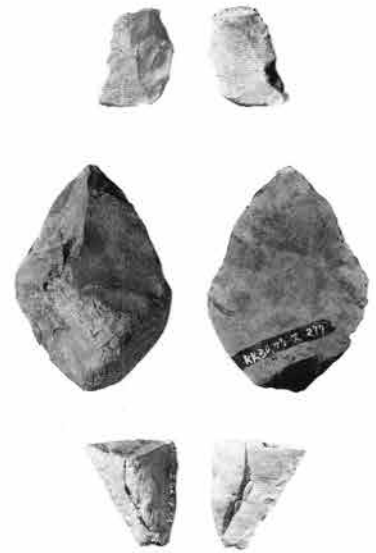




接合 No. 8



接合 No. 9

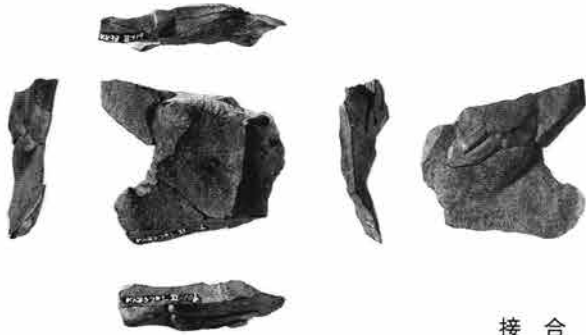
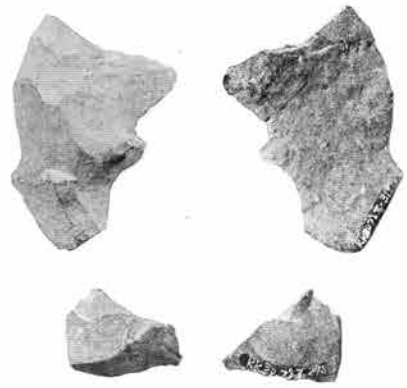


接合 No.10

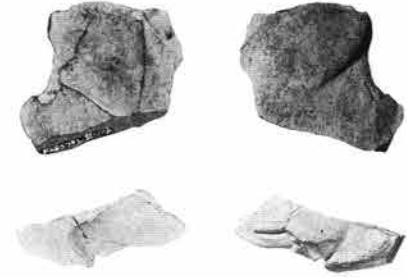
(S = 1/2)



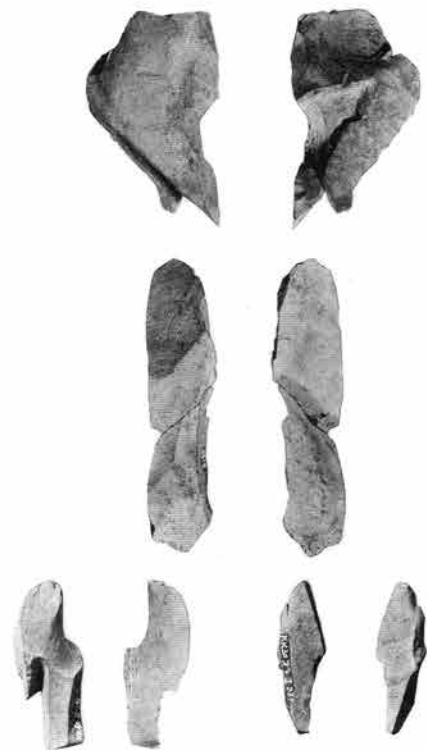
接合 No.11



接合 No.12



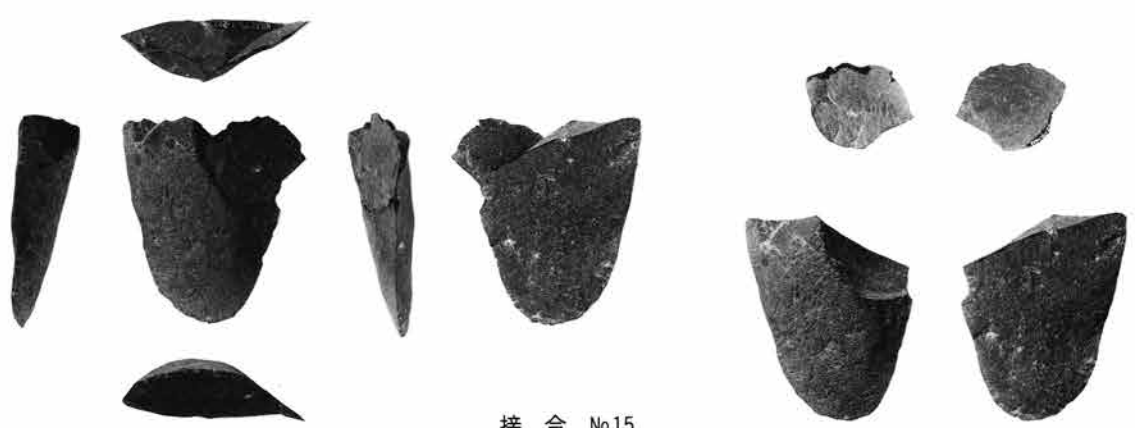
接合 No.13



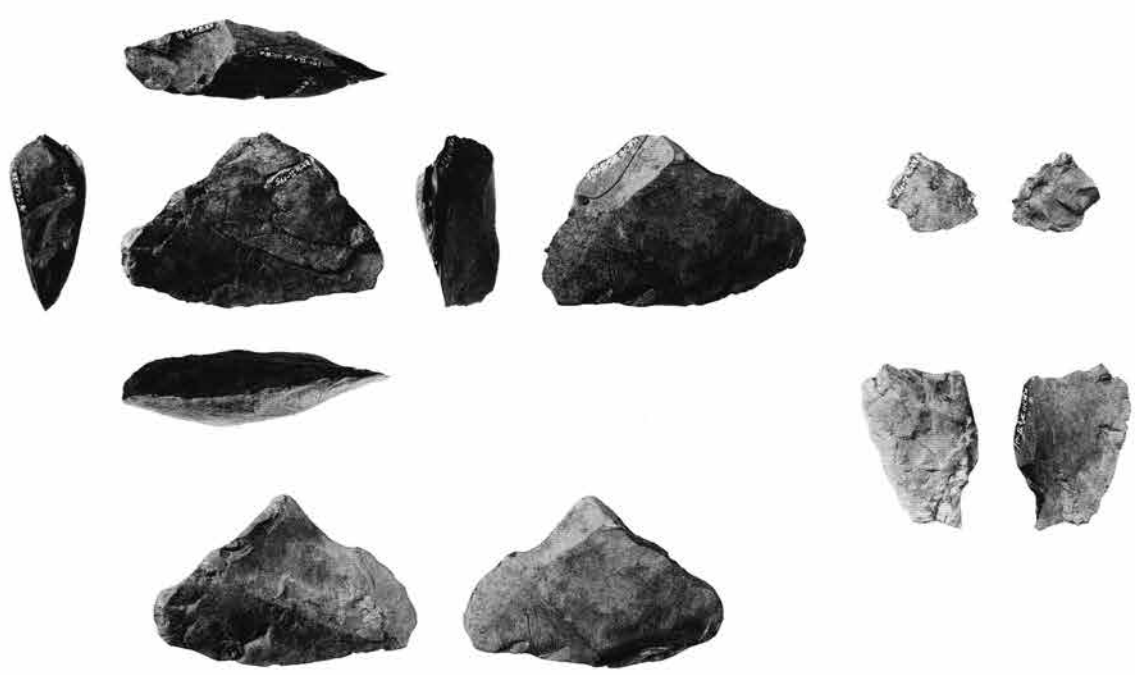
(S=1/2)



接合 No.14



接合 No.15



接合 No.16

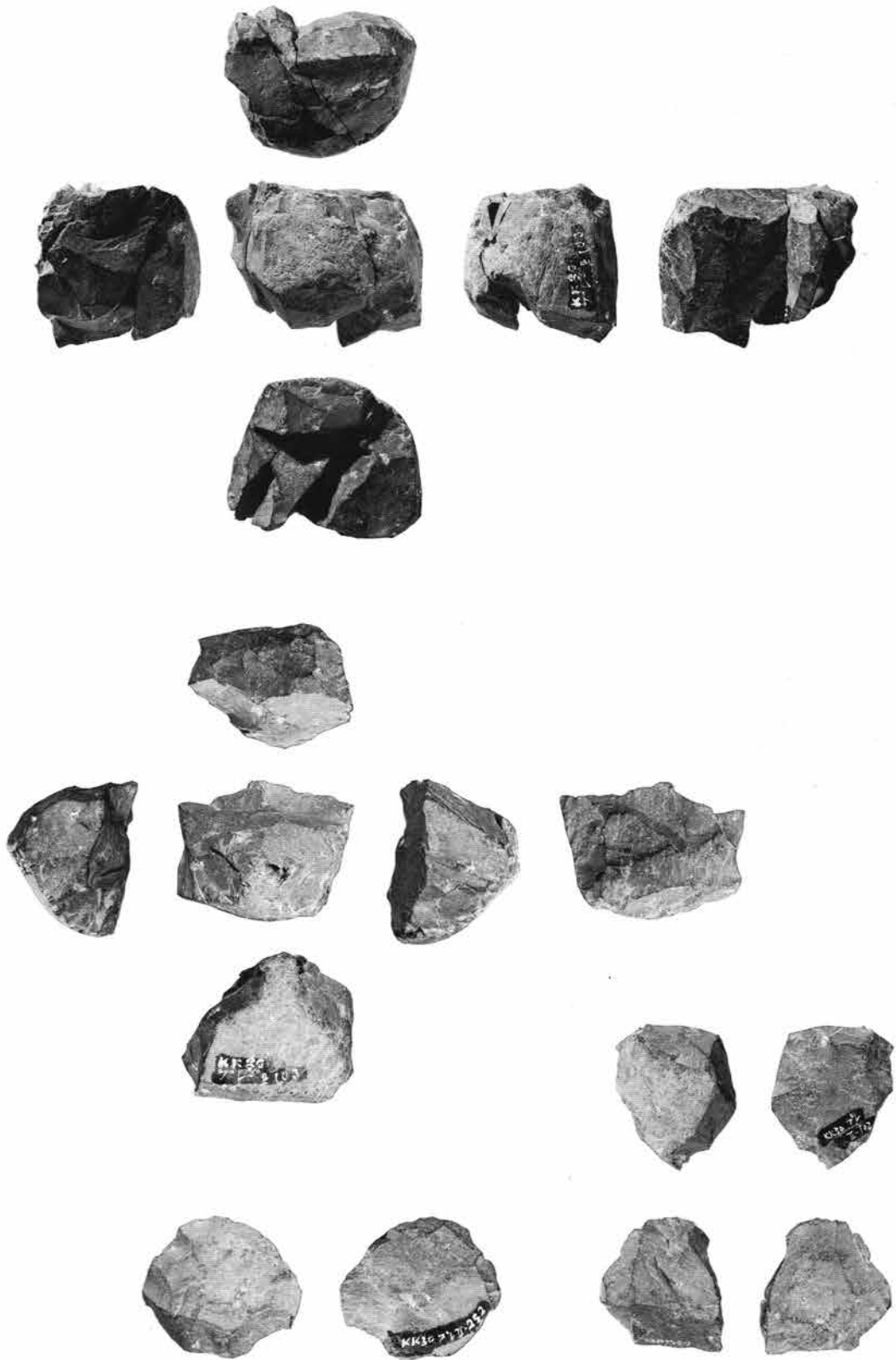
(S=1/2)



(S = 1/2)

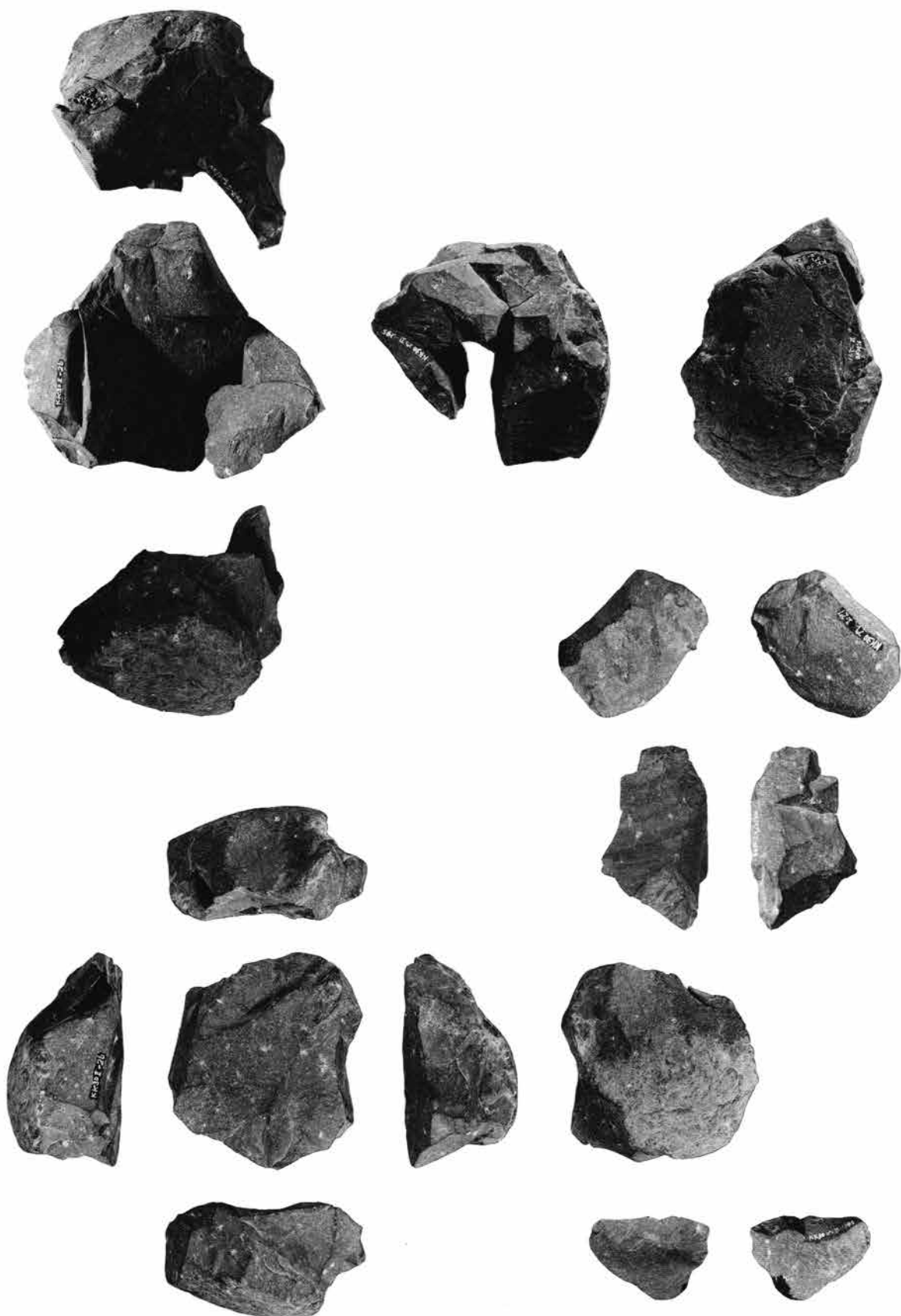
接合 No.17(1)





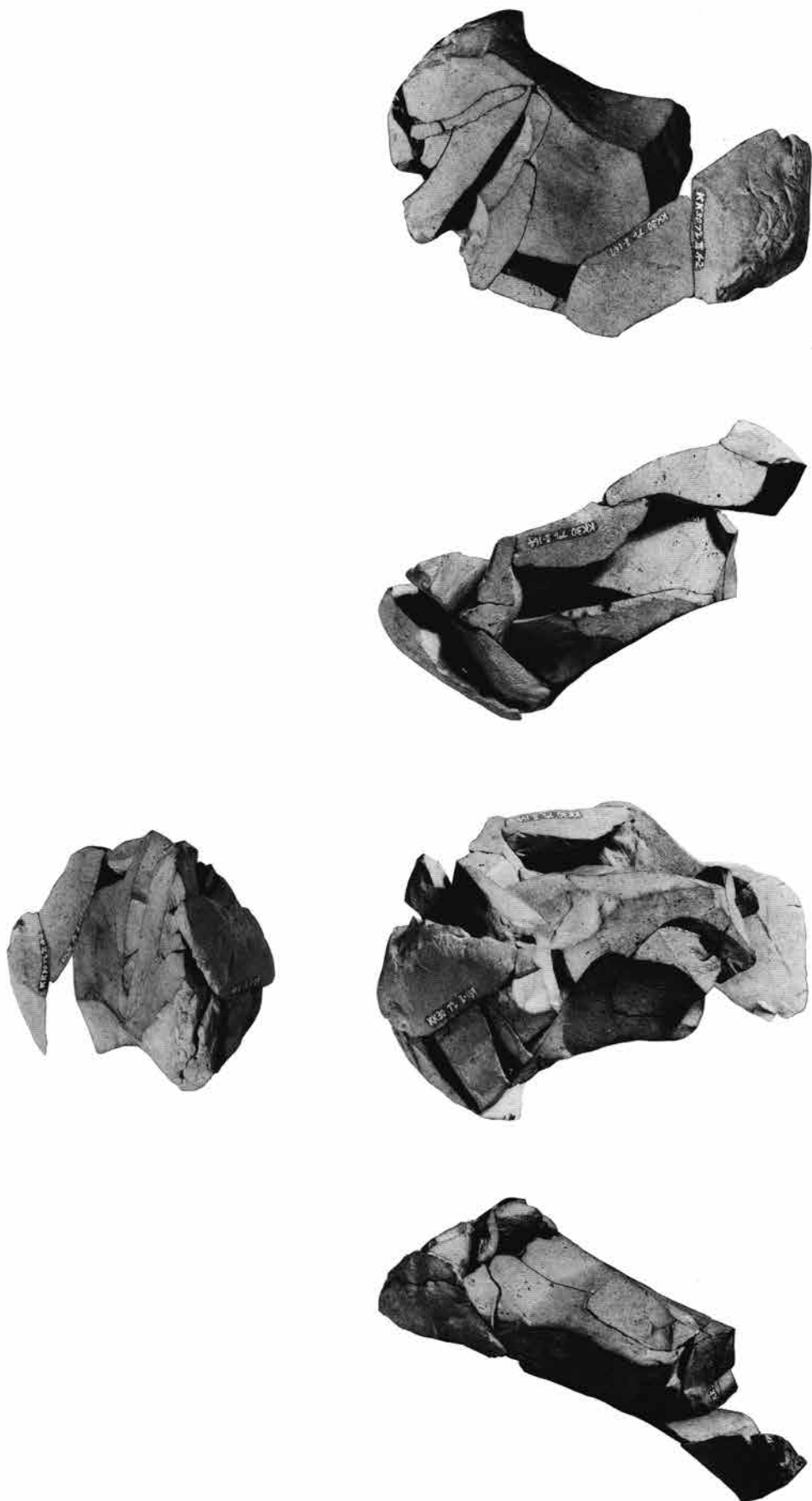
接合 No.18

(S = 1/2)



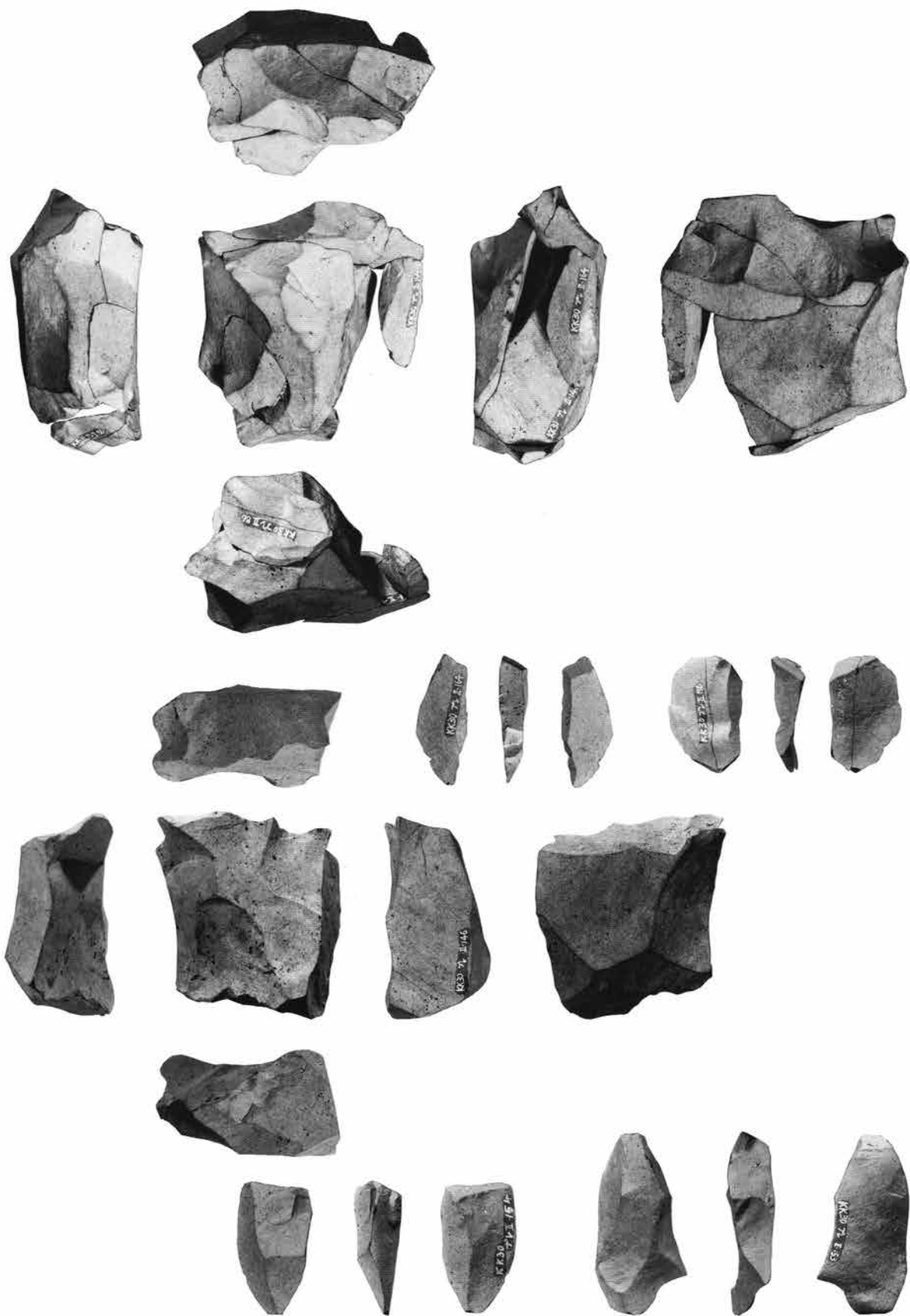
接合 No.20

(S = 1/2)



(S = 1/2)

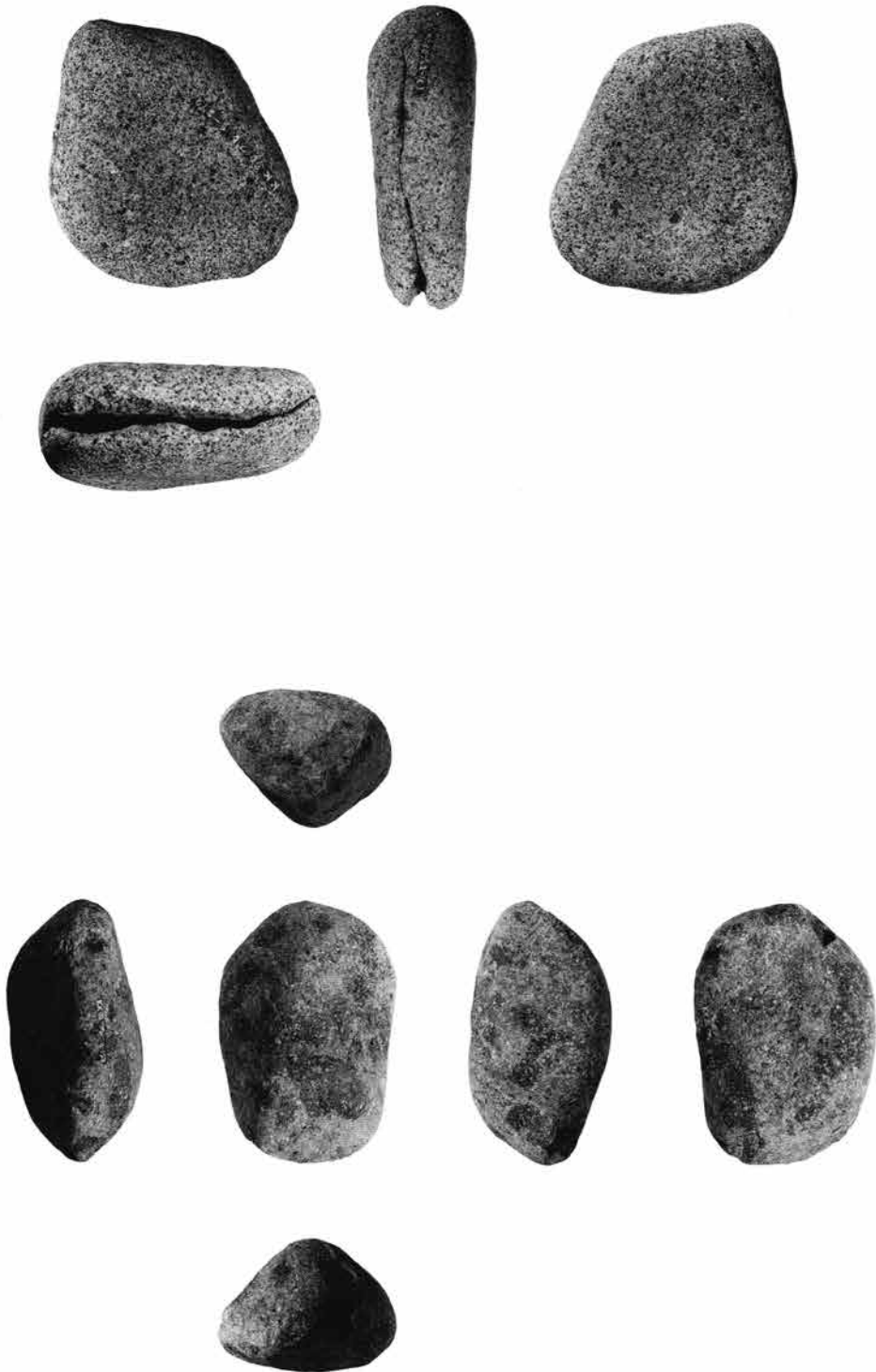
接合 No.21(1)



接合 No.21(2)

(S=1/2)





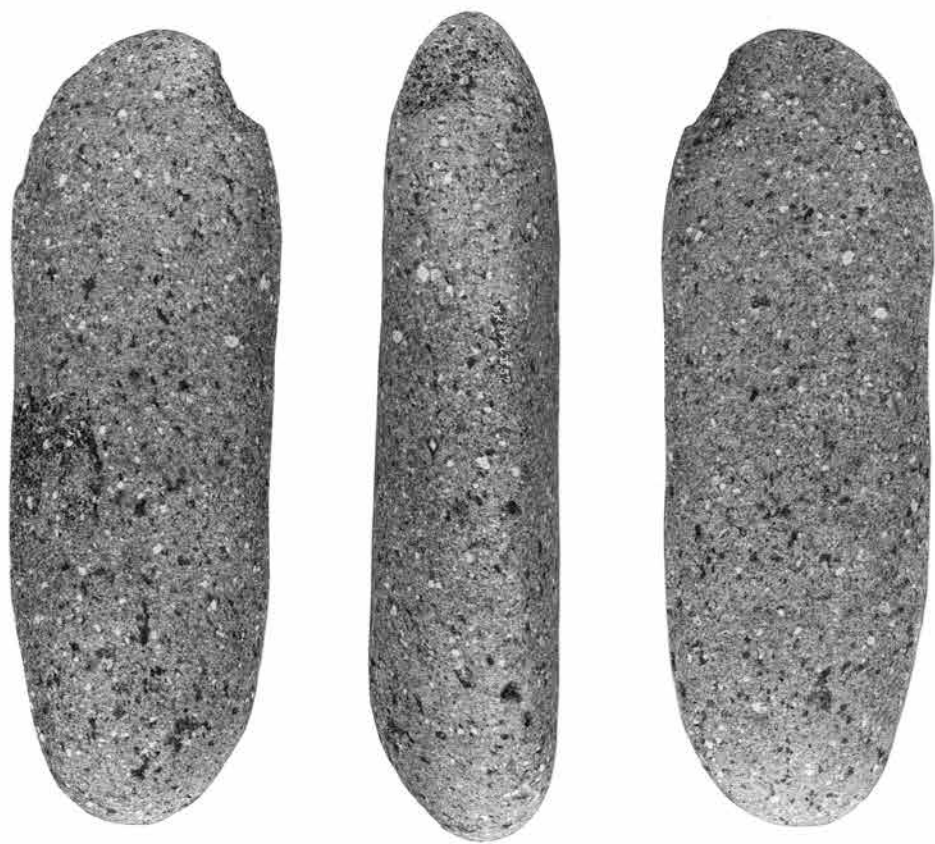
先土器時代出土遺物

(S=1/2)



先土器時代出土遺物

(S=1/6)



先土器時代出土遺物

(S=1/3)



1号住居址全景（南より）



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



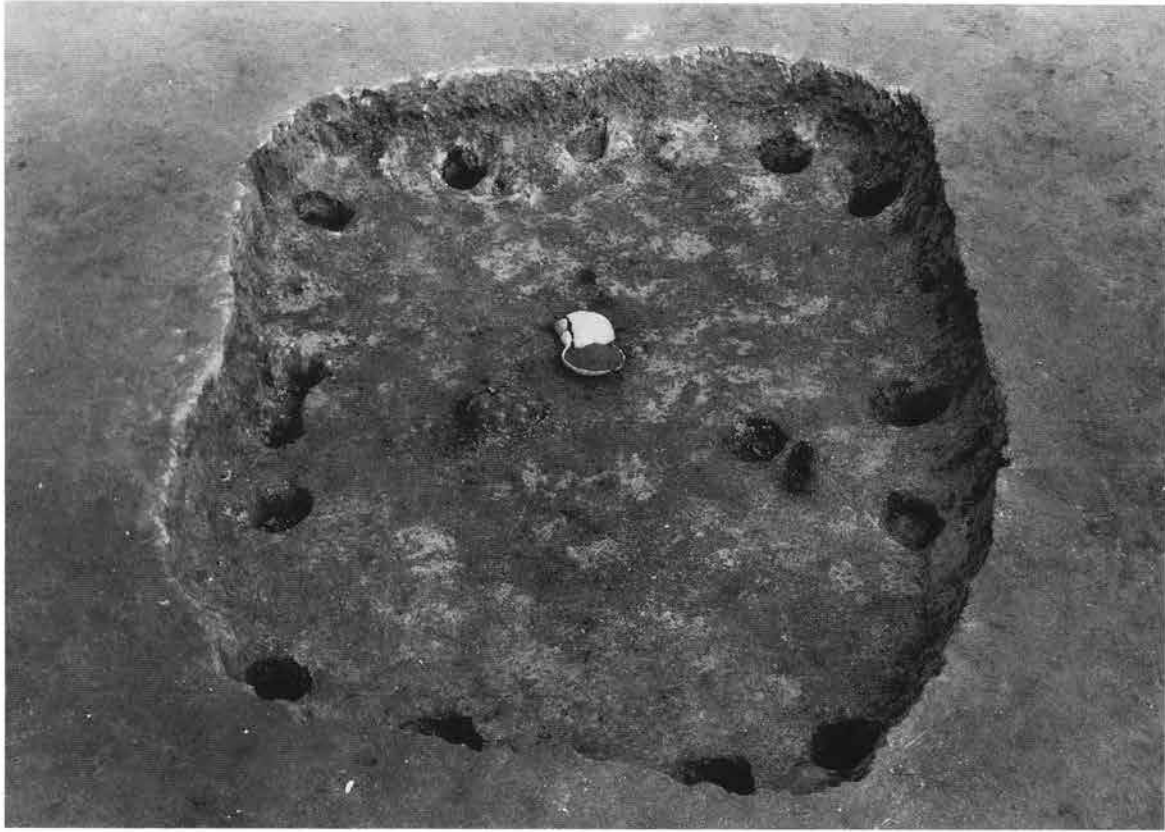
炉 址



2号住居址全景（南より）



遺物出土状態



3号住居址全景（南より）



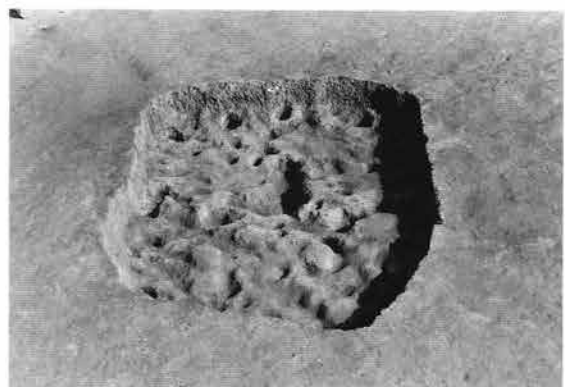
遺物出土状態



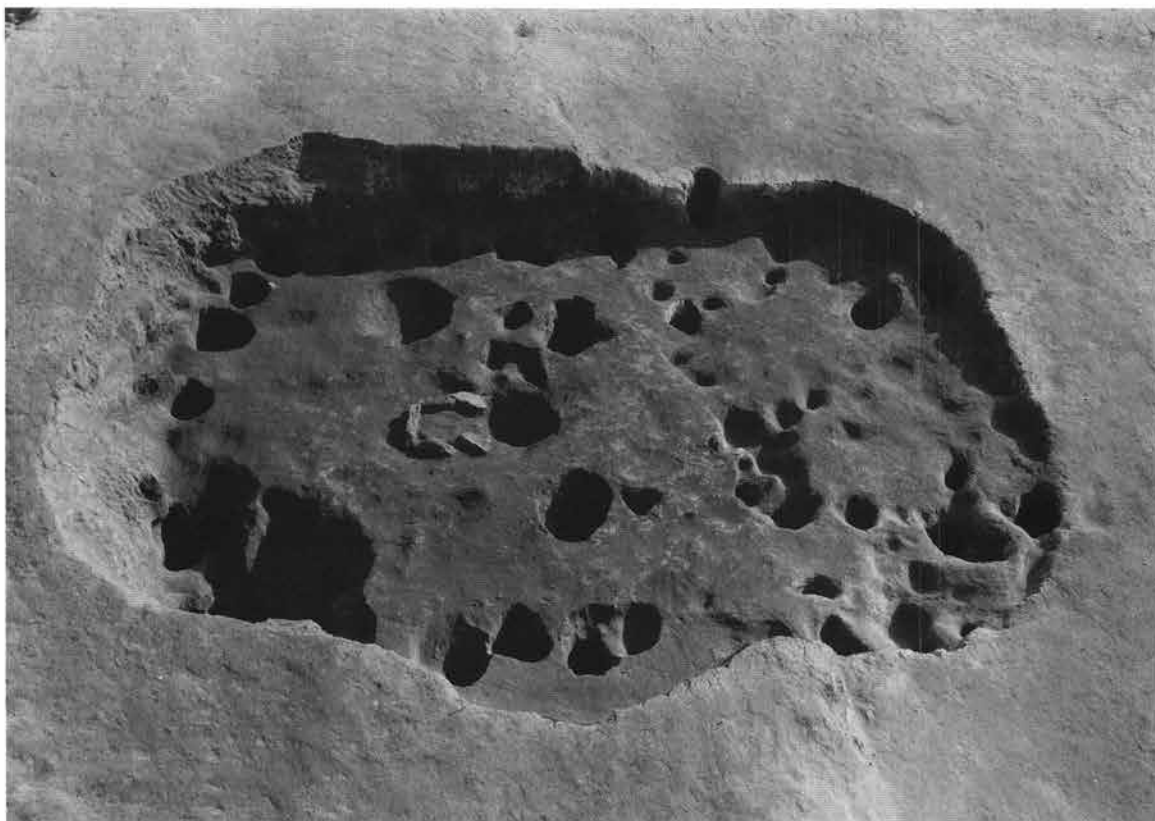
炉 址



埋甕セクション



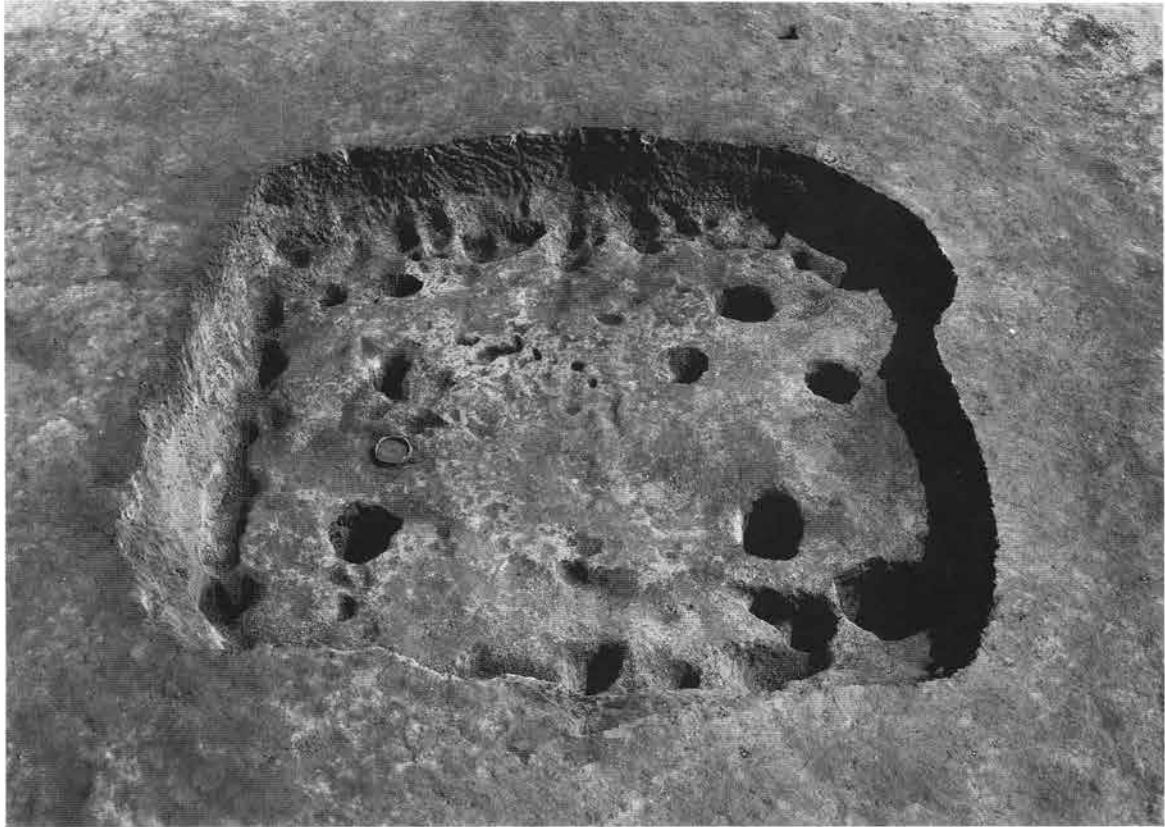
掘 方



4号住居址全景（西より）



炉 址



5号住居址全景（西より）



遺物出土状態



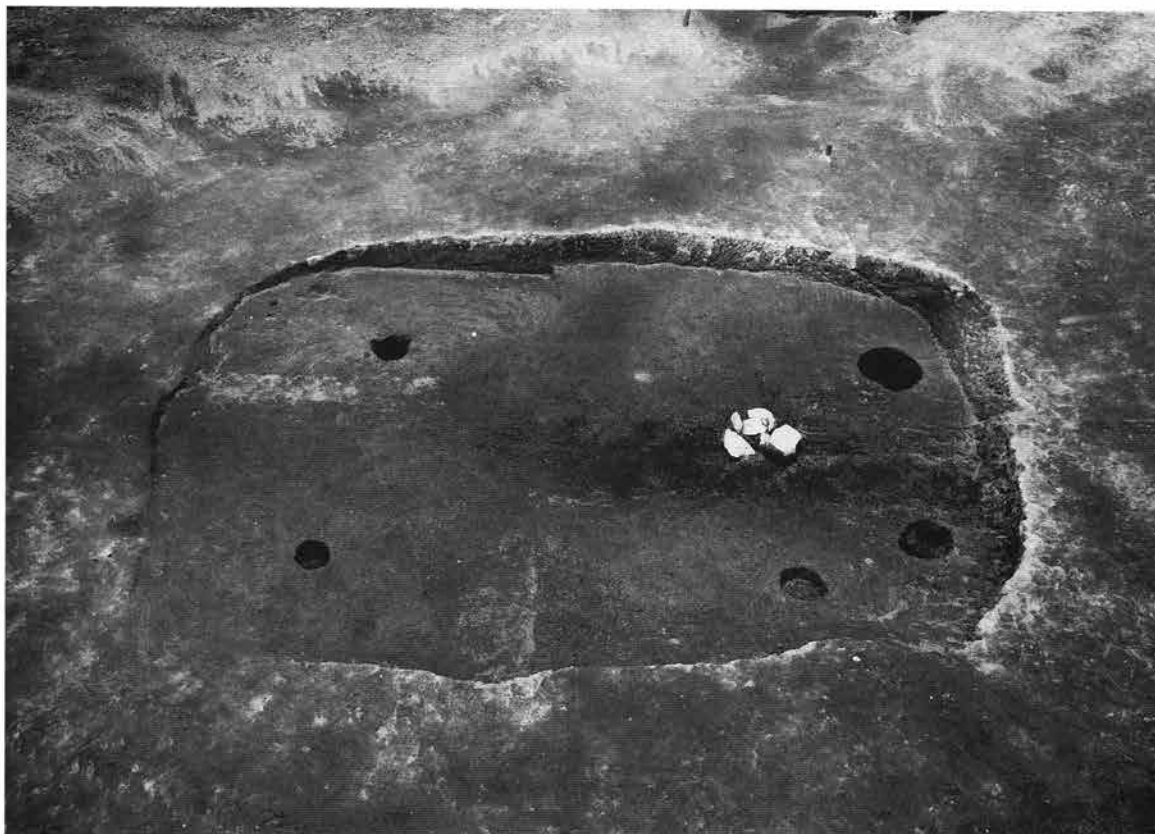
遺物出土状態



炉址セクション



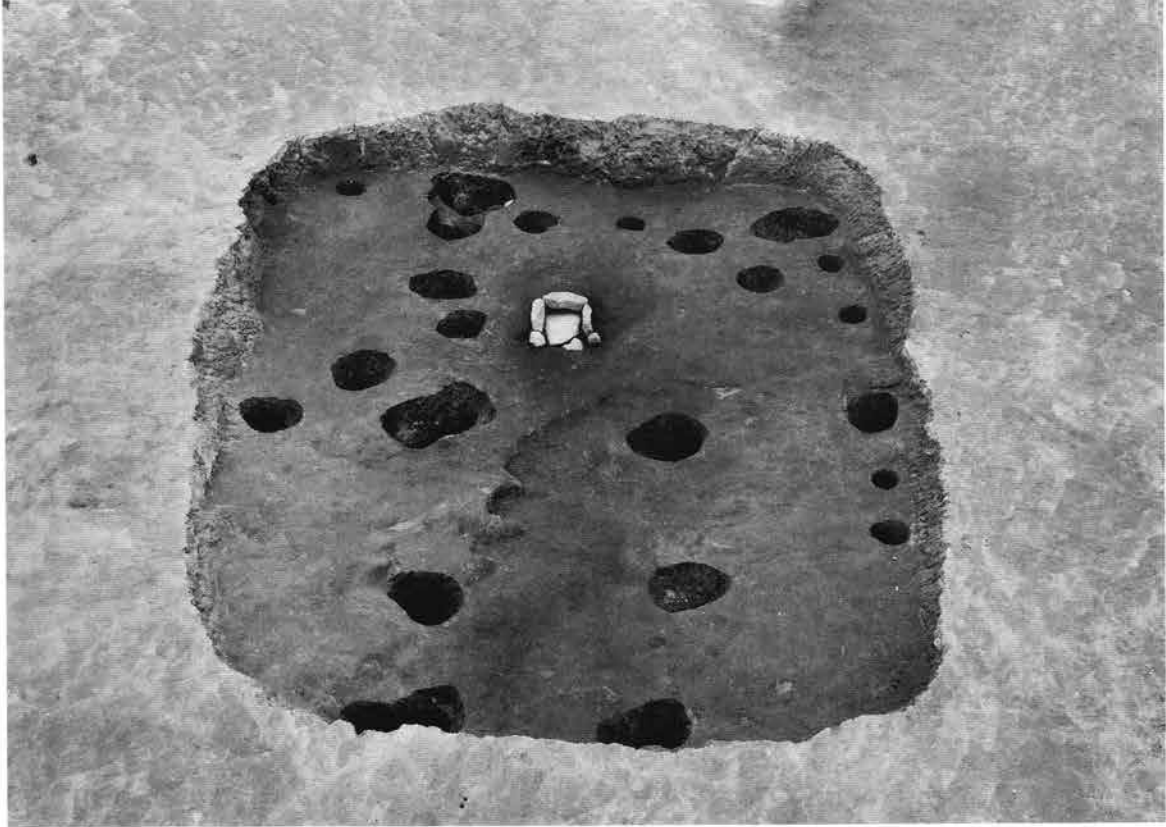
埋 壺 炉



7号住居址全景（東より）



遺物出土状態



8号住居址全景（南西より）



炉 址



9号住居址全景（南より）



遺物出土状態



10号住居址全景（南東より）



遺物出土状態



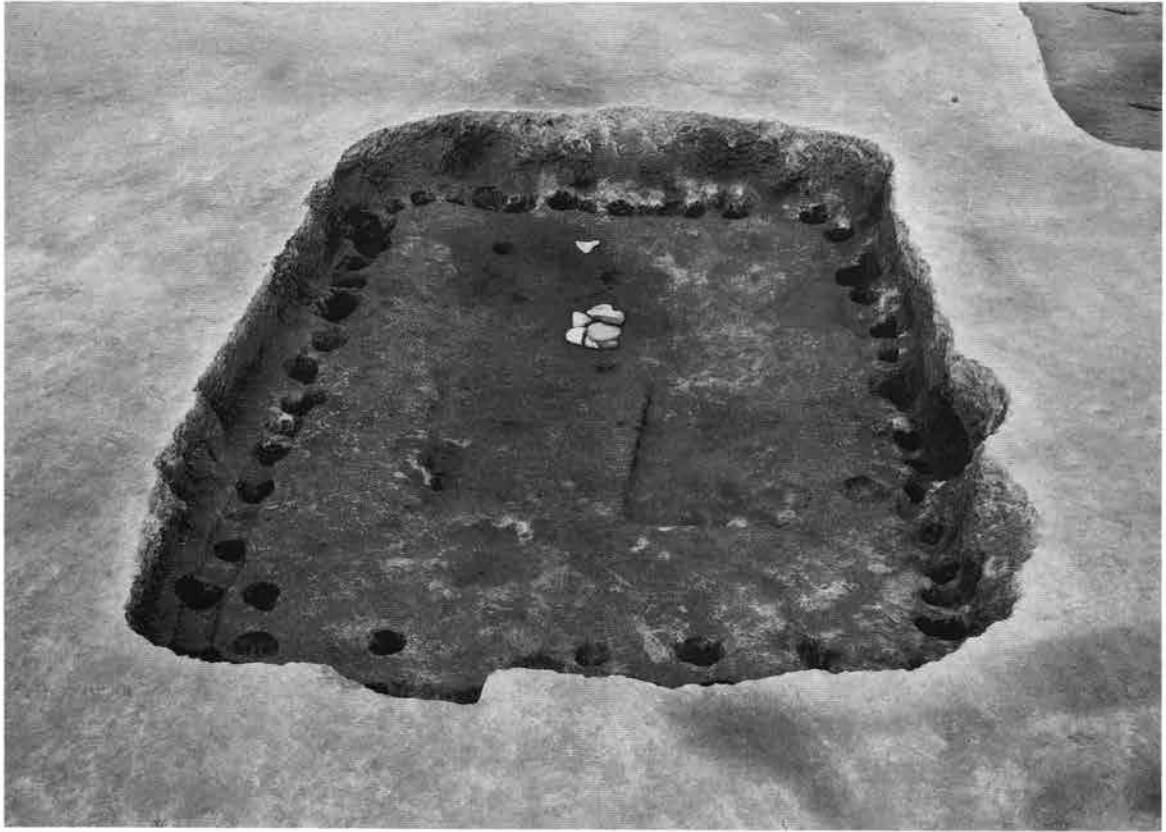
遺物出土状態



炉 址



炉址セクション



11号住居址全景（南より）



遺物出土状態



炉 址



住居内土壌セクション



住居内土壌



12号住居址全景（南より）



遺物出土状態



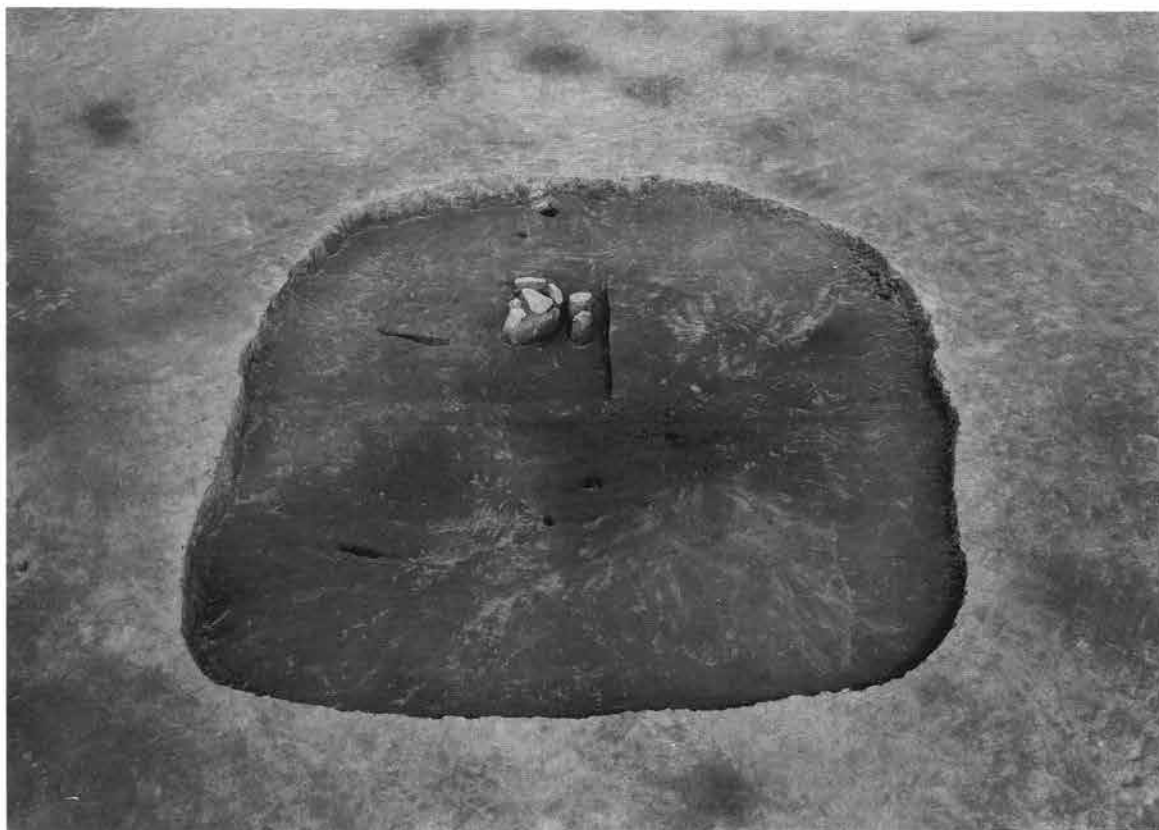
遺物出土状態



炉 址



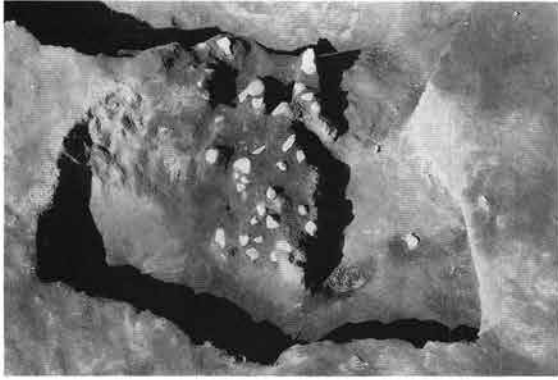
炉 址



13号住居址全景（南より）



炉 址



1号土壙遺物出土状態



1号土壙



2号土壙



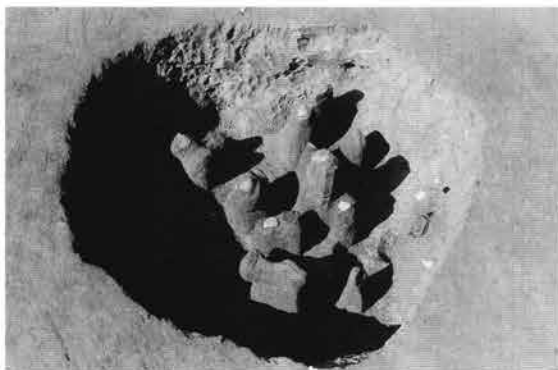
3号土壙



5号土壙



6号土壙



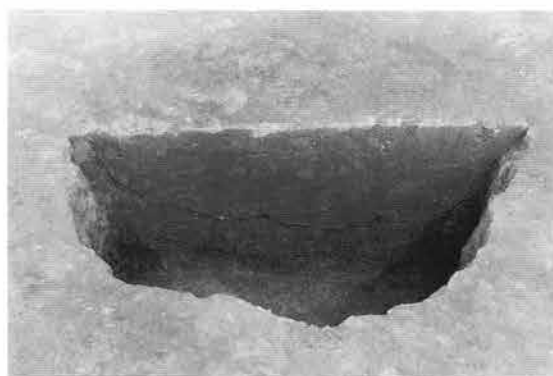
7号土壙



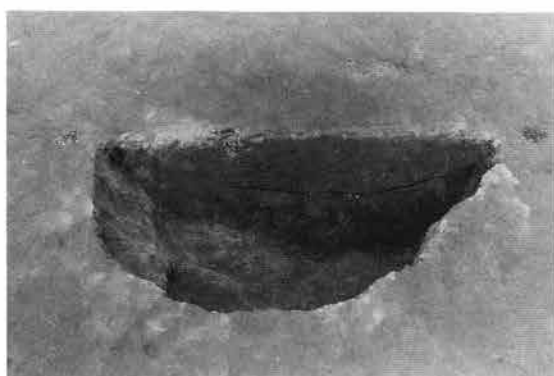
8号土壙



9号土壙



10号土壙



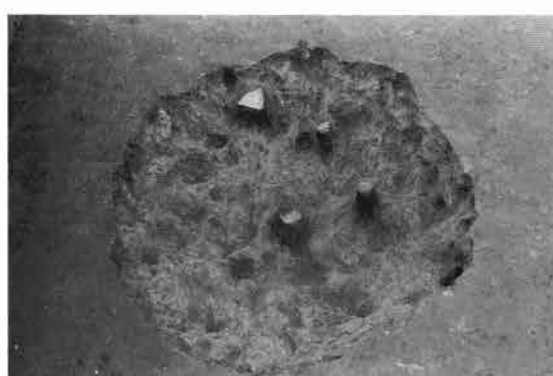
11号土壙



12号土壙



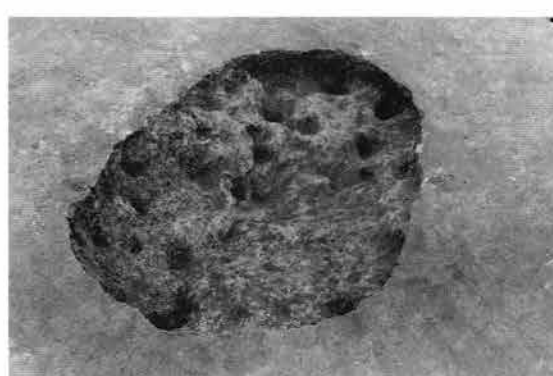
13号土壙



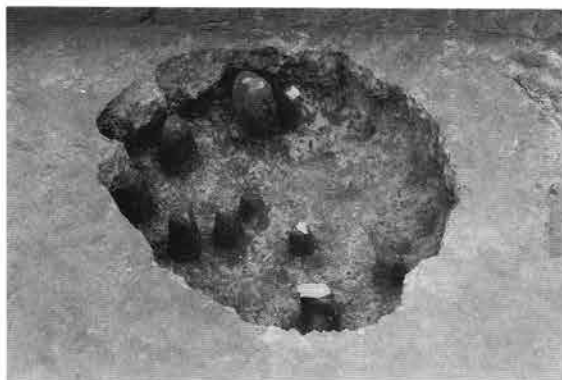
14号土壙



15号土壙



16号土壙



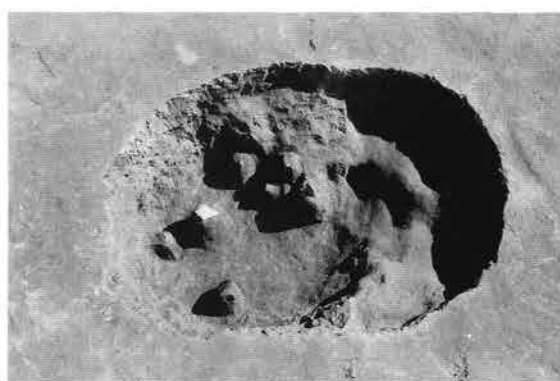
17号土壙



18号土壙



18号土壙 遺物出土状態



19号土壙



20号土壙



21号土壙



22号土壙



23号土壙



24号土壙



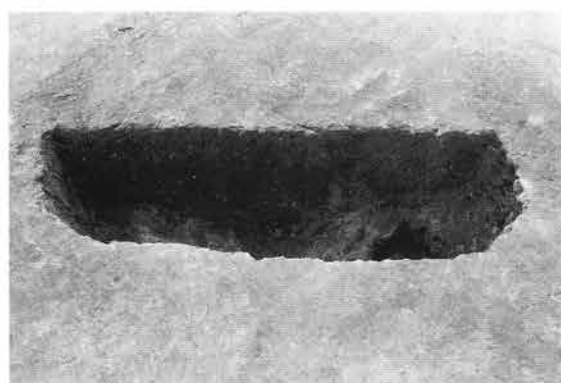
25号土壙



26号土壙



27号土壙



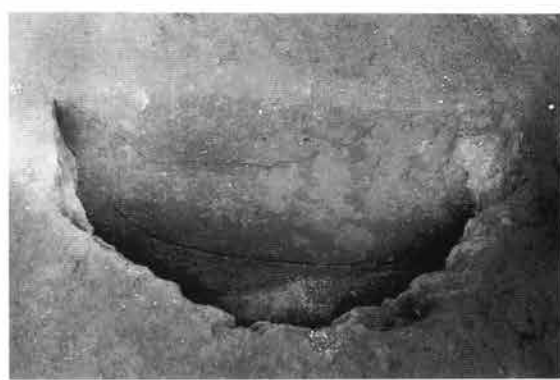
28号土壙



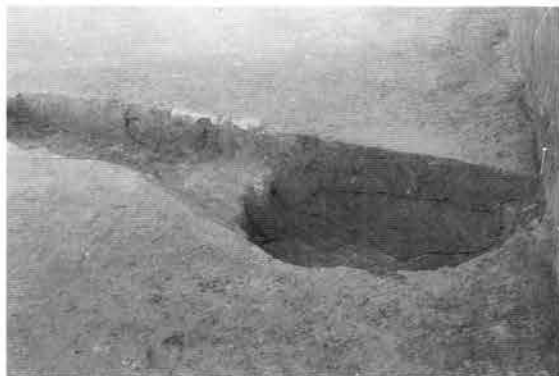
29号土壙



30・31号土壙



33号土壙



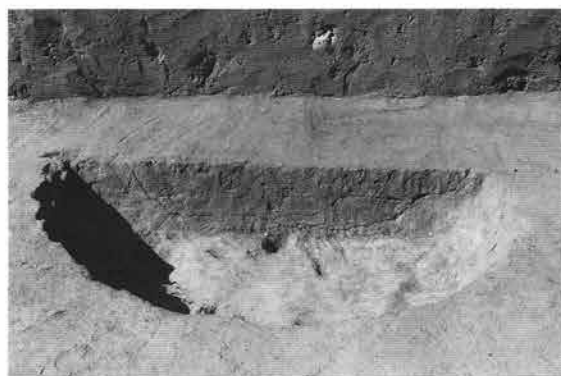
34号土壙



36号土壙



37号土壙



38号土壙



40号土壙



41号土壙



42号土壙



43号土壙



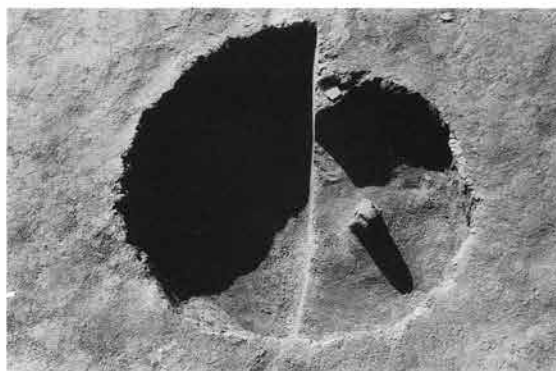
44・45号土坑



46号土坑



47号土坑



48号土坑



49号土坑



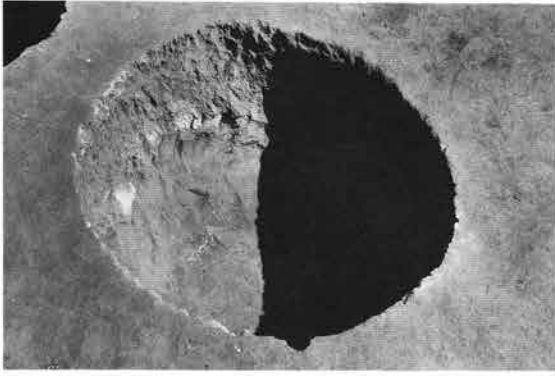
50号土坑



51号土坑



53・54号土坑



55号土坑



56号土坑



57号土坑



58号土坑



60号土坑



61号土坑遺物出土状態



61号土坑



62号土坑



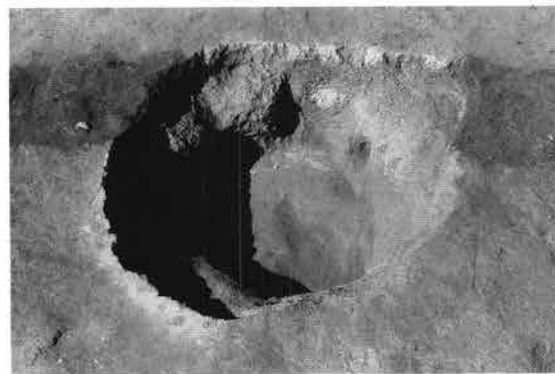
63号土壙



64号土壙



65号土壙



66号土壙



67号土壙



68号土壙



69号土壙



70号土壙



71号土坑



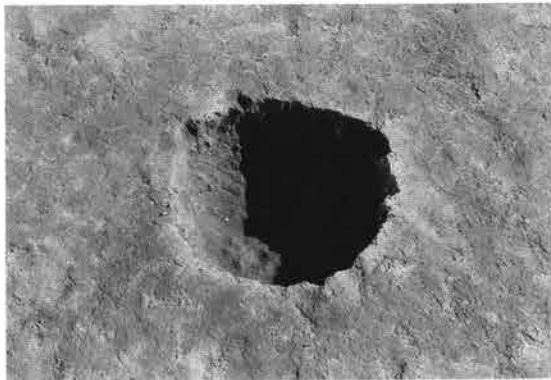
72号土坑



73号土坑



74号土坑



75号土坑



76号土坑



77号土坑遺物出土状態



77号土坑



78号土壌



81号土壌



82号土壌



1号井戸



2号井戸セクション



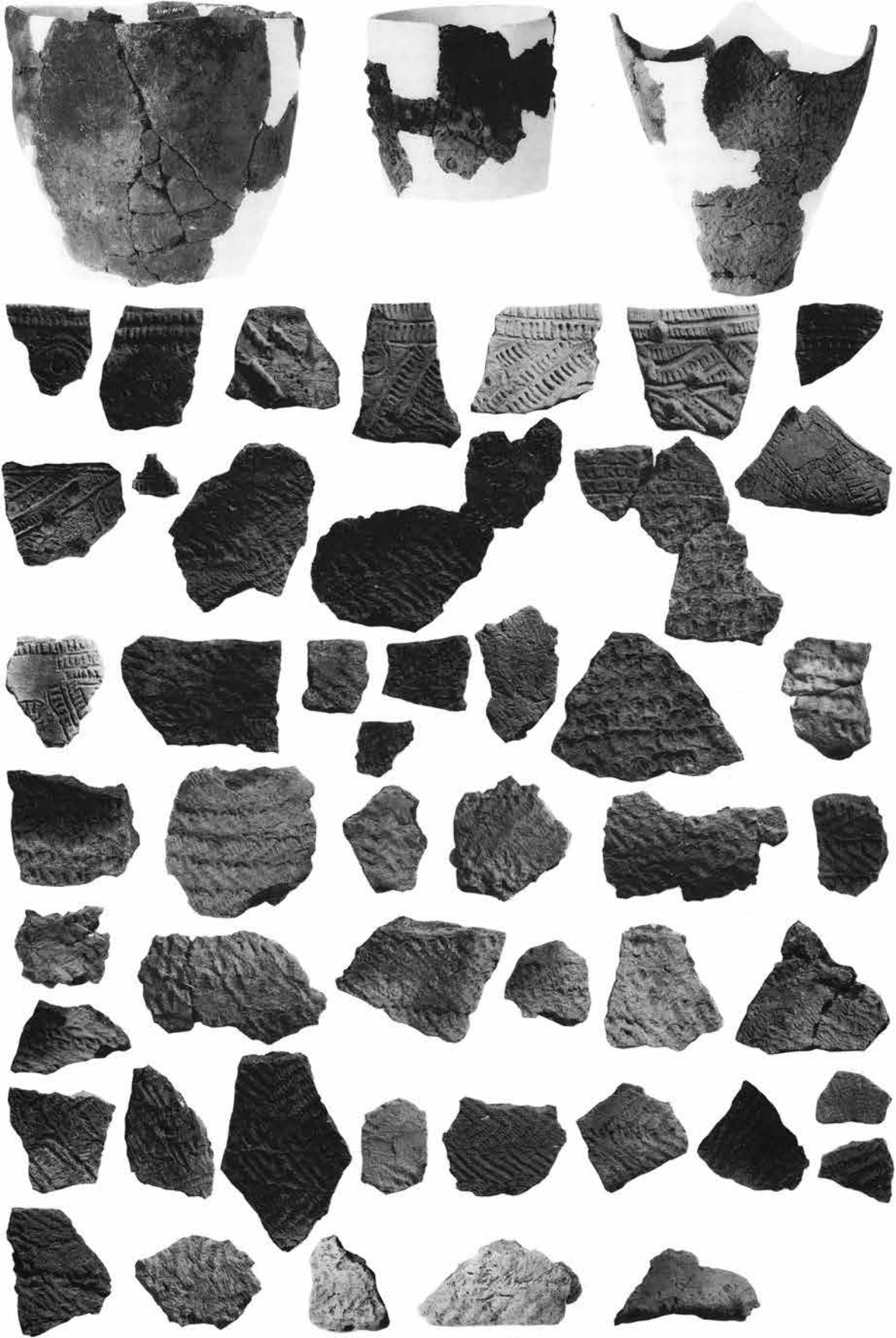
2号井戸



3号井戸セクション



3号井戸



1号住居址出土土器



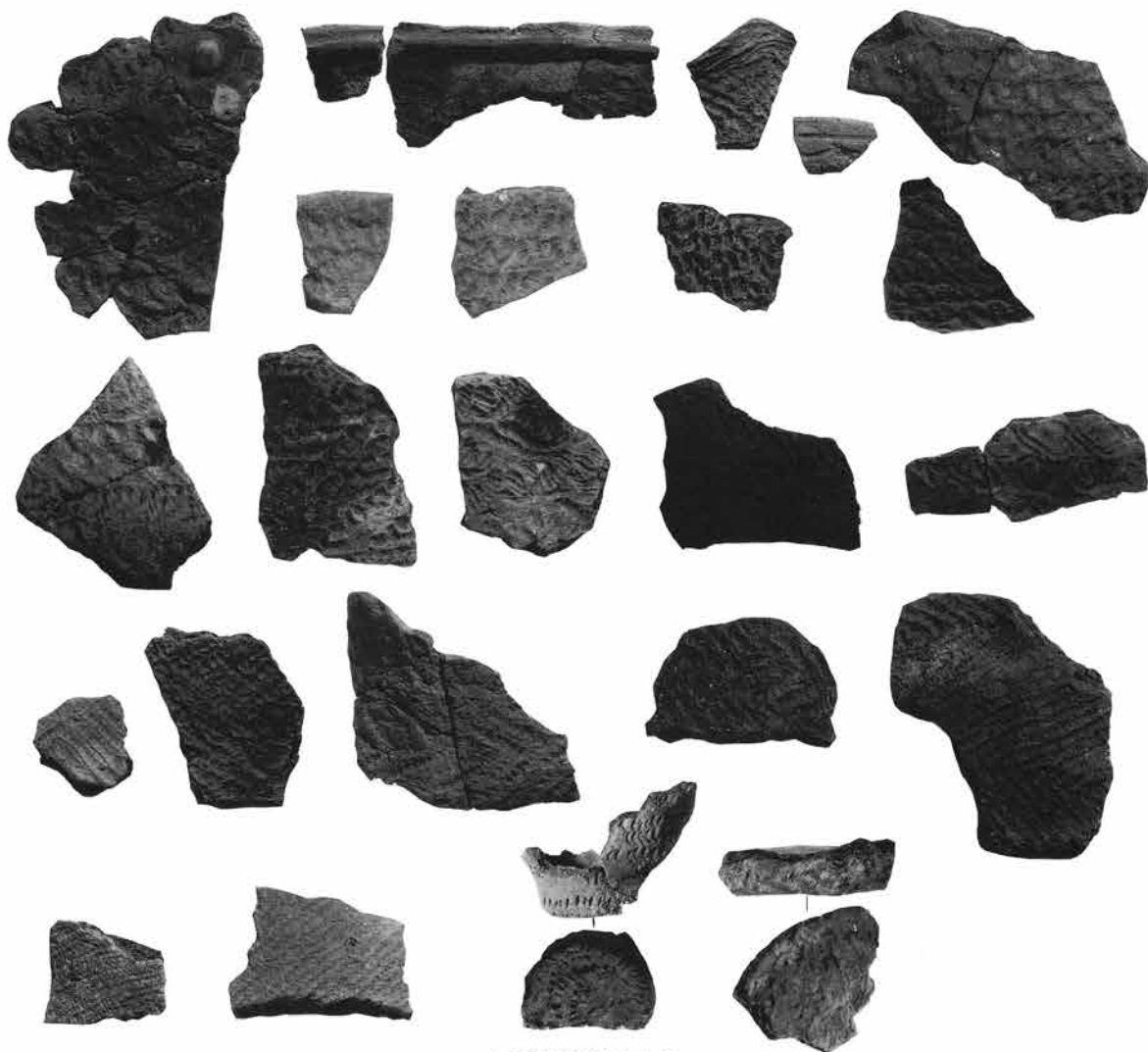
2号住居址出土土器



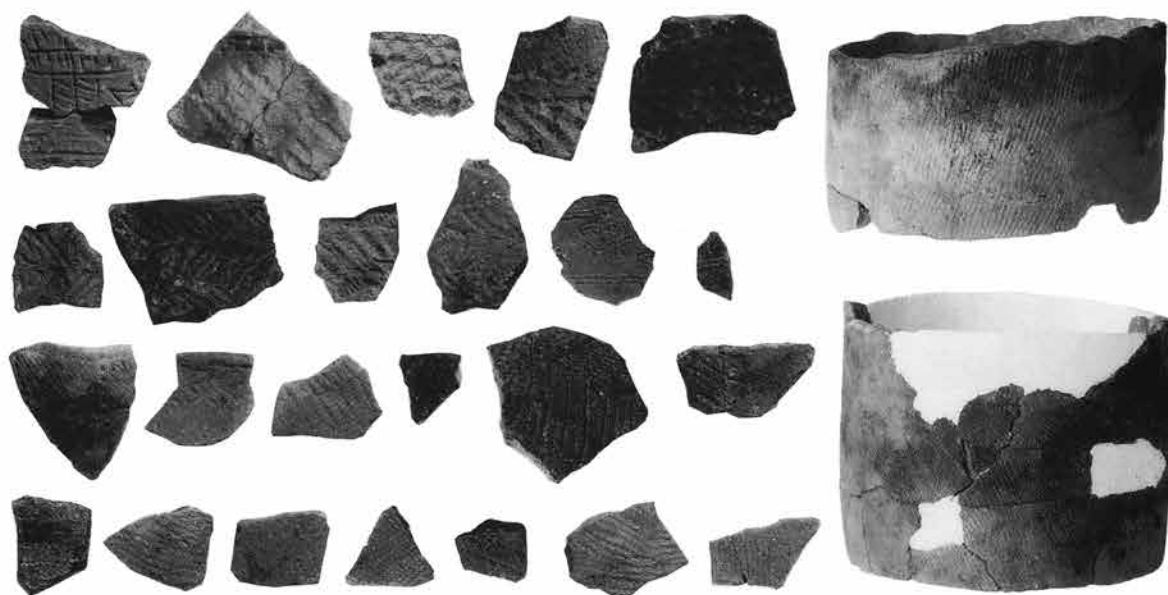
3号住居址出土土器



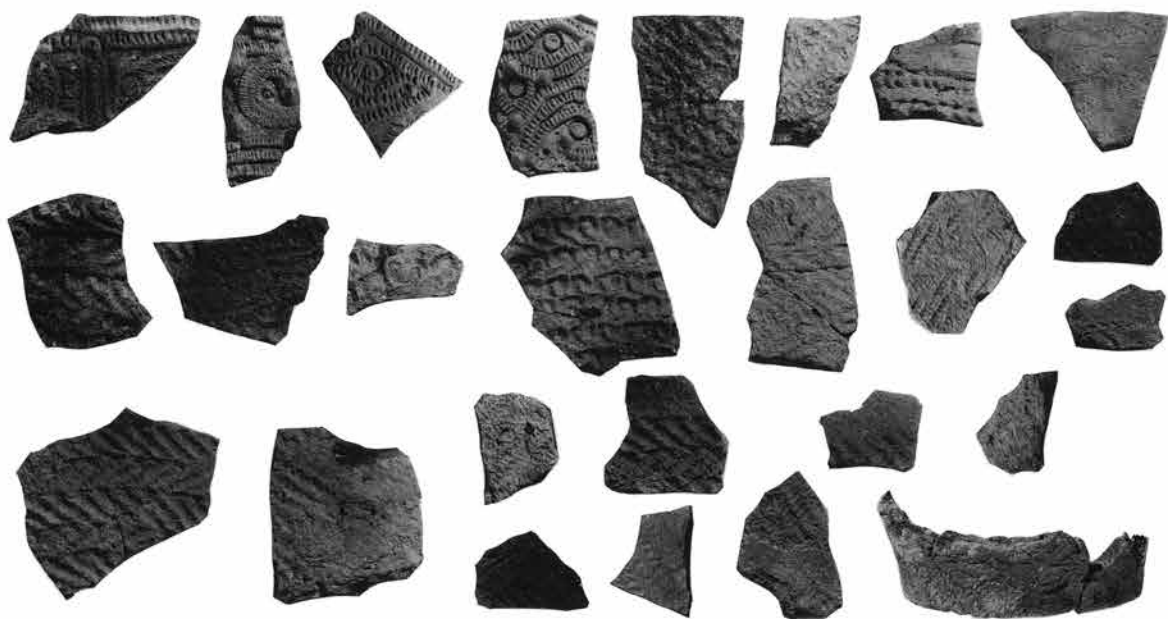
4号住居址出土土器



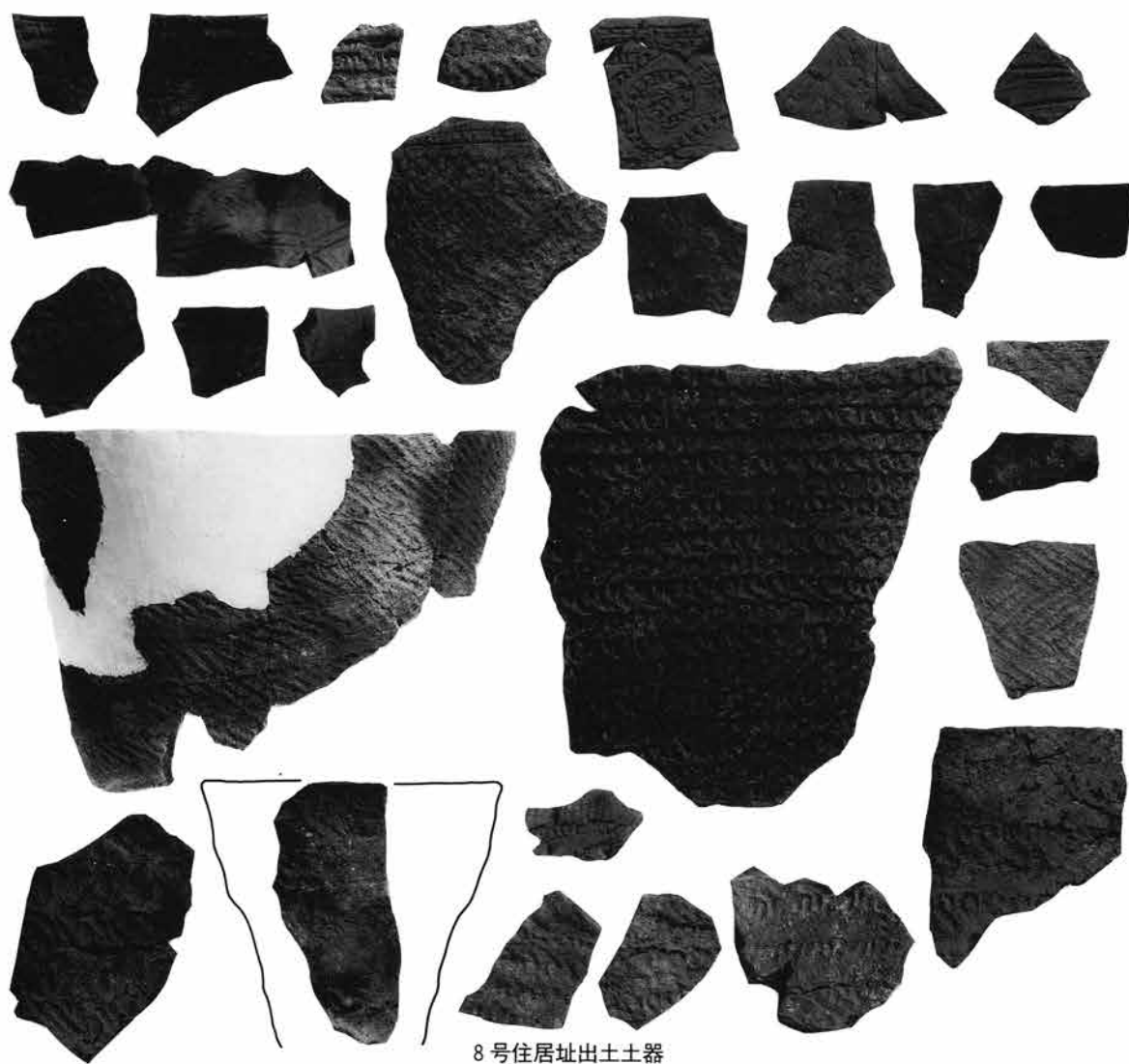
4号住居址出土土器



5号住居址出土土器



7号住居址出土土器



8号住居址出土土器



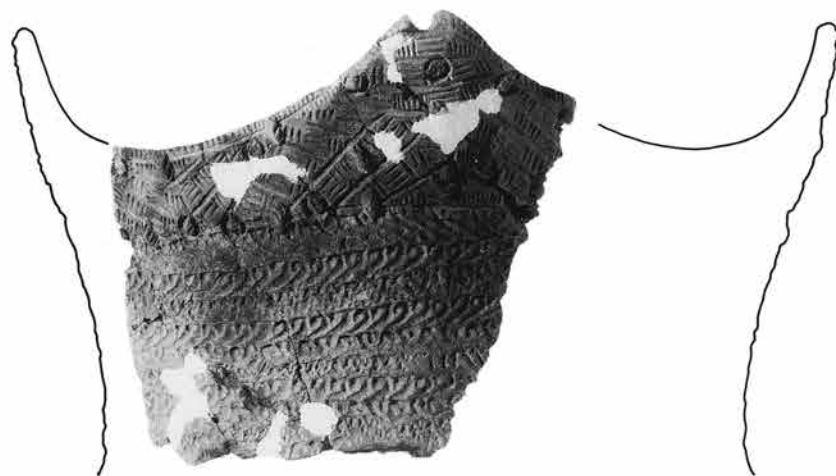
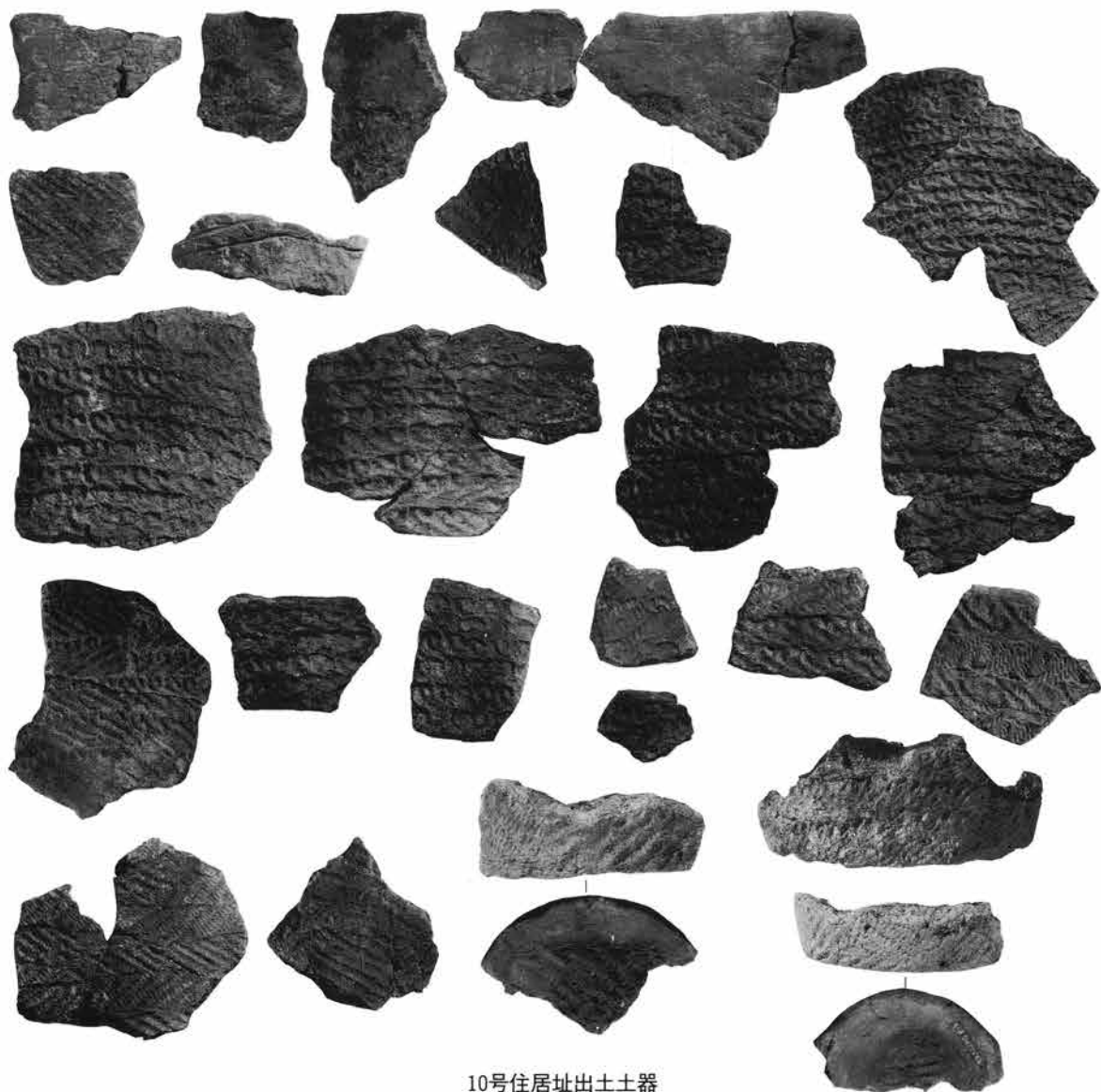
8号住居址出土土器

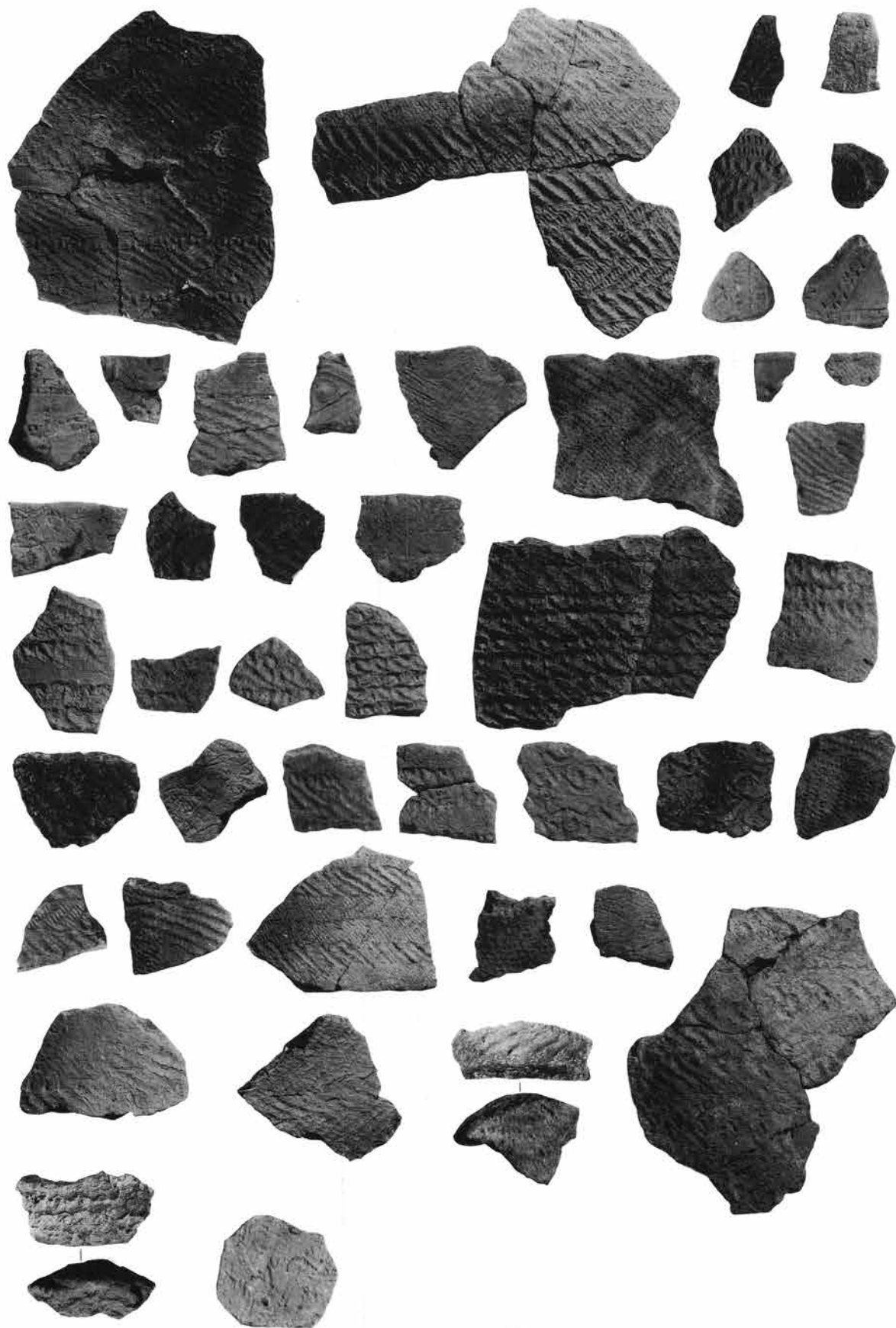


9号住居址出土土器



10号住居址出土土器

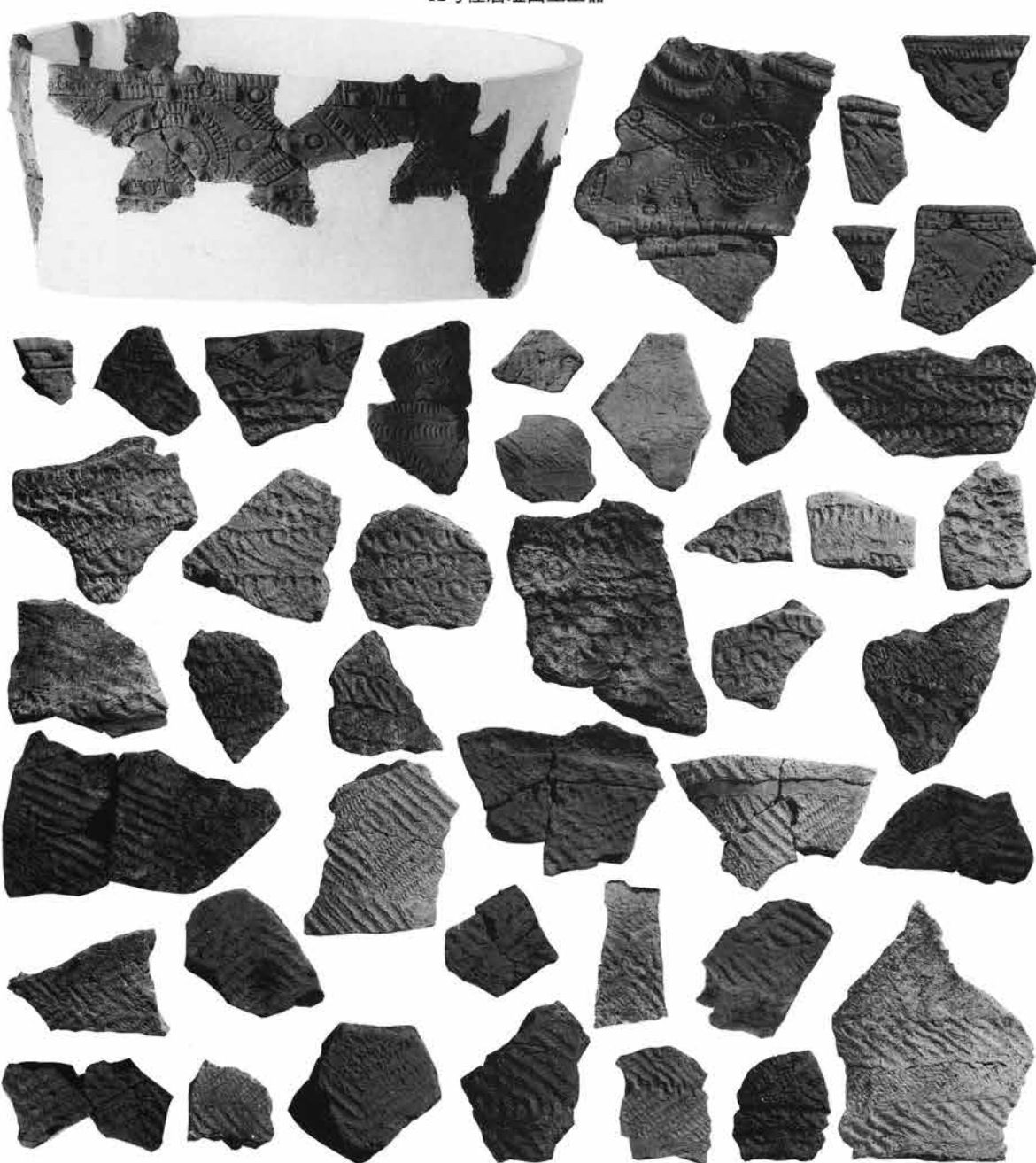




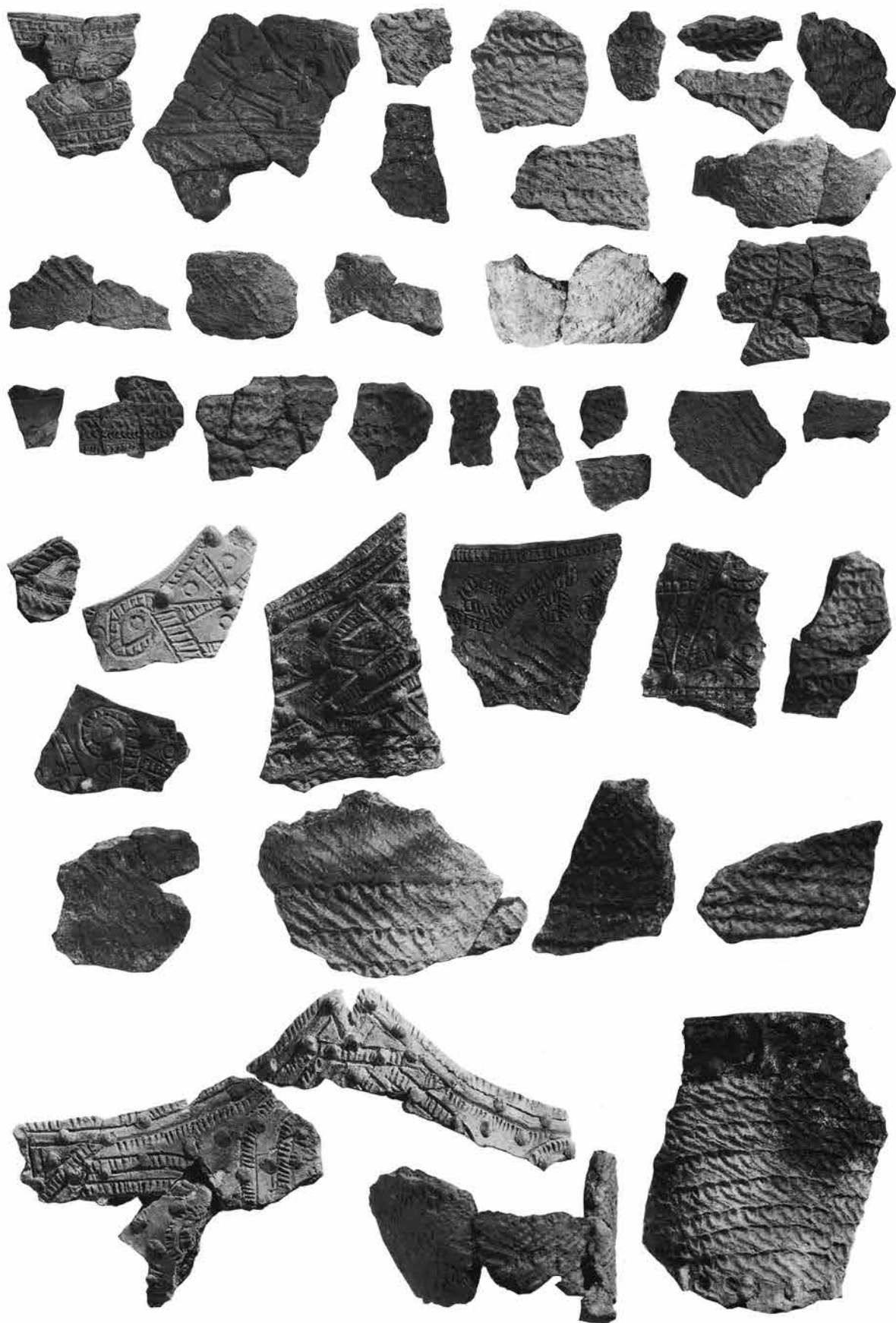
11号住居址出土土器



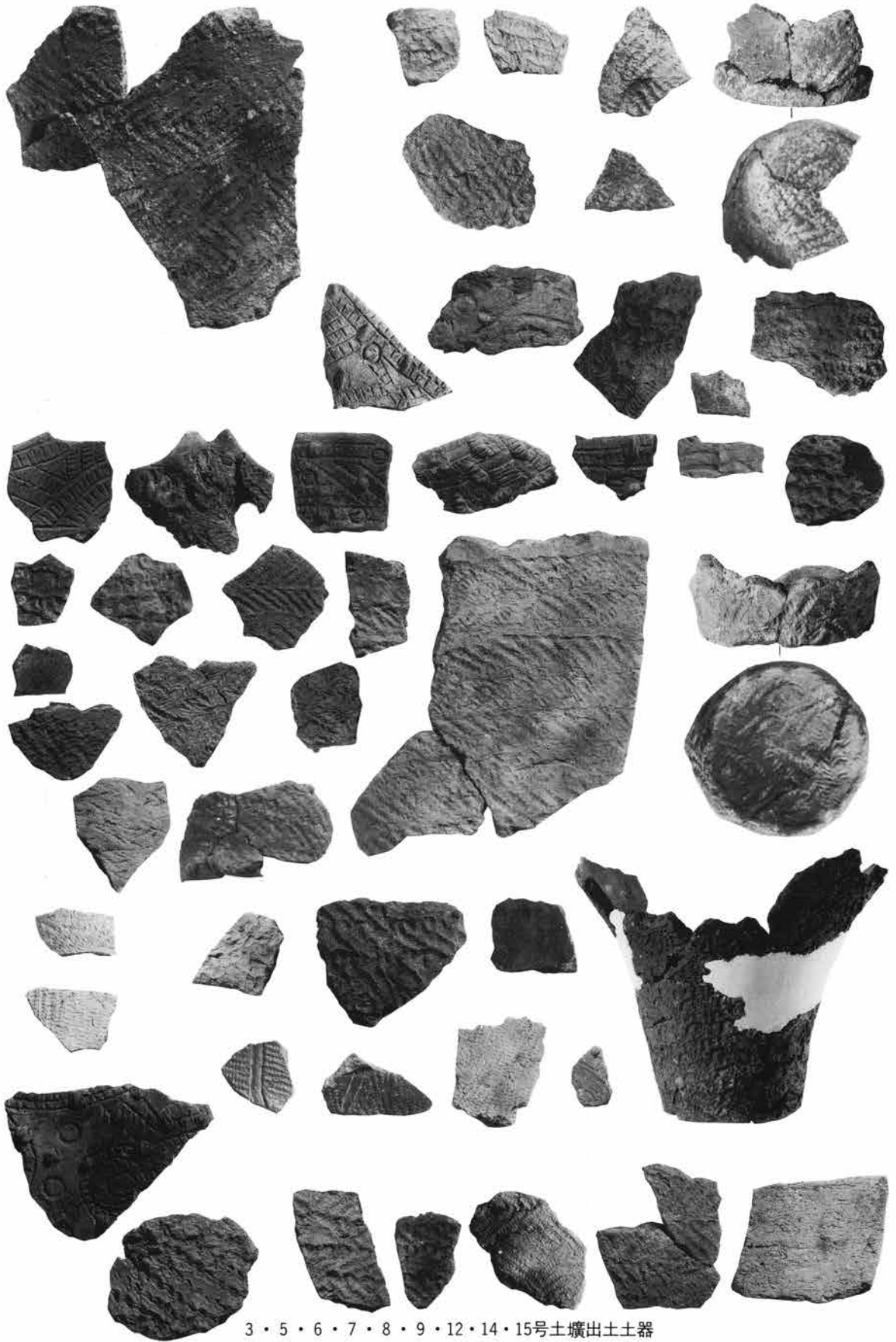
12号住居址出土土器



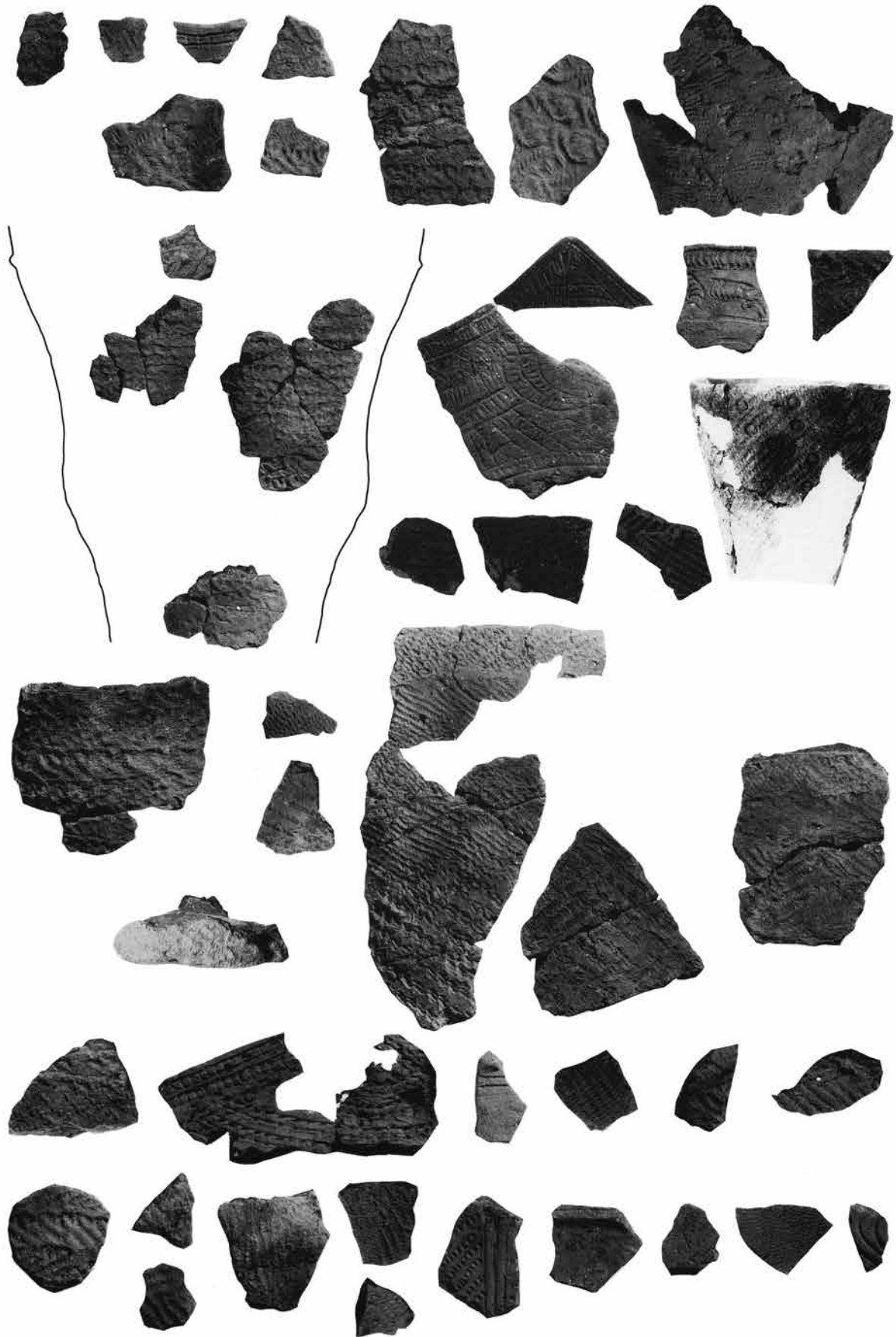
13号住居址出土土器



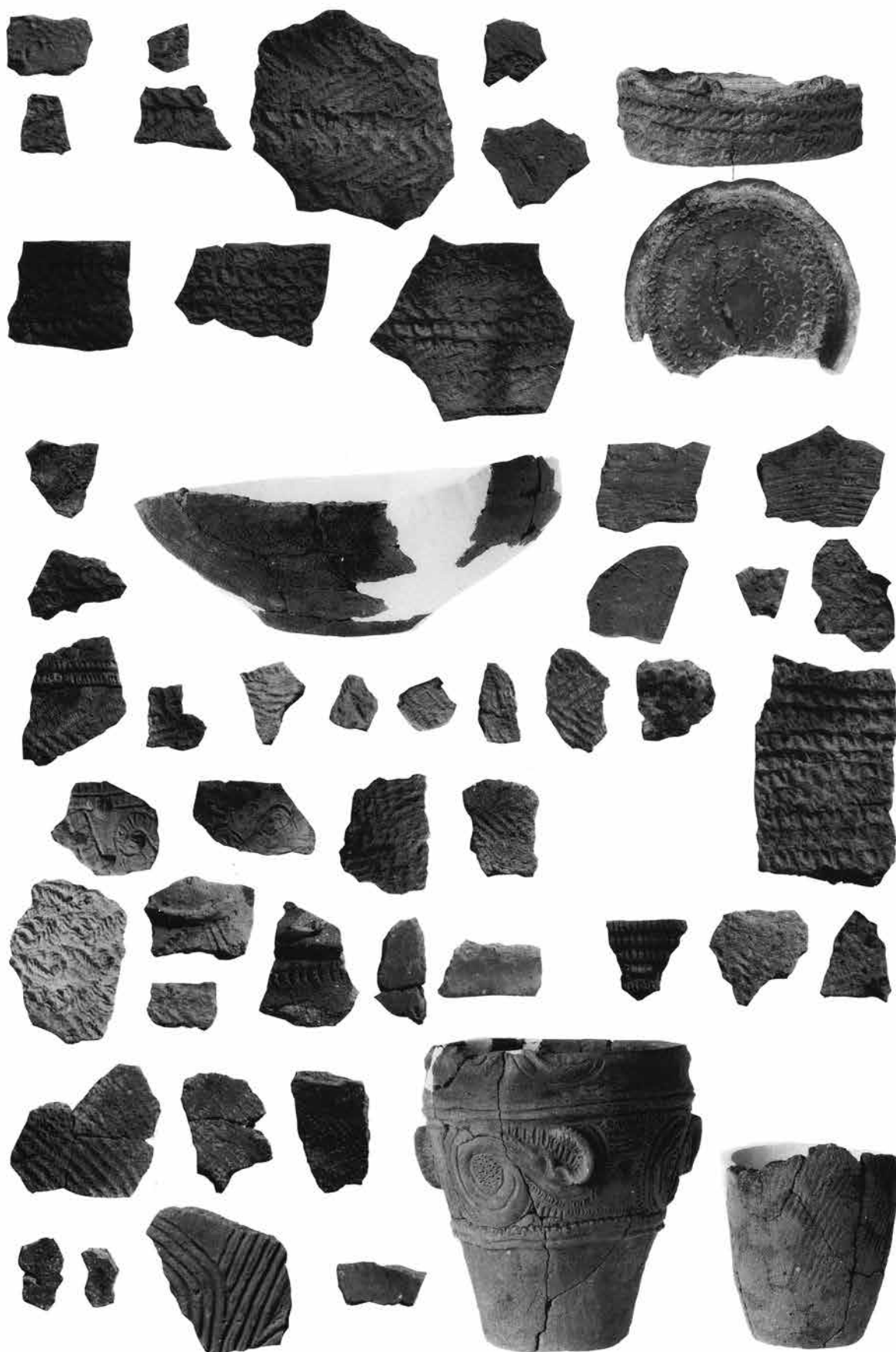
1・2・3号土壇出土土器



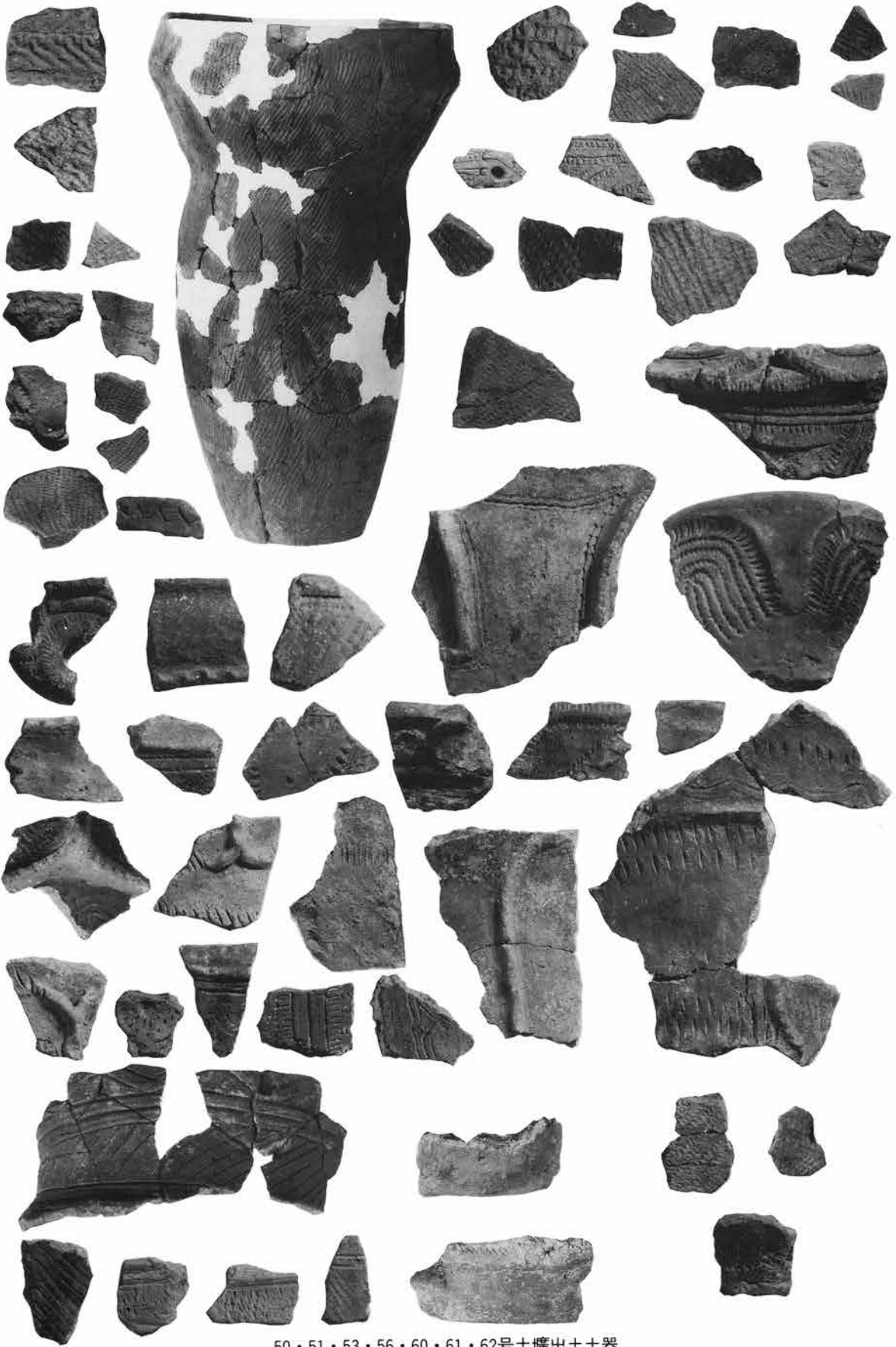
3・5・6・7・8・9・12・14・15号土壙出土土器



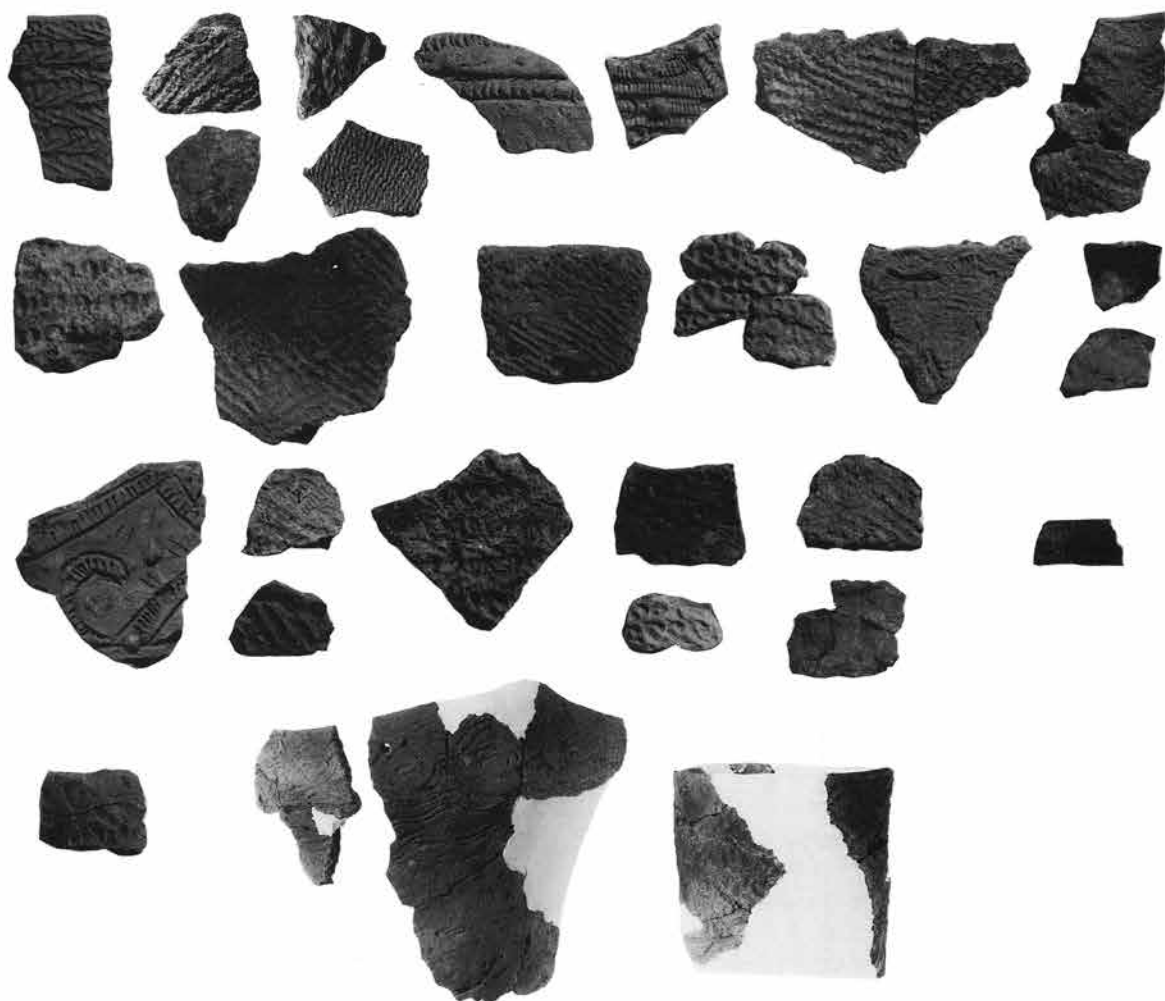
16・17・18・19・24・27号土壙出土土器



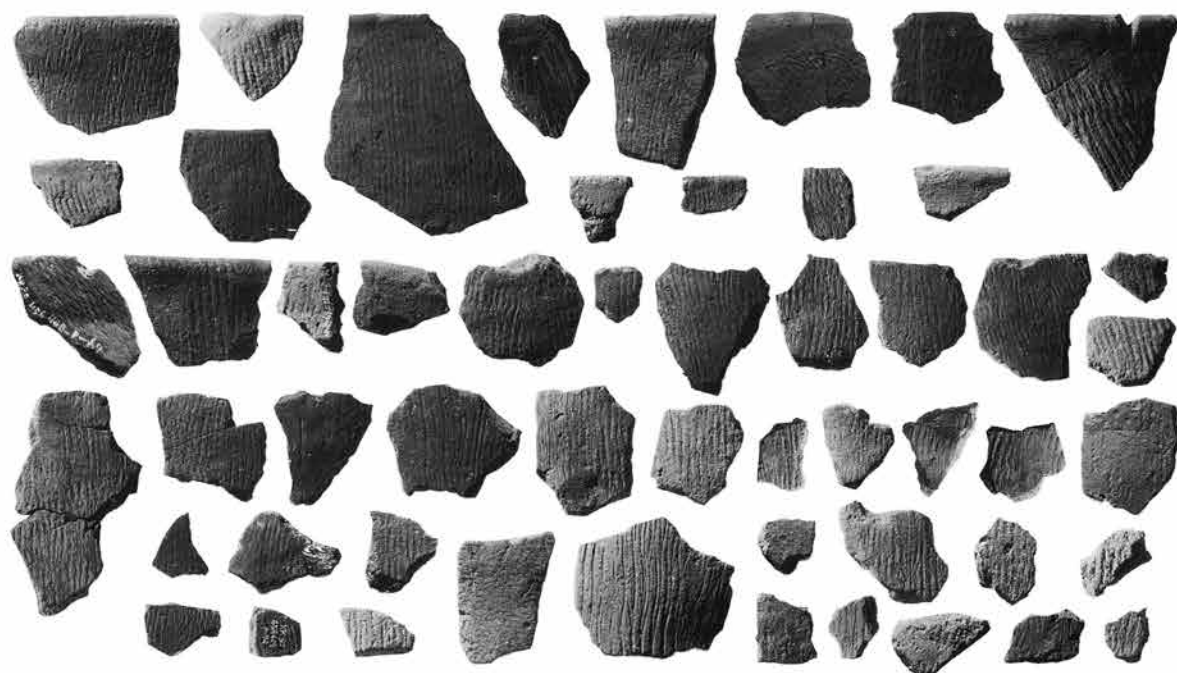
29・30・31・33・34・37・39・41・46・48・49・50号土壙出土土器



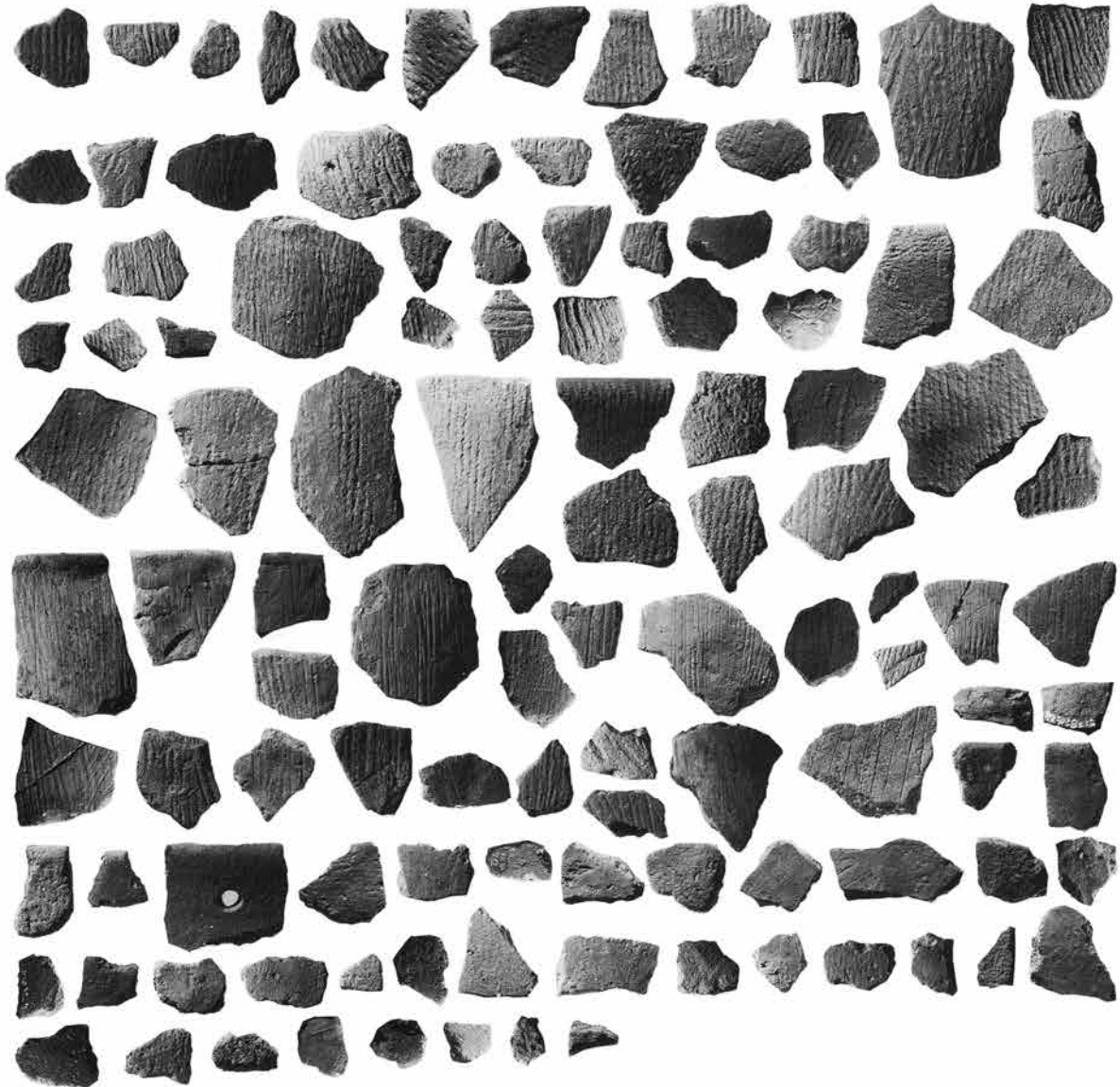
50・51・53・56・60・61・62号土壙出土土器



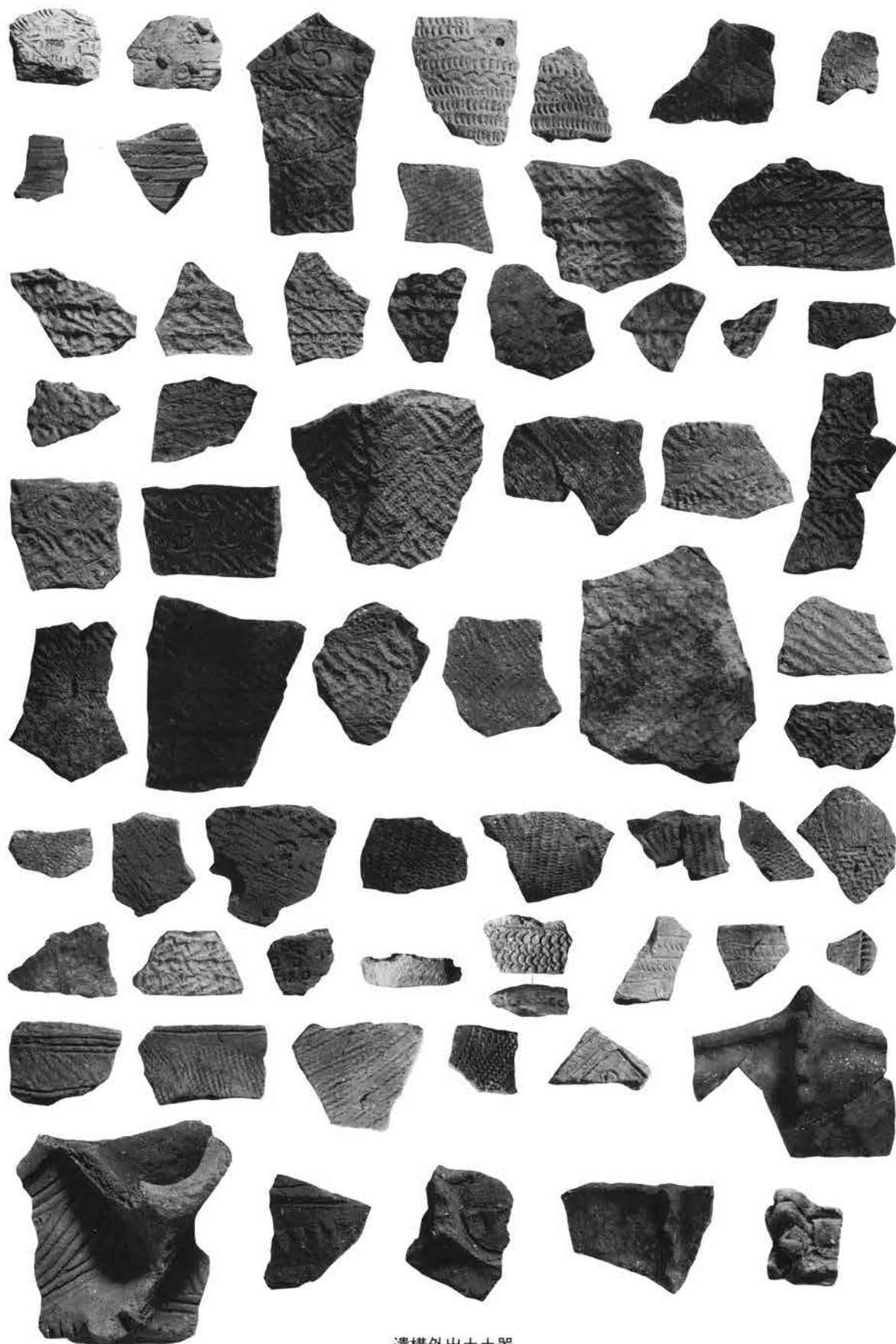
68・69・71・72・73・75・76・77号土壙出土土器



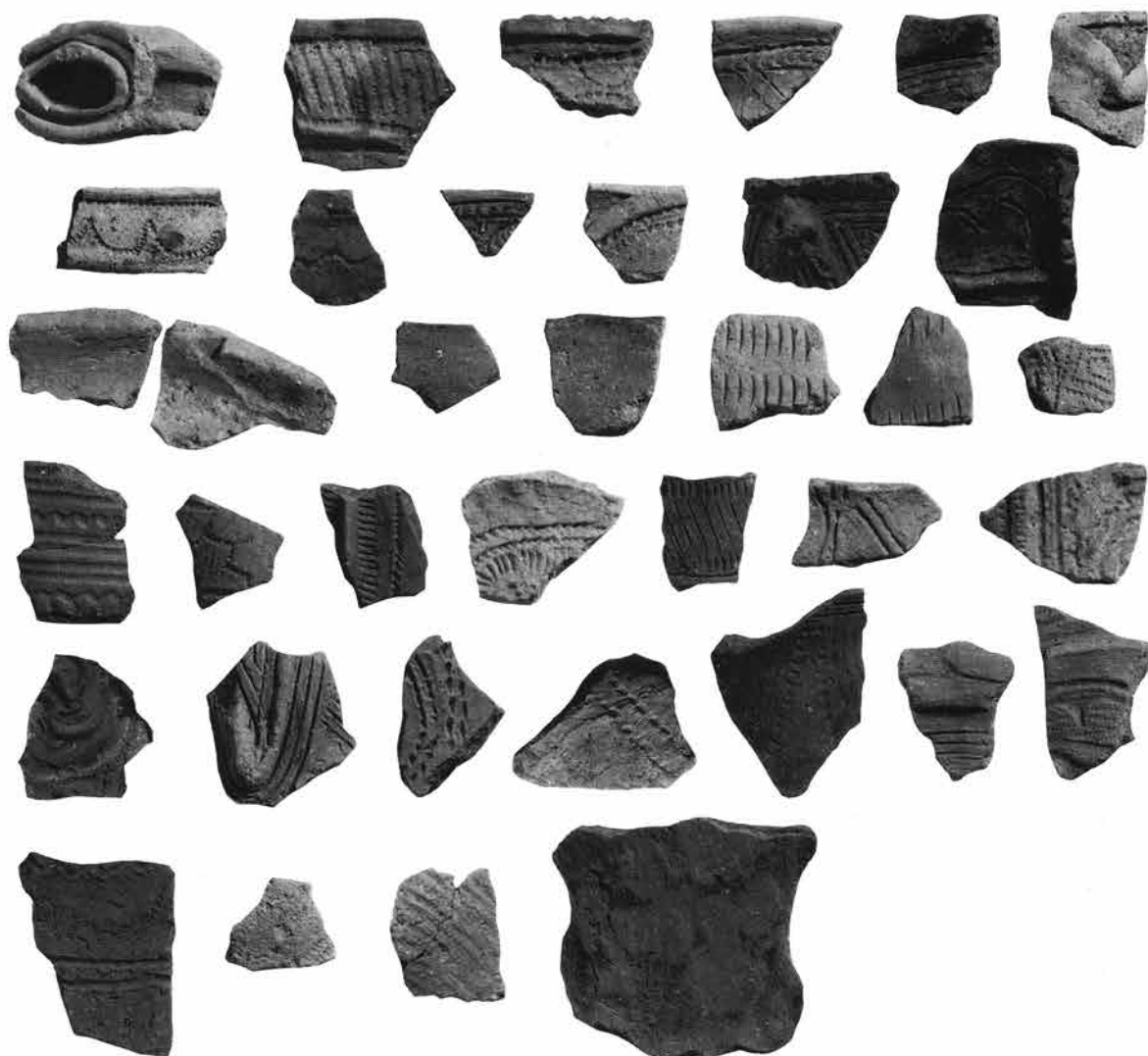
遺構外出土土器



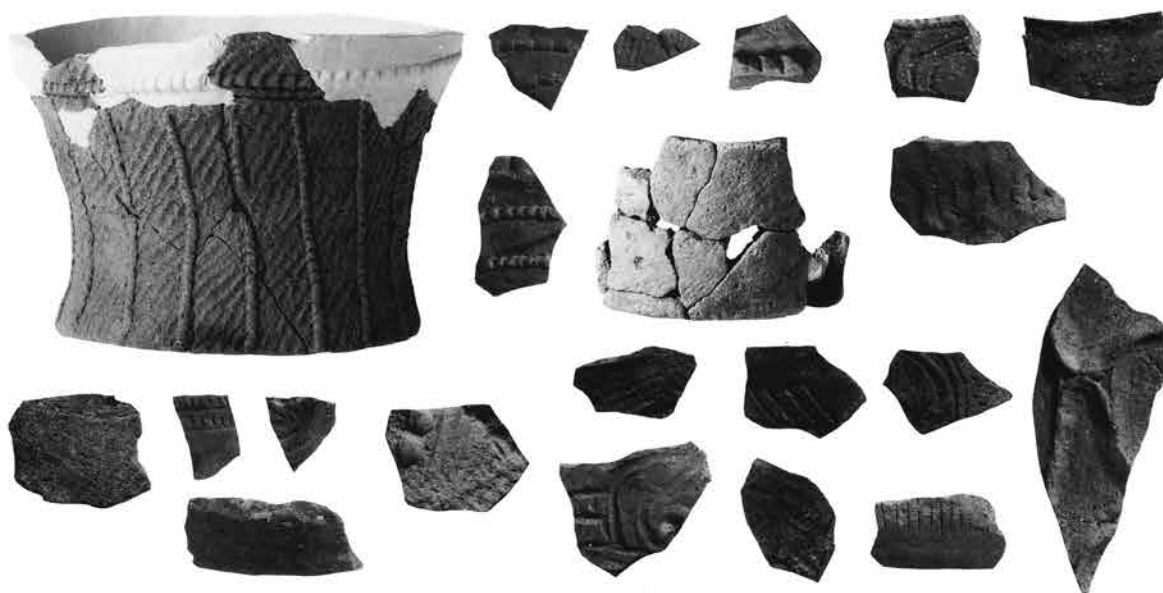
遺構外出土土器



遺構外出土器



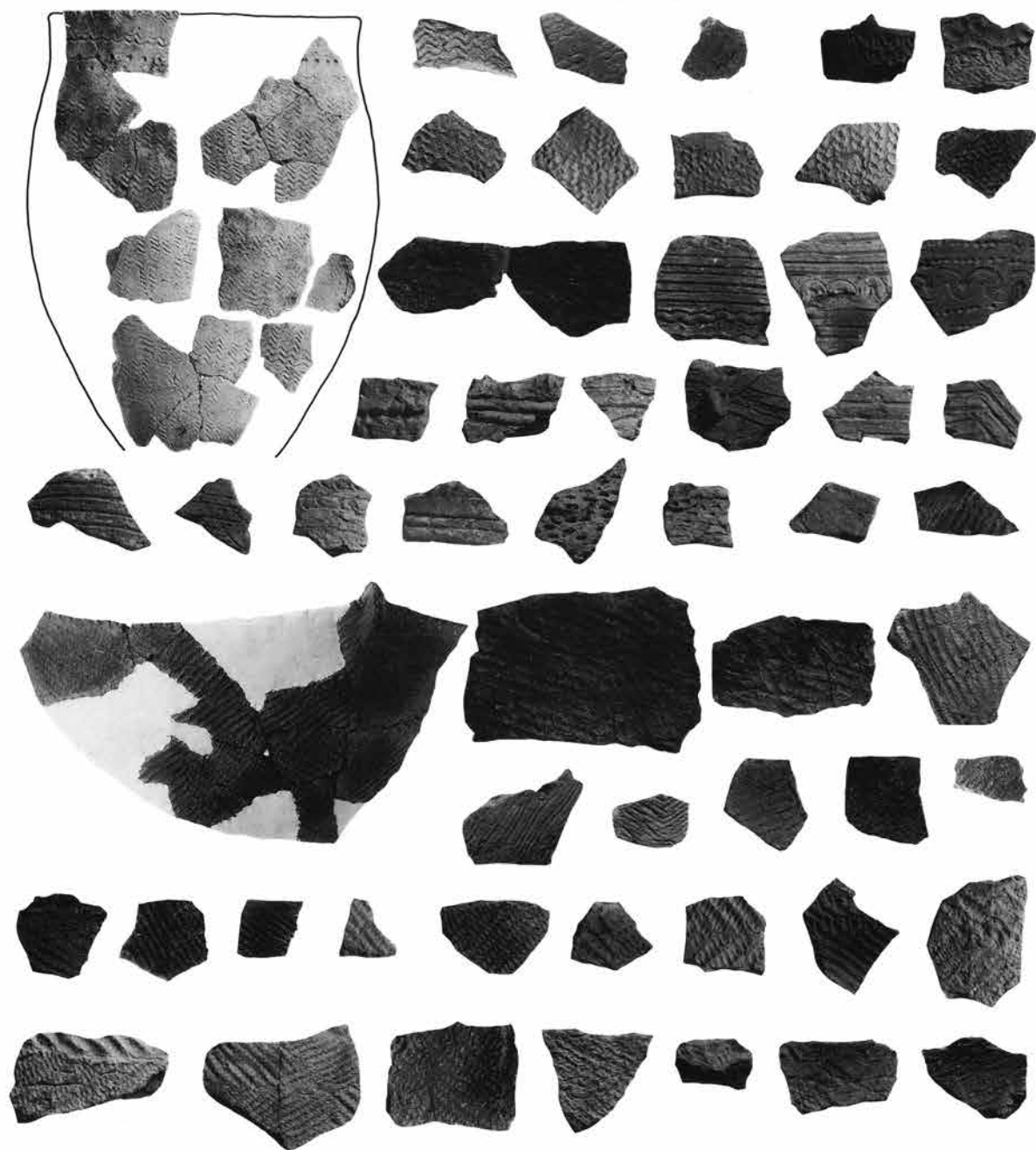
遺構外出土土器



工事用道路 1・2・4・5・6号土壇出土土器



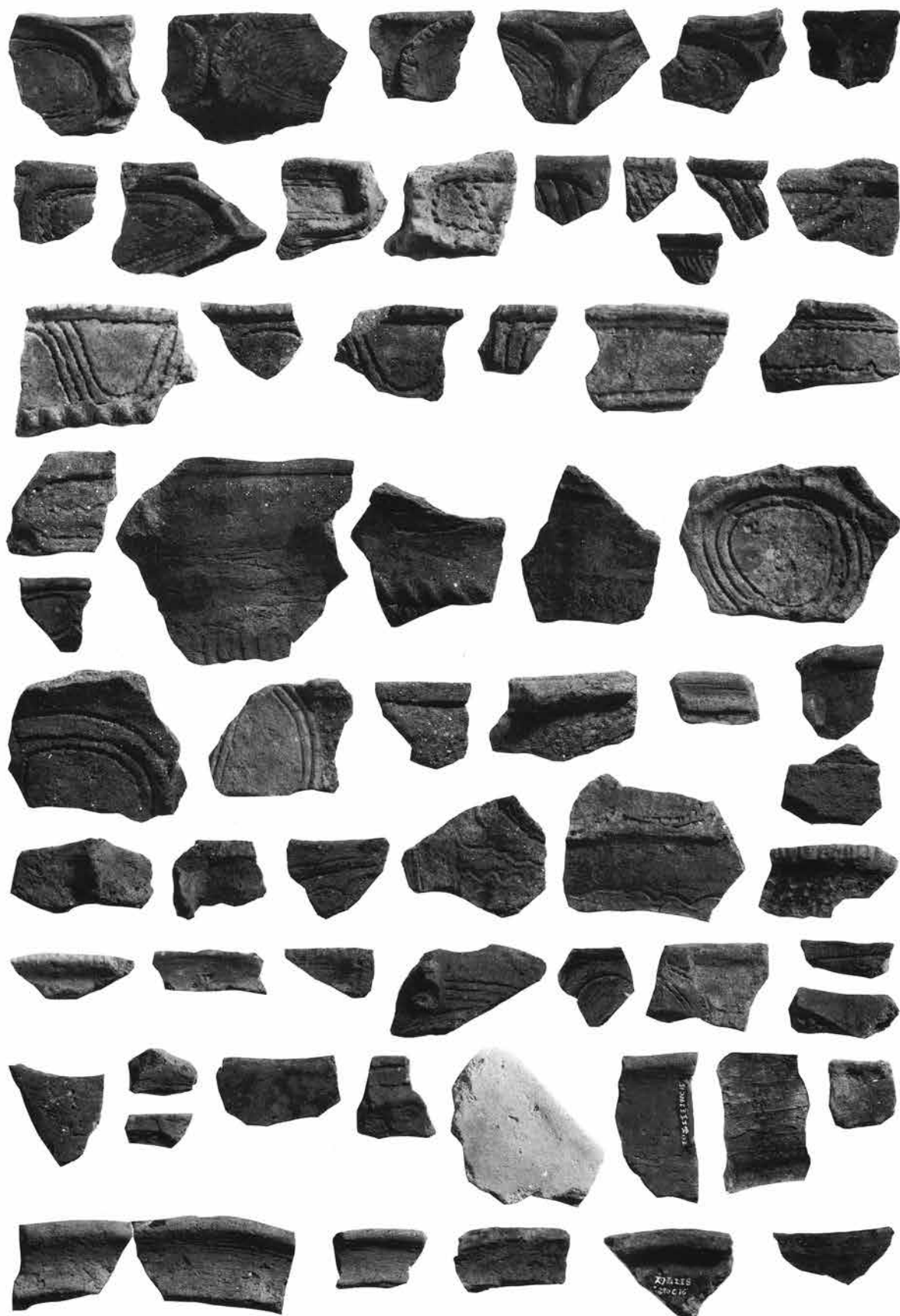
工事用道路 7・8号土壙出土土器



工事用道路 B区出土土器



工事用道路 B区出土土器



工事用道路 B区出土土器



工事用道路 B区出土土器



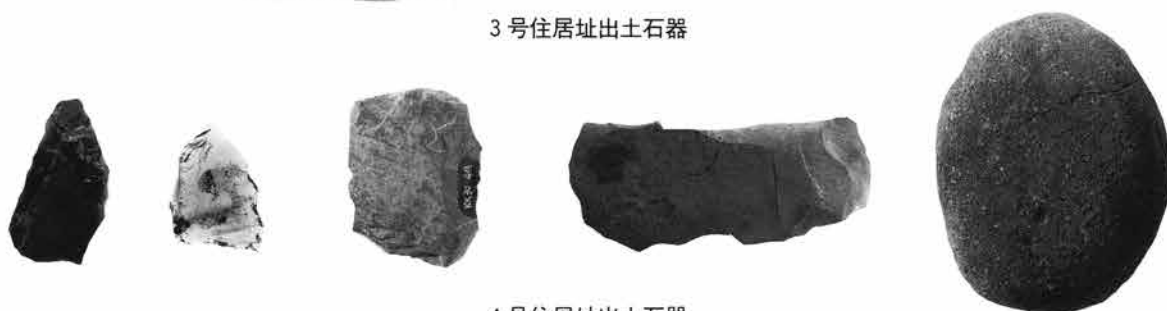
1号住居址出土石器



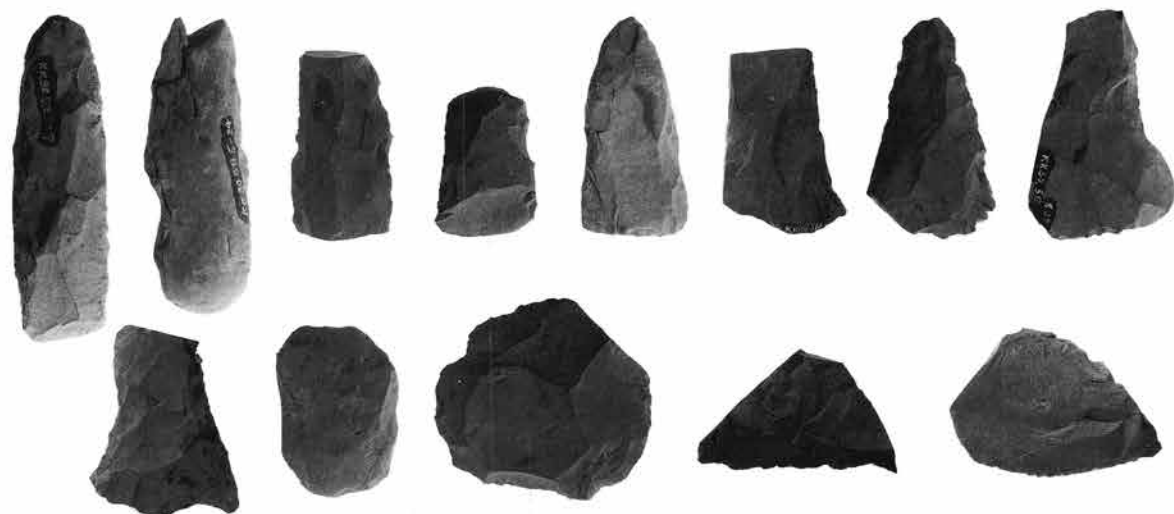
2号住居址出土石器



3号住居址出土石器



4号住居址出土石器



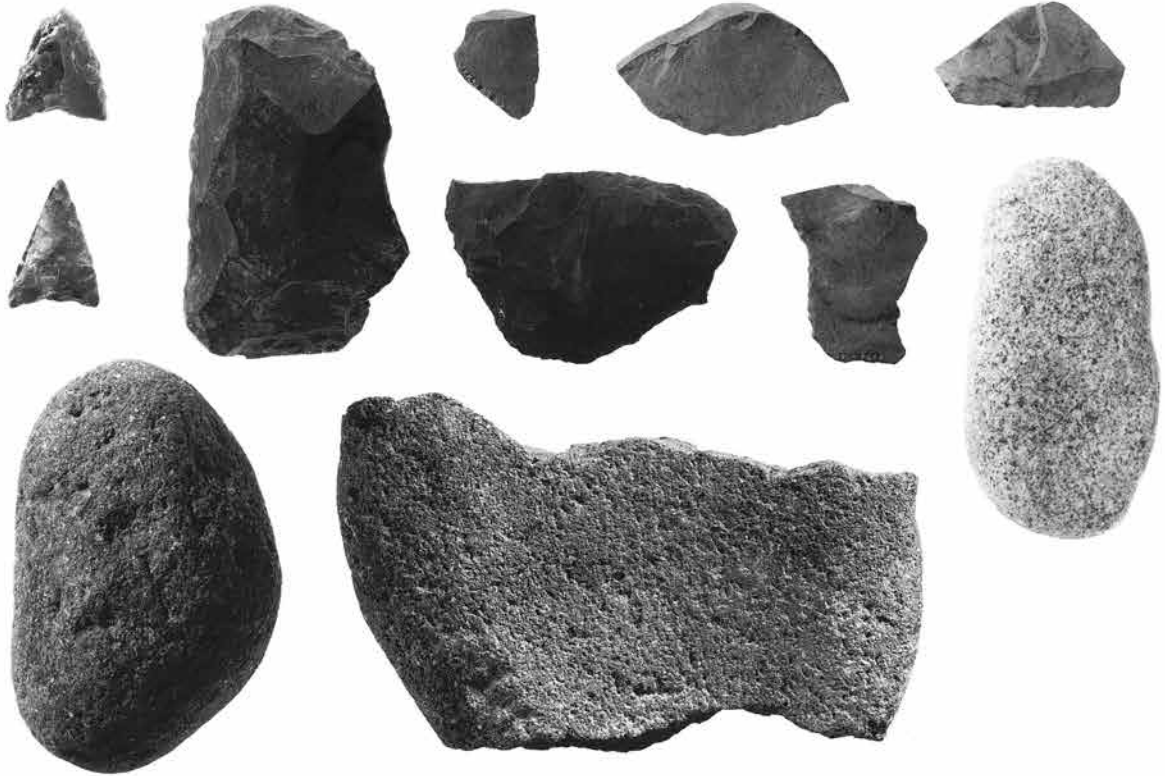
5号住居址出土石器



5号住居址出土石器



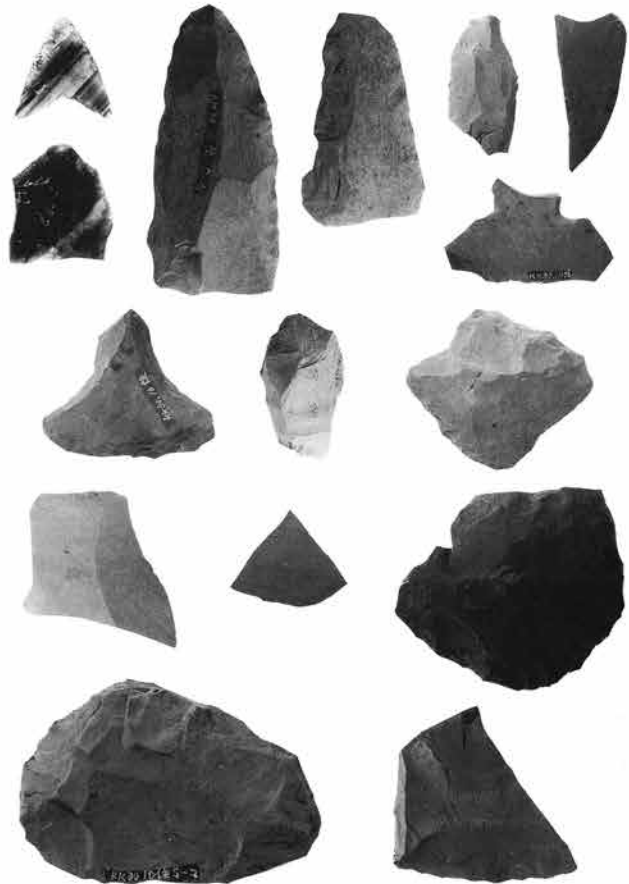
7号住居址出土石器



8号住居址出土石器



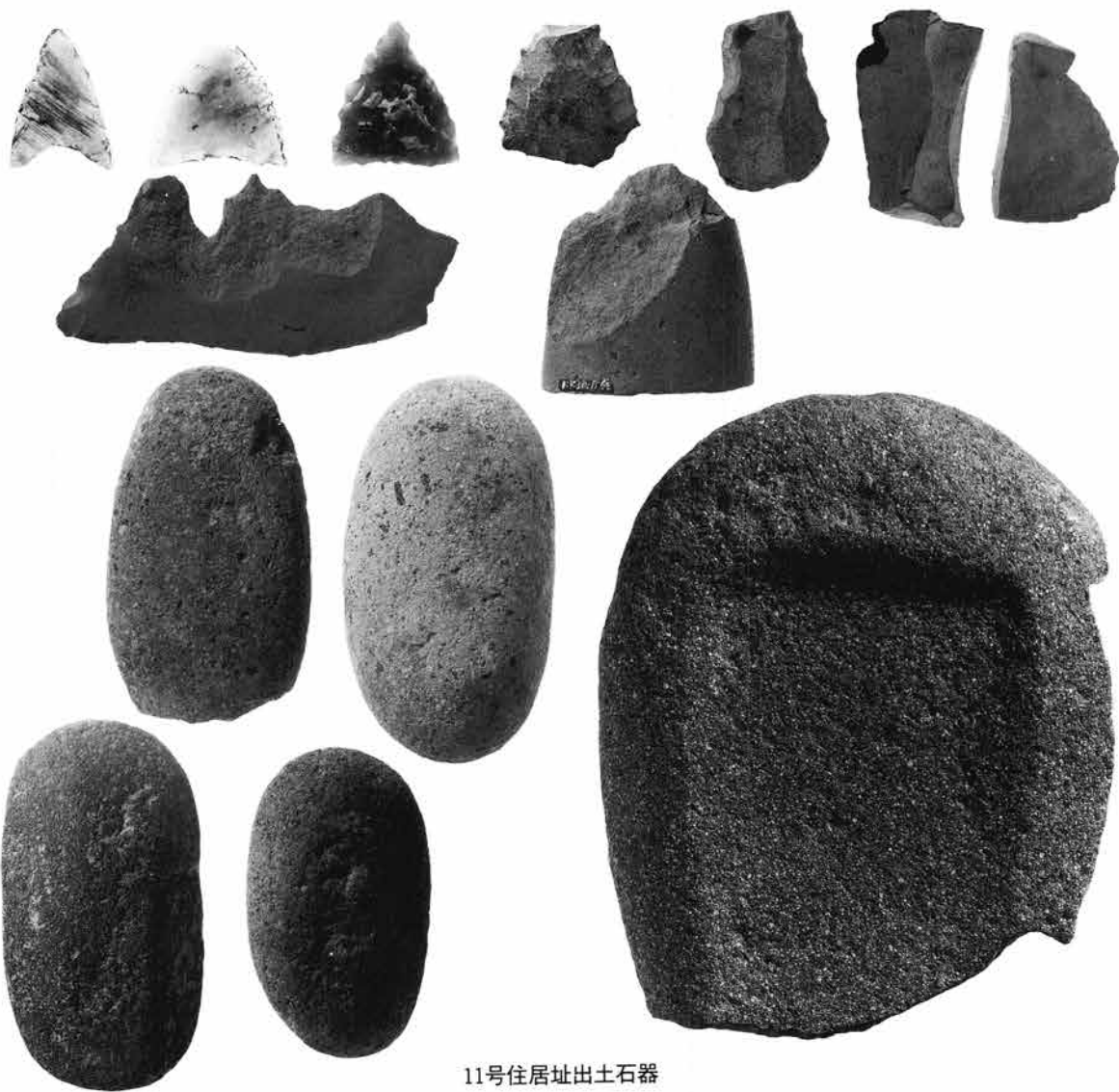
9号住居址出土石器



10号住居址出土石器



10号住居址出土石器



11号住居址出土石器



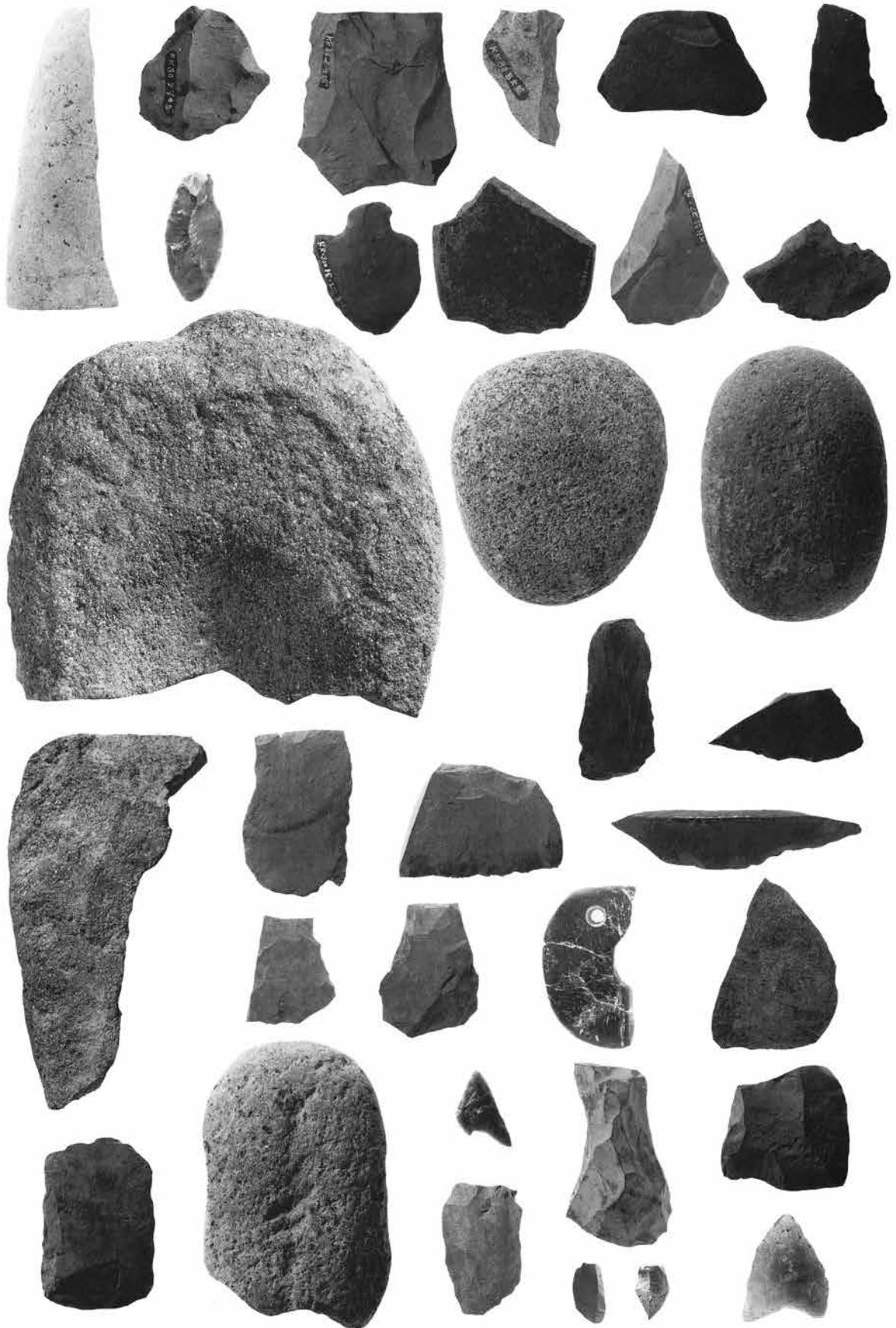
11号住居址出土石器



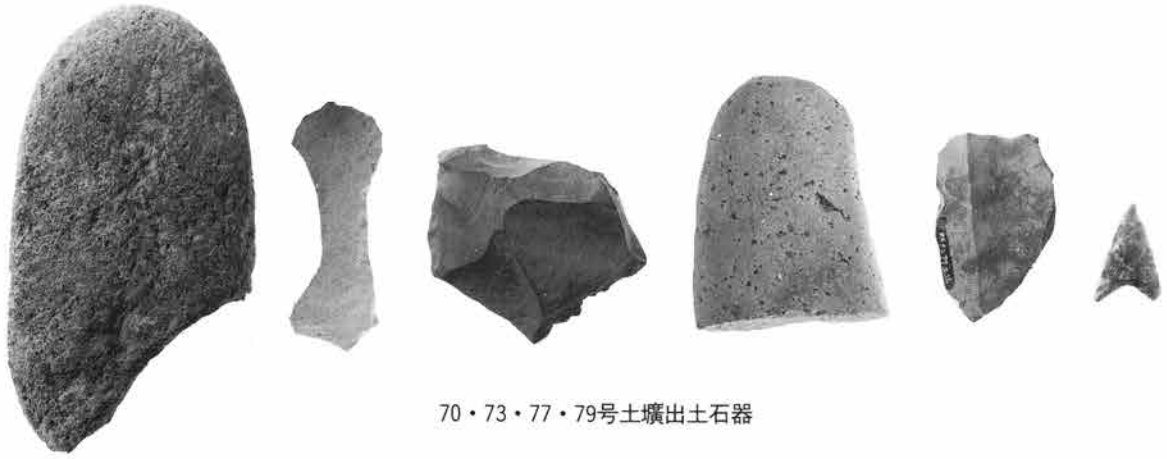
12号住居址出土石器



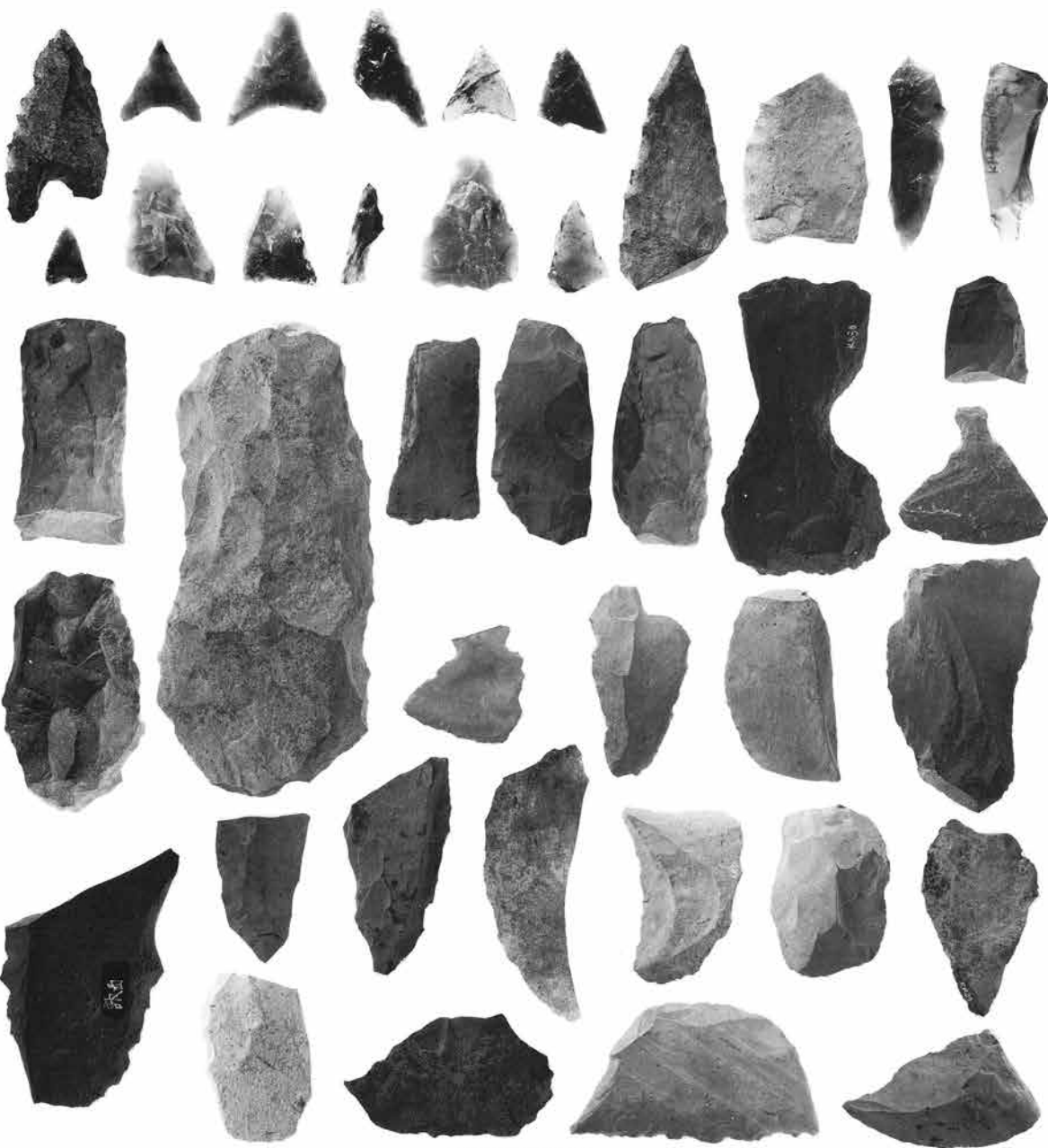
13号住居址出土石器



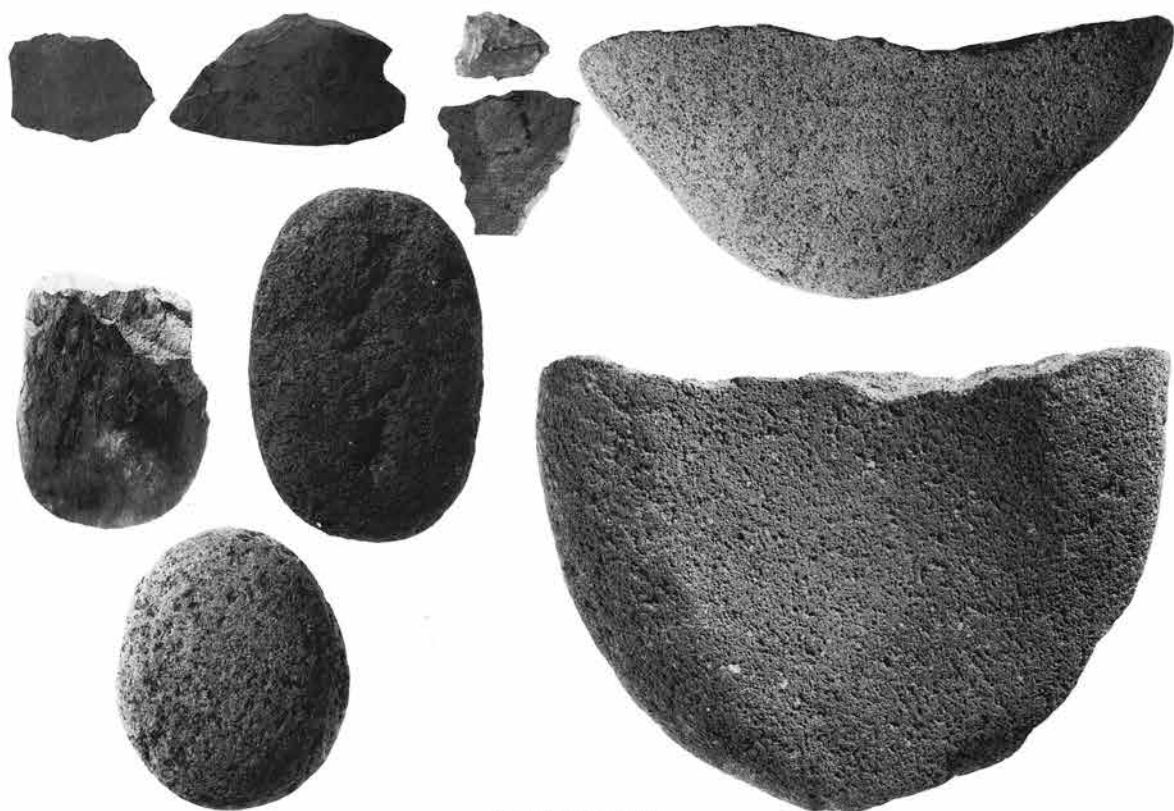
1・2・3・5・7・9・15・18・27・28・30・31・40・50・51・56・61・68・69号土壙出土石器



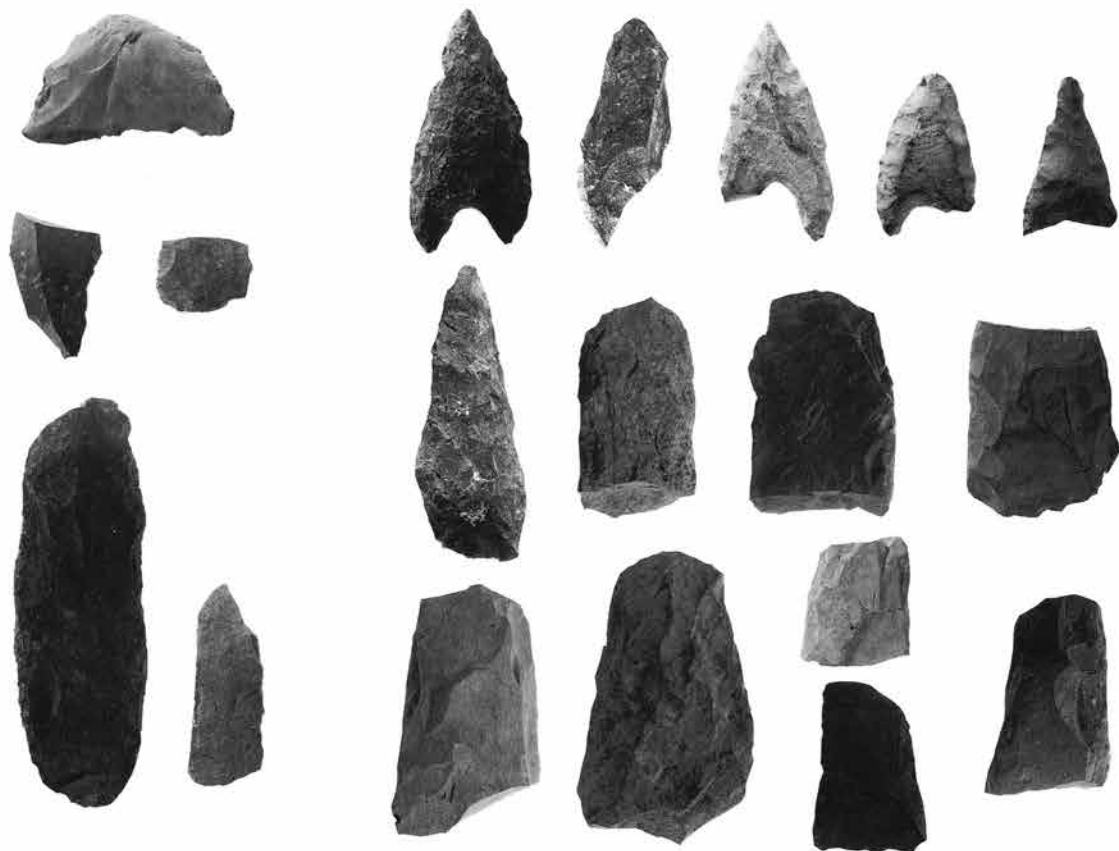
70・73・77・79号土壙出土石器



遺構外出土石器

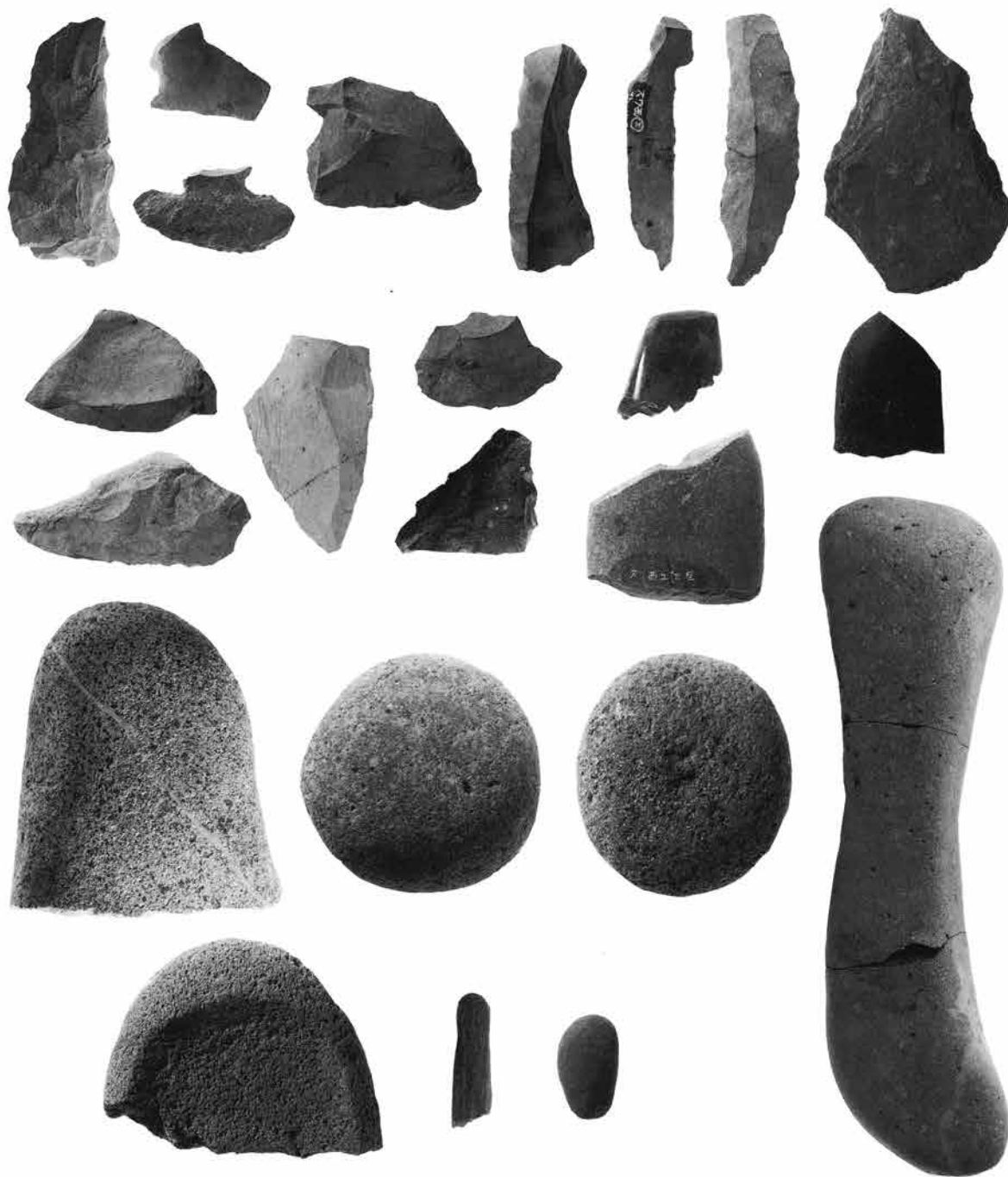


遺構外出土石器



工事用道路土壌出土石器

工事用道路 B区出土石器



工事用道路 B区出土石器



A区全景



1号住居址



1号土坑



1号住居址遺物出土状態



1号土坑遺物出土状態



B区土壌



B区セクション



B区土層断面



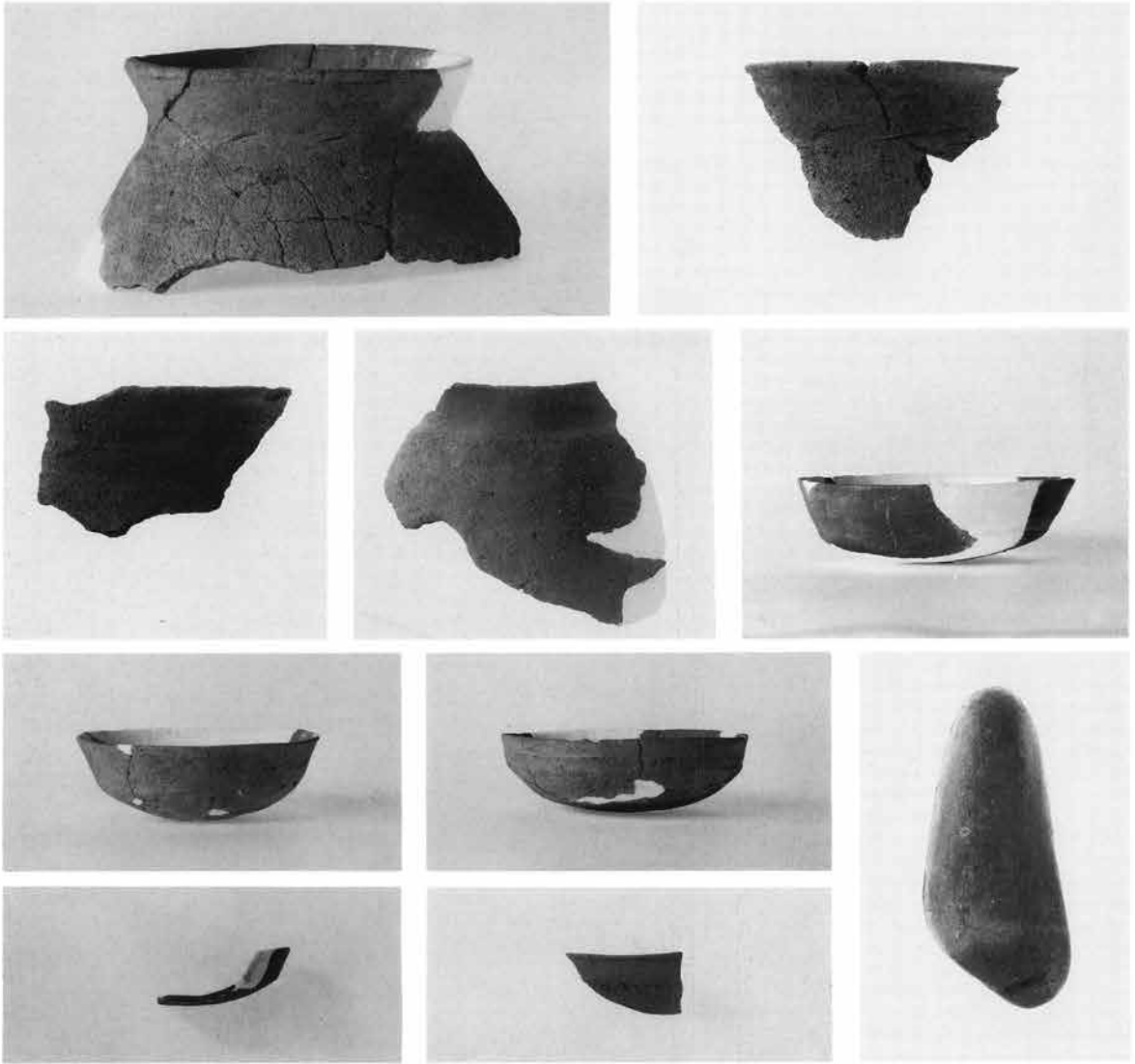
B区土壌



B区押型文土器出土状態



5号土壌



工事用道路 1号住居址出土土器・石器



中畦遺跡近況（北より）



諏訪西遺跡近況（南より）

中哇・諏訪西遺跡

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財調査報告書第9集—

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月25日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会

前橋市大手町1丁目1番1号

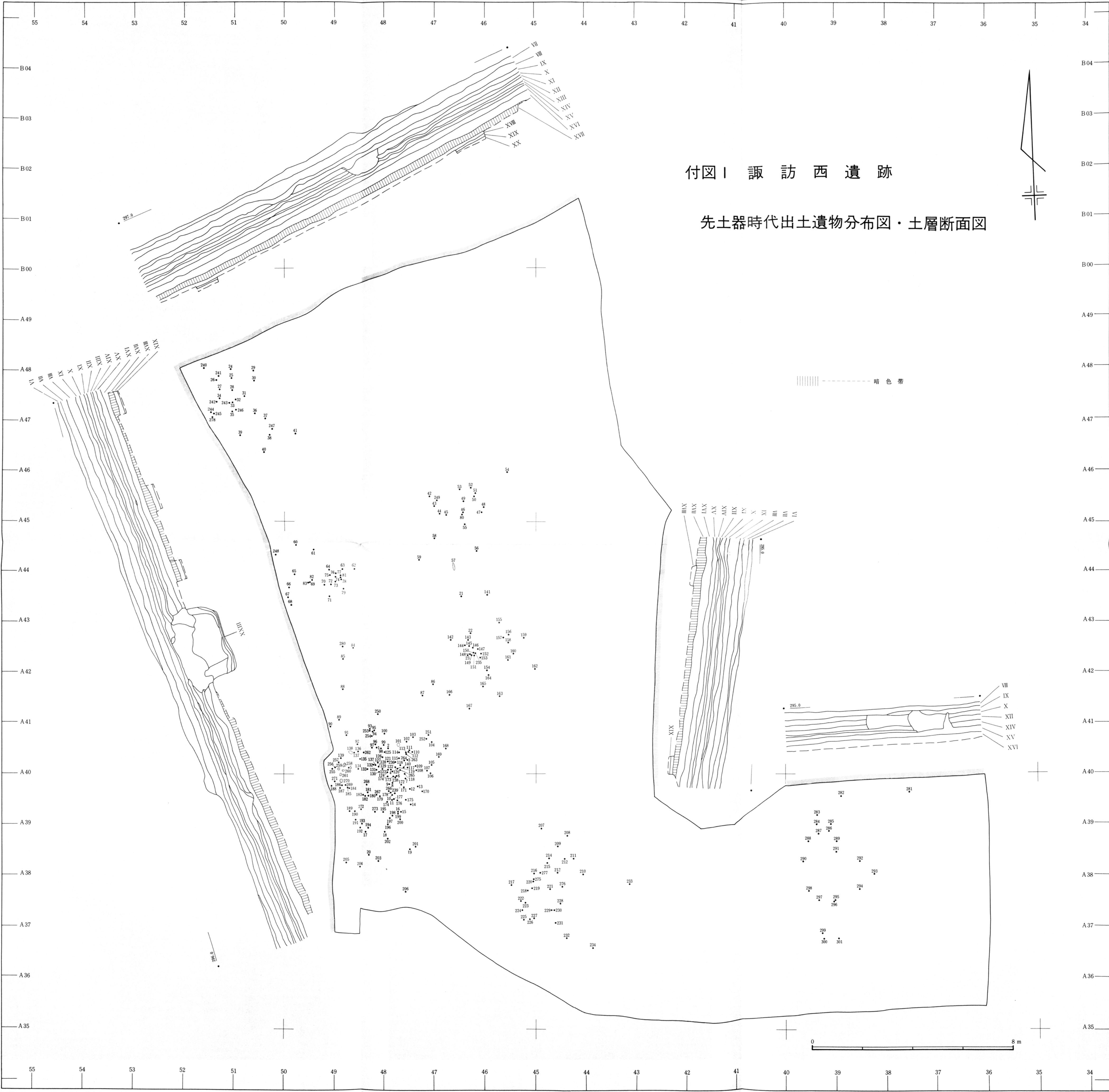
電話(0272)23-1111

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社



付図I 諏訪西遺跡

先土器時代出土遺物分布図・土層断面図

暗色帯

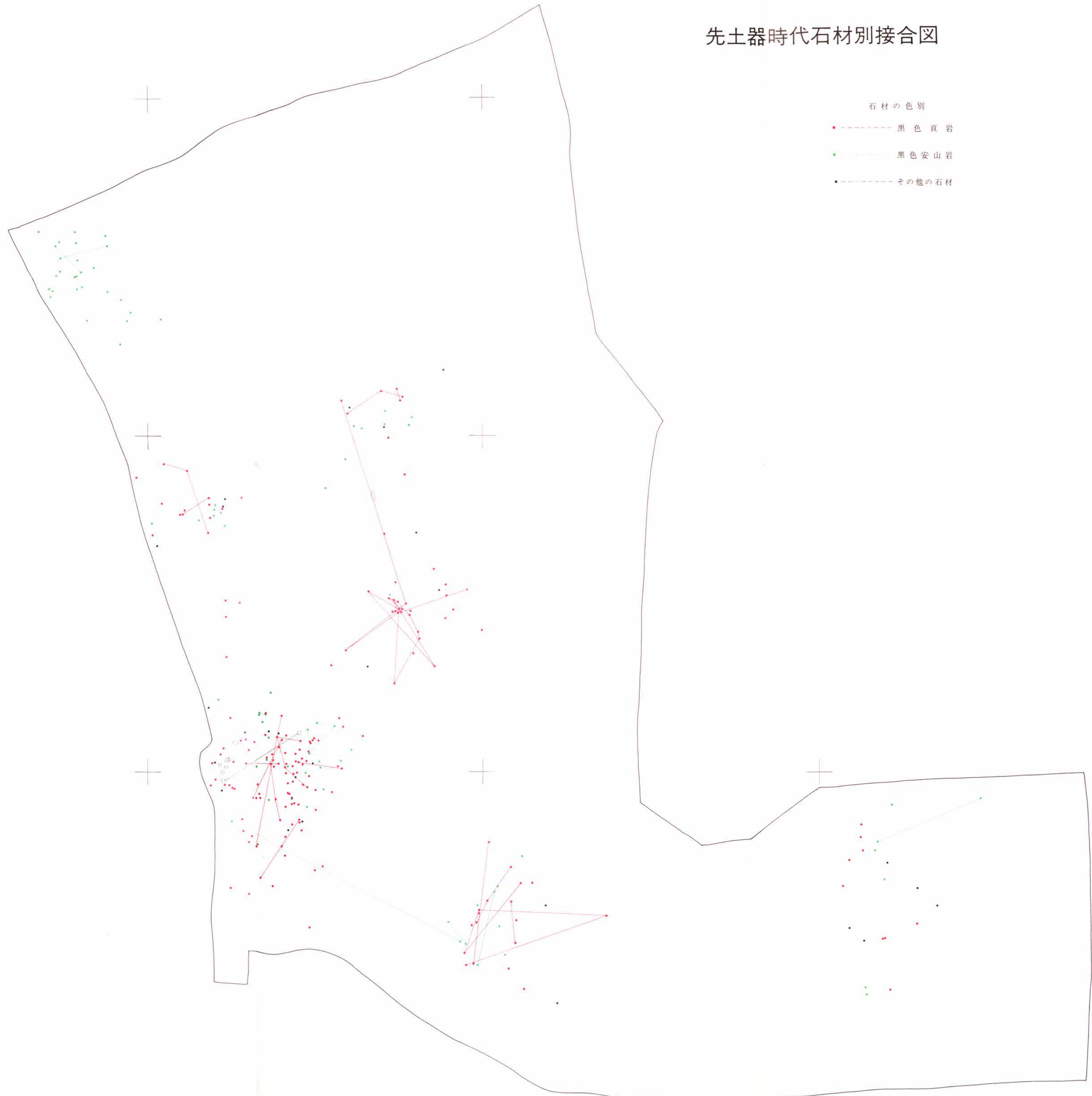
0 8 m

付図2 諏訪西遺跡

先土器時代石材別接合図

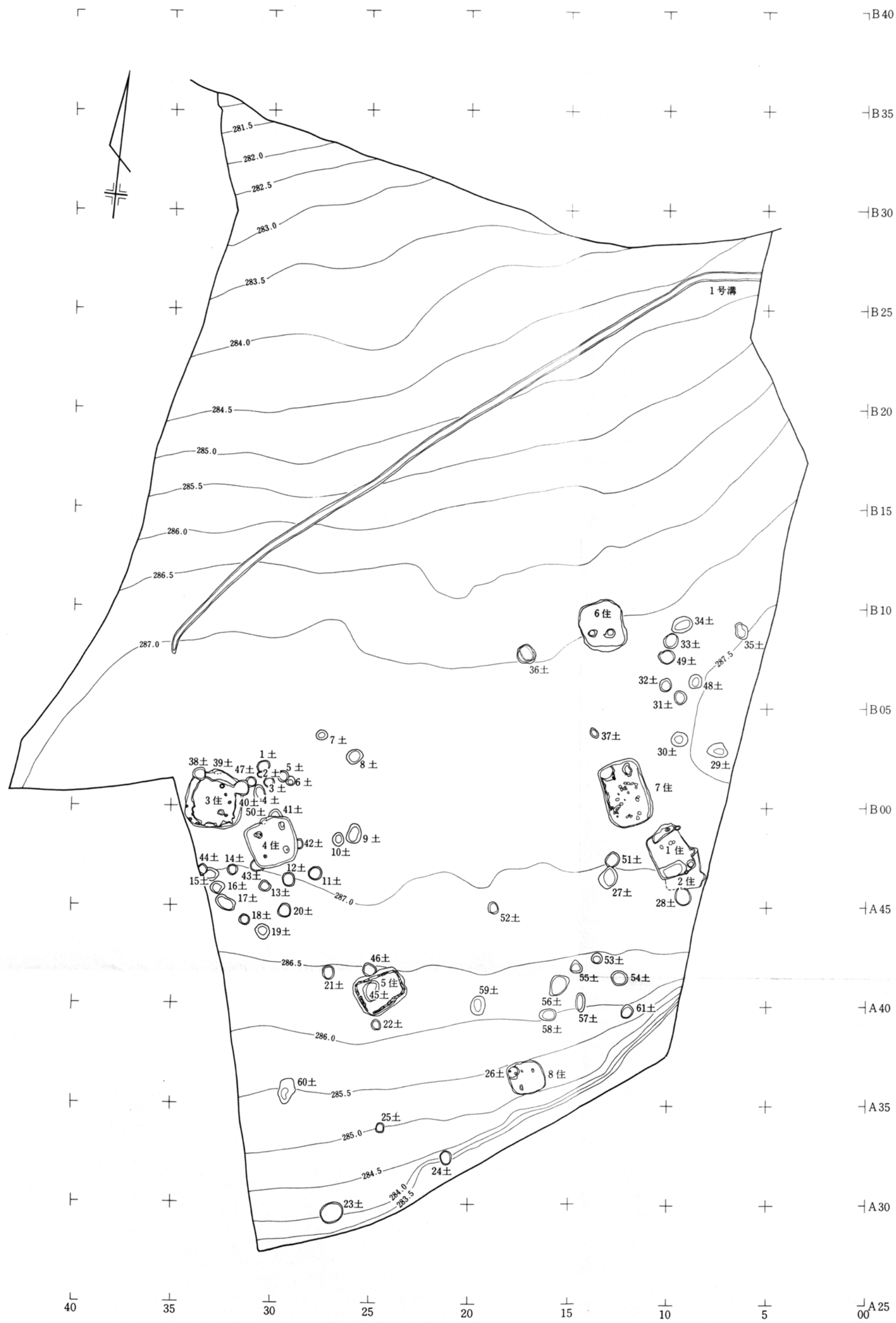
石材の色別

- --- 黒色頁岩
- --- 黒色安山岩
- --- その他の石材

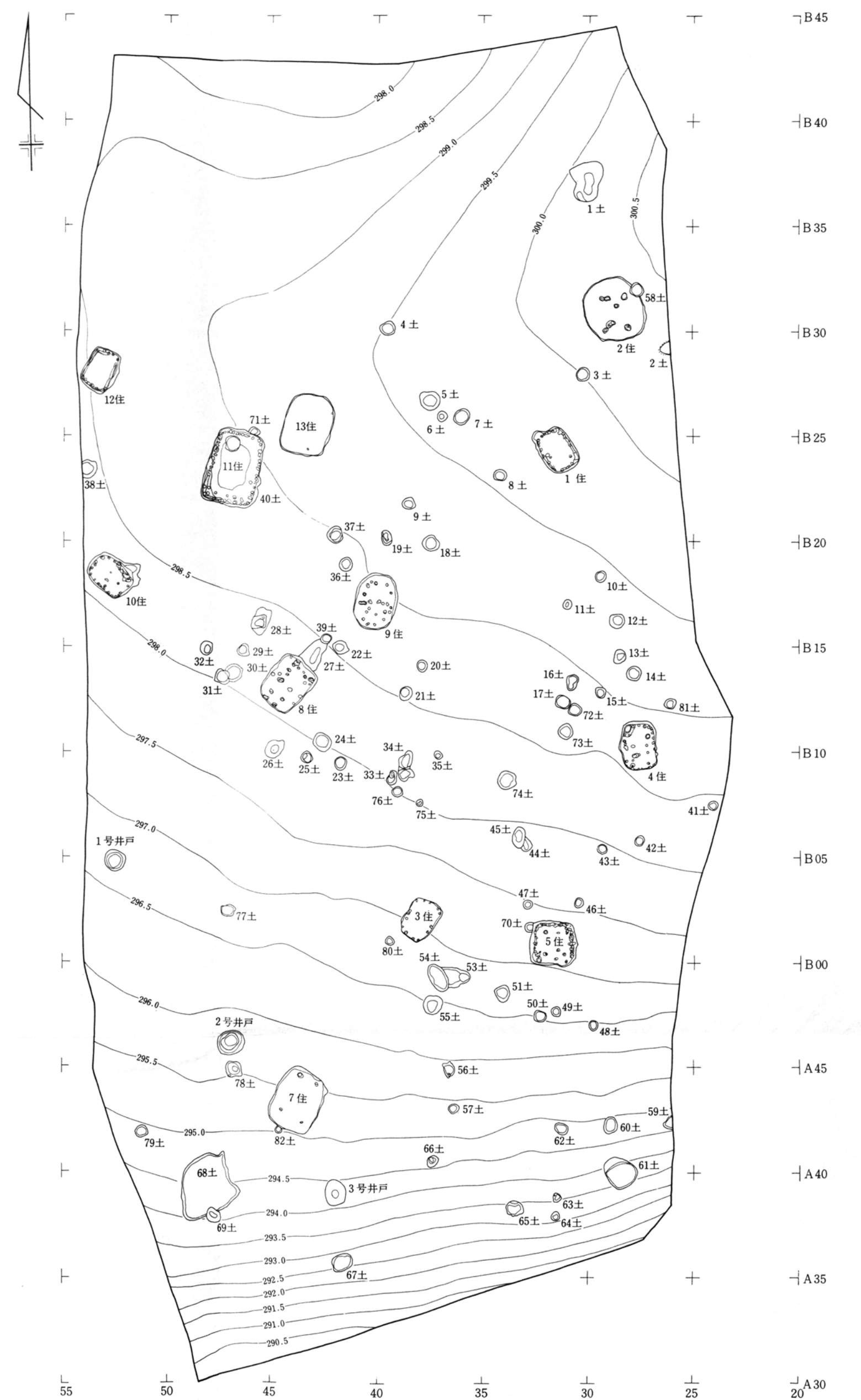


0 8 m

付図3 中畦・諏訪西遺跡調査区全体図



中畦遺跡



諏訪西遺跡

